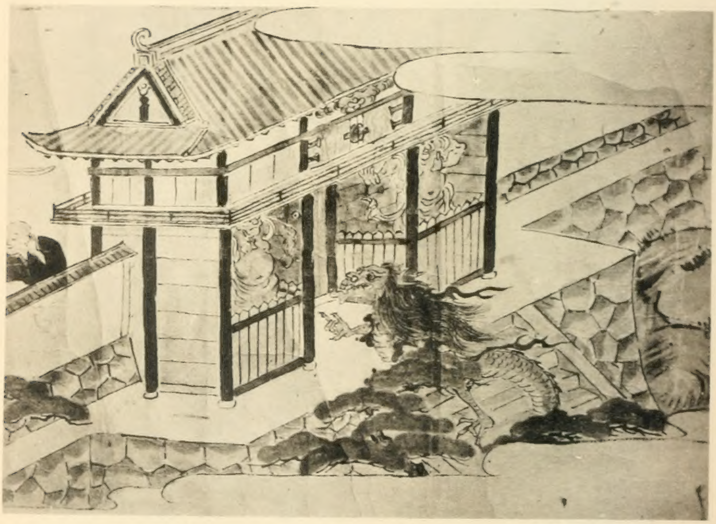


怪異小說集

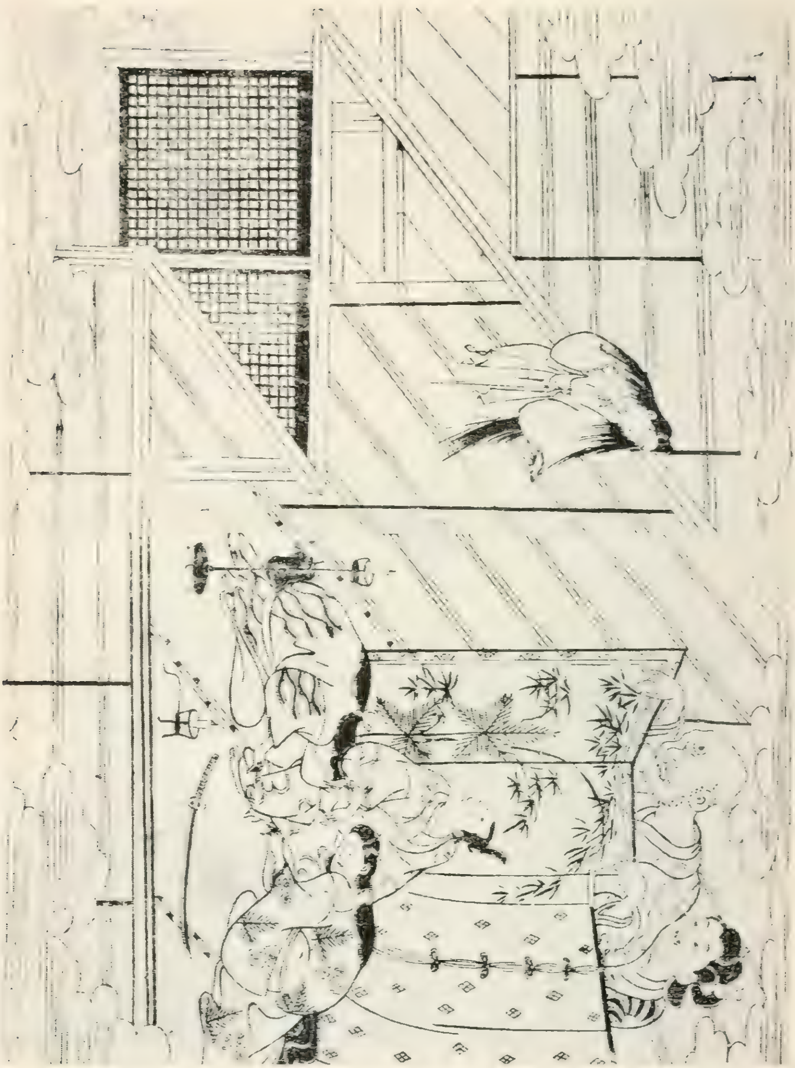
全












雪女

近代日本文學大系 第十三巻目次

目次

拾遺伽婢子

巻之四

巻之五

曾呂利物語……四一七—四七六

巻第一

巻第五

百物語評判

巻之一

巻之二

狗張子

巻之一

巻之二

巻之三

諸國新百物語

巻之一

巻之二

巻之三

巻之五

金玉ねぢぶくさ……六六七

卷之二

卷之三

卷之四

目次終

解題

文學博士　笹川種郎

怪談の流行

「古今著聞集」に怪異、變化の章あり、「今昔物語」に靈鬼の條あり、妖怪變化に關する思想や傳說やは、かなり古くから行はれてゐた。『日本靈異記』の如き、『日本感靈錄』の如き述作もあり、諸寺の緣起には、往々靈異のことを作つてゐる。此等は無論佛教の影響を受けたものであるが、また支那の怪異傳說も少なからず傳はりて、其の影響する所は多大であつた。支那には、『酉陽雜俎』『稽神錄』『清異錄』『元怪錄』『太平廣記』『冥報錄』『搜神記』『括異志』『八朝窮怪錄』『北夢瑣言』『博異志』『廣異記』『錄異記』『異苑』『博物志』『幽明錄』『集異記』『河東記』『通幽記』『異聞錄』『宣室志』『列異傳』『孔氏志怪錄』『幽怪錄』『續齊諧記』『聞奇錄』『玉堂閒話』『瀟湘錄』『搜神後記』『述異記』『續異記』『窮神祕苑』の類頗る多く、『聊齋志異』『剪燈新話』『剪燈餘話』の如きは、最

も善く行はれて、我が邦に飜案され、移植されてゐる。

「莊子」に「齊諧」は怪を志すものなりことあれば、怪異を傳ふる書の著はされたのは實に遠くからであつた。「漢魏叢書」「晉唐小說」の類、いづれも前述の怪異小說の幾つかを其の中に收錄してゐる。其の舶載されて渡來したのも、相當に古い世であらう。物の怪を信じた平安朝の氣弱な士女等は此等の傳說に好奇の眼を見張り、戰慄を禁じ得なかつたのである。「源氏物語」にも、夕顏の怪しい死樣や、葵上の後妻打などが、描き出されてゐる。「吾妻鏡」を見ても、往々奇怪なる事柄がまことしやかに、記されてあるのにて、鎌倉時代に於ける怪異の人心を支配してゐたことが知られる。

室町時代の末に、「奇異雜談」五巻が出た。天文年間の作で、中村某の撰にかゝり、「剪燈新話」の飜譯である。江戸時代の初めに行はれた怪異小說は、其の體裁に於て假名草紙であつた。從來行はれた傳說や鄕土傳說を取扱つたものもあるが、支那小說の飜案もあつた。其の後になると、讀本の形式となつて、現はれてゐる。

「剪燈新話」四巻は明の瞿佑の述作にかゝり、もと「剪燈錄」と題し、四十卷ありし物の一部分である。「餘話」は附錄と幷せて五巻、明の李昌祺の撰にかゝり、「聊齋志異」十六卷は清の蒲松齡の

著はす所、何れも我が怪異小說には影響の多いものである。怪異小說の流行は、劇の上にも取入れられ、落語には怪談なる特別の出演物を作り、百物語などの催しさへも行はるゝ事となつた。

雨月物語

上田秋成の作。五卷。明和五年。三十五歲の作にして、安永五年初夏刊行。

「白峯」「菊花の約」「淺茅が宿」「夢應の鯉魚」「佛法僧」「吉備津の釜」「蛇性の淫」「青頭巾」「貧福論」の九章を收む。

秋成は其の父を知らず、母には四歲の折、生別れをなし、大阪堂島の紙油を商へる上田氏に養はれて人となつた。其の所生に關しては、種々傳ふるものあるが明かでない。享保十九年を以て生まれたのであるが、恐らく其の母は妓女で、彼はいはゆる父なし子の類であつたであらう。上田氏に養はれるに至るまでのいきさつは明かでない。性來の癇癖は、父なし子と云ふ自覺と世評とに依りて、彼をすねものとなし、世間に對する反抗心を增長せしめた。

彼の養家は富裕であつたが爲に、少壯時代は相當に遊蕩に耽り、屢々花柳の巷に出入した。几圭に從ひて俳諧を修め、又戲作の才に長じ、「諸藝聞耳世間猿」「世間妾形氣」を著はした。其の後

加藤宇萬伎に就いて國學を修め、又醫を業とした。本居宣長と論難し、執りて下らなかつた。既にして大阪より居を長柄に移し、次で京都に移り住んだ。世に背き人と交はるを好まぬ彼は、晩年左眼の明を失ひ、野處し、陋居して其の日を送つた。僅かに彼を慰むる者とては、賢妻瑚璉尼（實名たま）と煎茶とがあるのみであつた。六十四歳の時、瑚璉尼歿してよりは孤影悄然として、空しく痼癖を起すのみであつた。「非藏人羽倉豐前の屋敷の内に、四疊半の家を建てて住す、常に籾をすりて土鍋に入れ焚きて喰す。菜は胡麻鹽とひしこ味噌といへる二味に過ぎず。」（「京攝戲作者考」）とあるは、彼が鴨川べりの僑居のさまであつた。文化六年六月二十七日歿した、享年七十六歳。南禪寺畔の西福寺に葬る。謚して三餘齋無腸居士と云ふ。村瀨栲亭が嘗て彼の著「毎月集」に序した文を石に彫りて墓表とした。其の文に、「吾が友無腸翁、狷介峭直にして、富貴を視ること腐鼠の如く、俗士を以て蛲蟯となす。世俗其の病を忌み、畏れて之を避け、其の門に遊ぶもの僅々如たり。然れども一毀一譽、翁に於て何かあらん。翁初め城中に住したるも、其の擾々を厭ひ、遂に茆屋を瑞龍山中に結び、一裘一褐疏糲自ら安んず。翁博聞強識、眼に過ぐれば誦をなす。是を以て一書を蓄へず、室中には唯々二三の茶具あるのみ。最も國字文章及國風の詩に長じ、興到れば則ち一日數十百篇、口より出で、皆文を成す。」とあるのは、全く彼の小照である。秋成通

稱は東作。無腸、餘齋、鶉居、剪枝畸人、二苦翁、漁焉主、休西の號があり、又和譯太郎の戲號をも用ゐた。著はす所「諸艷國耳世間猿」「世間妾形氣」「雨月物語」の他に「也哉抄」「雨夜物語」「漢委奴國王金印考」「古今集打聽」「安々言」「伊勢物語古意」「清風瑣言」「萬葉見安補正」「靈語通」「春葉集」「落久保物語」「冠辭考續貂」「大和物語」「藤簍冊子」「鶉月集」「春雨物語」「くせ物語」「膽大小心錄」等がある。

「世間猿」や「妾形氣」は、八文字屋本の流を汲んだ、輕妙な、皮肉たつぷりのものであるが、其の傑作と稱せられる「雨月物語」は、文藻清麗で、讀本に影響する所が多大であつた。材料は支那の怪異談に得たものもあらうが、此の作家が文章道に於ける天稟の才能は遺憾なく發揮されてゐる。然し都賀庭鐘が支那の小話を飜案して作つた「英草紙」や「繁々夜話」の先蹤を追うた事は明かである。庭鐘は近路行者と號し、寬延二年、「古今奇談英草紙」五卷を著はし讀本の祖と稱せらる。「繁々夜話」五卷は其の後編で、明和三年の刊行であるが、秋成は曾て此の人に師事してゐたと云ふことである。「雨月物語」は其の脈を承けて、更に多く讀本に寄與してゐる。曲亭馬琴が其の弓張月に、「白峯」の一段を換骨奪胎してゐるのは、有名な話である。

「菊花の約」は支那の怪談に暗示を得たものであらう。其の門外を過ぐる行旅のさまと人待つ風

情とを寫して、

此日や天晴れて、千里に雲のたちゐもなく、草枕旅行く人の群々かたり行くは、今日は誰某がよき京入なる。此度の商物によき徳とるべき祥になんとて過ぐ。五十路餘りの武士、廿歳餘りの同じ出立なる、日和はかばかりよかりしものを、明石より船もとめなば、この朝びらきに牛窓の門の泊りは追ふべき、若き男は却物怯して錢多く費やすことよと云ふに、殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふを、從に侍りし者の語りしを思へば、このほとりの渡りは必ず怯ゆべし。な患み給ひそ、魚が橋の蕎麥振舞ひ申さんにと、云ひ慰めて行く。口取る男の腹だゝしげに、此の死馬は眼をもはたけぬかと、荷鞍おしなほして追ひもて行く。午時もやゝ傾きぬれど、待てる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみ守られて、心醉ゑるが如し。老母、左門を呼びて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きは今日のみかは、歸り來る信だにあらば、空は時雨に移り行くとも何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべしとあるに、否み難く、母をすかして、先に臥さしめ、若しやと戸の外に出て見れば、銀河影消え／＼に、氷輪のみを照らして淋しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄み渡り、浦の浪の音ぞこゝもとに立ちくるやうなり。月の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸を閉てて入らんとするに、只見る、朧げなる黒影の中に人ありて、風のまに／＼來るを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。

と、敍したる、筆路暢達にして、詞采幽麗に、末段鬼氣人を襲ふの感がある。

『太平廣記』に人の魚に化して漁獲せられた話を載せ、『廣古今五行記』『異聞錄』にも、容止端麗

なる男、若しくは皓首の老翁が魚に化したる物語を收めてゐる。「夢應の鯉魚」は、三井寺の僧が鯉魚に化して漁夫に獲られた顛末を述べたものであるが、湖上の悠々自適を寫した一段は又なく美しい。

先づ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大灣(おほわだ)の汀(みぎは)に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚かされて、比良の高山影うつる、深き水底にかつくとすれど、かくれ堅田の漁火(いさりび)に寄るぞうつゝなき。ぬば玉の夜中(よなか)の潟にやどる月は、鏡の山の峯に澄みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波にうつらふ朱(あけ)の垣こそ驚かるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕ぎ出づれば、蘆間の夢をさまされ、矢橋の渡りする人の水馴棹をのがれては、瀨田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日暖なれば、浮び、風荒き時は、千尋の底に遊ぶ。

湖上文學として、妙云ふべからざる概がある。

秋成の筆には一種の靈氣ありて、他の多くの怪異小說が平板なるのとは其の選を異にする。固より彼が文藻の秀でたのに依るとは云へ、彼自ら怪異を斥けずして、之を信じてゐたので、從つて滿卷に凄愴の氣が濃かであつたのである。

伽婢子

瓢水子松雲の作。十三卷。寛文六年三月刊行。寺町通圓福寺前町秋田屋平左衞門の板であるが元祿十二年に再摺し、文政九年正月、三板を出してゐる。

著者瓢水子松雲は釋了意と云ひて、京都本性寺昭儀坊に住んでゐた。元祿四年正月元日に歿したことは、「狗張子」の序文に見えてゐる。都の錦の「御前お伽婢子」の序には、「一向の粹僧」とあるほどに、彼はわけ知りの眞宗法師であつた。然し此の人の傳記は明かでない。瓢水子と署名せる「可笑記評判」の奥書に、「足曳の山鳥の尾の長々しき牢人にて陸沈潦倒し、偶々洛下に寓居すること百餘日のほど」とあるが、此の浪人者の瓢水子は果して本性寺の了意と同一人であらうか。淺井了意を釋了意と同一人でないと云ふ説は、柳亭種彦等が既に唱へゐるのである。しかも「狗張子」に林義端が序するところを見るに、「洛陽本性寺の了意大徳は、きはめて博識强記にして、特に文思の才に富めり、生平の著述甚だ多し、晩年に及んで筆力ますます老健なり。」とあれば、釋了意の著述は相當に多く、又文學的の述作に富んでゐたことが知られる。釋了意と淺井了意なる者とが同一人ならば、とかうの論はない。然し洛の僧が「江戸名所記」を編み、「武藏鐙」を作つたと云ふことは、頗る疑はしい。

「伽婢子」の自序には、「瓢水子松雲處士」とあり、雲樵なる者の序には「松雲處士の著はすとこ

みなり」とあつて、釋門の人たる事が云つてない。然るに、「狗張子」の序に依ると「去年庚午の春、往に編集せる『伽婢子』の遺せるを拾ひ、漏れたるを捜りて、「狗張子」若干卷を作り、その續集に擬せんとす」とあるから、「伽婢子」の作者と「狗張子」の著者とは同一人で、松雲處士と了意大德とは異名同人である許りでなく、初めは處士であつたのが、後に大德となつたらしい。して見ると浪人者の瓢水子と、本性寺の了意とは同一人らしく思はれる。浪人者の瓢水子松雲は京都に留ること百餘日にして、「可笑記評判」を著はしたが、其の後「伽婢子」等を著はし、遂に本性寺に入りて僧となつたのではあるまいか。水谷不倒氏は了意の著述として、左の諸書を列擧してゐる。

佛書

大經鼓吹	六冊	太子傳備考	三十冊
恩重經和談抄	五冊	阿彌陀經鼓吹	十八冊
法林樵談	十冊	大原談義句解	十冊
往生直談	十五冊	盂蘭盆經直談	十九冊
無量壽經鼓吹	三十冊	愚迷發心集直談	六冊

勸化往生傳	六冊	勸修念佛集	一冊
勸化要文便蒙抄	十冊	勸化大綱抄	八冊
十王經直談	十五冊	吉利支丹破却論	三冊
法花利益物語	十二冊	三井寺物語	三冊
三綱行實假名	九冊		

軍書

太平記首書	二十五冊	北條九代記	十二冊
將軍記	十五冊	鎌倉九代記	十三冊

古文註釋

源氏雲隱抄	九冊	伊勢物語抒海	十冊
徒然草諸抄大成	二十冊	百人一首頭書	二冊
連歌初心抄	一冊		

教訓草子

孝行物語	六冊	堪忍記	八冊

本朝女鑑	十二冊	大和二十四孝	十二冊
新語圖	十冊		

名所記・戯作其の他

可笑記評判	十冊	東海道名所記	六冊
かつらき物語	三冊	江戸名所記	七冊
京雀	七冊	伽婢子	十三冊
曾呂利狂歌話	五冊	百物語	二冊
武蔵鐙	二冊	かなめ石	三冊
安部晴明記	七冊	浮世物語	六冊
あむうそ	一冊	靈寶薬性能毒	六冊
花火草大全	一冊		

此等を集めると、實に尨然たる大著述で、佛書に、國文に、戯作に、教訓に、地理に、戰記にいく所として可ならざるなしである。然し此等が同一人の手に成つたか、否やは問題である。

朝倉無聲氏は本性寺の釋了意と淺井了意とを別人なりとなし、淺井了意は松雲と號し、子石、

靜齋の別號あり、和歌及び物語等の註釋書、軍記及び地理書の著述家であるとし、釋了意を以て戲作の著者としてゐるが、此の說は論據が薄弱なるのみならず、事實は往々に裏切つてゐるから信ずべくもない。

然し此等の著述を同一人の手に成れりとするのも、甚だ疑はしいのみならず、序若しくは署名のあるものの他は、寛文、元祿、寶永の、「書籍目錄」作者附に依るのであるから、これもまた確でないことにかく了意は疑問の人物である。

「伽婢子」十三卷、寛文六年三月、京都寺町通圓福寺前町秋田屋平左衛門板、自序に依ると「遠く古へを取るにあらず、近く聞傳へし事を錄して書き集めて、記しあはすものなり」とあるが、其の中の幾條は、「剪燈新話」「剪燈餘話」の翻案である。開卷第一の「龍宮の上棟」は、「新話」の開卷第一にある「水宮慶會錄」を巧みに我が國に移しかへたのである。

乃ち言つて曰く、「寡君僻陋、龍神とともに隣し、魚鼈とともに居り、以て爵位を昭示し、寵命を宣揚するなし。今別に一殿を構へ、名を靈德と命ぜんと欲す。工匠已に集り、木石みな具る。乏しき所のものは、惟々上梁文のみ。竊かに聞く、君子不世の才を負ひ、當時の譽を擅にすと、故に特に奉邀して此に至る、幸に寡人のために之を賦せよ」と。即ち近侍に命じ、白玉の硯を取り、文華の箋と、[illegible]とを捧げて、善文の前に置かしむ。（「水宮慶會錄」）

龍王語りけるは『朕此程新に一つの宮殿をかまへ造る、木工頭番匠の司あつまり、玉のいしずゑを据ゑ、虹の梁、雲のむなぎ、文の柱、皆具はりもとめしかども、只乏しきものは、上梁（むねあげ）の文、祝拜のことばなり。ほのかに聞き傳ふ、眞上の阿祇奈君は、學智道德の名隱れなし。此故に遠く招きて請じ奉る、幸に朕が爲に一篇を書いて給へ』といふに、二人の童子十二三ばかりなるが、髮からわにあげて、一人は碧玉の硯に、湘竹の管に文犀の毛さしたる筆取そへ、龍藥の灰に、紅藍麝臍を和したる墨すり湛へてさゝげ、一人は鮫人の絹一丈を持て、眞上にすゝむ』（龍宮の上棟）

の類である。美女二十人が舞ひながら歌ふ凌波の詞、歌童四十輩が舞ふ採蓮曲を、蟹の精、龜の精が蟹の歌、龜の歌を唄ふのに替へたるなど、作者の働きは極めて巧妙で、また其の文才の秀でたのと、苦心のなみ／＼ならぬを思はせる。『黄金百兩』は『三山福地志』、『十津川の仙境』は『天台訪隱錄』、『眞紅の擊帶』は『金鳳釵記』、『狐の妖怪』は『胡媚娘傳』（『剪燈餘話』）、『鬼谷に落て鬼となる』は『太虛司法傳』、『牡丹燈籠』は『牡丹燈記』、『梅花屏風』は『芙蓉屏記』（『剪燈餘話』）、『地獄を見て蘇る』は『令狐生冥夢錄』、『夢のちぎり』は『渭塘奇遇記』、『隱里』は『申陽洞記』を飜案したもので、此の類のもの猶他に多く、それに云ひ傳へ聞き傳へたる怪異の傳說を加へて編み成したのである。

拾遺伽婢子

柳絲堂著。五卷。元祿十七年正月、江戸兩國橋吉川町平野屋佐次兵衞板。

「伽婢子」一たび出でしより、之にならひ、其の名を襲ふものが多く、「續伽婢子」「新伽婢子」などがあるが、本書も其の一である。但し著者柳絲堂の傳記は明らかでない。自序に依ると、向島の牛島に住したと見える。「然るに當未の春、柳絲堂の何某、「犬うちは」といふ文を撰せし、その書を見るに、こわい事の數々あれば、又哀れなる事、いろ〳〵の色にそみ、香にめでしおもわく見ると心うつる美しさ、鷹が飛べば石龜もじだんだとや、年頃籠耳に聞き傳へし噺、筆にかたらせ辭に整へさせぬ。」とあれば、「犬うちは」なる書に興じての作と思はれる。卷五に人身御供の話が載つてゐる。

曾呂利物語

一名曾呂利はなしともある。五卷。出板年月詳かならず。

其の端書に依ると「爰に天正のころほひ、曾呂利と云へる雜談の上手あり、太閤秀吉公に召さ

れて、常に傍を愛し給ふ。其の詞の巧みに華やかなることは、齊の田駢が六口の辯、晋の婁領が林藪の詞にも越えたり。まことにすさまじき事を論じては、目に見えぬ鬼神もすはこゝに出で來る心ちにうしろこそばく、誠にあはれなる事を談ずれば、猛き武士も弱々と涙もろし。其の辯舌博覧の名譽なる事は、壺中に天地をこめ、瓢簞より駒を出させし術にも過ぎたり。或夜大樹の前にて、おどろ〳〵しき事を語れとのたまふに、十づゝ十に及べり、近習の人々是を書きこめしに年久しく反故に交り、多くは散り失せぬ。僅に殘りしをかいやり棄つるも惜しと、其品にたぐへる物語の不思議なるを一つ二つ加へて、今又書きあらたむるものか」とありて、輕口を以て聞えた曾呂利の談話らしくなつてゐるが、固より其の名を假りたことは疑ひあるまい。曾呂利の名を冠したものには、曾呂利狂歌咄などもある。

此の書一卷に十條の怪異談を收めて、通篇五十條ある。

百物語評判

五卷、貞享三年六月、京都堀川通西吉水町梶川常政、寺木町通鍋島町杉原正範梓行とある。いづれも山岡元隣の門人である。

山岡元隣の家にて、一夕雨さへしと〳〵と降る折しも、二三の人々集まりて、怪談物語を初め元隣も和漢の故事を引いて、之を評したるを、元隣歿後、輯めて板したるなりと云ふ。林羅山は曾て支那の怪談を譯して、『怪談全書』を作り、萬治年間には『百物語』の梓行もあり、怪事を好む人心とて、集まりて百物語の怪談を試みることが流行した。『伽婢子』に、

百物語には法式あり、月暗き夜、行燈の火を點じ、其行燈は青き紙にて張り立て、百筋の燈心を點じ、一心の物語に、燈心一筋づゝ引き取りぬれば、座中漸々暗くなり、青き紙の色うつろひて、何となく物凄くなり行くなり。それに語りつゞくれば、必ず怪しき事怖しき事現はるゝとかや。

とありて、都鄙到る處に此の事を興ずる程怪談は盛んに行はれたのである。されば百物語を題にした怪談小説は本書の他に、『諸國新百物語』『御伽百物語』『太平百物語』『萬世百物語』『近代百物語』『新説百物語』等がある。

元隣は伊勢山田の人、字は德甫、而慍齋、洛陽散人、抱甕齋等の號がある。而慍齋の出所は『論語』に、「人不レ知而不レ慍、不ニ亦君子一乎。」とあるに依る。元隣は醫を業とし、儒佛二道より卜筮稗樹の書に至るまで窺はざるなく、又國學を修め連歌俳諧に通じ、北村季吟に師事した。著はす所、『四書詳論』『歴代異考』『源氏家傳抄』『百人一首新抄』『伊勢物語言餘抄』『徒然草鐵槌增

他「徒然草別傳」「方丈記頭書」「水鏡抄」「風月往來抄」「腰越狀抄」「今川抄」「隨葉集大全」「寶藏」「諸國寓吟」「身樂千句」「増補食物和歌本草」「隱者住やう」「誰が身の上」「小さかづき」等がある。寛文十二年六月二十七日、四十二歳にて歿した。

此の書には元隣の評判したものとはあるが、其の子元恕などの加筆があつたらしいのは、跋文にそれとほのめかしてゐるので知られる。又跋には面談の外に和漢の書者ありて、評判加へながら云題も得んと此のやうに思はれ候は如何にとの問に對し、「素問」「莊子」などを例に取りて、後人の加筆を肯定し、「此草紙もかかるためしに傚ふなるらんかし、南仙軒の長子何がし博識廣聞にて文章にも優れたり、云々」と云つて、此の書の出來た所を暗示してゐる。

狗張子

了意の著、七卷。元祿五年正月、京都東洞院通夷川上ル町林九兵衛、同堀河通高辻上ル町伏見屋藤右衛門版。

並に林九兵衛の序に依れば、著者たる本性寺の昭儀坊了意が、元祿四年に入寂した事は明らかで、此の書は遺稿として遺作せられたものであるが、完成に至らさしめなかつた

のである。又此の書が了意の筆蹟其の儘を刻したことも、此の序に依りて知られる。文章は、『伽婢子』とともにめでたい。

諸國新百物語

俳林子の著。五卷。元祿五年正月、西村市郎右衛門板。俳林子、其の何人たるを知らず、收むるところ二十二條。

世に氣づまりなる物、しはんだる上戸の座敷に下戸の交りゐたる、能き事でも酒の意見、扨は奥女郎たるべし。少納言はいかにして是を筆には洩し置けん。上野の春もよそにのみ、櫻を聞て見ぬ人の籠、枝折もしらぬむ便もなく、千さとの外までと眺めし秋の月を、隅田川不忍の池に滿つる影は夢にも知らず、永き日南の夜鼓、歌がるた貝合せなどこそ、せめて心を慰むるわざなれ。（夢の通ひ路繋留めの條）

などとあるは、どこやらに西鶴の筆を學んだところがある。

玉帚木

林義端の著。六卷。元祿九年十二月の板行。

釋了意の「狗張子」の續篇として、「玉櫛笥」七卷を著はし、更に其の遺ちたるを拾ひて、此の書を編んだと云ふことは、著者の自序に見えてゐる。

義端は通稱九兵衛、字を九成と云ひ、家名を文會堂と稱し、書肆を業としたが、伊藤仁齋の門人であつた。戯作としては、「玉櫛笥」「玉帚木」の他に、「當世智慧鑑」「近代御伽百物語」「武家堪忍記」等がある。

流石に學者だけに、卷之三「清水寺詣」にては茶品を講釋し、卷之六「大佛建立」にては、養生の術を說いてゐる。

金玉ねぢぶくさ

章花堂の著。六卷。元祿十七年初の作。

著者の傳記は明らかでない。其の題名に就ては、自序に「金玉は人の愛する所、ねぢぶくさの如く常に之を懐にせば、初學の爲に便あらんかと云ふ」とあるにて知られる。隨分もたつた書名である。細川の四道衆、曾我五郎が武田信玄と生まれ替りし事、蛙が蚯蚓を以て蛇を殺す事など、珍らしい物語がある。

此の書と「曾呂利物語」とは、從來復刻されて居らぬ。

太平百物語

菅生堂人惠忠居士著、高木幸助貞武畫。五卷。享保十七年三月、大坂心齋橋筋河内屋宇兵衞板。五十條の物語を輯めて、前編とし「後編後より出し申候。」と豫告してゐるが、出板されたのか否やを明らかにしない。最後に或國主の臺所につとめた料理方與次なるものが、若君に日々怪談を申し上げたので、若君家督相續の後、新知三百石を賜はり、大小姓格に登用せられたことを載せて、百物語の醮責をしてゐるなど、如何にも「太平百物語」である。

然し怪談の流行は、實際盛んで、怪談小說の世に出たものは、まことに多數であつた。

大和怪異記	七冊	怪談乘合船	六冊
本朝怪談故事	四冊	怪談諸國物語	五冊
怪醜夜光魂	五冊	怪談笈日記	五冊
御伽厚化粧	五冊	御伽空穗猿	五冊
世間化物氣質	五冊	怪談登志男	五冊

萬世百物語　五冊
古今英草紙　五冊
古今茅屋夜話　五冊
諸國怪談帳　五冊
憶聞話錄　三冊
繁々夜話　五冊
怪談三鞆繪　五冊
怪談記野狐珠　五冊
怪談名香富貴玉　五冊
怪異談叢　五冊
古今深雪草　四冊
怪玉旅硯　五冊
古今夜半鐘　四冊
怪談東雲草紙　五冊

怪談御伽櫻　五冊
西播怪談實記　五冊
化物判取帳　五冊
齊諧俗談　五冊
怪談實錄　五冊
怪談とのゐ袋　五冊
古今怪異夜話　五冊
古今怪談御伽童　五冊
怪談見聞實記　五冊
諸國怪談實記　十冊
怪談前席夜話　五冊
怪談旅の曙　四冊
怪談頓草紙　五冊
怪談藻鹽草　五冊

解題　太平百物語

怪談雨夜鐙　　六冊

斯う云ふ類の書は[illegible]と、僕が數へても盡きぬほど多々ある

解　題

雨月物語

上田秋成

雨月物語序

羅子撰水滸、而三世生唖兒。紫媛著源語、而一旦墮悪趣者、蓋爲業所偪耳。然而觀其文、各奮奇態、捫哝逼眞、低昂宛轉、令讀者心氣洞越也。可見鑑事實于千古焉。余適有鼓腹之閑話、衝口吐出、雉雊龍戰、自以爲杜撰、則摘讀之者、固當不謂信也。豈可求醜脣平鼻之報哉。明和戊子晩春、雨霽月朦朧之夜、窗下編成、以畀梓氏。題曰雨月物語云。

剪枝畸人書

雨月物語目錄

目錄終

雨月物語　卷之一

白　峯

あふ坂の關守に許されてより、秋こし山の黄葉見過しがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海潟、不盡の高嶺の煙、浮島が原、淸見が關、大磯小磯の浦々、紫艶ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝景色、象潟の蜑が苫屋、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葭がちる難波を經て、須磨明石の浦吹く風を身にしめつも、行く〳〵讃岐の眞尾坂の林と云ふに、暫く笻を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便りせし庵なりけり。この里近き白峯と云ふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拜み奉らばやと、十月初めつ方、彼の山に登る。松柏は奥深く茂りあひて、青雲の輕靡く日すら小雨そぼ降るが如し。兒ヶ嶽と云ふ險しき嶽背に聳ちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、咫尺をも鬱俤なき心地せらる。木立僅かに間きたる所に、土墩く積みたるが上に、石を三重に疊み重ねたるが、荊棘薜蘿に埋もれて、うら悲しきを、これならん御墓にやと、心も掻暗まされて、更に夢現をもわき難し。現に目前に見奉りしは、

紫宸清涼の御座に、朝政きこしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢き君ぞとて、詔恐みて仕へまつりし。近衛院に禪りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁めさせ給ふを、思ひきや、麋鹿の通ふ跡のみ見えて、詣でつかふる人もなき深山の荊の下に神がくれ給はんとは。萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業と云ふものの、おそろしくも添ひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるが如し。終夜供養し奉らばやと、御墓の前の平らなる石の上に座を占めて、經文徐かに誦しつゝも、且歌詠みて奉る。

松山の浪のけしきは變らじをかたなく君はなりまさりけり

猶心怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけん。日は沒りし程に、山深き夜のさま常ならね、石の牀、木葉の衾いと寒く、神清み、骨冷えて、物とはなしに凄まじき心地せらる。月は出でしかど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、正しく圓位〳〵とよぶ聲す。眼を開きて透し見れば、其の形異なる人の、背高く痩せ衰へたるが、顏の形、着たる衣の色紋も見えで、此方に向ひて立てるを、西行素より道心の法師なれば、恐ろしともなくて、こゝに來るは誰ぞ」と答ふ。かの人云ふ「前に詠みつる言葉の返りを聞えんとて見えつるなり」とて、

松山の浪に流れて來し船のやがて空しくなりにけるかな

潔しくも詣でつるよしと聞ゆるに、新院の靈なる事を知りて、地に額づき、涙を流していふ、「さりとていかに迷はせ給ふや。濁世を厭離し給ひつる事の羨ましく侍りてこそ、今夜の法施に隨縁し奉るを、現形し給ふは有難くも悲しき御心にし侍り。只ひたすらに隔生即忘して、佛果圓滿の位に昇らせ給へ」と、情を盡して諫め奉る。新院呵々と笑はせ給ひ、「汝しらずや。近來の世の亂れは朕が爲す事なり。生きてありし日より、魔道に志を傾けて、平治の亂れを發さしめ、死して猶朝家に祟りを爲す。見よ見よ、やがて天が下に大亂を生ぜしめん」と云ふ。西行この詔に涙を止めて、「こは淺ましき御心ばへをうけたまはるものかな。君は素より聰明の聞え在せば、王道の理はあきらめさせたまふ。試みに討ね請すべし、そも保元の御謀叛は、天の神の敎へ給ふ理にも違はじとて、おぼし立たせ給ふか、又自らの人慾より計策り給ふか。詳に告らせ給へ」と奏す。其の時院の御けしき變らせ給ひ、「汝聞け。帝位は人の極みなり。若し人道上より亂す則は、天の命に應じ、民の望みに順うて是れを伐つ。抑永治の昔、犯せる罪もなきに、父帝の命を恐みて、三歳の體仁に代を讓りし心、人慾深きといふべからず。體仁早世ましては、朕が皇子の重仁こそ國治すべきものをと、朕も人も思ひをりしに、美福門院が妬みに遮へられて、四の宮の雅仁に世を簒はれしは、深き怨みにあらずや。重仁國治すべき才あり。雅仁何等の器量そ、人の德を撰ばずも、天が下の事を後宮に語らひ給ふは、父帝の罪なりしこ

れど世にあらせ給ふ程は、孝信をまもりて、勤色にも出さゞりしを、崩れさせ給ひては何時までありなんと、武き志を發せしなり。臣として君を伐つすら、天に應じ民の望みに順へば、周八百年の創業となるものを、ましてしるべき位ある身にて、牝鷄の晨する代を取つて代らんに、道を失ふと云ふべからず。汝家を出でて佛に淫し、未來解脫の利慾を願ふ心より、人道をもて因果に引き入れ、堯舜の教へを釋門に混じて朕に說くや」と、御聲あらゝかに告らせ給ふ。西行いよ〳〵恐るゝ色もなく、座を進みて、「君が告らせ給ふ所は、人道の理をかりて、慾塵を遁れ給はず。遠く震旦をいふまでもあらず。皇朝の昔譽田の天皇、兄の皇子大鷦鷯の王を置きて、季の皇子菟道の王を日嗣の太子と爲し給ふ。天皇崩御れ給ひては、兄弟相讓りて位に昇り給はず。三歲を渉りても猶果つべくもあらぬを、菟道の王深く憂へ給ひて、豈久しく生きて天が下を煩はしめんやとて、自ら寶算を斷たせ給ふものから、罷事なくて、兄の皇子御位に卽かせ給ふ。是れ天業を重んじ、孝悌を守り、忠を盡して人慾なし。堯舜の道と云ふなるべし。本朝に儒敎を尊みて、專ら王道の輔けとするは、菟道の王百濟の王仁を召して學ばせ給ふを始めなれば、この兄弟の王の御心ぞ、卽て漢土の聖の御心とも云ふべし。又周の創め、武王一度怒りて天の下の民を安くす。臣として君を弑すと云ふべからず。仁を賊み義を賊む一夫の紂を誅するなりと云ふ事、孟子と云ふ書にありと、人の傳へに聞き侍る。されば漢土の書は、

經典、史策、詩文に至るまで、渡さざるはなきに、かの孟子の書ばかり、未だ日本に來らず。此の書を積みて來る船は、必ずしも暴風にあひて沈沒む由を云へり。夫れを如何なる故ぞと問ふに、我が國には天照大御神の開闢を知ろしめししより、日嗣の大王絶ゆる事なきを、かく口賢しき教へを傳へなば、末の世に神孫を奪うて、罪なしといふ敵も出づべしと、八百萬の神の惡ませ給うて、神風を起して船を覆し給ふと聞く。されば他の國の聖の教へも、こゝの國土に相應しからぬ事尠からず。且詩にもいはざるや、兄弟牆に鬩ぐとも外の侮りを禦げよと。さるを骨肉の愛を忘れ給ひ、剩へ一院崩御れ給ひて、殯の宮に肌膚も未だ寒えさせ給はぬに、御旗靡かせ弓末より立て、寶祚を爭ひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人の私をもて奪ふとも得べからぬ理なるを、たとへ重仁王の卽位は民の仰ぎ望む所なりとも、德を布き和を施し給はで、道ならぬ業をもて代を亂し給ふ則は、昨日まで君を慕ひしも、今日は忽ち怨敵となりて、本意をも遂げ給はで、古より例なき刑を得給ひて、斯かる鄙の國の土とならせ給ふなれ。たゞ／＼舊き讐を忘れ給うて、淨土に歸らせ給はんことを、願はしき叡慮なれと憚る事なく奏しける。院長嘘をつがせ給ひ、今事を正して罪を問ふ、理なきにあらず。されど如何にせん。この島に謫されて、高遠が松山の家に困しめられ、日に三たびの御膳すゝむるの外は、參り仕ふる者もなし。たゞ天飛ぶ雁の小夜の枕に訪るゝを聞けば、

都にや行くらんとなつかしく、曉の千鳥の洲崎に騷ぐも、心をくだく種となる。烏の頭は白くなるとも、都には還るべき期もあらねば、定めて海畔の鬼とならんずらん。ひたすら後世のためにとて、五部の大乘經を寫してけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒磯にとゞめんもかなし。せめては筆の跡ばかりを、洛の中に入れさせたまへと、仁和寺の御室の許へ、經にそへて詠みておくりける。

　濱千鳥跡は都に通へども身は松山に音をのみぞなく

然るに少納言信西が計らひとして、若し呪詛の心にやと奏しけるより、其儘に返されしぞ怨みなる、古より倭漢土ともに、國を爭ひて、兄弟敵となりし例は珍らしからねど、罪深き事かなと思ふより、惡心懺悔の爲にとて寫しぬる御經なるを、如何にさゝふる者ありとも、親しきを議るべき令にも違ひて、筆の跡だも納れ給はぬ叡慮こそ、今は讐しき敵なるかな。所詮此の經を魔道に廻向して、恨みをはらさんと、一筋に念ひ定めて、指を破り血をもて願文を寫し、經と共に志戸の海に沈めてし後は、人にも見えず深く閉ぢ籠りて、偏に魔王となるべき大願を誓ひしが、はた平治の亂れぞ出できぬる。先づ信頼が高き位を望む驕慢の心を誘うて、義朝を語らはしむ。かの義朝こそ惡き敵なれ。父の爲義をはじめ、同胞の武士は皆朕がために命を捨てしに、他一人朕に弓を挽く。爲朝が勇猛、爲義、忠正が軍配に贏目を見つるに、西南の風に燒討せられ、白川の宮を出でしより、如意が嶽の嶮し

きに足を破られ、或は山賤の椎柴を覆ひて雨露を凌ぎ、終に擒はれて此の島に謫られしまで、皆義朝が姦しき計策に困しめられしなり。これが報ひを虎狼の心に障化して、信賴が隱謀にかたらはせしかば、地祇に逆ふ罪、武に賢からぬ清盛に逐討る。且父の首を刎し報ひせまりて、家の子に謀られしは、天神の祟を蒙りしものよ。又少納言信西は、常に己を博士ぶりて、人を拒む心の直からぬ、これをさそうて信賴義朝が讐となせしかば、終に家をすてて宇治山の坑に竄れしを、はた探し獲られて六條河原に梟首らる。これ經をかへせし諛言の罪を治めしなり。それがあまり、應保の夏は美福門院が命を窮り、長寬の春は忠通を祟りて、朕も其の秋世をさりしかど、猶嗔火熾にして盡ざるまゝに、終に大魔王となりて、三百餘類の巨魁となる。朕がけんぞくのなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治るを見ては亂を發さしむ。只清盛が人果大にして、親族氏族悉く高き官位につらなり、己がまゝなる國政を執行ふと雖も、重盛忠義をもて輔くる故、未だ期いたらず。汝見よ、平氏も又久しからじ。雅仁朕につらかりし程は、終に報ふべきぞ」と御聲いやましに恐ろしく聞えけり。西行いふ、「君かくまで魔界の惡業に繫がれて、佛土に億萬里を隔て給へば、再びいはじ」とて只默してむかひ居たりける。時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を僵すが如く、沙石を空に捲き上る。見る見る一段の陰火、君が膝の下より燃え上りて、山も谷も晝の如く明かなり。光の中に、熟御氣色を見奉るに、

朱を注ぎたる龍顔に、荊の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼を吊りあげ、熱き嘘を苦しげにつがせたまふ。御衣は柿色のいたう煤びたるに、手足の爪は獸の如く生ひのびて、宛然魔王の形淺ましくも恐ろし。空に向ひて「相模々々。」と叫ばせ給ふ。「あ。」と答へて鳶の如くの化鳥翔け來り、前に伏して詔をまつ。院彼の化鳥に向ひ給ひ、「何ぞ早く重盛が命を奪りて、雅仁清盛を苦しめざる。」化鳥應へて云ふ、「上皇の幸福いまだ盡きず、重盛が忠信近づき難し。今より干支一周を待たば、重盛が命數すでにつきなん。彼死せば一族の幸福此の時に亡ぶべし。」院手を拍つて怡ばせ給ひ、「かの讐敵悉く此の前の海に盡すべし。」と御聲谷峯に響きて凄まじさ言ふべくもあらず。魔道の淺ましき有樣を見て、涙しのぶに堪へず。復び一首の歌に隨縁の心をすゝめ奉る。

よしや君昔の玉の牀とてもかからむのちは何にかはせむ

刹利も須陀もかはらぬものをと、心あまりて高らかに吟ひける。此の詞を聞しめして感でさせ給ふやうなりしが、御面も和ぎ、陰火もやゝうすく消えゆく程に、遂に龍體もかき消えたる如く見えずなれば、化鳥も何地去きけん跡もなく、十日餘りの月は峯にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふが如し。ほどなくいなのめの明けゆく空に、朝鳥の音おもしろく鳴きわたれば、重ねて金剛經一卷を供養し奉り、山を下りて庵に歸り、閑かに終夜の事共を思ひ出づるに、平治の亂れより

はじめて、人々の消息年月の違ひたければ、深く慎みて人にもかたり出でず。其の後十三年を経て、治承三年の秋、平の重盛病にかゝりて世を逝りぬれば、平相国入道、君を怨みて、鳥羽の離宮に籠めたてまつり、重ねて福原の茅の宮に困しめたてまつる。頼朝東風に競ひ発り、義仲北雪を払うて出づるに及び、平氏の一門悉く西の海に漂ひ、遂に讃岐の海志戸八嶋に到りて、武き兵共も多く鼇魚の腹に葬られ、赤間が関壇の浦に迫りて、幼主海に入らせ給へば、軍将達も、残りなく亡びしまで、露たがはざりしぞ恐ろしく怪しき話柄なりける。其の後御廟は玉もて雕り、丹青を彩り為して、稜威を崇め奉る。彼の国に通ふ人は、必ず幣をさゝげて斎ひまつるべき御神なりけらし。

菊花の約

青々たる春の柳、家園に種うる事勿れ。交りは軽薄の人と結ぶ事勿れ。楊柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。軽薄の人は交り易くして亦速かなり。楊柳幾度春に染むれども、軽薄の人は絶えて訪ふ日なし。播磨の国加古の駅に、丈部左門といふ博士あり。清貧を憩ひて、友とする書の外は凡て調度の煩はしきを厭ふ。老母あり、孟子の操に譲らず。常に紡績を事として左門が志を助く。其の季女なる者は同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗る富み栄えて有りけるが、丈部母

子の賢きを喜び、季女を娶りて親族となり、屢事に託せて物を餉ると雖も、口腹の為に人を累はさんや」とて、あへて承くる事なし。一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、古今の物語して興ある時に、壁を隔てて人の痛楚む聲、いとも哀れに聞えければ、主に尋ぬるに、主答ふ、「これより西の國の人と見ゆるが、伴ひに後れし由にて、一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、逗め參らせしに、其の夜邪熱劇しく、起臥も自らは任せられぬを痛はしさに、三日四日は過しぬれど、何地の人とも定かならぬに、主も思ひがけぬ過ちし出でて、心惑ひ侍りぬ」といふ。左門聞きて、「哀しき物語にこそ。主の心やすからぬもさる事にしあれど、病苦の人は知る方なき旅の空に、此の疾を患ひ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし。其の樣をも看ばや」といふを、主とゞめて、「瘟病は人を過つ物と聞ゆるから、家童らも敢て彼處に行かしめず。立ち寄りて身を害し給ふこと勿れ」と左門笑うて云ふ、「死生命あり。何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗の俗説にて、吾が們はとらず」とて、戸を推して入りつゝ、其の人を見るに、主が語りしに違はで、倫の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黒く痩せ、古き衾の上に悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、「湯一つ恵み給へ」と云ふ。左門近く寄りて、「士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひ參らすべし」とて、主と計りて、藥を選み、自ら方を案じ、自ら煮て與へつゝ、猶粥をすゝめて病を看ること、同胞の如く、まことに捨て

かれき厭嘸なり。かの武士左門が愛憐の厚きに涙を流して、「かくまで漂客を惠み給ふ。死すとも御心に報いたてまつらん」と云ふ。左門諫めて、「力なき事はな聞え給ひそ。凡そ疫は日數あり。其のほどを過ぎぬれば壽命をあやまたず。吾日々に詣でゝ仕へ參らすべし」と、實やかに約りつゝも、心を用ゐて助けるに、病漸減じて心地淸しく覺えければ、主にも念比に詞をつくし、左門が陰德を貴みて、其の生業をもたづね、己が身の上をも語りて云ふ。「故出雲國松江の郷に生長りて、赤穴宗右衞門と云ふ者なるが、僅かに兵書の旨を察めしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師として物學びたまひしに、近江の佐々木氏綱に密かに使に選ばれて、かの館に逗留るうち、前の城主尼子經久、山中黨をかたらひて、大三十日の夜不慮に城を乘りとりしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて、經久を亡ぼし給へ」と勸むれども、氏綱は外勇にして内怯えたる愚將なれば果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて國に還る路に、此の疾に罹りて、思ひかけずも師を勞はしむるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半世の命をもて、必ず報い奉らん。」左門云ふ。「見る所を忍びざるは、人たる者の心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。たゞ逗まりて養ひ給へ」と、實ある詞を便りにて、日頃經る儘に、物みな平生に邇くぞなりにける。此の日頃左門はよき友求めたりとて、日夜交はりて物がたり

するに、赤穴も諸子百家の事おろ〳〵語り出でゝ、問ひわきまふる心愚かならず。兵機の理はをさをさしく聞えければ、一つとして相ともに逆ふ心もなく、且感で、且歡びて、つひに兄弟の盟ひを爲す。赤穴五歲長じたれば、伯氏たるべき禮義ををさめて、左門に向ひて云ふ。「吾父母に離れ參らせていとも久し。賢弟が老母は即て吾が母なれば、新たに拜み奉らん事を願ふ。老母憫みてをさなき心を肯け給はんや。」左門歡びに堪へず「母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば齡も延びなんに。」と伴ひて家に歸る。老母よろこび迎へて「吾が子不才にて、學ぶ所時にあはず、青雲の便りを失ふ。願はくば捨てずして伯氏たる敎へを施したまへ。」赤穴拜して云ふ「大丈夫は義を重しとす。功名富貴は云ふに足らず。吾いま母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を納むる、何の望みかこれに過ぐべき。」と歡びうれしみつゝ、又日來を逗まりける。昨日今日咲きぬると見し尾上の花も散り果てて、涼しき風による浪に、とはでも著き夏の初めになりぬ。赤穴、母子に向ひて「吾が近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、一度下向りて、軈て歸り來り、菽水の奴に御恩を返し奉るべし。今の別れを給へ。」と云ふ。左門云ふ「さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。」赤穴云ふ「月日は逝き易し。遲くとも此の秋は過さじ。」左門云ふ「秋はいつの日を定めて待つべきや。願はくば約し給へ。」赤穴云ふ「重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。」左門云ふ「兄長必ず此の日を誤り給ふな。一枝の菊花に

薄酒を備へて待ち奉らん。」と、互に情をつくして赤穴は西に歸りけり。新玉の月日はやく經ゆきて、草下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶やかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起き出でて、草の屋の席を拂ひ、黃菊白菊二枝三枝小瓶に插し、囊を傾けて酒飯の設けをす。老母云ふ「かの八雲たつ國は山陰の果にありて、こゝには百里を隔つると聞けば、今日とも定め難きに、其の來しを見て物すとも遲からじ。」左門云ふ。「赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其の人を見てあわたゞしからんは、思はんことの恥かし。」とて美酒を沽ひ、鮮魚を宰て廚に備ふ。此の日や天晴れて、千里に雲の起居もなく、草枕旅ゆく人の群々かたりゆくは、「今日は誰某が良き京入なる。此の度の商物によき德とるべき祥になん。」とて過ぐ。五十餘りの武士、二十餘りの同じ出立なる、「日和はかばかり好かりしものを、明石より船求めなば、この朝びらきに、牛窗の門の泊は追ふべき。若き男は卻て物怯えして、錢多く費す事よ。」と云ふに、「殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津の渡りし給ふに、なま辛き目にあはせ給ふを、從に侍りし者の語りしを思へば、このほとりの渡は必ず怯ゆべし。な患ひたまひそ。魚が橋の蕎麥ふるまひ申さんに。」と云ひ慰めて行く。口とる男の腹だたしげに、「此の死馬は眼をもはだけぬか。」と、荷鞍おしなほして追ひもて行く。午時もやゝ傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心醉へるが如し。老母左門を呼び

て二人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きは今日のみかは、歸り來る信だにあらば、空は時雨に移りゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべし。」とあるに、否み難く、母を賺して前に臥さしめ、若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消え／＼に、氷輪我のみを照らして寂しきに、軒守る犬の吼ゆる聲澄み渡り、浦浪の音ぞこゝもとにたち來るやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉てて入らんとするに、たゞ看る、朧なる黒影の中に人ありて、風の隨に來るを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。踊り上る心地して、「小弟蚤くより待ちて今に至りぬる。盟ひ違はで來り給ふ事の嬉しさよ。いざ入らせ給へ。」と云ふめれど、たゞ點頭きて物をも云はである。左門前にすゝみて、南の窗の下に迎へ、座につかしめ、「兄長來り給ふことの遲かりしに、老母も待ちわびて、翌日こそと臥所に入らせ給ふ。寤させ參らせん。」と云へるを、赤穴又頭を振りて止めつも、更に物をも云はでぞある。左門云ふ。「既に夜を續ぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れ給ふべし。幸ひに一杯を酌みて歇息ませ給へ。」とて酒を煖め下物を列ねて勸むるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを嫌放くるに似たり。左門云ふ。「井臼の力はた款すに足らざれども、己が心なり。卑しみ給ふ事勿れ。」赤穴猶答へもせで、長嘘をつぎつゝ、少時して云ふ。「賢弟が信ある饗應をなど否むべき理やあらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ずしも怪しみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず、

きたなき蟲の假に形を見えつるなり」左門大いに驚きて「兄長何故にこの怪しき事語り出で給ふや。更に夢ともおぼえ侍らず」赤穴云ふ「賢弟とわかれて國にくだりしが、國人大かた經久が勢ひに服きて、鹽冶の恩を顧みる者なし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪らひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。假に其の詞を容れて、倩經久が爲す所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練すと雖も、智を用ゐるに狐疑の心多くして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂に今日に到らしむ。此の約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。古の人のいふ、人一日に千里をゆく事あたはず、魂よく一日に千里をもゆくと。此の理を思ひ出でて、自ら刃に伏し、今夜陰風に乘りてはる〴〵來り、菊花の約に赴く。此の心をあはれみ給へ」と云ひをはりて、涙わき出づるが如し。「今は永き別れなり。只母公によく事へ給へ」とて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。左門慌忙て止めんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず。俯向に躓き倒れたる儘に、聲を放ちて大いに哭く。老母目さめ、驚き立ちて、左門がある所を見れば、座上に酒瓶魚盛りたる皿ども數多列べたるが中に、臥し倒れたるを急がはしく扶け起して、いかにと問へども、只聲を呑みて泣く〳〵更に言なし。老母問う

ていふ。伯氏赤穴が約に違ふを怨むるとならば、明日なん若し来るには言なからんものを。汝かくまで幼くも愚かなるかと強く諫むるに、左門漸答へていふ。兄長今夜菊花の約に特く来る。酒殽をもて迎ふるに、再三辞み給うていふ。しかじかのやうにて約に背くが故に、自ら刃に伏して、陰魂百里を来ると云ひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かしたてまつれ。只々赦し給へと潸然と哭き入るを、老母いふ。牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見え、渇する者は夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん。よく心を静むべしとあれども、左門頭を揺りて、更に夢の正なきにあらず。兄長はこゝもとにこそありつれと、又声を放げて哭き倒る。老母も今は疑はず、相呼びて其の夜は哭きあかしぬ。明くる日左門母を拝して云ふ。吾幼きより身を翰墨に託すると雖も、国に忠義の聞えなく、家に孝信を尽すこと能はず、徒らに天地の間に生まるゝのみ。兄長赤穴は、一生を信義のために終る。小弟今日より出雲に下り、せめては骨を蔵めて信を全うせん。公尊体を保たせたまうて、しばらくの暇をたまふべし。老母いふ。吾が児かしこに去るとも、はやく帰りて老が心を休めよ。永く逗まりて今日を旧しき日と為すこと勿れ。左門いふ。生は浮きたる漚の如く、旦に夕に定めがたくとも、やがて帰りまゐるべしとて、涙を揮うて家を出で、佐用氏にゆきて老母の介抱を懇にあつらへ、出雲国にまかる路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れて、まどろめば夢にも哭きあかしつ

つ、十日を經て富田の大城に到りぬ。先づ赤穴丹治が宅にいきて、姓名をもていひ入るに、丹治迎へ請じて、「翼ある物の告ぐるにあらで、何でか知らせ給ふべき謂なし」と頻りに問ひ尋む。左門いふ。「士たる者は富貴消息の事共に論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報いすとて、日夜を逐うて此所に下りしなり。吾學ぶ所について士に尋ねまゐらすべき旨あり。願はくは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀に臥したるに、魏王自ら手を執りつゝ告ぐるは、『若し諱むべからずの事あらば、誰をして社稷を守らしめんや。吾が爲に教へを遺せ』とあるに、叔座いふ、『商鞅年少しと雖も奇才あり。王若しこの人を用ゐ給はずば、これを殺しても境を出すことなかれ。他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべし』と苦に教へて、又商鞅を私かに招き、『吾汝をすゝむれども、王許さゞる色あれば、用ゐずばかへりて汝を害し給へと教ふ。是君を先にし臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて、害を免るべし』といへり。この事士と宗右衛門に比へて如何に」丹治只頭を低れて言なし。左門座を進みて、「伯氏宗右衛門鹽冶が舊交を思ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨てゝ尼子に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨てゝ百里を來しは信ある極なり。士は今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此の横死をなさしむるは友とする信なし。經久强ひて止め給ふとも、舊しき交はりを思はば、私か

に商鞅、叔座が信を盡すべきに、只榮利にのみ走りて、士家の風なきは、即ち尼子の家風なるべし。さるから兄長何故この國に足を逗むべき。吾今信義を重んじて、態々こゝに來る。汝は又不義の爲に汙名を貽せ」とて、いひも了らず、拔打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立ち騒ぐ間に、早く逃れ出でゝ跡なし。尼子經久この由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憫み、左門が跡をも強ひて追はせざるとなり。咨輕薄の人と交はりは結ぶべからずとなん。

雨月物語　巻之二

淺茅が宿

下總の國葛飾郡眞間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より舊しく爰に住み、田畠數多主づきて、家豐に暮しけるが、生長て物に拘はらぬ性より、農作をうたてき物に厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりにけり。さるほどに親族おほくにも疎んじられけるを、口惜しきことに思ひしみて、如何にもして家を興しなんものをと、左右にはかりける。其の頃雀部の曾次といふ人、足利染の絹を交易する爲に、年々京よりくだりけるが、此の郷に氏族のありけるを、屢來訪ひしかば、かねてより親しかりけるまゝに、商人となりて京にまうのぼらん事を頼みしに、雀部いと易く肯ひて、いつの頃は罷るべしと聞えける。他が頼もしきを悦びて、殘る田をも販り盡して金に代へ、絹素數を買ひ積みて、京にゆく日を催しける。勝四郎が妻宮木なる者は、人の目とむる容の美さに、心ばへも愚ならずありけり。此の度勝四郎が商物買ひて京に行くと云ふを、うたてき事に思ひ、言を盡して諫むれども、常の心のはやりたるにせんかたなく、梓弓末のたつきの心細きにも、甲斐々々しく調へて、其の夜はさり

悲しき別れを語り、かくしては頼みなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物憂きかぎりに侍り。朝にゆふべに忘れ給はで、速く帰り給へ。命だにとは思ふものの、明を頼まれぬ世の理は、武き御心にも憐み給へ」と云ふに、「いかで浮木に乗りつも、知らぬ国に長居せん。葛の裏葉のかへるは此の秋なるべし。心強く待ちたまへ」と言ひ慰めて、夜も明けぬるに、鳥が啼く東を立ち出でて、京の方へ急ぎけり。此年享徳の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放けて、館兵火に跡なく滅びければ、御所は総州の御味方へ落ちさせ給ふより、関の東忽ちに乱れて、心々の世の中となりしほどに、老いたるは山に逃げ竄れ、弱きは軍民にもよほされ、今日は此所を焼き払ふ、明日は敵の寄せ来るぞと、女童等は東西に逃げ惑ひて泣きかなしむ。勝四郎が妻なる者も、何地へも遁れんものをと思ひしかど、此の秋を待てと聞えし夫の言を頼みつゝも、安からぬ心に日を数へて暮しける。秋にもなりしかど、風の便りもあらねば、世とともに憑みなき人心かなと、恨み悲しみ思ひくづをれて、

身のうさは人しも告げじあふ坂の夕づけ鳥よ秋も暮れぬと

かく詠めれども、国数多隔てぬれば、云ひ送るべき傳もなし。世の中騒がしきにつれて、人の心も恐ろしくなりにけり。適間訪らふ人も、宮木が容の愛でたきを見ては、様々に賺し誘へども、三貞の賢き操を守りて辛くもてなし、後は戸を閉てて見えざりけり。一人の婢女も去りて、少しの貯へも空しく、

其の年も暮れぬ。年更まりぬれども猶穩ならず。剰へ去年の秋、京家の下知として、美濃國郡上の主、東の下野守常縁に御旗を給びて、下野の領所にくだり、氏族千葉實胤と謀りて攻むるにより、御所方もかたく守りて拒ぎ戰ひけるほどに、いつ果つべきとも見えず、野代等は此處彼處に塞をかまへ、火を放ちて財を奪ふ。八州總て安き所もなく、淺ましき世の費えなりけり。勝四郎は雀部に從ひて京にゆき、絹ども殘りなく交易せしほどに、當時都は華美を好む節なれば、よき徳とりて東に歸る用意をなすに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陷し、なほ御跡を慕うて攻め討てば、古郷の邊は干戈みちみちて、涿鹿の岐となりし由を云ひはやす。目の前なるさへ僞り多き世説なるを、まして白雲の八重に隔たりし國なれば、心も心ならず、八月のはじめ京をたち出でて、岐曾の眞坂を日暮に踰えけるに、落草ども道を塞へて、行李も殘りなく奪はれしが上に、人の語るを聞けば、是れより東の方は所所に新關を据ゑて、旅客の往來をだに宥さゞる由、扨は消息をすべき便もなし。家も兵火にや亡びなん、妻も世に生きてあらじ。然らば古郷とても鬼の住む所なりとて、こゝより又京に引き返すに、近江國に入りて、にはかに心地あしく、熱き病を憂ふ。武佐と云ふ所に、兒玉嘉兵衞とて富貴の人あり。これは雀部が妻の產所なりければ、苦にたのみけるに、此の人見捨てずしていたはりつゝ、醫を迎へて藥のことを專らなりし。稍こゝち清しくなりぬれば、篤き恩みをかたじけなうす。されど歩む事

はた捗なしからねば、今年は思ひがけずも此所に春を迎ふるに、いつの程か此の里にも友を求めて、揖のさるに直き志を賞せられて、兒玉をはじめ誰々も頼もしく交はりけり。この後は京に出でて雀部を訪らひ、又は近江に歸りて兒玉に身を託せ、七年がほどは夢のごとくにすごしぬ。寛正二年畿内河内國に、畠山が同根の爭ひ果ざれば、京近くも騒がしきに、春の頃より瘟疫さかんに行はれて、屍は衢に疊れ、人の心も今や一劫の盡くるならんと、果敢なき限りを悲しみける。勝四郎熟おもふに、かく落魄て爲す事もなき身の、何を頼みとて遠き國に逗まり、由縁なき人の惠をうけて、いつまで生くべき命なるぞ。古郷に捨てし人の消息をだにしらで、萱草生ひぬる野方に、長々しき年月を過しけるは、信なき己が心なりける物を。縦ひ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其の跡をも求めて、壟をも築くべけれと、人々に志を告げて、五月雨の晴間に手を別ちて、十日あまりを經て、古郷に歸りつきぬ。此の時日ははや西に沈みて、雨雲は落ちかゝるばかりに闇けれど、舊しく住み馴れし里なれば、迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、古の繼橋も川瀬に落ちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒れたきまゝにすさみて、舊の道もわからず、ありつる人居もなし。たま〳〵此處彼處に殘る家に、人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね、何れか我が住みし家ぞと立ち惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて、雷に摧かれし松の聳えて立てるが、雲間の

星の光に見えたるを、げに我が軒の標こそ見えつると、先喜しき心地して歩行むに、家は故に變らであり。人も住むと見えて、古戸の間より燈火の影もれて輝々とするに、他人や住む、若し其の人や在すかと心躁しく、門に立寄りて咳すれば、内にも速く聞きとりて「誰そ」と咎む。いたうねびたれど正しく妻の聲なるを聞きて、夢かと胸のみ騒がれて「我こそ歸り參りたれ。變らで獨自淺茅が原に住みつる事の不思議さよ」といふを、聞き知りたれば、やがて戸を明くるに、いといたう黑く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結げたる髪も背にかゝりて、故の人とも思はれず。夫を見て物をも云はで潸然と泣く。勝四郎も心くらみて、少時物をも聞えざりしが、やゝして云ふは「今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき。去ぬる年、京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き、御所の師潰えしかば、總州に避けて禦ぎ給ふ。管領これを攻むる事急なりと云ふ。其の明、雀部に別れて、八月の初め京を立ちて、木曾路を來るに、山賊數多に取りこめられ、衣服金銀殘りなく掠められ、命許りを辛勞じて助かりぬ。且里人の語るを聞けば、東海東山の道は總て新關を居ゑて人を駐むる由、又昨日京より節刀使も下り給ひて、上杉に與し、總州の陣に向はせ給ふ。本國の邊は疾く燒き拂はれ、馬の蹄尺地も間なしと語るによりて、今は灰塵とやなり給ひけん、海にや沈み給ひけんと、ひたすらに思ひとゞめて、又京に上りぬるより、人に餬口して七年は過しけり。近曾すゞろに物の懷かし

く有りしかば、さらで其の跡をも見たきまゝに歸りぬれど、斯くて世に坐せんとは努々思はざりしなり。巫山の雲、漢宮の幻にもあらざるやと、縷言果しぞなき。妻涙を止めて、一たび離れ參らせて後、たのむの秋より前に恐ろしき世の中となりて、里人はみな家を捨て、海に漂ひ山に隱れば、適に殘りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便りよしとや、言を巧みて誘へども、玉と碎けても瓦の全きには傚はじものをと、幾たびか辛苦を忍びぬる。銀河秋を告ぐれども、君は歸り給はず、冬を待ち、春を迎へても消息なし。今は京に上りて尋ね參らせんと思ひしかど、丈夫さへ許さゞる關の鎖を、いかで女の越ゆべき道もあらじと、軒端の松に甲斐なき宿に、狐鵂鶹を友として今日までは過しぬ。今は長き恨みもはれ〳〵となりぬる事の喜しく侍り。逢ふを待つ間に戀ひ死なんは、人知らぬ恨みなるべしと又よゝと泣くを、夜こそ短きにと云ひ慰めて倶に臥しぬ。窓の紙松風を啜りて、夜もすがら涼しきに、途の長手に勞れ、熟く寝ねたり。五更の天明けゆく頃、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾被かんと探る手に、何物にや、籟々と音するに目さめぬ。面にひや〳〵と物のこぼるゝを、雨や漏りぬるかと見れば、屋根は風にまくられてあれば、有明月の白みて殘りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽ち頽れたる間より、荻薄たかく生ひ出でて、朝露うち零るゝに、袖濕ぢて絞るばかりなり。壁には蔦葛延ひかゝり、庭は葎に埋もれて、秋ならねども野原なる宿なりけ

り。捜しも試したる妻は何地行きけん見えず。狐などの所為にやと思へば、かく荒れ果てぬれど故住みし家に違はで、広く造り作せし奥わたりより、端の方、稲倉まで好みたるまゝの形なり。呆自れて足の踏所さへ失れたるやうなりしが、熟思ふに、妻は既に死りて、今は狐狸の住みかはりて、かく野原なる宿となりたれば、怪しき鬼の化して、ありし形を見せつるにてぞあるべき。若し又我を慕ふ魂のかへり来りてかたりぬるものか、思ひしことの露違はざりしよと、更に涙さへ出でず。我が身ひとつは故の身にしてと、歩み廻るに、昔閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積みて壟とし、雨露を防ぐまうけもあり。夜の霊はこゝよりやと、恐ろしくも且懐かし。水向の具物せし中に、木の端を刪りたるに、那須野紙のいたう古びて、文字もむら消えして所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも年月も記さで、三十一字に末期の心を哀れにも展べたり。

　さりともと思ふ心にはかられて世にも今日までいける命か

こゝにはじめて妻の死たるを覚りて、大いに叫びて倒れ伏す。去りとて何の年、何の月日に終りしさへ知らぬ浅ましさよ。人は知りもやせんと、涙を止めて立ち出づれば、日高くさし昇りぬ。先づ近き家に行きて主を見るに、昔見し人にあらず。かへりて「何国の人ぞ」と咎む。勝四郎禮ひて云ふ、「此の隣なる家の主なりしが、過活の為京に七年まで居りて、昨の夜帰り参りしに、既に荒廃て人

も住ひ侍らず。妻なる者も死りしと見えて、塚の設けも見えつるが、何の年にともなきに、まさりて悲しく侍り。知らせ給はゞ教へ給へかし。」主の男云ふ「哀れにも聞え給ふ物かな。我が爰に住むも未だ一年許りの事なれば、それより遙かの昔に亡せ給ふと見えて、住み給ふ人のありつる世は知り侍らず。總てこの里の舊き人は、兵亂の初めに逃げ失せて、今住居する人は、大方他より移り來たる人なり。只一人の翁の侍るが、所に舊しき人と見え給ふ。時々あの家にゆきて、亡せ給ふ人の菩提を弔はせ給ふなり。この翁こそ月日をも知らせ給ふべし」と云ふ。勝四郎云ふ「扨は其の翁の栖み給ふ家は何方にて侍るや。」主いふ「こゝより百步ばかり濱の方に、麻多く種ゑたる畑の主にて、其所に小さき庵して住ませ給ふなり」と敎ふ。勝四郎歡びて、かの家にゆきて見れば、七十許りの翁の、腰は淺ましきまで屈まりたるが、庭竈の前に圓座敷きて茶を啜り居る。翁も勝四郎と見るより「吾主何とて遲く歸り給ふ」と云ふを見れば、この里に久しき漆間の翁といふ人なり。勝四郎、翁が高齡を壽ぎて、次に京に行きて心ならずも逗まりしより、前の夜の怪しきまでを詳に語りて、翁が壠を築きて祭り給ふ惠みの忝きを告げつゝも、涙とゞめ得ず。翁云ふ「吾主遠くゆきたまひて後は、夏の頃より干戈を揮ひ出でて、里人は所々に遁れ、弱き者どもは軍民に召さるゝ程に、桑田俄に狐兎の叢となる。只烈婦のみ主が秋を約ひ給ふを守りて、家を出で給はず。翁も又足蹇ぎて百步を難しとすれば、深く

閉て籠りて出です。一旦樹神など云ふ怖ろしき鬼の栖む所となりたりしを、稚き女子の矢武に在する
ぞ、老が物見たる中の哀れなりし。秋去り春來りて、其の年の八月十日と云ふに死り給ふ。惆しさの
餘りに、老が手づから土を運びて柩を藏め、其の終焉に殘し給ひし筆の跡を塚の標として、蘋蘩行潦
の祭も心許りにものしけるが、翁元より筆とる事をしも知らねば、其の月日を紀す事もえせず。寺院
遠ければ贈號を求むるかたもなくて、五年を過し侍るなり。今の物語をきくに、必ず烈婦の魂の來り給
ひて、舊しき恨みを聞え給ふなるべし。復び彼處に行きて、懇に弔ひ給へ」とて杖を曳きて前に立
ち、相共に塚の前に伏して、聲を放けて歎きつゝも、其の夜はそこに念佛して明しける。寐られぬま
まに翁語りていふ。翁が祖父のその祖父すらも生まれぬ、遙かの往古の事よ。此の郷に眞間の手兒奈
といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ、身には麻衣に青衿つけて、髪だも梳らず、履だも穿
かずてあれど、面は望の夜の月のごと、笑めば花の艶ふがごと、綾錦につゝめる京女臈にも勝りたり
とて、この里人は元より、京の防人等、國の隣の人までも、言を寄せて戀ひ慕はざるはなかりしを、
手兒奈憂き事に思ひ沈みつゝ、多くの人の心に報いすとて、此の浦曲の波に身を投けしことを、世の
哀れなる例とて、古の人は歌にも詠み給ひて語り傳へしを、翁が稚かりし時、母のおもしろく語り
給ふをさへ、いと哀れなる事にきゝしを、此の亡人の心は、昔の手兒奈がをさなき心に幾等をか勝り

て悲しかりけんことを、語る〳〵涙さしぐみて止めかぬるぞ、老は物え堪へずなりけり。勝四郎が悲しみはいふべくもなし。此の物語を聞きて、念ふあまりを田舍人の口鈍くも詠みける。

いにしへの眞間の手兒奈を斯くばかり戀ひてしあらん眞間のてこなを

思ふ心の端ばかりをもえ云はぬぞ、よくいふ人の心に勝りて、哀れなりとや云はん。かの國にしばしば通ふ商人の聞き傳へて語りけるなりき。

夢應の鯉魚

昔延長の頃、三井寺に興義と云ふ僧ありけり。繪に巧みなるをもて名を世に許されけり。常に畫く所、佛像山水花鳥を事とせず。寺務の閒ある日は、湖に小舟を浮べて、網引釣する泉郎に錢を與へ、獲たる魚を元の江に放ちて、其の魚の遊ぶを見ては畫きける程に、年を經て細妙に到りけり。或時は繪に心を凝らして眠りを誘へば、夢の裏に江に入りて、大小の魚と倶に遊ぶ。覺むれば即て見つる儘を畫きて壁に貼し、自ら呼びて夢應の鯉魚と名付けけり。その繪の妙なるを感でて、乞ひ要むるもの前後を爭へば、只花鳥山水を乞ふに任せて與へ、鯉魚の繪は強ちに惜しみて、人每に戲れて云ふ。生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與へず」となん。其の繪と俳諧とともに天下に聞

えけり。一年病にかゝりて、七日を經て忽ちに眼を閉ぢ、息絶えて空しくなりぬ。徒弟友達あつまりて、歎き惜しみけるが、只心頭の邊の微し暖かなるにぞ、若しやと居めぐりて守りつゝも、三日を經にけるに、手足少し動き出づる樣なりしが、忽ち長嘘を吐きて、眼を開き、醒めたるが如くに起き上りて、人々に向ひ、我人事を忘れて、既に久しき日をか過しけん。衆弟等云ふ、師三日前に息たえ給ひぬ。寺中の人々を初め、日頃睦まじく語り給ふ殿原も詣で給ひて、葬りの事をも計畫り給ひぬれど、只師が心頭の暖かなるを見て、柩にも藏めで斯く守り侍りしに、今や蘇生り給ふにつきて、賢くも物せざりしよと怡びあへり。興義點頭きて云ふ、誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて告さんに、法師こそ不思議に生き侍れ。君今酒を酌み、鮮らけき鱠を造らしめ給ふ。暫時宴を罷めて寺に詣でさせ給へ。稀有の物語聞え參らせんとて、彼の人々のある形を見よ。我が詞に露違はじと云ふ。使異しみながら、彼の館に往きて其の由を言ひ入れて窺ひ見るに、主の助を初め令弟の十郎、家の子掃守など居繞りて、酒を酌みゐたる。師が詞の違はぬを奇しとす。彼の館の人々此の事を聞きて大いに異しみ、先づ箸を措きて、十郎掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて、路次の勞を忝うすれば、助も蘇生の賀を述ぶ。興義先づ問うて云ふ。君試みに我がいふ事を聞かせ給へ。かの漁父文四に魚を誂へ給ふ事ありや。助驚きて、實にさる事あり。如何にして知らせ給ふや。興義、かの





漁父三尺餘りの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に、碁を圍みて坐す。掃守傍に侍りて、桃の實の大いなるを啗ひつゝ、奕の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高坏に盛りたる桃を與へ、又盃を賜うて三獻飲ましめ給ふ。鱠手したり顏に魚を取り出でて鱠にせしまで、法師が云ふ所違はでぞありつらめと云ふに、助の人々此の事を聞きて、或は異しみ或は心地惑ひて、かく詳なる言の由を頻りに尋ぬるに、興義語りて云ふ。我此の頃病に苦しみて堪へ難さ餘り、其の死したるをも知らず、熱き心地すこし冷まさんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病も稍忘れたる樣にて、籠の鳥の雲井に歸る心地す。山となく里となく行き／＼て、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脫ぎ去てて、身を跳らして深きに飛び入りつも、彼此に游ぎ巡るに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、慾ふに任せて戲れけり。今思へば愚かなる夢心なりし。されども人の水に浮ぶは、魚の快きには如かず。爰にて又魚の遊びを羨む心起りぬ。傍に一つの大魚ありて云ふ。『師の願ふ事いと易し。待たせ給へ。』とて、杳かの底に去くと見しに、少時して冠裝束したる人の、前の大魚に跨りて、許多の鼇魚を率ゐて浮びきたり、我に向ひて云ふ。『海若の詔あり。老僧豫て放生の功德多し。今江に入りて魚の遊躍を願ふ。權に金鯉が服を授けて、水府の樂しみをせさせ給ふ。古餌の香しきに昧まされて、釣の絲に懸り身を亡ふ事勿れ。』と云ひ

て、去りて見えずなりぬ。不思議の餘りに、己が身を省みれば、いつのまに鱗金光を備へて、一つの鯉魚と化しぬ。怪しとも思はで、尾を振り鰭を動かして、心のまゝに逍遥す。先づ長等の山颪、立ちゐる浪に身を載せて、志賀の大曲の汀に遊べば、かち人の裳の裾濡すゆきかひに驚かされて、比良の高山影映る深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつゝなき。ぬば玉の夜中の潟に宿る月は、鏡の山の峯に清みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波に映ろふ朱の垣こそ驚かるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕ぎ出づれば、葦間の夢をさまされ、矢橋の渡りする人の水なれ棹を遁れては、瀬田の橋守に幾十度か追はれぬ。日暖かなれば浮び、風荒き時は千尋の底に遊ぶ。急にも飢ゑて食ほしげなるに、彼此に求食り得ずして狂ひゆく程に、忽ち文四が釣を垂るゝにあふ。その餌甚だ香し。心又河伯の戒めを守りて思ふ。我は佛の御弟子なり。暫し食を求め得ずとも、なぞも淺ましく魚の餌を飲むべきとて其所を去る。少時ありて飢ますます甚しければ、重ねて思ふに、今は堪へ難し。縦ひ此の餌を飲むとも、嗚呼に捕られんやは。元より他は相識るものなれば、何の憚りかあらんとて、遂に餌を呑む。文四遽く絲を收めて我を捕ふ。こは如何にするぞと叫びぬれども、他かつて聞かず顔にもてなして、縄をもて我が腮を貫き、葦間に船をつなぎ、我を籠に押し入れて、君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に奕して遊ばせ給ふ。掃守傍に侍りて菓

を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大いに感でさせ給ふ。我其の時人々に向ひ、聲を張り上げて、旁等は興義を忘れ給ふか。宥させ給へ。寺に歸させ給へ。と連りに叫びぬれど、人々しらぬ形にもてなして、只手を拍つて喜び給ふ。鱠手なるもの、まづ我が兩眼を左手の指にて強く捉へ、右手に礪ぎすませし刀をとりて、俎盤に上し、既に切るべかりし時、我苦しさの餘りに大聲をあげて、佛弟子を害する例やある。我を助けよ〳〵と、なき叫びぬれど聞き入れず。終に切らるゝと覺えて、夢醒めたりと語る。人々大いに感で異しみ、師が物語につきて思ふに、其の度ごとに魚の口の動くを見れど更に聲を出す事なし。かゝる事目前に見しこそいと不思議なれとて、從者を家に走らしめて殘れる鱠を湖に捨てさせけり。興義これより病愈えて、杳かの後天年をもて死りける。其の終焉に臨みて、畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散らせば、畫ける魚紙繭を離れて水に遊戲す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。その弟子成光なる者、興義が神妙を傳へて時に名あり。閑院の殿の障子に鷄を畫きしに、生ける鳥この繪を見て、蹴たる由を、古き物語に載せたり。

雨月物語　巻之三

佛法僧

浦安の國久しく、民作業を樂しむ餘りに、春は花の下に息らひ、秋は錦の林を尋ね、不知火の筑紫路も知らではと械枕する人の、富士筑波の嶺々を心に占むるぞ漫なるかな。伊勢の相可と云ふ郷に、拜志氏の人、世を早く嗣に讓り、忌む事もなく頭剃して名を夢然と改め、從來身に病さへなくて、彼此の旅寢を老の樂しみとする。季子作之治なる者が、生長の頑なるを憂へて、京の人見するとて、一月餘り二條の別業に逗まりて、三月の末吉野の奧の花を見て、知れる寺院に七日許り語らひ、此の序に未だ高野の山を見ず、いざとて、夏の初め青葉の茂みをわけつゝ、天の川と云ふより踰えて、摩尼の御山に到る。道のゆくての嶮しきに泥みて、思はずも日傾きぬ。壇場諸堂靈廟、殘りなく拜みて、「こゝに宿借らん」といへど、ふつに答ふる者なし。そこを行く人に所の掟をきけば、「寺院僧坊に便りなき人は、麓に下りて明すべし。此の山すべて旅人に一夜を貸す事なし」と語る。如何はせん、流石にも老の身の、嶮しき山路を來しが上に、事のよしを聞きて、大きに心倦み疲れぬ。作之治が云

ふ。「日も暮れ足も痛みて、如何して數多の道を下らん。弱き身は草に臥すとも厭ひなし。只病み給はん事の悲しさよ。」夢然云ふ。「旅はかかることこそ哀れとも云ふなれ。今夜脚を破り、倦み疲れて山を下るとも、おのが古郷にもあらず。翌の道又はかりがたし。此の山は扶桑第一の靈場、大師の廣徳語るに盡きず。殊にも來りて通夜し奉り、後世の事たのみ聞ゆべきに、幸ひの時なれば、靈廟に夜もすがら法施し奉るべし。」とて、杉の下道の小暗きを行き〳〵、靈廟の前なる燈籠堂の簀子にのぼりて、雨具うち敷き座を設けて、閑かに念佛しつゝも、夜の更けゆくを侘びてぞある。方五十町に開きて、怪しげなる梯も見えず。小石だも掃ひし福田ながら、流石に爰は寺院遠く、陀羅尼鈴錫の音も聞えず、木立は雲をしのぎて茂みさび、道にさかふ水の音、ほそ〳〵と清みわたりて、物がなしき。寐られぬまゝに、夢然語りて云ふ。「そも〳〵大師の神化、土石草木も靈を發きて、八百年餘りの今に到りて、いよゝあらたに、いよゝ貴し。遺芳歴蹤多きが中に、この山なん第一の道場なり。大師いまそかりける昔時、遠く唐土に渡り給ひ、あの國にて感ぜさせ給ふ事おはして、此三鈷の留まる所、我が道を揚ぐる靈地なりとて、杳冥に向ひて抛げさせ給ふが、はた此の山に留まりぬる。壇場の御前なる三鈷の松こそ、此の物の落ち止まりし地なりと聞く。總て此の山の草木泉石靈ならざるはあらずとなん。今宵不思議にも爰に一夜をかり奉る事、一世ならぬ善縁なり。懦弱きとて努々信心怠るべからず。」と

小やかに語るも、清みて心澄し。御廟の後の林にと覺えて、佛法々々となく鳥の音、山彦對へて近く聞ゆ。夢然目さむる心地して、「あなめづらし。あの啼く鳥こそ佛法僧と云ふならめ。かねて此の山に栖みつるとは聞きしかど、まさに其の音を聞きしと云ふ人もなきに、今宵のやどり、眞に滅罪生善の祥なるや。」彼の鳥は清浄の地をえらみて棲める由なり。上野國迦葉山、下野國二荒山、山城の醍醐の峯、河内の杵長山、就中此の山に棲む事、大師の詩偈ありて、世の人よく識れり。

寒林獨坐草堂曉　三寶之聲聞二一鳥一
一鳥有レ聲人有レ心　性心雲水倶了々

又古き歌に、

松の尾の峯しづかなる曙に仰ぎて聞けば佛法僧啼く

昔最福寺の延朗法師は、世に雙びなき法華者なりし程に、松の尾の御神、此の鳥をして常に延朗に仕へしめ給ふ由をいひ傳ふれば、かの神垣にも巣む由は聞えぬ。今宵の奇妙既に一鳥聲あり。我こゝにありて心なからんやとて、平生の樂しみとする俳諧風の十七言を、少時打傾いて云ひ出でける。

鳥の音も祕密の山の茂みかな

旅硯とり出でて、御燈の光に書いつけ、今一聲もがなと耳を傾くるに、思ひがけずも遠く寺院のかたよ

り、前を追ふ聲のいかめしく聞えて、やゝ近づき來り、何人の夜深けて詣で給ふやと、異しくも恐ろしく、親子顔を見あはせて息をつめ、其方をのみ守り居るに、はや前驅の若侍、橋板を荒らかに踏みて爰に來る。おどろきて堂の右に潛み隱るゝを、武士速く見つけて、「何者なるぞ。殿下のわたらせ給ふ。疾く下りよ」と云ふに、あわたゞしく簀子を下り、土に俯して跪る程なく、多くの足音聞ゆる中に、沓音高く響きて、烏帽子直衣召したる貴人、堂に上り給へば、從者の武士四五人許り、右左に座を設く。かの貴人人々に向ひて、「誰々はなど來らざる。」と仰せらるゝに、「軈てぞ參りつらめ」と奏す。又一群の足音して、威儀ある武士、頭圓げたる入道等も打交りて、禮たてまつりて堂に昇る。貴人只今來りし武士に向ひて、「常陸は何とて遲く參りたるぞ。」とあれば、かの武士云ふ、「白江熊谷の兩士、公に大御酒進め奉るとて、實やかなるに、臣も鮮らけき物一種調じ參らせん爲、御從に後れ奉りぬ」と奏す。速く酒殽を列ねて進め參らすれば、「萬作酌まゐれ。」とぞ仰せらるゝ。恐まりて美相の若侍、膝行り寄りて、瓶子を捧ぐ。彼方此方に杯を週らして、いと興ありげなり。貴人又曰く、「絶えて紹巴が說話を聞かず。召せ。」と宣ふに、呼びつぐ樣なりしが、我が跪りし背の方より、大きなる法師の面うちひらめきて、目鼻鮮やかなる人の、僧衣かい繕ひて、座の末にまゐれり。貴人古語かれこれ問ひ給ふに、詳に答へ奉るを、いと〳〵感でさせ給うて、「他に祿とらせよ。」と宣ふ。一人

の武士、かの法師に問ひて云ふ「此の山は大徳の啓き給うて、土石草木も靈なきはあらずと聞く。さるに玉川の流れには毒あり。人飲む時は斃るゝが故に、大師の詠ませ給ふ歌とて、

わすれても汲みやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水

と云ふ事を聞き傳へたり。大徳の流石に此の毒ある流れをば、など涸させては果し給はぬや。訝しき事を足下にはいかに辨へ給ふ」法師笑みを含みて云く「この歌は風雅集に撰み入れ給ふ。其の端詞に、「高野の奥の院へ參る道に、玉川と云ふ河の水上に、毒蟲多かりければ、此の流れを飲むまじき由を示し置きて後詠み侍りける」と斷らせ給へば、足下の覺え給ふ如くなり。されど今の御疑ひ僻言ならぬは、大師は神通自在にして、隱神を役して道なきをひらき、巖を鐫るには土を穿つよりも易く、大蛇を禁め化鳥を奉へしめ給ふ事、天が下の人の仰ぎ奉るいさをしなるを思ふには、此の歌の端の詞ぞ誠しからね。元より此の玉川てふ川は國々にありて、何れを詠める歌も、其の流れの清きを譽めしなるを思へば、こゝの玉川も毒ある流れにはあらで、歌の意もかばかり名に負ふ河の此の山にあるを、ここに詣づる人は忘るゝとも、流れの清きに愛でゝ、手に掬びつらんと詠ませ給ふにてあらんを、後の人の毒ありと云ふ狂言より、此の端詞はつくりなせしものかとも思はるゝなり。又深く疑ふ時には、此の歌の調べ今の京の初の口風にもあらず、凡そ此の國の古語に、玉蘰、玉簾、珠衣の類は、形

を褒め清きを賞むる語なるから、清水をも玉水、玉の井、玉川とも賞むるなり。毒ある流れをなど玉てふ語は冠らしめん。強ちに佛を尊む人の、歌の意に細妙からぬは、これ程の訛りは幾らをもし出づるなり。足下は歌詠む人にも非ずで、此の歌の意異しみ給ふは、用意ある事にこそ。」と篤く感でにける。貴人を初め人々も、此の理を頻りに感でさせ給ふ。御堂の後の方に、佛法々々と啼く音近く聞ゆるに、貴人杯をあげ給ひて、「例の鳥絶えて鳴かざりしに、今夜の酒宴に榮えあるぞ、紹巴如何に。」と仰せ給ふ。法師畏まりて、「某が短句公にも御耳すゝび在さん。爰に旅人の通夜しけるが、今の世の俳諧風を申して侍る。公には珍らしく坐さんに、召して聞かせ給へ。」と云ふ。「それ召せ。」と仰せらるるに、若き侍夢然が方へ向ひ、「召し給ふぞ、近う參れ。」と云ふ。夢然夢現ともわかで、恐ろしき儘に、御目前へ這ひ出づる。法師夢然に向ひ、「前に詠みつる詞を公に申し上げよ。」と云ふ。夢然恐る〳〵、「何をか申しつる。更に覺え侍らず。たゞ赦し給はれ。」と云ふ。法師重ねて、「祕密の山とは申さざるや。殿下の問はせ給ふ。急ぎ申し上げよ。」と云ふ。夢然彌恐れて、「殿下と仰せ出され侍るは、誰にて渡らせ給ひ、かゝる深山に夜宴を催し給ふや。更に訝しき事に侍る。」と云ふ。法師答へて、「殿下と申し奉るは、關白秀次公にて渡らせ給ふ。人々は木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大膳、粟野杢、日比野下野、山口少雲、丸毛不心、隆西入道、山本主殿、山田三十郎、不破萬作、斯く云ふは紹巴法

橋なり。汝等不思議の御目見え仕りたるは、前の詞急ぎ申し上げよ。」と云ふ。頭に髪あらばふとるべき許りに凄まじく、肝魂も空にかへる心地して、振ふ〳〵頭陀袋より清き紙取り出でて、筆もしどろに書きつけてさし出すを、主殿取りてたかく吟じ上ぐる。

鳥の音も祕密の山の茂みかな

貴人聞かせ給ひて、「口がしこくも仕りしな。誰ぞ此の末句を申せ。」と宣ふに、山田三十郎座をすゝみて、「某仕らん。」とて、少時うち傾きてかくなん。

芥子たき明すみじか夜の牀

「如何あるべき。」と紹巴に見する。「宜しく申されたり。」と、公の前に出すを見給ひて、「一片にもあらぬは。」と興じ給ひて、又杯を揚げて廻らし給ふ。淡路と聞えし人、頓に色を違へて、「はや修羅の時にや。阿修羅共御迎へに來ると聞え侍る。立たせ給へ。」と云へば、一座の人々忽ち面に血を灑ぎし如く、「いざ石田増田が徒に、今夜も泡吹かせん。」と勇みて立躁ぐ。秀次、木村に向はせ給ひ、「よしなき奴に我が姿を見えつるぞ。他二人も修羅につれ來れ。」と課せある。老臣の人々かけ隔たりて、聲を揃へ、「未だ命つきざる者なり。例の惡業なさせ給ひそ。」と云ふ詞も、人々の形も、遠く雲井に行くが如し。親子は氣絶えて暫時が中死に入りけるが、東雲の明けゆく空に、ふる露の冷やかなるに生き

出でしかど、未だ明けきらぬ恐ろしさに、大師の御名を忙しく唱へつゝ、漸く日出づると見て、急ぎ山を下り、京に歸りて、藥鍼の保養を盡しける。一日夢然三條の橋を過ぐる時、惡逆塚の事思ひ出づるより、かの寺眺められて、白晝ながら物凄まじくありけると、京人に語りしをそがまゝに書しぬ。

吉備津の釜

妬婦の養ひがたきも、老いての後其の功を知ると。咨これ何人の語ぞや。害の甚しからぬも、商工を妨げ物を破りて、垣の隣の口を防ぎがたく、害の大いなるに及びては、家を失ひ、國を亡ぼして、天が下に笑を傳ふ。古より此の毒に中る人、幾許といふ事を知らず。死して蟒となり、或は霹靂を震うて怨みを報ゆる類は、其の肉を醢にするとも飽くべからず。さる例は稀なり。夫の己をよく修めて敎へなば、この患おのづから避くべきものを、只かりそめなる徒事に、女の慳しき性を募らしめて、其の身の憂ひを求むるにぞありける。禽を制するは氣にあり、婦を制するは其の夫の雄々しきにありと云ふは、現にさる事ぞかし。吉備國賀夜郡庭妹の郷に、井澤庄太夫と云ふ者あり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、去んぬる嘉吉元年の亂れに、かの館を去りて爰に來り、庄太夫に至るまで三代を經て、春耕し秋收めて、家豐かに暮しけり。一子正太郎なる者、農業を厭ふ餘りに、酒に亂れ

色に耽りて、父が掟を守らず。父母これを歎きて私かに計るは、あはれ良人の女子の貌よきを娶りてあはせなば、渠が身もおのづから修まりなんとて、遍く國中を求むるに、幸ひに媒氏ありて云ふ。「吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、且歌を詠み箏に工みなり。從來かの家は吉備の鴨別が裔にて、家系も正しければ、君が家に因み給ふは、果吉祥なるべし。此の事の就らんは老が願ふ所なり。大人の御心は如何に思さんや。」と云ふ。庄太夫大いに悦び、「よくも說かせ給ふ物かな。この事我が家にとりて千年の計なりと雖も、香央は此の國の貴族にて、我は氏なき田夫なり。門戸敵すべからねば恐らくは肯ひ給はじ。」媒氏の翁笑みを作りて、「大人の謙り給ふこと甚し。我必ず萬歲を謳ふべし。」と往きて香央に說けば、彼方にも欣びつゝ、妻なる者にも語らふに、妻も勇みて云ふ「我が女子既に十七歲になりぬれば、朝夕に良き人がな娶せんものをと、心もおちゐる侍らず。速く日を選みて、聘禮を納れ給へ。」と強ちに勸むれば、盟約既になりて、井澤に返事す。即ち聘禮を厚く整へて送り納れ、良き日をとりて、婚儀を催しけり。猶幸ひを神に祈るとて、巫子祝部を召し集へて、御湯を奉る。抑當社に祈誓する人は、數の祓物を供へて、御湯を奉り、吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞を了り、湯の沸き上るに及びて、吉祥には釜の鳴る音牛の吼ゆるが如し。凶しきは釜に音なし。これを吉備津の御釜祓と云ふ。さるに香央が家の事は、神の祈けさせ給はぬにや。只秋の

蟲の叢にすだくばかりの聲もなし。こゝに疑ひを起して、此の祥を妻に語らふ。妻更に疑はず。「御釜の音なかりしは、祝部等が身の清からぬにぞあらめ。既に聘禮を納めし上、かの赤繩に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと聞くものを、殊に井澤は弓の本末をも辨へたる人の流にて、掟ある家と聞けば、今否むとも承はじ。殊に佳壻の麗なるを仄聞きて、我が兒も日を數へて待ちわぶるものを、今のよからぬ言を聞くものならば、不慮なる事をや仕出でん。其の時悔ゆるとも返らじ。」と言を盡して諫むるは、眞に女の意ばへなるべし。香央も從來希ふ因なれば、深く疑はず。妻の言葉に從ひて、婚儀を整へ、兩家の親族氏族、鶴の千年龜の萬代を諷ひ壽きけり。香央の女子磯良、彼處に往きてより、夙に起き遲く臥して、常に舅姑の傍を去らず、夫が性を量りて、心を竭して仕へければ、井澤夫婦は孝節を感でたしとて、歡びに耐へねば、正太郎も其の志に愛でて、睦まじく語らひけり。されど己がまゝの奸けたる性は如何にせん。いつの頃より鞆の津の袖と云ふ妓女に、深くなじみて、遂に贖ひ出し、近き里に別莊をしつらひ、彼處に日を重ねて、家に歸らず。磯良これを怨みて、或は舅姑の忿りに託せて諫め、或日は徒なる心を怨み喞てども、大虚にのみ聞きなして、後は月を互りて歸り來らず。父は磯良が切なる行止を見るに忍びず、正太郎を責めて押し籠めける。磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に實やかに、且袖が方へも私かに物を餉りて、信の限りをぞ竭しけ

るゝ一日父が宿にあらぬ間に、正太郎、磯良を語らひて云ふ「御許の信ある操を見て、今はおのれが身の罪を悔ゆる許りなり。かの女をも古郷に送りて後、父の面を和め奉らん。渠は播磨の印南野の者なるが、親もなき身の淺ましくあるを、いと哀しく思ひて、憐れをもかけつるなり。我に捨てられなば、はた船泊の妓女となるべし。同じ淺ましき奴なりとも、京は人の情もありと聞けば、渠をば京に送りやりて、榮ある人に仕へさせたく思ふなり。我かくてあれば、萬に貧しかりぬべし。路の代、身に纒ふ物も誰が計事して與へん。御許此の事をよくして、渠を惠みたまへ」と、懇に誂へけるを、磯良いとも喜しく、「此の事安く思し給へ」とて、私かに己が衣服調度を金に貿へ、猶香央の母が許へも僞りて金を乞ひ、正太郎に與へける。此の金を得て、密かに家を脱れ出で、袖といふ女を倶して、京の方へ逃げ上りける。かくまで謀られしかば、今は只管に恨み歎きて、遂に重き病に臥しにけり。井澤香央の人々、彼を惡み此れを哀しみて、專ら醫の驗を求むれども、粥さへ日々に減りて、萬事に賴みなくぞ見えにける。爰に播磨國印南郡荒井の里に彦六と云ふ男あり。渠は袖と近き從弟の因あれば、先づこれを訪らうて、小時足を休めける。彦六、正太郎に向ひて「京なりとて人ごとに賴もしくもあらじ。爰に駐まられよ。一飯をわけて、共に過活のはかりごとあらん」と、たのみある詞に、心おちゐて、こゝに住むべきに定めけり。彦六我が住む隣なる破屋をかりて住ましめ、友得たりとて悦

びけり。然るに袖、風の心地と云ひしが、何となく惱み出でて、鬼化のやうに狂はしげなれば、こゝに來りて幾日もあらず。此の禍に係る悲しさに、みづからも食さへ忘れて抱き扶くれども、只音をのみ泣きて、胸窮り堪へ難げに、さむれば常に變る事もなし。窮鬼と云ふものにや。古郷に捨てし人の若しやと、獨り胸苦し。彦六これを諫めて「如何でさる事のあらん。疫と云ふものゝ惱ましきは、數多見來りぬ。熱き心少しさめたらんには、夢忘れたる樣なるべし。」と、やすげに云ふぞ頼みなる。看る〳〵露ばかりの驗もなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭き悲しみ、共にもと物狂はしきを、樣々に云ひなぐさめて、斯くてはとて遂に曠野のけぶりと爲しはてぬ。骨を拾ひ、壠を築きて、塔婆を營み、僧を迎へ、菩提のこと懃に弔ひける。正太郎今は俯して黄泉をしたへども、招魂の法をも求むる方なく、仰ぎて古郷を思へば、かへつて地下よりも遠き心地せられ、前に渡りなく、後に途を失ひ、晝はしみらに打臥して、夕々ごとには壠の許に詣でて見れば、小草はやくも繁りて、蟲の聲すゞろに悲し。此の秋のわびしきは、我が身一つぞと思ひ續くるに、天雲のよそにも同じ歎きありて、並びたる新壠あり。こゝに詣づる女の、世にも悲しげなる形して、花を手向け水を灌ぎたるを見て、「あな哀れ、若き御許の、かく氣疎きあら野に彷徨ひ給ふよ。」と云ふに、女返り見て、「我が身夕々毎に詣で侍るには、殿は必ず前に詣で給ふ。さりがたき御方に別れ給ふにてやまさん。

御心の中はかり參らせて悲し」と、潸然と泣く。正太郎云ふ「さる事に侍り。十日許りさきに、かなしき嬬を亡ひたるが、世に殘りて憑みなく侍れば、こゝに詣づる事をこそ、心放にものし侍るなれ。御許にもさこそましますなるべし」女云ふ「かく詣で仕るは、憑みつる君の御跡にて、いつ／＼の日こゝに葬り奉る。家に殘ります女君の餘りに歎かせ給ひて、此の頃はむつかしき病にそませ給ふなれば、かく代り參らせて、香花を運び侍るなり」と云ふ。正太郎云ふ「刀自の君の病み給ふもいと道理なるものを、そも古人は何人にて、家は何地に住ませ給ふや」女云ふ「憑みつる君は此の國には由緣ある御方なりしが、人の讒にあひて領所をも失ひ、今は此の野の隈に侘しくて住ませ給ふ。女君は國の隣までも聞え給ふ美人なるが、此の君によりてぞ家所領をも亡くし給ひぬれ」とかたる。此の物語に心のうつるとはなくて「扨しもその君のはかなくて住ませ給ふは、こゝ近きにや。訪らひ參らせて、同じ悲しみをも語り和まん。倶し給へ」と云ふ「家は殿の來らせ給ふ道の、少し引き入りたるかたなり。便りなくませば時々訪はせ給へ。待ち侘び給はんものを」と、前に立ちて歩む。二丁餘りを來て、細き徑あり。こゝよりも一丁ばかり歩みて、小暗き林の裏に小さき草屋あり。竹の扉の侘しきに、七日餘りの月の明くさし入りて、程なき庭の荒れたるさへ見ゆ。細き燈火の光、窓の紙を漏りてうら寂し。「こゝに待たせ給へ」とて内に入りぬ。苔むしたる古井の許に、立ちて見入るに、唐紙少し開

けたる間より、火影吹きあふちて、黒棚のきらめきたるもゆかしく覺ゆ。女出で來りて、「御訪らひの由申しつるに、「入らせ給へ。物隔てて語り參らせん」と、端の方へ膝行り出でたまふ。彼所に入らせ給へ」とて、前栽を廻りて、奥の方へと伴ひ行く。二間の客殿を人の入る許りあけて、低き屏風を立て、古き衾の端出でて、主は爰にありと見えたり。正太郎彼方に向ひて、はかなくて病にさへそませ給ふ由、己もいとほしき妻を亡ひて侍れば、同じ悲しみをも問ひかはし參らせんとて、推して詣で侍りぬと云ふ。主の女屏風少し引きあけて、「珍らしくもあひ見奉る物かな。辛き報いの程知らせ參らせん」と云ふに、驚きて見れば、古郷に殘せし磯良なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼凄まじく、我を指したる手の青く細りたる恐ろしさに、あなやと叫んで倒れ死す。時移りて生き出づ。眼を細く開き見るに家と見しは元ありし荒野の三昧堂にて、黒き佛のみぞ立たせ在す。里遠き犬の聲を力に、家に走り歸りて、彦六にしかじかの由を語りければ、「なでふ狐に欺かれしなるべし。心の臆れたる時は、必ず迷はし神の襲ふものぞ。足下の如く、虚弱き人のかく患へに沈みしは、神佛に祈りて、心を收めつべし。刀田の里に尊き陰陽師の在す。身禊して厭符をも戴き給へ」と、誘ひて、陰陽師の許にゆき、始めより詳に語りて、此の占を求む。陰陽師占べ考へて云ふ。「災すでに窮りて易からず。先に女の命を奪ひ、怨み猶盡きず。足下の命も旦夕にせまる。此の鬼世を去りぬるは七日前なれば、今

日より四十二日が間、戸を閉て、重き物齋すべし。我が禁めを守らば、九死を出でて全からんか。
一時を過るとも免るべからず」と、かたく教へて、筆をとり、正太郎が背より手足に及ぶまで、篆籀
のごとき文字を書き、猶朱符數多紙に書して與へ、「此の呪を戸毎に貼して、神佛を念ずべし。あやま
ちして身を亡ぶる事勿れ」と教ふるに、恐れみかつ歡びて家にかへり、朱符を門に貼し、窓に貼して
おもき物齋に籠りける。其の夜三更の頃、おそろしきこゑして「あな惡や。此所に尊き符文を設けつ
るよ」とつぶやきて、復び聲なし。恐ろしさの餘りに、長き夜を喞つ。程なく夜明けぬるに、生き出
でて、急ぎ彦六がかの壁を敲きて、夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おの
れも其の夜は寢ねずして、三更の頃を待ちくれける。松ふく風物を僵すが如く、雨さへ降りて常なら
ぬ夜のさまに、壁を隔てて聲をかけあひ、既に四更に到る。下屋の窓の紙に、さと赤き光さして「あ
な惡や。こゝにも貼しつるよ」と云ふ聲、深き夜にはいとゞ凄まじく、髪も生毛も悉く聳立ちて、暫時
は死に入りたり。明くれば夜の樣を語り、暮るれば明くるを慕ひて、此の月日頃千歳を過ぐるよりも
久し。かの鬼も夜毎に家を繞り、或は屋の棟に叫びて、忿れる聲夜增しに凄まじ。かくして四十二日
と云ふ其の夜に到りぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に愼みて、稍五更の天にも白々と明け渡りぬ。長
き夢のさめたる如く、軈て彦六を呼ぶに、壁に倚りて「いかに」と答ふ。「重き物齋も既に滿てぬ。絶

えて兄長の面を見ず、懷かしさに、かつ此の月頃の憂さ怖ろしさを心の限り云ひ和まん　眠り覺し給へ。我も外の方に出でん。」と云ふ。彦六用意なき男なれば、「今は何かあらん。いざ此方へ渡り給へ。」と戸を明くる事半ばならず、隣の軒にあなやと叫ぶ聲耳を貫きて、思はず尻居に坐す。こは正太郎が身の上にこそと、斧引提げて大路に出づれば、明けたると云ひし夜はいまだ暗く、月は中天ながら、影朧々として風冷やかに、扨正太郎が戸を明け放して、其の人は見えず。内にや逃げ入りつらんと走り入りて見れども、何處に竄るべき住居にもあらねば、大路にや倒れけんと、求むれども、其の邊には物もなし。いかになりつるやと、或は異しみ、或は恐る〳〵ともし火を挑げて、こゝかしこを見廻るに、明けたる戸腋の壁に、腥々しき血灌ぎ流れて、地に傳ふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端に物あり。燈火を捧げて照らし見るに、男の髪の髻ばかり掛りて、外には露ばかりの物もなし。淺ましくも怖ろしさは、筆に盡すべうもあらずなん。夜も明けて近き野山を探しもとむれども、遂に其の跡さへなくてやみぬ。此の事井澤が家へも云ひ送りぬれば、涙ながらに香央にも告げしらせぬ。されば陰陽師が占の著き、御釜の凶祥もはた違はざりけるぞ、いとも尊かりけると語り傳へけり。

雨月物語　巻之四

蛇性の婬

何時の時代なりけん、紀の国三輪が崎に、大宅の竹助と云ふ人ありけり。此の人海の幸ありて、海郎ども数多養ひ、鰭の広物、狭物を尽して漁り、家豊かに暮しける。男子二人、女子一人をもてり。太郎は質朴にて良く生産を治む。二郎の女子は大和の人の娶に迎へられて、彼處にゆく。三郎の豊雄なる者あり。生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。父是れを憂へつゝ思ふは、家財を分ちたりとも、即て人の物と為さん。さりとて他の家を嗣がしめんも、将うたてき事聞くらんが病しき。只偽に生したてて、博士にもなれかし、法師にもなれかし、命の極は太郎が羈物にてあらせんとて、強ひて掟をもせざりけり。此の豊雄、新宮の神奴安部弓麿を師として行き通ひける。九月下旬、今日は殊に余波なく和ぎたる海の、暴に東南の雲を生して、小雨そぼふり来る。師が許にて傘借りて帰るに、飛鳥の神秀倉見やらるゝ辺より、雨も漸頻りなれば、其所なる海郎が屋に立ち寄る。主の老嫗ひ出でて、こは大人の弟子の君にてます。かく賤しき所に入らせ給ふぞいと

畏まりたる事。是れ敷きて奉らん」とて、圓座の汙げなるを清めて參らす。「霎時息むる程は、何か厭ふべき。な慌忙しくせそ」とて休らひぬ。外の方に麗はしき聲して、「此の軒暫し惠ませ給へ」と云ひつゝ入り來るを、奇しと見るに、年は二十に足らぬ女の、顔容髪の搆りいと艶ひやかに、遠山摺の色よき衣着て、了鬟の十四五許りの淸げなるに、包みし物持たせ、しとゞに濡れて侘しげなるが、豐雄を見て、面さと打赤めて、恥かしげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて、且思ふは、此の邊にかうよろしき人の住むらんを、今まで聞えぬ事はあらじを、此は都人の三山詣せし次に、海愛らしくこゝに遊ぶらん。さりとて男だつ者も連れざるぞいとはしたなる事かなと思ひつゝ、少し身退きて、「こゝに入らせ給へ、雨もやがてぞ休みなん」と云ふ。女、「少時許させ給へ。」とて、程なき住居なれば、つい竝ぶやうに居るを見るに、近優りして、此の世の人とも思はれぬ許り美しきに、心も空にかへる思ひして、女に向ひ、「貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし給ふらん。峯の溫泉にや出で立ち給ふらん。かう凄まじき荒磯を、何の見所ありて狩り暮し給ふ。こゝなん古の人の、

くるしくもふりくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに

と詠めるは、まこと今日の哀れなりける。此の家賤しけれど、おのれが親の目かくる男なり。心ゆりて雨休み給へ。そも何地旅の御宿りとはし給ふ。御見送せんも却りて無禮なれば、此の傘もて出で給

」と云ふ。女「いと喜しき御心を聞え給ふ。其の御思ひに乾して參りなん。都の者にてもあらず、此の近き所に年來住みこし侍るが、今日なん良き日とて那智に詣で侍るを、暴なる雨の恐ろしさに、宿らせ給ふとも知らで、無礙なくも立寄りて侍る。爰より遠からねば、此の小休に出で侍らん」と云ふを、「強ひて此の傘もて行き給へ。何の便りにも求めなん。雨は更に休みたりともなきを、扨御住居は何方ぞ。是れより使奉らん」と云へば「新宮の邊にて縣の眞女兒が家はと尋ね給はれ。日も暮れなん。御恵みの程を指戴きて歸りなん」とて、傘とりて出づるを見送りつゝも、主が簑笠かりて家に歸りぬれど、猶俤の露忘れ難く、暫時睡む曉の夢に、かの眞女兒が家に尋ねいきて見れば、門も家もいと大きに造り爲し、蔀下し、簾垂れこめて、ゆかしげに住みなしたり。眞女兒出迎へて「御情忘れ難く待ち戀ひ侍る。此方に入らせ給へ」とて奥の方に誘ひ、酒菓子種々と管待しつゝ、喜しき醉心地に、遂に枕を倶にして語ると思へば、夜明けて夢さめぬ。現ならましかばと思ふ心の慌しきに、朝食も打忘れて浮れ出でぬ。新宮の郷に來て、縣の眞女兒が家はと尋ぬるに、更に知りたる人なし。午時傾くまで尋ね勞ひたるに、かの丫鬟東の方よりあゆみ來る。豊雄見るより大いに喜び、「娘子の家は何處ぞ。傘求むとて尋ね來る」と云ふ。丫鬟打笑みて、「よくも來ませり。此方に歩み給へ」とて、前に立ちてゆく〳〵、幾程もなく「こゝぞ」と聞ゆる所を見るに、門高く造り爲し、家も大きなり。蔀

下し簾たれこめしまで、夢の裏に見しと露違はぬを、奇しとおもふ〱門に入る。丫鬟走り入りて、「傘の主詣で給ふを誘ひ奉る」と云へば、「何方にますぞ。こち迎へませ」と云ひつゝ立ち出づるは眞女兒なり。豐雄「こゝに安部の大人と申すは、年來物學ぶ師にてます。彼所に詣づる便りに、傘とりて歸るとて、推して參りぬ。御住居見おきて侍れば、又こそ詣で來ん」と云ふを、眞女兒強ひてとゞめて「まろや。努出し奉るな」と云へば、丫鬟立ち塞がりて「傘強ひて惠ませ給ふならずや。其が酬いに強ひて留め參らす」とて、腰を押して南面の所に迎へける。板敷の間に牀疊を設けて、几帳御厨子の飾り、壁代の繪なども、皆古代の良き物にて、倫の人の住居ならず。眞女兒立ち出でて「故ありて人亡き家とはなりぬれば、實やかなる御饗もえし奉らず。只薄酒一杯進め奉らん」とて高坏平坏の清らなるに、海の物山の物盛り並べて、瓶子土器擎げて「まろや酌參る。」豐雄又夢心してさむるやと思へど、正に現なるを却りて奇しみゐたる。客も主も共に醉心地なる時、眞女兒杯をあげて豐雄にむかひ、花精妙しき櫻が枝の水に映ろひ爲す面に、春吹く風をあやなし、梢たちぐゝ鶯の艶ひある聲して云ひ出づるは「面なき事のいはでやみなんも、何れの神になき名負すらんかし。努徒なる言にな聞き給ひそ。故は都の生まれなるが、父にも母にも早う離れ參らせて、乳母の許に成長りしを、此の國の受領の下司縣の何某に迎へられて伴ひ下りしは、早く三年になりぬ。夫は任はてぬ。この

春夫の病に死し給ひしかば、便りなき身とはなり侍る。都の乳母も尼になりて、行方なき修行に出でしと聞けば、彼方も亦しらぬ国とはなりぬるを憐み給へ。昨日の雨のやどりの御恵みに、信ある御方にこそと思ふ物から、今より後の齢をもて、御宮仕へし奉らばやと願ふを、汚き物に捨て給はずば、此の一杯に千年の契りを始めなん」と云ふ。豊雄素よりかゝることをこそと、乱心なる思妻なれば、塒の鳥の飛びたつ許りには思へど、己が世ならぬ身を顧みれば、親兄弟の許しなき事をと、且喜しみ、且恐れみて、頓に答ふべき詞なきを、真女児わびしがりて、「女の浅き心より鳴呼なる事をいひ出でて、帰るべき道なきこそ面なけれ。かう浅ましき身を海にも没らで、人の御心を煩はし奉るは、罪深きこと。今の詞は徒ならねども、只酔心地の狂言に思しとりて、爰の海にすて給へかし」と云ふ。豊雄、「はじめより都人の貴なる御方とは見奉るこそ賢かりき。鯨よる濱に生ひたちし身の、かく喜しきことといつか聞ゆべき。即て御答へもせぬは、親兄に仕ふる身の、おのが物とては爪髪の外なし。何を録に迎へ參らせん便りもなければ、身の徳なきを悔ゆるばかりなり。何事をも思し耐へ給はば、いかにもいかにも後見し奉らん。孔子さへ倒るゝ恋の山には、孝をも身をも忘れて」と云へば、「いと喜しき御心を聞きまゐらする上は、貧しくとも時々こゝに住せ給へ。爰に前の夫の二つなき宝に愛で給ふ帯あり。これ常に帯かせ給へ」とて与ふるを見れば、金銀を飾りたる太刀の、怪しきまで鍛うたる古

代の物なりける。物の始めに穢れたらんは祥あしければとて、とりて納む。「今夜はこゝに明させ給へ。」とて、強に止むれど、「まだ赦しなき旅寝は親の罪し給はん。明の夜よく偽りて詣でなん。」とて出でぬ。其の夜も寝ねがてに明けゆく。太郎は網子整ふるとて晨て起き出で、豊雄が閨房の戸の間をふと見入れたるに、消え残りたる燈火の影に輝々しき太刀を枕に置きて臥したり。怪し、何地より求めぬらんと覚束なくて、戸を荒らかに明くる音に目さめぬ。太郎があるを見て、「召し給ふか。」と云へば、「輝々しき物を枕に置きしは何ぞ。價貴き物は海人の家に補ひなからず。父の見給はば、如何に罪し給はん」と云ふ。豊雄「財を費して買ひたるにもあらず。昨日人の得させしをこゝに置きしなり。」太郎「いかでさる寳をくるゝ人此の辺にあるべき。あな煩はしの漢語書きたる物を買ひたむるさへ、世の費えなりと思へど、父の黙りて坐すれば、今までも言はでありつ。其の太刀帯びて大宮の祭を練るやらん。如何に物に狂ふぞ。」といふ声の高きに、父聞きつけて、「徒者が何事をか仕出でつる。爰に將て来よ、太郎。」と呼ぶに、「何地にて求めぬらん、軍將等の佩き給ふべき輝々しき物を買ひたるは好からぬ事。御目前に召して問ひ明らめ給へ。おのれは網子共の怠るらん。」と云ひ捨てて出でぬ。母、豊雄を召して、「さる物何の料に買ひつるぞ。米も銭も太郎が物なり。吾主が物とて何をか持ちたる。日来は爲すまゝに置きつるを、かくて太郎に悪まれなば、天地の中に何國に住ふらん。賢き事をも學び

たる者か、など是れ君の事わいだめぬぞ」と云ふ。豐雄「質に買ひたる物にもあらず、さる由縁有りて人の得させしを見の見咎めてかく宣ふなり」父「何の譽ありて、さる寶をば人のくれたるぞ。更に覺束なき事、只今所縁を語り出でよ」と罵る。豐雄「此の事只今は面俯なり。人傳に申し出で侍らん」と云へば、「親兄にも云はぬ事を誰にか云ふぞ」と聲荒らかなるを太郎の嫁の刀自傍にありて、「此の事愚かなりとも聞まゐらせ侍らん、入らせ給へ」と宥むるに、ついたちて入りぬ。豐雄刀自に稟ひて、「兄の見咎め給はずとも、密かに話らひてんと思ひ設けつるに、速く責まるゝ事よ、かう／＼の人の女のはかなくてあるが、後見してよとて賜へるなり。己が世しらぬ身の、御許さへなき事は、重き勘當なるべければ、今更悔ゆる事なるを、姉君よく憐み給へ」と云ふ。刀自うち笑みて、「男子の獨寢し給ふが、兼ていとほしかりつるに、いとよき事ぞ。愚かなりともよく云ひとり侍らん」とて、其の夜太郎に、「かう／＼の事なるは、幸ひに思さずや。父君の前をもよきに云ひ做したまへ」と云ふ。太郎眉を顰めて、「怪しし。此の國の守の下司に、縣の何某と云ふ人を聞かず。我が家保正なればさる人の亡くなり給ひしを聞えぬ事あらじを、まづ太刀こゝにとりて來よ」と云ふに、刀自やがて携へ來るを、よく／＼見終りて、長嘘をつきつゝも云ふは、「こゝに恐ろしき事あり。近來都の大臣殿の御願の事滿たしめ給ひて、權現におほくの寶を奉り給ふ。さるに此の神寶ども、御寶藏の中にて頓に失せしとて、大宮司よ

り國の守に訴へ出で給ふ。守この賊を探り捕ふために、助の君文室廣之大宮司の館に來て、今專らに此の事をはかり給ふ由を聞きぬ。「此の太刀いか樣にも下司などの帶くべき物にあらず。猶父に見せ奉らん」とて、御前に持ち行きて、「かう／＼の恐ろしき事のあるは、如何計らひ申さん」と云ふ。父面を青くして、「こは淺ましき事の出できつるかな。日來は一毛をも拔かざるが、何の報いにてかう良からぬ心や出できぬらん。他より露はれなば、此の家をも絶されん。祖の爲子孫の爲には、不孝の子一人惜しからじ。明は訴へ出でよ」と云ふ。太郎夜の明くるを待ちて、大宮司の館に來り、斯々の由を申し出でて、此の太刀を見せ奉るに、大宮司驚きて、「是れなん大臣殿の獻り物なり」と云ふに、助聞き給ひて、「猶失せし物問ひ明らめん。召捕れ」とて武士ら十人許り、太郎を前にたてて行く。豐雄かかる事をも知らで書見るたるを、武士ら押掛りて捕ふ。「こは何の罪ぞ」と云ふをも聞き入れず縛めぬ。父母太郎夫婦も今は淺ましと歎き惑ふ許りなり。「公廳より召したまふ、疾く步め」とて中に取込めて、館に追ひもてゆく。助、豐雄を睨まへて、「儞神寶を盜みとりしは、例なき國津罪なり。猶種々の財は何地に隱したる。明らかに白せ」と云ふ。豐雄漸此の事を覺り、涙を流して、「己更に盜みを爲さず。かう／＼の事にて縣の何某の女が、前の夫の帶びたるなりとて得させしなり。今にもかの女召して、己が罪なき事を覺らせ給へ」。助、甚く怒りて、「我が下司に縣の姓を名乘る者あらん事なし

かく偽るは刑益大なり」。豊雄、「かく捕はれて、いつまで偽るべき。あはれ、かの女召して問はせ給へ」。助、武士らに向ひて、「県の真女児が家は何処なるぞ。渠を押して捕へ来れ」と云ふ。武士ら畏まりて、又豊雄を押立てて、彼所に行きて見るに、厳めしく造り傷して、門の柱も朽ち腐り、軒の瓦も大方は砕け落ちて、草しのぶ生ひ下り、人住むとは見えず。豊雄是れを見て、只呆れに呆れゐたる。武士らかけ廻りて、近きとなりを召し集む。木伐る老、米搗く男ら、恐れ惑ひて跪まる。武士他らに向ひて、「此の家何者が住みしぞ。県の何某が女のここにあるは誠か」と云ふに、鍛冶の翁這ひ出でて、「さる人の名はかけても承らず。此の家三年許り前までは、村主の何某と云ふ人の賑はしくて住み侍るが、筑紫に商物積みて下りし。其の船行方なくなりて後は、家に残る人も散々になりぬるより、絶えて人の住む事なきを、此の男の昨日ここに入りて、漸して帰りしを奇しとて、此の漆師の老が申されし」と云ふに、「さもあれ、よく見極めて殿に申さん」とて門押し開きて入る。家は外よりも荒れまさりけり。猶奥の方に進みゆく。前栽広く造り傷したり。池は水あせて、水草も皆枯れ、野ら藪生ひ傾きたる中に、大きなる松の吹き倒れたるぞ物凄し。客殿の格子戸を開けば、腥き風のさと吹き送りて来るに、恐れ惑ひて、人々後に退く。豊雄只声を呑みて歎きゐる。武士の中に巨勢の熊檮なる者胆太き男にて、「人々我が後に従きて来れ」とて、板敷を荒らかに踏みて進みゆく。塵は一寸許り積りたり。

鏡の蓋ひの散らしたる中に、ふるき帳を立てて花の如くなる女一人ぞ坐る。熊檮女に向ひて、國の守の召しつるぞ。急ぎ參れ」と云へど答へもせでゐるを、近く進みて捕ふとせしに、忽ち地も裂くる許りの霹靂鳴り響くに、許多の人迯ぐる間もなくてそこに倒る。然て見るに、女は何地行きけん見えずなりにけり。此の床の上に輝々しき物あり。人々恐る〳〵いきて見るに、狛錦、呉の綾、倭文、縑、楯、槍、靱、鍬の類、これ失せつる神寶なりき。武士らこれを取り持たせて、怪しかりける事共を詳に訴ふ。助も、大宮司も妖怪の爲せる事を悟りて、豐雄を責むる事を緩くす。されど當罪免れず。守の館に渡されて牢裏に繫がる。大宅の父子多くの物を贖して、罪を贖ふによりて、百日が程に赦さるゝ事を得たり。「かくて世にたち接はらんも面俯なり。姉の大和に住すを訪らひて、暫時彼所に住まん」と云ふ。「げにかう憂き目見つる後は、重き病をも得るものなり。ゆきて月頃を過せ」とて人を添へて出でたたす。二郎の姉が家は、石榴市と云ふ所に、田邊金忠と云ふ商人なりける。豐雄が訪らひ來るを喜び、且月頃の事共をいとほしがりて、いつ〳〵までも爰に住めとて、懇に勞りけり。年變りて二月になりぬ。此の石榴市と云ふは、泊瀬の寺近き所なりき。佛の御中には泊瀬なん灼然なる事を、唐土までも聞えたるとて、都より邊鄙より詣づる人の、春は殊に多かりけり。詣づる人は必ずこゝに宿れば、軒を並べて旅人を止めける。田邊が家は御明燈心の類を商ひぬれば、所せく人の入りたちけ

る中に、都の人の忍びの詣でと見えて、いと宜しき女一人、丫鬟一人薫物求むとて爰に立ち寄る。この丫鬟豊雄を見て、「吾が君の爰に在すよ」と云ふに、驚きて見れば、かの眞女兒まろやなり。あな恐ろしとて内に隠る。金忠夫婦「こは何ぞ」と云へば、「かの鬼愛に逐ひ來る。あれに近寄り給ふな」と隠れ惑ふを、人々「そは何處に」と立ち騒ぐ。眞女兒入り來りて、「人々な怪しみ給ひそ。吾が夫の君な恐れ給ひそ。己が心より罪に陥し奉る事の悲しさに、御有家求めて事の由縁をも語り、御心放せさせ奉らんとて、御住家尋ね參らせしに、效ありてあひ見奉る事の喜しさよ。主の君よく聞別けて給へ。我もし怪しき物ならば此の人繁き中へ、かう長閑なる昼を如何にせん。衣に縫目あり、日に向へば影あり。此の正しき理を思しわけて、御疑ひを解かせ給へ」。豊雄漸人心地して、「儞正しく人ならぬは、我捕はれて、武士等と共にいきて見れば、昨日にも似ず淺ましく荒れ果てて、眞に鬼の住むべき宿に一人居るを、人々捕へんとすれば、忽ち青天霹靂を震うて、跡なく掻消え失せぬるを、目前見つるに、又逐ひ來て何をか爲す。速かに去れ」と云ふ。眞女兒涙を流して、「眞にさこそ思さんは理なれど、妾が言をも少時聞かせ給へ。君公廳に召されたまふと聞きしより、素より憐れをかけつる隣の翁を語らひ、頓に野らなる宿の樣をこしらへし。我を捕へんとする時に鳴神響かせしは、まろやが計較りつるなり。其の後船求めて難波の方に遁れしかど、御消息知らまほしく、この御佛に頼みを掛けつ

ぬに、二本の杉の標ありて、嬉しき瀬になかれ逢ふ事は、偏に大悲の御徳蒙り奉りしぞかし。種々の官宝は何として女の盗み出すべき。前の夫の良からぬ心にてこそあれ。よく／＼思しわけて、思ふ心の露ばかりをもうけさせ給へ」とて、さめざめと泣く。豊雄或は疑ひ、或は憐みて、更に言ふべき詞もなし。金忠夫婦、真女子が理の明らかなるに、此の女しきふるまひを見て、努疑ふ心もなく、「豊雄の物語にては、世に恐ろしき事よと思ひしに、さる例あるべき世にもあらずかし。遙々と尋ね来り給ふ心根のいとほしきに、豊雄肯はずとも、我々とゞめ参らせん」とて、一間なる所に迎へける。こゝに一日二日を過すまゝに、金忠夫婦が心をとりて、ひたすら歎きたのみける。其の志の篤きに愛でて、豊雄をすゝめて、つひに婚儀をとり結ぶ。豊雄も日々に心とけて、素より容姿のよろしきを愛で喜び、千年をかけて契るには、葛城や高間の山に夜々毎にたつ雲も、初瀬の寺の暁の鐘に雲收まりて、只あひあふ事の遅きをなん恨みける。三月にもなりぬ。金忠、豊雄夫婦に向ひて、「都わたりには似るべくもあらねど、流石に紀路には勝りぬらんかし。名細しの吉野は春はいと良き所なり。三船の山、菜摘川、常に見るとも飽かぬを、此の頃は如何に面白からん。いざ給へ、出でたたん」と云ふ。真女子うち笑みて、「よき人のよしと見給ひし所は、都の人も見ぬを恨みに聞え侍るを、我が身稚きより、人多き所、或は道の長手を歩みては、必ず気上りてくるしき病あれば、従駕にえ出でたち侍

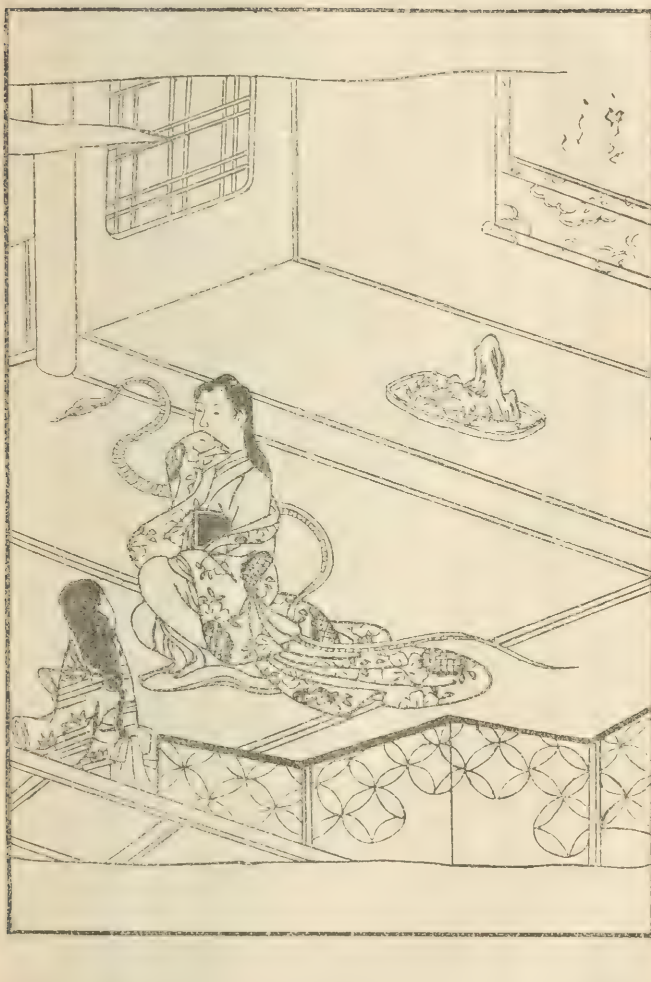
も知ぞいと覺れたりけれ。山上常必ず待ちこの詣るといふを、一とせは恋ひなんこそ病も苦しからめ、申こそもたらね、いかにも〳〵、上に請まゐらせし。習の翁はたゞ豐雄のいとゞ都の心許なかりつらん」とて、上に請の打たつに、豐雄も二かうたのもしく宣ふを、道に賢るゝとも宥でかはと聞遍るに、不慮なうも出でたちぬ。人を花ゆすて出でぬれど、其女ぞが難になるには似るべうもあらずぞ見えける。何某の院には、年來よく聞え交しければ、是に宿る。主の法師迎へて、此の春は遅く詣で給ふ事よ。花はなかば散り過ぎて、鶯の聲も老いぬれど、猶よき方に案内し侍らんとて、夕食いと清くして食はす。明けゆく空いたう霞みたるも、晴れゆく儘に見渡せば、此の院は高き所にて、こゝかしこの僧坊共あらはに見下さるゝ。山の鳥どもそこはかとなく囀りあひて、木草の花色々に咲きまじりたる。同じ山里ながら目さむる心地ぞせらる。「初詣でには瀧ある方こそ見所は多かめれ」とて、彼方に案内の人を乞ひて出でたつ。谷を廻りて下りゆく。古、行幸の宮ありし所は、石ばしる瀧のみなぎりて、小さき鮎どもの水に逆ふなど、目もあやに面白し。檜破子うち散らして喰ひつゝあそぶ。岩が根づたひに来る人あり。髪は績麻をわがねたる如くなれど、手足いと健やかなる翁なり。此の瀧の下にあゆみ来る。人々を見てあやしげにまもりたるに、眞女兒もまろやも、此の人に背きて見ぬやうにもてなすを、翁は二人をよくまもりて、「あやし、此の邪神、など人をまどはす。翁が目前をかくてもあるや」と、呟くを

聞きし、此の人忽ち躍りたちて、瀧に飛び入ると見しが、水は大虚に湧きあがりて見えずなるほどに、雲摺墨をうち零したる如く、雨篠を亂して降り來る。翁人々の慌忙て惑ふをまつろへて、人里にくだる。賤しき軒に跼りて、生ける心地もせぬを、翁豊雄に向ひ、「熟そこの面を見るに、此の隱神のために惱まされ給ふが、吾救はずば遂に命をも失ひつべし。後よく愼み給へ」と云ふ。豊雄地に額つきて、此の事の始めより語り出でて、「猶命得させ給へ」とて恐れみ敬ひて願ふ。翁「さればこそ、此の邪神は年經たる蛇なり。彼が性は淫りたる物にて、牛と孳みては麟を生み、馬とあひては龍馬を生むと云へり。此の魅はせつるも、將そこの秀麗に奸けたると見えたり。かくまで執ねきを、よく愼み給はずば、恐らくは命を失ひ給ふべし」と云ふに、人々愈恐れ惑ひつゝ、翁を崇まへて「遠津神にこそ」と拜みあへり。翁うち笑みて「おのれは神にもあらず。大倭の神社に仕へ奉る當麻酒人と云ふ翁なり。道の程見たてて參らせん。いざ給へ」とて出でたてば、人々後につきて歸り來る。明の日大倭の郷にいきて、翁が惠みを謝し、且美濃絹三疋、筑紫綿二屯を遺り來り、「猶此の妖災の身清し給へ」と、愼みてねがふ。翁これを納めて、祝部らにわかちあたへ、自らは一疋一屯をもとゞめずして、豊雄に向ひ、「畜が汝が秀麗に奸けて、汝を纏ふ。汝又畜が假の形に魅はされて、丈夫心なし。今より雄氣して、よく心を靜まりまさば、これ等の邪神を逐はんに、翁が力をもかり給はじ。努々心を靜まりま

せしとて、慣やかに掌しぬ。豊雄夢の醒めたる心地に、禮言盡きずして歸り來る。金忠に向ひて「此の年月畜に魅はされしは、己が心の正しからぬなりし。親兄の孝をも爲さで、君が家の纏しならんは由縁なし。御惠いと忝けれど、又も參りなん」とて紀の國に歸りける。父母太郎夫婦此の恐ろしかりつる事を聞きて、いよいよ豊雄が過ちならぬを憐み、且は妖怪の執ねきを恐れける。かくて「鰥にてあらするにこそ、妻迎へさせん」とてはかりける。芝の里に芝の莊司なるものあり。女子一人もてりしを大内の采女にまゐらせてありしが、此度いとま申し給はり、この豊雄を聟がねにとて、媒氏をもて大宅が許へいひ納る。良き事なりとて、卽て因を結びける。かくて都へも迎への人を登せしかば、此の采女富子なる者よろこびて歸り來る。年來の大宮仕に馴れ來しかば、萬の行儀よりして姿なども花やぎ勝りけり。豊雄こゝに迎へられて見るに、此の富子が容姿いとよく、萬心に足らひぬるに、かの蛇が懸想せし事も、おろおろ思ひ出づるなるべし。初めの夜は事なければ書かず。二日の夜、よきほどの醉心地にて、「年來の大内住に、邊鄙の人は將頼くまさん。かの御わたりにては、何の中將、宰相の君などいふに添ひぶし給ふらん。今更憎くこそ覺ゆれ」など戲るゝに、富子卽て面をあげて、「古き契りを忘れ給ひて、かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ、此方よりまして惡くあれ」と云ふは、姿こそかはれ、正しく眞女兒が聲なり。聞くにあさましう、身の毛もたちて恐ろしく、只あきれ惑ふを、

な打笑みて、「吾が君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ、山に盟ひし事を速く忘れ給ふとも、さるべき縁のあればゝ、又もあひ見奉るものを、他人のいふ事をまことしく思して、強ちに遠ざけ給はんには、恨み報いなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎくださん。あたら御身を徒らに爲し果てたまひそ」と云ふに、只戰きに戰かれて、今やとらるべき心地に死に入りける。屏風の後より「吾が君何にむつかり給ふ。かうめでたき御契りなるは」とて、出づるはまろやなり。見るに又膽を飛ばし、眼を閉て、伏向に臥す。和めつ驚しつ、轉る／＼物打云へど、只死に入りたる樣にて夜明けぬ。かくて閨房を遁れ出て、莊司に向ひ、「かう／＼の恐ろしき事あなり。これ如何にして放けなん、よく計り給へ」と云ふも、背にや聞くらんと、聲を小やかにして語る。莊司も妻も面を蒼くして、歎き惑ひ、「こは如何にすべき。こゝに都の鞍馬寺の僧の、年々熊野に詣づるが、昨日より此の向岳の蘭若に宿りたり。いとも驗なる法師にて、凡て疫病、妖災、蝗などをもよく祈る由にて、此の郷の人は貴みあへり。此の法師請へて來ん」とて慌忙しく呼びつけるに、漸して來りぬ。しかじかの由を語れば、此の法師鼻を高くして、「これ等の蠱物らを捉へんは、何の難き事にもあらじ。必ず靜まり坐せ。」と安げに云ふに、人々心落ちゐぬ。法師まづ雄黄を求めて、藥の水を調じ、小瓶に湛へてかの閨房に向ふ。人々驚き隱るゝを、法師嘲み笑ひて、「老いたるも童も必ずそこに坐せ、此の蛇唯今捉り

て見せ奉らん」とて進みゆく。閨房の戸あくる遅しと、かの蛇頭を差出して、法師に向ふ。此の頭何許りの物ぞ。此の戸口に充ち／＼て、雪を積みたるよりも白く、輝々しく、眼は鏡の如く、角は枯木の如、三尺余りの口を開き、紅の舌を吐いて、唯一呑に呑むらん勢ひを為す。「あなや」と叫びて、手に据ゑし小瓶をもそこにうち捨てて、たつ足もなく、展転びはひ倒れて、辛うじて遁れ来り、人々に向ひて「あな恐ろし。祟ります御神にて在すものを、など法師等が祈り奉らん。此の手足なくば、猶命失ひてん」といふ／＼絶え入りぬ。人々扶け起すれど、すべて面も肌も黒く赤く染めなしたる如く、熱き事焚火に手をさすらんに等し。毒気にあたりたると見えて、後は只眼のみはたらきて、物云ひたげなれど、聲さへ為さでぞある。水灌ぎなどすれど、遂に死にける。これを見る人いよゝ魂も身に添はぬ思ひして、泣き惑ふ。豊雄少し心を収めて、「かく験なる法師だも祈り得ず、執ねく我を纏ふものから、天地の間にあらん限りは、探し得られなん。おのが命一つに、人々苦しむるは實ならず。今は人も語らはじ。安く思せ」とて閨房にゆくを、荘司の人々、「こは物に狂ひ給ふか」と云へど、更に聞かず顔に彼処にゆく。戸を静かに明くれば、物の騒がしき音もなくて、此の二人ぞ向ひたる。富子豊雄に向ひて、「君何の讐に我を捉へんとて、人を語らひ給ふ。此の後も仇をもて報い給はば、君が御身のみにあらじ。此の郷の人々をも総て苦しき目見せなん。只管吾が貞操を嬉しと思して、徒々





しき観念をおはしそことと、いと懇想して云ふぞうたてかりける。豊雄云ふは、「世の諺にも聞ける事あり。人かならず虎を害する心なけれども、虎反りて人を傷る意ありとや。你人ならぬ心より、我を纏うて幾度か辛き目を見するさへあるに、かりその言をだにも、此の恐ろしき報いをなさんと云ふは、いとむくつけきなり。されど慕ふ心ははた世の人にもまさりければ、こゝにおいて、人々の歎き給はんが痛はし、此の富子が命一つ助けよかし。さて我をいづくにも連れゆけ」と云へば、いと喜しげに点頭きをる。又立ち出でて庄司に向ひ、「かう浅ましきもの添ひてあれば、こゝにありて人々を苦しめ奉らんは、いと心なき事なり。只今暇給はらば、娘子の命も恙なく坐すべし」と云ふを、庄司更に肯けず、「我弓の本末をも知りながら、かく云ふかひなからんは、大宅の人々の思す心も恥かし。猶計較りなん。小松原の道成寺に、法海和尚とて、貴き祈りの師おはす。今は老いて室の外にも出でずと聞けど、我が為にはいかにも〳〵捨て給はじ」とて、馬にて急ぎ出でたちぬ。道遥なれば夜中ばかりに蘭若に到る。老和尚眠蔵をゐざり出でて、此の物語を聞きて、「そは浅ましくおぼすべし。今は老い朽ちて験あるべくも覚え侍らねど、君が家の災を黙してやあらん。まづおはせ。法師も頓て詣でなん」とて、芥子の香にしみたる袈裟とり出で、庄司に與へ、「渠をやすくすかし寄せて、これをもて頭に打被け、力を出して押し伏せ給へ。手弱くあらば恐らくは逃げ去らん。よく念じて善く為し給へ」と

と、宥やかに敎ふ。背山喜びつゝ、馬を飛ばして歸りぬ。雛鳥を密かに招きて、「其の事よくしてよ」に

よて袈裟を與ふ。雛鳥これを懷に隱して、閨房にゆき、庄司が女子はいとまたじぬ。いて給へ。出でた

まなんことを云ふ。いと嬉しげにてあるを、此の袈裟とり出でて、早く打掛け、力をきはめて押し伏せ

ぬれば、あら苦し、雛鳥とこやく情なきぞ。暫しここ放せよかし」と云へど、腕力に任せて押し伏せ

ぬ。法師靜かに何か歸りぬる。背山の人々に扶けられ。ここに到り給ひ、目のうちつぶ／＼と

含み入りつゝ、雛鳥を退けて、その袈裟をとりて見給へば、富子は聖なく伏したる上に、白き蛇の三尺

餘りなるを睨めて、動きだにせずぞある。老師衛これを捉へて、徒弟の捧げたる鐵鉢に納め給ふ。

猶念じ給へば、屏風の背より九寸ばかりの小蛇を出で來るを、是れをも捉りて鉢に封じ給ひ、かの袈裟を

もてよく閉ぢ給ひ、そのまゝに輿に乘らせ給へば、人々掌を合はせ、涙を流して敬ひ奉る。寺に歸り

給ひて、堂の前を深く掘らせて、鉢のまゝに埋めさせ、永劫が間、世に出づることを誡め給ふ。今

猶蛇が塚ありとかや。庄司が女子は遂に病にそみて空しくなりぬ。雛鳥は命恙なしとなん語り傳へ

ける。

雨月物語　卷之五

青頭巾

昔快庵禪師と云ふ大德の聖おはしましけり。總角より教外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲水に任せ給ふ。美濃國の龍泰寺に一夏を滿たしめ、此の秋は奧羽の方に住むとて、旅立ち給ふ。ゆき〳〵て下野國に入り給ふ。富田と云ふ里にて、日入り果てぬれば、大きなる家のにぎははしげなるに立ち寄りて、一宿を求め給ふに、田畑より歸る男等、黄昏にこの僧の立てるを見て、大きに怕れたる樣して、「山の鬼こそ來りたれ。人みな出でよ。」と呼び罵る。家の内にも騷ぎたち、女童は泣き叫び、展轉びて隈々に竄る。主山枴をとりて走り出で、外の方を見るに、年紀五旬に近き老僧の、頭に紺染の巾を被き、身に墨衣の破れたるを穿て、裹みたるものを背に負ひたるが、杖をもて差招き、「檀越なに事にてかばかり備へ給ふや。遍參の僧今夜許りの宿をかり奉らんとて、こゝに人を待ちしに、思ひきや、かく異しめられんとは。痩法師の強盜などすべきにもあらぬを、な怪しみ給ひそ。」と云ふ。莊主枴を捨てゝ、手を拍つて笑ひ、「渠等が愚かなる眼より、客僧を嚇し參らせぬ。一宿を供養して、罪を

饗ひたてまつらん」と譲まひて奥の方に迎へ、快く食をも進めて饗しけり。莊主語りて云ふ。「さきに下等が御僧を見て、鬼來りしと畏れしも、さる謂れの侍るなり。こゝに希有の物語の侍る。妖言ながら人にも傳へ給へかし。此の里の上の山に、一宇の蘭若の侍る。故は小山氏の菩提院にて、代々大德の住み給ふなり。今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、殊に篤學修行の聞えめでたく、此の國の人は香燭を運びて歸依し奉る。我が莊にも屢詣で給うて、いともうらなく仕へしが、去年の春にてありける、越の國へ灌頂の戒師に迎へられ給ひて、百日餘り逗まり給ふが、他國より十二三歳なる童兒を倶して歸り給ひ、起臥の助けとせらる。かの童兒が容の秀麗なるを深く愛でさせ給うて、年來の事共も、いつとなく怠り勝に見え給ふ。さるに茲年四月の頃、かの童兒假初の病に臥しけるが、日を經て重く惱みけるを、痛み悲しませ給うて、國府の典藥のおもだゞしきをまで迎へ給へども、其の驗もなく、終に空しくなりぬ。懷の璧を奪はれ、插頭の花を嵐に誘はれし思ひ、泣くに涙なく、叫ぶに聲なく、餘りに歎かせ給ふまゝに、火に燒き、土に葬る事をもせで、臉に臉をもたせ、手に手をとり組みて、日を經給ふが、終に心神亂れ、生きてありし日に違はず。戲れつゝも、其の肉の腐り爛るゝを吝しみて、肉を吸ひ骨を嘗めて、はた喫ひ盡しぬ。寺中の人々、院主こそ鬼になり給ひつれと、連忙しく逃げ去りぬる後は、夜な〳〵里に下りて人を驚殺し、或は墓を發きて、腥々しき屍を喫ふ有樣、

實に鬼と云ふ者は、昔物語には聞きもしつれど、現にかくなり給ふを見て侍れ。されど如何してこれを祓ひ得ん。只戸毎に藁を貼りて堅く閉してあれば、近曾は國中へも聞えて、人の往來さへなくなり侍るなり。さる故のありてこそ、客僧をも避けつるなれと語る。快庵この物語を聞かせ給うて、一世には不可思議の事もあるものかな。凡そ人と生まれて、佛菩薩の教への廣大なるをもしらず、愚かなる儘、慳しき儘に世を終る者は、其の愛慾邪念の業障に攬はれて、或は故の形を現はして恚りを報い、或は鬼となり蟒となりて祟りを爲す例、往古より今に至るまで算ふるに盡き難し。又人活きながらにして鬼に化するもあり。楚王の宮人は蛇となり、王含が母は夜叉となり、呉生が妻は蛾となる。又いにしへ、或る僧卑しき家に旅寢せしに、其の夜雨風烈しく、燈さへなき侘しさに、いも寢られぬを、夜更けて羊の鳴く聲の聞えけるが、頃刻して僧の眠りを窺ひて、頻りに嗅ぐものあり。僧異しと見て、枕に置きたる禪杖をもて、強く撃ちければ、大きに叫んでそこに倒る。この音に主の嫗なる者燈を照らし來るに見れば、若き女の打倒れてぞありける。嫗泣く泣く命を乞ふ。如何せん、捨てて其の家を出でしが、其の後又便りにつきて、其の里を過ぎしに、田中に人多く集ひて物を見る。僧も立ちよりて、何なるぞと尋ねしに、里人云ふ、鬼に化したる女を捉へて、今土に瘞むなりと語りしとなり。されどこれ等は皆女子にて、男たる者のかかる例を聞かず。凡そ女の性の慳しきには、さる淺ましき

鬼にも化するなり。又男子にも隋の煬帝の臣家に、麻叔謀といふもの、小兒の肉を嗜好みて潛かに民の小兒を偸み、これを蒸して喫ひしもあなれど、是れは淺ましき夷心にて、主の語り給ふとは異なり。さるにても彼の僧の鬼になりつるこそ、過去の因緣にてぞあらめ。そも平生の行德のかしこかりしは、佛に仕ふる事に志誠を盡しなれば、其の童兒を養はざらましかば、あはれよき法師なるべきものを、一たび愛慾の迷路に入りて、無明の業火の熾なるより、鬼と化したるも、偏に直く逞しき性の爲す所なるぞかし。心放せば妖魔となり、收むる則は佛果を得るとは、此の法師が例なりける。老衲若しこの鬼を教化して本源の心にかへらしめなば、今宵の饗の報いともなりなんかしと、貴き志を發し給ふ。莊主頭を疊に摺りて、御僧この事をなし給はゞ、此の國の人は淨土に生まれ出でたるが如しと、涙を流してよろこびけり。山里のやどり、貝鐘も聞えず、二十日餘りの月も出でて、古戸の間に洩りたるに、夜の深きをも知りて、いざ休ませ給へとて、おのれも臥戸に入りぬ。

山院人とゞまらねば、樓門は荊棘おひかゝり、經閣も空しく苔蒸しぬ。蜘網を結びて諸佛を繋ぎ、燕子の糞護摩の牀を埋み、方丈廊房すべて物すさまじく荒れ果てぬ。日の影申に傾く頃、快庵禪師寺に入りて錫を鳴らし給ひ、「遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へ。」と數多度呼べども、更に應へなし。眠藏より痩槁れたる僧の、漸々と歩み出で、咳びたる聲して、「御僧は何地へ通るとて、こゝに來るや。

此の寺はさる由緒ありて、かく荒れはてて、人も住まぬ野原となりしかば、一粒の齋糧もなく、一宿を借すべきはかりごともなし。速く里に出でよと云ふ。禪師云ふ。「これは美濃國を出でて、みちの奧へいぬる旅なるが、この麓の里を過ぐるに、山の靈、水の流れの面白さに、思はずもこゝに詣づ。日も斜なれば、里にくだらんも遙けし。ひたすら一宿をかし給へ。」主の僧云ふ。「かく野原なるところはよからぬ事もあなり。強ひて留めがたし。強ひて行けとにもあらず。僧の心に任せよ。」とて、復び物をも云はず。こなたよりも一言を問はで、主のかたはらに座を占むる。看る〳〵日は入り果てて、宵闇の夜のいと暗きに、燈を點けざれば、目前さへわかぬに、只澗水の音ぞ近くきこゆ。主の僧も又眠藏に入りて音なし。夜更けて月の夜にあらたまりぬ。影玲瓏としていたらぬ隈もなし。子ひとつとも思ふ頃、主の僧眠藏を出でて、あわたゞしく物を討ぬ。たづね得ずして大いに叫び、「禿驢いづくに隱れけん。爰もとにこそありつれ。」と、禪師が前を幾たび走り過ぐれども、更に禪師を見る事なし。堂の方に驅けりゆくかと見れば、庭を廻りて躍り狂ひ、遂に疲れ伏して起き來らず。夜明けて朝日のさし出でぬれば、酒の醒めたる如くにして、禪師がもとの所に在すを見て、只呆れたる形にものさへ云はで、柱にもたれ、長嘘をつきて默しゐたりける。禪師近く進みよりて、「院主何をか歎き給ふ。もし飢ゑ給ふとならば、野僧が肉に腹をみたしめ給へ。」主の僧云ふ。「師は夜もすがらそこに居させ給ふや。」

禪師云ふ。「こゝにありて眠る事なし。」主の僧云ふ。「我あさましくも人の肉を好めども、いまだ佛身の肉味を知らず。師は眞に佛なり。鬼畜のくらき眼をもて、活佛の來迎を見んとするとも見るべからぬ理なるかな。あなたふと。」と頭を低れて默しける。禪師云ふ。「里人の語るを聞けば、汝一旦の愛慾に心神亂れしより、忽ち鬼畜に墮罪したるは、淺ましとも、哀しとも、ためしさへ稀なる惡因なり。夜々里に出て人を害する故に、近き里人は安き心なし。我これを聞きて捨つるに忍びず、わざ／＼來りて教化し、本源の心に復らしめんとなるを、汝我が教へを聞くや否や。」主の僧いふ。「師はまことに佛なり。かく淺ましき惡業を頓に忘るべき理を教へ給へ。」禪師云ふ。「汝聞くとならば爰に來れ。」とて、簀子の前の平らなる石の上に坐せしめて、みづから被き給ふ紺染の巾を脱ぎて、僧が頭に被かしめ、證道の歌の二句を授け給ふ。

江月照松風吹　永夜清宵何所爲

「汝爰を去らずして、徐かに此の句の意を求むべし。意解けぬる則は、自ら本來の佛心に會ふなるぞ。」と、懇に教へて山を下り給ふ。此の後は里人重き災を免れしと雖も、猶僧が生死をしらざれば、疑ひ恐れて人々山に登る事を戒めけり。一年速くたちて、むかふ年の冬十月の初旬、快庵大德奥羽の歸るさに、又こゝを過ぎ給ふが、かの一宿の主が莊にたち寄りて、僧が消息を尋ね給ふ。莊主よ

あこそ迎へて、御前の大德によりて、鬼再び山を下らねば、人皆淨土に生まれ出でたるが如し。されど山にゆく事はおそろしがりて、一人として登るものなし。さるから消息をしり侍らねど、など今まで活きては侍らじ。今夜の御泊にかの菩提を弔ひ給へ。誰も隨緣し奉らん」と云ふ。禪師云ふ。「他善果に基きて遷化せしとならば、道に先達の師とも云ふべし。又活きてある時は、わがために一個の徒弟なり。何れ消息を見ずばあらじ」とて、復び山に登り給ふに、いかさまにも人のゆきき絕えたると見えて、去年踏みわけし道ぞとも思はれず。寺に入りて見れば、荻尾花のたけ人よりも高く生ひ茂り、露は時雨めきて降りこぼれたるに、三つの徑さへ解らざる中に、堂閣の戸右左に頽れ、方丈庫裏に緣りたる廊も、朽目に雨をふくみて苔むしぬ。さて彼の僧を坐らしめたる簀子のほとりを求むるに、影のやうなる人の、僧俗ともわかぬまでに、髭髮も亂れしに、葎むすぼほれ、尾花おしなみたる中に、蚊の鳴くばかりのほそき音して、物とも聞えぬやうに、まれまれ唱ふるを聞けば、

江月照松風吹　　永夜淸宵何所爲

禪師見給ひて、やがて禪杖を拿り直し、「作麽生何所爲ぞ」と一喝して他が頭を撃ち給へば、忽ち氷の朝日にあふが如く消え失せて、かの靑頭巾と骨のみぞ草葉に留まりける。現にも久しき念の、こゝに消じ盡きたるにやあらん。古き理あるにこそ。されば禪師の大德、雲の裏海の外にも聞えて、初祖

の肉未だ乾かずとて稼敬しけるとなり。かくて里人集まりて、寺内を清め、修理を修し、禅師を推し尊みて、寺に住ませしめけるより、故の密宗を更めて、曹洞の霊場を開き給ふ。今猶御寺はたふとく栄えてありけるとなり。

貧福論

陸奥国蒲生氏郷の家に、岡左内といふ武士あり。禄おもく、誉たかく、丈夫の名を関の東に震ふ。此の士いと偏固なる事あり。富貴を願ふ心常の武扁に似ず。倹約を宗として、家の掟をせしほどに、年を畳みて富昌えけり。かつ軍を調練す間には、茶味翫香を娯しまず、庁上なる所に許多の金を布き班べて、心を和むる事、世の人の月花に遊ぶに勝れり。人みな左内が行跡を惟しみて、吝嗇野情の人なりとて、爪はじきをして悪みけり。家に久しき男に、黄金一枚かくし持ちたる者あるを聞きつけて、近く召していふ。「崑山の璧もみだれたる世には瓦礫に等し。かかる世に生まれて弓矢とらん躯には、棠谿墨陽の剣、さてはありたき物は財宝なり。されど良剣なりとて、千人の敵には逆ふべからず。金の徳は天が下の人をも従へつべし。武士たる者漫に掛ふべからず。必ず貯へ蔵むべきなり。你賤しき身の分際に過ぎたる財を得たるは、嗚呼の事なり。賞なくばあらじ」とて、十両の金を給ひ、刀をも赦し

して召使ひけり。人これを傳へ聞きて、「左内が金を集むるは、長啄にして飽かざる類にあらず。只當世の一奇士なり。」とぞ云ひ囃しける。其の夜左内が枕上に、人の來たる音しけるに、目さめて見れば燈臺の下に、小さげなる翁の笑みを含みて坐れり。左内枕をあげて、「爰に來たるは誰ぞ。我に粮からんとならば、力量の男どもこそ參りつらめ。儞がやうの耄けたる形して、睡りを魘ひつるは、狐狸などの戯るゝにや。何の覺えたる術かある。秋の夜の目さましに、そと見せよ。」とて、少しも騷ぎたる容色なし。翁云ふ、「かく參りたるは魑魅にあらず、人にあらず、君がかしづき給ふ黄金の精靈なり。年來篤くもてなし給ふうれしさに、夜話せんとて推して參りたるなり。君が今日家の子を賞じ給ふに感でて、翁が思ふこゝろばへを語り和まんとて、假に化を見はし侍るが、十に一つも益なき閑談ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでゝ眠りを妨げ侍る。さても富みて驕らぬは大聖の道なり。さるを世の惡詞に、「富める者はかならず慳し、富める者多く愚かなり」と云ふは、晉の石祟、唐の王元寶が如き豺狼蛇蝎の徒のみを云へるなりけり。往古に富める人は、天の時をはかり、地の利を察らめて、おのづからなる富貴を得るなり。呂望齊に封ぜられて民に産業を教ふれば、海方の人利に走りてこゝに來朝ふ。管仲九たび諸侯をあはせて、身は陪臣ながら富貴は列國の君に勝れり。范蠡、子貢、白圭が徒、財を鬻ぎ利を逐うて巨萬の金を疊みなす。是等の人を列ねて、貨殖傳を書し

侍るを、其の云ふ所陋しとて、後の博士等を競うて譏るは、ふかく頴らざる人の語なり。恆の産なきは恆の心なし。百姓は勤めて穀を出し、工匠等修めてこれを助け、商賈務めてこれを通はし、己己が産を治め家を富まして、祖を祭り、子孫を謀る外、人たるもの何をか爲さん。諺にも云へり、千金の子は市に死せず、富貴の人は王者と樂しみを同じうすとなん。眞に淵深ければ魚よく遊び、山高ければ獸よく育つは、天の隨なる理なり。只貧しうして樂しむてふ言葉ありて、字を學び韻を探る人の、惑ひをとる端となりて、弓矢とる英雄も富貴は國の基なるを忘れ、怪しき計策をのみ調練ひて、物を枉り人を傷ひ、己が徳を失ひて、子孫を絶つは、財を薄んじて名を重しとする惑ひなり。顧ふに名と財と求むるに、心二つある事なし。文字てふものに繋がれて、金の徳を薄んじては、みづから清潔と唱へ、鋤を揮うて棄てたる人を賢しと云ふ。さる人は賢くとも、さる事は賢からじ。金は七の寶の最なり。土に瘞もれては靈泉を湛へ、不淨を除き妙なる音を藏せり。かく清き物の、いかなれば愚昧貪酷の人にのみ集ふべきやうなし。今夜此の憤りを吐きて、年來の心遣りを爲し侍る事の喜しさよ。」と云ふ。左内興じて席を進み、「さてしも語らせ給ふに、富貴の道のたかき事、己がつねに思ふ所露違はず侍る。こゝに愚かなる問事の侍るが、希ふは詳に示させ給へ。今ことわらせ給ふは、專ら金の徳を薄しめ、富貴の大業なる事を識らざるを罪とし給ふなるが、かの紙魚が云ふ所も故

なきにあらず。今の世に富める者は、十が八つまでは大かた貪酷殘忍の人多し。己は俸祿に飽き足りながら、兄弟一屬始め祖より久しく仕ふる者の、貧しきを救ふ事をもせず、郷に栖みつる人の幸ひを失ひ、他の援けさへなく世にくだりし者の田畑をも、價を賤くして、あながちに己が物とし、今己は村長と敬はれても、昔借りたる人の物を返さず。禮ある人の席を讓れば、其の人を奴の如く見おとし、偶、舊き友の寒暑を訪らひて來れば、物借らん爲かと疑ひて、宿にあらぬ由を應へさせつる類、數多見來りぬ。又君に忠なる限りを盡し、父母に孝廉の聞えあり、貴きを尊み、賤しきを扶くる意ありながら、三冬の寒きにも一裘に起臥し、三伏の暑きにも一葛を濯ぐ遑なく、年豐かなれども朝に晡に、一椀の粥に腹をみたしめ、さる人は元より朋友の訪らふ事もなく、却りて兄弟一屬にも道を塞られ交はりを絶たれて、其の怨みを訴ふる方さへなく、汲々として一生を終ふる者あり。さらばその人の作業に賤き故かと見れば、夙に起き、遲く臥して性力を盡らし、西に東に走り惑ふ蹉跎更に隙なく、その人愚かにもあらで、才を用ゐるに的るは稀なり。是等は顏子が一瓢の味ひをも知らず、かく果つるを佛家には前業をもて說き示し、儒門には天命と敎ふ。若し未來ある時は、現世の陰德善功も來世の頼みありとして、人稍此所に憤りを休めん。されば富貴の道は佛家にのみ其の理を究して、儒門の敎へは荒唐なりとやせん。神も佛の敎へにこそ憑らせ給ふらめ。否ならば詳に述べさせ給へ」と翁云

ふ。君が問ひ給ふは往古より論じ盡さゞる理なり。かの佛の御法を聞けば、富と貧しきは前生の脩否に因るとや。此はあらましなる敎へぞかし。前生にありし時、己をよく脩め、慈悲の心專らに、他人にも情ふかく接はりし人の、その善根に因りて、今此の生に富貴の家にうまれ來り、己が寶をたのみて、他人に傲りをふるひ、あらぬ狂言をいひのゝしり、淺ましき夷心をも見するは、前生の善心かくまでなり下る事は、如何なる報いの爲せるにや。佛菩薩は名聞利要を嫌ひ給ふとこそ聞きつるを、など貧福の事に係ひ給ふべき。さるを、富貴は前生の脩めの善かりし所、貧賤は惡しかりし報いとのみ說き侍では、尼媼を蕩かすなま法ぞかし。貧福をいはず、只善を積まん人は、その身に來らずとも、子孫は必ず幸福を得べし。宗廟これを饗けて、子孫これを保つとは、此の理の細妙なるか。己善をなして、己その報いの來るを待つは、直き心にもあらずかし。又惡業慳貪の人の、富み昌ゆるのみかは、壽のびて、その終りを良くするは、我に異なる理あり。霎時聞かせ給へ。我今假に化を現じて語るといへども、神にあらず、佛にあらず、素非情の物なれば、人と異なる慮あり。古に富める人は、天の時に合ひ、地の利をあきらめて、產を治めて富貴となる。これ天の隨なる計策なれば、寶の集まるも、天のまにまにたる理なり。又卑吝貪酷の人は、金銀を見ては父母の如く親しみ、食ふべきをも喰はず、穿べきをも着ず、得がたき命さへ惜しと思はで、起きて念ひ、臥して

忘れねば、こゝにあつまる事目前なる理なり。我もと神にあらず、佛にあらず、只これ非情なり。非情の者として人の善惡を糺し、それに從ふべき謂れなし。善を撫で、惡を罪するは、天なり、神なり、佛なり。三の者は道なり。我が輩の及ぶべきにあらず。只彼等がつかへ傅く事の、恭しきに集まると知るべし。これ金に靈あれども、人と心の異なる所なり。又富みて善根を種うるにも、故なきに惠み施し、その人の不義をも察らめず、借し與へたらん人は、善根なりとも財は遂に散ずべし。是等は金の用を知りて、金の德を知らず。輕く扱ふが故なり。又身の行ひも宜しく、人にも志誠ありながら、世に窮められて苦しむ人は、天蒼氏の賜尠なく生まれ出でたるなれば、精神を勞しても、命の内に富貴を得る事難し。さればこそ古の賢き人は、求めて益あれば求め、益なくば求めず。己が好むまに／＼、世を山林にのがれて、靜かに一生を終る。心のうち如何ばかり淸しからんとは羨みぬるぞ。斯くいへど富貴の道は術にして、巧みなる者はよく湊め、不肖の者は瓦の解くるより易し。かつ我が輩は人の生產につき廻りて、賴みとする主も定まらず。爰に湊まるかとすれば、其の主の行ひに因りて、忽ちに彼處に走る、水の低き方にかたぶくがごとし。夜に晝にゆき／＼て休む時なし。只閑人の生產もなくてあらば、泰山もやがて喫ひ盡すべし。江海も遂に飲み干すべし。幾度も云ふ。不德の人の財寶を積むは、これと爭ふ理、君子は論ずる事なかれ。時を得たらん人の儉約を守り、

費えを省きてよく務めんには、おのづから家富み人服すべし。われは佛家の前業も知らず。儒門の天命にも拘らず。異なる境に遊ぶなり」と云ふ。左内いよ〳〵興に乘じて、靈の議論きはめて妙なり。舊しき疑念も今夜に消じ盡しぬ。試みに再び問はん。今豐臣の威風四海を靡し、五畿七道漸しづかなるに似たれども、亡國の義士彼此に潛み竄れ、或は大國の主に身を託せて世の變を窺ひ、豫て志を遂げんと策る。民も又戰國の民なれば、耒を釋てて矛に易へ、農事を事とせず。士たる者枕を高くして眠るべからず。今の體にては長く不朽の政にもあらじ。誰か一統して民を安きに居らしめんや。又誰にか合し給はんや。翁云ふ。「これ又人道なれば我が知るべき所にあらず。只富貴をもて論ぜば、信玄が如く智謀は百か百的らずといふ事なくして、一生の威を三國に震ふのみ。而も名將の聞えは世擧りて賞する所なり。その末期の言に、『當時信長は果報いみじき大將なり。我平生に他を侮りて、征伐を怠り、此の疾に係る。我が子孫も即て他に亡されん』と云ひしとなり。謙信は勇將なり。信玄死しては天が下に對なし。不幸にして遽く死りぬ。信長の器量人に勝れたれども、信玄の智に及かず、謙信の勇に劣れり。然れども富貴を得て、天が下の事一回は此の人に依さす。任ずる者を辱めて命を殞すにて見れば、文武を兼ねしと云ふにもあらず。秀吉の志大なるも、始めより天地に滿つるにもあらず。柴田と丹羽が富貴を羨みて、羽柴と云ふ氏を設けしにて知るべし。今龍と化して太虛に昇

り、池中を忘れたるならずや。秀吉龍と化したれども、蛟蜃の類なり。蛟蜃の龍と化したるは、壽わづかに三年を過ぎずと。これも略後なきならんか。それ驕りをもて始めたる世に、往古より久しきを見ず。人の守るべきは儉約なれども、過ぐるものは卑吝に陷つる。されば儉約と卑吝の境よく辨へて、務むべき物にこそ。いま豐臣の政久しからずとも、萬民和ぎ、戸々に千秋樂を唱はんこと近きにあり。君が望みに任すべし」とて、八字の句を述ふ。其の詞に云はく、

堯蓂日杲　百姓歸家

閑話興盡きて、遠寺の鐘五更を告ぐる。「夜既に曙けぬ。別れを給ふべし。今宵の長物語、眞に君が眠りを妨ぐ」と、起ちて行くやうなりしが、掻き消して見えずなりにけり。左内つらつら夜もすがらの事を念ひて、かの句を案ずるに、百姓家に歸すの句、稍其の意を得て、深く玆に信を發す。まことに瑞草の瑞あるかな。

雨月物語　終

伽婢子

松雲處士

伽婢子序

夫れ聖人は常を說いて道を教へ、德を施して身を整へ、理を明らかにして心を修む、天下國家其の風に移り、其の俗を易ふる事を宗とし、總て怪力亂神を語らずと雖も、若し止む事を得ざる時は、亦述べ著はして則を爲せり。是を以て、易には龍の野に戰ふと云ひ、書には鼎の中に雉の鳴くことを誌し、春秋には亂賊の事を示し、詩には國風鄭風の篇を載せて、後世に傳へて明らけき鑑と爲し給へり。況んや佛經には三世因果の理を教へて四生流轉の業を戒め、或は神通或は變化の品々を說き給へり。又神道の幽微なる、草木土石に至るまで、皆その神靈ある事を誌して、不思議の妙理を現はせり。三教各靈理、奇特、怪異、感應の空しからざる事を教へて、其の道に入らしむる媒とす。聖經賢傳諸史百家の書、已に牛に汗し棟に充つと云ふ。是れ本朝記述の編、古今筆作の文、何ぞ只五車に積むのみならんや、中にも花山法皇の大和物語、宇治大納言の拾遺物語、其の外竹取、うつぼの俊蔭の卷を初めて、怪しく奇特の事共を記せる處、手を折つて數ふるに遑あらず。然るに此の伽婢子は遠く古を取るにあらず、近く聞き傳へし事を載せ集めて記し著はす物なり。學智ある人の目を喜ばしめ、耳を濯ぐ爲にせず、只兒女の聞を驚かし、自ら心を改め、正道に赴く一つの補ひとせんとなり。其の

目を貴びて耳を信ぜざるは、古人の賤しむ所なり、陰陽五行天地の造化は廣大にして測り難く、幽遠にして知り難し。時面見ざるを以て、今聞く所を疑ふことなかれと、云爾。

干時寛文六年丙午正月日

瓢水子松雲處士自序

伽婢子序

伽婢子者、松雲處士之所著也、凡若干卷、概言神怪奇異之事、言辭之藻麗也、吟咏之繁華也、嗚呼矣、人口之善不可勝言焉、論語謂曰、子不語怪神矣、然則是書之作、不免悖詐欺人之譏乎、吾不然、蓋上古志于道者、搜載籍之崇閫、窮經法之淵源、擇言擇行、積善累德、而尚有不盡之名、矧夫庸人孺子之不知讀詩書、耳無傳聞之明、身無貞直之厚、浮浮之俗日々以長、偶聞正經微言、猶若聞雷霆、瞶々焉而遁、經典之沈深、載籍之高遠、豈不如會墻面而立之、何為之故、伽婢子之爲書、其事新奇、義理淺近、怪異之驚耳、滑稽之喜人、讀得之樂焉、悦得之舒焉、是庸人孺子之所好讀易解也、而言男女淫奔則會深戒、幽明神怪則明鑑誡之理、雖非君子達道之事、願欲使庸者之監戒而已、

寛文六年龍集丙午正月下澣　　雲樵

伽婢子總目錄

第七卷

第八卷

第九巻

第十巻

伽婢子全目録

第十一巻

第十一巻

白石右衛門尉射謀の事

岩女を救うて幸を享けし事

石軍の事

第十三巻

観世音阿彌能の事

傳尸病の事

小蛇甕の中より出でし事

傳尸病を攘ひ去りし事

韋駄天が力量の事

蛇瘤の事

山中鬼魅の事

義輝公の馬言ひし事

百物語の事

總目錄 終

龍宮の上棟

江州勢多の橋は、東國第一の大橋にして、西東に懸れり。橋より西の方、北には志賀辛崎、目前にして、山田矢橋の渡し舟、隱津海津の上り舟に、帆かけて走るも得ならず見えて、南の方は石山寺、夕暮告ぐる鐘の音に、山傳ひ行く岩間寺も程近く續きたり。橋より東の方、北には任那の里、此處は名に負ふ蓮の名所にて、六月の中頃より咲き亂るゝ蓮花、匂ひは四方に薫じて、見に來る人の心さへ、自ら濁りに浸まぬ樂しみあり、橋の南には田上山の夕日影、暑さ送る蟬の聲に、夏は涼しさ勝りけり。後は伊勢路に續き、前には湖水の流れ長く、鹿飛の瀧より宇治の川瀬に出づると云ふ。其の北には螢谷とて洞あり、四月の初めつ方より五月の半ばに至るまで、數百萬斛の螢涌き出で、湖水の面に集まり或は毬の大きさ、或は車の輪の如く、塊り圓がりて、雲路遙かに舞ひ上り俄に水の上にはたと落ちつゝ、はら〱と碎けて水に流るゝ有樣、點々たる石榴花の五月雨に咲くが如くにて、光さやかに亂れたるは、又捨て難き眺めなり。されば世の好事の輩、僧俗共に遊び來て、歌詠み詩つくる、其の言葉多

く、口に傳へ書に記せり。橋の東南の方湖水の汀に沿うて小社あり。昔俵藤太秀郷、此の邊より龍宮に行きて、三上の嶽の百足を退治し、絹と俵と鍋と鐘とを得て歸る。中にも鐘は三井寺に寄附して、今も其の名高く世に殘れり。後柏原院の朝、永正年中に滋賀郡松本と云ふ所に、眞上阿祇奈と云ふ人あり。元は禁中に伺候して、文章生の官職に與りし人なれども、世の忩劇を厭ひて冠を掛けて引き籠り、此所に跡を留め、心靜かに月日をぞ過ごしける。或日の夕暮に、布衣に烏帽子着たる者二人來り、庭の前に跪きて、「是れは水海底の龍宮城より、迎へ奉るべき事ありて參り侍り。」と云ふ。眞上驚き色を變へて、「龍宮と人間と道隔たり、界異なり、如何でか行き到るべき。往古は其の道ありしと聞き傳へしかども、今は絶えて其の跡を知らず。」と云ふ。使者の云ふ樣、「良き馬に鞍置いて門外に繫ぎ置きたり、是れに召して赴き給はんには、水漫々として波高くとも少しも苦しき事あらじ。」と云ふ。眞上怪しみながら座を立つて門に出でたれば、その長さ七寸許り、太く逞しき黑の馬に、金覆輪の鞍置き、螺鈿の鐙をかけ、白銀の轡をかませて引きたて、白丁十餘人はら〳〵と立つて、眞上を馬に掻き乘せ、二人の使者は前に走り、馬は虛空に上り飛ぶが如し。眞上直下と見下せば、足の下は唯雲の浪、煙の浪、渺々として、其の外には何も見えず。暫しの間に宮門に到り、馬より下りて立ちたり。門を護る者共は、蝦魚のかしら、かにの甲、さゞえ、蛤の殼に似たる兜の緒を締め、槍長刀

なら立て並べ、嚴しく番を勤むる。眞上を見て皆驚き、頭を地に付けて敬ひ愼めり。一人の使者内に入りて後、少時有りて、緑衣の官人と思しき者二人出でて、門より内に引いて歩む。門の上には、「含仁門」と云ふ額を懸けたり。門に入つて半町許り行きければ、水精の宮殿あり、階を登りて入りければ、龍王即ち紫雲の冠を戴き、飛雪の劍を帶び、笏を正しくして立ち出でつゝ、眞上を延きて白玉の牀に座を占めたり。眞上大いに敬ひ、禮拜して、「我は是れ大日本國の小臣なり、草木と共に朽ち果つべき身なり、いかでか神王の威を冒して、上客の禮を享け奉らんや。」と云ふ。龍王の云く、「久しく名を聞いて、今尊顔を迎へ侍り、辭退し給ふに及ばず。」とて強ひて牀の上に上せ、自ら又七寶の牀に上り、南に差向うて坐したり。かかる所に、「三貴客入り來り給ふ。」と云ふ。龍王又座を下り、階に出でて迎へ入れたりければ、三人の客あり、何れも氣高き裝ひ、此の世の人とも覺えず。玉の冠を戴き、錦の袂を掻繕うて威儀正しく、七寶の手駕より下りて、靜かに殿上に登り牀に坐したり。眞上は牀を退きて、金障の下に隱れ蹲る。已に座定まりて、龍王語りけるは、「人間世界の文章生を迎へ奉れり。卿達これを疑ひ給ふな。」とて、眞上を呼びて勸めしかば、眞上出でて禮拜するに、三人の客また拜を致す。「前の玉座に上り給へ。」と云ふに、眞上辭して曰く、「我は是れ一个の小臣なり、賤しき貴族に對して、牀に上らん事恐れあり。」と。三人の客同じく曰く、「誠に人界と龍藏と其の界隔ちて、通路絶え

たれども、神王已に人間を鑑みる事明らけし。倶是れ唯人ならんや。茲に請じ奉れり、何ぞ辭するに及ばん、早く輿に坐し給へ」と。直上則ち輿に坐す。息土騰りけるは、一瞬此の程許たに一つの宮殿を構へ造る、玉頭番館の頂集まり、玉の礎を積み、紅の梁雲の棟木、文の柱、皆具はり備はりしかども、只乏しき物は、博士の文、祝辭の詞なり。「汝が聞き傳ふ、直上の神祇祭祀は學習道德の名譽れたり。これ故に遠く招ぎて來じ侍る、幸じに汝が爲に一篇を書きてたべ」と言ふに、二人の童子上ここ諾ふなるが、聴かに輿におきて、一人は碧玉の硯に、瀬竹の管に文犀の毛さしたる筆取り添へ、神泉の水に、松煤龍涎を和したる墨する濃へて捧げ、一人は鮫人の綃一丈を持ちて、與にこそ前む。

直上、神祇祭祀辭するに言葉なく、唯筆を染めて書きたり、

「宇宙の間には、萬物を最大なりとし生物の中には龍神を殊に靈とす。已に世を潤すの功あり、爭でか靈をのぶるの奠なからんや。この故に名をたゝき靈を祀けて依り祈る。飛龍は尺なる人を見るに利を作れり、又用ゐて不測の道に乘れり。維歲次今月今日新たに玉の殿を構へ聊かに精しき華を壽ぎぬ。水晶瑠璃の柱を建てゝ、琥珀瑇瑁の梁を掛く。玉の簾を捲き攀ぬれば山の雲青く映り、玉の戸を開けば潮の霞白く返る。天高く地厚うして、南溟八千里を填め、雨順ひ風調ほり、北渚五百湖を治む、空に上り泉に下りては、蒼生の望みをかなへ、彩を現はし身を隱しては、上帝の

揺みを拈く、其の處古今に亙り、其の德礎に響ほす。玄龜赤鯉跳りて祝ひ、木魅山魈集まり賀ぶ。此に歌一曲を作りて、塵ちたる梁の上にあらはす。

扶桑海淵落二莽宮一　水族騈闐承二德化一
萬籟唱和慶賛歌　若神河伯朝宗駕

ちぎまれるゐたたしたけき龍の宮の世は久かりのつきじとぞしる

倶して龍王は上棟の後、百の龍共に遊り、千の喜び傾く來り、琴の宮安く穏かにして、潮清半ら日く治まり、天つ空の月日に齊しく、其の限り有るべからず。

と咩きて奉る。龍王大いに悦び、三人の客に見せしむるに、みな感じて褒めたり。時に上棟の宴を開きて曰く、「吾等久方は人間にあれて、未だ終に知り給はじ。一人は江の神、一人は河の神、一人は淵の神なり。君と友となり、今日の遊びには更に心を靜け給へ、何か障る事あらん」とて、盃を廻らし酒を勸む。二十ばかりの女房十餘人を出し、雪の袖を翻し歌ひ舞ふ。其の面かたち世にまだ見ず、艶麗しく窈窕にして、玉の釵に花を飾り、白き羅に繍を著く。歌ふ聲雲に響きつゝ、小時舞うて退きければ、ひとへも緋うたる童十餘人、其の美しき雛の如くなるが、からねびの直垂に錦の袴を著て、花をかざして出で碧の手を翻す。歌の聲響く上り、梁の塵や飛びまふらん、絲竹の音に和し



て面白き限りなし。舞已に終りければ、主の龍王歡びに餘り、杯を洗ひ銚子を更め、阿祇奈君が前に置き、自ら玉の笛を吹き鳴らし、懐谷吟を歌ひて後、其の座に有りける者共罷り出で、客のために戯れの藝をつくせ」とあり。かしこまりて出でたる人、自ら郭介子と名乗る、是れ蟹の精なり。其の歌ひける詞に、

「われは谷陰岩間に隠れ、桂の實る秋になれば、月清く風涼しきに催され、河に轉び海に泳ぐ、腹には黄を含み、外は圓かにいと堅く、二つの眼空に望み、八つの足またがり、其の形は少女の笑みを求め、其の味は兵のかんばせを喜ばし、鎧を纏ひ戈を取り、泡を噴き瞳を廻らし、無腸公子の名を施し、つな手の舞を舞ひけるなり」

とて、前に進み後に退き、左にかけり右に走りければ、其の類の者拍子をとる。座中笑壺に入りて笑ひ賑ふ。其の次に、玄冥先生と名乗りて罷り出でつゝ、袖を飜し拍子をとり、尾を伸べ頭を動かす、是れ龜の精なり。其の歌ひける詞に、

「我れは元と蒼の叢に隠れ、蓮の葉に遊び、書を負うて水に浮び、甲を被りて、夢を示す。殻は人の吉凶をあらはし、胸に五行の氣を含み、世の寶となり、道の教へを爲す。六を藏して伏し千年の壽を保ち、氣を吐けば綵節の如く、尾を曳いて樂しみを極む、青海の舞を舞ふべし。」

と頭を動かし頸を縮め、目をまじろき、足を上げ、暫し奏でて引き入りければ、滿座の輩聲を上げ膽をさゝげ、起き伏して笑ひどよみ、興を催す。其の外蝦蛤・木魂山彥、萬の魚、己々が能を表はし藝を盡す。已に酒宴にして醉ひに和しつゝ、三神の客座を立ちて拜み申して歸りしかば、主の龍王門の許まで送られたり。文信歡喜を極めて、二禮しては益に樂み、願はくは龍宮城の有樣遍く見せ給へと望みしかば、いと易き事とて階を下り、庭に出でて歩かせらるゝに、雲霧おほひて何も見えず、龍王即ち吹雲の官人を召されたり。其の姿、頭に七曲の冠を著し、鼻高く目大きなる者、これ一聲の嘯なるべし。口を縮めて天に向ひ吹きければ、世界廣く平らかに山も無く岩も見えし、雲霧數十里晴れ開け、玉の樹庭に列ね植ゑ、金の砂を敷き渡し、樹に五色の花開け、池には四色の蓮咲きて匂ひ又細やかなり。廻れば金の廊あり、庭には瑠璃の甍を敷きたり。官人を差副へ見せしむ。一つの樓閣あり、玻璃水晶にて造り建て、珠を彫めて飾りたり。是れに登れば虛空を凌ぐ心地して、一の重には上り得ず。「此處は下界凡人の登る事叶はず、神通の者こそ行き至れ」と。それより又一つの樓臺に登れば、圓き鏡の樣なる物あり、きら〳〵と光り輝き、眼を眩かして直ちに向ひ難し。官人云ふやう、「これは電母の鏡とて、少し動かせば大なる電出で、世の人の目を奪ふ」と云ふ。又傍に太鼓あり、大小數多し、直上これを打ちて見んとす。官人止めて云ふやう、「若し強く打ち鳴らさば、人間界の山川谷皆地震ひ鳴

り喚き、人皆魂を失ひ命を亡ぼし、死なずとも耳を失はん、これは雷公の鼓なり」と云ふ。又傍に鞴の如くなる物あり、眞上これを動かさんとす。官人又とゞめて云ふやう「是れは嘯風の革嚢なり、それを強く動かさば、山崩れ岩石飛んで空に揚り、人の家はみな吹き破られて、四方に亂れん」と云ふ。その傍に水瓶あり、帚の如くなる物を上に載せたり。眞上是れを執り、水にさし入れてうち振らんとす。官人押し留めて「是れは洪雨の瓶なり、此の帚に浸して灑ぎうち振らば、人間世界は大雨洪水押し流れ、山も波に浸り、陸は海に成るらん」と云ふ。阿祇奈君問ひけるやう「さて是等を司る官人は何處にあるやらん」と。答へて云ふ様「雷公電母風伯雨師は、隙ありて遊ぶ時は、常に此處にあれし籠められ、心の儘に遊ぶ事叶はず、若し出して其の役を勤むる時は、此所に集まり、雷電風雨皆分散ある事にて、それより過ぎぬれば、他に往はで侍る。凡そあらゆる宮殿樓閣は、見盡す事叶はず、それより立ち歸れば、龍王さまゞゞ饗應し、瑠璃の盆に眞珠二顆、氷の絹二疋を贈りて其の後とし、官人多く龍王階に送り出でて、官人に隨はせて送り歸さる。阿祇奈君目を塞げば、空を飛ぶ心地して暫しの間に湖の東なる勢多の館の前に出でたり。珠と絹を持ちて歸り寶とす。其の後名利を厭ひ道を求めて其の終る所を知らず。

黄金百兩

河内國平野と云ふ所に、文兵次とて有徳の人なり、而も志誠ある者なり。同じ里に由利源内とて、生れつき貧しき者、兵次と親しき友達なり。松永長慶に召抱へられ代官になり、老母妻子ともに大和國にひき越しけり。其のまかなひに詰り、兵次に黄金百兩を借る。固より親しき友なれば、借狀質物にも及ばず。爾に此の頃、細川三好の兩家不和にして、河内津の國兵亂騷動す。兵次は一跡殘らず亂妨せられ、一日を送る力もなし。弘治年中、漸く物靜かに成りければ、三好は京都にあり、其の家老松永は和州に城を構へ、大いに民百姓を貪る。さる程に兵次は妻子を連れて和州に行き、源内を尋ぬるに、松永が家にして權威高く、家の内賑々し。兵次は衰へて形かじけ、面變りしたり。其の近き邊に宿借りて妻子を置き、我が身許り源内に逢ひてかう〳〵と云ふ。源内初めは忘れたりけるが、故郷名字細々と聞いて誠にと驚き、酒進めて飮ませながら借金の事は一言も云はず、兵次も云ふべき序なく立ち歸る。妻云ふやう、「是れまで流浪して來るも、源内が惠みあるべきかと思ふに、僅かの酒飮みたるとて、百兩の金に替へて一言をも云はずして歸る事やある。斯くの如くならば我々は頓て道の傍に飢ゑて死すべし」と云ふ。兵次これを聞くに理に過ぎて覺えしかば、夜明くるを待ちかね、又源内

が許に行きたれば、瀬内出で對面して、「誠に其の古銀子を借りたる事今も忘れず、其の恩を疎かに思はんや。其の時の手形あらば持來り給へ、數の限り返し參らせん」と云ふ。兵次答へて云ふ樣は、「同じ里に親しき友と、互に住みたる契り淺からねば、手形質物にも及ばず貸し奉りし銀子なり。今我強盗の爲に一跡を奪ひ取られ、身のたゝずみなき故に、如何にも此の銀子を賜はらば、然るべき商賣をもいたして、妻子を養ひ侍らばやと思ふなり。只今我を取り立つるとおぼして、右の銀子を惠み返し給へ」と云ふ。瀬内打笑ひ「手形無くしては算用なり難し、されども思ひ出さば、數の如く返し侍らん」とて兵次を歸らせたり。かくて半年許りを經て極月になりぬ。百年をこそ送りけれども難しき春を迎ふべき手段なし。食乏しく衣薄ければ、妻子は飢ゑ凍えて、只泣くより外の事なし。兵次これ見るに堪へがたくて、瀬内が許に行き訴へ、涙を流して云ふやう、「年比におし睦り、親族は近きにあれども、妻子は飢ゑ凍えて又一錢の貯へなく、炊き食すべき米もなし。假令貸し奉りし銀子皆返し給はらずとも、年を迎ふる程の妻子の扶けを爲し給はば、是れに過ぎたる恩はあらじ」と云ふに、瀬内うち聞いて、「誠に痛はしく思ふと雖も、我さへ貧窮の最中なれば、今皆返し參らせん事は叶ふべからず、明日先づ米一石、錢二貫文を奉らん、是れにて兎も角も年をとり給へ」と云ふ。兵次大いに悦び我が家に歸り、「明日必ず惠み遣はされん、待ち設けて此の程の悩しさを慰まん」と云ふに妻子喜び

なく嬉しと思ひ、夜の明くるを遅しと其の子を門に出して、「錢米を持ちて來る人あらば、爰ぞと敎へよ」とて待たせ置く。須臾ありて内に走り入つて云ふやう「米を負ひたる人こそ來れ」と急ぎ出でて見れば、其の家の門には見向きもせずして打過ぐる。若し家を忘れて打通るかと思ひ「其の米は又兵次の家に賜はるにてはなきか」と問へば、「否是れは城の内より肴の代に遣はさるゝ米なり」と云ふ。又少時有つて其の子走り入りて「只今錢を擔けたる人こそ來れ」と云ふ。兵次驅け出でて見るに其の門口をばさ寄らずして打通る。是れも家を知らざるかとて引き留めて「此の錢は由利源内殿より兵次が許へ遣はさるゝにや」と問へば、「是れは弓削三郎殿より矢括の代物に遣はさるゝ」とて過ぎ行けば、兵次悲しき事云ふ許りなし。正月晦日の用意とて、錢米持ち運ぶ事急がはしきを、引き留めて咎め問ふに、いづれも源内が前より出づる錢米ならで、一日の中待ち暮し、通ふ人影も見えざりければ内に入りぬ。油も無ければ燈火たつべきやうもなく、いとゞ闇き一間の内に、妻子うち向ひ、命は頼もしき事もなし。米薪を求むべき便りもなければ、夜もすがら寐もせず泣き明す。兵次いよいよ堪へかね、口惜しき事かな、さしも堅く契約しながら、我を欺きけることよ、唯、源内を刺し殺して此の鬱念を晴らさんと思ひ、夜もすがら刀を研ぎ、源内が門に忍び居たりしが、また思ひ返すやう、源内こそ我に不義を致しけれ、また源内が老母妻子には何の咎もなし、今源内を殺さば、家忽ちに滅して、科も

なき老母妻子は路頭に立つべし、人こそ我に不義ありとも、我は人をば僻まじものを。天道まことに有らば、我に恵みもあるべき物をと、思ひ直して家に立ち帰り、兎角して小袖刀売代なして、正月の三の費には致しぬ。かくて兵次武蔵、家を出でて、泊瀬の観音に詣で、信心深く祈り申して、山の奥に分け入りしが、おぼえず一つの池の辺に到り、足すべりて池の中に落ち入りしに、其の水俄かに別れて道あり。道を傳うて一町許り行きければ、城の惣門に到る。楼門の上に[illegible]と云ふ額かかれたり。内に入りて見れば、人気もなく、物静かにて、幾年経たりとも知られぬ古木の松枝をかはして、生ひ並べり。廊下をめぐりて奥の方に到り、御殿の階に臨めども人も見えず、答ふる者もなし。只御殿の壇上遥かに、垣輪の間に籠りて臥したる翁あり。兵次傍に寄りて見れば、石枕を枕として臥し、休み居たり。かかる所に白髪長く生ひ伸び、頭には帽子かづき、足には鞋をはき、手に白木の杖をつきたる老翁来りて、兵次を見て打笑ひ、「如何に久しく対面せざりしや。昔の事ども覚えたるか。」と云ふ。兵次恐れて膝まづき、「我等更に此所に来れる事は今ぞ初めなる。如何でか昔の事とて知るべき道侍らん。」と云ふ。老翁聞いて、「げにも汝は飢渇の火に焼かれて昔を忘れたるも理なり。」とて、懐より棗を二つ取り出して食はしめたるに、兵次胸涼しく心爽やかに、雲霧の晴れ行く空に月の出づるが如く、遠き昔の前生の事ども昨日の如く覚えたり。老翁の曰く、「汝昔過去の時泊瀬の近辺を

領せし人なり、觀音を信じて花香燈明を供へ、常に歩みを運びしかども、只百姓を貪り、賦斂を重く課役を滋くして人の愁へを知らず。此の故に死して惡趣に墮つべかりし處に、觀音の大悲を以て、惡を轉じて二度此の人間に返し給へり。暫く富貴を極めしかども、昔の業感に因りて、今かく貧しくなれり。然るを汝源内が不義を怒りて、一念の惡心を起せしかば、惡鬼忽ちに汝が後に隨ひ、妻子一家跡なく滅ぶべかりしを、また忽ちに心を改めしかば、神明すでに是れを知召し、福神これに立ち添ひて、惡鬼は遠く逃げ去りぬ。すべて惡業善事其の報い有る事は形に影の隨ひ、聲の響に應ずるが如し。今より後は苟且の事と云ふとも、惡を愼み善を求むべし。然らばかならず、安樂の地に一生を送らん。」と教へられたり。兵次さては此所は人界にあらず、神聖の住所なりと思ひつけて、事の因に當世のことをさして問ひけるやう、「今世の中絲の亂れの如くにして、諸方に側ち起る者蜂の如し、何れか榮え何れか衰へん。願はくは其の行先を示したまへ」と云ふ。老翁答へられけるは、「人の心更に豺狼の如く、彼を殺して我立ち、餘所を打ちて己に倂せんとす。此のゆゑに王法ひすへざ朝威衰へ、三綱五常の道絶えて、五畿七道互に爭ひ國々亂れざる所なし。臣としては君を謀り、君としては臣を叛け、或は父子の間と雖も快からず、兄弟忽ちに敵となり、運強く利に乘る時は、卑しきが高く上り小身なるが大いに蔓り、運衰へ勢盡きては、大家高位もおし倒され、聟を殺し子を殺せば、一家一

族のわりなきも、只危きにのみ心を碎きて安き暇更になし」とて、當時諸國の名ある輩、それかれと指を折り、其の身の善惡と行末の盛衰を、鏡に懸けて語られたり。兵次かさねて云ふやう、「由利源内今既に人の債を返さず、己威を保ち勢に誇る、此の者とても行末久しかるべしや」と。老翁の曰く、「源内が主君先へ大きなる不義を行ひ、權威邪に振うて、民を虐げ世を貪る。冥衆是れを疎み、神靈これを惡みて、福壽の籍を削られて、其の身桎械にかゝり、其の首に縲絏の繩をかけて肉を腐らし、骨を散らされんこと何ぞ遠からん。源内又是れに隨ひ、惡逆無道なる事譬ふるに言葉なし。人の債を返さざる彼が財物は皆これ他の寶なり、己徒らに守護するのみ。今見よ三年を出でずして、家運盡きて、災來るべし。汝必ず其の災を恐るべし、源内が家近く住せば惡しかりなん、京都も靜かなるべからず、早く歸りて山科の奥、笠取の谷に移り行け」とて、黄金十兩を與へ道筋を教へて出し遣す。一里餘りを行くかと覺えて、山の後なる、岩穴より出づる事を得たれば、家を出でてより十日に及ぶと云ふ。妻子待ち受けて喜ぶ事限りなし。やがて緣を求め、山科の奥、笠取の谷に引き籠り、商人となり薪を出し賣つて、世を渡る業となす。家やうやう心安く、妻子も穩かなる心地す。其の後永祿十年の年、松永反逆のことありて、織田家の爲に家門滅却せらる。由利源内此の時に生捕られて殺され、日頃非道に貪り貯へし財寶、みな敵軍の寶物となれり。是れを聞き傳へて年月を數ふれ

ば、僅かに三年に及べり。其次は今も其の末残りて住みけりと云ふ。

伽婢子卷之一 終

伽婢子 巻之二

十津川の仙境

和泉の堺に藥種を商ふものあり、其の名を長次と云ふ。久しく舊患を憂へて紀州十津川に湯治しけり。病に相當りしにや、十四五日の間に平復し侍り。長次或日思ふやう、年ごろ聞き傳へし十津川の溫泉の奧には、人參黃精と云ふもの生ひ出で、尋ね當れば多く有りと云ふ。思ふに近き所を搜し見ばやと思ひ、僕をば宿に留め、唯一人山深く入りしかば、道に踏み迷へり。一つの谷に下りて見れば、美しき籠の流れ出でければ、此の水上に人里ありと思ひ、水に隨うて上るに、日は已に暮れかゝり、鳥の音遂に塒を爭ふ。斯くて十町ばかり行くかと覺えし、岩を切り拔きたる門に至り、內に入りて見れば、茅葺の家五六十ばかり軒を並べて立ちたり。家々の有樣、石垣苔生ひて蹟翠の色を成し、竹の折戸物寂しく、蔦葛冠木を飾る。犬吠えて[illegible]、鷄鳴いて屋に上る。桑の枝茂り、麻の葉繁ひ、誠に人の住みならしたる里村なり。樵り積みける椎柴、舂きてほす粟稗、流石に寂しからずぞ見えたる。人の形皆古風にして、素袍袴に烏帽子着て、行き違ふ[illegible]に威儀ありならず。長次が立ち息らひたる姿を

見て、大いに怪しみ驚きて問ひけるやう、「如何なる人なれば、此の里に彷徨ひ來れる、世の常にして知るべき所にあらず」と云ふ。長次ありの儘に語る。爰に一人の老人衣冠正しきが、逢の沓を履き藜の杖をつきて、自ら三位中將と名乘り、長次に向ひて曰く、「こゝは山深く巖峙ち、熊狼羣り走り、狐木玉の遊所にして、日は暮れたり、此の儘打捨てなば、これぞ水に溺れたるを見ながら援はざるに同じかるべし、此方へ坐せよ宿かし侍らん。」とて家に連れて歸りぬ。内の體汙からず、召使はるゝ男女更に濫りならず。既に一間の所に呼び居ゑ、燈を挑げ座定まりて後に長次問ひける樣、「此所は有るとも知らぬ村里なり、如何に住み初め給ひしやらん。」と云ふ。主眉を顰めて、「これは浮世の難を逃れし人の隱れし住所なり、若し強ひて其の古の事を語らば、徒らに愁へを催す媒ならん。」と云ふ。長次強ちに其の住み初めし故を問ふに、主語りけるは、「我は平家沒落して西海の浪に沈みける頃より此所に住み初めたり。我は是れ小松の内府重盛公の嫡子三位中將維盛と云ひし者なり。祖父大相國清盛入道は惡行重疊して人望に反き、父内府は世を早うし給ひ、伯父宗盛公世を取りて、非道不義なる事法に過ぎたり。一門の輩多くは奢を極め榮華に誇り、家運忽ちに傾き、東國には兵衛佐頼朝、譜代の家人を催して義兵を擧げ、北國には木曾の冠者義仲、一族郎等を勸めて謀反す。其の外諸國の源氏、蜂の如く起り蟻の如くに集まりけるを、茲に走せ向ひ彼處に攻め寄するに、更に軍の利なく、

味方の軍兵たび／＼に討たれて、竟に木曾が爲に都を追ひ落され、攝津國一の谷に籠り、暫く心も安からしに、九郎義經の爲に此處をも破られ、一門の中に、通盛敦盛以下多く亡び給ひ、目のあたり魂を消し胸を冷し、憂目を見聞く悲しさ、生を變ふるとも忘るべき事かや。とかくする程に讚岐國八島の洲崎に城郭を構へ、一門の人々立て籠りしかば、故郷は雲居の餘所に隔たり、思ひは妻子の名殘に止まり、身は八島に在りながら、心は都に通ひければ、萬につけて味氣なく、行末とても頼みなしと、浮れ果てたる心より思ひ立ちて、譜代の侍與三兵衛重景石童丸と云ふ童、武里と云ふ舍人は、舟に心得たる者なれば、此の三人を召し具して忍びて八島の内裏を出で、阿波の由木の浦に着きて、

　をり／＼はしらぬ浦路のもしほ草書き置く跡をかたみとも見よ

重景返しと思しくて、

　我が思ひ空ふく風にたぐふらしかたぶく月にうつる夕ぐれ

石童丸涙を押へて、

　玉はこの道ゆきかねて乘る舟に心はいとゞ焦れにけり

それより紀伊國和歌吹上の浦をうち過ぎて、由良の湊より舟を下りて、戀しき都を眺めやり、高野山に詣でて、瀧口時頼入道に逢うて案内させ、院々谷々拜み廻り、これより熊野に參詣すべしとて三

藤の渡り、藤代より和歌の浦吹上の濱、吉木の杜蕪坂千里の濱のあたり近く、岩代の王子を打越え岩田川にて垢離を取りて、

岩田川ちかひの舟に棹さしてしづむ我が身も浮びぬるかな

それより本宮に詣でつゝ、新宮那智殘りなく巡りて、濱の宮より舟に乘り、磯の松の木を削りて、

權亮三位中將平維盛道場を出でて那智の浦に入水す、元曆元年三月二十八日、維盛二十七歲、重景同年、石童丸十八歲、

生まれては終に死ぬてふ言のみぞ定めなき世にさだめなりける

と書きて世には入水と知らせけれども、今此の山中に隱れしかば、肥後守貞能跡を求めてたづね來れり、平氏の一門沒落して、皆悉く壇の浦にて水中に入り給ふ。都に隱れし平氏の一類も、根を斷ち葉を枯らしけり」と貞能語り侍るにぞ、よくこそ逃れけれと哀しき中に心を慰め、田を植ゑ薪採り、自ら淸風明月に心を澄まし、物靜かにして魂を養ふ、人里絶えて音問もなし、花の咲くを春と思ひ、木の葉の散るを秋と知り、月の出づるを數へ盡して、月なき時を晦と明し暮す身となり侍り、貞能重景石童丸が子孫廣がりて、家居を並べて住みけるなり。定めて賴朝世を取りぬらん、今はこれ誰の世ぞ、願はくは物語せよ」とあり。長次大いに驚き恐れ、只苟且の山住ひ、世の常の事にこそ思ひ奉り

しに、かゝる止事なき御身とは露も思ひ宿らざりけり。」とて首を地につけ禮儀を致す。三位中將、「否とよ、今は然るべからず、それ〳〵。」と宣ふに貞能重景石童丸立出でたり。何れも其の年六十許りに見えたるが、貞能云ふ樣、「とても打解け給ひたる御事なり、其の世の移り變りし事共語りて聞かせ給へ。」となり。長次居直りて、「さらば粗々聞き傳へし事語り侍らん。扨も平氏の一門西海の波に沈み給ひ、兵衛佐頼朝天下を治め、幾許もなく病死し給ふ。蒲冠者範頼九郎判官義經みな頼朝に討たれ、頼朝の子息頼家世を執り子なくして病死あり、頼朝の二男頼家の舍弟跡を治め給ふ。頼家の妾の腹に子ある由聞き傳へて尋ね出して鶴岡の別當になさる。禪師公曉と號す。和田畠山梶原等が一族此の君の時討亡ぼさる。實朝卿鶴岡へ社參の夜、彼の禪師公實朝を殺す。北條義時其の跡を奪ひて天下の權を執る。是れより九代に至り、相模守高時入道宗鑑大いに驕りて國亂れ、新田義貞鎌倉を亡ぼす、足利高氏と新田と戰ひあり、足利遂に義貞を亡ぼし、其の子息義詮を京の公方と定め、二男左馬頭基氏を鎌倉の公方と定め天下暫く靜かなりしかども、王道は地に落ちて有るか無きかの有樣なり。武家世を執り、權威高し、後に京都鎌倉の公方不會になられて、鎌倉の執權上杉の一族、公方を追ひ落す。此の時に當りて京都の公方も權威を失ひ、諸國の武士互に威を爭ひ天下大いに亂れて合戰止む時なし。三好修理大夫其の家人松永彈正は畿内南海に逆威を振ひ、今川義元は駿河遠州を順へ、國司源具教は

勢州におり、武田晴信甲信兩國に蔓り、北條氏康は關八州に跨り佐竹義重は常陸におり、蘆名盛高は會津を領し、長尾景虎は越後よりおし出づる、朝倉義景越前を守り、畠山が一族は河内におり、陶尾張守は周防長門を押領し、毛利元就安藝に起り、尼子義久は出雲隱岐石見伯耆に廣ごり、豐後に大友肥前に龍造寺、其の外江州に淺井、佐々木、尾州に織田、濃州に齋藤、大和に筒井、其の外諸國郡邑の間に黨を立て兵を集め、互に村里を爭うて、攻め戰ひ奪ひ取る。昔安德天皇西海に赴き給ひし、壽永二年癸卯より、今弘治二年丙辰の歲まで、星霜三百七十四年、天子已に二十六代、鎌倉は賴朝より三代、北條家九代、足利家十二代、京都の足利今已に十三代、新將軍源義輝公と申すなり。」と語りしかば、三位中將是れを聞き給ひて不覺の淚を流し給ふ。夜已に更け行けば、山の中物寂かに、梢を傳ふ風の音軒近く聞えて、長次が魂清み渡り、涼しく覺えたり。主さまざま酒を進めらる。夜已に明けて、山の端明く横雲靉きて、鳥の聲定かになれば、長次今は是れまでなりと、拜禮謹みて立ち出づれば、主宣はく、「我等更に仙人にもあらず、幽靈にもあらず、多くの年を重ねし事思はざる外の幸ひなり。汝歸りて世に語る事勿れ。」とて、

深山邊の月は昔の月ながらはるかにかはる人の世の中

と詠みて、別れをとり、内に入り給へば、長次は切通の門を出でて、一町ばかりに一所づゝ、竹の杖

をさして標とし、十津川の宿に歸る事を得て、來年の春酒肴調へつゝ、又かの山路に分け入りて尋ねるに、唯古松老槐に横たはり、巖則ち茅薄茂り、樵の通ふ處鳥の聲幽に、草刈の行く處谷の水ながれ、標の竹も見えねば、尋ねわびつゝ歸る。さも〳〵これは仙境の道人なりけん、其の顛知りがたし。

眞紅の擊帶

越前敦賀の津に、濱田長八とて有德の人ありし、二人の娘を持ちたり。其の姉に若林長門守が一族檜垣平太と云ふ者、武門を離れ商人となり、金銀財寶に持ちて住み侍り。これに一人の子あり、平次と名付く。長八が娘と同じ年頃にて、幼なき時は常に出で合ひて遊びけり。平太則ち長八が姉娘を我が子の妻とすべき由、媒を以て云はせければ、即て受合ひけり。さらば其の印にとて、酒肴調へ眞紅の擊帶一つ娘に取らせたり。天正三年の秋朝倉が餘黨起り出でて、虎杖、木芽峠、鉢伏、火燧、吸津、龍門寺、諸方の要害に立籠る。其の中に若林長門守は河野の新城に籠りしかば、信長信忠父子八萬餘騎を率して、敦賀に著陣あり。木下藤吉郎に仰せて、河野の城を取り圍ませらる。檜垣平太は若林が一門なれば、敦賀に在りても逃がれられん事を恐れ、一家を開け退きて、所緣につきて京都に上り、

う、「ゆめ／＼有るべき事とも覺えず、御父母の情有つて我を養ひ給ふだに有るを、許されもなくして正なき事を行ひ、若し洩れなん後をば如何せん、疾く／＼歸り給へ」と云ふ。妹大いに怨み怒りて云ふ樣「我が父已に婿の思ひを爲し、此の家に養へり。自ら爰に來れる志を空しくなしたまはば、身を投げて死なんに、必ず後の悔みを爲し、生を代へても怨み參らせん」と云ふ。平次力なく其の心に隨ひけり。曉になりて妹は起きて去にけり。それよりは只管に暮に來りて朝に歸る、宵々毎の闇守を恨なる許り、打解けて別なく契りけり。三十日許りの後、或夜又來りて平次に語るやう「今までは人更に知らず、されども事は洩れ易ければ、若し顯はれて憂き目をや見ん。君我を連れて垣を越えて跡を晦ましたまへ、心安く偕老を契らん」と云ふ。平次も此の上はわりなき情の捨て難くして、うち連れて忍び出でつゝ、三國の湊に被官の者ありける、それが許に行きてかう／＼と名乘り、賴む由云ひければ、かひ／＼しく受け入れて一年許り隱れ住み侍り。女或時云ふやう「父母の警めの恐ろしさに君と連れて、こゝに逃げ來りけれ。已に一年の月日を過したれば、二人の親さこそ自らを思ひ給ふらめ、今は如何にも罪免し給はん、いざや古鄕に歸らん」と云ふ。平次此の上はとて、連れて敦賀に歸り、まづ女をば舟に置きて、我が身許り濱田が家に到り、案内して對面を遂げて云ふやう「奴も我さしも撫恤思しけるを、御宥されもなく、正なき爲して不義の名を蒙りし事、其の罪輕からずと雖も、既

に年を重ねぬれば今は怒りも緩くなり給はん、此の故に是れまで連れて歸り侍り、罪宥し給はんや。」と云ふ。濱田聞いて「それは如何なる御事ぞ、更に心得難し。」と云ふ。平次有の儘に語りて眞紅の帶を取り出して見せたり。其の時濱田大いに驚き「此の帶は其の古姉に約束せし時に賜はりし物なり。姉空しくなりければ棺に納めて埋め侍り、又妹は病重く床に臥してあり、君と連れて他國へ行くべき事なし。」とて、舟に留め置きたりと云ふを聞きて人を遣はして見するに、舟には何かの外は更に人なし。是はそも如何なることぞとて、濱田夫婦は驚き疑ふ處に、妹の娘其の儘床より立ち上りて、様々口走りて、「我已に平次に約束ありながら、世を早うせしかば、送り捨てられて塚の主と成されしかども、平次に深き宿世の緣あり、此の故に今又こゝに來れり。願はくは我が妹を以て平次が妻と爲してたべ、然らば自頭の病も癒ゆべし、是れ偏に我が心に望む處なり。若し此の事叶へ給はずば、妹が命をも同じ道に引き取りて、我が黄泉の友とせん。」と云ふ。家内の人皆驚き怪しみて、其の身を見れば妹の娘にして、其の身の振ひ物いふ聲言葉は、皆姉の娘に少しも違はず。父の濱田云ふやう、「汝は已に死したり、如何でか其の跡までも執心ふかくは思ふぞや。」と。靈魂答へて云ふやう、「自ら先世に深き緣ある故にこそ導けれども、閻魔王に暇を請はり、此の一年ばかりを許され侍り。今は冥途に歸り侍る、望む所かなふ事違へ給ふな。」とて、平次が手を執り、涙を流し暇乞して、又手を合はせ

父母を拜みつゝ、教示ふやうに、竈へて平次が妻と成るとも、女の道よく守り父母に孝行をつくし、今は是れまでぞ、とて嗚々と震ひて、地に倒れて死に入りたり。人々驚き顔に水灑ぎければ、妹蘇り病は忽ちに癒えたり。先の事共を問ひたるに、一つも覺えたる事なし。是れによりて終に妹娘を以て平次と夫婦に成しつゝ、さま〴〵佛事を營み、姉娘が跡を弔ひ侍り。是れを聞く人、奇特の例に思ひけり。

狐の妖怪

江州武佐の宿に、割竹小彌太と云ふ者あり、元は甲賀に住みて、相撲を好み力量ありて、心も不敵なりけるが、中頃爰に來り旅人に宿貸し、旅籠を以て營みとす。或時所用の事ありて、篠原堤を行きけるに、日既に暮れ掛り前後に人跡もなし、唯我獨り道を急ぐ。其の間、道の傍に一つの狐馳け出でて、人の髑髏を戴き立ち上りて北に向ひ禮拜するに、彼の髑髏地に落ちたり。又取りて戴きて禮拜するに又落ちたり。落つれば又戴く程に、七八度に及びて落ちざりければ、狐則ち立居心の儘にして、百度許り北を拜む。小彌太不思議に思ひて、立ち止りて見れば、忽ちに十七八の女になる、其の美しさ國中には並びもなく覺えたり。日は暮れ果てて昏かりしに、小彌太が前に立つて聲うち揚

は物哀れに啼きつゝ行く。元より小彌太は不敵者なれば、少しも怖れず女の側に立ち寄り、「如何に是れは誰人なれば、何故に日暮れて唯獨り物悲しく啼き叫び、何處を指して坐するやらん。」と云ふ。彼の女嗟く〳〵答へけるは、「自らは是れより北の郡余五と云ふ所の者にて侍り。此の程山本山の城を攻め取らんとて、木下藤吉郎とかや聞えし大將馳せ向ひ、其の引足に余五木下の邊皆燒き拂ひ給へば、自らが親兄弟は山本山にして討死せられ、母は逃れて山中に出でたりしに、或る所へ軍兵うち入つて、家に有りける財寶は一つも殘さず奪ひ取りたり。母聲を揚げて恨みしかば、切り殺しぬ。自ら怖ろしさに叢の中に隱れて、辛うじて命を繼ぎけれども親もなく兄弟もなし。頼む陰なき孤子となり、何處に身を置くべき便りもなければ、今は唯身を投げて死なばやと思ひ侍るに、悲しさは堪へ難くて人目をも知らず啼き侍るぞや。」と云ふ。小彌太聞いて、正しく狐の化けて我を誑さんとす、我は又此の狐を誑して德つかばやと思ひ、「まことに〳〵哀れなる御事かな、親兄弟も皆になりて、立ち寄る陰もおはしまさねば、幸ひに某の家貧しけれども、一人を養ふ程の事は、ともかうもし侍らん、我が家の事心に任せて賄ひ使はれはべらば、頼もしく見附け侍らん。」と云ふ。女大いに喜びて、「誠に哀れ思召し養うて給はらば、自らが爲、父母の生まれ代りと思ひ奉らん。」とてうち連れて武佐の宿に到り、小彌太が妻に對面して、ありのまゝの如くに語り聞かせければ、妻も誠に思ひて、殊さら形の美しさを見て、

勞り愛しむ。小幡太郎左衛門も妻に孤の事を語らず。天正の初め江州漸く靜かになり、北の郡は木下藤吉郎是れを領知し給ふに、石田市之助京より下りける次に、武佐の宿小幡が家に留まり、此の女を見て限りなく愛で迷ひ、如何にもして此の女を我に與へよと言はれしかば、小幡に云ふやう、「歴々の諸大名皆召し給へども、今に何方へも參らせず、某身近の便りよろしく宛て行ひ給はば奉らん。」と云ふ。石田歸京して、金子百兩を出し與へ、女を買ひ取り打連れて岐阜に歸られたり。女いと才覺あり、萬に付けてさかしく利根にして、人の心に先だち、物を斷ふこと石田が思ふ如くなれば、本妻をも傍になし、唯此の女を寵愛す。されども女は少しも高ぶる氣色もなく、本妻の心を取りて、「自らは女なり、如何でか本妻の心を背き奉らんや。」とて、夜晝まめやかに仕へ侍りしかば、本妻も流石に憎からず、懇にいとほしみけり。出入の輩にも、間々に付きて物なんど取らせけり。或は絹小袖ふくさ物、針白粉やうの類、いつ求め置くとも見えねども取り出して贈り遣はす。而も其の身麻績みつむぎ、物縫ひ畫かき花結びまでくらからず侍り。石田が家にこそ賢女を求め得たれと取沙汰あり。半年許りの後石田又京都に上る、女云ふ樣、「必ず忠義を專らとして私を忘れ、千金よりも重き御身を小細の事に替へ給ふな、御内の事は自らに任せ給へ。」とて出し立ちて京に上せたり。京にして高雄の僧、祐覺僧都に對面す。祐覺熟と見て、「石田殿は妖怪に犯されて、精氣を吸はれ給ふ、速く

教治し給はずば、命を失ひ給ふべし。此の相、果して見損ずまじ」と云ふに、吉田更に信ぜず、「我を誑く、賣僧の妄語、今に始めぬことゝて打笑ひしが、程なく心地煩ひ付き、面の色黄に痩せて、身の肉枯れて骨立ち、唯うか／＼として物事正しからず、家人等驚きさま／″＼醫療すれども驗なし。此の時に高雄の僧の云ひし事を思ひ出して、紹巴を請じて見せしむ。僧の曰く、「此の事我更に見損ずまじ、初め我が云ふ事を信ぜずして、今此の病患はれたり。佛法の道は慈悲を先とす、祈禱を以て是れを治せん、早く麓に歸りて待つべし、我も下りて驗を現はさん」と云はれしかば、家人等驚き、高雄と諸共に食を日に精進して麓に歸り、壇を飾り、十四行の供物、二十四の燈明、十二本の幣を立て、四種の名香を焚いて、一紙の祭文を讀みて禳して曰く、

維年天正歳次甲申、今月今日、吉田氏某妖狐の爲に惱まさる。夫れ一氣始めて別れ、三才已に剖し、物と人と各其の類に隨うて、性分其の稟を受けしより以來、品位皆齊しからず。然るに狐狸の妖者あて恣に怪を爲し、木の葉を戴きて衣とし、髑髏を頂きて髪とし、貌を更め媚を生ず。暴帶に冰を聴きて氷を渡り、疑ひを致す事時として忘れず、尾を撃ちて火を出し、祟を作す事更に止まず。此の故に上古は宗廟の地に住み、古は陰陽の理を語る。千年の性を兩明の表に顯はし、一丈の身を翼手の中に繋がしむ。然るに吉田氏某は賢戸の曾孫武門の命士なり、何ぞ妄りに汝が狂魅を

塵して其の精氣を奪ふや、身を武佐の旅館に寄せて、愛を良家の寝席に興さしむ、汝が狀は綏々、汝が名は紫々、式て其の醜をいひ、唱へて其の惡を示す者なり。首丘は其の本を忘れざる事を云ふと雖も、虎威を假るの奸しき事は隱すべからず。汝早く速かに去れ速かに去れ。汝知らずや、九尾誅せられて千歳に亡したる件を、誰か汝が妖術を厭ひ悪まざらん。若し速かに退き去らずは、州郡七小の神社を驚かし、斬殺の劍を以て殺し、六害の水に沈めん。

と讀み終りしかば、俄に黒雲靉靆き大雨降り、雷電夥しく鳴り渡りければ、女甚だ恐れ惑ひ、其の儘倒れて死にけり。家人等驚きて立ち寄りて見れば大なる古狐なり。首に人の髑髏を戴きて落さずしてあり。此の手より人に遣はし與へたる物共取寄せて見れば、絹小袖と見えしは芭蕉の葉、白粉と云ひしは糠埃なり、針かと思ひしは松の葉なりけり。石川氏が心地快然と涼やかになり忽ちに平復して、此の物共を見るに怪しき事限りなし。狐の尸をば遠き山の奥に埋み符を押して跡を禳ひ、丹砂雄黄なんど調合の薬を服せしめて其の根本を補ひ、扨武佐の小嶋太を尋ねさするに、女を賣つて德つき家を移して何地行きけるとも知らず、正に狐魅よく人を惑はし、訪應僧の法驗を感歎しけるとぞ。

伽婢子巻之二　終

伽婢子 巻之三

妻の夢を夫面に見る

周防山口の城主大内義隆の家人、濱田與兵衛が妻は、宮木の浦の遊女なりしが、濱田是れを見初めしより、わりなく思ひて契り深く語らひ、終に迎へて本妻とす。容美しく風流ありて、心ざま情深く歌の道に志あり、手も美しう書きけるが、しかるべき前世の契りにや、濱田が妻となり、互に妹背の語らひ此の世ならずぞ思ひける。主君義隆京都将軍の召しに依りて上洛して、正三位の侍従兼太宰大弐に補任せられ、久しく都に逗留ありし、濱田も召し連れられ京にありければ、妻これを戀うて、間なく時なく待ち侘びはべり。頃は八月十五夜、空曇りて月の見えざりければ、

おもひやる都の空の月かげを幾重の雲かたちへだつらむ

と打詠め、寝られぬ枕を敲り傾けて、明し兼ねたる夜を恨み臥したり。其の日義隆朝臣に下り給ひて、濱田も夜更くるまで城中にありて漸く家に歸る。其の家は總門の外にあり、雲霧て月暗くして、定か成らざりけり。道の傍半町許りの叢に、幕うち廻し、燈明くかゝげて、男女十人ばかり、今宵し

月に憧し酒宴すると見ゆ。濱田思ふやうは、國主歸り給ひ家々喜びをなす、誰人か今宵此處に出でて遊ぶらんと怪しみて、密かに立ち寄り、白楊の一樹繁りたる間に隱れて窺ひ見れば、我が妻の女房も其の座にありて、物云ひ笑ひけり。是れはそも如何なることぞ、由なき業かなと怨みながら、猶其の有様をつくづくと見居たり。座上に在りける男云ふやう、「如何に今宵の月こそ殘り多けれ、心なの雲や、是れになど一詞のふしもおはせぬか」と云ふ。濱田が妻辭しけれども、人々強ひて歌詠めと勸むれば、

きりぎりす聲もかれ野の叢に月さへくらし殊更に啼け

と詠みければ、柳陰に隱れて聞きける濱田も憐れに思ひつゝ涙を流す。座中の人はさしも興じて、杯を廻らす。かくて十七八と見ゆる少年の前に、杯あれども酒を受けざりしを、座中強ひければ、「此の女房の歌あらば飲みはべらん。」と云ふ。女房「一首こそ思ふ事によそへても詠みけれ、免し給へ」と云ふにきかず、さてかくなん、

ゆく水のかへらぬ今日を惜しめたゞわかきも年はとまらぬものを

杯あるかたに廻りて、濱田が妻に又「歌うたひ給へ。」と云ふに、今樣一節を唄ふ、

さびしき閨の獨寝は、風ぞ身にしむ荻原や、そよぐにつけて音づれの、絶えても君に恨みはなき

に、戀しき空に飛ぶ鴈に、せめて便りをつけてやらまし。

その座に儒學せしと見えし男、如何思ひけんうち涙ぐみて、

螢火穿二白楊一　悲風入二荒草一

疑是夢中遊　愁斟一杯酒

と吟詠するに、「いかで今宵許の夢なるべき、凡て人の世は皆夢なるものを」とて、濱田が妻俤に涙を流す。座上の人大いに怒りて、「此の座にありて涙を流す忌々しさよ」とて、濱田が妻に杯を投げかけしかば、額に當る。妻怒りて座の下より、石を取り出し投げたりければ、座上の人の頭にあたり、血走りて流るゝ事瀧の如し。座中騒ぎ立ち騒ぐかと見えし。燈火消えて人もなく、唯叢に蟲の聲のみぞ殘りたる。濱田大いに怪しみ、扨は我が妻空しくなりて幽靈の顯はれ見えけるかと、いとゞ悲しくて家に歸りければ妻は臥してあり。如何にと驚かせば、妻起き上り喜びて語るやう「餘りに待ちわびてまどろみしかば、夢の中に十人許り、叢に酒飲み遊びて歌を望まれ、其の中にも背の高きをおさへて謳ひ侍り。座上の人自らが涙を流す事を忌みて杯を投げ掛けしを、自ら石を取つて打ち返すに、座中騒ぎ立つと覺えて夢醒めたり。杯の額に當りしと覺えしが夢さめても、今も頭の痛く覺ゆ」とて、歌も詩もかう／＼と語る。白楊の陰にして見聞きたるに少しも違はず。濱田つら／＼思

ふに白楊陰に隱れて見たりし事は、我が妻の夢のうちの事にて有りけるとなん。

鬼谷に墜ちて鬼となる

若州遠敷の郡熊川と云ふ所に蜂谷孫太郎と云ふ者あり、家富み榮えて乏しき事なし。これ故に耕作商賣の事は心にも掛けず、只儒學を好みて僅かに其の片端を讀み、是れに過ぎたる事はあるべからずと一文不通の人を見ては物の數ともせず、文字學道ある人を見ても、我には優らじと誇慢し、剩へ佛法を譏り、善惡因果の理、三世流轉の教へを破り、地獄天堂娑婆淨土の說を笑ひ、鬼神幽靈の事を聞きては更に信ぜず、「人死すれば魂は陽に歸り魄は陰に歸る、形は土となり何か殘る物なし。美食に飽き小袖着て、妻子豐に樂しみを極むるは佛よ、麁食をだに腹に飽かず、麻衣一重だに肩を纏に妻子を沽却し辛苦するは餓鬼道よ。人の門に立ち聲をはかりに物をこうて、わけを食ひて穢はしとも思はず。石を枕にし草に臥して、雪降れども赤裸なる者は畜生よ。科を犯し牢獄に入れられ、縄を掛け頸を刎ねられ、身を試され骨を碎かれ、或は水責火刑磔等は地獄道なり。これを取扱ふ者は獄卒よ、此の外には總て何もなし、目にも見えぬ來世の事、眞にもあらぬ幽靈の事、僧法師巫神子の云ふ處を信ずるこそ愚かなれ」と云ひ罵り、偶諫むる人あれば、四書六經の文を引出し、邪に義理をつけ

て、嗜香に任せて云ひかすめ、放逸無慙なる事云ふ許りなし。時の人其孫太郎と名付けて、一つ者にして取り合はず。或時所用の事に付きて敦賀に赴くとて、唯一人行きけるが、日たけて家を出でたりければにや、今津川原にして日は暮れたり。江州志の龍、兵乱の後なりければ人の往来も稀なり。宿取るべき家もなし。河原表に出でて一見渡せば、人の白骨此処彼処に乱れ、水の流れ物寂しく、日は暮れ果てて四方の山々雲閉ぢこめ、立ち寄るべき宿もなし。如何すべきと思ひ佗びつゝ、北の山陰に小高く見えたる松の林あり。此岩に分け入りて、樹の根を便りとし休らひ居たれば、鵂鶹の声すさまじく狐の啼き声しげく、稍に渡る夕嵐いと身に染みて、御とむ心細く思ふ所に、左右を見れば人の屍骸七つ八つ、西枕南向に倒れてあり。蕭々たる風の紛れに、小雨一とほり過ぎ、電光ひらめきて時々照り出でたり。かゝる所に臥したる尸、一同にむくと起き上り、孫太郎を目掛けて来る。驚き、恐ろしさ限りなく松の木に登りければ、尸共木の本に立ち寄り、今宵の内には此の者は取るべきものをと上を見る間に、雨降り止み空晴れて、秋の月皎然に輝き出でたり。忽ちに一の夜叉走り来れり。其の色青く、角生えて目遠く髪乱れて、両の手に一つ尸を掴み、首を引き抜き手足をもぎ、是れを喰ふ事瓜を喰ふが如くにして皆く喰ひて後、我が登り隠れたる松の根を枕として臥したれば、鼾の音地に響く。孫太郎つらつら思ふやう、此の夜叉睡り覚めなば、一定我を引き下して殺し喰はん、ただ能

く寐入りたる間に逃げばやと、靜かに樹を下り、逸足を出して走り逃げければ、夜叉目を覺し、隙間もなく追ひかくる。山の麓に古寺あり、軒破れ壇頽れて住僧もなし、うちに大體の古佛あり。此處に走り入りて助け給へと佛に祈り、後に廻りたれば、佛像の背なかに穴あり、孫太郎此の穴の中に入りて、腹の中に忍び隱れたり。夜叉は後より驅け入りて堂の内を搜しけれども、佛像の腹までは思ひ寄らざりけん出でて去りぬ。今や心安しと思ふ所に此の佛像足拍子を踏み鼓を敲きて、「夜叉は是れを求めて取り逃し、我は求めずして自ら得たり、今夜の點心儲けたり。」と歌うて、からからと打笑ひ堂を出でて歩み行く。彼處なる石に躓きてはたと倒れ、手も足も打ち碎けたり。孫太郎穴より出でて佛像に向ひ「我を喰はんとして禍其の身に當れり。人を助くる佛の結構。」と罵りながら堂より東に行けば、野中に燈火輝きて、人多く坐して見ゆ。是れに力を得て走り赴きければ、首なき者、手なき者、足なき者、皆赤裸にて並び坐したり。孫太郎肝を消し走り拔けんとす。怪物大いに怒りて、「我等酒宴する半ばに座を醒す事こそ安からね、捕へて肴にせん。」とて、一同に立ちて追ひかくる。孫太郎山際に添うて走りければ川あり、流るゝともなく渡るともなく向ひに驅け上れば、妖は立ち戻りぬ。孫太郎足に任せて行く、耳元に猶どよみ罵る聲聞えて身の毛竦ち、人心地もなく半里許り行きければ、月已に西に傾き雲暗く、草茂りたる山間に行きかゝり、石に躓きて一つの穴に落ち入りたり。其の深

き事百丈許りなり。やうやう落着きければ、生ぐさき風吹き凄まじき事骨に徹る。光明らかになりて見廻しければ、鬼の集まり住む所なり。或は髪赤く頭の角火の如く、或は青き毛生えて翼ある者、又は鳥の嘴ありて牙喰ひ違ひ、又は牛の頭獣の面にして、身の色赤きは紅の如く青きは藍に似たり。目の光は雷の如く、口より火焔を吐く。孫太郎が来るを見て互に曰く「これ此の国の宝となる者ぞ取り逃すな」、唯捕へよとて、鐵の網を入れ鍋の手綱さして、鬼の大王の前に引き居うる。鬼の王大いに怒りて曰く、一族人間に在りて徒に三寸を動かし舌を翻し、鬼神幽霊無しと云うてさまざまの我等を蔑にし害を與ふる徒者なり。汝書生に眼を曝けて、中庸に曰く、鬼神の徳それ盛んなるかなと、論語に曰く、鬼神を敬して之を遠ざくと、易の繋辞に曰く、鬼を一車に載すと、詩の小雅に曰く、鬼となし蜮となすと、其の外左傳には晋の景公の夢、鄭の伯有が事、皆鬼神を云へり。唯怪力乱神を言はずと云へる一語を、邪に心得て我らに悪名を附る事は何の故ぞ」とて、即ち下部の鬼に仰せて散々に打擲せしむ。鬼の王の曰く「その者長高く痩せよ」と、鬼共集まりて頭と手足まで引き延ばし、俄に身の長一丈四五尺になり、首の筋伸ばし、鬼共突き放ち、押し立て出ますれば、ゆらめきてうち倒れたり。鬼の王又云ひけるは「其の者身の長短くせよ」と、鬼共又捕へて頭より踵まで打ち縮めければ、俄に横ぶとりに短くなる。突き立て歩まするに、むくむくとして蟹のごと

り、鬼共手を打つて大いに笑ふ。然に年老いたる鬼の云ふやう「汝常に鬼神なき者と云ひし故なり。今此の鬼共の如く様々嬲り、辱しめばかりなる事を見たり。實に不便の事なれば許し與へよ」と云ひて、手にて捉へ投げしかば、孫太郎元の姿になりて、「さらば是れより人間に返すべし」と云ふ。鬼共皆曰く、「此の者を只返しては安からじ、餞すべし」とて、或鬼、「我は雲路を分くる角を取らせん」とて兩の角を孫太郎が額に置く。或鬼は、「我は風に嘯く嘴を與へん」とて、鐵の嘴を孫太郎が唇に加へたり。或鬼、「我は朱に亂れし髪を與へん」とて紅藍の水にて髪を染めたり。或鬼、「我は碧に光る睛を與へん」とて青き珠二つを目の中におし入れたり。已に送られて穴を出でつゝ、家に歸らんと思ひ今津川原より道にさし覚れば、雲路を分くる雨の角差向ひ、風に嘯く嘴尖り、朱に亂れし髪倒に立ちて火の如く、碧の光を含む睛輝き、さしも恐ろしき鬼の姿となり、熊川に歸り家に入りたれば、妻も下人も怖れ驚く。孫太郎涙を流し、「かく〳〵の事ありて此の姿に成りしかども、心は昔に變らず」と云ふに、妻は、「中々此の有様、目の前に在に見るも情なく悲し」とて、孫太郎の頭におほひを打掛けて唯泣き悲しむより外はなし。幼き子供は怖れ泣きて逃げ、四邊の人集まりて手を打つて怪しみ見る。孫太郎も物憂く覺えて、戸を閉ぢて人にも逢はず、物をも食はず打籠り、思ひに窶れて煩ひ付き、遂に空しく成りぬ。其の後時々は元の孫太郎の姿にて、幻の如く家の邊りを歩きけるを、佛事營みけれ

ぼ二度見えずとぞ。

牡丹燈籠幽霊の事

年毎の七月十五日より二十四日までは、精霊の棚を飾り、家々是れを祭る。又色々の燈籠を作りて、或は祭の棚に點し、或は町家の軒に點し、又精霊の塚に送りて石塔の前に點す。其の燈籠の飾物或は花鳥或は草木、さまざま殊勝らしく作り成して、其の中に蝋燭點して夜もすがら置く。是れを見る人道も去りあへず。又其の間に踊子共の集まり、聲よき音頭に謡歌出させ振よく踊る事、都の町々上下皆かくの如し。天文戊申の歳、五條京極に荻原新之丞と云ふ者あり、近き頃妻に後れて愛執の涙袖に餘り、戀慕の思ひ胸を焦し、獨り淋しき窓の下に、ありし世の事を思ひ續くるに、いとゞ悲しさ限りもなし。精霊祭の營みも、今年はとりわけ、此の妻さへ無き名の數に入りける事よと、經讀み回向して、終に出でても遊ばず、友達の誘ひ來れども心唯浮き立たず、門に佇み立ちて浮れ居るより外はなし。

いかなれば立つも離れず面影の身にそひながらかなしかるらむ

と打詠じ涙を押拭ふ。十五日の夜いたく更けて、遊び行く人も稀になり、物音も靜かなりけるに、

一人の美人其の年二十許りと見ゆるが、十四五許りの女の童に、美しき牡丹花の燈籠持たせ、さしも緩やかに打過ぐる、芙蓉の眥鮮やかに楊柳の姿嫋なり、桂の黛、緑の髪いふ許りなくあてやかなり。荻原月の下に是れを見て、是れはそも、天津少女の天降りて人間に遊ぶにや、龍宮の乙姫の渡津海より出でて慰むにや、誠に人の種ならずと覺えて、魂飛び心うかれ、自らをさへ留むる思ひなく、愛で惑ひつゝ、後に隨ひて行く。前になりあとになり艶きけるに、一町許り西の方にて、彼の女後に顧みて、少し笑ひて云ふやう、自ら人に契りて待ち侘びたる身にも侍らず、たゞ今宵の月に憧れ出でて、漫に夜更けかた歸る道だに、凄まじや、送りてたべかし、と云へば、荻原やをら進みて云ふ樣、君歸るさの道も遠きには、夜深くして便なうはべり。某の住所は塵塚高く積りて、見苦しげなる茅屋なれど、便りにつけて明し給はば、宿貸し參らせん、と戯るれば、女打笑みて、窓もる月を獨り詠めて明くるわびしさを、嬉しくも宣ふものかな、情に弱るは人の心ぞかし、とて立ち戻りければ、荻原喜びて女と手を取り組みつゝ家に歸り、酒取り出し、女の童に酌とらせ少しうち飲み、傾く月に、わりなき言の葉を聞くにぞ、今日を限りの命ともがなと兼ての後ぞ思はるゝ。荻原、

また後のちぎりまでやは新枕たゞ今宵こそかぎりなるらめ

と云ひければ女とりあへず、

のふな／＼まつとしいはば来ざらめやかこち顔なるかねごとはなぞ

と返しすれば、荻原いよ／＼嬉しくて、互に解くる下紐の、結ぶ契りや新枕、交す心も隔てなき、睦言はまだ盡きなくに、はや明方にぞ成りにける。荻原「其の住み給ふ所は何處ぞ、木の丸殿にはあらねど名乗らせ給へ」と云ふ。女聞きて「自らは藤氏の末二階堂政行の後なり。其の頃は時めきし世もありて家榮えはべりしに、時世移りて有るか無きかの風情にて微に住みはべり。父は政宣京都の亂れに討死し、兄弟皆絶えて家おとろへ、我が身獨り女の童と萬壽寺の邊に住みはべり。名乗るにつけては、恥かしくもかなしくもはべるなり」と、語りける言葉やさしく、物腰明かに愛敬あり。已に横雲たなびきて、月山の端に傾き、燈火白う幽に殘りければ、名殘盡きせず起き別れて歸りぬ。それよりして日暮るれば来り、明方には歸り、夜毎に通ひ来る事更にその約束を違へず。荻原は心惑ひて浪速の事も思ひ分けず、唯此の女のわりなく思ひ變して、契りは千世も變らじと通ひ来る嬉しさに、晝と雖も又他人に逢ふ事なし。斯くて二十日餘りに及びたり。隣の家によく物に心得たる翁の住みけるが、荻原が家に怪しからず若き女の聲して、夜毎に歌唄ひ笑ひ遊ぶ事の怪しさよと思ひ、壁の隙間より覗きて見れば、一つの白骨と荻原と燈火の下に差向ひて坐したり。荻原物云へば、彼の白骨手足動き髑髏頷きて、口と覺しき所より聲響き出でて物語す。翁大いに驚きて、夜の明くるを待ちかねて荻原を

呼び寄せて、「此の程夜毎に客人ありと聞ゆ、誰人ぞ。」と云ふに、更に隱して語らず。翁云ふやう、「荻原は必ず禍あるべし何をか包むべき。」と、「今夜壁より覗き見ければかうかう侍り。凡そ人として命生きたる間は、陽分至りて盛んに清く、死して幽靈となれば陰氣烈しく邪に穢るゝなり。此の故に死すれば忌深し。今汝は幽陰氣の靈と同じく坐して是れを知らず、穢れて邪なる妖魅と共に寢て悟らず、忽ちに眞精の元氣を耗し盡して精分を奪はれ、災來り病出で侍らば藥石鍼灸の及ぶ所にあらず。傳尸癆瘵の惡症を受け、まだ萌え出づる若草の年を、老先長く待たずして、俄に黄泉の客となり、苔の下に埋もれなん、誠に悲しき事ならずや。」と云ふに、荻原始めて驚き、恐ろしく思ふ心付きて有の儘に語る。翁聞いて、「萬壽寺の邊に住むと云はば、其處に行きて尋ね見よ。」と教ふ。荻原それより五條を西へ萬里小路より此處彼處を尋ね、堤の上柳の林に行き廻り、人に問へども知れるかたなし。日も暮れ方に萬壽寺に入りて暫く休みつゝ、浴室の後ろ北に行きて見れば物古りたる魂屋あり。さし寄りて見れば、棺の表に二階堂左衛門尉政宣が息女彌子吟松院冷月禪定尼とあり、側に古き伽婢子あり、後に淺茅と云ふ名を書きたり。棺の前に牡丹花の燈籠の古きを懸けたり。疑ひもなく是れぞと思ふに身の毛竪ちて恐ろしく、跡を見返らず寺を走り出でて歸り、此の日頃愛で惑ひける戀も醒め果て我が家も恐ろしく、暮るゝを待ちかね明くるを恨みし心もいつしか忘れ、今夜若し來らば如何せんと

隣の翁が家に行きて宿を借りて明しけり。さて如何すべきと愁へ歎く。翁教へけるは、「東寺の卿公は行學兼ね備へて、而も驗者の名あり、急ぎ行きて頼み參らせよ」と云ふ。荻原彼處に詣でて對面を遂げしに、卿公仰せけるやう、「汝は妖魅の氣に精血を耗散し、神魂を昏惑せり。今十日を過ぎなば命は有るまじきなり」と宣ふに、荻原有りし儘に語る。卿公則ち符を書きて與へ門におさせらる。それより女再び來らず、五十日許りの後に、或日荻原東寺に行きて卿公に禮拜して酒に醉ひて歸る。流石に女の面影戀しくや有りけん、萬壽寺の門前近く立ち寄りて、内を見入り侍りしに、女忽ちに前に現はれ、甚だ恨みて云ふやう、「此の日頃契りし言の葉の、早くも僞りになり、薄き情の色見えたり、初めは君が志し淺からざりし故にこそ我が身を任せて、暮に行き朝に歸り、何時まで草のいつまでも、絶えせじとこそ契りけるを、卿公とかや、情なき隔ての謀して、君が心を餘所にせし事よ。今幸ひに逢ひ參らせしこそ嬉しけれ、此方へ入り給へ」とて、荻原が手を取り門より奥に連れて行く。伴し連れたる荻原が男は、肝を消し恐れて逃げたり。家に歸りて人々に告げければ、人皆驚きて行きて見るに、荻原は女の墓に引き込まれ、白骨とうち重なりて死してあり。寺僧達大いに怪しみ思ひ、やがて鳥部山に移す。其の後雨降り空曇る夜は、荻原と女と手を取り組み、女の童に牡丹花の燈籠灯させて出でて歩く。是れに行き逢ふ者は重く煩ふとて、あたり近き人は怖れ侍りし。荻

原が一族これを歎きて、三千部の法華經を讀み、一日頓寫の經を墓に納めて弔ひしかば、重ねて現はれ出でずと云ふ。

梅花の屛風の事

天文の末京都の兵亂打續き、三好と細川家年を重ねて合戰に及び、其の時の公方は光源院源義輝公、屢是れを鎭めんと謀り給へども、威輕く權薄くして、更に是れを用ゐる人なし。茲に周防國山口の城主太宰大貳大内義隆は、其のころ從二位の侍從に補任せられ、兵部卿を兼官して權威高く、西海に輝きしかば、公卿殿上人多く、義隆を賴みて、周防國に下り、山口の城に身を隱し、世の亂れを逃れ京の騷ぎをまぬかれ給ふ。然るに義隆久しく武道を忘れ、詩歌風詠の遊びを事とし、佞人を近づけ國政を蔑にし、物の上手と云へば、諸藝者多く集めて、晝夜榮耀を恣にせられしかば、其の家老陶尾張守晴賢謀反して、義隆を追ひ出し長門の大寧寺におし詰め、義隆終に自害せらる。尾張守は豐後國主大友入道宗麟が舍弟三郎義長を、山口の城に迎へて主君として政道執り行ふ。此の時に當つて、前關白藤原尹房公、前左大臣藤原公賴公は、山口の城を逃げ出づるに度を失うて、流矢に中りて薨じ給ふ。從二位藤原親世は髮を剃りて逃れ出で給ふ。其の中にも中納言藤原基賴卿は、謀是

しく、然も諸藝に渡り、繪よく書き給ひ、手跡歌の道に賢きのみならず、武道を心に掛け、馬に乗りて手綱の曲を究め、水練に其の術を傳へ、半日許りは水底にありても物とも思はず、又よく水を泳ぎ潛る事魚の如し。是れは殊更に義隆都に上りける時は、官加階の事萬執し申したまひて、禁中のことゝかく懇に取り賄ひ給ふ故に、此の度京都の兵亂にも、別義を以て山口に呼び下し參らせ、かしづき歡待し、城の外に家造りして置き奉らる、此の上はとて妻妾奴婢まで呼び下し、暫くは心安く坐しけるに、俄に陶が謀反起りしかば、中納言殿は北の方家人等、重寶の道具どもを船に取り積み、夜もすがら山口の城を逃げ遁れて、京都を志して上られたり。安藝國に入つて、高砂たゞの海まで漕ぎ付けて、風惡しければ鹽がゝりし給ふ。北の方泣く〳〵斯くぞ聞えし、

たゞの海いかにうきたる舟の上さのみにあらき浪枕かな

夜更けて月傾きけるに、中納言殿酒取り出させ、北の方諸共に少し〳〵、打飲み、破子やうの物とり開き、舟人にも食はせなんどし給ふ。舟人は此處より一里餘り東の方、能地と云ふ所の者なるが、船に積みたる諸道具財寶皆金銀を鏤め、錦小袖多く見えしかば、舟人忽ち惡心を發し、今宵此の輩を殺し、財寶を奪ひ取り德つかばや、今の世は所々亂れたるに、さして咎むる人も有るまじと思ひ、夜深く更けて月も入り果て暗き紛れに、家人等男女三人は海へ投げ入れたり。中納言殿聞き付けて起きた

ち給ふ所を、後に寄りて蹴れ揚げ海に投げ入れたり。北の方「是れは如何にし」と言ふを、舟人捕へて言ふやう「心安く思ひ給へ、君をば殺すまじきぞ、我が子二人あり、太郎には妻を迎へて次郎にはまだ妻もなし、我が新婦にすべし」とて舟を出し能地の家に歸り、財寶小袖やうの物出し賣りけり。北の方「心地少しあしければよく成らんまで待ち給へ、次郎殿と夫婦にならん」とありしに、舟人暫くしけるが、十月十三夜舟人共皆打連れて、舟に乗りつゝ出て遊ぶ。夜更け方皆酒に醉ひて、前後も知らず臥したりけるを、中納言殿の北の方密かに岸に上り、足に任せて夜もすがら走り逃げつゝ夜の明方に、根崎のかれいの山本にかゝぐり著き給ふ。歩ぶも慣はぬ濱路山道に篠を踏み越ゆるに、[illegible]り追手やかゝるらんと悲しく、怖ろしく、足は血汐の紅の如く、茨に掻き破り石に損ぜられ、[illegible]て明け放れたる霧の紛れより見れば、林の中に寺あり、門の内に走り入りければ、經讀み念佛する聲聞え、尼一人立出でて「是れは此處許には見馴れぬ人なり、如何なれば朝まだきにおはして、是れへは來しける」と問ふに、北の方「自らは和布刈の浦に住む者にて侍り、我が夫は去年都に上りて討たれ、孀となりて姑に仕へ參らするに、姑の心はしたなく、又小姑辛く當り、剰へ有らざる濡衣着せて浮名立て、夜晝物憂き事言ふ許りなし、今夜十三夜の月見にとて、家内舟に乗りて酒飲みつゝ、自らに酌取らせはべり。過ちて杯を海に落しぬ、定めて恐ろしき責めに逢ひはべらん事の悲しさに、夜

に紛れて迯げ走り、是れこそ下さまよひ參りて候へ」と云ひて涙を流す。尼云ふやう、「同じくは是れより家に歸り給へ、我等送りて嫡に證言すべし。若し又此處許にして夫持ち給はんには、然るべき業を續ぎて參らせん」とにかくに、世の常ならぬ御有樣の痛はしさに申すぞや」と云ふに、北の方更に受けこはず、「唯尼に爲して給へ」と許り仰せければ、尼の云ふやう、「此所は昔淳和天皇の后、出家して武藏の山に籠り、淨意比丘尼と申しき。此の人修法の殿此處に建て、淨意子が龍を領め、香藥和尚を以て供養し給へる寺なれども、時世移りたれば廢れたる跡とて、其の時作り給へる觀音の御影觀音の體の内に、彼の御髮を納められ、靈佛にておはしければ、國の守禮を取り、其の家共に參りてはのみ給へる。然るに此の寺に通ひしも、寺の荒廢しく、人跡稀に道も絶えて、御佛の一くちのみは後の山に叫ぶ猿の聲、前なる瀧に千鳥の音、吹く風岸打つ波、是れより外には音問ふ者とてなし」。同行の尼とて人側れを住十餘りの年にて、召使はるゝ侍者の尼にも、顏は醜けれどもいと心は優れり。今は早や花の姿を墨染にやつし、翡翠の髮を剃り落して尼となり給ひぬれば、いと痛しく哀なれども、菩提心の起りて、誠の道に入りぬれば、身は幼の事ながら心は既に賢たり。今出家し給ひて後は、生死の掟に則りて、夜明の花に無明の闇を照し、西の窓には、月ならぬ心法の曉を待ち、花を摘みて佛前の經を讀ましくたり、朝には露を食し、午の刻に齋を行ひ、宵に臨ひ有るに任せて年月を送

る、倩ならなく寐ねもやらし、心靜かに身穏かならず。徒らに世に係はりて、苦しき物思ひに來世の愁へを求めんよりは、世を厭うて出離の道を行はんには勝るべからず」と述べられたり。此の方願て佛前に詣で、髪を切りて剃らせ、法梨春とぞ云ひける。本より此の女房は幼き時より、歌草紙讀み手習ふ事を好み、書典を讀みては文字悉く覺えし人なりければ、出家して幾程もなきに、内典經論の深き理を悟りつゝ院主の尼公も、後には皆此の梨春に尋ねてこそ、佛法の理、經論の文義をも會得せられけれ。梨春かくぞ口ずさびける、

中々にうきにしづまぬ身なりせばみのりの海のそこを知らめや

眞に佛種は縁より起るとは、是等ぞためしなりける。常には奥深くひき籠り聖教に眼をさらし、容易く人にも逢ふ事なし。或日一人の俗來りて、「院主の尼公に志す事はべり、經讀みて給べ」とて布施物參らせ、一幅の樣の繪を供養の爲とて佛前にうち置きたり。尼公是れを取りて屛風におされたり。梨春是れを見るに、正しく我が箱に入れたる繪なり。尼公に「如何なる者の奉りし」と問ふに、「是れは能登の舟人此の寺の檀那にて來り、世に云ふ、此の者は人を殺し剝ぎ盗みて世を渡ると云ふ、誠か知らず」と語る。梨春さては疑ひなく、彼の舟人よと思ひながら色にも出さず、筆を取りて繪の上に書きけるは、

我がやどの梅の立枝を見るからに思ひの外に君や來まさむ

尼公更に其の下心を知らず、唯麗しき筆の跡を賞めたる許りなり。古歌の言葉を少しひき直しけん、いと思ひ入れたる心ありけん、備後國鞆の住人品治九兵衛と云ふ者、仔細ありて此の寺に來り、屏風の繪と歌と何れも不思議の筆跡なりと見咎め、尼公に尋ね參らせて、我が住む所に立てて[illegible]ぶ爲に中納言[illegible]は敢なく水中に突き落され給ひしかども、元より水練の達者なれば、[illegible]逃去て、十町許りの下流にて岸に上り、それより里に[illegible]て備後鞆の浦まで落ち來り、由名が[illegible]家に到り、一命を全うせん。と宣ふを、人々世の常ならぬ有様を見咎め、由名にかうかうと云ひければ、由[illegible]でて對面し、奧に呼び入れて事の由を問ひ聞きけるに、有の儘に語り給ふに、[illegible]京都も未だ穩かならねば、暫く此の所に[illegible]ふとも[illegible]有るべからず、暫く此處に[illegible]て世の變を見給へとて留め置く。品治九兵衛は[illegible]と物語するに、中納言殿心許なく、取り寄せて見給ふに、覺えず涙ぞ流されける。由名怪しみて問ひければ、中納言殿、是れは我の書きたる繪なり。此の歌は正しく我が妻の手跡なり。[illegible]妻子家人[illegible]水中に沈められ、財寶は奪らず賊人の爲に取られぬらん。妻は如何にして命生きけん、此の繪は何の故に此の歌を書きて出しぬらん。と宣ふ。由名則ち品治を召して其の[illegible]ければ、[illegible]尼公[illegible]の事を[illegible]けり。[illegible]

對面して、ありの儘に語り給へとありければ、今は何をか包み侍らん。とて、舟人の有樣語り給ふにぞ、疑ひもなく中納言殿の北の方とは知られけれ。扨はとて、舟の浦へ呼び迎へ參らせ、中納言殿と對面して唯夢のやうにぞ覺え給ひける。變る姿とて互ひに顏へ給ふ有樣、今更哀れを催しける。暫く爰に住ましましける間に、京都の世の中靜まり、三好・松永逃げて、義輝將軍武運開けしかば、都に上らんとし給ふ處に、中納言殿俄に病ついて、空しくなり給ふ。北の方は猶更に思ひに沈み給ひ、三十日許りの後打續きて夢に中納言殿誘ひ來り給ふと見て、程なく北の方も空しくなり給ふ。山谷に塚を築き同じ所に埋み奉りけり。中陰の果ての日、二つの墓より白き雲たち昇り、西を指して行くかと見えし、異香山谷に滿ち／＼たり。時の人奇特の思ひをなしけり。

伽婢子卷之三　終

地獄を見て蘇る

濱田新之丞は、相州鎌倉の三浦道寸が一族の末なり、才智ありて萬の人に勝れ、儒學を專らとして佛法を信ぜず、迷途流轉の事、因果變化の理を聞きては、さまぐ言ひ破りて嘲り、僧法師と見ても敬はず、口に任せて誹り、理を非に曲げて難じ破る。其の上隣に福本とて有徳なる者あり。若かりし時より慾心深く、慳貪放逸にして更に後世を願はず、川狩を好みて常の業とす。或時心地煩ひて俄に空しく成りたり。妻子一門驚き歎きて、願立て祈禱しけり。胸のあたり未だ温かなりければ先づ葬禮をばせず、僧を請じ佛前を飾り經讀みけるに、三日といふ暮方に蘇りて語りけるやう、「我死して迷途に赴きしに、其の道甚だ暗くして、又言問ふべき人もなし。かくて一里許り行くかと覺えし、一つの門に至り内に立ち入りしかば一つの廳場あり、冥官段の上に出でて我を招きて、『汝死して爰に來る、妻子歎きて金銀を散らし、祈禱佛事とりぐに營む故に、此の功力に依りて、汝を娑婆に歸し遣はすなり』と宣ふ。我嬉しくて門の外に出でて歸ると覺えて蘇りたり」と云ふ。其後に祈禱佛事の功力は有りし

からきりけりとて喜ぶ事限りなし。浅原是れを聞きて大いに嘲り笑ひて曰く、「世の貪り深き邪慾奸曲の地頭代官共は、賄を得ては非道をも正理になし、物を與へざれば科なきをも罪に墮す。此の故に富める者は非公事にも勝ち、貧しき者は道理にも負を取る。是れ此の世許りの事かと思ふに迷途の冥官も私あり、金銀だに多く散じて佛事をだに能く營めば或は死しても蘇り、或は地獄も浮ぶとかや。貧しき者は力なし、善惡の報いは、多く錢金を取らるゝ人こそ來世も心安けれ。昔漢の魯褒が言葉に、子に黄金滿篇を遺さんより、しかじ子に一經を教へんにはと云へり。地獄の沙汰も錢に因るべし、閻魔王も金だに有れば罪は赦す、韋賢が言葉はせんなし」と云うて、手を打ちて笑ひ嘲る。さてかくぞ詠みける、

　　おそろしき地獄の沙汰も錢ぞかし念佛の代に慾をふかかれ

家に歸り、燈火の下に唯獨り坐し居たりけるに、忽ちに二人の鬼來れり。其の有樣凄まじく身の毛竪ちけるに、「是れは閻魔王よりの使なり。急ぎ參るべし」とて浅原が兩の手を引き立て門を出でて走る。歩むともなく飛ぶともなく、須臾の程に一つの廣場に至りぬ。世間の評定場の如し、御殿の奥には大王と覺しき人、玉の冠を戴き座の上に坐し、冥官は其の左右に位に依りて坐せり。二つの鬼浅原を其の前の庭に引き据うる。大王怒れる聲を出して、「汝は儒學を事として佛法を異端と貶しめ、深き道理

を知らずして漫りに訛り嘲る。いでや通途の事はなしと云ふ此の科門より出でたり、はやく抜舌奈梨に遣はして其の舌を抜き堕し、爭を以て嘴き返せ」と宣ふ。淺賢首を更に付けて「我更に非道の罪なし、儒の教を守りて、君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫の道、節へらじと嘲へ、天理性分の本然を說きて其の意を仰ぐ。更に佛道を修せずと雖も、地獄に墮つべき謂れなし」と云ふ。大王宣はく、「冥官も私あり、善惡の報いは貧富に因るとて、念佛の代に慾を深かれと云ふ義は、誰か教へしぞ」と怒り給ふ。淺賢答へて云ふやう、「古より今在俗の世は天堂地獄の事を述べず、三代の時に至りし山川の神を祀る事初めて起れり、後漢の世に佛法傳はり、夫れより天堂地獄因果の理を示す。然に於て山川にも寺あり社頭にも佛あり、天下諸像寺を建て、世の人皆是れに溺れて惟業を忘れ、惡を爲し、又犯す罪を犯して、恣なり。強きは弱きを凌ぎ富めるは貧しきを貪り、親に孝なく君に忠なく、一家睦まじからず。財寶を貪り邪慾を構へ、義を知らず節を守らず、利に走りて恩を忘れ、唯金銀だに取らして佛事供養を營めば罪深きも、地獄を遁れて天堂に生ずと云ふ。若し能く家の富くならば、惡人と云ふとも富貴ならば天上に生まれ、貧者は善人も地獄に墮つべし。閻魔の庁と雖も、富貴なる惡人を佛事を爲せば、淨土に遣はすと云はば、貧者の集ふべきにあらず、是れ寃直の裁判にあらず、私と云ふべし。我此の事を思ふが故に一首の狂歌を詠みて此の責めに遇ふ。天王深く察し給へ」と云ふ。大

王聞いて宣はく、「此の理邪ならず、陳ぶる所實なり、濫りに罪を加へ難し。此の訴りある事は孫半が纔に存生に金銀多く散じたる故に、度々婆婆に賄せられたりと沙汰せし故なり。急ぎ孫半を召し來れ」と宣ふ。須臾の間に孫半を召し來る。「手械首械を入れて直に地獄に遣はし、淺原をば娑婆に送り歸せ」とありし。二人の冥官事を承りて、淺原を連れて庭に出づる。淺原云ふやう、「我人間にありて儒學を勤め、佛經に遠く、而して地獄の事を聞くといへども信を起さず。今已に爰に來る、願くは地獄の有樣を見せて我に忠信を起さしめ給へかし」と云ふ。冥官聞きて、「さらば司錄神に問ふべし」とて西の方廊下を過ぎ一つの殿に行く。善惡二道の記錄山の如くに積みたり。冥官斯々と云ふに、司錄神簡を出したり。冥官是れを取り持ちて、淺原を連れて北の方半里許り行きけるに、鐵の築地高く、鐵の門ありて城に到る。黒煙天に蔽ひ、叫ぶ聲地をひゞかす。牛頭馬頭の鬼あまた鐵棒鐵刀を横たへ、門の左右に立ちたり。二人の冥官先の簡を渡し、淺原を連れて内に入りて見せしむ。罪人數知らず、獄卒捕へて地に伏せ、皮を剝ぎ血を絞り、腹を裂き目を割り、耳を殺ぎ鼻を切り、手足をもぎて肉を殺ぐ。罪人泣き叫び、苦を悲しむ聲地に滿ちたり。是れは昔人間に在りし時、山海に獵漁殺生を營みし者なり。又或所には銅の柱を二本立て並べ、男と女と二人を裸にして、獄卒劍を持ち、腹を斷ち裂き、銅の湯を銚子に盛りて流し掛くるに、五臟六腑爛れ燃えて沸き流るゝ。男も女も只首許り柱に殘りて泣き叫ぶ。

淺原其の故を問ふに、冥官答へて曰く「是れは娑婆にありし時此の男は醫師なり。其の女の夫、淫深きを療治せしむるに、醫と女と正なき密事して夫に惡しき藥を與へ、女荒けなく當りて殺しつゝ夫婦と成りき。二人ながら死して今此の苦を受くる」と云ふ。又或所には尼法師多く裸にて、熱鐵の地に蹲り居たるを、獄卒來りて牛馬の皮を著せ覆ふに、尼法師も其の儘牛馬になる。是れに鞍を負せ轡の繩を以て之れを打つに、皮離れ肉さけて血の流るゝ事瀧の如し。淺原又問ふ。曰く「是れは人間にありし時、尼法師となりて、田作らずして食くらひ、機を織らずして衣を著て、形は出家なれども戒を守らず、心に慈悲なく、學道なくして徒らに信施を費しける者共なり。此の故に畜生となりて信施を償ふ」と云ふ。又或所を見れば、諸人多く牛馬と成りて苦を受く。是れは昔代官として百姓を取り倒し、妻子を沽却せしめたり。今は其の報にて苦を請け取る、是れも畜生に同じからずやと云ふ。最後にある地獄に到る。猛火熾盛に燃え揚り、猛なる人は其の中に有りて、手枷首械をさせられ、五體悉く燃え焦れ、炎に噴かれて、毒蛇來りて其の身を纏ひ血を吸ふ。又毒ある鷹來り、罪人の目を挿まれて眼を啄み、肉を引き裂き喰ふ。泣き叫ばんとすれど、猛火の燃眼に迫り、苦しみ云ふ計りなし。獄卒にて骨肉はみ枯すれば、涼しき風吹き來り、又元の如くにして蘇る。淺原其の故を問ふに曰く「是れは往昔鎌倉の上杉則政の子息兵部少輔有妻德用可介、其の弟長三郎同三郎助其の

外親類都合二十人、已に悪政没落の時、主君龍若殿を連れて敵北條氏康に渡して降人に出でたり。主君を殺したる天罰當り、此の二十人皆氏康に殺され、死して此の地獄に墮ちて億萬劫を經ると云ふとも浮ぶ時有るべからず、其の外の輩も皆主君を殺し不忠を抱き、國家を亡ぼしける者共なり。」と細細と語る。其れより淺原冥官に伴れて門を出づると覺えしかば、忽ちに蘇り、「鄰の孫平は如何に。」と問ひければ、其の夜又空しくなれり。是れに依りて、淺原儒學を捨てて建長寺に到り、參學して醒悟發明の道人となりけり。

夢の契り

大永の比ほひ舟田左近と云ふ者あり、武門を出でて凡下となり、山城の淀と云ふ所に住みけり。心樣優にして情深く然も無雙の美男なり。家富みて豊かなりければ人皆悪しくも云はず。年二十二に成るまで妻をも迎へず、只色好みの名を取りたり。橋本と云ふ所に田地を持ちければ、秋の末つ方田を刈らせんとて舟に乗りつゝ、行く／＼橋本の北に酒賣る家ありて、住居賑々しう内の體綺麗に見ゆ。舟田は舟を家の後の岸に著けて、酒を買うて飮まんとす。主出でて、此方へとて呼び入れしに、かけ造りにしたる亭に上る。亭の西の方には古りたる柳枝垂れて紅葉に變はり、嵐に散り落ち、下葉移

のふ萩が露、荻もとなるゝに重げなり。秋を哀しむ蟲の聲、尾花が下に弱り行き、籬の菊は咲き並び、仙の香を籠めたるも、誠にゆかしき心地ぞする。北の方を見渡せば、淀の川浪浮き沈み、鳰の聲も遠近に遊ぶ心ぞ知らまほし。楊枝が島も程近く、渚の院も定かなれや、水野を過ぎて山崎や、うき野に續く三島江まで、只一目にぞ見渡さるゝ。主杯出し酒勸めて、「是れは松江の鱸魚にはあらねども、彼の杰東洋甫が庭の池へに畜ひあたる、淀鯉の鱠とて取り出して出したり。又これは奥中の蜜柑には侍らねど、貫之が緖りつゝたる、水野の澤の根芹にて侍る」など、心ありげに歡待しければ、舟田主の心を慰めて盃を傾けたり。この家に娘あり、年十八許り、未だ何方にも嫁を結ばず、常に籠りたる一間の部屋に住みけり。親元より貧しからねば、草雙紙なんど多く求めて讀ませ、手は勝れねども物書く事滞らぬが事し、心ざま優しく情あり。舟田が此に在りけるを見て心惹かれつゝ、帳の隙より差覗き、或は顔を見せかけて恋慕ひし、或は簾の外に立ち、又内に引き籠り、又帳より外に出でつゝ、恥かしさも忘れて焦るゝ許り慕ひ寄りたり。舟田是れを見るに、女の顔容世に類なく美しく輝く許りに覺えて、神に我が魂も女の袂に入りぬらん。互に心を通はせて、目と目を見合はせ侍りしかども、更に一言葉をもいふべき由もなく、日已に傾きしかば、舟田は暇乞して座を立ちて舟に乗り、我が宿に歸りしかども、只其の人の面影のみ、身に添ふ秋の風涼しくて、獨りまろ寝の牀の上、頻りに涙落ちて

にける。其の夜の夢に、橋本の酒賣る家に行きて、後の川岸より門に入り、直に女の部屋に誘はれければ、部屋の前には小さき造り庭ありて、様々に疊みたる岩組、峯より下る谷の裝ひ、麓より傳ふ道の續き、風情面白く、山また山のかさなれるに、洲濱の池には水清く、さゝやかなる魚多く遊び、汀に生ふる忍草、簷に傳ひて這ふ蔦の葉、消え殘りたる秋の霜、鈴蟲の聲かすかなり。軒には小鳥の籠一つ懸けて、鳴きさへづるに、心も澄みて、机には生けし菊の花少しさして硯箱あり。牀には薄様の伊勢物語、其の外面白く書きたる草紙を積み重ね、壁に寄せたる屏風に思ひ入りたる慰めかし、目とまる心地して立ちたりければ、女は是れを見て嬉しげに近づき、打笑みて舟田が手を取り閨に入り、心に積る言の葉今宵も盡きじと打侘び、互に契りをかはしまの、水の流れて終に又、末は逢瀬をならしはや、暫時人目を忍ぶ草、其の關守こそ辛からめなれど、さまよひ、鳴きつける程に、人の別れを思ひ知らぬ、八聲の鶏も氣遠げに、はや明方に打ちしきれば、曉天の色いと白く、窗の下に夢は覺めたり。是れより毎夜夢の中に行き通ひて、契りを結ばぬ夜はなし。或夜の夢には、女琴を彈きて想夫戀の曲を待す、其の爪音神にして、聲は雲路に至るならんと、いとゞ情に色勝りける。或夜の夢にまた彼の家に行きたりければ、女白き小袖を縫うたりしに、舟田戯れて掻きあぐるとて小袖の上に、燈の花を落して焦つきたり。又或夜の夢には、女金の香合を送る、舟田水精の玉を與へたり。

夢おどろけば、香合は舟田が枕許にあり、我が水精の玉はなし、いよ〳〵怪しく思ひて、

其にいとゞ逢ふ夜あまたの語らひ、夢と知りつゝさめずもあらなん

とうおもふみては、餘りに堪へ難かりければ、舟に棹さして湖本に行きつゝ、彼の家に立ち入り酒を求めしに、主出でゝ舟田を見て甚だ喜び、内に呼び入れて離座敷に請じ、ひそかに近づいて物語しけるやう、「某只一人の娘を持つ、年未だ十七に足らず、去年秋の暮に當家に酒飲みに立寄り給ふ時、娘見参らせしより思ひ初めて終に病となり、只朝夕として眠れるが如く、譫言する有様物に憑ひたるに似たり、醫師を頼みて藥すれども露計りの驗もなかりし。陰陽師に占はせけるに、猶重く煩ひて心地正しからず、折々は舟田左近と名を呼ぶ事あり。聞きに昨日云ふやうは、「明日は君必ずこゝに來まさん」と云ひけれども、例の狂氣より云ふ事ならんと思ひ侍りしが、果して今日來り給へり。是れ偏に神の告げ給ふ所ならん。願はくは君是れを妻とし給へ」と、侘びてすゝむる其の詞殘りなく參らせんと云ふに、互に名字を表はし聞きて訝り給ひて娘の部屋に入りければ、部屋の體、飾りの樣、昔夢に見たるに違はず、女其の聲を聞くより心地正しくなりぬ。其の顏容物言ひ聲つき何れも夢に變らず、かくて語る樣、其れより前の頃君を見初め參らせて後より、其の物思ひ胸に塞がり、面影既に身を離れず、夜毎に君に契ると云ふ夢を見る事、如何にとも謂れをしらず」と云ふに、舟田が夢も其の如く、小袖に櫻花の散りたる跡あり、琴を彈

きたる曲の名、香合の事皆夢は同じ夢なり。是れを聞くに、驚き怪しまずと云ふ事なし。眞に神の行き通うて契り淺からず、わりなきふからひとぞ聞えし。

一睡三十年の夢

享祿四年六月に、細川高國と同名晴元と、攝州天王寺にして合戰す。高國敗北して尼が崎まで落ち行きつゝ道狹くして自害したり。家人遊佐七郎は、牢浪して芥川の村に隱れ居たりしが、京都に上りて如何なる主君にも仕へ奉らんと思ひ、中間一人召し連れて都に赴く。山崎の寶寺に詣でて休み居たるに頻りに睡り萌しければ、東の廊下に暫く臥し侍りしに、夢見るやう、寺の門前に出でければ一人の夫男一つの籠に楊梅子を入れて休み居たり。遊佐立ち寄りて「誰が家の者ぞ」と問へば、「山崎の住人交野次左衛門が家に召使はるゝ者なり。交野殿は將軍家に屬して討死し給ひ、一人の娘坐す。西の郊の石尾源五殿の妻となり、源五殿は三好に討たれ給ひ、今は孀にて歸り住み給ふ、年未だ二十一なり。母は六十有餘にて才覺勝れ給へり。一門の末ならば重ねて壻に取り、家督を讓り參らせんと仰せあり」と語る。遊佐これを聞いて屹と思ひ廻らせば、交野が妻は我が姨なり、久しく便りを失ひ、何方にありとも聞かざりける。扨は山崎に住み給ふか、尋ね行きて名乘らばやと思ひ、男に具して尋

ね行きたりければ、嫗に紛ひもなく互に名乗り合ひけるに、嫗嬉しさの餘り涙を流し、内に呼び入れて一族の行方を尋ね問ふに、其彼多くは皆討死して七郎許り僅かに存生へたり。姨の云ふ様、「我頼りとては娘只一人あり、和殿は又自らが甥なり、睦まじく戀しきぞや。京に登らずともあれかし、聟に爲して心安く見ばや。」と云ふ。遊佐嬉しく思ひ卽て約束し、明日こそ吉日なれとて親しき輩を呼び集めて樣々調へて縁を結ぶ。姨の女房を見れば顔容端やかに美しかりければ、いとゞ嬉しき限りなし。婚禮の用意甚だ華麗なり、日毎に客を集めて酒宴に及ぶ、遊佐も樂しみに誇りて思ふ事もなし。或日京都より御使ありて、將軍より召し給ふ。急ぎ上洛しけるに、公方の御氣色快く、則ち一萬貫の所知を下され河内守に任ぜらる。かくて京都に伺候する事一年、其の間に公方の推擧に爲され、威勢高く、肩を雙ぶる人なし。已に御暇賜はりて山崎に歸り、要害の地を點じて、家造り美しう取立てたり。召使ふ上下の侍、出入の輩數知らず、門外には繋馬の絶ゆる隙もなく、諸方より集ひ來る使者日毎に多し。はや三十年の星霜を經て、男子七人女子三人を持ちたり、男子四人をば京都に上せて、將軍家に奉公せしむ。女子三人は津の國河内の間に遣はして、武家の名高き細川某の新婦と爲し兄弟を婿とす。内外にかけて八人の孫をまうけ、一家の繁昌この時に當れり。かかる所に思ひがけず敵三千餘騎にておし寄せ、四方より要害に火をかけ、鬨をつくりて攻め入りたり。妻子驚き、泣き

叫び、家人は恐れて落ち失せければ、防ぐべき力なく、腹を切らんとする所に、敵はや討ち入りてひき組み、生捕る程に、是れに組み合つて、押し返し刎ね返すと覺えて、汗水になりて夢は醒めたり。遊佐起き上りて、中間に「今は何時ぞ」と問ふに、「日は未だ未の刻」と答ふ。只一時の間に三十年を經たり。思へば是れ邯鄲一炊の夢、善きも惡しきも此の世は夢なりと悟りて、中間には暇取らせ、我が身は直に發心して、高野山に籠り、道心堅固の修行者となりけり。

入棺之尸甦る怪しみ

古より今に傳へて世に云ふ、凡そ人死して棺に斂め、野邊に送りて後に、或は埋むべき塚の前に甦り、或は火葬する火の中より甦へる者あり。昔家に歸りて打ち殺すことあり。若しは病重くして絶死する者、若しは氣のはずみて息の塞がりしもの、或は蘇る者あり、冥途を見る者あり。是等は定業天年未だ盡きず、命數未だ報ぜざる者なれども、本朝の風俗は死すると等しく、尸を納め棺に入れて、葬禮を急ぐ故に、假令甦りとても、葬場にて生きたるをば灰になして打ち殺す、誠に殘り多し。されば異國にしては、人死すれば先づ殯と云ふ事をして、直に葬送はせず。此の故に書典の中に、死して三日七日十日許りの後に甦り、冥途の事共語りける例多く記せり。されども十日以後はまた甦るべ

き仔細もなし、頓死急死などは心すべし　されば又葬禮の場にて甦りしをば家に戻さず、打ち殺す者ありと云ひ傳ふる事も故ありと云ふ。京房が易傳に、至陰爲陽、下人爲上、厥妖人死復生と云へり。死人久しく有りて後に甦る事はこれ下剋上の先兆なりと云ふ。此れ故に甦りても打ち殺す事なりと聞ゆ。大内義隆の家の女房死にけるを、野邊に送り出し埋めんとせし時に甦りぬ。打ち殺さんは無下に可愛しとて連れて歸りしに、髪は悉く落しぬ。是非なく尼になり、衣を着て半年計り有りて又死にけり。其の年果して家臣陶尾張守が爲に、義隆は國を追ひ出されたり。永祿年中に、光源院殿の家の下部俄に死にけるを、三日過ぎて甦りけれども、知らざりければ、若き下部共尸を下ねに送りて埋めんとするに、忽ちに甦る。打ち殺して埋めんと云ふに、此の者手を合はせ泣き叫びて、助けよと云ふ、流石に不便の事とて、連れて部屋に置きければ、四五日の内に日頃の如くなりたり。其の年五月に三好松永反逆を起しぬ、是は陰氣にして甦れば陽に成りたるなり。是れ下として上を犯す先兆なりと云ふが故に、葬所にて甦りし者は、二度家に戻さず打ち殺すとなり。此の事は有る事歟無き事歟、さもあれ、死人の一族は殊の外多くにぞいふなるものぞ。

幽靈夫に逢ひし話

野路忠太は江州の者なり。妻は同じ國野州郡地下人の娘なり。一人の娘を生みけれども、半年の後死して又子無し。永祿の末の年、勝敗の事に因りて鎌倉に下りしに、自國他國亂れたちて道中の通路塞がり、三年餘り歸り上らず。ある夜の夢に「我が妻櫻の陰に居て、花の散り落つるを見て悲しみ泣く、又俄に井の本を覗きて笑ひけり」と。夢醒めて怪しみ、易者に問ひければ、「花は風に從つて散り井は泉路に歸る、此の夢宜しからず」と云ふ。三日の後便りにつけて聞けば、妻風氣を煩ひて死せりと云ふ。忠太悲しさ限りなし。兎角して江州に歸り、其の跡を慕ひ妻が手馴れし調度を見るに、今更の樣に思はれ涙の落つる事隙なし。日頃の志わりなき中の其の期に及びては、さこそ思ひぬらんと思ひやるにも、なにはにつけて歎きの色こそ深く成りけれ。寐ても覺めても面影をだに戀しくて、

思ひ寐の夢のうき橋とだえしてさむる枕にきゆる面影

と打誦じ「若し我が戀ひ悲しむ心を感ぜば、せめて夢の中にだにも見え來りたまへかし」と觀念して日を暮す。頃は秋も半ば月朗かに風清し、壁に吟ずるきりぎりす、叢にすだく蟲の聲、折にふれ事によそへて、露も涙も置き爭ひ、枕を傾くれども、いとも寐られず。早更け方に及びて、女の泣く聲幽に聞えて漸うに近くなれり。よく／＼聞けば我が妻が聲に似たり。忠太心に誓ひけるは、我が妻の幽靈ならば、何ぞ一度我にまみえざる、娑婆と冥途と隔てありとは雖も、其の昔のわりなき契り死すとも

忘れおはしまさで、其の時妻は傍近く寄りて「我はこれ君が妻なり、君が悲しみ歎く志、黄泉にあれども堪へ難くて、今夜こゝに来り侍り。」と。忠太涙を流して云ふやう「心の内に思ふ事筆にもなかなか書き尽さじ、詩に刻ね詩に作ることも、言の葉の末には残り多し。願はくは一度姿を現はして見え給はば恨みはあらじ。」と掻き口説きしかば、妻泣く泣く答へけるは「人間と黄泉と其の道別にして逢ひ見ゆる事難し、又理はれて見ゆる事はせんには、君若し思ひ惜しみ給はん。」と。忠太いよいよ悲しく思ふに、余志子と云ふ女の童を召しつれて、妻の形仄かに現はれ出でたり。忠太言ひけるは「余志子は三年の先故郷に帰りて、空しくなりけると風の便りに聞きしに、今如何にして妻に来りしや。」と。余志子答へけるやう「君の御事如何にぞやと思ひ煩ひ案じ参らせしかば、思ひの余りなる病を受け、故郷に帰りて心地吹しさ煩ひ増りて、終に果敢なく成り参らせたりけれども、黄泉にして又此の君うち続きて奥方に仕へ参らせ、それに参りて仕へ、伴ひて今も伴ひ参りたり。」と云ふ。忠太喜びとの内に呼び入れしに二人の縁の浅からぬ事を語りて、あれは誰そと云へば、妻の云ふやう「是れこそ前が冥府に往れ、自ら空しく成りし事悲しみて、今は頼む陰なしとて、身を投げ空しくなり、今宵も随ひ来り侍り。生きてあるは陽の人なり、死すれば陰に帰る道備れり、生家変れども思ひし心は変る事なし。真情已に相ふ故の志に感じ、今夜しの哉を奇にしたり。千年に一度逢ひ見たる嬉しさ、やがて別れん事を思ふに又悲しく

こそ」とて、涙は雨と降りにけり。忠太云ふやう、「さて死し行きて後は、何をか珍味の食とするや。」と。妻云ふやう、「黄泉は臭く腥きを嫌ふ、只殊更に用ゐる物は粥なり。」と云ふ。忠太是れを調へて措ゑ渡す。妻、余志、娘、三人ながら口に迎へて食せしと見えし。夜明けて後見れば、只其の儘に残りたり。妻のいふやう、「六とせ其のかみ富陽の中にして、空しく成りける子を見ずや、今は大人しく成り侍り。」と云ふ。忠太云ふやう、「其の死にける時僅かに三歳、来世にして年月を重ねて身に受け侍るか。」と問ふ。妻答へける様は、「世に年月を尊ぶうけて積る事人間に変らず、されば、こそ死して四十九日の中陰、一周忌より初めて五十年忌を弔ふ事、此の世の年月にて数ふるなり。」と云ふに、死したる子現はれ来り父が前に跪き、おとなしやかに見えたり。忠太涙を流し頭搔き撫で、「是れだに此の世にあらば、妻が忘れ記念とも見るべきを、汝死して後再び子なし、汝ここに在らばこそ大人しく、我も嬉しう侍らんに、今夜を限りに又も見まじきや、あな恨めしやゆかしき者かな。」とて搔き抱かんとすれば、雲煙の如くにて手にも溜らず、消え失せて形もなし。忠太問ひけるは、「黄泉にしては何處に住み給ふ。」と。妻云ふやう、「君の先祖野路の姓の始め、第一代は一の座に坐す、其の眷属の如し。其の次々は天地に諸ち帰りて座に在らず。君の祖父祖母父母姉弟、同じ所におはします。自らは姑の右の方に坐し侍り。」と云ふ。又問ひけるは、「斯く住所定まりて、神霊物知る事はいはば、如

何で元の容の中に立ちかへりて、生き給はざるや。」妻答へけるやう、「人死して魂は陽に歸り、魄は陰に歸る。司命司録の官ありて、名記し留め、容は土となる。さらに鬼籙に載せられて、心のまゝに歸さず。譬へば夢の中には我が身の在る所を覺えず、魂魄許り樣々の事を見るが如し。自ら死して後は死せし所も覺えず、葬禮の場をも知らず、容の在る所をも知らず。」と云ふ。歎き悲しみて物語する程に、夜もはや更け過ぎたり。又問ひけるやう、「死して黄泉に集まる男女、互に夫婦となる事ありや。」と云ふ。答へて曰く、「有る事はあれども、道を知る男は一度妻を求めず、妻死して後に又行き逢うて語らひ、貞節の女は再び夫を持たず、娑婆の夫死して後に又集まりて夫婦となる。それも心だて邪に濁りに惡を作る者は、死して後、男も女も地獄に墮され、夫婦となる事叶はず。聖人は世の人種を絶せじと牢獄に入れられて夫婦一處に住む事叶はざるが如し。自らも西の國なる高家の人の妻にせんと計られしを、貞潔の志有る故に、遁れて獨り住み侍り。」と云ふ。忠太いとゞわりなく悲しくて、千夜を一夜に、今宵は殊更夜も長かれと語ひける中より、鳥の聲、鐘の音、はや明方の横雲より、遠近人の顔見ゆる頃に成りしかば、妻泣く泣く小袖の衣裏をとき、形見に殘して、

わかれてのかたみ成りけりふる衣見るにつゝみしたまの涙は

忠太源と共に形見の物を受取り、「黄泉の中にも忘れ給はずば、是れを見て慰めとせよ。」とて、白銀の香

爐を取り出し、妻に與へつゝ、

なき魂よことなる道にかへるともおもひわするな袖のうつり香

一返り重ねては何時か逢ふ瀨の時なるべき」と問ひければ、「今より四十の年を經て長き契りを待つべきなり」と言も盡しあへず泣き叫び、出で行く姿は自ら、朝明の霧間に隠れて失せにけり。忠太夫の世の中味氣なく、髮剃り落し衣を墨に染め、諸國行脚して住所を定めず、後終には高野の山に籠り、澄覚と名のりて、妻の菩提を弔ひ、一座蓮臺の往生を願ひけり。

伽婢子卷之四 終

伽婢子 巻之五

和銅の錢

京都四條の北大宮の西に、往古淳和天皇の離宮ありける、是を西院と名づく、後に僧の住居の寺み給へりと云ふ、其世移りて、宮殿は皆絶えて僅かに名のみ殘り、今は真言の住寺となれり、文明年中に長暦の僧都覺圓といふ、生得行儀ありける僧あり、世を遁れて西院の寺に引き籠り、専ら佛道を修して年をに行ひけれしに、其の目出度き人讀法して人の來る、年五十餘り、其の姿殊だ世の常ならず、頂圓くし下に袴したる布子の帽子を着て、直衣の色淺黄にて其の織りたる紬着て、懐かしげに寺の東の庭に出たり自ら秩父和通と名乗りて、僧都とさし向ひて物語す、我はもと是れ武州秩父郡のもの、和銅元年の、それより本朝諸國の内、行かざる所もなし、ここに寄る僧都心に思ひけるは、是れ直の人にあらじとおし量りながら、其の詞に聞きて時を移す。真言三部の秘經、兩界の曼荼羅、印明陀羅尼、灌頂一 の事までも、其の深き理を陳ぶるに、僧都未だ知らざる事多し。それより世の古の事どもを尋ね昔今の事ども問ひたれば、和銅は答へけるに、僧都聞きけるは、一片の帽子本朝の錢に似たり、外

くして肉なからんは何故ぞや」と。和通答へけるは、「凡そ天地萬物の形品々ありと雖も、つゞまる所は圓きなると方なる二つの外なし。我外を圓に心を方にす。天の形は圓く、地の形は方なり。圓きは物に偏らざる所、方なるは物の正しき所なり。されば我が道は萬物に偏らずして而も萬物に外れず、正しくして曲り縮まず、是れを現はして頭に戴けり」と云ふ。僧都の曰く、「君の直衣は甚だ輕く細うして薄し、是れ何れの國より織り出せるぞ」と。和通答へけるは、「是れ五銖の衣と名付く。天上の衣は三銖と雖も、下天の衣は皆五銖なり」と云ふ。僧都、誠にいよ〳〵人間にあらずと思ひて重ねて問ひけるは、「君は如何なる人ぞ。名乘り給へ」と云ふに、此の人打笑ひ、「僧都の道心深きに因りてこそ來りし物語はすれ、我が名を名乘るには及ばず、纔て名乘らずとも知れるもあるべし。今は日も暮方なり。暇申すぞかし」とて座を立ちて出づる。其の行く跡を見とめて見れば、庵の東の方一間許りにして、竹藪の前にて姿は見失へり。翌日里人を雇ひて、其の所を掘らせらるゝに、三尺許りの下に一つの箱あり、其の中に錢百文入れたり、其の外には何もなし。僧都是れを取りて見るに、和同通寶の古錢なり。熟思ふに、彼の和通は此の錢の精なる事疑ひなしとて、此を掘りける里人を呼びて、僧都物語せられけるやう、「此の人の名乘より怪しく思へり。今是れを案ずるに、昔奈良の朝人王四十三代元明天皇の御宇七月に、武州秩父郡より初めて銅を貢る、其の時の都は津の國難波の宮におはしませり。是れによ

に慶雲五年を改めて、和銅元年と改元あり。此の年始めて貢りし銅を以て錢を鑄させらる。これ
は今此の和銅通寶の古錢に其の時の錢なるべし。輪子の外圓く内方なるも、是れ錢の状なり。青き色
の錢衣は、是れ銅の色なるべし。五銖の錢とは、錢の重さを顯はし、和通と名も文をなし、和銅通寶の
略せる名なり。秩父の郡と云ひしは和銅の始めし所なり。それより都に上り、諸國廣く通し見た
りてこそ付けたれ。此の錢は和銅に從ひ鑄させし事なるべし。その後の形年の間すは、天に象り、空の
方と地に、其に象る。文字の數四つは四方に象り、其の年號を記し、天下に通ず
寶とす。錢は是れ足なくして遠く走り、翼なくして高く飛ぶ。舊く錢の謂に依て、其の名を富と、
同じく人の、錢の見ては口を開く。仕官に花鳥の辭あり、樂天に詩の辭あり、魯褒は錢の辭あり、こ
れこそ、錢の事は人智に有る。恵み有る錢を見ては親しみて命を求むる心に、ふと人臣を得て
は毀人の時に進ふに過ぎたり。誠に實なる。而て抑宜ひ、彼の首の錢を、人に與へ、或は
吝ひ、羅刹の使者の逢ふる。聖人これを家を隠し誅かになりて、僧都を寶作なりしきかし。後
に山谷の錢に逢ふ事人益く口になり、僧都も宛なり、古人も言との由へ上ふ。

幽靈諸象を評する事

甲州の郡内に鶴瀬安左衞門と云ふ者あり、往日は惠林寺の行者にて、後に安藏主と名づけしが、武田信玄に取り入つて心ばせ才覺ありければ、俗人に爲され小知賜はり、鶴瀬安左衞門とぞ云ひける。永祿丙寅七月十五日、盂蘭盆供の營みしつゝ、甲府に出でゝ家中拜禮の事相勤め、日已に暮方になりて、惠林寺の快川和尚に對面せんとて、西郡に赴き侍りしに、如何したりけん、召しつれたる中間小者跡を見失ひ、一人も來らず、鶴瀬只一人のく／＼惠林寺に至りしかば、門外にて多田淡路守に行き逢ひたり。鶴瀬思ふやう、是れは信玄公祕藏の足輕大將にて、武勇力量已に家中に許され、名を近國の諸大將に知られ、信州戸隱山に於て鬼を切りたる程の者なるが、去んぬる壬酉極月十二日に正しく病死せられたり。それに只今行き逢ひたるは、若し夢にてやあるらんと怪しみながら立寄りければ、いざ惠林寺の庭に五三人集まり精靈祭の送りを營むに。能き序なり、立入つて遊び給へ、とて打連れて門の内に入りたりければ、寺の庭に筵しき渡し、中間小者ばら多く人を待ち設くると覺えて、聚り居侍り。暫くありて越後の長尾謙信の家臣直江山城守、北條氏康の家臣北條左衞門佐、武田信玄の軍法の師範山本勘介入道道鬼出で來れり。山本は上座に上り、直江其の次にあり、北條左衞門其の下に坐して、樣々軍法の事ども互に物語す。北條左衞門云ふやうは、「そも／＼武田信玄は、智謀武勇を兼ね備へて思慮ふかく、軍立いつも堅固にして、兵氣撓まず勢ひを失はず、敵に向うて戰ふ時は

流水の如く、合戦に至りては晴天に雷の霹靂たるに似たり。気象の濶き事水輪に譬ふべしと雖も自ら武勇に誇りて諸将に和を求めず独り戦国の間に挟まれて、一生更に敵のために潜しのみ。其の軍の備へ堅實の勢分を守らんと雖も、更に奇正の術を兼ねざる故に小利を得て大いに勝つ事なく、其心危からずして又大なる失もなし、其の威は高く輝きながら草創の功を遂げず、只我が領國の境を犯されざる許りにして、終に其の大業を立て給はず。」と云ふ。山本勘介入道云ふ様は、「何れの諸将も皆一徳なきはなし、唯一徳を守りて偏に溺れ、變化無方の理を忘れて大功を遂け給はず。されば長尾謙信は北越無双の猛将なり、其の性強實にして健かなる事目を驚かす人なし、其の身は越後に在りながら威勢を東海北陸に輝かし、敵と戦うては敗らずと云ふ事なく、軍立尖にして變化奇正の術更に我か物として、大軍を使ふ事又我が手足を働かすが如し。大敵前にあれども昆蟲かとも思はず、急に討つてかゝる事嵐を捲くが如くにし給ふ、誰か其の鋒に向はんや。されども只武勇を逞しくし給ふのみにして、さしもなき小軍に兵を費し、後を顧みて内に備ふる固めなきを以て其の身勇気を専らとし、軍兵忠信ありと雖も遂に大業成り難し。」と云ふ。直江山城守熟と聞きて、「されば何れの諸大将にも望むる所には其の徳用に在りて青天にも昇るべく、流るゝ所には又出でゝ深淵にも沈むべし。望むるも誹るも共に一定し難く、失ふも一時なり是れも一時なり。只天命に依らずしては大業は遂ぐべからず。其

の中に北條氏康は其の生付き、尤も温和にして能く人をなつけ、篤實にして文道を修め、軍立徐やかにして不意に向ひし敵に勝つに刃を借らずして、我が勢ひを量りて兵を費さず、天の時を待つて危き事をせず、此の故に取る事遅しと雖も得て之を失はず、常に備へを内に隠して、猛威を外に施すと雖も、時に至りては威勢にしかず、氏康は只和を好みて兵を留め給ひし故に、武勇は更に信玄謙信に後れたるに似たり。されども守文の徳のみ勝れて草創の功業を勵む事の志あり、然るを以て遂に大業を立て給ふ事叶はずして、其の威名輝かず、隠れたるに似たり」と云ふ。其の時多田淡路守申して、「三將の評誠に其の理ありと雖も我等ごときは名將の奥義を量らひ知らんや、定めて深き心あるべし。それ千丈の堤も螻蟻の穴より崩るると云へり。信玄謙信氏康は今戰國の中諸國諸將の間に並び立ちて、良將の名ありと雖も、亦諸國の間に黨を結び權を立つる輩甚だ多し。若し其の中に謀不意に起りて、小身の大將に討さるゝ事あるまじき時節にあらず。これを以て信玄謙信氏康の三將は、鼎の足の如く、特に互に威を競ふと雖も、傍に小身仕出の大將を懼れざるにあらず。近頃尾州織田信長、已に草創大業の志ありて近國を隨へ、漸う大軍に及べり。弘治年中駿河の今川義元、さしも其の將の譽有りてしかも大軍なりしを一朝に亡ぼしたり。信長深く謀り遠く慮り、剛強武勇智謀兼備の信玄に對して、親しみ深く緣を求め、伯母を秋山伯耆守が妻と爲し、其の姪を武田勝頼の室に納れ、使節絶間なく甲府に

違はし、さま〴〵音信を盡して只管君臣の禮の如く、信玄の機嫌を取り追從せらるゝ事は、是れ暫く信玄の武勇を宥め、後を心安くして前を討ち從へんとす。一には光源院義輝公の御舍弟義昭公をとりたてゝ、義兵を擧ぐると號して軍兵を集めて敵を討ち、二には軍の法に本末前後あり、先づ五畿内の弱兵を攻め伏せて勢ひを增し、東海北陸の強敵を宥めて後に討たんとす。三には中國西海の弱敵には武威を鳴らして大いに威し、東北の剛敵をば謙遜りて宥め、已に家中豐り軍兵多く、人に先だちて京都を[illegible]め給へり。今の世に[illegible]業定めて信長に立つべし、信玄謙信氏康は徒らに我が領國に勞し給は[illegible]物を。」と云ふに、座中此の事を感じける處に、上州箕輪の城主長野信濃守入り來れり。此れは關東の上杉憲政の家臣、譜代の侍として智謀無雙の者なりしが、武田信玄と挑み戰ふ事七年にして、終に討死せしかば、其の子右京之進いく程なく、箕輪の城を信玄に討ち取られて沒落したり。然るに信濃守今又此の座に來り、左右を見廻しけるに、山本勘介入道[illegible]の上座に居て最無禮なり。長野は會釋もなく勘介入道が座の上に上り、刀の柄に手を掛けていふやう、「山本が傍若無人の有樣ことに心得られね、汝は如何にして功を爲し、今かく高座に振舞を致すぞ。」といへり。則ち山本を責めて云ふやう、「そも〳〵汝に[illegible]、世の人更に知らず、此の[illegible]に千年の昔の下まで、悉に[illegible]の名を當るゝ、今我[illegible]、汝が罪過を隱さすべからず。」山本勘介更に色をも失はずして[illegible]ば

候へ〳〵宣へ、共に聞き侍らん。」と云ふ。長野云ふやう、「昔信玄若かりし時、色に溺れて國家を忘れ給ひし時、板垣信形よく諫めて、心漸く改まり、敵を討ち國を併する謀より外に他念なかりし所に、信州諏訪の祝部頼重降参して旗下に屬し、甲府に來りし處に、「是れを討ちて城を奪はずば馬の足を立つべき地なし、然らずば信州終に手に入るべからず、頼重を誑り殺して、信州手使ひの地を求め給へ。」と汝之を勸め參らせ、故なく降参の人を殺させたり。「窮鳥懐に入れば獵者も殺さず」とこそ云ふに、從ひ來る頼重を討つ事は無道不仁の心ならずや。若し是れは軍道の習ひ智畧の一つとも云ふべき歟。情なき所爲是れ更に武道の本意にあらず、虎狼の心に齊しと云ふべし。それに頼重が娘容顔美麗なるを以て、信玄已に色に惑ひ、召し入れて妾にせん事を思ひて、勘介に密談せられしかば、何か苦しかるべきと云ひたりければ迎ひ取りて妾とせらる。汝が佞奸甚だ惡むべし。人の眞性を破り正道を失へり。眼前に首を白刃の下に刎ねられたる敵の娘を取りて我が妾として、他の憂へを忘れて己が愛に供ふる事は、是れ仁者のする所にあらず、されば汝其の時何ぞ正理を以て諫めざる。彼の妾の腹に勝頼誕生あり、太郎義信のため繼母として、而も辨佞利根の女なれば、繼子義信を惡みてさま〴〵讒言す。信玄は智慮淺からぬ人と雖も、色に陷りて心を蕩され、讒を信じて義信を殺し、其のほか譜代忠義の家臣飯富兵部を初めて八十餘人の士、多年舊功の輩、科なくして殺されし事、偏に其の源

は汝が奸曲を以て諫むべきを諫めず、非道に随つて口を閉ぢたる所なり、是れ一つ。信玄の父信虎は強毅不敵の人にして偏屈無顧の性あり。信玄未だ晴信と云ひし時是れを追放して、次郎信繁に家督を譲らんとせられしを、今川義元は信玄の舅なれば是れに心を合はせ、信虎をたて出し信玄家督を奪ひ取られたり。信虎は駿河に浪牢して氏康の養ひを受け、幽なる有様にて月日を送られたり。後に信玄我が身の不孝を思ひ知りて、信虎を甲府に呼び返し孝を盡さんと思はれしを、汝之を諫めて『信虎歸り給はゞ又悪心を以て家を亂さるべし、只其の儘に捨て置き給へ。』とて今に駿府に流浪せさせ、後代までも不孝の名を信玄に貽す事是れ汝が奸曲不義の所なり、是れ二つ。川中島の合戰の時、『今日の軍の支配勘介よく謀るべし。』とて軍謀を任せられしに、徒らに謙信の陣を西條山に見やりて川端に備へを立てず、夜の間に川を謙信に渡され、露許りも之を知らず。俄に驚きて備へを立てしに、武田方の右は謙信のため左に受けて、討ち易き所たるを、義信望月なんど云ふ尫弱の大將を右の方に備へさせ一時の間に破られたり。謙信は急に取拉がんとて自ら眞先に進みて信玄の本陣を切り崩されたり。西條山に向けられし軍兵引き返してこそ、信玄已に危きを逃れ、萬死を出でゝ一生を全くせられ侍れ。典廐信繁諸角豐後初鹿源五郎を初めて大勢討たれたり。軍は勝に似て人數多く失ひ、汝も恥ぢて討死せしは是れ元備へを誤る故なり、何をか軍法鍛煉の師範とすべき、是れ三つ。然れば汝は三州の牛窪

より出でて武道修行して諸國を廻り、四國の尾形に逢うて軍法を傳授し、城取の縄張に大事を得たりと云ふ。抑も汝が[illegible]の城介に至りて何國にありや。今川家に嫌はれて甲府に彷ひ、信玄に抱へられて所知につき、之を蓄らへて駿河に行きたれば、若輩の所行世の笑ひ種となれり。幸ひに武田家に用ゐられ、兵法神道の名を盗み一生星霜は重ねれども、信玄更に大なる功莫し、然らば汝に於て何の勲功ありと云はん。汝は我が敵讎なり、目前に見ながら相宥し、是れ地府の大帝許されざるが故に如何ともすべき道なし。」と云ふに、山本入道一言の返答にも及ばず、座を退きて長野に讓る。長野重ねて云ふ様、「諸家の名臣隣を坐すれども、中にも我は一城の預りなり、此れ故に一の座を占め侍り、尾籠の擧動は曲げて免し給へ。」と云ふ。多田淡路守、「今はゆめ／＼遺恨あるべからず、萬事休す。是れば一夢の如し。只酒飲みて遊び給へ。」とて酒肴取り出せば、互に數杯を傾けにけり。長野歌うて曰く、

義重命輕二鴻毛一　肌骨今没二艾蒿一
山宜レ平淵宜レ塞　殘魂偏誓節操高

北條左衞門佐歌うて曰く、

泉路茫々斷二死生一　落魂何索貽二武名一
古往今來皆是夢　黄泉欹レ耳聞二風聲一

直江山城守歎うて曰く、

物換星移幾度秋　鳥啼花落水空流
人間何事堪惆悵　貴賤同歸土一丘

山本勘介入道は一文不通の者、只弓箭道に鍛錬して餘事を知らざりしが、今此の席に連なりぬれば、僅かに思ふ處を[illegible]して止みなんやとて、

平生智略[illegible]胸中　劍拂秋霜氣吐虹
身後何[illegible][illegible]廢　可憐怨魂嘯深叢

多田淡路守歎うて曰く、

魂歸冥漠魄歸泉　只恨人世名聞權
三尺[illegible]頭[illegible]累々　暫會幽客惠林邊

鶴瀬[illegible]れしと見聞くに哀しさ限りなし。そも夢か夢にあらざるか、庭は惠林寺の庭にして、其の事は[illegible]人の事なり[illegible]らずして我死して爰は又迷途か、仔細を尋ねばやと思ふ處に、貝太鼓の音聞えしかば、座中の輩心付きたりけん、傍なる太刀、刀を取りりく走せ出づるとこそ見えし。一人殘らず跡方なく、消え失せて、[illegible]惠林寺の庭に坐して、夜はほのぼのと明けたり。餘りの不思議さに急ぎ甲府

に立ち居りて、信長公に對面して密かに此の事を語るに、信長嘲ひて、汝は狐に化されて、かかる化事を見たりけるか。と無興し給ひしかば、鶴瀬大きに恐れて郡内に歸り、自ら筆に記して箱の中に留めしとかや。

燒亡定限有り

西の京に富田久内と云ふ者あり、若き時より情深く、慈悲喜捨の志あり、或日家を出でて北野の天神に詣でたり。下向の時、茶店の邊に腰掛けて茶飲みける所へ、十二三許りと見ゆる小法師來りぬ。容の色青ざめて痩せ勞れたり。久内問ひけるは、「小僧は何國の人ぞ。」と云ふ。答へて云ひけるやう「某は東山邊にある者なり、今朝より此處彼處使とありて行き巡り、まだ何をも食はず。師匠坊主の命に從ふ許りの身も心も苦しき事は、又も有るべからず。」と云ふ。久内聞きて可愛く覺え餅買うて食はせなんどしけり。彼の小法師も久内も打連れて茶店を出でて、内野の方に出る。右近の馬場にして、かの小法師云ふやう、「實は我は人にあらず、火の神の使者として、燒亡火事の役に預る。君は情深き慈悲者なれば語り侍る。明日は北野内野西の京皆悉く燒け亡ぶべし。君が家に燒くまじけれども、私に是れを計らふ事叶はず、はや帳張分量の數に入りたり。君早く家に歸りて、財寶家の具取りのけて

他所に移り給へ」我は又跡より遅く行かん」とて失せにけり。人皆不思議のことに思ひ、急ぎ家に歸り、財寶家の具共持ち運び他所に移しければ、人皆怪しみて仔細を問ふに、更に語らず。強ひて問ひければ、かう〳〵の事と語る。之を聞く人嘲りて、「何條狐に迷はされて、有るべくもなき事を聞いて歸り、周章てて家の具を打外し、資財雑具を取り運ぶ、定めて狂氣の料を費さんためか」なんど嘲り笑ひけり。今年三月の頃、西の京の住人等、東の京の住人等と酒の賣買の事につき、庫を組みて賣りけるを、座を破りける故に公方へ訴へたり。其の時の管領畠山入道徳本此の訴へを聞くに、東の方に理ありければ、對決に及びて、西の京の方法度を尽く背きて負けたり。西の京の酒賣る奴原猶憤り、其の外の暴者ども多く語らひ、北野の社に集まりて入り籠る。管領であかく申さるる旨ありと雖も更に聞きいれず、是非に東の京の酒屋の者共を討ち果さんとす。是れに依つて侍所京極東に仰せ合り、武士を遣はして、彼の黨を搦め捕りて牢獄に入れんとするに、捕へられじと防ぎ戰ひて、文安元年四月十三日、社に火をかけ自害しけり。折節魔風吹き出でて、社頭舍坊寶殿悉く一時に灰燼となり、餘煙民家に燃え付きて、西の京悉く野原となりぬ。

原隼人佐鬼胎の事

甲州武田信玄の家臣原隼人佐昌勝は加賀守昌俊が子なり。父は當國高畠と云ふ所より出でて、信玄に召使はれ度々の勳功を顯はしけり。息隼人佐に教へけるは「鳥獸這ふ蟲の類まで己々一つの得手あり、一藝なき者はこれ無し。況んや人と生まれ、殊更侍たらん者は弓矢の事につけては一つの得手をよく鍛錬して、是れを以て主君の所用に立つて、御恩を報じ奉るべし。徒らに俸祿を賜はり、飽くまで喰ひ暖かに著て、私欲を構へ義理を知らず、一藝一能もなき者は畜生にも劣りて、是れは天地の間の大盜賊なり。日月雲霧草木まで皆其の益あり、無藝無能にして、人の爲益なく却つて害になる者あり。構へて能く心得よ。」と遺言せしとかや。されば父が後に信玄に仕へて、忠節私なく軍功の譽あり。其の中に隼人はいつも諸軍に先だち、敵國に深く働き入る時には、陣取の場を見立て合戰の場を考へ、山川谷峯知らぬ所を案内者もなくて是れを悟り、道筋小道までも皆踏み分けて、先登を致すに終に過ちなく、諸侍皆疑ひを殘さずとなり。他國と雖も陣所戰場よく見立て、間道水の手を考ふるに更に過ちなき事神に通ぜしかと人皆怪しみ思ひけり。往古原加賀守が妻は邊見某が娘なり、加賀守は諸方に馳せ向ひ、陣中に日を渡り月を重ね家にある事稀なり。其の家は上條の地藏堂の邊にあり。或時妻産に臨みしが、甚だ苦しみ惱みて終に儚くなりしを、加賀守大いに歎きながらすべき樣なく法成寺の後に埋めて、塚の主となしけり。妻其の死する時法成寺の地藏堂に向ひ手を合はせ一年月日



頓念し侍る、備へて本願誤り給ふなとて地藏の寶號を唱へて終りぬ。加賀守も同じく此の菩薩に歸依して「妻が後世導き給へ。」と祈りしに、死して百日と云ふ夜半許りに、八旬許りの老僧枕に八字の霜を垂れ、鳩の杖に突き水晶の數珠つまぐり、加賀守が家の戶を敲き給ふ。開きて見れば、死したる妻蘇りて、老僧に連れられて來れり。大いに驚きながら内に入れて、「扨老僧は如何なる人にて坐ますぞ、いかゞ有り難き御事ぞ。」と問ひければ、「我は法成寺の内に住む者なり。今宵あから樣に堂より出でたるに、塚の傍に辿れ内より女房の出でたり、何者ぞと問へば加賀守が妻と云ふ。此れ故に連れて來る、よく供養せよ」とてかき消す如くに失せ給ふ。不思議の事に思ひ人を遣はして見れば塚は崩れてあり。骸は土に臥しながら食はざりけるに、初めはうか／＼として物の覺えなきが如し、漸く七日の内に日頃の如く成りしかども、只明らかなる所を嫌へり。次の年男子を生めり、此の子三歳の時、妻或日の暮方涙を流して云ふやう「我は實は人間にあらず、君と未だ緣深かりし故に、上條の地藏菩薩、實に仰せて、魂を還し放ちし、三年此の方の契りを結ばせ給へり。今は緣已に盡き侍り。暇たびて歸るべし、穴賢我が塚を捨て給ふな、跡よく弔ひて給べ。」とて、子をば置きながら行方なく失せにけり。塚を見れば、崩れたりと覺えしは幻にて、草茫々として生ひ茂れり、地藏菩薩の御方便申すも愚かなり。信長此の由聞き及び給ひて、法成寺の地藏堂を作り改め供養を遂げ給ふ。それより

加賀守再び妻を迎へず、彼の男子は原隼人佐なり。十八歳にて初陣せしより、萬神に通ぜし如く、奇特の事多かりしも、仔細ある事なり。

伽婢子卷之五 終

伽婢子　卷之六

伊勢兵庫仙境に到る

伊勢の北畠國司は、國八州を手にして、威勢強くさかんにして、武勇の聲世に高し。或は浦に出でゝ遊び、山中に獵をし、或は秋の夜を遊びに暁のやみに興を催す。若黨内八郎兵衛伊京の首に遣されし、夕暮がたに舟のりて出たり、沖を指して行くを見て、空曇りて海中に嶋立ちあらはれ、然らずば鳥の翔りて、夕暮がたに趣きを結ぶべきのところ、舟の間にて鳥り、遥かに行くむに漕ぎ行きしかば、鬼の住むといふ嶋に到りぬ。これ今いふ八丈が嶋なるべし。それより北の方は誰人の渡りたる事も聞えず、誰はくは彼の八丈が嶋に行きて、その有様見て歸る人あるべきやと仰せければ、東國兵庫頭伊勢兵庫頭南八郎申しけるは、「某行きて、島の體よく見て歸り參らむ」と、いと易く請け合ひ、大船一艘造らせ、江雪兵庫頭は一族として同心二十騎づゝ召し具へ、吉日を擇びて海に浮び、南をさして押し出す、心の内ここに龜が崎、伊豆の沖にはしも島ありと云ふ、離れては佐渡島近く、おしなべ寄せし島に、俄に風變り浪高く揚りて雪の山の如し。江雪は地角にこの島に着き、千里ゆけば、年頃を數へし八丈が島に

[illegible]兵庫頭[illegible]指して行く[illegible]

[illegible]

[illegible]花に[illegible]

[illegible]有樣[illegible]

[illegible]身には[illegible]花形[illegible]

[illegible]ずまたり。年頃二十許りなるが色甚だ白く[illegible]

[illegible]通ず。兵庫頭を見て大いに怪しみ、「如何なる者ぞ」と問ひければ、兵庫頭の[illegible]

人[illegible]の國と名づく。日本の地よりは南の方[illegible]里に及べり、是れより觀音の淨

土[illegible]近し。[illegible]時に、[illegible]

[illegible]

[illegible]られよ」と

[illegible]兵庫頭數

[illegible]るやうに述べ聞

[illegible]の上に

[illegible]

方二尺餘りの石あり、松風石と名づく、内外透き通りて玉の如く、色は青く黄なり、七寶の盆に載せて、又七寶の砂を敷きたり。その石谷室の道分れ、瀧の白玉と飛び散るかと怪しまれ、唯水音の落ちたぎらぬぞ石の紋とは見えけれ、眞に絶世の盆山なり。石の腰より一本の松生ひ出でて高さ一尺七八寸もありなん、年經りたるかたち、さこそ千年の春秋を幾回り知りぬらんと、昔の事も問はまほしきに、枝の間より涼しき風吹き出でて座中に滿ち、枝傾き葉動き颯々たる粧ひ、九夏三伏の氣も自ら忘るべし。瑠璃の帳臺には馬腦の唐櫃あり、大きさ三尺許り、その色紅の如くにして、鳥獸草木の圖色々に彫りつけたるは、更に人間の所爲にあらず、又傍に一つの瓶あり、大きさ一石餘りも入るべし。其の色紫にして光り輝き、内外透き通りて水晶の如く、厚さは二寸ばかり、重きこと鴻の毛のあがるに似たり。内には名酒を湛へて、上清珍獻醴と云ふ簡を付けたり。その傍に大きさ二斗を受くべき盃あり。その色白く光り輝けり、内に名香を容れて、龍火降眞香と云ふ物あり。又百寶の屏を營傍ひて壁に寄せ、瑪瑙の柱黄金の幕、銀の簾高く見上ぐる樓あり、降眞臺と云ふ額を懸けたり。庭の面には見なれもせぬ草木の花咲き亂れて、三月の頃の如く、孔雀鸚鵡の類、其の外色香面白く名も知らぬ鳥多く、木々の梢草花の間に鳴き囀る。十五間の廏に立て列へたる馬共、或は其の色碧なる或は紺青色なる、その中に又連錢なる白き黒き樣々の名馬、何れも五寸六寸皆龍馬の類なり。其の間

ふところの様は、掌に似て白き花あり、更に餘の草を交へず。碧瑠璃の色を敷く如く、牽牛花のひかりを映す。且皆その大きさ鞠の如くなる、枝の間なく生ひ垂れたり。垣の外を見れば、圖畫棟朱欄頭の葉、紅の葉、霞を隔して立て連へり、青紫雲に聲を聞き香爲に薫す。山際に行きて見れば、雲より落つる高き雲に湛へたる水瀧にて、流れて出づる川瀬の傍に應ぎり、二町四方も有りなん。其の水はただ銀にして水紅と雖も泡とす、行きて投ぐれども輕水の上に浮き出る。此れ故に爾を以て向ふ所を成人是れに至りてこれを汲む。水底の石は皆黄金の色なり、井出の山吹水に映り自ら金花咲く。潮の下を通す合ほどなる。水中に魚あり、其の色赤くして金の如く皆各四の足あり。其の達は廣き皆達なり。金色に草に翡翠色の葉有る草多し。葉の形は菊に似て、自将の如くなる花あり、花の色黄にして内赤し、白き毛の如くなる葉ありて鶏頭の如し、風少し吹けば其の花動きて鷲の羽ぶきに似たり。園中の女は鬼如を纏りて首の飾りとす、十日を經れども萎まずと云ふ。此を園中の男女何れも常に十許りにて、老人は一人も見えず、其の離宮の實は美しき樹木の形にはいと稀なり。兵庫同じくは此處に住まばやと思ひしかども旧悲の倒せによりて今を出し、頭に戴されて涙に暮れ、世に頼なき身を嘆ち、其の儀らずは若しこの名を喚ばれ、身の毛までも悚み始め事も日を暗し、如何にしても古郷に歸られんと思ひ日に断くて三つの月、且又に感じて、これも淡海の軍を隠し、途中に到らせん、これを平経に

給ふ節には、馬一疋鞍一口を舟に入れたり。其れより暇乞して舟に乗りければ、黒衣やうの者来て、青黛の鉢に盛り与へ、纜をときて押し出せば、順風徐々として吹き起る。已に帆を引き上げれば、一日の程に伊豆の浦に着きたり。舟より上りて先づ城中に参りしかば、氏康は早病死あり、氏政世を継ぎて国家を治めらる。兵庫大いに歎き悲しみ、涙と共に彼の島の物語して、昔垂仁天皇は田道間守に仰せて、常世の国に遣はして、香菓を求め給ひし、是れ今の橘なり。已に採りて帰りし時は、帝は早崩御在ます。田道間守大いに歎き悲しみ、「我が志の至らぬ故なり」とて、泣き死に死にたりといふ。氏康已に病死あれて、只今帰り来る事是れ志を失ふなり」とて腹切つて死にたり。兵庫頭が物語を書き留めおかれて、後に世に顕されり。

畜生の道士

安房国里見義弘は、武勇を以て国家を治め、其の威漸く盛りならんとす。其の頃朝夷郡より老翁一人召し連れて城中に来る。其の年を尋ぬれば、遥に数百年に及ぶと云うて年の数を覚えず、髪鬢は白きを変じて黄金の糸の如く眼の色青く耳長し、顔色は未だ五十許りの男にして、常に召されて来すれば地に蹲り、名を問へば岩田刀自と号す。後鳥羽院の御時に信州祢須野の狩に、三浦大輔に具せら

れて狩場に赴く。九尾の狐を殺せし事、砒霜の[illegible]人數多く毒に中てられ、大熱狂亂して死せし事、今見る樣に語る。「其の時年十八歳、[illegible]思ひ山に籠りて道を修す。何方ともなく仙人と覺しき人[illegible]一粒の[illegible]を服せしより、身も輕く心も爽やかに[illegible]七寶の[illegible]を飲ませしに、[illegible]を見すれ、氣を伏し息を靜かにす、此れ故に神氣[illegible]今より九百年の[illegible]物を見るべし。一千年にして骨を易へ、二千年に[illegible]毛を易ふべし。是れ[illegible]ず齡傾かず、命更に限りあるべからず。凡そ世の人、内には七情の[illegible]色を恣にし[illegible]を濫りにす。[illegible]火亢ぶり[illegible]し、九百分の穴[illegible]しくひすろぎ、十四の經十五の絡皆もぢれ弛まり、三百六十[illegible]命[illegible]く心を[illegible]

に似たり。徒らに魂勞れ精くるゝを、僅かに方寸の胸の間に妄念の波高く揚り、互に觸れ害ふ事猛き獸よりも烈し。此れ故に佛經には世界を以て火宅と名づけ、道教には此の身を以て大なる患への宅とす。已に是れを遁れ人の世の中を見れば沸湯の如く凄まじく覺ゆ。何ぞ身を捨てゝ其の間に置くべきや。已に三尺の形を錬りて一寸の心を磨く時は、天に登り地に入り雲に乘り水を走り、千變萬化更に無方にして飛行自在なる事縱令萬乘の君も及ばず、況して世の常の人誰か之に勝られんとて其の方を教へられしに、我それより當國の山中に歸り、深く籠りて習ひ侍り。食は松の葉を採り茯苓を食ひ、藥は又菟絲子茅根を求め、石を煉りて膏を取り、霜を煮て飴と爲し、百花の露を滴らして是れを煉り屢服するに、長く五穀を斷ち更に飢ゑる事を覺えず、心を松風蘿月に嘯き瀧水に慰むれば、慾もなく思ひも無し。」と云ふ。義廣問はれける樣、「我も亦此の仙術を勤めば習ひ得べきや。」と。答へて曰く、「心を沈めて我が物とし、色を遠ざかり慾を離れ、味ひよき食を退け、樂しみも悲しみも只是れ一つにして心に留めず、德を施して偏頗なくば自然に天地の惠みに叶ひ、日月と齊しく壽長く侍らん。目濫りに見ず耳濫りに聞かず、聲濫りに出さず身濫りに使はず、行くも止るも坐つも臥すも只濫りにせず、常によく守るべし。」と云ふ。義廣聞いて、「扨は是れ人間の交りは此の道の障りなり、障りを除きて勤めんとすれば鹿猿の如くなり、然らずば長生して詮なし。」とて樣々食を進むるに刀自更に食はず、

た、酒よく飲むと雖も酔ひたる色なし。其の形をかしげに見苦しき事なく、若き女房達大いに笑ひしかば、刀自打笑ひて「女房達悔み給ふな」とて指さしけるに、十七八二十四五許りの女房達十五六人、俄に變じて老となり、顔は皺の皮の如く、背は蛇の鱗に似たり、髪白く色黒く腰屈まりしかば、女房達大いに驚き、歎き悲しみて涙は雨の如し「是れ赦し給へ」と手を合はせ詫言す。刀自「懲りたまへ」とて又指ざしければ、本の姿となりたり。義廣大いに怒りて、刀自を殺さん事を謀られたり。刀自先だちて是れを知りつゝ「昔此の志ありし國運久しかるまじ、今より九百月の後、必ず横さまに禍にあはん」と囁き置きて、坐を立つかと見えし、二度其の行方を知らず。追つて國中の山々隈なく求むるに是れなし。義廣曰く「九百月は四十餘年なり、我何ぞそれまでの命あらんや」と。然るをよくよく見れば、九の字にはあらで箇の字なり。果して五箇月の後、北條氏康の爲に國府臺にして敗潰しけり。扨、昔田刀自は生國如何なる所とも知らず、誰某の子とも聞こえず、又其の終る所も後に知る人なしと云ふ。

遊女宮木野

宮木野は、駿河國府中の娼家に隠れなき遊女なり。眉目容貌美しく、手能く書き、歌の道に心をか

け、情の色深かりければ、近き邊の人これを慕ひ、風流の輩悉く是れに馴れざるを恨みとし、好事の者皆是れに契らざるを恥とす。此れ故に中古此の方には類なき遊女なりとて、古の虎御前に準へ力壽に比べて、貴き賤しき同じ心に持てはやしけり。八月十五日若き人々此の家に入り來りて、月を弄び歌詠みけるに、宮木野かくぞ言ひける、

眺むればそれとはなしに戀しきをくもらばくもれ秋の夜の月

いく夜われおしあけ方の月影にそれと定めぬ人にわかるゝ

「此の歌實に我が身に取りてさも有らめ」と一座の輩或は笑ひ或は感じけり。其の座にありける人の中に藤井淸六と云ふ者あり。先祖は國司の家人にて京家の者なりしが此所に住みつきて地下に下り、田地數多持ちて富み榮え、今其の末に及ぶまで府の間には富裕の人と云はれ、殊更淸六は風流を好み情深き者なり。父は空しくなり母一人あり、自ら妻もなく獨り住みていとゞ物悲しき秋の月に嘯き、今宵しも此の座に連なり宮木野が此の歌を聞くに、日比容貌と云ひ才智賢きに愛でて、價多く出し宮木野を請ひ受けて妻とせり。藤井が母是れを聞きて「府中には人にも下らぬ家督なれば、如何ならん名もある人の娘をも迎へて我が新婦とも見ばやとこそ思ひつるに、遊女を妻とせんは是れ本意なけれども、縱令我が子の見るべき面倒を、今は如何に云ふとも詮なし、早く呼び入れよ」とて家に迎へ取

りて見るに、眉目容貌美しきのみならず、心ざま優に優しかりければ、母かぎりなく喜び、たとひ大名高家の娘なりとも、生付人がましからずば何かせん、此の女は如何なる人の材にもはへれ、類なき女の道知れる人ぞや、我が子の慈ひ愛でけるこそ理なれとて、世にいとほしみかしづきけり。宮木野も今は只舅姑に仕ふる事我が實の母の如く、孝行の道更に類少なうぞ行ひ勤めける。京都に叔父あり、清六が母のため弟なり。頻りに心地煩ひしかば、死すべく覺えて人を下して云ひけるやう、清六を上せ給へ、云ひ置くべき事侍りと云ふに、母限りなく悲しく思ひ、急ぎ上りて見よ、自ら女の身なれば飛び立つ許りに思へども叶はず、和殿は男なれば何か苦しかるべき、其の有様見届けてたべ、と云ふ。清六輙何すべきと案じ煩ふ。宮木野云ふやう、老母の思ひ給ふ所、此の度京に上らずば一つには自らに心留まりて叔父の事を忘れたりと云はん。二つには母の心に背く不孝の名を受け給はん、只上り給へ。さりながら老母已に年高く病多し、君遙々の都に行き給はば、昔の人の言ひ置きし事を勤むる日は多く、親に事ふるの日は少なしとかや、西の山の端に入り掛る月の如く弱り給ふ母なれば、必ず一足も早く歸り給へとて、已に門出の杯取りかはして、又逢ふべき道ながら、わりなき中は暫しの別れも悲しく覺えて、宮木野涙を浮べて、

うたてなどしばしばかりの旅の道わかるといへば悲しかるらむ

と詠じければ、清六もかくぞ口すさびける、

　つねよりは人も別れを慕ふかなこれやかぎりの契りなるらむ

とて涙に咽びければ、母聞きて「あな忌々し、軈て歸るべき道を、是れまで名殘惜しみける事よ。」とて出し立てて京にぞ上せける。已に都に上りしかば、叔父殊の外に勞り終に果敢なく成りぬ。子ありけれども幼く侍りしかば、妻の一族に財寶悉く預け「此の子よく育て給へ。」とて後の事取り賄ひ、それよりやがて國に歸り下らんとせし處に、諸國の内亂れ立ちて所々に關を据ゑ、往來の人を通路せさせず、或は國並び郷續き、互に出合うて軍する事毎日に及べり。清六も心の儘に道をも過ぎ得ず。旅屋より旅屋に移り、此處彼處せし程に一年餘に成りにけり。元より通路容易からねば、互に便りを絶ちて生死の事も聞えず。さる程に府中の母は、我が子の久しく歸らざるを心許なく、朝夕に戀ひ悲しみ、斯かるべしとだに知るならば、上すまじき事にて侍りしを、悔しくも遣はして、生きたりとも死にたりとも聞かざる事こそ悲しけれ。」とて只泣きに泣きつゝ重き物思ひの病となり、牀に臥して日を重ぬ。宮木野これに事へて夜晝の別ちもなく、藥と雖も自ら先づ飲みて後に參らせ、粥と雖も自ら煮て進め、神佛に祈り「我が身を代りにして姑の病を癒し給へ。」と祈りけれども、更に驗なし。半年許りの後今は早此の世の頼みもなく成りければ、姑則ち宮木野を呼びて「我が子已に都に赴き、世

り離れに道狹くして久しく便りなし。我父重き病に苦しむを、新婦として我に仕へ給ふ事誠の子と云ふとも如何で斯くあらん、孝行なる事世に類なし。今は心に殘る事もなし、此の恩を報ぜずして命空しくなるなり。和君必ず子を産み給はん、我は孫をも見ずして死なん。其の子和君に孝行なる事又今和君の我に仕へて、濃やかなる如くなるべし。あなかしこ天道物知る事あらば、此の言葉違ふべからず。」とて、其の儘絶え入りて蘇らず、宮木野悲しみ深く、涙の落つる事雨の如し。葬禮の事取りまかなうて、七日々々の佛事其の分限に過ぎたる此の物思ひに、悴かしけ肌痩せて、餘所の見る目も憐れに見えし。永祿十二年武田信玄駿州に發向して、府の城に取りかけ、民屋に火を放ちて燒き立てければ、今川氏眞は落ち失せらる。武田方の軍兵家々に亂れ入りて、亂妨分捕して狼藉云ふ許りなし。宮木野が眉目容貌美しかりければ、軍兵共捕者にして犯し汙さんとす。宮木野奥深く迯げ籠り自ら縊れて死にはべり。兵共其の貞節を憐み、家の後の柿の木の本に埋めけり。幾程もなく駿府は武田の手に入りて靜かになり、道開けて通路容易く海道の諸大將も和睦せし頃なれば、藤井清六やう／＼にして國に歸りければ、駿府の有樣變りて我が家には人もなし。柱傾き軒崩れ草のみ茂く荒れまさり、さは宮木野は何地へ行きけんとも知る人なし。門に出でて見れば、年頃召使ひける男出で來れり。是れを呼んで尋ぬるに、「有樣いたく煩ひ給ひけるを、宮木野わが身に代らんと神佛に祈り晝夜つき添うて

看病せしに、其の甲斐なく果て給ふ。其の後武田信玄の爲に府中を追ひ落され、今川氏眞公は行方なし。宮木野は敵軍の手に身を汚されじとて縊れ死に給ふを、兵共其の貞節を感じて後の柿の木の本に埋めし。」と語るに、藤井悲しき限りなく血の涙を流し、泣く〳〵尸を掘り起して見れば、宮木野が顔容宛ら生きて在るが如く肌の色衰へず。藤井は悶え焦れ絶入り〳〵歎けども甲斐なし。それより母の墓と一つ所に葬りつゝ、墳に向ひて花香手向けて口説きけるやう、「君は平生才智賢く心の色深し、人に代りて身の行ひよく道を守れり、假令死すとも世の常の人には同じからず。されば久しく音信の絶えしも我が咎ならず、心に任せぬ浮世の業なり。黄泉の底まで物知る事あらば一度我に見え給へ。」とて、明くれば墓に行き暮るれば家に歎きて、二十日許りに及ぶ。月暗く星あらはなる夜、藤井獨り燈火掲げて坐しければ、宮木野が姿は影の如くにして出で來り、「君が心に念願する所を感じて、司録神に暇を乞うて現はれ來る。」とて始終の事ども泣く〳〵物語して悄然と立ち居たり。藤井是れを見るに悲しみ今更にて、我が老母に孝行ありし事、其の身を殺して貞節を守りし事まで感じて泣きければ、宮木野云ふやう、「自ら元來官家高門の娘にあらず、仇に儚なき流れの身となり、人に契りて心を留めず、明けがたに別れて名殘も知らず、色を繕ひ花を飾りて旅人に歡ひ媚ぎ、身は宛ら路の上の柳、垣の本の花、往來の人に手折られん事を思ふ、姿をなまめき言葉を巧みにして、昨日人を送りては今日

の客を迎へ、西より下れば西なる人の婦となり、東より上れば東の人の妻となり、浮きたる舟の寄る邊定めぬ契りを交し、すこつき難き縁にのこ月日を送りしを、君に逢ひて眞の妻となり、昔の習はしを捨てて正しき道を行はんとす、思ひかけずかかる難に逢ふことも前世の報いなり、されながら貞女孝行の徳に困り、天帝地藏我を愛じて男子と生じ、今鎌倉の町通に富裕の家あり、高橋の某と名づく、別家に宿り給へ、明日生まれ侍るなり、君に逢はば笑ひ侍らん、是れを印とし給へ、と云て霧の如く消え失せたり、藤井いよ／＼歎きながら、七日の後鎌倉にゆきて高橋の某が家に尋ね入りて、此の間生まれし子やある、行きて抱き見てたべ、と云ふに、主の翁内に一十月あり、生まれてより今に至り晝夜泣きて聲絶えず、とて抱き見せしかば、此の子莞爾と笑うて、それより泣き止みて又啼泣しめり。藤井有の儘に物語りしつゝ、一期契約して、往來の音信絶えずと云ふ。

蜘の鏡

永正年中の事にや、越中國礪波山の邊に住む者あり、常に業を勤め山畑を作り、春は蠶を養うて世を渡る業とす、蠶する頃は嶺山深く入りて、桑の葉を買ひ求め、夏に至れば、又山中の村里を尋ね巡り、絲綿を買ひ集め、諸方に出し商うて利分を求む、山より山をつたひて深く分け入る處、谷深く水

漲りて渡り難き所多し。或は藤葛の大綱を引き渡し、苔の兩岸の岩根大木に繫ぎ置く。道行く人此の綱に取り付き水を渡る所もあり。然らざれば漲る水、矢より速くして押し流され、岩角に當りて碎け死す。或は東の岸より西の岸まで葡萄蔓の大綱を引き張り、竹の籠を懸け道行く人を是れに乗せ、向ひより籠を引き寄する。其の乗人も自ら綱を手繰りて傳ひ渡る、若し籠の緒切れ墜つれば、谷の道塞く水に溺れ岩に當りて死する所もあり。五月の中頃、越の商人、綿帛を買ふ爲に山中深く赴きしに、さしも險しき谷に向ひ、岸は屛風を立てたるが如く、水は藍を揉むに似て、大木生ひ茂り日影も定かならぬに、谷の傍に徑三尺許りの鏡一面あり、其の光輝きて水に映りて見えたり。彼の唐土に聞えし楊貴妃、帳中の明王鏡、汴州張琇が神怪鏡と云ふとも是れにはまさらじ。百練の鏡此處に現はれしや、天上の鏡の落ち降れるや、いかさまにも靈鏡なるべし。岩間を傳ひて取りて歸り德付かばやと思ひ、其の有る所をよく視果せて家に歸り妻に物語りければ、妻の云ふやう「爭でか其の谷陰に左樣の鏡あるべき、譬ひありとても身に代へて寶を求め、跡に殘して何かせん。若し足を過ち水に落ち入らば悔むとも甲斐なからん、只思ひ止まり給へ」と云ふ。商人云ふやう「二度に過つべからず、未だ人の見ざる間に早く取り收めて德付かばや」とて夜の明くるを遲しと刀を横たへ出でて行く。妻心許ながりて召使ふ男一人我が子と共に三人、鐵搭鑓鉞なんど持ちて後より追つて行きぬ。山深く入り

て谷に向へば、白き光輝き圓き明らかなる大鏡あり、商人谷の岩角を傳ひ、其の光の邊近く行くかと見れば、大音に叫び呼ぶ事只一聲にて音もせず。妻と子と驚きて谷に下りければ、商人は蠶の繭の如く絲に纏ひ包まれて、大なる蜘蛛の黒色なるが取り付きてあり。三人の者立ち掛りて一槍にて突き落し、鑓にて切り倒し刀を以て絲を引き破りしかば、商人は頭の髓落ち入り血流れて死す。其の蜘蛛の大きさ、足を伸べたる形、車の輪の如し。妻子泣く〳〵柴を積み火を燒りて蜘蛛を燒きければ臭き事山谷に滿ちたり。其の尸をば取りて歸り葬りけり。其の古より鏡に化して、捕る人を誑し取りけるとぞ。

白骨の妖恠

長間佐太は讃州の者なり。天正の頃の年、公方に重役に置られて京都にのぼり、役果てて後も國に歸らず、

いかにしてもまた手にとらじあづさ弓もとの家路を引きはなれては

と讀じて道心を發し、顔の前の片邊に、草の庵を結び、後に世をば遁れんと思ひければ、北山に行きて柴と云ふ物を負ひ來りて、都に出でて賣代物少しの利を求め、常の糧を調へつゝ、

家に歸る時に扉打ちたゝき歌唄ひ、或時は房に行きて庭の塵を掃除し佛前の塵を拂ひ、日暮れて道遠ければ堂の軒に夜を明し、明くれば又柴を荷ひ賣りけり。澀染の帷子一重だに肩裾破れはてぬれども、心に懸くる衛もなし。土岐成頼が家人石津の某と云ふ者は、同國の好みを以て、小袖一つ錢三百文を與へて、時々は此庵へ坐して食事をも受け給へ」と云ふ。佐太是れを取りて庵に歸りしが、四五日ありて錢も小袖も皆返して云ふやう「物を貯ふると云ふは、妻子の有る人に取りての事ぞや。我は思ひ離れて妻子もなし、身一つは行先を泊と定め、食事は有るに任せ、物事に心を留めねば、樂しさ云ふばかりなし。然るを此の小袖、錢を庵に置きぬれば、外に出でては早く歸らんと思ひ、出づる時には戶を閉ぢて、盜人に取られじと用心に隙なく、此の程の樂しみ悉く失せ果てたり。只是れ程の物に心を使はれんは、誠に淺間しからずや」とて返し侍り。或日北山に赴き歸るさ遲く、蓮臺野にさし懸りては夜半ばかりとおぼゆ。道の傍に一つの古塚ありて、俄に兩方に壞れ開けたり。佐太は心元より不敵にして、力も強かりければ、少しも驚かず立ち止まりて見れば、內より光出でて、邊まで輝く事松明の如し。一具の白骨ありて、頭より足まで全く續きながら、肉もなく筋も見えず、只白骨のみ頭手足連なりて臥してあり。其の外には何もなし。此の白骨俄におくと起き上り、佐太に犇と抱き付きたり。佐太はしたゝか者なれば、力に任せて突きければ、のけざまに倒れて、頭手足ばらばらと壞れ

散り、重ねて動かず、火の光も消えてくら闇に成りたり。抑何なる人の塚とも知れず、次の日行きて見れば、白骨砕け塚崩れてあり、後に佐太は其の終る所を知らず。

難に死する先兆

享徳年中に、細川右京大夫勝元が家人、磯谷甚七と云ふ者出仕を致しけり。其の妻面に出でたれば誰とも知らざる人右の手に太刀を引きそばめ、左の手に磯谷が首を提げて走り出でて去りけり。妻大いに驚き恐れて内に入りて見れば、磯谷は前後も知らず臥してあり。妻は胸潰れ手足なえて、只夢の如くに覚えたり。斯くて驚かしければ、磯谷睡りを覚し起き上り、「我夢に或人来り首打を切りて持ち去ると見たり、怪しくも心に掛るなり」とて、卽て山臥を頼み夢違への法を行はしむ。其の月の末に主君勝元が將軍家に御憤りを蒙る事ありて、是れを陳じ申さんが爲に科を家人に負せて是非なく磯谷が首を切らせ、是れを以て我が身の科を遁れたり。

伽婢子巻之六 終

伽婢子　卷之七

繪馬の妬み

伏見の里御香の宮は、神功皇后の御廟なり、元より大社の御神なれば諸人歩みを運び崇めまつる。常に寄進有る輩は、繪馬を掛け湯を參らせて祈り奉るに、願ふ事叶はずといふことなし。此の故に神前に掛けたる繪の數なく、繫馬、挽馬、帆懸舟、花鳥、草木、又其の中に美女の遊ぶ所なんど、樣々の繪あり。文龜年中に都七條邊の商人、奈良に行き通うて商買する者あり、九月の末つ方、奈良を出でて京に歸りける。秋の日の習ひ程なく日暮れて、小椋堤をうち越えて伏見の里に著きたれば、はや人影も稀になり、狐火は山際に輝き、狼の聲さへ叢に聞えしかば、商人物凄く覺えて、御香の宮に立ち入り夜を明さんとす。拜殿に臥して肱を枕とし、冷かなる松風の音を今夜の友と定め、幽なる御燈の光を便りとして暫く假睡みければ、人あり、枕元に立ち寄りて驚かす。商人起き上りて見れば、青き直衣に烏帽子著たる男ありて云ふやう、「只今止事なき御方々に遊び給ふ、少し傍へ立ちのきて休み給へ」と云ふ。商人心得ぬ事と思ひながら、傍に退きて見居たれば、美女一人女の童を召しつれ拜殿

に昇る一筵の上に鯛の膾を置き、燭火かゝげ酒肴取り出し、彼の女傍を見廻らし、商人の顔の暗

たるを見て少し打笑ひ、「如何にそこに坐するは旅人なりや。道に行き暮れて、それなら此所に夜を明さ

ては、佗しき物とこそ聞くに、何か苦しかるべき、爰に出でゝ遊び給へ」と云ふに、商人嬉しくて恐

れながら這ひ出でつゝ畏まる。貝遊く寄りて打解け酒飲み給へとて、御簾の上に呼びて打向ひたる氣

色、誠に此諸の花容玉貌の顔、芙蓉は面の如く、柳は眉に似たりと云ひけん楊貴妃は、昔話に聞き

傳ふ。一度顧みれば國を傾け、二度顧みれば城を傾くと云ひし李夫人は、目に見ねばそれも知らず。是

れは如何なる人の世におはしけれ、如何なる縁ありて此の座には列なるらん」と夢か夢にあらざるか頼

らず、現なから魂浮れて更に現とも思はれず。女の童も十七八其の顔容なべてならず、眉黛の色は

遠山の霞を引きたる如し、白き歯は雪にも勝ふべし。腰は絹を束ねたるが如く、指は筍の生ひ出でた

るに似たり。物言ふ聲潔く、言葉遣ひに不束ならず。目指の女房杯取りて商人にさしければ、臓

ゐて三献を受けて飲みければ、女の童箏を取り出して彈く。女房は東琴取り出させ、柱たて並べ調

子取れて、ほのかに歌うて彈きけるに、商人魂飛び心消えて數杯を傾け、其の頃世に流行りし波枕と

云ふ歌謡ひ、聲よく調子の曲節おもしろきに、琴箜篌の調べを合はせければ、雲居に響き社頭に滿ち

て來り、時を言ふ許なかりし。商人大いに醉うて袂を探るに、白銀花形の手箱あり、これを女房に奉る。

又玳瑁の琴爪一具を包みて女の童に與へ、手を取りて握りければ、女の童莞爾と笑ひて手を締め返しけるを、主君の女房見つけて、妬む色外に現はれつゝ、

あやにくにさのみな吹きそ松の風我しめゆひし菊のまがきを

とて傍にありける杯の臺を取りて、女の童が容に投げ付けしかば、破れて血流れ、袂も衣裏も紅に成りければ、商人驚きて立ち上ると覺えし夢は覺めたり。夜明けて後、懸け並べたる神前の繪を見るに、錦の褥の上に美しき女房琴を彈き、其の前に女の童箜篌を彈きける、其の傍に青き直衣に烏帽子着たる男坐して有り。女の童の顔、大いに破れたる痕あり、夢の中に見たりける容貌に少しも違はず。疑ひもなく此の繪に書きたる女の、夢に戲れ遊びけるか、繪にも情のつきては、女は物ねたみある事弦に知られたり。抑此の繪は誰人の筆と云ふ事を知らず。

廉直の頭人死して官職を司る

蘆沼次郎右衛門重長は、鎌倉の管領上杉憲政公のときに、相州藤澤の代官として病に因りて死す。蘆沼が甥三保庄八と云ふ者其の跡に代りぬ。蘆沼は一生の中、妻を持たず妾もなく、只其の身を潔白に無慾を表とし、さして學問せるにもあらず、又後世を願ふにもあらず、天性正直正道にして百姓を

哀れ、少しも物を貪る思ひなし。それに引替へ、庄八は大いに百姓を虐げ、慾深く、貪りければ、此の人
久しく癒えざりけると、爪揮して悪みきらひけり。庄八或夜の夢に、怪しき人来りて其の面に怒れる
色あり、従ふ者十余人手毎に弓鎗長刀持ちたり。大将頭を下げて云ふやう、「汝保庄八が悪行積れり、
高手小手に縛めて首を刎ねよ」と云ふ。其の時に伯父堯浩来りて、庄八が所行誠に人望に背けり、
其の罪輕からずと雖もまげて許し給はらん、然らば髪を剃り僧となさんと云ふ。大将頷し打笑ひ「汝が
罪を赦さん事を願ひ申すなれば許すなり。但し今より後日頃の悪行を改めて、善道に赴くべきなり」とあ
りしに、庄八畏れて立ち頓しければ、大将刀を抜き「我が見る前にして髪を剃れ」とて剃刀を取り出し抑
へて髪を剃り落しぬ。斯くて夢さめしかば、頭を撫りて見るに髪は皆落ちて枕許に有り。是非なき法師に
成りたり。妻子これを見て泣き悲しみけれども甲斐なし。庄八は暇乞うて心も起らぬ道心者となり、
光明寺に籠りて念仏申し居たり。或夜堯浩入り来れり。庄八入道夢の如くに覺えて「扨御身何にして来り
給ふ」と云へば堯浩云ふやう、「汝入道して仏法に帰依しながら、遂に我が墓所に詣でたる事なし、
明日必ず参りて卒塔婆を立てよ」と云ふ。「扨何と書きて立つべき」と問ふに堯浩答うて書きたる
其の文字の形にして読みの事叶はず、「汝人間と冥途と文字同じからず、是れは光明真言なり。
後に書くべきは我が戒名なり、我死して地府の官人となれり。汝日頃悪行を以て私を構へ、百姓を責

を徴り、定めの外に賦斂を重くし、鞭藁木竹に至るまで貪り取つて己が所分と爲し意に非道を行ふ。此の故に疎まれ人望に背き、天帝是れを惡みて福分の符を破り、地府是れを怒つて命の籍を削る、惡鬼便りを得て禍を爲す。汝必ず縲紲の縄に縛られ、白刃の鋒に掛り、身を失ひ命を亡ぼし、其の餘り罪妻子に及ばんとす、我是れを憐み出家に寄して禍に替へたり。然るを我が恩を思ひ知らず、終に官所にも詣でず。」と責めければ、庄八一言の陳すべき道なし、酒を出して勸めければ、飲みたりと見えて却つて故の如し。庄八問ひけるやう、「昔日に地府の官人となり、又何事をか職とし給ふ。」盧沼答へけるは、「此の人間にして一德一藝ある者、心立正直慈悲深く、私の邪なきは、又死して地府の官職に與る、假令勝れて藝能あるも邪慾奸曲にして私あり、君に忠なく親に孝なく、誠を行はざる者は死して地獄に墮つ。後世を願ふと雖も、我が宗に著して他の法を貶しむる者は是れ即て謗法罪なれば、假令強く修行すれども、死して地獄に墮つるなり。然れば我常に慈悲深く百姓を憐み、君に忠を思ひ邪慾奸曲を恐れ、私を顧みず正直正道を行ひし故に、今地府の修文郎と云ふ官に與り、天下四海八極の人間の善惡を記し侍り、青砥左衛門藤綱、長尾左衛門昌賢以下我その數に加へられ、修文郎の官八人あり。楠正成細川賴之は武官の司となり、相模守泰時最明寺時賴入道は文官の司なり、其の以前文武官職の輩は皆辭退して佛になり侍り。今は文武の兩職に成るべき人なし。されば

毎日冥府の廳に來る者、日本の諸國より市の如く見ゆれども、皆不忠不義不孝奸曲なる輩、我が知れる人ながら私には贔屓も叶はず、地獄に送り遣はす、其の簡を出すも痛はしながら是非なき事なり」と云ふ。庄八問ひけるは、「生きたる時と死して後とは如何ならん。」と。答へて曰く、「別に變る事なし。されども死する者は虚にして生きたる時は實するのみなり。」又問ひけるやう、「然らば魂再び尸の中に心の儘に還り入らざるは、如何なる故ぞや。」答へて曰く、「例へば人の肘を切り落すに、落ちたる腕に痛みなきが如し。死して尸を離るれば、其の體は土の如く覺え知る所なし。」又問ひけるやう、「此の春世間に疫癘はやり人多く死す、是れ如何なる故ぞ。」と云ふ。鹿沼が曰く、「三浦道寸其の子荒次郎は正直武勇の者とて、暫し地府に留め、武官の職に補せらるべき所に、謀反を企て人を取りて我が軍兵にせん爲に、恣に疫神を語らひ疫癘を行ひし所に、其の事顯はれて北帝これを捕へて地獄に送り遣はし給へり。」と云ふ。又問ひけるに、「生きたる時憎き怨を死して後に害すべきや。」答へて曰く、「冥途の掟には生くる者の死するを悦び、殺す事を嫌ふ故に、此の世にして敵なれども、死して後には心の儘に報ずること叶はず。其の中に若しくは我が敵の亡靈を見て、これに脅えて死する者は元是れ惡人なり。地府よりこれを戒められ、其の敵を遣はして命を奪ひ給ふ者なり。今は夜も明けなん、構へて道心堅固なるべし。邪なる道に入つて地獄に墮つる事勿れ。」とて、立ち出づるとぞ見えし姿は消え失

せし。庄八今は浮世を思ひ離れ、念佛怠らず來迎往生を遂げにけるとぞ。

飛加藤

越後國長尾謙信は、春日山の城にありて、武威を遠近に輝かし給ひける所に、常陸國秋津郡より名譽の竊盜の者來れり、而も術品玉に妙を得て人の目を驚かす。或時さまざまの幻術を致しける中に一つの牛を場中に曳き出し、彼の術師是れを呑み侍り。一座の見物肝を消し、奇特の事に云ひけるを、其の場の傍なる松の木に登つて見たる者ありて、「只今牛を呑みたりと見えしは、牛の脊中に乘りはべり」と呼ばはるに、術師腹を立て、其の場にて夕顏を作る、二葉より漸々に蔓はびこり、扇にてあふぎければ花咲き出でつゝ、忽ちに實なりけり。諸人重なり集まり足を爪立て見る内に、彼の夕顏一尺許りになりけるを、術師小刀を以て夕顏の蔕を切りければ、松の木に登りて見たる者の首切り落されて死にけり。諸人奇特の中に怪しみを爲し、眉を顰めけり。謙信聞き給ひ、御前に召して仔細を尋ねられしに、「幻術の事は底を究めて得たり、手に一尺許りの刀を持てば、いかなる堀塀をも飛び越し城中に忍び入るに人更に知らず、此の故に飛加藤と名を呼び侍り。」と云ふ。「さらば試しに奇特を現はし見せよ。」と宣ふ。「今夜直江山城守が家に行きて、帳臺に立て置きたる長刀取つて來れ。」とて、山城守が

家の四方に番を置き、蠟燭を間毎に灯し、番の者男女ともに、おくにし皆寝きらずして居たりけるに、内には村雨とて逸物の名犬あり。怪しき者を見ては噛みに吠え怒り、然も賢き犬にて夜は少しも寝ず、屋敷の廻りを打廻り〳〵、猪と雖も物の数とも思はぬ程の犬なり、これを放ちて門中の番に宛てたり。飛加藤は夜半許りに彼處に赴き、雄鹿一つ二つ持ちて行くかと見えし、犬共に餌れ死す。かくて壁を喰り通し越えて入りけるに、番の者共は睡りて知らず暁方に立ち帰る。帳臺に有りし長刀、並に直江が妻の召使ふ女の童の十一に成りけるを後に掻き負うて、本城に歸り来るに女の童は猶睡りて是れを覺えず。番の者共は露ほども知らず。謙信是れを見給ひ、「敵を亡ぼすには重寶なれども、若し敵に内通して出でなば由々しき大事なり。此の者には心許して召抱へ置く者にあらず、只狼を飼つて禍を貯ふると云ふものなり。急ぎ打ち殺せ」と宣ふ。直江則ち我が許に呼んで、召捕つて殺さんと謀りけるを、加藤これを搦り、出でて去らんとするに、諸人是れを守り居たれば叶はず、加藤云ふやう「慰みのため面白き事して見せ奉らん。」とて、蠲子一對を取り寄せ前に置きければ、蠲子の口より十二三許りの人形二十許り出で並びつゝ、面白く踊りけるを、座に並み居ける人々目を澄まし見けるほどに、何時の間にやらん、加藤行方知らず失せにけり。後にきこえしは甲府の武田信玄の家に行きて、跡部大炊助に付いて奉公を望みしに、古今集を盗みたる竊盜に手ごりして、密かに打

ち殺されしと云へり。

中有の魂形化して契る

尾州清洲と云ふ所に小山田記内と云ふ者あり、或夕暮に門に立ちて外を見居たりければ、年の程十七八と見ゆる女、顏容世の常ならず美しく、凡ての人とも覺えざるに、只獨り西の方より東に行く。明くる日の暮方門に出でしかば、又彼の女西より東にうち過ぐる。記内も又近き邊にては美男の聞えありて、女つら／＼記内を顧みて、心ありげながら打通る。斯くて四五度に至りて、又夕暮に門に立ちたりしかば、女則ち来る。記内立ち寄りて、女の手を執り戲れて、「君は何處の人なれば、日暮毎に爰をうち通り、何方に行き給ふ」と問へば、女さしも驚く色なく打笑ひ、「自らが家は是れより西の方にあり、所用のことありて東の村に行くなり」と云ふ。記内試みに手を取り、内に引き入れんとすれば、さらに否とも云はず。やがて親しみつゝ、其の夜は其處に泊りてわりなく契りつゝ、夜の明方に暇乞しつゝ立ち歸る。「又何時か來まさん」と云へば、女は「人目を忍ぶ身の、其の日を指して必ずとは契り難し」とて、

なほざりに契りおきてや中々に人の心のまことをも見む

と云ひしかば、記内は歌までやはと思ふに、かく聞ゆるにぞ、いとゞわりなう覺えて、返し、

いひそめて心かはらば中々に契らぬさきぞ戀しかるべき

かくてきぬ〴〵の別れの袖、又朝露に濡れそめて、なごりぞいとゞ殘りける。四五日の後夕暮に又來りぬ。今は互に打ちとくる、其の下紐のわりなくも、結ぶ契りの色深く、よひ〳〵ごとの關守も、恨めしき心地して、後には夜每に來りけり。記内云ふやう、「斯程にわりなく契る中に、なにか苦しき事のあらん、君が家こそ、許に近くば、我又君が許に行き通ひ侍らんものを」と云ふ、女答へけるは、「自らが家は甚だ狹くしていと見ぐるし、如何にして人を待ちうけ、一夜を明すべき用意もなし。其の上自らが兄は今は亡き人となり、其の妻にて内にあり、此の兄の日を忍べば中々心苦しく侍り」といふ。記内聞きてげにもと思ひ、愈人にも語らず、深く忍んで契りぬ。此の女は又比ひなき縫物に手ききなり。夕暮每に來て、夜もすがら記内が小袖やうの物洗ひ濯ぎ縫ひたてて着せ、或は綿續ぎつむぎて、美しく織り布織りたてて着せければ、見る人、「是れは世の常の布にあらず、錦繡の類の花鳥後の蟬翼と云ふとも、是れ程にはよもあらじ」と譽めぬ人はなし。後には見目よき女の童一人を召しつれて通ひ來り、是れも又手ききなり。かくて半年許りの後は晝も留まりて、女の童と同じく絹を織り縫ひ立てて記内に着せ、家の中萬事甲斐々々しく取りまかなひけり。記内云ふやう、「夜さへ忍ぶ身の

暫だに歸り給はずは、まし妻の思ひ咎むる事有るべし」といふ。女の云ふやう「いつまで強ひて人の家の事さのみに忍び果さん、君の心も又如何ならん、末頼み難けれども、只管我が身を君に捨てゝ、かく宴には通ひ來るなり」と云ふに、記内いとゞ嬉しさ限りなく、愛で惑ひけるも理なり。或夜女來りて、いつに變り愁へ歎きたる色見えて、漫に涙を流して泣きけり。記内問ひければ「されば今までは君に思はれ參らせて、自らもわりなく頼みし中なれども、別れ離るべき事出で來て其の悲しさに涙の落つる」と云ふ。記内驚き「君と我千歳を過ぐるとも、志は變らじとこそ契りけれ、如何なる故に別れ離るべき」と云へば、女は「今は何をか包み參らすべき、自らは僕尾前七が娘なり。年十七にして病に因りて空しくなり、明日は已に第三年に當れり、死して中有に留まる事三年を限りとす、三年過ぎぬれば、其の業因に任せて何方になりとも生を引いて赴く、今宵限りの別れと思へば悲しくこそ侍れ」とて頻りに泣き悲しみければ、記内は幽靈と聞きながらも、此の程の情を思ふに懼れし氣はなく、只悲しき事限りなし。夜もすがら寐もせず、女房は白銀の杯一つ、玉を鏤めたる花瓶の小さきに取り添へて「君若し忘れ給はずば、是れを形見に見給へ」とて、

　面影のかはらぬ月に思ひ出よ契りは雲のよそになるとも

とて泣く／＼渡しければ、記内も色よき小袖に白き帶取り添へて、女に與へつゝ、

待ちいづる月の夜な〳〵其のまゝにちぎり絶えすな我のちの世に

と揺目泣き泣き詠じ、鐘の聲遠く響き、鳥の音はや打ちしきれば、起き別れ行く袂を捕へて、「さるにても無き影の埋もれ給ひし所は何處。」と尋ねしかば、「菩提寺の邊なり。」と答へて、立ち出づると見えし、跡かたなく失せにけり。紀内涙に堪へかね、菩提寺の邊に到りけれども、其處と知るべき塚もなし。「今少し其の所よく問ふべきものを」と思へども、悔むに甲斐なくて、

たゞのこしその塚野邊は夏ふかしいづこなるらむ鵙のくさぐき

とうち詠じ、泣く〳〵日暮れ家に立ち歸り、其の面影を思ふに戀しさかぎりなく、終に病となり、日を重ねて湯をも飲まず、只「疾く死して此の人に逢ひ逢はんことのみ云ひて、程なく身まかりぬ。

死して亦契る

大和の奈良に樫田源左と云ふ者あり、年二十五になり父母を失ひ、未だ妻も無くてたゞ獨り住みけり。隣に鳥井田長兵衛と云ふ者一人の子あり、年十四五なり、彦八と名づく。源左彦八は從兄弟なりければ親しく侍りき。或時源左東大寺に詣でて歸るとて、猿澤の邊にて綺麗なる衣物に女乘りて、男一人女二人を召しつれ、池の邊に乘物をたてさせ、煎餅を碎きて池に入れ魚に食はせて慰みける

其の差し出せる手の白く美しき、指は管の如く爪の色は赤銅色にて、時のかゝり不束ならず。源五立ち止りければ、内より乗物の戸を開き、暫く源五が顔を守り、已に立ちて歸る。源五是れに隨うて行きければ、三條通と云ふ末に、筒井某と云ふ者の家に入りたり。源五是れを見初めて心まどひ、さまざま便りを求めて聞きければ、父は筒井順昭に屬して河内の軍に討死す。母孀にて只此の娘一人を養うて住みけり。娘の乳母は、源五もとより知りたる者なりければ、是れに近づきて色々頼みけり。乳母も源五が美男にして然も有徳なるを以て、是れに逢はせばやと思ふ。先づ一筆の便りを傳へんとて紅葉重ねの薄やうに、中々言葉はなくて、

　いさり火のほのみてしより衣手に磯邊のなみのよせぬ日ぞなき

と書きて遣はしたり。乳母是れを姫君に見せしかば、顔うち赤め袂に入れて立ち退きぬ。然るに如何なる者か知らせけん、源五が舅津田此の娘の事を聞きて、我が子彦八が妻にせんと思ひ、媒を入れて娘の母に云はせたり。津田も武門の末なり世も善かりければ、肯ひて頼みを取りたり。娘は心地煩ひて一切湯水をだに聞き入れず。母云ふやう「津田彦八と云ふ人に緣を定めたり、心を引き立てよ、近き頃に彼の方に遣はしなん」と云ふ。娘更に恨みたる色あり、乳母に語りけるやう「源五が許にこそ行かまほしけれ、其の彦八とかや何せんに、只死したるこそ善からめ」とて湯藥をだに飲まず。母悲

しこの餘り乳母に心を合はせ、源五にかくと云うて娘を盗み取らせたり。源五大いに喜び乳母と妻をつれて奈良をば立ち退き、藤山と云ふ所に隱れ住みけり。津田又行きて、「娘を迎へ取らん」といふ。母なく〳〵云ふ樣、「此の間盜人が拐しけん、乳母と共に行方なし」と云へば、「我が聟の源五が心を惡けしと聞きたり、盗みて隱れぬらん」と大いに怒り腹立ち、其の間に娘の母死したり、跡の事は母の弟是れを賄ふ。源五夫婦餘所ながら野邊の送りに出でつゝいと忍びたりけるを、津田彦八見付けて跡を慕ひ、藤山に行きて家能く見届け、立ち歸りて父長兵衛に語る。長兵衛聞きて奈良の所司代松永に訴へて對決に及ぶ。源五云ふやう、「某前に契約して賴みを遣はして呼びたり」と云ふ。津田は、「藤を請擬として賴みを遣はせし」と云ふ。「娘の母は死にたり、何れとも知り難し、されども津田が賴みを遣はしける事は證據かなり。源五にも理有りと雖も、此の娘を留むる事法に背けり、只津田が許に返し遣はせ」とあり。力なく女房は彦八に取られぬ。娘も乳母も此の事を病として、打續き二人ながら空しくなれり。源五が事をや思ひけん、

さりともと思ひしまでの命さへ今はたのみもなき身とぞなる

彦八いと悲しく、妻と乳母が墓所を一つ寺の地に作りて跡を弔ひけり。去る程に源五は妻を取られて後は、萬味氣なく其の面影を忘れ兼ねつゝ、せめて風の便りの音づれだに聞かねば、此の女も彦八に

はかなく成りて、我をば忘れぬらんと恨めしく思ひて、

たびくかと見えしもしほの煙だに今は跡なき浦風ぞふく

と打詠め居る。其の暮方門を敲く、聞きて見れば妻の女房の乳母なり。懐鏡入れたる袋を前にかゝへて、「只今我が君此處に走り來り給ふ。」と云ふ。源五嬉しくて門を開き内に呼入れしに、女の容昔にも變らず、餘りの事に夫婦手を取りて嬉し泣きに泣きけり。斯くて其の故を語る、「君の事露忘るゝ事なし、彦八の家に在るにもあられず忍び出でて逃げ來れり。日頃の願ひ今已に叶ひ侍り。」と云ふに、源五堪へ難く喜びつゝ、偕老の語らひ今更なり。彦八が家人或時郡山に行きて、源五が門を見入れたりければ、乳母何心なく立出でたるを見つけ、走り歸りて彦八に告げたり。彦八が父は去ぬる月死にたり、彦八聞きて怪しみ、「それは正しく死して埋め侍りし、如何に世に似たる者こそあれ、人違へにぞ有らん。」と云ふに、「正しく見損ぜず。」と爭ひけり。彦八行きて垣の隙より覗きければ、女は鏡を立て假粧し、乳母は其の前にあり。彦八内に突き入りて、源五に對面し、「女も乳母も、此の春打續きて空しく成りしを、寺に送り同じ所に埋めしに、今爰に來り住む事の怪しさよ。」と云ふ。源五も奇特の事に思ひ部屋に行きて見れば、女も乳母も行方なく成りて跡も見えず。二人ながら云ふやう、「扨は幽靈の來りけるにこそ、此の上は互に日頃の恨みもなし。」とて源五、彦八を打連れて寺に行き、塚を掘つ

て見れば、女も乳母も形少しも損ぜず、只生きたる時の如し。やがて元の如くに埋めて、源五彦八共に高野山に籠り、道心起して二度山を出でず。

菅谷九右衛門

天正年中に、伊勢の國司具教公をば武井の御所とぞ云ひける。民部少輔具時は國司の一族にて、南伊勢の木作と云ふ所に住み侍り。此の郎等に柘植三郎左衛門、瀧川三郎兵衛とて二人の侍あり、武勇智謀ある者なりければ、時に取りて名を施しけり。然るに國司具教其の弟民部少輔、同じく奢りを極め、土民を貪り、佞奸の者に親しみ國政正しからざれば、行末頼もしからずと思ひ、柘植と瀧川二人心を合はせ信長公に内通して、遂に伊勢國を信長公に屬せしめ、國司を亡ぼし則ち恩賞を被り、立身して權を取り威を震ひけり。其の頃伊賀國に一揆起り、近郷の暴者、武井の城の餘黨共多く集まり、要害を構へて立籠り、土民百姓を惱まし國郡村里を掠めしかば、信長公早くこれを責め亡ぼさすべしとて大なる軍兵に及び、諸方の手分けの噂ありとて軍兵を差向けられし時に、城中強くして人數多く拒ぎける中に、柘植瀧川二人ながら討たれたり。是れによりて扱ひを入れられ、終に信長公に隨ひけり。其の後一年許りを經て、信長公の家臣菅谷九右衛門、所用ありて山田郡に行きける道にて、柘植

瀧川に行き合ひたり。菅谷思ひけるは、此の二人は正しく討死したりと聞きしに、是れは夢にぞやあるらんと怪しみながら、立ち向ひ物語するに、柘植云ふやう「久しくて對面す、いざ爰にて酒一つ飲み給へ」とて、召し連れたる中間に仰せ付けて、小袖一つ持たせ酒屋に遣はし、質物として酒取りよせ、筵を借りて道端の草叢に敷かせ、柘植瀧川菅谷三人打向ひて、數杯を傾けたり。瀧川云ふやう、「昔唐土の諸葛長民と云ふ人は、劉毅が殺されし時是れが爲に軍兵を催し、亂を作さんとして未だ思ひ定めず。かくて曰く『貧賤なれば富貴を願ふ、富貴になれば必ず危き事に逢ふ、其の時丈夫の貧賤にならばやと思ふとも、是れも又叶ふべからず』。腰に十萬貫の錢を纏ひて、鶴に乘りて揚州に登るといふ、思ふ儘なる事はなし。武士と生まれ其の名を後代に傳ふる程の手柄なき者は、必ず恥を萬事に貽す古今例多し、遠く他家に求むべからず、織田掃部はさしも勳功致せしかども、終に日運大膳に仰せて誅せられ、佐久間右衞門は信長公草業の御時より忠節ありけれども、忽ち追ひ放たれて恥に逢ひたり。歴々の功臣猶かくの如し、まして其の外の人更に末頼み難し」と云ふ。瀧川が云ふやう、「下間筑後守は越前の朝倉に方人して、木目峠の城に籠りしを、朝倉討たれて後、平泉寺に隱れ、跡を晦まし、醒悟發明の道人となりて、

梓弓ひくとはなしにのがれずは今宵の月をいかでまち見む

と對へしは、昔をうつゝあて道に變へたる、荒木攝津守が家人小寺官兵衛は主君の惡心を諫め兼ねて、

聲切りて偈になりつゝ、

四十年來謀戰功　　豈圖今日頓成空

干戈兵亂皆入夢　　獨向泉臺亦見風

と云ふ詩を殘して、世を遁れたるぞかたしとや。此の二人は其の身道心の君に仕へながら、終にはく

賊の屍なれども世の官職の樣に侍らずや。云ふ、君彼うら定むて言ふやう、此の事は我が身をわれ

亂世とならずや、いで其の伊賀の一揆原、或は謀叛し者を、とだふ、斯かる事は只今こそ

ふべきにあらず、思へば口惜しきに、只酒飲み給へ、と言ひて、直に酒を飲み、その後、官兵衛は

に向ひし、細川にかゝ、白雲は我の道として過ぎなゝに、今日の道行にと、なさずやと云ふ

只はとて打案じつゝ、兩横に前右衛門、

露霜と消えての後はそれかともくさ葉より外しる人もなし

細川に歸り兵衛、

さてもその名は有明の月影にうつはてゝ行かなとふ人もなし

と詠みて、二人ながら共に涙を流し聞きけり。官將軍の言葉いとゞ、惜しく、又この有樣心得難く、

驚き思ひて、いかに日頃は武勇智謀を心に懸けて、少しも物事に弱氣なき氣象の輩、只今の歌の樣哀傷深く、涙を流しけること怪しけれ」と云ふに、二人ながら更に言葉はなく、太息つきて嘯きつゝ、「酒已に無くなれば、今は是れまでなり」とて座を起ち、暇乞ひして半町許り行くかと見えしが、皆し連れたる中間原諸共に跡なく消え失せたり。菅谷大いに驚き、伊賀にて討死せし事を漸う思ひ出したり。日は山の端に傾き鳥は林に宿りを爭ふ、人を遣はして酒賣家に質物とせし小袖を取り寄せて見れば、手に取るや齊しくほろ／＼と碎けて塵埃の如くになれり。菅谷急ぎ歸りて密かに經を誦じ、二人の菩提を弔ひけるとなり。

雪白明神

長享元年九月將軍源義熙公、自ら軍兵を率して江州に發向し、坂本に陣を取りて、佐々木六角判官高頼を攻めらるゝに、高頼防ぎ兼ねて城を落して、甲賀郡の山中に隱れ入りたり。高頼が郎等堅田又五郎と云ふ者は、武勇ありて力量人に勝れ、然も常に佛神を敬ひ、後世を願ふ志淺からず、觀音普門品一遍彌陀經一卷念佛百遍を以て毎日の所作とす。已に大將高頼城を落しければ、又五郎も力なく、向ふ寄手に切りかゝり、終に大軍の中を切り拔けて、安養寺の山の奧に落ち行きたり。

漸く日暮れたりければ何方にか出で、道も知らず、傍に一つの藁屋あり、谷陰に立ちながら内には人なし。先づ此の家に隠れ居たれば、軍兵二十騎許りの声して、「正しく此の邊に見えしぞ、定めて伊賀路に遁れて落ち行きけん」と云ふを聞けば、我を討ち留めんとする追手の兵なり。されども隠れ居たる家には目も懸けず、添うて通りかかり行く。今は心安しと思ふ處に、又人の打過ぐる音の聞えしかば、密かに窓より覗き見れば、一人の女房其の齢四十許りなるが背高く痩し、濃色の中なれたる小袖着て手に燈し、燧持ちて、「雪田又五郎殿は此處に坐するや」と云ふに、又五郎答をも云はず忍び居たり。女房打笑ひて、「何をか恐れて忍びたまふぞ、少しも苦しき事なし、我は是れ常陸國来栖に坐します雪白の神の御使として、君が心安くせんとて遣はされたり。御身今は疑ひ給ふな。君常に慈悲深く、佛を敬ひ、後世を求めて定めなき世に、其の志を感じて雪白の明神守り給ふなり」とて、腰より持ちたる袋の緒を解き、饅頭取り出して食はせ、小さき瓶に酒を入れて取り出して飲ませけるに、又五郎は大いに喜びあへて、「扨も今の嬉しさ譬へん方なし」。女房云ふ様、「此の度の御難の前には、横難一つ昔ぞかれて、今宵夜半許りに恐しき物来り給ふべし。君構へて恐れ動き給ふな、是れを遁れて後は、行末長く富貴の事のみならず」とて、失するかと見えし、消ゆるが如くに失せにけり。案の如く夜半ばかりに、怪しき光ひらめき輝きて来る者あり。されば是こそと思ひける窓より覗きければ、身の長一丈餘り

の串、赤き髪乱れ白き牙噛ひ違うて、両の角は火の如し。口は耳元まで裂けて、眼の光、鏡の面に朱をさしたるが如し。爪は鷹の如く、豹の皮を腰当とし、直に内に駆け入らんとするに、彼の女房庭の土に書きたる筋を見て、大いに怒れる眼の光、電の如くひらめき、口より火を吐きて立ちやすらひ、力足踏みて響みければ、其の有様身の毛弥立ち、魂消えて恐ろしと云ふも愚かなり。鬼已に筋を越ゆる事叶はず、怒りを拗へて傍に立寄りし所に、軍兵又十騎許り追ひ来りて、「又五郎は此の家に隠れしと聞く。出でよ〳〵」と責めけるに、彼の鬼かけ出で、馬上の兵を攫み馬を踏み殺して食ふに、其の外の郎等共は蜘の子を散らす如くに、足に任せて逃げ失せたり。夜已に明方に成りたれば、鬼も消え失せて行方なし。立ち出で見れば馬の頭人の手足、血交りに散り乱れ、鎧兜太刀前ひき散らしてあり。又五郎終に逃るゝ事を得て、それより伊勢に下り、白子と云ふ所より舟に乗り、駿州に行きて今川氏親を頼みて身を隠し、後に其の終る所を知らず。

伽婢子巻之七　終

伽婢子巻之八

長鬚國

[illegible]國花の荘に一人あり、毎年松前に渡りて[illegible]賣ふに、多く[illegible]を遣はし、昆[illegible]に換へて、[illegible]に歸り出し賣る[illegible]とす。ある年舟に[illegible]、松前に[illegible]しに、俄に[illegible]り漂ひ、[illegible]碎[illegible]吹き放され[illegible]へ、漸くにして一つの島に寄せ[illegible]たり。人[illegible]少し[illegible]を[illegible]、五町[illegible]にして人里あり。其所の人は髪短く鬚長し、物云ふ聲は日本の言葉に通ず。或家に立ち入りて國の名を問へば、「[illegible]扶桑州。」と云ふ。國主を問へば、「是れより一里[illegible]に[illegible]。」と敎ふ。[illegible]に赴き[illegible]門[illegible]て見れば、國主の本城と覺しく門の構へ築墻高く、石垣は削り立てたる如し。[illegible]にさし寄りければ、門を守る者一同に出で大いに敬ひ、[illegible]に言ひ入れたりしに、[illegible]の[illegible]にも[illegible]したる者走り出でて殿中に請じ入れたり。[illegible]、[illegible]の[illegible]へて建てたり。錦の褥を敷[illegible]國[illegible]、日[illegible]れり、我等[illegible]として目[illegible]事、

是れ幸ひにおもはずやとて、一族に布令遣らすに皆各々の集まる、何れも出立華やかなれども勢短く髪かれて、鬚許りは長く生ひ延び、腰少し屈まりて見ゆ。座定まりて後に、様々の器ある色よき物一つ、學ある黄なる梅の菓、紫の菱、紅の実、青乳の梨、赤莓の漏を、瑠璃の筒水晶の鉢に堆く積みていだしたり。膳には丹達の翻風、澤沼の鬼、噴鶏、雲雀、紫菱、青薄、淡田の菲、蘆澤の芹、數を盡して出し備ふ。簡背昧崖の名酒に杂黄黄菊を杯に浮べ、歳に無なる主設け、其の味ひ更に人間の飲食にあらず。されども海川の鱗、蛤の類は、一種の肴もこれ無し。主人謹しく言覺えたる。國主の曰く、我に一人の娘あり、願はくは君是れに留まり給へ、琵琶の緣を結び奉らん、朱檀郎何で辭まゐらんとこたふに、主人大いに喜び、一夜も過ぎに從ひ奉らんとて數杯を傾け侍りしに、今宵は月已に満ちて、光四方に輝きて明らかなる事白日の如し。是れと我等の酒宴遊興を催す時なりとて滿座の者舞ひ奏で歌ひどよめく。斯かる所に姫君出で給ふ。附き随ふ女房達二十餘人、何れも花を飾り裳を引きて出でたれば、沈麝の薫、座中に充ちたり。商人これを見るに、容貌はたをやかに美はしけれども、女にも鬚あり、商人甚だ怪しみて悦ばず、古風の體一首を詠みける。

　ごくとても蘂なき花はあしからぬ蝶がひげあるかはいうるはし

國主聞きて笑壺に入りて笑ひしかば、滿座傾きて腹を捧げたり。娘と女房達は世に恥かしげなり。此

の夜より商人に一官を進めて、司風の長とこそ傅きける。身の榮華に樂しみを極め、國中敬ひ持てはや
す程に、曩ある妻に馴れ親みて三年を過ぐれば、男子一人女子一人をぞ儲けたる。或日家に歸りて泣き
悲しみ、妻甚だ愁へ歎く。城中うち竊まりて色を失へり。商人驚きて妻に問ひければ、泣く〳〵答へ
けるやう、「昨日海龍王の召によりて、我が父已に龍宮城に赴き給へり、今生きて、再度歸り給ふことかた
す、此の故に斯く悲しむことのみ」と云ふ。商人大いに仰天して、「其は如何にも謀あらば遁るゝ道侍らん
や、然らば我は何か命を捨つるとも何か顧みるべき。」と云ふ。妻の云ふやう、「此の事實にあらずしては
叶ふまじ。汝は立て安穏の地に歸り給へ、事叶ふまじきからず、我はくは龍宮城に赴き、東海の第三の道戸第七の
島長者國、已に天竺國に依りて今より龍宮に及ぶべきなり、偏へに以て首長に並び返し給はゞ直しく
至平安穏の政道なるべしとよく〳〵宣はば、龍神邪無し、必ず此の歎きを引換へて喜びの眉を開か
ん、然らば一足も早く赴きて給へ。」とて、聲も惜しまず泣きければ、商人も情の色に心引かれて急ぎ
出で立つ。舟やに乗船して、十人の侍在人、車間二人の導きを召しつれ龍宮城に赴き、向に着きて
商人の前に階に着きて、覆装を見れば黄金の砂にて、商人に衣裳を着して、貌丈にして天竺の人に似
たり。慢に三尺入れて見れば、七寶莊嚴の宮殿、其のさまは堂寺の如し、其の階に進めば、龍神出
て迎ふ。「商人大いに喜び候はば、司風の長とは汝の事か、今何故に來れる。」と問ふ。商人細々と云ひ

けれど、龍神聞きて海佰蹤事を召して問はせけるに、一龍王爽の室内にかく様の國にはこれなきかと云ふ。當人申れて云ふやう、長崎國は東海第三の辺戸第七の島に當れりと、龍宮支配のさまなるに、暫く有りて鯨事則ち私騒を勢へて曰く、其の島は我等の住所なり、龍宮に於て此の事を任じ當て、昨日召捕られたりと申す。龍神笑ひて曰く、可愍の長は實に人間ながら、鰹のために捕られたり、我は海中の王たりと雖も、百千る中の魚鳥生類、皆其の命より命を捨てられて、日毎に其の數あり。最令人と云ふとも天至の命の稟ふ數の外に、害りて生類を食する時は、必ず天の責めを受けて罪あり。況んや我等族の外に、漫りに食する事叶はず。これより今後を鯨に来れる人は心を致すべからず。數の宝めを見せて歸らせんことて、内に入りて前膳堂に神ぜて、商人を連れて料理臺盤所を見せしめるに、毒の鶏こもり、熊の掌、猿のこしり、竜の求蹄、九種の御樂、七種の蓴、軟剛花形飾りなして、鳳凰鶏子青、青鯖、百蜜、其の外海鶏の内わらゆる珍味、心も言葉も及ばれず。黄金の盆、白銀の鍋、銅の鼎を並べ、偉なる鍋の中に鯉五六頭あり、大きさ三尺餘り、色は宛ら漆黒にして鰭尾淳潤し。此れを商人を見して涙を流す事眼の細く、頻りに跳躍りて、其の有様助け給へと云はぬ許りなり。商人の句の云ふ樣、是れこそ鯉の中の王なれことに、商人聞きて不覺の涙を落す。龍王重ねて、使を立て、鯉の王を赦し放ち、商人をば送りて日本に歸らしむ。其の夜の曙に能登國鰤の御崎に着きたり。卑しく歸りて後

を見ざれば、菩提に趣る道は大龍となりて、波を分けて海底に隱れ、商人は本國に歸りて、筆に記して人に語り傳へしと。

邪神を責て殺す

常州鹿嶋郡の海中に小社あり、後は筑波山の嶺茂りて日影暗く、前には澤水底深くして藻苔おほへり。常に黒雲覆ひ小雨降りて凄まじければ、人皆此の神の靈甚だ猛しと恐れ仕へて、此の社の前を通る者は魚鳥御供酒杯を、此の村里にして求め供へて、神前に供へて打通る、若し、さもなければ忽ちに雨風荒く、雲霧蔽ひて神則ち祟りを爲す。明德年中に濃州谷汲寺の僧、性海とて學行を勤むるに志深く、兼ては北陸を修行し、相模國足利の學校に行かばやと思ひ立ちて、寺を出でつゝ越路に赴き、已に常州の濱に到り、此の社の前に休む。素より諸國行脚の僧なれば、袋に一物の貯へもなし。只禮拜誦經して法施奉り、十町計り過ぎ行きける所に道に踏み迷ひ、彼方此方せし間に俄に大風吹き起り、砂を吹上げ飛ばし黒雲覆ひ霧立ちこめ、後より物の追ひかくる心地しければ、怖ろしく覺えて見返りける、、異類異形の者二百計り頻りに追ひ掛くる。此の僧、扨は妖物の爲に只今死すべし、力及ばぬ事と思ひ、一心に觀音普門品を誦し、足に任せて走り逃げければ、風止み雲收まり空晴れて、追ひか

けれ者と見えず、辛うじて鹿島明神の社へたどり着きたり。神前に跪き、般若心経七遍普門品三遍を誦して神に祈るやう、「先の社に法施奉りしをば受けずして、却つて怨みを為さんとせしは邪神の仕わざ、如何なる仔細なるべき。又是れ我が身に誤ありて神の咎め給ふか。願はくは明神此の事を示し給へ」と念願して、日暮れて身も労れければ傍に臥したり。其の夜の夢に、神殿の内陣開け錦の帳をあげ玉の簾を半に捲きて、内に明神坐し給ふ。左右には末社の神、位に随ひて其の所々に坐す。大燈明内外に輝きて白昼の如し。性海恐れて庭に下り、頭を地に付けて礼拝す。俄に一人来て束帯して烏帽子引き込み、階に出でて曰く、「汝神前に法施奉る、神威高く神慮快く受け給ふ処なり。然るに汝今神前に詣へ奉る處、遠く放擲あるべし」とて内に入りたり。暫くありて数十人室を別れて行くと見えし、白髪の翁一人を召して来る。黒き帽子被り青き袴着たるを庭の前に引き据ゑたり。奥より仰せありけるやう、「汝も一方の神たり、何ぞ国家人民を守護せざる、剰へ敬ひを為す道行の人を悩まし濫りに禍を施はし、然も此の道人法施を以て神に廻向す、是れ又神の供物と云ふとも遥へる物なれや、却つて道人を悩し殺さんとす。悪行の企て甚だ法に過ぎたり、其の科逃るべからず」とあり。官人出でて断り議むるに、老人頭を地に付けて言上しけるやう、「某實に野社の神なりと雖も、大蟒蛇の爲に押領せられ、久しく社壇を奪はれ、僅かに傍なる樹の根を住家とす。我が力至つて弱く彼の大蛇を制

する事叶はず、世を護り人を護るべき職を忘れ、只我が身の置所だになし。されば此の年頃雲を起し雨を降らし、霧霞の風荒く、災を為して人の供物を求むる事は皆此の大蛇の所業なり。某の科にあらずと云ふ。官人責めて曰く、「左様の事あらば疾ぞ速く此所に訴訟せざるや」と。翁答へて曰く、「此の大蛇世にある事年久し、或時は化けて形を現はし人を悩まし或時は隠れながら道を害す、其の通力自在なる輩云ふ許りなし。山中に棲む鬼神野猪に縮まる悪霊皆是れに力を合はせ、猿蛇[illegible]皆是れに随ふ。某独に参りて訴へせんとすれば捕へて押し入れ、更に住家の外に頭をも出ださず。只今召し出さればこそ是れそこには参り得れ」と。其の時神殿より勅有り、「官人速く彼処に罷り立て、其の大蛇を召捕へて来れ」となり。翁申すやう、「眷属の輩已に備はり、是れに力を合はする者多し、官人赴くとも難は易しとすべからず。只神兵大軍を差向けられ、攻め伏せ給はずしては、容易く從ひ来るべからず」と言ふ。さらばとて大将の神に軍兵五千を差副へて、野社に向けられたり。三時許りの後数十の頭など、大木を以て白蛇の首を掲げて庭に来る。其の大きさ五石許りを入るゝ甕の如し。両の角は一丈、二つの耳は箕の如し、髪乱れて糸の如く、口は後まで裂けて、怒れる眼は鏡の面に朱を指したるに似て醜くかりし。死したり。官人罷り権現に向ひ、忝くも當社明神は当国第一の神明にして、彼の訴へよく聞召し給ひ、疾く/\とて座を立たしむ。[illegible]霊拝して座を立つと見えて夢さめたり。身の

臣ならず汗水になり、爲持の事に黒に、夜明けて又彼の所に赴きて其所を見れば、社も鳥居も燒け崩れて灰燼となり、傍の木草皆燒け折れて葉も燒けたり。四邊近き村に立ち寄りて問ふに、村人皆云ふやう、「今宵夜半許りに雷電おびたゞしく、霹靂さ遠ひ落ちて、其の中に震する聲聞こえ、怖ろしさ限りなし。黑雲の内に火燃え出でて、社頭は一同に燒き崩れて灰塵となり、一つの白き大蛇其の長さ二十丈許りなるが、首を切られ、其の身寸々に切れて、其の腥き重なり死して臭き事限りなし」と云ふ。是れ即ち今宵夜半に、夢に見たる時分なり、[illegible]それより相州足利に行きて物語せしとぞ。

歌を媒として契る

永谷兵部少輔と云ふ人あり、一條戻橋の邊に居住す。年二十一歳、きはめて美男の聞え有り、色好みの名を取り、古今の歌人に通じ、常に倭文を嗜み、三條坊門の南、萬里小路の東に、北畠正三位法印とかや儒學に長ぜし人の許に行き通うて、學業を勤め勵みに怠らず。神祇官の邊に富裕の家あり、往古は山名が一族なりしに、武門を出でて都に居を占め、名を隱して密かに身を修め、總て大名高家に通路を致さず、娘只一人持ちたり、牧子と名づく、年十六七ばかり、顔容世に類なく、繪書き花結び裁ち縫ふ事に手利きて、然も宿しからねども、歌の道に心を懸け、情深く色ふかく、花に賞で月に焦がれ、紅葉の秋、

雪の夕べ、折に觸れ事によそへて、歌詠み嘯きて心を痛ましむ。或時兵部書を懷にして、萬里小路に出でける道の序牧子が家の築地のもとに休みて、少し壞れたる所より內を覗きければ、時しも春の事、柳の絲枝垂れて櫻の花綻び、鶸、小雀、爭ひ囀り、其の傍に座敷しつらひ、簾掛けたるを半ば捲き揚げ、一人の女端近く居て小袖縫ひけるが、針を止め打傾きて、

ほころびて咲く花ちらば青柳の絲よりかけてつなぎとゞめよ

兵部は其の姿を見て此の歌を聞くに、限りなく愛で惑ひ、心も空になり足元たど／＼しく、思ひの色深く過ぎ行きかねたる餘り、暫し立ち休らひて覗き居たりければ、牧子は是れをも知らず庭に下り立ち、築地の許に廻り來て兵部と目を見合はせしかば、又なくあでやかなる美男なり。牧子是れを見て心移りて、此の人にあらずば誰にか枕を竝びの岡、時雨に染る紅葉葉の、色に出でつゝかくぞ詠じける、

我が門の垣ともに咲ける卯の花をかざしのために折るよしもがな

兵部はよく／＼堪へかね、聞書の爲め持ちたる矢立取り出し、歌二首を料紙に書きつけ、小石に繫ぎ添へて投げ入れ侍り。

命さへ身の終りにや成りぬらむけふくらすべき心地こそせね

入り初むる戀路はすゑや遠からむかねてくるしき我がこゝろかな

牧子これを取りあげ、二返し三返し讀みて、いつしか心憧れ、短冊取り出し歌を書き、石に繋ぎて投げ出しはべり。

あぢきなし誰もはかなき命もてたのめば今日の暮をたのめよ

兵部これを取りて家に歸り、其の夕暮を待ちけるぞ久しけれ。夜に入りて彼の方へ赴き、築地を巡りて見れば、櫻の枝一つ築墻より外にさし出でて、花田の打帶一筋、縄のやうなるを懸け置きたり。兵部心得てこれを手操り、築地を越えて下り立ちければ、春の物とや朧の月、東の山の端に出でて、花かげ庭に映り、そら薫の匂ひに合はせていとゞしめやかなり。是れは抑人間世の外、三の島、十の州に來にけるかと怪しみながら、忍ぶ世の習ひ、身の毛竦立ちて凄まじくも覺ゆ。女は侍ふ木の下に待ち侘び、兵部を見て、

うつゝとも思ひ定めぬ逢ふ事を夢にまがへて人に語るな

兵部とりあへず、

また後の契りはしらず新まくらたゞ今宵こそかぎりなるらめ

と云ひければ、牧子打恨みて、千歳と契り初めはべらんには、千歳の後來ん世も、同じ契り絶えまじと

こと思ひ給へれ、如何にかく恨みなくは思す。自ら命かけて、心を餘所に移す事は夢あるまじきを、親の許あて自らを責め給ふとも、苦諫死なば恨みはあらじ。

たのまずばしかまいかちの色を見よ逢ひそめてこそ深くなるなれ

と後鳥羽院の詠み給ひける哥の心を思ひ給へ」と云ふ。宮仕の女童に仰せて、詞取り寄せて兵部に贈りたり。已に夜更け人靜まりて物音も聞えず。兵部密かに「此の家は誰人にて坐する。」と問ふ。女有語しけるは「二人の親は山名の氏族にて侍り、久しく武門を離れて財寶のたかなり。一族の中大名多く侍れども、交はりもむつむ事もなし、只身を修め名を隱して世を打過し給ふ。自ら唯一人娘にて又兄弟なし、無だいとほしみ深く、別に此の花園をこしらへ部屋をしつらひ、春の花、秋の月に心を慰め給ふ。此の御わおはす所は、少し隔たれて侍る」など云ふに、兵部少し心寛やかに覺ゆ。

世にたれん後の浮名を歎くこそ逢ふ夜も絶えぬおもひなりけり

女返し、

流れては人のたゆうき名取川よしや我が身は沈みはつとも

かやうに語らひつゝ、片敷く袖の新枕、交す睦言に有明の、盡きぬ言の葉とりなりに、早苦も渡る鐘の聲、打ちしきる鳥の音に、起き別れ行く露涙、雲となり雨となる陽臺のもとぞ思はるゝ。兵部、

契りおく後を待つべき命かはつらき限りの今朝の別れ路

女返し、

くらべては我が身の方や勝るべきおなじわかれの袖のなみだは

兵部は櫻の枝を作うて、未明に家路に歸りても、心漫に學道も身に染まず、暮るゝを遲しと出でて夜每に通ふ。或時兵部が父問ひけるやう、「汝は學文に物倦き心の付き侍るかや、朝に家を出でて暮に歸り來る事は、是れ學文を勤めて其の道を行はん爲なり。然るを遊覧の頃は、日暮になれば家を出でて何方に赴く、是れ何事ぞや。必ず輕薄遊行の類を求めて、人の壁を鑿ち墻を踰えて、由なき擧動するかと覺ゆ。其の事顯はれ侍らば、身は生きながら泥溝に沈み、名はそれながら塵界に汙され、世に無し者となり果つべし。若し又語らふ女、定めて高家の娘ならば、必ず汝が爲に門戸を汙され、其の身淺ましくすたれ給はんのみならず。罪科は定めて我が門族に及ばん。其の事極めて大事なり。今日よりして門より外に出づべからず」とて、一間の所に押し籠めて、殊の外に責めたり。女は夜々花園に出でて待ちけれども、二十日餘り更に音づれなし。女思ふやう、飛鳥川の淵瀨定めず、變り易きは人の心なれば、又行き通ふかた有りて、我をば思ひ捨てたるにや、又は病に臥して、勞りつゝ侍るやらんと、童を遣はして密かに聞かせしかば、「かうかう」押し籠められ侍りて、出入の輩も言問ひ交

事神にも」と言ふ。女聞きて頻りに涙ぐみ、顔を背にむきつゝ、思ひの外に起き臥し、湯水もたに通
らざれば、時々には思ひ乱れし言葉の末、物狂はしき事もありつ。聞かじは色音へて物悲しく、只涙をの
み流す。ことなく幾年来の棲喚に疲れたる、露命も覚束なし。今は此の世の頼みもなく見えしかば、
甲人の親戚ども、「思ふ事のありや」と問へども、定かに答へもせず。枕の底に兵部が文ありけるを
見出して、やゝに驚き、直ちに返りて聞けば、猶び病に臥し、兵部聞きて、一命…たちたればにもあれ
かし、と五日が家に通ひ来りたれば、何と楽しかるべき」とて、更に…をりて居らうさ…に言
ほせければ、兵部の使に言ふやうは、「我が子迄に緊用あり、速く難れ、官に仕へ、誠を盡して志
者なり。妻とや尋ぬべくつべきからん。其の事は未だ遅からず」と言ふ。女子が親達なてと云ひ遣は
すやう、「日頃に斯る言葉を兵部が嫁は、今迄に…こともと、後にまた神にあるべきを
れ我等一人娘に縁を結ばれんには、我が家を其の跡を望まん。幸なく譲りて兵部を子となし
と、早速吉日を選びて兵部を呼び、聟として、娘心地もたく覚えて、病も日にち立ちぬ。兵部、
女限りなく嬉しくて、

命あれば又も逢瀬にめぐりきてふれしゝぐれは君が手ふくら

望月のみつて見し夜の面かげは有明までもしたはれにけるかな

かゝて比翼の語らひ、今は忍ぶる関守の恨みもなかりし所に、細川山名の両家權を爭ひて、應仁の兵亂起り、京都の大家小家皆燒け亡び、諸國の武士都に集まり、亂暴掠物狼藉いふ計りなし。女をば案師寺の與一が手に捕者にして、其の容顏の美しきを以て、犯し汚さんとするに、牧子大いに呼ばはりけるは「自ら死すとも、田舎人の賤しき者には隨くまじ。只殺せよ」と言ふに、猶兵等怒りて女をば刺し殺しぬ。兵部は兎角して逃れ隱れ、其の年の冬漸く京都靜まりければ、都に歸り來れば家は燒けて跡なし、妻が家に行きて見れば人もなし。父は山名が手に屬して討死し、母は盜賊にかゝれて殺さる。兵部只一人牧子が部屋に佇み、涙に暮れて居たりしに、其の夜夢の如く牧子歸り來る。是は如何にとて手を取り組み涙を流す。女泣く〳〵「自ら君と別れ散り〳〵になり、武士の手に懸り敢なく殺され、屍を道の邊に曝し、憐れと見る人もなし。自ら貞節の義に死せし事を、天帝憐み給ひ、君が志にひかれて、今現はれ參りたり」と言ふに、兵部悲しき中に、亡き人に逢ふ事の嬉しさを取り加へて、涙は雨の降るが如し。夜もすがら語らふ。曉方になりければ、兵部泣く〳〵、

　思はずもまた廻りあふ月かげにかはる契りを歎くべしとは

女返しと覺しくて、

　行末をちぎりしよりぞ恨みまし斯かるべしとはかねて知りせば

そゞろに涙を焦れて別れたとり、影の如くに成りて失せにけり。兵部は是れより發心して東山の寺に籠り、幾ほどなく病に取り結びて終に果敢なく成にけり。人みな聞き傳へて、哀れにも奇特の事に思へり。

幽靈出でて僧にまみゆ

末屋藤九郎は備が一族として、畠山右衞門佐義就が手に屬し、嶽山の合戰に晝夜手柄を顯はし終に討死して名を殘しけり。其の子藤四郎同じく義就に屬して、應仁元年都鄙の戰場の軍に、畠山左衞門督政長が陣中より放ちける矢に中りて討たれたり。父子二代已に義就に忠を盡しければ、其のよしみ深く、河内國畑田の庄を、藤四郎が舍弟藤次、于時在京にてありけるに與へ給ひけるとて、藤九郎が妻と同じく住み侍り。其の頃諸國靈魂の聖、只一人此のわたりに來り、日已に暮れければ、宿借るべき村里を求めて、門前の邊近く田の畔に立ち休らふ處に、笛の音微に聞え、嶺より近づき來る見れば、年の程十四五と見ゆる少年、いふばかりなく美しきが、髮かゝるに生絹、薄花桜に黄の打混黒を色白く、田舍にはめづらしく、白き淨衣に着替て、只一人聖を伴ふ。來りつゝ、聖を見て、ふかう、「御僧は何故に爰には佇み給ふ」と問ふに、聖は「是れは諸國靈魂の修行者にて候ふが、道に行き暮れて宿を求め

人むかしの世の常なりけんと云ふ。少年すこし打笑ひて「世の中騒がしからず、如何でか斯く宿借す人あらん。さる合戦なりと雖も、昔しは雛の叢俗かと、互に争ひを致す時節なり。悪く立ち逢ひて人に咎められ、あへなき命を失ひ給ふな。今ははや夜も更けゆくなり、某が庵室に来りて一夜を明し給へ」とて、聖と打連れて一つの寺に行き到り、其の門は宵の間に鎖しぬらん、此方へ入らせ給へ」とて、東の小門より庭に入りて見るに、家は東の方に住所として、一間の部屋に入れたり。内には持佛堂あり、阿彌陀の三尊を立て、前なる机には浄土の三部経あり、一衛の供物燈明、花香を供へ、佛前の香には薫煙絶えて、いと清く有様なり。聖はとかく勤めに疲れて、暫く經讀み念佛す。少年の云ふ樣、「ただ今宵の事なれば何の者に仰せて、宿坊の粥をも參らすべきに、夜更け人靜まりてすべき樣なし、旅の疲れを休め給ふを勤くる縁なり、此の寺の事を參らせん」と云ふ。聖は「何か苦しかるべき。」とて靈供の飯を二つにわけて、少年と聖と食ひけり。聖問ひけるは、「是は如何なる人の御寺ぞ、御主の御名を何とか云ふ」と尋ねしに、少年答へけるは、「某の父は細川殿とて、武事の譽ありしが、去ぬる細川の軍に討死せり。某、兄弟二人其の跡を繼ぐと雖も、弟にて侍る者は未だ幼少なり。某だに年にも足らねば、唯まゝ母に育てられて月日を送る事にて、名をば藤四郎と云ひ侍り。今宵實名を聖に寄宿し參らするも、他生の縁淺からぬ故なれば、某假令空しくなるとも、後世を弔う

て給へ」とて、袖に涙を流しければ、聖聞きて、「討剣に寄せて法師せられける、君は道に容れ給ふ花のまだ咲き出でぬ蕾ぞかし、さしも若気しく来給はぬ、さ先も御身ぞかし。聖は年近きたる若なれば・御らず今日まで、浮世の限をさるべきことにて、少年は、いつとは、武士の家に生まれて、命を惜しみ給ふ事はこれとするには、命は草の露、夕を待たでも消え易く、願ひ事に侍れば斯く申すぞ、其故に持ち給へる菓子箱に並べ、一つも持ちて給へ」と袖を濡す。聖は一人の心得てや、年にも足らぬ君はねば、唯の別りとして、行き給ひて、出で給ふか、過去帳には記したる人の名をさこそ記して、さらに御名を書いて置かれ、述懐の言を書せて返す上長く、仮の浮世をも、ただ一言ぞひとりに、と祈り給ひて、これは頭を再も觧かし給はせ給へ」と云ふ程に、此の世を題して繰に輪の、若しけれ共で涙し、何ぞ成べき幸心得たりとて、一寸に手を挿けたるを、物語の時に、聖を初めて聞きたる程こそ思え、一時もなく去りにけり。聖は信を行けし、さてお世でて見れば跡もなく、物音も聞えず。不思議の事に思ひながら、若君王頭の一、二度を訪ねて、持仏堂の前に至りて見るに、明けつ、已に事切れになりければ、孫も此が存命の時家に上りければ、一家、皆悲しみ嘆の中にも、持仏堂に参りて見れば、聖幸く夜を待ちたる法師一人御前に在す。

「こはそも如何なる人は気に入りけるか、古物の化さいしたる様、袖め堂を立て行く程を、向へるて上語りけれ、聞けばこの人、誰の、色なく、みつ涙より、仔細を聞き給ひて、初めはの事共語りけれ

ぞ、扨は藤四郎殿の亡魂現はれ出で給ひけんと、今宵位牌の前なる粮供を二つに分けて、半ばは聖に參らせ半ばは我が食ひけるに、聖の食せしは背になりつゝ、半ばは宛然位牌の前に殘りてあり。母は餘りの悲しさに位牌の前にひれ伏し、聲を限りに泣き叫び、扨も去ぬる正月十九日、京都御靈の馬場にして、流矢に中りて討たれしが、今日已に百箇日に及べり、此の世に殘りて憂き物思ひする、自らにはなどや見え來ざる。とて引き被きて歎きしが、餘りの事に堪へ兼ね、聖を賴みて髮を剃り、尼になりつゝ、菩提を深く弔ひける。

屏風の繪の人形躍り歌ふ

細川右京大夫政元は、源の義高公を取立て、征夷將軍に拜任せしめ奉り、自ら權を執り其の威を逞しくす。或日大いに酒に醉うて、家に歸り臥したりしに、物音をかしげに聞えて睡りを覺し、頭を擡げて見れば、枕元に立てたる屏風に古き繪あり、誰人の筆とも知れず、美しき女房少年多く遊ぶ所を極彩色にしたるなり。其の女房も少年も屏風を離れて立ち並び、身の丈五寸許りなるが、足を踏み手を拍ちて歌唄ひ、面白く躍を致す、政元つくづく其の歌を聞けば、さゝやかなる聲にて、

世の中に、恨みは殘る有明の、月に叢雲春の暮、花に嵐は物憂きに、洗ひばしすな玉水に、映る影

さへ消えて行く。

と繰り返し〳〵歌うて躍りけるを、政元聲高く叱りて、曲者共の所爲かなと云はれて、はら〳〵と屛風に登りて元の繪となれり。怪しき事限りなし。陰陽師康方を喚びて卜はせければ、屛風の繪にある女の風流の躍に、花に風と歌ふ、すべて風の字愼みあり、旁以て重きつゝしみなりと云ふ。永正四年六月の事なり。其の次の日政元、精進潔齋して愛宕山に參籠し、偏に武運の長久を、勝軍地藏に祈り申されたり。二十三日に下向道に乘りたる馬、已に坂口にして斃れたり。明くれば二十四日我が家に歸りて風呂に入りけるに、其の家人右筆せし者敵に内通して、俄に突き入りつゝ政元を刺し殺したり。康方が風の字愼み有りと云ひしが、果して風呂に入りて殺されしも、兆の取りどころ其の故あるにや。

伽婢子卷之八 終

伽婢子卷之九

狐偽りて人に契る

安達喜平次は江州坂本に住みけり、たま〳〵公方に參候して歸る。僕一人に馬の口取らせ、中間を召し連れ白河より山中越に差掛る。日已に暮方になり、道より南の方神樂岡の西にして、年の頃十七八と見ゆる女性顏容美しきが、櫻花に小鳥の色を縫ひたる小袖を著し、小袖の袖かい取り、衣を被き此方に畦の上を打越え、道に踏み迷ひたる如し。安達是れを見て、如何なる高家の娘なるらんと怪しみつゝ、近く步ませ寄りたれば、此の女性袖を以て顏を覆ひ、足元は石に躓き、屢倒び伏さんとす。安達人を遣はして「是れは如何なる御方なれば、此の日の暮方に只ひとり、供もなく、かゝる所に立ち迷ひ給ふ」と言はせけれども物言はず。又重ねて人を遣はし、我が乘りたる馬を引かせ、「道行なやみ給ふも見奉るに痛はしく覺え侍れ。此の馬に召されて、何處までも御住家に歸り給へ、送りて奉らん」と言はせければ、女性嬉しげに頷きて馬に乘る。安達抱き乘せしに、其の輕き事羅の如し、近く見れば世にたぐひなく、光り出づるばかりうるはしきが、眉氣高く容顏窈窕に、袖に薰り香しく、何

遂につけこともなくてならず、自ら何ごとと怪しまれ、此の人の留たらば露と消ゆるとも、様子はあら
じとぞ覺えける。安達は馬の尾に付き静かに歩ませ、右の道へ東の方に歸りしに、一刻許りにして、
忽ちに女の首在六人田中の城より走り出でて、一つ二つ度ませし、此の馬を取りて失ひ給ふせしかと問ひ潛れ給ふ
是等、彼を此方縛れ參らせしぞやとて、馬に添うて出で、熊しく責に、安達に向ひ宛にして、年の頃六十
許りの男、頭しつき敷へて一丸より守れ參りし、よく心安く仕りて、何此には縁起し給ふと思ひ守ら
こゝ利耕あるにと云ふ。安達はやうこの邸の邦が連に諸の走ひ盛ふ所に、野端にして幾年か、其表
のたる馬を乗りて迄ます參らせたり、是れより安達は本よりゆかしと云へば、彼の男云ふ様、
「猪苗代は昔は田中と云ふ處に通行を為て、家中に参いりして、終に果して主従の交を遣で道に逢ひ給へ
り、宇田も遁れたれ、喪はれたには申すとに給が苦き給ふ、其さ後はなれは此方にて入れて一度の事に給
いことと云ふ。安達「さらば直に御對面もあるべし」と云ふ。頭面なる事許すに行きけれは見るたる一首の
其の内には家居つきんしく、客殿に入れて、杉戸明等の花毎を書き、藤の棚相取の坊、遍には山城
に在り、出で、庭の前泉水の井の道にある、八の井家と見たり、襖障子書院を立ち入れたる築地柳下と
使うて中門に行きを守る、其の奥には何の書院の花見盛りして書きたる所の間に、まづ雲に入れ給ひて
けり。すべて、主の女房東の年四十許り、殊にけだかく見ゆ、召使ふ女の七八人も並びて居て、眼を

ひも宿らず稀人の客を饗け侍り。姫御出でて遊びし侍り、酒に醉ひたる事も痛む座を避けて道に迷ひ、君に逢ひ奉らずば、もし／＼は狼狐に誑し、もしくは盗人に脅されなん。よくこそ逢ひて給び給へ。それ如何にも饗待し奉れとて親しくもてなしつゝ、少時ありて酒肴取りしたゝめて出す。主の女房、杯を取り安達に参らせ、とても今宵は遊び明して浮世の思出とせん、姫が姨も是れにおはす、出でて酌を給へと云ふに、二十四五許りの女房華やかに出立ちて、打笑ひ立ち出でしを見るに、実に世に稀なる美人なり。安達、是れはさも仙境に来れるか天上に昇れるか、如何なる雲の上と云ふとも、今宵に勝る時はあらじと、嬉しくも不思議なり。酒已に酣にして安達は数杯を傾けたり。主の女房云ふやう、一姨と雙六うち賭定めて遊び給へとて、黒檀に紫檀、欄干交へ鏤めたる盤の莚りには、源氏の繪書き、水牛象牙黒白の石、蒔繪の筒に賽取り添へて出したり。安達と姨とさし向うて打ちけるに、賽の目を争ひ、時々姨の手を握へ、無理を云ふも心ありや。遊仙窟に張文成と十郎姫が、雙六打ちて賭せし事を書きける筆の跡も懐かしくて、安達勝ちければ沈香五両を出し與ふ。姨又勝ちければ安達出すべき物なく、裳を抜きて出したり。已に夜明方になり、東の山の端白みて明けて人の音なふ聲聞ゆる頃、家の内俄に騒ぎ響きて狼狽き、盗人の入り来るぞやと云ふ。主の女房、安達を後の門よりおし出せば、姨も行方なく立ち隠れたりと覺ゆるに、安達一人片崩れたる山際の穴の内に

より遊び出でたり。寥えだれ聲喚きて松の風高く吹く、谷の水遠くきこえたり、暗に浚したる餘はなく、取れたる識者はさしもなき木の片なり。初め女性の遺を踊ひ進びしを、安達馬より下りて、後に附きて行くかと見えて影もなく失せにしかば、中間小者業諸ね廻り、「只此邊邊にて見失ひぬ」とて、餘りに尋ね侘びて、大いなる穴のあるを見つけて、鋤鍬を借り寄せ掘り崩しけるを、盗人入り來ると驚きけるなり。「爰は何處ぞ」と人に問へば、「蒼葉岡の後なり」と云ふ。孤の謀りけるにこそ。

下界の仙境

昔太田道灌、武州江戸の城を築きて居住せられ、此の地に水乏しき事を苦しみ給ひ、其の頃舟木嶽七と云ふ富裕の町人あり。掘抜の井戸を作らんとて金掘を雇ひ、人夫を入れて掘らするに、凡そ千餘間、深さ百丈許りに及べども水なし。金掘底に坐し休みつゝ、靜かに聞けば、地の中に犬の吠ゆる聲、鷄の鳴く聲、幽に聞ゆ。怪しく思ひて又四五尺掘りければ、傍に切通しの石の門あり、門の内に入れば、恰も顯密な堂の如く、甚だ闇くして見え分かず。猶通ぬ過ぎて一町許り行けば、僅に明らかになる。切通しの奥の前面より窓を見上ぐれば、青天白日輝き、下を望めるが大いなる田の畔に立たり。其の畔に下り立ちて四方を見渡せば、別に天地日月明らけき一世界なり。

其の山に到りて件に下の岸に至り、一里計り行きて見れば、岩の色は皆瑠璃の如く、山間に七寶の樓閣あり、百寶の樹も並び、瑠璃の如く、硨磲の柱、心ある草木も及ばれず、其木多く生じ並び、木の形は竹の如く、色青くして節あり、葉は芭蕉に似て紫の花あり、大きさ車の輪の如し。五色の蝶其の翼大きさ團扇の如くなるが、花に戯れ、又五色の鳥其の大きさ鷹の如く、花に飛び翔り、其の外諸々の草木、何れも見馴れぬ花咲き盛り、岩の間より二道の瀧流れ出づる、一つの水は、色清くして白き事雪の如く、一つの水は色赤く乳の如し。其の末は一つの流となりて山を下り、遥かに流れて一つの河に並ぶ。上に天神山有りて立つ額を懸けたり、門は瑠璃に金の箔を以て飾り門をたりし身の丈五尺餘り、容の美はしき事玉の如く、唇赤く歯白く、髪は紺青の糸の如く、碧の色なる布衣、黒き烏帽子著たるが、走り出て、跡をつけたる様、[illegible]なれば、實に來れることと、金銀寶石の[illegible]に訪い、其の前に門の首より、一面の神殿[illegible]、鮮やかなる事[illegible]、數十人の僧出でて、[illegible]匂ひあり、此村はいかなる者ぞと、其の者[illegible]皆恐れたる氣色にて、人間世界の言葉、思ひの外なる事に依りて遠く來れりと云ふに、仔細を具に語る其の時奥より照り輝く神の姿を装束に、金の冠を著けたる人出でて云ふやう、大仙宮の勅曲は、其の金銀を作れて遣窟せしむることとなり、先の三十人の者、[illegible]、歸りの者に[illegible]た

り、これ心猿を捨れて、南を水の流に行きて事ふ法はせ、昔日を水の流に行きて目を覚ましたるに、
其の先けず水実の朝に、黒き斗に伏せければ、潮に宿りたるが細くにして、暫くありて心中を安め
に収め、三素の書引きつつ、山間を移るに、[illegible]岩間に至り、[illegible]、川の畔より見入れて内に
入る時刻は、暫くして夜中の時にして、山の麓に近づき一つの城に至る。其門には黄金を鏤めて、珠佃
碧玉と云ふ瑠璃を以て造る一つの宝殿の楼を築き、殿舎の瓦、城郭の壁は、白玉の宝璃瓦の彫、
乱れ浮の庭に、花の香を匂の様にし、種々の草木何かと同じからず、殊に珠殿を飾つて事に一層のこと
それとも門の内に従ひて、また三門には何を見て文字して、首より神に入りの其の所ならんと見て、頭
室は何処と云ふ、宮に一室の者のいふやう、此の時は昔の仙人、時々の修行を留ては、人の世に来り下
に上の方に参り給ひ、其の他の如く世に昇り、或は[illegible]、或は[illegible]、或は玉京長即なんと
これ有りて、仙人の世に[illegible]、印度、[illegible]、とい
ふを聞ふとせば、これで[illegible]仙人の国であらば、人間世界の[illegible]、また何るは何の故で
や、我の世界へ行る[illegible]、人間世界では[illegible]、上界仙人の[illegible]
ね、又、[illegible]人間世界に[illegible]、又[illegible]、元の自
の所に至るや、[illegible]、其に立てた、またれば、其の[illegible]を中に出でて、是を

取りて金掘を打ちつれ、元の岩穴の口に出づるに、門々皆開けたり。送りける番の者云ふやう、「汝爰に來りしは暫しの中日の程と思ひぬらん、人間にては數十年を經たり。」とて、元の穴に入りければ、又闇くして道も見えず、只風の音のみ聞えて、駿河國富士の麓の谷より出でて、大いに驚き怪しみ江戸に歸りて、太田道灌の事を尋ねければ、それは早百年以前なり。井を掘らせられし事は聞傳へたる人もなく、又其の跡もなし。人家ども家建て替りて、本城は大いに榮えたり。我が家を尋ぬるに何處とも知れず、一族の者も聞えず。熟思ふに、長祿元年江戸の城始まりて、今弘治二年丙辰まで一百年に及べり。金掘更に人間を願はず、五穀を斷ちて食せず、木の實を喰ひ水を飲み、足に任せて修行す。數年の後富士の嶽にて或人行き逢ひたり、後に其の住所を知らず。

幽靈に契る

中原主水正は、五男の譽ありて色好みの名を取り、生まれ年二十六に及びて定まれる妻もなし。春の花に憧れては風を恨み、秋の月に嘯きては雲をかこち、官に仕へながら浮れ歩きて、心をものごとに痛ましむ。大永乙酉彌生許りに、思ひ立ちて霞を分けつゝ、北東の山路に逍遙ひ、暮れ行く春の名殘を慕ふ。北白川菖垣の森、櫻井の里、氷室山、岩倉谷、狐坂、八鹽岡、比叡、横川、片岡の森、鬼

が城、大原、音無の瀧、志津原、朧清水、市原野辺、暗部山を打過ぎ鹿苑院に行き至る。世に金閣寺と號す。征夷大將軍源義滿公、此の地に家作りして移り住み給ひしが、薨去の後直に寺と爲したまへり。庭の築山泉水の立石、實に古今絶景の勝地として、類なき所なり。中原こゝまでうかれ來て、日すでに暮れて朧月東の方に出づれば、春宵の一刻其の價を論ずれば千金とは限りぬらんと、花に眺めふ月の光に、木の下もあかき夜の暖く覺えし、里の家に宿は借れども、いも寝られず、歩を運び苔路を踏んで金閣の許に至りつゝ、去んぬる應永十五年、義滿公の薨じ給ひしより既に百十八年、往昔さしも賑しかりけんも、君おはしたる世はなりけるより、佳人も漸う稀になり、礎傾き柱朽ちて、僅かに金閣のみ昔の色を殘したり。中原は軒に立ち寄り欄干に憑りかゝりて、昔を思ひ今を感じて更け行く月に打嘯きつゝ、古木の櫻花少し咲きたるを見やりて、

櫻花いまだ言問はむ春の夜の月にはむかしも朧なりきや

かゝる處に一人の女、其の齢十七八と見ゆるが、半者一人召し具して閣の許に來れり。桂の眉翠雲の鬢人かも、窈窕なる姿容、美しき心も詞も及ばれず、言ふ許なく華麗なるが、如何なる事ぞと忍びて見ければ、此の女房いふやう、金閣ばかりは故の如くにして、庭の面は風景變らず、但し時移り世變り、いとゞ昔の戀しきのみ、思ひ續くるこそ悲しけれとて、泉水の邊に休らひて、津守國

基花山に行きて、僧正遍照が古跡の櫻散りけるを見て詠みける古歌を吟詠す、

　われなくなき住家に残る花がはかなむかしの春ぞ悲しき

末木正此の吟を聞くに、胸騒ぎ魂消えて、心もそゞろに惑ひつゝ、思なき中より、

　咲く花にむかしを思ふ昔はあれど今宵は我ぞあるじなるもの

と詠みて立ち向へば、女房は更に驚く気色なく、いと小やかなる聲にて「一朝より和君此所に来たる事を知りて、自ら爰に来りて見え参らするなり」と云ふ。「然らば汝は何者ぞ、其の名を聞かん」と云へば、女房「こゝに云ひ難し。自らは人間に捨てられて已に年久し。此の事を語り侍らば、和君定めて恐れ給はん」と云ふに、末木正此の言葉を聞きて、「扨は是れ人間にあらず、山近く木霊の現はれしか、或は狐れる姿か、然らば胸騒ぎならんと思ふに、形の美しさに心解けて、遂に恐れもせず、何国か有る捕れ侍らん、只有の儘に語り給へ」と云ふ。女房云ふやう、「自ら昔由良氏の家に生まれ、故あつて此所に引き籠り給ひしとき宮仕せし者なり、年二十にして空しくなり、骸の葬備も無く、此の院の庭に埋み給ふ。今宵は逮夜の御事によりて、僅一往良仁禅尼の御許に参りき。是れは義満公の御情にてましま す、其の後久しくて、今宵く爰に出で来り侍りしに、幸若に出逢ひて、盞を取り交はせ、酒宴を召し寄せ閨の傍に向ひ楽しくて、今宵の花に今宵の月、如何で楽しく遊ぶ事さへなし」とて、酒宴を始め

遊ぶ。中将歌唄ひ、杯の数重なれり、女房の打ちかたぶきて、

明け行かば戀しかるべき名殘かな花のかげもるあたら夜の月

と詠みて打涙ぐみけるを、中将も心ありげに思ひて、

いづれをか花は嬉しと思ふらむさそふ嵐とをしむ心と

女房聞きもあへず、「君は自らが心を引き見たまふと覺ゆる歌ぞかし。世をさりて久しく埋もれし身の、又立ち返り君に契らば、死すとても朽ち果てはせじ」と、睦まじく語らひける程に、月は西の嶺に隠れ、星は花の空に集まる頃西の廂に移りて、女房わりなく思ふ色顯はれ、暫し諸共に枕を傾けしに、春の夜の習ひ程なく時の移りて、鳥の聲二度聞きつゝ、花よりも白む横雲の嶺に棚引く頃になれば、互に涙を拭ひて起き別れたり。晝になりて其邊見廻るに、院の傍に古びたる卒都婆ありて、苔むしたる塚に朽ち殘り、塚の左に小さき塚並べり。これ中将其の頃悲しみて打續き焦れ死せしを、人々憐れがりて、同じ所の塚の主に爲したるとなり。中将哀れにも悲しくて、家に歸らん事を忘れ、又其の夕暮に閣の邊に立ち廻れば、女房も顯はれ出でて、手を取り組み涙を流して語るやう、「自ら君が心の情を感じて、只其の夜の契りを爲し、葛城の神がけて晝を厭ふぞ心憂き」抔云ひければ男も、「何かなれば厭ふとて、只烏羽玉の夜ならで契りを交す道なしとや。宵々毎を待つも苦しきに、誰を人目の

関守になし、忍ぶ歎きを凝り積むべきことなど語らひ、是れより夜毎に爰に出で逢ふ。二十日許りの後は、昼も出でゝ語り遊ぶ。主水も官に仕ふる身なれば、都に帰りて日毎に行き通ふ。終に或日暇を申し降りけるに、昼行きて出あひ、女房を連れて京の家に帰りて、只管常に住み侍り。其の身持萬慎みて、物云ひ言葉の品才智有り、主水一族に交はりを親しく、内外に召使ふ女童まで、恩を與へ恵みを厚くし、隣家の輩までも慕ひ慈しみ、此の女房に心を解けずと云ふ事なし。衣縫ふ業、物書き疎かならず。軽々しく他人に見えず、まことに主水は淑女の良き類を求めたりと人々羨みけり。斯くて三年の後七月十五日、女房云ふやう、「半者は、我が住みける方の宿守せさせて殘し置きぬ、ここを待ち侘ぶらん、今日は金閣に行きて言問ひ侍らん」とて、酒調へて主水女房打連れて行く。日すでに暮れて、月さやかにして東の山に出づれば、池の蓮は南の池にひらけ、柳は枝垂れて露を含み、竹は風に戦ぎけるに、半者出で迎うて云ふやう、「君已に人間に逍り遊ぶ事已に三年に成りて、楽しみを極めたまふが、旧館をば忘れ給ふか」と、恨めし気に云ひければ、二人連れて閣の西の間に行きて、女房泣く泣く主水に語るやう、「君が情の深きに引かれて、三年の月日は、隙行く駒の影より疾く打過ぎて、なほ飽くことなき契りの中らひ、今宵を限りに永く別れ参らせん。自ら黄泉の者ながら此の世に馴るる事、過世の縁浅からぬ故ぞかし、今は縁つき侍れば別れを取り参らするなり。若し又是れを悲しみ

と與へて後に宿りもなく、冥府の路も如何ならん、供をさへ惱ましければ、嶮も必ず遠かるまじ」
とて、泣に涙を催して、共も結ぶ契りけり。口に鷄の八聲の鳥も打ち頻り鐘の音聲を責りしかば、
夜明けの白の暁世の初に前後を入れて、是れは此の程の形見とも見給へとて、泣く泣く別れて古塚
の方に行く、猶も名殘を惜しみて立ちもどり見返りて、霞の如く消え失せたり。主水茫然と隔るまで
悲しきことは限りなく、血の涙を流して慕へども叶はず、家に歸りて件を言ひ、法華經を讀みて懐ひ、
一品の回向、文の何をかけて供養を遂げ侍り、其の詞に、
惟れ歳次、唯來りて菩提を觀世音に廻へ、新に法華經に頂きて、花の鮮やかなる一花の美しきも、昔此の蘭
の軒に宿せり、往昔は長き日に富住し、即今は荒れたる墳に埋もれり。篠薄の下に住み狐兎のゆく
に任ぶ。花落ちて枝に歸らず、水流れて源に來らず、日暮れ魂き別たれたども、[illegible]たゝけれど、
吾人の謙の君臣、二に背す、魂を返す術はなし、姿を現はす時なし。玉の插櫛、紅の袴に、色
麗はしく、往くや晩れ、昔の千歳常磐を變らず、喜びを同じく共に老いたる事を思ひしに、如何に違う
て早く別れたり、雲となり雨となりし朝な夕なの恨み、眼くに其の跡を失へり、塚の上の印に向へども、
悼ふごとにただ聞かず、後の逢瀬何時か期せん、雁の聲僅かに悲しみを助け、螢の光只愁へを催ふ
[illegible]情を[illegible]、悲しき[illegible]に[illegible]、心の底は絲の亂れ、涙の色[illegible]を染めて、悲しみの

中に經讀み花を手向く。靈よく享け給へ。嗚呼悲しきかな痛ましき哉、冀はくはよく享け給へ、

ともす火や手向くる水や香花を魂のありかにうけて知れ君

且水是れより官職を辭退して、獨り寂しき牀に起き臥し、只此の人の面影のみ立ち離れず、歎きに沈み侍りしが、二度妻をも求めず、小原の奥に引き籠り、終に其の終る所を知らず。

人面瘡

山城國小椋と云ふところの農人、久しく心地惱みけり。或時は惡寒發熱して瘧の如く、或時は遍身痛み疼きては通風の如く、さまざま療治すれども驗なく。半年ばかりの後に、左の股の上に瘡出で來て、其の形人の貌の如く、目口ありて鼻耳はなし。是れより餘りの惱みは無くなりて、只其の瘡の痛む事云ふ許りなし。まづ試みに瘡の口に酒を入るれば、其のまゝ瘡の面赤くなれり。餠飯を口に入るれば、人の食らふ如く口を動かし呑み納むる、食を與ふれば、其の間は痛み止りて心安く、食せさせざれば又甚だ痛む、病人此の故に痩せ勞れて、肉痛み、力落ちて骨と皮となり、死すべき事近きにあり。諸方の醫師聞き傳へ、集まりて療治を加へ、本道外科皆その術を盡せども驗なし。茲に諸國行脚の道人此所に來りて云ふやう、此の瘡實に世に稀なり、是れを患ふる人は必ず死せずと云ふ事なし

これども一つの手段を以て癒ゆる事有るべし。」と云ふ。農夫云ふやう、「此の病だに癒えば、假令田地を沽却すとも何か惜しかるべき。」とて則ち田地をば賣代なし、其の價を道人に渡す。道人諸々の薬種を買ひ集め、金石土を初めて草木に至りて、一種づゝ瘡の口に入るれば、皆受けて是れを呑みけり。貝母と云ふ物を差寄せしに、其の瘡則ち眉を縮め口を閉ぢて食はず、頓て貝母を紛にして瘡の口を押し開き、葦の筒を以て吹き入るゝに、一七日のうちに其の瘡則ち痂づくりて癒えたり。世に云ふ人面瘡とは此の事なり。

人鬼

丹波國野々口と云ふ所に、與次と云ふ者の祖母百六十餘歳になり、髪甚だ白かりければ、僧を頼みて尼に爲しけり。若き時より放逸無慙なる事雙びなし。與次已に八十餘にして子供數多有り、孫も多かりしを、彼の祖母は與次を我が孫なりとて、常に心に叶はぬ事あれば、責め誡むる事小兒を威し叱るが如くす。されども與次が爲祖母の事なれば、孝行に養ひけり。此の姥年已に極まりながら、目も明らかにして針の孔を通し、耳さやかにして囁く事をも聞き付け侍り。年九十計りの時歯は皆脱け落ちたりしに、百歳の上になりて元の如く生ひ出でたり。世の人不思議の事に思ひ、幼き子持てば、此

の鼻に肖れりと下名をつけさせ、歡待し傅き侍りし。晝の內は家に在りて蠶をうみ紡ぎ、夜に入れば行先知れず家を出づる。初めの程こそ有りけれ、後には孫も子も怪しみて出でて行く跡を慕へば、此の祖母立ち歸りて大いに叱りけれども、杖は突きたれども、足速く飛ぶが如くに歩む。更に其の行所定まらず、身の肉は消え落ちて骨太く顯はれ、兩の目は白き所色變じて碧し。朝夕の食事は至りて少なけれども、氣象は若き者も及ばれず、或時より晝も出でて行くに、孫曾孫玄孫たれども向ひて「我が留守に部屋の戸開くな、必ず窓の內をも覗くな。若し戸を開かば大いに怨むべし」と云ふに、家にある者共怪しみ思ふ。又或日晝出でて夜更くるまで歸らざりけるに、與次が此の時酒に醉ひて、何條祖母の部屋の戸を開くなと云はれしこそ怪しけれ、留守の紛れに見ばやと思ひ、密かに戸を開けて見ければ、狗の頭、庭鳥の羽、幼子の手首又は人の髑髏、手足の骨、數も知らず簀の下に積み重ねてあり。是れを見て大いに驚き、走り出でて父に斯くと告げたり。一族集まりて如何すべきと評議する所へ、祖母立ち歸り、部屋の戸の明きたるを見て大いに恨み怒り、兩眼圓く見開き光輝き、口廣く聲戰き、走り出でて行方なく失せにけり。恐ろしさ云ふ許りなし。後に大江山の邊に薪樵る者行き逢ひたり、其の樣道白の帽子を打折り、杖をつきて山の頂に登る。其の速き事飛ぶが如く、猫を捕へて押し伏せたるを見て、怖ろしく身の毛の彌立ちて逃げ歸りぬと語りし、彼の姥なるべし。生きながら鬼に

なりける事疑ひなし。

伽婢子卷之九 終

伽婢子卷之九

伽婢子卷之十

守宮の妖

越前國湯尾といふ所の奥に、城郭の跡あり。荊棘の茨生ひ茂り、古松の根横はり、鳥の聲幽に、谷の水音もの凄きに、曹洞家偏衫の僧塵外首座とかや、この所に草庵を結びて、座禪學解の風儀を味ひ、春は萌え出つる蕨を折りて飢ゑを扶け、秋は嵐に木の葉を待ちて薪とす。近き邊の村里より、檀越出で來りては、その日を送る程の糧を包みて惠む事、折々はこれありと雖も、多くは人影も稀々なり。されども書典を開きて向ふ時は、古人に對して語るが如く、座禪の牀に上れば、客塵三昧に入つて、自ら寂しくもなし。或夜燈火を挑げ机に凭り掛り、傳燈錄を讀み居たりければ、身の丈僅かに四五寸許りなる人、黑き帽子をかぶり細き杖をつき、蚋の鳴くが如く小さき聲にて「我今此處に來れども、主人なきやらん、物云ふ人もなく、靜かに寂しき事かな。」と云ふに、塵首座素より心法治まりて、物の爲に動ぜざるが故に、これを見聞くに驚き恐れず、彼の化物怒りて「我今客人として來りたるを、無禮にして物だに云はぬ事こそ安からね。」とて、机の上に飛び上る。塵首座扇をとりて打ちけ

れば、下に落ちて、「狼藉の所爲よく心得よ」とて、大いに叫びつゝ門に出でて跡かたなし。暫くありて女房五人出で來れり、その中に若きもあり老もあり、何れも身の丈四五寸許りなり。姥が云ふやう、「我が君の仰せに、『沙門唯一人、寂しき燈火の下に學行を勤めらる。早く行き向うて物語をも致し、又佛法の深き理をも問答して慰めよ』とあり。此の故に智辯才覺を備へたる學士爰にきたりければ、何ぞ恐れなく打擲して恥を見せたる。我が君只今こゝに來りて、仔細を尋ね給ふべきなり」と云ふに、其の丈五六寸許りなる人、腕を捲り臂を張り手毎に杖を持ちて、一萬餘り馳せ來り、蟻の如くに集まり學首座を打つに首座は夢の如くに覺えて、痛む事云ふ許りなし。その中に又一人、赤き裝束して烏帽子著たる者、大將かと見えて後に控へて下知して「沙門早く座を出でて去るべし。出でて去らずば汝が目鼻耳を損すべし」と云ふに、七八人首座が首に飛び昇り、耳鼻に喰ひ付きければ、學首座これを拂ひ落して、門の外に逃げ出でつゝ、南の方の岡に登りて見れば、一つの門あり、是はそも見馴れざる所かな、先づ爰に立ち寄りて今夜を明さんと思ひ、門外近くさし寄りければ、後より一萬餘の人立ち歸り、學首座捕へて曳と突き倒し、門の内に引き入れたり。門の内にも七八千許りの人數、身の丈五六寸許りなるが、隙間もなく立ち並びたり。大將また歸りて云ふやう、「我汝を憐みて、伽を遣はし慰めんとすれば、却つて損害を爲す、その罪まさに手足を斬りて償ふべし」と云ふ。數百人手

毎に刀を拔き持ちて立ち惑ふ、首座はいよ〳〵怖れ惑うて、「果報つたなき眼なき人で、その恵み知らざる事、その誤り眞に少なからず、後悔するに遑あらず、唯願はくは、罪を赦し給へ」と云ふに、「扨は悔む心あり、さのみに責むべからず、只逐ひ出せ」と云ふ聲聞えて、門の外へ突き出さるゝと思ふに、寺の小門の前なり。堂に立歸りたりければ、燈火は消え殘り、東の山の端白みて明け渡る。餘りの不思議さに、門の邊を尋ぬるに更に跡なし、東の方に少し高き塚の下に穴ありて、守宮おほく出入するを怪しく思ひて、人多く雇ひて此處を掘らするに、漸うに底深し。一丈許り掘りければ、守宮集まりて一萬許りあり。中にも大きなる物、其の長一尺ばかりにして色赤し。これ則ち守宮の王なるべし。村人の中に、一人の翁進み出でて語りけるやう、「昔瓜生判官とて武勇の人あり。この所に城を構へて暫く近邊を從へ、新田義治に心を傾けたり。その根源は、判官の舍弟に義鑑房とて出家あり、新田義治を見參らせ、優れて類なき美童なりければ、これに愛念を起し、其の判官をも薦めて義兵を擧げしかども、遂に本意を遂げずして討死したり。義鑑房が亡魂この城に殘りて守宮となり、城の井の中に住みけるが、年經て後、その井のもと頽れたりと云ひ傳へし、扨は疑ひなく井のもとの守宮、今既にこの妖怪を爲すと覺えたり。早く取り拂はずば、重ねてまた災あるべし」と云ふ。庫首座一紙の文を書きて曰く、

五蘊虫あり、蜥蜴と名づく。頭は蛇に似て四つの足あり、身細やかにして背に重なり、色黒くして尾長し、石龍子を以て部類とし、守宮を以て支族とせり。或は湿土水の涯に隠れ、あるひは墻壁の中に穿ちしかるに今この土竈に住して、忽ちに子孫を育長し、その巨多ことたへて數ふるに百千をもつて盡されんや。月をかさねの年を積みて、忽ちに變化妖怪の禍を傳し、猥りに人の神魂を動さしむ。これ何の事ぞや。蜥蜴蛇虺の蟲等の間に託し、自ら蛇虺の望に倚せて、暫く十二時虫と名わと雖も、それ三十六禽の員に列れたり。よく山龍を捕へて雨晴の變化あり。よく一日の中に身の色をかはりて昏明の性常ありと雖も、守宮のしるしを事帯に消し、覺悟の覺分を主帯が言に非ず、これみな貪欲愛執をもつて倩が枝にすがり、衞に捕へ、或は往古和門の徒、一朝突然として男色に於あき、遂に行業を捨てて武勇を勵まし、翻倒して死して這ふ蟲となれりと云ふ。嗚呼これを憐むの門は前生の蟲となり、檐を愛せし寺門は厨中の蟲となる。これ上古の者に傳ふ。形色に注してまた此の蟲となれり。其の性すでに色かくれふる能あり、人の恥むところこれ世のならむところなれ、なんぞ轍の心なく、却つてかくの如くの怪異を傳すや。はやく心を改めて正道に赴き、生を轉じて元元に歸れ」

と讀みければ、是れにや感じけん、數萬の守宮皆一同に死に絶えたり。人皆不思議の思ひをなし、唯

此の儘捨つべき事ならずとて、柴を積みて焼きたて灰に為し、一丘を築きて標とす。それより後再び怪異なし。

妬婦水神となる

山城國宇治郡は都より東にあり、宇治橋より西をば久世郡と云ふ。宇治橋の西の詰北の方に、橋姫の社あり。世に傳へて云ふ、橋姫は顔かたち至つて見惡し、この故に遂に配偶なし、橋の南に離宮明神あり、毎夜かよひて橋姫の許に通ひ給ふ。その來りたまふ時は、宇治の川水白波高く上りて、物すさまじき事云ふばかりなし。されば明神の歌に、

夜や寒き衣やうすきかたそぎの行きあひのまに霜や置くらむ

と詠み給ひしとかや。然るに宇治と久世と、嫁を取り婿をとるに、橋姫の前を通り、橋を渡りて緣をとれば、久しからずして必ず離別あるなり。この故に今に到りて兩郡緣を結ぶには、橋より北の方槇の島より内にて川を渡る事なり。これは橋姫が容貌の惡しくて、獨り寡なる事を怨み、人の緣邊を嫉み給ふ故なりと云へり。それにはあらず、昔宇治郡に、岡谷式部とて富裕の者あり、その妻は小椋の里の領主村瀬兵衛と云ふ人の女なり、もの妬み極めて深く、召使ふ女童まで、少し人がましきを

ば追ひ出して、たゞ五體不具の女許りを家の内には集め使ひけり。餘所の事なりとも、男女のわりなき物語を聞きては、その儘腹立ち怒りて食更に口に入れず。況して夫の事は悋氣深く責め歎きて、門より外に出さず、岡谷もて扱うて、去り戻さんとすれば、「我に暇を與れて去りたらんには、鬼になりて取り殺さん。」など凄まじく罵りけり。年は重なれども子もなし。岡谷常には、雙紙を讀む事を好みて慰みとす。源氏物語の中に、物妬み深き例には、六條の御息所は死して鬼となり、髭黑大臣北の方は物狂はしくなれり。これ皆嫉妬の深き例として、後の世までも名を穢せし。是等は世にありしながらも眉目貌美しかりしと云へり。岡谷悋氣深くとも、利根聰明に眉目よくばありなん、さのみに猛々しう嫉み給ふな。」と云ふに、女房大いに腹立ち、「眉目惡しきを嫌ひて、また麗女に心を移さんとや、この姿にて見惡ければこそ男も嫌ひにたれ、性を代へて思ふ儘に身を窮し、心定まらぬ男を思ひ知らせん。」とて、妻は道に立ち、口廣く色黑うなり、眼大いに見出したるが、涙をはら／＼と流し、座を立ちて走り出でつゝ、宇治川に飛び入りたり。水練を入れて求むれども死骸も見えず、岡谷驚き平等院にして僧を請じ佛事執り行ひけり。七日と云ふ夜の夢に、妻の女房來りて岡谷に云ふやう、「我死して此の川の神となれり。橋を渡りて緣を結ぶ者あらば、行末必ず遂げさせじ。」とて夢醒めたり。是れより橋を渡りて緣を結べば、必ず別離すると云へり。舟にて川を渡すにも眉目惡き女には怖れなし、顏貌

美しき女の渡れば、必ず風荒く波立ちて舟危しと云ふ。此の故に新婦を迎へて川を渡すに、波風なき時は新婦の眉目悪しからんと、諸人これを知るとかや。

祈りて幽霊に契る

上野國平井の城は、上杉憲政の住み給ひし所なるを、北條氏康これを攻め落し、憲政は越後へ落ち行きて長尾謙信を頼み、二度家運を開かん事を計りたまふ。平井の城には北條新六郎を入れ置かれし處に、城中に一間の所あり。金銀を鏤め、屏風障子皆花鳥草木いろいろの繪を盡し、綺麗なる事たとへん方なし。庭には樣々の石を集め、築山泉水其の功をなし、築山に續きたる花園には、春より冬に至るまで、咲き續く草木の色更に絶間なし。これは其の昔、憲政の息女彌子生年十五歳、眉目かたち世に類なき美人にて、心の情色深く、優にやさしかりければ、見る人聞く人皆思ひを懸け心を悩ます。憲政は如何なる高家權門の壻にも合はせて、家門の榮を結ばんと思して寵愛深く、別にこの一間を設て置かれし所に、家人白石半内と云ふ小姓、唯一目見染め參らせ心地惑ひて堪へかね、風の便りにつけて文一つ參らせしに、此の事露はれ、半内密かに首を刎ねられたり。その後百日許り過ぎて娘彌子、日暮方俄に消えて絶え入り給ひ、遂に空しくなり給へり。定めて半内が亡魂の所爲ならんと囁き傳へし。

新六郎この物語を聞きて、たとひ幽霊なりともかかる美人に逢ひて語らはば、さこそ嬉しからまし、今生の思出何事かこれに勝らんと、しきりに思ひ染めて、朝々は香をたき花を手向けて、只管に深き感慕の心つきて祈りけり。ある日の暮方に、何所とも知らず女の童一人来りて、新六郎に向ひて云ふやう、わが君はそのかみ此所に住み給ひしが、昔の誓忘に惹かれて、これまで訪はれ、只今参り給はん、に消失せ給ふべきやと云ふうち、消え失せしが、暫くありて異香薫じて、先の女の童に伴はれて、一人の美女、築山の陰より出で来れり。その美しさ、此の世の中にはあるべき人とも覚えず、天上人の降れるか神仙の類かと見るに、中々目もあやなり。新六郎、これは聞き及びし郡主の幽霊なるべし、日頃我が念願せし所、幸に通じけり。其を一巾に報すと云ふ事はあれど、何か漢あしとも思はれ、逢ひをなして思ひを述べしには、人と幽霊と同じからずと雖も、情の道に死と生と変る事あらじものをと、女の手を執り引きいれて、暁まで語らひけり。女既に立ち帰らんとする時、又自ら此庭に来る事をあなかしこ人に漏らし給ふな、又来るを待ち給へと契りて、

底深き池におふてふくりなはくるとは人に語りばしすな

と打詠じ、庭に出でて行くかと見れば、其の儘形は消え失せたり。次の日の暮方にまた来れり。暁帰りては夕暮に来ること六十日に及べり。ある日新六郎、家人を集めてさまざまの物語の序に、女の云ひ

使はるゝ者の外は、顏を差し入れて覗く人もなきに、唯この古今集に限り、失せたることそ怪しけれ。又その外には、名作の刀脇差金銀等は一つも失せず。信玄大いに驚き甲信兩國を探し、近國に人を遣はし私かに聞き求めさせらる「此所他人更に來るべからず、いかさま近習の中に盜みたるらん」とて大いに怒り給ふ、「古今の事は僅かに惜しむに足らず、唯以後までも斯かる曲者忍び入るを、思ひて知らざりけるに無用心の故なり」と、膝の上りて激しく穿鑿に及びけれども、近習も外樣も手を握りておそれ合へり。飯富兵部が下人に、熊若と云ふ者生年十九歲、心利きてさか〳〵しく、不敵にしてしぶとき生付なり。其の頃信州割が峠の軍に信玄馬を出され、飯富同じく赴きしに、旗棹を忘れたり。明日卯の刻には飯富が陣と定められしに、日ははや暮れたり如何すべきと案じ煩ひしを、熊若すゝみ出でて「某取りて參らん」とて其の儘走り出でたり。諸人更に實と思はず、暫くして二時許りの間に歸りて旗棹を取りて歸り來る。「扨如何して取り來れる」と問はれしに、熊若云ふやう「早く取りて來らんと思ふ許りにて、手形をも印をも取らずして甲府に走り行きければ、門をさし固め、なか〳〵人の通路を堅く警むるゆゑに、壁を傳ひ垣を越え、密かに戸を開くに更に知る人なし。やがて亭に忍び入りて取りて來り侍り」と云ふ。飯富聞きて、これより甲府までは東路往來百里に近し、これを行きて歸るだにあり、況して用心嚴しき所を、人知れず忍び入りけることよ。定めて此の間の古今集もこの者ぞ

盗みもらん、後に聞えなば大事なるべしと思ひ、熊若を密に招き「汝かかる盗せし日月、道早きものとは今まで露も知らず、此の程信玄の重宝古今集を盗みたるは汝なり」と云ふ。熊若答へて云ふやう、「某は唯道を早く行き、忍びをする事を得たり。然れば幼き時より君に召使はれ、故郷の父母如何になりぬらんとも知らず。願はくば我に暇を給はり、故郷に帰して給はば、其の盗みたる品を顕はし作らん」と云ふ。「それこそいと易けれ暇は取らすべし、彼の盗人を捕ふるまでは沙汰すべからず」とて、却つて帰国の後、熊若を以てこれを聞はさしに、西郡に於て唯一人行く者あり、早き事風の如し。熊若立ち向ひ物云ふ間に、後より捕へて押し伏せたり。「熊若に欺かれて見る事こそ身からね、古今を盗みける事は、信玄公の寝屋を見んためなり。あはれ今一日を延びなば、甲府をば亡ぼすべき物を、運の強き信玄公かな。我は上州箕輪の城主、永野が家に仕へし鳶沢の者、元は小田原の風魔が弟子なり。我が主君の敵なれば、信玄公を殺さんとこそ謀りしに、本意なきことかな。此の上は疾く疾く我を殺し給へ」とて申し受けて殺されたり。古今集をば、都に出して賣りけるとなり。熊若は暇賜はりて、西国に下りけりと云ふ。

鎌鼬 付 提馬風

關八州の間に、鎌鼬とて怪しき事侍り、旋風吹き起りて、道行く人の身に物荒く當れば、肌のあたり裂けて、剃刀にて切りたるが如く口開け、然も痛み甚しくもなし。又血は少しも出です。女蕎草を揉みてつけぬれば、一夜の中に癒ゆと云ふ。何者の所爲とも知り難し、唯旋風の荒く吹きて當ると覺えて此の愁へあり。それも名字正しき侍には當らず、たゞ俗姓卑しき者は、假令富貴なるもこれにあてらると云ふ。尾張美濃三州の間に、提馬風とてこれあり、里人或は馬に乗り或は馬を牽きて行くに、旋風起りて沙を捲き込み、圓くなりて馬の前に立ち廻り、車の輪を回するが如し。漸うにその旋風大きになり、馬の上に舞へば、馬の鬣すく／＼と立つて、その鬣の中に、細き絲の如く、色赤き光さし込み、馬頻りに嘶きたち、いはひ嘶きて打倒れ死す。風その時散り失せて跡なし、何なる者の業とも知る人なし。若し旋風馬の上におほふ時に、刀を拔きて馬の上を揮ひ、光明眞言を誦すれば、其の風散り失せて馬も恙なし、提馬風と號すと云へり。

了仙貧窮附天狗道

釋の了仙法師は播州賀古郡の人なり。幼くして父母に後れ、郡の草堂に籠りて出家し、十七歳にして關東に赴き、相州足利の學校に三十餘年の功を積み、内外の典に渉り、神敎南道に携はり、博學多

聞の名を掩し所々の叢林に遊ぶ。會て義諦否ありて、諸人皆偏る伏して、更にこれに敵すること適ひ難し。然れば其の天性邁俗倍雅の風より、命分甚だ薄く、一重の紙衣をだに肩に全からず、黒染の衣は綻破れ、その口を糊すべき糧に乏し。此の故に學業の功は重なりながら、長老上人にもならず、僧位の職にも預らぬ卑僧にて、年月を重ぬるまゝ、名利の心更に絶え果てし。自ら深く嘆きて曰く、「一丁仙よ高學問よく勉めて智あり、生一部なく名も世に聞えなかなか、如何に身一つを過ておび、一寺の住ともなられざるや」と。又自ら解して曰く、「安然は常の軒に傀然て福羅は寧の社に辟わし、これ道義の不足なるや、彼の小角は京洲に流されて難儀は覆水に苦しみし、これ修徳の闕るなるにあらず。前因に倫積の縁ありて安然は轄位に至らざりし、これ智と惠との故ならず。沙彌に漏かに衣て餓くまで嗟ひ千里は貧実に迫りぬ。これを能の不敏なるに因らんや。これ唯に過去世の因縁なり。雖には天命と云ふ。千仙不幸にして此の謗りを受け、何ぞ因果の理に違うて妄りに名利を求めんや」とて自ら悶絶して心を改めけり。されども學智に慢心ありて、人の己を用ゐざる事を、由る思を胸に塞がり、天文の末の年頃にして病死しければ、明寺の僧に埋めたり。時に化の僧は蕭後と云ふ者は、學問の友としてふしく嘯き現りて頃せしが、或時禁禪庵に出でける道にして、丁重に山を合ひたり。漆黒の手歟に坐の百丁八人にて、曲禾びふう朱条おさて、白丁に群れたり、前諂も八人鶴にして、前

立ち、權威に先を拂はせ、きらめき來る裝ひ、往昔に變りて輝き堂々たる事、偏に國師僧正の儀式に似たり。山伏は九條の袈裟に、座具取り揃へて身に纏ひ、檜扇さし出し、和僧は紫俊ならずやとて輿より降り下り、手を執り涙を流して昔今の物語す、紫俊云ひけるは「昔と別れ歸たる事僅かに十年許りの間に、よく自ら德位高く雲の上に昇り、國家擧く朱門の內に交はり、衣裝袈裟の華やかなる扮裝、手輿開前の盛んなる有樣、眞に學智秀でたる所、志を遂ぐる時なり。僧法師の本意はこゝに極まれり。羨ましくこそ」と云ふ。山伏答へて曰く、「吾今一職を請けて勉め行ふ、更に隱すべきにあらず、その形勢見せ奉らん、此方へ坐せよ」とて、光明寺の堂に行き到る、人更に見咎むる事なし。夜更に後夜に及ぶ。山伏語りけるは、「我常に慢心あり、然れども更に非道を爲さず、平生貧賤なる事を怨み、憤りて、因果の理を知りながらこれに惑へるを以て、死して天狗道に墮ち擧頭の職に選ばれ、文を綴り書を考へてその義理を明らめ傳ふ。我が天狗道は魔道なりと雖も、鬼神に横道なきが故に、人を選び器量によりてその職を司らしむ。人間はたゞ賄をもつて高官を爲し、追從輕薄の者を良しと思ひて其の才能を云はず。これに依りて公家も武家も出家も、同じく追從輕薄奸曲侫邪をもつて官位俸祿に飽き滿ちて、良き人はみなその道の正しきを守る、此の故に人を諂はず輕薄なし、是を以て長く埋もれて世に出でず。騏驎は徒らに鹽車を掛けられて草水に倒る渴え、駿馬は時を

得て叫喚に喚きたり、閻魔は國の中に住みて、鵄梟は鳥窩の間に囀る。強ちこれにて公家も武家も出家も賢者も、形痩せて髪枯れつゝ、口論り議論に競ひ死すれども知る人なし、愚人俗人の輩は世に逢はれて時めくなり。これにも風俗悪しくなりて、治まれる時は少なく亂るゝ日は多し。我が天狗道は元良くその器量を選び、その職を立てがふに誤らず。凡そ世の人貴賤を云はず、少しも慢心ある者は皆此の魔道に来る。その中に、君に不忠あり親に不孝する者は、必ず大きなる責を受け、善を積み徳を施せし者は、皆その幸ひを被る。是れ因果の理、皆偏りなし。天子公卿武士出家、皆に名を辱められたる輩、或は我が道に入りて、或は天狗となり或は眷屬となり、世の人のために祟りをなし、或は障碍を爲し或は守護を爲す。それ太上は德を立て、その次は功を立つ、その次は言を立つ、これ皆して久しけれども朽ちずと云へり。我は德もなく功もなし、茲に論場に言を立てしも、今既に名も朽ちて無し、その慢心の報いを見給へ。」とて、堂の庭に飛び出でたる姿を見れば翼あり、鼻高く眼より光輝き、凄じき様に變ぜし所に、虚空の鐵の釜ふらりと落ちて、其の中に熱鐵の湯煮え返り、羽に翼きて法師一人下り、銚子に熱鐵の湯を汲み入れ、杯に入れて了佃に渡す、了佃怖れたる色にてこれを飲まんとするに、盃の熱鐵燃え出でて下に落ちければ、足に轉びて失せにければ、堂の中も同宿も皆倒れ伏す。夜は明けぬと思ひて見れば、先の明神寺中の堂にはあらで、夜の鳥の声に成り伏し給ふ人

坐したりし。それより歸りて佛事營み、道心深く後世を怖れ、諸國行脚して菩提心を祈りけり。

伽婢子巻之十 終

伽婢子 巻之十一

隱里

播州印南と云ふ所に、内海又五郎とて武藝を嗜み、弓馬の道に稽古の功を重ね、然も其の心根強めて不敵者あり、或時思ふやう、片田舎に世を過さんには、人のため名を知らるゝこと有るべからず、都に登り赤松を頼みて、公方に宮仕へ奉り、世の變りに任せて立身せばやと思ひ立ちて、京都に登りしかば、赤松は身まかりたりと聞く。我は力なし、後藤甚部が宇治にありと云ふ、此處に行きて頼まんと思ひ、足に任せて夜行く〳〵、日已に暮れ掛り、道に踏み違ひて草原小坂を辿る〳〵、栗栖野と云ふ所に出でたり。俄闇く雲閉ぢて雨さへ少しくゝ降り出したり。遠近人に物申すべき影も見えず、狐の叫ぶこゑ幽に聞ゆ。狐の點す火岡邊に閃く。こゝに一つの堂あり、昔し太元帥の法行ひける所とて、今も太元堂と名付く。柱朽ちて垣傾き、木の葉散り積り軒破れ、實に物凄き所なれども、行く先も定かならず、立ち歸るべき道も覺えねば、堂の縁に上りて夜を明す。亥の刻斗りに東の山際より、松明點して人多く來る。漸うに近づきつゝ太元堂に向ひて歩み寄る。又五郎思ふやう、かかる所へ夜

更けて來る者は妖怪なるべし、然らずば盗人ならんと怪しみ、密かに天井に登り息を靜めて居たりければ、二十人許り騒ぎて、堂に上り火をたてたり。其の中の大將と覺しくて、華やかに出立ちたる者一の座にあり、其の外の者皆各坐したり。槍、長刀、弓箭、手毎に持ちたるを立て並べ、用心したる體なり。其の形を見れば皆猿の類にして、更に人間にあらず、又五郎これは疑ひなき妖怪なり。一矢射ばやと思ひて、携へ持ちたる弓取り直して、尖り矢を番うて只と放つに、誤たず上座にありける者の、臂の懸りに強かに立ちたり。此の者大いに驚き聲を揚げて、「あら悲し是れは抑何事ぞや」と言ふ程こそありけれ、燈火を打消し、許多の者共ふためき立ちて散り／＼に逃げ失せたり。物音靜まり跡も見えざりければ、夜の明くるを待ちて四邊を見るに、血溢れて曳きたり。又五郎行末を見屆けばやと思ひ、跡をとめて南の方山を巡り、西を指して行きければ、大きなる穴の傍にして止まる。いよ／＼怪しみ彼方此方せし間に、今宵少し降りたるに土辷りて踏み外し、穴の内に陥ちたり。底深く岸高うして上るべき便りなし。いとゞ暗かりければ、爰にて死するより外はなしと、傍を探り見るに横に穴あり、靜かに歩み行くに一町許りにして、明らかなる所に出でたれば、月日の光常の如し。一つの巖に石の門ありて、數十人其の門を固めて番をつとむ。其の有樣は今夜太元堂に來りける者に違はず、番の者驚き問ふやう、「何人なれば爰には來りけるぞ」と。又五郎「これは播州より此の頃都に

に醫師に仕へし身の業とす、藥を求めて山に分け入り侍りしに、道に踏み迷ひ思ひ掛けず穴に落ちて爰に來れり、國に歸るべき道を示し給へ」と云ふに、彼の者共聞いて大いに喜び、「これは誠に天の與ふる幸ひなり、我が君昨日偶々城を出でて遊び給ふ所に、流矢の爲に中りて疵を被り臥し給へり。療治し給へ」とて内に呼び入れたり。宮殿甍を磨き、簾掛け渡したる奥に誘ふに、彼の王苦しげなる聲にて、「我偶々出でて遊ぶ處に、暴く忽ち身に迫り、運命つきて流矢に中り、毒氣骨に透りて痛む事云ふばかりなし、命又危ふし。願はくは一つの醫術を出して、此の痛を治し給へ。然らば我も一度蘇りて、またこれで樂しみを守るべし、これ寔の大恩なり」と云ふを見れば、毛禿けて大きなる猿なり。幾年經たりとも知られず、老いさらぼうたるが、いと苦しげにて吟き臥したり。傍に二人の美女あり、美しさ限りなし。又左右に侍りて、膿を取り疵を撫でて、少しも苦しからず慰めたり。我に名方の藥あり、これを服すれば病を治するのみならず、長生不老の寶藥なれば、命を保ち齡を若やかに保し、天地と共に久しかるべし」とて腰に着けたる火打袋より、丸藥を取り出して與へ服せしむ。一類等これを喜び、寶地に不老不死の藥ありと聞きて、我等かかる神仙の人に逢ふ事何ぞ、願はくは我等にも與へ給はれかし」と云ふに、首を傾けて分ち與ふ。多くの猿共爭ひ奪うてこれを飲み、元より此の藥には、鏃に塗りて敵を射るに、必ず毒なると云ふ大毒なれば何かは堪るべき、皆くたりて皆一同に斃

ね伏して血を吐き、前後を知らず苦しみける所を、枕元に立て掛けたる太刀を取り、片端より切殺しけり。起き上り立ち上らんとすれども、毒に當てられて蹌きて、都合一類大小三十六疋の猿、一同に殺し盡されたり。「二人の女房も同じ妖怪の類なるべし、諸共に打殺さん。」と云ふに二人ながら泣いて云ふやう、「我々は更に妖魅の類にあらず、一人は醍醐と云ふ所の並浦の某が娘、今一人は伏見の里に平田の某と云ふ者の娘にて侍る。思ひも寄らず恐ろしき者の爲に誑されて、深き穴に沈み惑ふ。迯けて歸るべき故郷の道も知らず、其の儘此處にて死なん事を求むれども叶はず、淺間しき畜生の使者となり、六十日許り此の方、夜となく晝となく、悲しき物思ひを致し侍り。昔今是等を殺し給ふ。我等二度人間に立ち歸り、戀しき父母に逢ひ參らせなば、これぞ大恩の主君なるべし。」と云ふ。又五郎已に妖怪を打殺しけれども、人間に立ち歸るべき道を知らず、如何すべきと案じ煩ふ所に、白き裝束に烏帽子著たる翁十餘人、何方よりか來るとも知らず現はれ出でたり。「これは爰に久しく住み侍りし者共なるを、近き頃より猿共に住家を奪はれ、食物財寶殘りなく押領せられ、身の佇みもなくなり、遙かの傍に住居して、妻子孫までも世の憂目を見る事、口惜しとは思ひながら、彼等に敵對すべき力なければ、時節を待ちて心を宥めし所に、君の是等を退治し給ふ。此の故に我等再び此の地の主となり、古の如く歸り住むべし、大恩何事かこれに勝るべき。」とて、手に〱黄金を包みて又五郎が

面にさし置く。其の形ち又人にはあらぬ曲者なり。目は丸く口は尖り、鬚と眉毛は垂りて長し。又五郎云ふやう、「汝等久しく此の地に住みて神通ありと見ゆ。何なれば猿に欺かれて住居を奪はれたる。抑汝等實は何者ぞ。爰をば何と云ふぞ」と尋ねしに、翁答へけるは、「我等は壽五百歳を保ちて一度變ず。彼等は八百歳を保ちて後に一度變ず。これ故に敵對する事叶はず。抑我等はこれ虚星の精靈として、大黒天神の使者たり。爰は鼠の住居として世に隱里と名づく。更に人間に向ひて害を爲さず、功を積み行を滿てて天上に飛び上り、仙境に出入して、自在神通の樂しみに誇る。然るを猿共集まりて年を重ねて惡行を爲し、人の娘を取りて己が心を慰め、物を害し禍を爲す、其の科顯はれて一類同じ所に亡びたり。天道已に君が手を借りて殺し給ふ者なり。天道の所爲にあらずは、君何として亡ぼし給はん。君暫く目を閉ぢ給へ、我等送りて人間に返し參らせん。」と云ふ。又五郎目を閉ぢければ、女二人と又五郎を後に舁き負ひ道を進めば、雨風荒く聲騷がしく聞えて、目を開くに一つの白き大鼠其の外十四五許りの鼠、大きさ猫の如し、地を掘り穴を穿ちて野原に出でたり。道行く人に、「爰は何處ぞ。」と問へば、「木幡山の麓なり。」と云ふ。二人の娘を親元に送り返せば、親大いに喜びて又五郎を兩家の聟となす。又五郎それより武門の望みを離れ、富裕安穩の身となりぬ。後に又木幡山の野外を尋ねみるに、歸り出でたる穴は跡もなく、松茅茂り叢閉ぢたるばかりなり。又五郎は後終に子もなく、

其の行方を知らず。

土佐國の狗神并金蠶

土佐國幡多と云ふ所には、其の土民累代傳にりて狗神と云ふ者を持ちたり。狗神持ちたる人若し他所に行きて、他人の小袖・財寶・道具、凡て何かにても、狗神の主それを欲しく思ひ望む心あれば、狗神彼の財寶道具の主につきて祟りを爲し、大熱に病ましめ惱ます事、或は胸腹を痛む事、甚だしく刀にて切るに似たり。此の病を受けては、彼の狗神の主を尋ね求めて、何にても其の欲しがる物を與ふれば、病癒ゆるなり。さもなければ久しく病み煩ひて、終には死すとなり。中頃の國守此の事を聞きて、幡多一郡の内を垣結ひ廻し、男女一人も殘さず、燒き殺し給ふ。それより狗神絶えたりしが、又此の里の一族殘りて、狗神これに傳はりて今もこれ有りと云ふ。其の狗神持ちたる主死する時は、家を繼ぐべき者に移るを、傍にある人は見ると云へり。大きさ米粒ほどの狗なり、白黒斑の色々あり、死する人の身を離れて、家を繼ぐ人の懷に飛び入ると云へり。狗神持ちたる人も自ら物憂き事に思へども力なき持病とかや。異國にも蠱術と云ふ所に依、蠱毒をおこする事多く、取扱ふと云へり。閩人に金蠶と云ふ蟲持ちたる人、これを他人に送り移す事あり、黄金と錦と[illegible]の類、其の外樣々

而後に廟を造りて其の左に葬て置く。これを結びて家に歸れば、金銀の箱移り渡ると云へり。其の後に鬼に
して後に黄金の棺し、人に取られざる様に、初めは二三ばかり、漸うに多くなり、家の内に取れぬ事
を貪りなう、うれ寝しても更に盡きず、積みたる黄金錦など悉く盡き果てて後に、病少しつつ癒ゆと
云へり。

生を易へて嫁る

昔越後國蒲原郡の里に、豐田某と云ふ者あり、未だ若くして父母に後れ、妻とてもなく獨り住みけり。其の家貧しかりしが、幼き時より耕作商賈の業をなさせず、元より其の職業ならねば、親族達こいと憐みて、田畑の作業に心を用ひ、常に勤むる所作として侍らしけり。ある日何心なく門に出でて見たりしに、容貌しかるべき女子一人門の前を過ぎて來る、年の程十六七と見え、色よく顏だちねたるにはあらねど、姿形は人に勝れて見ゆ。豐田走り出で袖を控へ、何處の者なれば、又何處へ行醜木からぬ事の、恋と佞言はじいたる時、鳥石にかゝる浪枕、結ぶる縁を思ひつゝ、我とても言はでらひわらひ給ふ。媛の云、明かに我のけおはば、名乗りさます、女は言ひ難けれ、歸らぬ。日暮れぬれば女又來れり。豐田、其の家に何處と娘に問ひしに、只だ笑ひに答へず、歸りて尋ねれば、一向に

常に褐色の衣に、蔦の唐草染めたる小袖なれば、褐子とも蔦子とも名をば呼び給へかし」とて打笑へば、豊田、扨は是れは由ある家に召使はるゝ女の、暮な／＼密かに出でゝ來るならん、此の事著し顯はれ侍らば、由々しき咎めも如何なるべしやと思ひて更にも尋ね詰めず、愈睦まじく、比翼連理の契り淺からず。或夜豊田酒に醉うて戯れていふやう「有の儘に其の住處を語り給はざらんには、心まだ打解けずとぞ思はん、我は斯くこそ思ひ侍れ」とて、

　手枕の上に亂るゝ朝寢髮下には人のこゝはとけずも

といひければ、女かぎりなく恨みたる氣色にて、斯くぞ返しける。

　手枕をかはすちぎりに下紐のとけずと君がむすぼほれつゝ

「今は何をか隱し侍らん、君と自らは古へよりよく知る事侍り、然らずば如何に斯く情深く契り侍らん。實は我は今の世の人にはあらず、君がため更に誑しまゐらする者にも侍らず、宿世の縁深き故ぞや。昔此の松浦の里に、大友左衛門佐某とて、由々しき武勇の大名坐しき。自らは竹島部の者にて、よく歌うたひ碁打つ事を得て、人更に自らに勝つ者無し。これ故に十七歳の頃召されて、左衛門佐殿に仕へ參らせ、朝な夕な側を離れず寵愛淺からず。其の時は君まだ其の家の小姓にて、近く召使はれ給ひしに、容貌麗はしかりければ、自ら思ひを懸け心を通はし侍り。斯くて自ら餘りに堪へ兼ね

つゝ、或日の暮方燈未だ取らざる暗紛れに、

よそながら目には懸れど雨雲の隔つる中にふるなみだかな

と書きて君が袂に投げ入れしかば、其の次の日の夕暮に君また、

よそにのみ嶺の白雲消えかへりたえずこゝろに降るなみだかな

と書きて自らが袖に投げ入れ給ひしより、年も同じ年所も同じ所に、人目を中の關守になして、互に心許りを思ひ通はせども、家の内外厳しき掟の辛さのみ恨みられて、契るべき便りもなし。後に傍輩の讒に此の志を顯はされて、左衛門殿に讒せられしかば、則ち大いに怒りて君と我と高手の縄をかけ、松浦川の端に引き出し首を刎ねられ侍りし。君は今已に又人間に生まれ給ひ、自らはそれより此の方、猶今までも冥途にあり。思ひ初めたる心の末、百餘年の後も朽ちず、空しき靈の現はれ來りて、わりなき契りを結ぶなり。昔を思へば今も悲しき憂目見たりける事の、いとゞ辛さは勝るぞや。」とて涙を流す事雨の如し。豐田此の事を聞くに、又悲しさ限りなし。「されば今これを聞くに、誠に二世の縁なれば、益わりなく語らひて昔の思ひをはらさん。誰をか忍びて暮にこし朝に歸らん、只これに住みて諸共に夫婦とならん。」とて、豐田が家に留めて猶睦ましき仲らひなり。幽靈とは見ながら、宿世の縁わりなくて、露恐ろしとも思ひ侍らず。豐田は更に碁打つ事知らざりしに、女悉く其の秘妙

を教へしかば、此の頃近邊に名を得し者、豐田に並びて敵する人なし。なつれ人は左衞門佐の事を語る、目前今見るやうに覺えたり。「左衞門佐ある時友どちを召しつれて、川の邊に遊びし所に、其はしき男二人きらびやかに出立ち、川の向ひを遙かに行き過ぐる。女房達の中に一人云ふやう、「男たちばこれ程美はしきなぞ、我が思ふ人とも思はまし物を」と云ふ。左衞門佐聞きて、「此の男の妻と成らまほしきか」と云ふ。其の女房打笑ひ顏赤めて物も云はず。暫くありて若しき櫛に着飾ひして女房達の中に出す「是れ先の男の許に遣はすべき祝ひの物見よ」とあり。開きて見れば男を慕ひし女房の首打切つて見せ侍り。女房達手足顫ひ目眩みて、絶え入りけるも多かりし。又ある時鹽燒く浦に俺せて私には侍らせず、我が領分の鹽を皆下直に買ひ取り、京方の商人に賣りけるを、何者かしたりけん左衞門佐の門に落書しける、

きなきだに辛きおきみを左衞門が國の鹽やきにがりはてけり

左衞門これを聞きて、いかさまにも鹽燒どもの所爲なるべしとて、鹽燒百三十人を捕へて濱表に礫に懸けたり。又年毎の春になれば錢米を出し、國中の民百姓に貸し渡し、身上宜しき者には殊更に多く貸して、秋に至りて大分の利を掛けて、元に添へて取り返す。若し返すべき力なき者は、其の所の有德人にかけて辨へさせ、或は妻子を他所に賣り遣はし、資財家屋敷みなに却せしめ、年々に重り取り

もぞ取る故に、満中大いに褒美に及べり。何者か詠みたりけん、

無理にかすむ利銭の本の数よりも零す涙はいとゞおほにも

左衛門佐これを聞きて、賤しき百姓共は、これ程の事もよも列ねまじ、有徳人等の所為にこそとて、城下に住みける有徳人十餘人闕所して追ひ出し、其の財寶を皆奪ひ取りぬ。ある時左衛門佐、父の年忌に當り、國中の僧を集めて齋を行ひしに、一人の僧遠く来れり。破れたる袈裟を着て、衣甚だ古し。諸人賤めて與にも坐せず、門の傍に据ゑて齋を食はせければ、齋終りて其の鉢を階の上に覆けて、彼の僧は去りけり。跡にて鉢を取り上げんとするに少しも動かず。諸人奇特の事に思ひて、集まりてえいやえいと引き動かせども、泰山の如くに重くして上らず。左衛門佐に斯くと云ふに、自ら行きてこれを上げられしかば、輕く上り、其の下に歌一首あり、

花ちりて梢につけるくだものの今養があらで落ちむとすらむ

我人につらき報をおほ友の家の風こそ吹きよわりけれ

左衛門佐これを見るに驚く心もなく、いよいよ國民を責め、人を殺す事草を薙ぐかとも思はず。悪く悪行を盡せしかば、それより二年を待たずして兵來り、身を亡し家を亡しぬ。何事も皆天道より定まる事にてはあれども、法に過ぎたる罪を犯せば、禍必ず近く來る。然れば自ら背の志に叛か

れて、今かく契りを爲し侍り、今より一年にして、迷途の暇既に極まるべし。」と語りしが、月日程なくくれ羽鳥、あやなく過ぐる光陰、早一年になりにけり。女心地煩ひければ、醫師を頼み藥を與ふれども飲まずして、豐田が手を取りて、「昔の語らひ君と縁深く、夫婦の情は爰にして盡き侍り。自ら幽冥陰氣の形を現はし、君に契り參らせ、いとほしみの恩を受けたり。思へば昔一念の愛執を起して思はざる外の禍に陥りたり。假令汝は干潟となり岩は湯に沸くとも、此の恨みは更に消し難し、天傾き地崩るとも此の情は忘れじ。今已に宿世の好みを續けて後の世の縁を契る、これより我は黄泉に歸るべし。往古殺されてより百餘年、此の度重ねて契る事一年、久しくして又逢ひ奉れり。思ひの雲は晴れ行きたり、更に戀ひ悲しみ給ふな。」とて打啼きけるを、豐田は涙の中より「今暫し留まり給へ、飽かぬ別れに後れて、殘る身を如何とか思ひ置き給はん。」と云へば、女泣く／＼、

名ごりをも惜しまでいそぐ心こそ別れにまさるつらさなりけれ

と詠じて壁に向うて臥しけるを、如何に／＼と呼べども／＼、はや緖切れ果てて、空しき骸のみ牀に殘れり。豐田悶え焦れ、泣き悲しめども甲斐なし。牀に空しき衣を取りて、

移り香になにしみにけむ小夜衣忘れぬつまと思ひしものを

さて棺に納め野邊に送らんとするに、棺甚だ輕かりければ開きて見るに、たゞ衣のみ殘りて尸はな

し。空しき棺を寺に埋め、佛事營み懇に跡弔ひ、二度妻を求めず、出家して四國九國を巡り、それより唐土の商人舟に便船して入唐しつゝ、其の終ふる所を知らず。

七歩蛇の妖

京の東山の西の麓、岡崎より南の方、古、岡崎中納言の山莊あり、ひさしく荒れ果てて住む人もなく、草のみ生ひ茂りて茫々たる地なりけるを、浦井某此の地を買ひ求めて家を作る。或人云ふやう、「此の地は本より妖蛇の怪ありて、人更に住む事叶はず」と云ふ。浦井これを信ぜず家建て畢りければ、始めて移り入りたりければ、蛇の三四尺許りなる五つ六つ出でて、天井の間に這ひ廻る。則ち下部に仰せて取り捨てんとするに、此の蛇共鱗立ち頭を竦て、眼きらめきければ、僕共凄まじく思ひて退く。浦井大いに怪しみて杖を取り突き落し、桶に入れて賀茂川に流す。次の日又蛇十四五出でたり、又皆取り捨てければ、其の次の日は三十餘出でたり。取り捨つるに隨ひて益多く出でて、後には二三百に及ぶ。其の大きさ五七尺餘り白き黒き或は斑なる兩の耳聳ち、口は紅の如く、まゝ又足ある蛇、其の形龍の如くなる物、日毎に倍々して、取れども捨つれども更に絶ゆる事なし。浦井不思議の事に思ひ自ら香を焚き幣を立てて地祭を致す。「某此の地を求め、金若干兩を出して買ひ得た

り、これより北の地は某が住むべき所なり、蛇何に因りて障りを爲し怪を現はすや。凡そ地の神には五帝龍王あり、其の司る所各職あり、爭でか其の地に在りて濫りに地の主を害しましむる。龍王物知る事あらず、此の蛇の棲處を逃れ、迷ひ給へ、然らずば神職の不敏ならん、然らば天帝の戒め免るるに道あるべからず。」と書きて讀み上げたり。其の夜池の底に物の騒ぐ音して凄まじき事限りなし。夜明けて見れば、叢悉く一夜の内に枯れ果てて、大きなる石ありて碎け傾きたり。家人等怪しみて青草の枯れ止り、石の傾きたる所を掘り返し、石を取り退けしかば、長さ四五寸許りの蛇走り出でて行く。其の行く所の青草目の前に枯れ焦るゝ。家人等追ひ詰めて打殺しければ、蛇の長さ僅かに四寸、色は紅の如く兩の耳四つの足あり、鱗の間は金色にして小龍の形に似たり。人に見するに、一更にかかる蛇は聞き及ばず。」と云ふに、南禪寺の僧來りて曰く「是れは七歩蛇と名づく、若し人これにさゝるれば其の儘死す、毒力烈しくて七足歩む。此の事は佛經に見えたり。」とぞ語られける。これより後は蛇再び來らず。案ずるに多く湧き出でたる蛇共は、これ七歩蛇の精なるべしと云へり。

魂魄け吟ふ

河内國弓削と云ふ所に、友勝と云ひし鍛冶の侍り。用の事ありて、大和の郡山に行きて、日暮方に立ち

歸りしに、餘りに草臥れ侍りしまゝ、山の傍に休み居たり。斯かる所へある人馬に乘りて、又一疋の馬には鞍置きながら、追ひ立て打過ぐる。友勝云ふやう、「これは河内の方へおはするやらん、さもあらば御馬一疋借し給へ、殊の外に道に勞れ侍り。とても乘る人もなき馬なれば、我を乘せて給びてんや」と云へば馬の主、「それこそいと易き事なれ、川の向ひの岸にて下りて給はらんには、それまでは乘り給へ」と云ふに、友勝大いに喜び打乘りて行く。川をば乘り渡して、岸に著き馬より下り、「御情の程喜び奉る。」と云ひて馬を返しければ、馬主鞭打ち追ひ立て、行方なく歸りぬ。友勝は日已に暮れて後に、家に立ち歸りて見れば、妻の女房も子供其の外兄弟一族悉く集まり、膳を調へ食を設け、樣々歡待し遊び居たり。友勝歸りしかども人々見向きもせず。友勝我が子供の名を呼び、我が弟妹の名を呼べども耳にも聞き入れず、物語し酒飲み、たゞさむこと故の如し。友勝大きに腹立て、大聲を揚げどよみ呼はれども、更に知る人なし。餘りに腹を立て拳を握りて妻子を打擲すれども、それかと思ひたる色もなく、「友勝内に坐したらば、彌賑やかに侍りなんものを。」など云ひて酒飲みければ、友勝思ふやう、「扨は我等忽ちに空しくなりて、魂計り宅に歸り、妻子も一族も我をば見ざるらんと、涙を流して只泣きに泣きけれども、彌見る人もなかりければ、詮方なく家を出でて、村の外れに出でつつ立ち休みければ、さしも氣高き人、黑の馬に召され冠を戴き、紫の直衣に紋の指貫著し給ひ、人

許多く召し連れ、鞭を以て友勝を指して宣はく、「あれは未だ死ぬまじき者の魂なり、思はざる外の事に吟ひ歩く者かな。」と宣ふ。爰に赤き装束に烏帽子著たる人來りて、「弓削友勝は未だ定業來らざる者なるを、大和川の水神現はれ出でたるに馬を借りたり。水神戯れて魂を引き出し侍り。只今本の身に返し納むべき爲に、我これまで參りたり。」とて馬の前に跪きけり。貴人少し笑ひ給ひ、「水神實に道理もなき事に、人の命を誑して、己が戯れとする事こそ安からね、明日必ず罪罰行ふべし。」と宣ふに、此の者恐れたる氣色にて、急ぎ立ち寄りて友勝を招きて云ふやう、「馬上の貴人はこれ聖徳太子なり、常に科長の陵より出でて國中を巡り、惡神を治め惡鬼を戒め人民を護り給へり。我は是れ水神の眷族として爰に來れり、汝を一度人間に返すべし、暫く目を閉げ。」とて、後に廻り推すと覺えて、大和川の西の岸に、夢の覺めたる如くにして甦り、起き上りて家に歸りければ、妻子は待ち受けて大きに喜び、「今日は一門集まりて遊び侍り、如何に夜更けては歸り給ふぞ。」と云ふ。友勝聞きて、「我はかう／＼の事ありけり。」と語るに、皆人聞きて驚き怪しみ侍り。

魚膾の怪

大島藤五郎盛貞と云ふ者、應仁の頃牢浪して、能登國珠洲の御崎に居住して時を待ちけり。其の性

常に生魚の膾をこのみ、是れなき日は食進まず。人に語りけるやう、「浮世にありて山海の珍味多しと雖も、膾の味に過ぎたる物なし、終に又腹に飽かすこと」と云ひしが、或日若き友達五六人入り來り、濱邊に誘ひ出でて遊びしに、風もなく浪靜かなりければ、浦人出で網を曳くに、種々の魚多く漁り得て岸に漕ぎ歸る。大島是れを見て、いざ買ひ取りて膾作り料理調へ、今日の思出にせんとて五籠六籠買ひ取り、浦人の家に立ち寄り料理の具借り寄せ、濱表に筵敷き膾作り、大きなる桶と鉢とに堆く入れて、其の外魚ども種々に調へ、五六人並み居て飯食ひけるに、大島箸を取り膾を食ふ事一鉢許り、忽ちに喉に物の障る樣に覺えしかば、喝して吐き出して見れば、大きさ豆許りなる骨なり。其の色薄色に赤して珠の如し。茶椀の中に入れて、皿を以て蓋とし傍に打置き、又箸を取りて膾を食せるに、未だ座中食し終らざるに、彼の茶椀打倒れ、蓋も共に轉びけるを見れば、中に入れ置きたる骨の珠一寸許りになり、人の形と化して動き立ちたり。五六人の友達驚き怪しみ、目を澄まして見ゐたれば、目の前に俄に五尺許りの男となり、赤裸にして大島藤五郎に取り懸る。大島側なる太刀を拔き持ちて切り付くれば、電の如く閃き、蜻蛉の如く飛び廻り、隙間を狙ひ拳を握り、大島が首を礑と撲つ。又暫し戰うては、背を丁と撲つに、血流れて砂を染めたり。大島終に太刀を打ち入れて礑と切り付けしかば、胸首切り落され、搔き消すやうに失せたり。人々助太刀せんと寄りけれども、雲霧閉がりて

見え分かず、戰ふ音のみ聞えて、霧已に霽れて後、大島は朱になりつゝ、一人々これ見給へ敵の腕首切り落したり、妖怪は行方なく失せ侍り。」と云ふを見れば、大いなる魚の鰭を切り落したるなり。大島其の儘絶入したりけるを、樣々藥を與へしかば生き出でたりしかども、人心地もなく夢中の如くなりしが、疵癒えて後漸く元の如く性念つきたり。さて其の時の事を問ふに、露ばかりも覺えずと云ふ。當座に語りけるにぞ仔細は聞えし。これ魚の精現はれ集まりて、此の怪異ありけるにこそ。

伽婢子卷之十一 終

伽婢子　巻之十二

早梅花の妖精

信州伊奈郡關昌寺の早梅花は、名に負ふ類なき名木にて、未だ冬至の前後より咲き初めて、清香四方に薫ず。近郷隣村の人、心ある輩は日毎に集まり見る。元より信州は陰氣勝にして寒國なり、冬は雪深く消えぬが上に又降り積み、嵐烈しく吹き荒びて、なべての草木はいとゞ遲く萌え出づるに、此の寺の早梅花は、實にも花の兄として、清寒に堪へて綻び出でつゝ更に其の時を違へず、誰か誠に賞せざらん。其の頃村上頼平の家人瀬川文次と云ふ者、心様情深く、武を學ぶ暇には敷島の道を慕ひ、斯かる軍陣の間にも陣所の風景面白き處にては、一首を綴りて思ひを述べ、諸軍の興を催させけり。優しき男子なりければ、人更に惡しくも思はず。其の頃甲州の武田信玄の村上、兩家爭ひを起し陣を張り戰ひを挑む。或時出陣の序、關昌寺の梅今を盛りと聞えしかば、文次夕暮方、中間一人具して陣中を忍び出でて、彼の寺に浮れ行きつゝ、香を尋ねて花に嘯き、南枝向レ暖北枝寒、一種春風有二兩般一と云ふ古詩を吟じける。月已に山の端に昇り、花に映じて得ならず覺えければ、

　ひゞき行く鐘の聲さへ匂ふらむ梅さく寺の入あひの空

と打詠じ居る所に、此の邊には思ひかけず見馴れもせぬ女性一人、女の童一人具して出で來れり。年の頃二十許りと見ゆ、白きこうちぎに紅梅の下重、匂ひ世の常ならず月に映じ、花に向ひて、

　ながむればしらぬ昔の香ひまでおもかげ殘る庭の梅が枝

と詠みて少時休らひ居たり。文次これを聞くに、怪しみながら堪へかね、近く立ち寄りて袖を引きつつ、「今宵の月に光を爭ふは庭の梅のみか、君が姿と袖の薫も、同じ心に覺え侍り」なんど戲るれば、女さしも驚きたる色なく、「梅が香に誘はれ月に嘯く此の夕暮に、優しき人に逢ひ奉ることこそ嬉しけれ。」とて、しめやかに歡待しける氣配、此の世の人とも覺えず。文次則ち中間に仰せて、酒賣る家を尋ねさせ酒買ひ求め、御堂の軒に坐して數杯を傾け、醉ひに和して語らひ寄りつゝ、

　袖の上に落ちて匂へる梅の花枕に消ゆる夢かとぞ思ふ

と云ひければ女返し、

　しきたへの手枕の野の梅ならばねての朝けの袖ににほはむ

と詠みて互にわりなく契りけるが、數杯を傾けし醉ひに臥して夜已に明方になり、東の空横雲數棚びきければ、夢驚き眠りさめて起上りしに、文次只獨り梅の木の本に臥して、女も女の童も何地行きけん

とも知らず、明け渡る空に鶯の鳴く聲許り、月は西に落ちて名殘は我が身に止まれり。昔唐土の崔護と云ふ人、或所の門の内に、桃の花盛りに咲きけるを見たりしに、女一人來りて、諸共に酒のみ歌唄ひしを、「又來る春も爰にて逢はん。」と契りしが、次の年の春其所に行きけるに、女更に見えざりしかば門の戸の扉に、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不レ知何處去、桃花仍レ舊笑二春風一と云ふ詩を題して書き付けたりとかや。夫れは唐土の例是れは此の國の事なり、又後を如何にとか契らん、人ならば又巡りも逢ふべきに、これは疑ひもなく、庭の梅花の妖精なるべしと、袂に殘る移り香の、宛ら梅花の薫に違はぬぞ奇特なる。斯くて陣屋に歸りても、猶其の面影の忘れ難く、夕暮になれば漫に戀しく、涙の絶ゆる隙なし。

梅の花にほふ袂のいかなれば夕ぐれごとに春雨のふる

物味氣なく、世に住む甲斐も有明の、盡きせぬ思ひに腸折れて、こりつむ柴の歎きせんよりはとて、其の次の日討死しけり。

幽靈書を父母に遣はす

江州東坂本に、正木某が娘龍子は、幼くして才智あり、親素より有徳なりければ、慈しみ育て、

歌書紙の道を教へたるに、いつしか容貌美しく、心ざま情深し。其の鄰に蘆崎某が子に、數馬と云ふ者は龍子と同じ年にて、幼き時は一つ所に遊びけるを、時の人皆戯れて「此の同じ年なる子は後必ず夫婦となすべし」と云ふを、幼き心に誠に思ひ定めて、此の人ならでは、と許しけり。年長けければ出でゝ遊ぶ事もなし。數馬は垣に寄せて見となし、龍子は窓の下に隱れ住みけり。數馬或時家に歸りつゝ、歌を書きて遣はす、

人しれず結び交せし若草の花は見ながら盛りすぐらむ

しるらめや宿の梢を吹きかはす風にかけつゝ通ふこゝろを

龍子是れを見るに、限りなく嬉しと思ふ中に、又思ひくづをれつゝ、返しと覺しくて、

月日のみ流れゆく／＼淀川のよどみ果てたる中の逢ふ瀬に

今はかく絶えにしまゝの浦に生ふるみるめをさへに波ぞたゞよふ

年十七になりしかば、親然るべき人を壻にせんと語らひけるを、龍子更に肯はず、湯水をだに斷ちて泣き臥したるを、密かに問はせたりければ、「西鄰の數馬に約束しける事あり。これに往かずば死すべし、他所には更に行くべからず」と云ふ。親此の上はとて鄰に媒を入れ、かう／＼と云はせしかども、正木は有德にて蘆崎は貧しければ、數馬容貌美はしく、美男にして才智ありとは雖も、如何で其の

縁を結ぶの相待ならん。」とて紐履辞しけれども、一娘の思惑けたる所なり、又それ有徳なるを以て縁を結ばゞ、金銀財寶を婿にするなり。婚姻に財寶を論ずるは、夷虜の夷の道なりと云へり。我等更に財寶を婿には取らず、數馬が人柄才智利根なるを以て、婿にせんと云ふ事なり」とて強ひて吉日を定め、其の營みは娘の方より整へ、其の日に至りて迎へ遣はしければ、心の儘に夫婦となり、忍ぶべき關守もなく、嬉しさ限りなし。龍子、

稀に逢ふ閨の窓にさし入る月かげを諸共に見る夜半ぞうれしき

と云ひければ、數馬、

夜な／＼はかこちて過ぎし窓もとにともにながむる有明の月

往昔の契り淺からざる事、比翼の鳥の空に飛び、連理の枝の地に結びたるも、譬へとするにたらず、纔かに半年許りの後に、織田信長江州に打出で、山門此の時に楯をつきしを、元龜二年九月十二日、叡山日吉山王に至るまで皆燒き亡ぼさる。此れ故に坂本の民屋まで亂暴騷動して、四角八方に皆散り散りになりたり。龍子は信長の家臣佐久間右衛門尉信盛が手に捕物となりて、初めは行方を知らず、後に淺井朝倉亡びて江州靜かになり、人民己々が故郷に歸り住みて暫く安堵したり。數馬は妻の龍子が行方を尋ねんとて、父母に別れを取り、若し廻り逢はずば、二たび家に歸るべからずと誓ひを起

し、比叡辻に出でたれば、人の云ふやう「正木が娘龍子は、佐久間に捕はれて陣中にあり」と聞きて河内國高屋の城に赴きしかば、交野の城落ちて江州小谷に行きたりと云ふ。また江州に行きしかば京都にありと聞ゆ。方々其の所定まらず。此處彼處に馳せ向ひ、終に天正八年正月に聞きけるやう、「佐久間は大坂門跡の籠城につき、天王寺の陣に屯し、七个國の軍勢を從へ居たり」と云ふ。是れより攝州大坂に下り天王寺の陣に赴きしかば、年月重なり諸國を尋ね巡りしかば、衣は破れて鶴の氅の如く、容面變りして色黑く瘦せ勞れ、野に泊り草に臥し露に宿かる袖の上、涙は更に置き爭ふ。已に天王寺の陣に行きければ、軍兵峙ち番手嚴しく、數馬恐ろしながら立ち休らひ、隙を窺ひて問はんとす。番の足輕共怪しみて「是れはいかさま敵の謀を以て、陣中の有樣見せに遣はしぬらん。其の儀ならば一足も逃すな、搦め捕りて首を刎ね、見せしめの爲札を副へて阿部野に曝せや。」とて我も我もと走り出で、打ち伏せ押し倒して高手小手に縛め、大將佐久間に此の由いひ入れたり。佐久間聞きて「囚人此の方へ連れて來れ、仔細を尋ねて後に兎も角も計らふべし。」とて本陣に召しよせ、信盛出で向うて「汝は大坂籠城の者か、如何なる仔細に因りて此の陣に來り窺ひける。有の儘に白狀せずば、水火の責に掛くべし」と云はれたり。數馬少しも恐れたる色なく「只今此の大事に及びて陳べ申し兼ねあるにはあらず、ゆめ〳〵敵方より來りて此の陣中を窺ふ者にはあらず。是れは江州東坂本の

土民、蘆崎某が子數馬と云ふ者なり。叡山喪亂の砌一族悉く八方に別れ散りて行方なく、此の程漸く國中靜かになり、地下の土民歸り住みて安堵せし所に、我が妹龍子一人歸り來らず、人に問へば君の陣中にありと云ふ。それより諸方に尋ね巡り、只今爰に來り侍り。願はくは一目逢はせてたび給へかし。然らば死すと云ふとも、何をか恨みはべらん。」とて、涙をはら〳〵と流す。さて年は幾つ許りと問へば、「其の時は十七歲、それより九年を經たれば二十六歲になり侍り。」と云ふ。扨はとて陣中の女房共を尋ねしかば、年も名も國も同じく、數馬が云ふに變らぬ女あり。歌よく詠み手書き智慧利根なりければ、信盛これを寵愛して置きたり。疑ふ所なくそれなりとて罪を解き赦し、帳場に呼び入れて龍子に逢はせしかば、龍子も我が兄なりと云ひて數馬に對面し、一目見るより、「あれはそれか。」と云ひも果てず涙を流し、泣くより外の事なし。信盛曰く、「久しく諸方を尋ね巡り、關を越え咎めを凌ぎ、さこそ佗しく心勞れ力衰へぬらん、此の陣中にして暫く休息せよ。」とて、新しき小袖一重出し小屋の内に置きて旅の勞れを休めらる。次の日信盛云ひけるは、「汝が妹よく雙紙を讀み歌をも綴る、汝も定めて手書き物讀むか。」と。數馬答へて、「某幼より山門にのぼり、佛經外典怠りなく學び、詩文の片端宜しからねども作りはべり。手も亦をかしけながら、凡ての人には劣り侍らじ。」と云ふ。信盛大いに喜び、「我幼時より武藝に心を寄せ、諸方の陣中に日を送り、學文手跡の事は手にも取らず、

此れ故に今諸方の書簡、又は一篇の詩歌を贈られても、更に和謌返歌の事に及ばず、手の郎從の中にも是れなし。今幸ひに汝其の道を得たり、我が陣中に居て其の事の職勤めて得させよ」と云ふ。數馬嬉しくて、とも角も仰せに随ひ奉らん」とて早二百貫の知行につけられ、上を受け下に傳へ、書簡飛札皆信盛が心の如く調へたり。軍中の諸兵何れも、重き人に思ひ傅きて、侮らはしき色なし。されども數馬は是れを嬉しとも思はず、妻が行方を尋ね求むる爲にこそ、身をも省みず命をも惜しまず、是れまでも來りけれ、一度逢ひ見て後は重ねて見る事も叶はず、内外隔たりて互に心許りを思ひ通はし、忍びの涙を袖に包みながら、月を越ゆる程に、卯月の衣更になりければ、垢付きたる小袖を脱ぎて、人を頼みて妹に遣はすと云はせ、歌一首書きて衣裏元に包み入れたり。

　色見えぬこれや忍ぶのすり衣思ひみだるゝ袖の白露

龍子是れを取つて、衣裏の綻びを廣げしかば歌あり、大いに悲しくて、聲ある忍びの涙押へ難く、返しと覺しくて小紙に書きつけ、夏の帷子遣はすと云うて、衣裏元に縫ひ合せて遣りける。

　いかにして行きて亂れむ陸奥の思ひしのぶの衣へにけり

數馬此の返しを見るに、胸悶え心消えて思ひ歎きしが、其の積りにや重き病に沈み、今を限りと聞えしかば、龍子は佐久間に申して、「兄の病重くして今は限りと聞き侍り、願はくは此の世の名残に、今

一度見參らせばやとて泣きければ、許し侍り。急ぎ小屋の中に行きたりければ、前後辨へず吟臥したり。龍子枕元に立ち寄り、如何に自らこそ只今爰に參りて侍れと云ふに、數馬むくと起き上り、龍子が手を執り太息つきたるに、涙は雨の目に餘り、袂に流れ掛りつゝ、物をも得言はで口許り動くやうにて、其の儘絶え入りて空しくなる。佐久間哀れがりて、天王寺の後の山下に送り埋め、廟を營ひて弔はせけり。龍子は泣く泣く我が住む方に歸り、湯水をだに聞きいれず、引被きて臥しけるが、其の夜より心地惱みて藥をも飲まず、たゞ泣きつゝ、空に向ひ地に伏して太息のみつきて、次の日の暮方佐久間に云ひけるは「自ら家を離れ君に隨ひ參らせ、年を重ねて他國を廻り、親しき者とては一人もなかりしに、只兒のみ一人儲け來て、是れさへ空しくなり侍り。此の悲しさは生れ代へても忘れ難く侍れば、今は命も惜まれず、自ら死なば兒の側に埋めてたべ、黄泉の下にして、せめて同じ所に遊び逢ひ、年月の憂さ辛さ、語り慰むこともがなと、他國に吟ふ便りを求めんとて、其の息絶えて空しく成りたり。佐久間は世に痛はしく思ひて、其の志し望みたるに違はず、數馬が塚の右に並べて埋めつゝ、龍子が菩提をも寺に送り遣はし、跡よく弔ひけり。同じき六月に大坂門跡の籠城、扱ひになりて開け退きければ、佐久間も天王寺の陣を拂ひて歸りしかば、今はすこし物靜かに成り行くかと覺えしに、龍子が江州の家に久しく召使はれし下人彌五郎、商人と成りて世を渡る業とし、大坂よ

り和泉の堺に行くとて、天王寺邊を打過ぎければ、東の山際に新しく建てたる家あり。數馬と龍子と門より作れ立ち出でて、「如何に彌五郎にてはなきか、道の便りに立ち寄れかし、故郷の事もゆかしきに。」とて呼び掛けたり。彌五郎立ち戻り手を拍ちて、「故郷には數馬殿の御父母は、疾く空しく成らせ給ひ、其の跡は弟にて坐する權七殿こそ繼がせ給へ。龍子君の二人の御親は恙なくて、只御人の行方を聞かまほしく、朝々は泣き藻れて神佛に祈り給ふに、などやとく／＼歸り給はぬ。」と語る。龍子、「さればとよ、「故郷の床しさ云ふ計りなりければ、世に仕ふる身は心の儘ならねば其れも叶はず。」と云ふ。彌五郎は、「急ぐ事のありて早く歸るべきに、文一つ遣はし給へ。」と云へば、「まづ今宵は爰に留まりてよとて、酒進め物食はせ抔して、夜もすがら物語しつゝ、はや明方になりければ、彌五郎は旅立ち空に出でて歸る。龍子文細々と書きて渡しぬ。坂本に歸りて正木夫婦に文をまゐらせ、かう／＼と語りしかば、親限りなく喜び、急ぎ文を開きて見れば、文の言葉文字のくさり手の書き流したる、疑ふ處もなき娘の文なり。其の言葉には、久しく年へて、たま／＼彌五郎見え來り、故郷の事聞くにつけて嬉しきが中に、戀しさ遣る方もなく侍り。朝な夕な其の方の空に棚く雲霞も、思ひを起す媒となり、秋來る鴈金も、便りの文は傳へぬかと侘びられ、漫に落つる涙の袖今は皆朽ち果てて、彌五郎に見えし嬉しさを、何に包まんとのみ思ほゆ。我が身は父の生みて母の育てける、深き惠みは海も

数ならず、高き慈しみは山ものかはと、夫に誘ひ妻從ふは、女の身の習ひ人の世の定めなり、往日は山崩れ麓傾き、日の色は煙に蔽はれ、湖水の波は焔に燃ゆ、身を歎き命を逃れんとて、親しきがゆき別れ、塵の如く飛び霰の如く別れて、皆散り／＼になり、互に行先知り難し、自らは佐久間とかや恐ろしき武士に捕へられ、或時は交野の陣に肝を消し、或時は中島の軍に胸を冷し、國の數々從ひ巡り、涙にのみ浮き沈みし、恨みを心に隠し怖れを身に受けて、春の月朧に秋の風凄まじく、寝られぬ枕の上には、夜の衣を反せども、夢をだに結ばず、時移り事去りて我を尋ぬる人に逢へりつ。さらに春を尋ぬるの遅き恨みはなしに、門の前の柳風に折られて二たび枝出でつゝ、断ちたる縁重ねて繋ぎければ、父君の賜物ありて、仕ふる道にさち歸るべき私を忘れ、日重なり月過ぎて今日になりぬ。昔つれ絶えたる不興の咎め、恩を忘るゝに似たる事なれば、枉げて免じ給へなど書きて、奥に

　田鶴のゐるあしべの潮のいや増すに袖ほすひまもなく／＼ぞふる

二人の親是れを見て、「其の頃別れてより便りの傳手をだに聞かず、今は世に亡き人の數にや入りぬらんと、心もとなく悲しと思ひ暮せしに、生きてありとだに聞けば、實に日頃祈り申せし神佛の利生ごや」とて嬉し泣きに泣きけり。父のいふやう、「急ぎ爰に迎へて年頃の歎きをも慰め、見えもし見もせん」とて彌左郎に案内させて、急ぎ天王寺に赴きしに、棟門建ちたる家ありと覺えし所には、只草茫

茫と生ひ茂り狐馳せ迴り、道もなき山の麓に塚二つ並びてあり。此處彼處見廻らせども、それかと覺しき家はなし、一町餘りの西に寺あり。爰に行きて僧に尋ねしかば、「其の塚は佐久間信盛の陣中より葬禮したる、蘆垣數馬・黒木氏龍子兄弟の塚なり、又其の邊に、人の住むべき家はなき物を。」と云ふ。父驚き娘の文を取り出して見れば、文字もなく墨もつかぬ白紙にてぞ有りける。父悲しさの餘り塚の本に打倒れ、人目も恥ぢず聲をはかりに泣き居たり。「我遙々と是れまで來たる事も、一目逢はんと思ふにぞ、いかに此の塚に埋もれて、跡を隱しけることこそ悲しけれ、老いたる父が心を知らば、姿を見見えて此の物思ひを慰めよかし。」とて、其の夜はそこに留まりしに、半夜許りに夢ともなく、數馬と龍子と現はれ出でて、涙を流しつゝ、「その昔の事ども語り、跡よく弔ひて給へ。」と云ふ。父夢心地に、「我爰に來たる事は、迎へて故鄕に歸らんためなり。よしさらば空しき尸なりとも、伴れて故鄕に歸りなん」と云ふに、「否とよ、此の地に埋もるゝも地府の定めあり。又物靜かにして住むに宜し、故鄕に移し歸されんには、苦しみ重なる事侍り。埋めし塚をば二度餘所に移さぬ物ぞや、地府の定めし御誡め其の亡者に當りて、苦しみを受くるなり。只此の儘置きて弔ひ給へ。」とて、父に取りつき泣きけるよと覺えて夢はさめたり。泣く〳〵僧を雇ひて塚の前にして、供物を備へ經讀みつゝ、跡よく弔ひ、涙と諸共に立ち別れて、坂本の故鄕に立ち歸りし父が心、見る人聞く人皆憐れがりて涙をながす。坂本に

歸りても思ひの積りにや、夫婦の親幾程なくて身まかりぬ。

厚狹應報

陶尾張守晴賢は、大内義隆の家老として、不義を企て主君義隆を追ひ出し、自ら山口の城に居て分國を押領す。其の威漸く強くして大宦職を從ひ、今は世の中恐るゝに足らずとぞ思ひける。周防長門の諸將諸侍、皆陶を伏せ靡き從ひて、從ひつくこと云ふ許りなし。其の中に周防國には吉敷大島、長門國には美禰見島の諸侍等、初めは從はざりけるを、今は時世に任すんぞとて、忠義もとても詮なが身を安くしたる、無用の忠義に身を狹められんより、只降參せよとて皆陶に降參す。其の中に、長門國の住人厚狹彈正忠といふ者は、往古義隆に恩を蒙れり、一旦は降參すと雖も、是れは當座の形を繕ふ謀なるべし、と讒する者ありて、陶げにもと思ひ厚狹を搦め捕へて、頭を取て柱に縛りつけ、四方に焼火を起し火炙にして陶出でゝ是れを見る。厚狹甚だ苦しみ大きに聲をあげ、「我已に降參す、何の罪に依つて斯く苦き目見する。死して後も物知る事あらば、此の報いなからんや」とて焦爛れて死す。陶打笑ひて「犬侍の厚狹めで惑ぬよ」と云ふ秀句して、其の尸を野に棄てたり。半年ばかりの後、常に陶が座の右に厚狹來りて見ゆ。陶いさゝか惡み嫌ひしが、安藝國宮島の軍に、毛利家の爲にうち敗

られたり。其の時厚狹甲冑を帶びて、鹿毛の馬に乘り眞先にすゝみ、陶を馬より突き落せしと、近き軍兵共は目前見たり、是れより陶終に合戰に利なくして、敗潰したりとかや。

白石右衛門尉姦謀の事

白石掃部正は、鎌倉の上杉家に仕へて足輕大將たり。其の子右衛門尉は年已に二十三、父に隨ひて同じく奉公を勤めんとす、より〳〵言上して、已に目見えせん事を定めらる。其の借りたる家に娘あり、年十七八、眉目甚だ美はしかりければ、右衛門尉心を懸けて樣々繕へども、家の主淫なる事をば嚴しく嫌ひて、夜とても物音少し聞ゆれば、咎め怪しみて用心せしかば、遂に逢ふ事叶はず。右衛門尉只この女に惑ひて、奉公の志傍になり、兎角透間を窺ひし處に、明日は上杉家の御目見えとて、親も嬉しく取り賄ふ。其の夜しも家の主、一族の中に急用ありとて出で行きつゝ、夜一夜歸らず。右衛門尉好き隙ぞと思ひ、密かに娘の部屋に忍びて志を遂げ、喜びに餘りけり。かくて我が臥戶に歸り、微睡みければ、青き狩衣に烏帽子著たる男一人走り來りて、一紙の折紙を捧げ、「明日必ず一千石の俸祿に預るべし。」と云ふ所に、赤き裝束に立烏帽子著けたる男一人、跡より走り來り、大いに怒りたる氣色にて彼の折紙を奪ひ取り、「右衛門尉は正なき邪の私事せし故に、天帝大いに怒り給

ひ、俸祿の符を取り返し給ふなりとて夢は醒めたり。次の日、右衛門尉父子麗はしく出立ち、遠侍に伺候せし所に、管領立ち出で給へば、何とかしたりけん右衛門尉、深く眠りて前後も覺えず、管領の出で給ふをも知らず。「かかる不覺人は物の用に立つべからず。」と諸人傾き云ひしかば、終に召し抱へられず。父掃部は是れを恨みて、暇乞うて發心しけり。右衛門尉は、一期の内身上片付かで、流浪逐電の者となりぬ。されば人の身のうへ片付くべきが片付かざるは、更に世を恨み人を託つべからず、只我が身に省みて、我がすまじき事をせざれば、天道に憎まれて、官位俸祿皆心に叶はずと云ふ。

盲女を憐み報いを得

永祿戊辰十二月に、武田信玄軍兵を率して駿州に赴き、今川氏眞を脅し城下の民屋を燒き立て、氏眞を追ひ落して駿府を奪ひ取り給へり。城下の諸民慌て狼狽き資財雜具を取り運び、我先にと迯げ惑ふ。其の間に大軍押し寄せ來り、家々に込み入り財物を掠め、落人を打ち伏せ剝ぎ取り、手に持ちたる物皆奪ひ、切り殺し追ひ落し、男女泣き叫ぶ音聲の聲に和して天地も壞るゝ許りなり。かくて燒け靜まり城落ちて、氏眞は行方なく、信玄勝利を得て府中の掟を致されしかば、地下人原家に歸る。かかる所に町家の燒跡なる溝の中に、年七八歳許りなる女子ありて泣き叫ぶ。「父よ母よ姉よ、我を捨

てて何處に行き給ふぞ、我には食も湯もたべよとか、あな悲しあな情なし、飢ゑて濕したるぞや、あな悲しきことゝて聲をはかり泣き叫ぶを見れば、目の盲ひたる女子なり。隣の家に住みたる寡の女房歸り來りて云ふやう、「あな可愛や、此の娘は三歳の時痘瘡を患ひて眼に入りつゝ、兩目ながら盲ひたり。二人の親此の娘の智慧賢きを憐み、常には法華經の藥草喩品、觀音普門品を教へて誦せしめたり。殊更にいとほしみ育て侍りしを、此の頃父は三浦右衞門に惡まるゝ事ありて、非分の科を被り、牢舍させられて牢屋にして死す。母は是れを恨みて病み付きて打續き死す。姉是れを育て侍りしに、今度の亂れに流矢に當りて死す。城落ちて後は一族散りぢりになりて此の娘の事知る者なし。斯かる者を見捨て侍らば、溝に倒れて餓死ぬべしことゝて涙と共に抱へ起し、元より隣なり、亂れに逢うて凡ての物皆失ひ、此の盲女を養ふべき力はなけれども、いと可愛く見捨て難く、我が背に負ひ負ひ此所の小屋に置きつゝ、粥少しづゝ食はせ、「如何に和御前が父母は、かうかうの事にて疾く死せり、姉は此の程の亂れに矢に當りて死す。自ら可愛く見捨て難さに、爰に連れて歸り育て侍るぞや」と云ふに、此の盲目是れを聞くより、悶え焦れて歎き悲しみ粥をも食はず、夜晝泣き叫び終に絶え入りて死にけり。寡の女房大いに憐み歎きて、薪を拾ひ燒け殘りし材木を集めて火葬したりければ、盲女子の帶に金子二兩を附けてあり。寡の女房是れを取つて、僧を供養し佛事營み、黃金の有る限り皆佛道に布施したり。

斯くて十日許りの後に、我が家の内にして黄金十兩を拾ひ得たり。此の由信玄聞き傳へ給ひ、「かかる志ある女房は未だ世に稀なり、我が身の貧しきに堪へて、盲女を養ひ、又黄金を得て我が徳分とせず、佛道に布施すること類なき廉直の女なり。奉行頭人に是れあらば、昔の青砥左衛門に及るべからず、天道憐みて黄金十兩を與へ給ふなるべし。是れを公義に召取らば其意も恐ろし」とて信玄より家を建てて此の女房に取らせらるゝ。是れ故に德付きて、兎も角も緩やかに世を渡りけるとなり。夫れ世の人其の家富み榮えて、金銀豐かなる時は、禮法をも知り義理をも勤め、正直にも見ゆる者なり。家衰へ身貧しければ自ら無禮になり、義理を捨てて德に付き物を貪るは、世の常の人の心ぞかし。されば斯かる亂に逢うて、家は破れ壞れ、資財は失ひ我が身すがらになり、其の日だに暮し兼ね實に侘しき中に、かの女房是程深く盲女を養ひ、又死したるを悲しみ葬禮を營みて火葬し、黄金を得て佛事を營む、更に我が身の爲にせざる事、誠の志誰か感ぜざらん。此の故に爰に記して教への端とす。今の人皆し利を見て義を忘れ、德によりて恥を痛まず、此の賤の女房の爲、恥かしき[illegible]人なるべし。

吉田細敏ふ

越州春日山の城は、長尾謙信の居住せられし所なり。謙信已に死去せらるゝを聞きたるに、城の内に大

石二つあり、或日の暮方に彼の二つの石、躍り上り〳〵頻りに動きけるに、人皆怪しみて見侍り。忽ちに一所に轉び寄りてはたと打ち合ひ、又立ち退きて躍り動き、又打ち合ひたり。大石の事なり、如何なる故とも知り難し、只怪しき事に思ひければ、人々如何ともすべき樣なし。夜半過ぐるまで戰ひて、其の石缺け損じて散り飛ぶこと霰の如し。終に二つの石、諸共に碎けてさて止みにけり。夜明けて見れば其の邊に血流れたり。是れ只事にあらずと思ひ怪しみける所に、謙信病みつき給ひ終に空しくなり給へば、兄弟跡を爭ひ、本城と二の曲輪と、兩陣立ち別れて軍ありける。是れ其の兆なるべしと後に思ひ合はせしとぞ。

伽婢子卷之十二　終

伽婢子　巻之十三

天狗塔中に棲む

寛政五年四月に、都の東北糺の川原にして勸進の猿樂能あり、觀世音阿彌、同じく其の子又三郎を太夫として狂言師役者多し、此の頃の見物なりとて、京中の上下足を空に爲し諸人蟻の如く集まり、星の如く湊ひて是れを見物す。將軍家も三度まで棧敷構へさせて御覽あり、大名小名假合ひくに絹小袖、金銀を出し與へらる、其の積み上ぐる事日毎に山の如し。或日將軍家には出で給はす、大名方風流を盡す、若殿原達棧敷を並べて、其の前には家々の紋印したる幕打たせ、芝居には上下の諸人壊き合ひ揉み合ひて座を爭ふ。其の間に樂屋の幕打上げ、三番叟の面箱捧げ、しめやかに階掛りを練り出でたり。諸人しづまりて見居たる所に、棧敷の東の端より火燃え出でて、折節風烈しく吹きければ、百餘間の棧敷一同に燃え上る。内に持ち運びたる種々風流、其の外破子樽臺の物、俄の事なれば取り退くるに及ばず、後には舞臺樂屋までも同時に燃え上りしかば、見物の諸人慌て狼狽き我先にと出でんとする程に、四方嚴しく結ひ廻したる垣なれば、戸口一つにて壊き合ひ揉み合ひ、踏み倒し打

頃は、女童は手足首を踏み折られ、蹴破られ、傍には首髪小袖に火燃えつき、焼死する者も多かりし。甲斐々々しき者ありて、四方の垣を切り崩しにぞ、漸うに逃るゝ人多かりし。かくて焼け静まりしかば、將軍家の仰せに依りて、諸大名承り、一夜の内に元の如く、舞臺樓敷外垣までも作り立てらる。實に大名の仕業は計らひ難しと感じながら、たゞ童地下の町人原は、昨日に懲りて行く者なし。されども諸國の大名小名、御内外樣、中間、小者原まで皆行きければ、棧敷も芝居も猶賑やかに込み合ひたり。然れども喧嘩口論もなく無事に仕舞せし處に、其の焼けたりし夜より、都の内に迷ひ子を尋ぬる事十四五人に及べり。或は東山北山上賀茂邊の子供、彼の騒動に方角を失ひ逃げ迷うて、足に任せて行き迷ひたる者共なれば、皆尋ね出して歸りしに、上京今出川邊に、町人の子に次郎と云ふ者の年十二にして行方なし。親悲しがりて、人多く雇ひ四方を尋ね、山々寺々を巡り求むるに是れなし。二十日許りの後に東山吉田の神樂岡に、茫然として立ちて居たるを見付けて連れて歸りしに、四五日の程は物をも食はず、只湯水許りを飲みて、浮々として物をも言はず坐し居たり。其の後漸う人心地つきて語りけるやう、「糺川原に出でたれば、五十餘りと見ゆる法師の云ふ樣、『汝猿樂の能を見たくば我が袖に取り付け』とて、左の袂に取り付かせ垣を飛び越えたり。『汝物云ふな。』とて、或大名の棧敷に連れて登られしに、大名も御内の侍も、更に見咎めず物も云はず。斯くて、『何

にても喰ふべきか。」と仰せられ、酒肴菓子まで取りて賜はるを打喰ひけれども、人々見とがむる者なし。せざりし處に、棧敷の並びたる家々の幕打廻し、大いに奢りたる體なりければ、此の法師、あな惡く、やあな見られずや、何の事もなき奴原の髭くひそらし、我は顔なる風流盡、鼻の先うごめきたる有樣かなこと獨言して、「汝は此の者共の狼狽ふる體を見たく思ふか、いでさらば動き亂れて狼狽ふる體見せん」とて我を掻抱き舞臺の屋根に上り、何やらん唱へられしかば、東の棧敷より火燃え出でて風吹き纏ひ、百餘間の棧敷一同に燃え揚り、貴賤男女上を下へもて返し、騒ぎ亂れ狼狽へ惑うて、過ちを致し疵を被り死する者甚だ多し。舞臺も樂屋も燒けければ、法師我を伴れ、川原表に出でつゝ、「其見よや。」とて手を叩き大いに笑ひて、「今は心を慰みたり。是れより我が住家に來よ。」とて法勝寺の九重の塔の上に昇り、内に入りたりければ、何もなし、只金銅錫杖鉢など、怖ろしき繪像の佛の樣なる、羽ある物の前に置かれたる許りなり。或日は我を塔の中に置きながら、我許り出でて地に下り、法師の姿にて人に行き逢つては、或は腰を踏めて體を傷し、或は頭を打張りなどして通り、又は人の家に唾を吐きかけ又は人の背を突いて打倒しなどするに、其の人共更に目にも懸けず、咎めもせず、或日は兩方より來る人の首髪髻を掴んで、二人を一所に引き寄するに、此の二人俄に刀を拔いて打ち合ひ切り合ひ、手を負うて朱になるもあり、日毎に斯かる事ども幾千と云ふ數を知らず。其の外江州勢田

の橋に行きて螢を見、賀茂の祭松尾の祭禮、此の頃見ると云ふ事あれば、伴れて行きつゝ見せられたり。我問ふやう、『出で行き給ふ道に、人に逢うて禮をなし給ふは誰ぞ』と云へば、『それは道心高く、慈悲正直に信心篤き人なり。此の人邪慾名利の思ひ無し、善神身を離れず諸天從うて守り給へば恐れて禮を致せしなり。又頭をはりて通りしは、或は金銀財寶多く持ちて貧しき人を侮り、生才覺ありて愚かなる者を下し見る、少しの藝能あれば、是れに過ぎじと自慢する奴原は、面の惡さに頭をはりて通る。又背中を突倒しけるは、少し學文ある出家の、内には道心もなく慈悲もなく重邪慾に餘り、外には學文立して人を侮り、徒らに信施を喰ひ旦那を貪り、非道濫行なるが憎さに突き倒したり。又兩方を引き合はせて喧嘩せさせし人は、少しの武勇を自慢して、人をある物かとも思はぬ面付の見られねば、惡さに喧嘩させたり。又面表に唾を吐きかけしは、是れ牛を喰ひ馬を喰ひ、或は家に飼ひ置きながら、其の犬庭鳥を殺し喰ふ者、己は是れを榮耀と思へども、餘りの穢さに唾吐き掛けたり。牛を喰ひ飼鳥を喰ふ者は、疫神便りを得て疫癘起り易しと云へり。總て何れの道何れの人といふとも、正直慈悲にして信ある人は恐ろしきぞ。假令高位高官の人も邪慾非道慢心あるは、皆我等が一族と爲し、便りを求めて心を奪ふなり」とて、今より後々の事まで語られし」とて其に物語せしかども、其の外の事は世を憚りて沙汰する事なし。「かくて今は暇取らする」とて塔の上より連れて下り給ふと覺え

て、其の後は見えず。」とぞ語りける。世の中の事ども後々の有様、物語せしに違はずと云へり。これより法勝寺の塔には、天狗の住むと云ふ事を云ひはやらかしけるに、應仁の亂に燒け壞れたり。

幽鬼嬰兒に乳す

伊豫國風早郡の百姓、ある時家中大小の人打續きて死す。其のほか村中の一族殘りなく死に去りて、只兄弟二人生き殘りぬ。傳尸勞瘵の病は實に滅門に至ると云ふ、定めて是等其の類なるべし。兄弟悲しびに沈みし所に、弟の妻又空しくなる。獨りのみ明し暮す中に、此の春生まれたる子あり、母に後れて乳に飢ゑつゝ、夜晝泣きける悲しさ、見るにつけ聞くにつけて涙の絶ゆる隙なし。妻死して三十日許りの後に、弟の妻其の家に來りぬ。初めは恐れしかども、夜毎に來りしかば後にはいとゞ睦まじくして、流石に捨て難く、夜もすがら物語する事常のごとし。兄此の由を聞くに疑しからず。弟を諫めて曰く、「汝が妻死して未だ中陰の日數をだに過ぎず、早何方よりか女を呼び入れ、夜毎に語り明すは、是れ世の人のため譏を受け、恥を見るのみならず、兄をだに是れ程の事諫めざるかと、人の言はんも恥かし。今より後は、せめて妻の一周忌過ぐるまで、異女を召し入るゝ事あるべからず。」と云ふ。弟涙を流して曰く、「夜毎に來る者は死したる妻の幽靈にて侍る。初めは俄に門を敲き、「我が子に乳

なくしてさこそ飢ゑぬらん、此の事の悲しさに歸り來たるなり」と云ふ。門を開きて内に入れたりしかば、赤子を抱きあげ髪掻撫でて、乳を含め侍り。初めの程こそ恐ろしくも覺えけれ、後は睦まじくて夜もすがら語り明し、夜明くれば去り失せ侍る、更に日頃に違ふ事はなし」と云ふ。兄聞きて思ふやう、一門悉く死に絶えて、只我等兄弟二人のみ殘る。然れば此の妖物一定我が弟を誑し殺すべし、其の時に至りては悔ゆとも效あるまじ。妖物と雖も妻と化して來る上は、弟更に思ひ切るべからず、我是れを殺さばやと思ひて、長刀を横たへ、弟にも知らせず忍びて門の傍に居たり。案の如く亥の刻許りに門を開きて立ち入る者あり。兄走り寄りて丁となぎ伏したり。彼の者聲をあげ、「あな悲しや」とて逃げ去りぬ。夜明けて見れば血流れて地にあり。兄弟其の血の跡を認めて行くに、妻を埋めし墓所にいたる。弟の妻が尸、墓の傍に倒れて死す。墓を掘りて見れば、棺の内には何もなし。元の如く妻が尸を納め埋めしが、赤子も死にけり。幾程もなく兄弟ながら、打續きて死に失せければ、一門跡絶えたり。

蛇瘻の中より出づ

河内國錦郡の農民が妻、項に瘻出でたり。初めは蓮肉の大きさなるが、漸く庭鳥の卵子の如く、

後には終に三四升許りの壺の大きさなり。かくて三升の後に二升を入るゝ瓶の如し。甚だ重くして立ちて行く事叶はず、若し立つ時には、彼の腰を人に抱へさせて行く、更に痛む事なし。より／＼は腰の中に、管絃音樂の聲聞えて、是れに心を慰むに似たり。其の後腰の外に、針の先ばかりなる細く小さき孔數千開きて、空曇り雨降らんとする時は、穴の中より白き煙の立つこと絲筋の如くして、空に昇る。家の内の男女皆怖れて、「此の儘家に留め置かば、禍となるらんも知らず、只遠く野山の末にも送り捨てよ」と云ふ。此の妻泣く／＼男に語るやう、「我が此の病、實に誰か嫌ひ惡まざらん。されば遠く捨てられたらんには必ず死すべし、又是れを割き開きたりとも死すべし。同じく死すべくば割き開きて中に何かある見給へ」と云ふに、夫げにもと思ひ大きなる剃刀を求め、よく磨いで妻が項の腰の頭を竪さまに割り侍りしが、血は少しも出でず、腰の色白けて中より跳ね破り、飛んで出でたる物を見れば、長さ二尺許りなる蛇五つまで突き出でたり。其の色或は黒く或は白く、又は青く又は黄なり、鱗立ち光ありて、庭の面に這ひ行きしかば、家人皆驚き打ち殺さんとす、夫更に制して許さず。時に當りて庭の面に一つの穴出で來て、蛇皆其の中に入りたり、其の穴深くして底を知らず。かくて神子を頼み、梓にかけて此の事を尋ねしかば、神子口走りて云ふやう、「往日此の妻が妬み深く、内に召し使ひける女の童を夫寵愛せし事を腹立ち惡みつゝ、女の童が首元に噛み付きて喰ひ切りければ、血の

流るゝこと瀧の如し、鐵漿黒くつけたる齒にて嚙みければ、疵深く腐り入りて、終に女の童空しくなれり。其の恨み深くして今此の蛇となり、妻が項に宿りて怨みを報じ侍り。假令今取り出されたりとも、終には殺して怨みを晴らさん物」と云ふ。側に居たる人の云ふやう、「其の事は返らぬ昔に成り侍り、心をなだめて與へよ。其の爲には僧を請じて、跡よく弔ひはべらん」と云へば、神子又口走りけるやう、「其の時の恨み誠に骨に透り、幾度生を變ふると云ふとも忘るべき事にはあらず、されども跡弔ひて得させすべしと云ひしが嬉しきに、是れにぞ心を慰み許し侍らん。とてもの事に望む處あり、叶へて得させんや」と云ふ。側なる人「如何なる事なりとも叶へて得さすべし、疾く／＼云へ。」と云ふに、神子打頷き涙を流し、「此の世に生きて有りし時より、尊き物は法華經なりと思ひ侍りし。今猶尊く覺ゆるに、一日頓寫の經書きて廻向して弔ひて給べや。又其の疵には胡桐淚を塗り給へ。」とて去りにけり。言葉の如く僧を請じて一日頓寫の經書きて深く弔ひしかば、妻が心地も涼しくなりぬ。扨胡桐淚を尋ね求めて塗りければ、瘤の疵終に癒えたり。妻それよりして、物妬みの心を止め侍りとぞ。

傳尸を禳ひ去る

寶德年中の事にや、中山中將親通朝臣の娘、尼になりて西山に住す。只かりそめに虚損勞瘵の病に

羅り、潮熱咳嗽盗汗して漸うに痩せ衰へたり。勞瘵の病は腹中に蟲ありて生ず、其の形或は定まらず、總て鍼灸治の及び難く、十人にして九人は死す、是れを傳尸蟲と名づく。一人此の病にて死すれば、其の兄弟一族に移り渡りて、門を滅ぼし跡を絶やす。已に傳はりて三人に移り渡れば、其の蟲手足耳鼻具はり、よく立ちて行く、形人の姿、鬼の形に類すと云へり。さる程に彼の尼公、頻りに病重く今は人心地もなくなり、已に死せんとす。尼公の妹あり、行きて看病する處に、尼公の身の中より白き蠅の如くなる物飛び出でて、絲を引くが如くなる白き氣あり、妹の袖の中に飛び入りて見えずなりぬ。立ち上り拂ひ揮へども更になし。尼公終に其の暮方に死す。妹其の日より心地煩ひ出で、尼公の病に少しも違はず、姉の尼公より傳はりたる病とて、家中上下憂へ歎き、樣々養生するに露許りの驗なし。如何すべきと愁へ歎き、「藥の力を以ては癒す事叶ふまじ、佛神の祈誓を頼むべし」とて白檀を以て長さ一尺二寸の藥師の尊像を作り、又殊更に祇園の牛頭天王に祈誓して、「此の病癒して給べ。」と歎き祈り申されしに、或日の夕暮に、病人少し假寐しける夢に、怪しき人來りて、「明日一人の沙門鈍色の衣に、紅の袈裟かけて鉢に來るべし、是れに頼みて祈りせさせよ。」と云ふと見えて夢醒めたり。次の朝年の頃五十許りの出家、實に戒律正しく保つと覺えて、道行く事いと靜かに、中山殿の門に入り來り、錫杖打揮りて頭陀せらる。頓て内に請じ入れて、「かう／＼夢想の事侍り、此の病療

ひして給へ。」と云ひ出しければ、此の僧答へけるは、「我は戒律を守り、抖擻行脚を業とする身なり、更に不浄下口の食を求めず、只清浄頭陀を行じて活命するのみ。かかる神子々々しき事は、思ひよらず。」と云はれたり。重ね〳〵申されし樣、「僧は大慈悲を以て人を助け、我が身を忘れて他を利益するを本とす、今一人の命を救うて諸人の喜ぶ處、其の功德量なからんや。其の上夢想の告げに依つてかく望み侍り。」と再三強ひて歎きしかば、僧も理に折れて、「此の上は力なし、然らば白絹一端を遣はし給へ、是れを以て病を禳はん。」と云ふ。「それこそ易き事。」とて生絹一端を奉りければ受取り、僧は卽て出でて歸る。「扨御寺は何處。」と問へば、「祇園の邊なり。」とて定かにも云はず。其の夜姫君夢に見けるやう、「佛像一體門の內に入り來り給へば、十二の善神隨ひ來り、一つの簡を以て、十二の神代る〳〵、娘の頭より手足まで殘りなく撫で給へば、身の中より白き絲筋のごとくなる物出でて、天を指して昇ると見て、夢醒めて後心地涼しく、頭輕く食進みて、爽やかなること日來に變れり。次の日彼の僧來りて、生絹に物書きたるを與へて、跡をも見せず失せにけり。奇特の思ひを爲し、封を開きて見るに、藥師の尊像を墨繪に書きたり。枕元に掛けて朝夕香を焚き、禮拜して敬ひしが、姫君の病程なく癒えたり。生絹の藥師をば家の寶物とせらる、誠に奇特の事なり。彼の僧は祇園にして誰とも知らず、是れ定めて牛頭天王なるべし。天王は是れ藥師の垂迹、旁以て佛力の不思議、行者の信

心によりて利益空しからずとかや。

隨轉が力量

武州小石川傳通院の所化、釋の隨轉は房州の人なり。幼少の時より出家して、後に小石川に來り學文を勤むるに、貧賤にして朝夕に乏しければ甲信二州の間、野州上下に乞食して歩く程に勤學論義更に精ならず、力量ただ頗くして叢林に敵する者なし。時の所化達皆異名を付けて明上座と云ふ。唐土神秀禪師の座下に、明上座とて大力の法師あり、六祖の惠能大師、大庾嶺に赴きたまひしを、明上座追掛けて、傳法の袈裟を取り返さんとせしに、惠能其の袈裟を石の上に打置きたり。明上座これを取らんとするに、山の如く重くして揚らず。惠能の曰く、「此の衣は信を以て表はす、力を以て爭ふべきや、是れ明上座本來の面目を見よ」と云はれしに、言下に得道したりと云ふ。隨轉が力の強き許りにて、論義學文の弱き事を笑ひて明上座とは異名しけり。ある時信州の山中を通りしに、盜人に行き逢ひたり。足に任せて逃げけれども頻りに追ひかけしかば、隨轉手頃の松の木を引き拔いて、尻掛けて休み居たり。盜人追ひ來りしかば、逃げ延びんとするに息切れたり。「今は半包の錢皆奉らん、命は許し給へ、まづ此の木に腰掛けて、息つぎ休み給へ」と云ふに盜人心を許し、同じく松の木に腰を掛

けし所を、隨轉立ち退きたれば、松の木起き上るに、盗人彈かれて、遙かの谷底に投げ落され、石に當り頭碎けて死にけり。かかる大力の法師なり。越前の朝倉家の旗下に、摩伽羅十郎右衛門は北國無雙の大力と聞き傳へて、隨轉彼方に赴き力を競べたり。隨轉は縁の上にたち、摩伽羅は鴨閾の際に立ちて、手を握り上に引き揚げんとするに隨轉更に動かず、縁の板を踏み拔き鴨閾は半ばより折れたり。兩方共に力、人皆肝を消して目を驚す。或時隨轉論義の場に出でて、只一問答にて閉口せしかば、相手の僧打笑ひ「此の論義は學を以てす、力を以て爭ふべきや、これ隨轉明上座本來の面目を失うたり」と恥かしめたりければ、大いに赤面して口惜しく思ふ處に、其の次の日町屋に出でて朝より夕まで所化鉢と呼ばはれども更に與ふる人なし。甚だ怒りて味氣なき出家して恥見んよりは、俗になりて時を得んには如かじとて、鉢を地に投げて打破り、袈裟衣を引き裂いて川に流し、越前に行きて摩伽羅が手に屬し、終に姉川の軍に討死しけり。還俗の罪は甚だ深しと云ふ事を恐れて、常は日毎に念佛怠らず、最後の時に至りて、口より白き雲の如くなるもの棚引き出でて、西をさして空に上りぬ。忙がはしき合戰の最中なりければ、是れを見たりし人僅かに二三人、後に語り傳へしとかや。

蟲瘤

日向國諸縣と云ふところに商人あり。背に手掌許り熱ありて燃ゆるが如し、二十日許りの後に熱冷めて、又痒き事云ふ許りなし。漸く腫れ上り盆を覆伏せたるが如し。大いに腫るゝに隨ひて、痛みは少しもなく只痒き事堪へ難し。此れ故に食事日に隨ひて進まず、痩せ衰ふるまゝに骨と皮とになれり。遍く諸方の醫師に見せ、本道外科手を盡して、內藥を與へ膏藥を塗れども、少しも驗なし。其の頃南蠻の商人船に、名高の外科章全子と云ふ者渡りて、此の病を見て云ふやう「是れ更に世に稀なる病なり、此の故に人多く知らず、是れ白瘡と名付く。皮肉の間に白鼠涌き出でて此の患ひを致す、我よく是れを癒すべし」とて腫物の間に縛をかけ其の上に藥を塗りたり。扠語りけるやう「世の人或は其の身に白鼠の涌き出でたる事、一夜の內に或は三升五升に至り、衣裳に滿ち〳〵血肉を吸ひ喰ふ、痛み痒き事云ふ許りなし。されども病人の身にのみ有りて他人には取りつき移らず。是れは又間々有る事にて療治の手段、世の醫師是れを知りたり。今此の白鼠は肉の間に生じて皮より下にあり、人更に知り難し、今々必ず驗あるべし」と云ひける。其の夜腫物の頭破れて、白鼠の湧き出づる事一升許り、皆よく足あり、大きさ胡麻の如く色赤くして、よく這ひ歩く。是れより體輕く心地よく覺えしが、白鼠出でたる瘡に細き穴一つありて、時々其の中より白鼠出でたり。是れも其の數知り難し。章全子が曰く「此の病は世に稀なるべし、百年の雞を燒いて瘡に當し、黃龍水を以て塗るべし、是れより外の療治なし

我少し是れ有り、惜しむに足らず」とて一匙許りを取り出し、痕の上に塗り付けしかば、一七日の内に癒えたり。

山中の鬼魅

小石伊兵衞尉は津の國の勇士なり、天正五年十月、河内國片岡の城に籠りしが、城の大將松永、日頃の悪行重疊し、寄手の大軍旗色勇みて軍氣盛んなりければ、此の城更にはか〴〵しかるべからずと思ひ、夜に紛れて只一人城を落ちて、弓削と云ふ所に隱し置きたる妻の女房を引連れ、夫婦只二人夜もすがら立田越にかゝり、大和國に赴きけり。其の妻懷妊して此の月産すべきに當りければ、身重く足たゆく、甚だ勞れて峠までかゝぐり著き、道筋にては若し軍兵共の見咎むる事もや有るべきと思ひ、道筋より半町許り傍に入りて、息つぎ休み居たりければ、跡より女の聲にて泣く〳〵來る。歩むともなく轉ぶともなく、やう〳〵峠まで登りて呼ばはるを、よく〳〵聞けば年頃召使ひし女の童なり。女房につけ置きしを、落人の身なれば人多くて叶ひがたく、弓削に打捨て召しつれずして來りしを、跡より追ひ來りたる者なり。志の痛はしく可愛くて、「如何に我等は未だこゝに在るぞ。」と聲を掛けしかば、女の童は世に嬉しげにて、「君情なくも打捨て落ち給ふ。自ら假令湯の底水の底までも、

離れ参らせじとこそ思ひ奉りしに、只二人のみ落ちさせ給へば、自ら有るにもあられず、跡を慕うて参り侍り。」と云ふに、志の程憐れに嬉しく覺えて、今はまた便り求めたる心地しつゝ、三人一所に休み居たる所に、妻俄に産の氣つきて苦しみ終に平産したり。夜半許りの事にて月は未だ出でず、暗さは暗し、夫の小石、とかくすべき樣をも知らざりけるを、女の童甲斐々々しく取扱ひしにぞ、此の者來らずは如何すべき、よくぞ跡より慕ひ來にける、誠の志有る者なればこそ、此の先途をも見屆くるなれ、あはれ男なりとも女なりとも人を召使ふには、斯程に主君を思ひ奉る者をこそあらまほしけれと、夫婦共に今更感じ思ひけり。扨妻は木の本に寄り掛らせ、生まれたる子は女の童懷に抱きて、三人さし向ひつゝ夜明けなば山中の家を尋ね、心靜かに隱れて保養すべしと思ふ。産養ひすべき事も叶はねば、腰に付けたる燒飯取り出し、妻に食はせて氣を助け居たり。女房は木の本に寄り掛りながら、女の童が方を熟と見居たりければ、懷に抱きたる赤子を、舌を出して舐めけり。怪しく思ひて猶よく目を澄まして見れば、女の童が口大きに耳元まで裂けて、赤子の頭を口に含み、味ある樣にて食ひける程に、はや首をば皆食ひ盡し、肩を限り右の手を食らひければ、妻いと騷がず、夫を驚かしけり。小石は暫し睡りはべりしが、目を覺し此の有樣を見て、密かに刀を拔きはたと切り付けたりしかば、女の童鞠の如くはずみて梢に飛び上り、其の儘凄まじき鬼となり、又地に飛び下り十間許り向ひなる

岩の上に立ちて、赤子の足を喰ひけり。小石爲方なく走り掛つて切りけれども、只夢の如く影の如くにて、太刀も當らず、少時追ひ廻りければ、鬼はや其の間に赤子は喰ひ皆盡して、蜻蛉の如く飛び上り、行方なく失せにけり。力なく跡に立ち歸り、元の木の本に來て見れば、又妻の女房を取られたり。呼べども〳〵答ふる聲も聞えず、何地取られけん行先も知らず。小石血の涙を流し、知らぬ山中を彼處此方尋ねしに、夜已に明方になりて、道筋より三町許り奥の傍なる岩角に妻が首を載せ置きたり。如何なる者の仕業とも知り難し。小石是れを見るに悲しさ限りなく、涙と共に其處に埋めて、大和の郡山より南の方大谷に所緣有りければ、爰に辿り行きて暫く隱れ居たりしが、兎に角に果敢なき世を思ひ知り、後世を大事と心付きて發心しつゝ、高野山の麓、新別所と云ふ所に籠り、沙彌戒を保ち、貴き行ひして年月を送りし、後に其の行方なし。

馬人語をなす怪異

延德元年三月、京の公方征夷將軍從一位內大臣源義熈公は、佐々木判官高賴を責められんとて、軍兵を率して江州に下り、栗太郡、鈎の里に陣を据ゑられ、爰にして御病惱重くおはしましつゝ、同じき二十六日に薨じ給ふ。其の前の夜、十五間の馬屋に立ち並べたる馬の中に、第二間の廐に繫がれ

たる葦毛の馬、忽ちに人の如く物云うて、「今は叶はぬぞや」と云ふに、又葦毛の馬聲を合はせて、「あら悲しや。」とぞ云ひける。其の前には馬取共並み居て、中間小者多く居たりける。皆これを聞くに、正しく馬共の物云ひける事疑ひなし。身の毛竦立ちて怖ろしく覺えしが、次の日果して義熙公薨じ給ひし。誠にふしぎの事なり。

怪を話せば怪至る

昔より人の云ひ傳へし怖ろしき事怪しき事をあつめて百話すれば、必ず怖ろしき事、怪しき事ありと云へり。百物語には法式あり、月暗き夜、行燈の火を點じ、其の行燈は青き紙にて張り立て、百筋の燈心を點じ、一つの物語に、燈心一筋づゝ引き取りぬれば、座中漸々暗くなり、青き紙の色うつろひて、何となく物凄くなり行くなり。それに話り續くれば、必ず怪しき事、怖ろしき事現はるゝとかや。下京邊の人五人集まり、いざや百話せんとて、法の如く火を點し、面々皆青き小袖着て、並み居て話るに六七十に及ぶ。其の時分は臘月の始めつ方、風烈しく雪降り、寒きこと日頃に替り、髪の根しむるやうにぞ、ぞとして覺えたり。窓の外に火の光ちら／＼として、螢の多く飛ぶ如く、幾千萬ともなく、終に座中に飛び入りて、丸く集まりて鏡の如く、鞠の如く、又別れて碎け散り、變じて白くな

り固まりたる形、わたり五尺許りにて、天井につきて疊の上にどうと落ちたる其の音、雷の如くにして消え失せたり。五人ながら俯伏して死に入りけるを、家の内の輩様々に扶け起しければ、甦りて別の事もなかりしとなり。諺に曰く、白日に人を談ずることなかれ、人を談ずれば害を生ず、昏夜に鬼を語る事なかれ、鬼を語れば怪至るとは、此の事なるべしと、此の物語百條に滿たずして筆をこゝに止む。

伽婢子卷之十三　終

拾遺伽婢子

夏目柳絲堂

拾遺伽婢子序

林和靖は梅に泥、樂天は酒に華酒、周茂叔は蓮に溺れ流す。斯かる世界の通り者さへ、一つの癖はあるものを、奴がれ生まれつきし癖あり、幼年より怪しく不思議なる話を好む。古今怪談異説の書を閲するに、未だ記さざるところの怪説猶少なからず。然るに當來の春、櫟林堂何某、大扇と云ふ文を撰せし。その書を見るに、恐い事の數々あれば、又哀れなる事、色々の色に沁み、香にめでしおもはく、見ると心移り羨ましさ、膽が飛べば石龜もおだんだとや。年頃籠耳に聞き傳へし話、筐に語らせ紙に書かさせ給ひ、誠に文理を分明し、唐大和の書を左右にして、心廣く、行ひ豁かなる人さへ、撰書はその傍らありし。然るに奴がれ魂の毛の先、九牛が一毛も知らぬ昔の文の沙汰、心狹く、行ひ豁かならず、一文不通の身にてかかる一章の取沙汰、さりとは肝の太い穿鑿。然れども素より能人は、怪しき事を語らずとなれば、博識高才の人の見聞に入るべきとにあらず、唯兒童の嘆きを止めんとばかりに、名付けて拾遺伽婢子とは傍痛や。

時元祿十六癸未歳季春

江城の東角田川の流世を牛島の住

柳絲堂

目錄

卷之三

卷之四

卷之五

拾遺伽婢子 巻之一

一　暫し暮る窗の月

五倫假に形をなして六十年、その間の苦樂貧福、行末以て變ることなし、今日空に歸つて一心安しと、悟りの窗に向つて心をすます身にしも、なほ妄想、貪著、瞋恚、其の間に交りて善心を妨ふ、愼むべきは執著の念慮なり。寛永年中に江府に一人の禪僧あり、往昔の悲雲禪師にもおさ／＼劣るまじきと沙汰す。一鉢にその日を送り、三衣の破れたる事を厭はず、僅かなる庵室を結びて、露の命の風を待つ間を、行く水の如く思ひとりて暮し侍りける。又その鄰に天台の學僧一人あり、所々遍參して、學問に心を寄せ。誠に一所不住の僧と謂ひつべし。ある時齋日のことなりしに、打飯に出るとて、彼の禪僧の鉢の子をかり、携へてぞ出ではべり。禪僧も此の鉢の子は、師匠より傳へて秘藏に思ひしかども、鄰家と云ひ理なく云ひし間、爲方なく借し侍りける。彼の學僧如何したりけん、過つて道にて鉢子を落し微塵に打破りぬ。取り上げて見れども用に足らざる物なる故、是非なく歸り此の由を禪僧に言分けしに、禪僧、人の秘藏する鉢の子を借りて、大切に心を付けなば爭でか害ふべき、心なき仕

方と瞋恚を起しが、さらぬ體にて「苦しからず。」とは答へしかども、瞋恚は忘れずして止みぬ。其の後程へて彼の僧、風の心地に煩ひ出しけるが、日にそひて頼り少なくぞなり行きける。鄰家の學僧日比心易く語りし事なれば、色々と介病するに、必死の病にや終に空しくなりぬ。鄰家の僧跡の事など念頃に取り置きて、それより學問の爲、下野國長沼のだん所へ行き、一夏を學行勤めけるに、折から菖蒲月初めなれば、立ち登る煙は雲となりにけると詠ぜし、むろの八島の五月雨の空打曇りて、晴れ間も見えぬ寂しさに、學所に引き籠り、書傳に心得澄まして、終日の勞に疲れて、初夜前より枕によりて睡みけるに、夜も漸く四交の頃、學所の縁へ人音して來る者有り。此の僧目覺めて不思議や何者ならんと、蚊帳の内より見出したれば、江府にて伴ひし禪僧なり。不思議や此の僧は、過ぎし春身まかりしが、定めてその魂魄の來りしものならんと、心を靜め、その形を見れば、ありし姿にてはありながら、色は緑青の如く、眼は星の如くにして、苦しげなる息をつく度に、口より火炎燃え出で、煙空に立ち登る。時に學僧問ひけるは「御邊存生の間、其の行學智文類なうして、世人もその才を尊びしが、今如何なる故を以て、斯かる氣疎き姿を現はし給ふぞや。」と問ひしかば、禪僧答へけるは、「我は浮世にありし間、學行形の如く勤め、佛說の奧義祖師の心緣、大師のそろく等に亙り、その深きを悟り、其の外唐大和の書傳明らめずと云ふ境もなし。然るに口外君に、われ祕藏の鉢の子を貸し

ける事あり。その刻、君過つて彼の鉢を打割り給ひしを、さらぬ體に挨拶はせしが、瞋恚心に事を得ずして、終に殘舌して死せし。僅かの業障に誘引せられて、終に惡趣に墮罪し、今阿鼻の獄中に入つて、その苦患やむ事をえず。その上我が學匠に高慢し、亦は愚蒙の輩に佛說の深きためしを直に說き聞かせ、方便を說くを除きし故、多く我が說を聞きて、無の閒に陷つて墮罪したるもの多し。三途につて厭離穢土上品極樂淨土、皆是れ巍然として有り、われ今死門に至つて見るに、なほ、掌を指すが如し。疑ふ事勿れ、全く如來の妄語ましまさず、相構へて專らその方便の說をもつて衆生を濟度し給へ。われ今かかる稀有の貌を爲すも、偏に君に恨みを殘して、瞋恚今に散ぜざる故なり、業火となつて胸を焦す、故にその妄念を散ぜんため、心に包みし邪念を、懺悔せんと來りしなり」と云ふ。學僧涙をながし、「君既に往生の閒、又類なき學業なりしだに、少しの妄念によつてかく惡趣に墮つ。吾等未だ日夜の妄念を散ずる事を得ず、然れども今の君が有樣を見て、大きに會得しぬ。必ずその念を散じ給へ、我彼の鉢を過ちし事、全く私にあらず、その時は唯苟且に申しつれども、道にて荒犬數十匹驅け出で、吾に向ひし故、心ならず過ち侍り」と云ひし時、かの魂魄雪霜の日にあうて消ゆる如く、跡形もなく消え失せぬ。まことに兼好が、「糂汰瓶一つも出家は持つまじきもの」と書きしも、此の話に思ひ合はせて今更信をとりぬ。

二　稻荷人に告げて鳥居を乞ふ

神は人の敬ふによつて威を増し、人は神の德によつて運を添ふ。しかるに武藏國赤山といふ在家有り、爰に上福寺といふ眞言の寺あり、古跡にして地景誠に可愛き所なり。彼の寺の地中に小さき稻荷の祠あり、何時の頃勸請せしと云ふ事を知らず。然るに近き比江戸京橋飾屋何某が下男、頃は卯月初めの事なりしに、何方へ行くともなくふと宿を出でたり。扨、赤山に行きて上福寺に至り、客殿の前にて案内をこふ。住持は他行して弟子在宿しけるが、立ち出で、「何方より來れるぞ」と問ふに、「我京橋邊の者にて侍り、少し仔細あつて罷りたり」と云ひも終らざるに、亂氣して樣々の戲言を云ひて後申しけるは、「我は此の寺内の稻荷にてはべり、今度京著して官位昇進して、則ち八總の明神といふ。今までは無官なりし故宮居も入らず、最早、今日より後官位昇進しぬれば、關東の末社の靈を受く。是れによつて今より宮居も大きく、また鳥居も式定一丈二尺の鳥居にあらざれば叶ひ難し。此の寺の住持に通じ、宮所に鳥居を建てて給へ」といふ。弟子答へけるは、「その旨承りぬ。然しながら、當寺貧地にして大行の普請なり難し。さりながら住持歸りなば其の旨を申し傳へ、鳥居宮居大形許りに設ひ侍らん、それにても苦しかるまじや」と云ふ。彼の者答へ申しけるは、「成程聞き屆け侍

る。宮島居士葬儀はいらず、唯式法の如く法さへ合ひぬればよきこと」と云ふ。弟子重ねて云ひけるは「さ候はゞ御心安かるべし、御持縁りなばその旨を通じ、早々宮島居士葬を達て候はん。某此の上は何の御望みもあるまじ、既に神となり給ひぬる上は諸人に幸ひを施し、利生を垂れ給はれ。疾くその者を本心に返しおはしませ」といふ。時に御遺言て「一議に身に縁り我が衣擲捉著せしたり。今日より後北の地にあつて、諸人に利生を施さん、必ず疑ふべからず」と、云ふかと思へば彼處にかつぱと倒れ、暫く絶死してまた息出で給ふ。始めよりの事尋ぬるに、少しも覺えずといふ。やがて立つて京橋に歸し侍りぬ。それより在所近邊の諸人、傳聞の首を傾け、宮島居士葬儀に詣でしぬ。その後いよ／＼宮居を繁昌させんが爲に、所の者集まつて宮の前に舞臺をしつらひ、操をさせけるに、その見物の者「人口走りてぞ云ひけるは、一眼千一方の神と仰がれ、黄狐の徳にいたりぬれば、各々非道の手段、詐偽の事ひ悪を聞く事能はず。唯、誠狂作者の手向を受け、その法味を味はふ。右篇の衆生を引導して事を清とす。重ねて斯様なる狂舞を為すこと無れ」と、云ひ終つて御遺骸すめたり。故に寄々狂言を破り、繁昌せず。誠に不思議と雖も神國の不思議、感に堪へし事なりき。此の話、全く嘘にあらず。

三　蛇人に化して契る

去にし古、佐用田源内と云ふ者あり、陶尾張守が一族たり。尾張守亡びてのち、近江國手上といふ所に住みけるが、家貧しからず。色好みの聞えあり、好心から定まる妻もなく獨りのみ住みける。彌生始めの頃なれば、四方の山々雪打ちとけて、霞しく遠山のしげみに、初櫻の處々咲き初めたる氣色、園の呉竹に、鶯のまだ世馴れぬ聲も、春めきたる景色に誘はれて、僕に破籠やうの物持たせて、昔ながらの山櫻と云ひし志賀の花見んとて、友達二人三人伴ひ、志賀に行き、辛崎の邊に終日毛氈敷きて、酒打呑み連歌なとしてけり。誠に千金に換へじと云ひし春の日も、はや夕陽に傾けば、櫻花手折り家苞とし、いざや歸らんとて、源内古事ながら、

　櫻花手ごとに折りて歸るをば春の行くとや人は見るらむ

とうち戯れ歸りけるが、瀬田邊にて源内小用に跡へ退りける内、友達は遙か行き過ぎぬ。源内追ひ付かんと急げる折ふし、日も漸く暮れかゝり、半ばならぬ月影、雲間より出でたる景色面白く、心うかれ、歌打ちあんじ獨り行く處に、東の方よりさゞめき大船艪を押し來る。誰人の舟ならんと見るに、女の多く打集ひ、絲竹の調べえならぬ香、誠に艶なる装ひに心ひかれ、暫くやすらひて見ゐたれば、年の程十七八許りなる女郎の、舟端に立ち出で月打詠めて「誠に月は秋といへど、詠めは春なりけるものを、誰人の秋詠み初めけん」など云ひて、朧に霞む春の夜の月にあくがれたる樣、此の世の人と

も思はれず、心も空になり行きつゝ、怪しやあれ此のまゝその方の袖にや移りぬらんと、踏む足もたどたどしく、舟のほるに付けて、又辛崎の方へ行きけるに、此の船一つ松の邊につけて、皆々さゞめきて岸に上り、花筵敷きつゝ、琴三味線の調べは、沖の小波にたゞへ、面白さいふ許りなし。源内は側の石に腰打掛け、何となう嘯きゐたるに、彼の女郎「あれは」と云ふ音して、暫くありて女の童のいと美しきが、源内が傍に來りて、「あれに坐すは、我等が賴みたる方にて候、今宵月にあこがれ出でて遊びたまふなり。君の息らひ給ふ樣、友もなく見えさせ給ふ、此方の席に來りて遊び給へ」と云ふ。源内喜びて打連れて行く。彼の女郎睦まじくこそ馴れ寄り、酒一獻に及ぶ。扨、女の姓名居所を問ふに、女の云ふ「妾は矢橋の邊に住む者なり。父は毛利家に仕へしが、竹生島の軍に終に討たれ給ひぬ。それより我は此所に來り、姉の所に居侍る。姉壻も過ぎし冬世を早うし、世の中力なし。これども家貧しからず、姉も我も似合はしく緣を求め、心安く世を渡らんと願ふ」由を語る。源内聞くにいとゞ心移り、猶睦まじく語らひ寄るに、彼の娘云ふやう「如何なる緣やらん、斯樣に懇に物語を申す事よ。今宵も更け行きぬべし、君が住家に遙々と歸り給はんよりは、我が家程近し、來りて宿り給へ」と云ふ。源内喜びて、同船に打乘りて、海上十町許りもさゞめき行くと思へば、舟岸に著きぬ。皆舟より上る。源内も同じく上り見れば、門の構へ由ある狀なり。内に差入りて、其の綺麗美な

ることと思ひしよりも麗はし。媼源内を座敷に伴ひ、稍ありて姉と思しき女房、年の程二十四五許りと思ほえ、白きあやに花紅葉染めつくしたる小袖に、水色の羅打ちかけて褄かい取り、粧ひ出でしさま賤しからず、艶やかにして又見るべき色ならず。源内に向ひ、「今宵我が妹が假初に月に憧れ出でて遊び侍るに、宿世の縁にや君に會ひ參らせ、斯かる拙き住居見せ參らすことも、一方ならぬ縁とこそ思ひ侍る。此所に永く留まり、妹を慈愛しみ、我が行末をも見屆け給はれかし」と云ふ。源内も岩木ならねば、その旨を請けがふ。女房悦び、「今はや夜も更けぬ、此方へ來り休み給へ」と又一間なる座敷に伴ふ。此所、先の座敷に越えて綺麗なる事云ふ許りなし。暫くして十二三許りなる女の童に手燭ささせて、彼の娘來り閨に入り、睦まじく來し方行く末の事など云ひ交し打物語るに、春の夜の習ひ、枕取るまもなくて明方を告ぐる野寺の鐘、松吹く風に聞えて、一際ほのかに明けなんとする頃、俄に家內騷動して、上下のゝめきあへり。源內も起き出でんとせしが、俄に睡氣頻りにして、心身悶亂しければ、其の儘彼處に打臥しぬ。稍暫く心をとり直し、氣を靜めて四邊を見れば、しん／＼と苔むしたる岩窟の內に坐したり。始めて驚き急ぎ立ち出で、走るともなく歩むともなく、五六町出でたれば、宵に召し連れたる下人に會ひぬ。餘り不思議に思ひ、「爰は何處ぞ。」と問ふに、「石山の麓なり。」と云ふ。下人申しけるは、「宵に見えさせ給はぬ故、此處彼處と尋ねて、此處に笠の落ちし故、怪しく

思ひて尋ね侍るに、不思議に御目にかゝりつる」と云ふ。源内はそれより宿に歸り、又心地例ならずとて打臥しける。色々看病するに、その夜ことの外うめきけるが、朝に衾をとりて見れば、全身肉落けて、白骨されたる如くに殘れり。一族皆々不審を爲して、彼の下部の案内にて、さきの所を尋ね見るに、石山の麓汀邊へさし出でたる所に、いうこく遙かに尋ね入りて一つの洞あり。さし入つて見るに、毒蛇のわだかまりたる跡あり、誠に不思議なる化異なり。

四　色慾謹まずば萬行空し

所謂儒經には忠孝の旨を示し、佛は心理の妙諦、かつ神道不思議の徳をなして、濁亂の衆生を導きたまふ、その不思議神力の妙なる事、末世と雖もたえせず、何れを是とし何れを非とせん樣もなし。去りながら就中、利生の方便他に異なるは、陰陽の本尊大聖歡喜天の御誓ひ、現にその妙現はし給ふ事、舊記の載する處多しと雖も、近き頃その驗を聞きしことあり。下總國須田村と云ふ所に、一人の眞言の僧あり、常に法を說き佛意を演ぶるに、その言びんさわやかなる事、子貢も舌を巻き、富樓那も席を退かんと思ふ許り、詞の綾速かにして諸人尊敬す。又近き邊に團田又右衛門と云ふ浪人あり、彼が妻は都の者にて、誠に田舎にはまた稀なる身振なりけるが、何時の頃よりか彼の僧と知音して、

忍び／＼の私語積りて、末は埋木の朽つるとも、よしや何ならずと、互に深く思ひ合うて明し暮しけるが、彼の僧來りて妻と物云ふ態、心得ぬ身振と又右衛門も思ひよりてければ、折々は氣を付けけれども、又慥かなる狀も見えず、一日々々と過ぎけるに、されども所の取沙汰、何時となく信夫山の森の下露、洩れし浮名も四方に聞きしかば、又右衛門日頃待乳山聖天を信仰し奉りしかば、七日の間精進潔齋して、丹精を抽んで掌を合はせ申しけるは、「私今妻の私語を見顯はさんとすれども、その隙を得ず、又その慥かなる證據なければ、根をおすに及ばず。されども四方に立つ名恥かしく、私身忍ぶにたへず。願はくは神力を以て、此の實否をあらはし坐せ」と、肝膽を碎きて祈りける。毎日參詣する事怠らず、既に七日に滿ちける日、彼の僧の己と又右衛門が方へ來り申しけるは、「我御身の妻を犯して、既に二年を重ぬ。然るに御身の目を忍び不義を爲せしこと、誠にその罪遁れ難し、故に我いま刃に伏して其の罪を謝す」と云ひて、自ら誤りを逐白狀し、剃刀を以て喉を搔き割きて死にぬ。眞に神力の不思議、言葉に述べ難し。時に又右衛門女房に故を尋ね問ふに、さま／＼言を外して爭ひしを、強くいため問ひければ、ありのまゝに落ちたり、やがて殺害しぬ。此の事近き頃の事にして、隱れなき事なり。

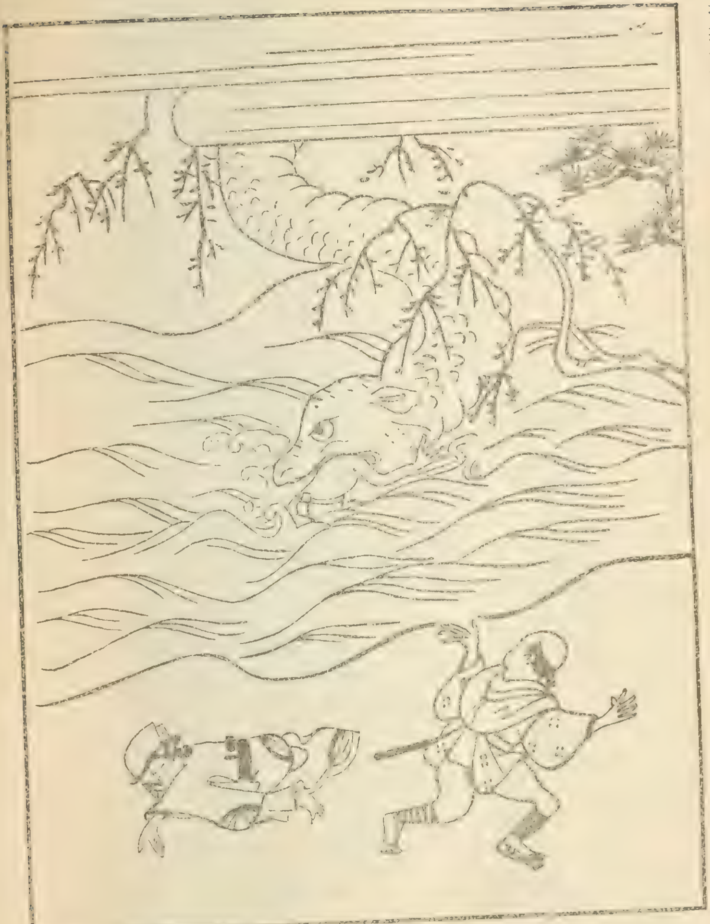
五　末期の罪業僧を顯はす

相州飯山村千須山千光寺は、往昔、右大將頼朝建立し給ひし靈地なり。古は伽藍佛かく甍を磨きしが、今は名のみ殘りて形ばかりあり。即ち本尊は千手觀音にて坐す、大師一刀三禮の佛と言ひ傳ふ、誠に靈驗あらたかなり。然るに中頃の住僧、その行跡宜しからず、施物を貪り私慾を旨とし、堂塔を修理せず、所の者もとやきに沙汰せざりしが、其の行儀佛意に違ひける故にや、何時となく煩ひ付きて、日を重ねて頼み少なくなり行きしに、近里の諸人訪ね來りて、いろ／＼介抱するに、その病中の有様、日比の思ひ現はれ、眞に淺ましき事ども多かりけり。既に今を限りと見えし故、日比立ち入りける者共、思ひ／＼に來り侍りけるに、少し遲れて四邊近きもの四五人打連れ、夕暮方に寺の後の畔を傳ひ行きしに、はや黄昏の頃にて物の文色も見えわかざる比なるに、十四五間隔たりし畑の中に白き浴衣を著たるもの、横に臥して居たり。皆人怪しんで彼所に行きかゝりしかば、忽ち消えて見えず。後にその故を考ふるに、右の畑地ふくよしとて、日頃かの住僧秘藏して、人をも入れず自身農具をとつて、草切り作行を勤めしといへり。故にその執心、末期に及んで現はれし物なり、淺ましかりし妄念なり。さて諸人寺に行きて見れば、住僧は身心悶亂して、今を限りと見ゆ。時に所の老人枕に

依りて申しけるは、「何にても思召す事あらば申し置き給へ。その外の事は御心にかけ給ふべからず、いかさまにもよき樣に計らひ參らせん」と云ひければ、既に落ち入らんとせし住僧、眼を開き苦しげなる息を吐き、むくと起き上りけれども、舌こはりて物云ふ事能はず、佛壇の方へ指をさして、頻りに悶ゆる體に見ゆ。諸人心を付けて、扨は末期に佛を拜み奉りたきとの事ならんと、佛壇の戸を開かんとする。其の座に住僧日比心易く、手跡など敎へし童のありけるが、心得て佛壇の下を開け、何やらん包みたる物を持ち來りて開きしかば、内に金子五兩と角金二つ三つあり。住僧彼の金を見て、なほ〳〵執着を殘したる體にて、苦しげなる息と共に指をさし出し、諸人に向ひ息卷きし樣、誠に業障の嘸と思ひやられぬ。時に彼處にありし者心を察して、角金一つ取つて指に結びつけしかば、先に金を取りて來りし童に、手づから遣りて後も、猶その金を心に留め、苦しむ事やゝ久しうして、終に空しくなりぬ。最後の一念に依つて、善惡の生をひくと佛も說き給ひぬれば、來世如何なる惡趣にか墮しけんと、哀れなりし事どもなり。されども今世間を見るに、金銀持ちたる人は、吝き名を呼ばれ、一生金銀に使はれ、又貧しき者は、いらざる榮耀をつくし、貧の上に貧を重ぬ。とかく過不及の世の中、どう云うても地獄へ落つる者は多い筈。

六　天に祈りて毒蛇を亡ぼす

武江の船町に何某とかや云ふ浪人あり。年久しく浪々の身となりし故、尾羽を枯して裏店の乏しき暮し、朝餉の煙絶え／＼に、住み果つべき行末も、我から覺束なくて過ぎ行きけるが、妻も生活の物思ひにや、煩ひ付きて世を早うしぬ。遺腹の一子七つになりけるを、せめて消えなん玉の緒の、長らふ内の慰みにして明し暮しけるが、扨しも江戸にも住み果て難く覺えける折ふし、駿河の府中に叔父なりける者のありしより、あさましき世渡りに過ぎかねんよりは、駿河へ上れかし、如何やうとも生業の頼りともならん由申し送りし故、流れに棹さすと喜び、彼の一子を伴ひ、馴れし住家を立ち出で、遙々駿河へ上りしに、漸く日數二日を辿りぬれば、酒匂の渡に着きぬ。既に日暮なりしかば、川岸も見えず、行き交ふ旅人も絶え／＼なりけるに、彼の浪人一子を肩にかけ荷物をば川の岸にさし置き、先づ子を渡し置きて、又取つて返し、かの荷物を取りに歸りしに、不思議や川波漲り逆巻き、川岸の少し茂みの竹の林より、四五丈もあらんと覺しき蟒蛇、頭は樽口の如く、眼は天日の大きさなるが、頭をさし出し、川の中へ渡りかゝりたる浪人を一口に、彼の茂みへぞ引き入りければ、川の上下へ行きかゝりたる旅人、手を擧げてあれよ／＼と云ふ程こそあれ、跡なく引き入りて見えずなり行きける。



彼の一子これを見て、泣き悲しむこと限りなし。所の野人村老立ち出で、その故を問ひその行く所を聞きて、送り得させんといへども、有無の挨拶もせず、唯泣き悲しみ河の上下を終日走り廻り、幼き心に、若しや川の岸に流れ寄りしやと、岩角に行きて泣く〳〵見けれども、風に流るゝ木の葉ならで、また浮く物も見えざれば、いよ〳〵悲しむ事限りなし。餘りの事のあはれさにや、此の川岸にひれ伏して幼き身ながら、何とぞ神佛に祈つて敵を報らばやと思ひけるが、「何とぞ我が父を取りし毒蛇を亡ぼしさせ給へ」と天に仰ぎ地に伏し、肝膽を碎きてぞ祈りける。誠に幼うして他念なう、父の仇を祈りける故、天神地祇感應ましまし〳〵けるにや、其の夜大雨車軸を流し、雷電霹靂夥しかりけるが、翌日かの毒蛇神靈の爲に亡ぼされて、川の岸に彼の浪人を吞みながら斃れ死にてゐたり。そのかみ漢土のそうかは、父を毒蛇に取られて天に祈り、其の仇を報ずる事を得、精衛は鳥となつて大海を埋まんと謀る。然るに今の小兒、天に祈つて毒蛇を退治する事を得たり。例少なき孝心なり。その後彼の一子をば、所の者は育みて、漸く成長せしかば、鎌倉へ遣はし出家させけるとぞ云へり。

拾遺伽婢子卷之一　終

拾遺伽婢子　卷之二

一　遊魂の契り

越後國蒲原と云ふ所に、宇平次と云ふうとくなる百姓あり。彼が娘一人あり、誠に田舎にはまれなる姿、心態いうに優しく、絲竹の調べ歌詠む事まで、誰敎へざれども自ら賢く、貴むべき昔、井筒の振分髪の古も斯くや、龍田姫の假に人間に生まれけるかと、片意なる田舎人も目路を迷ひ、髫髮に大角豆の數二つ文字を重ね、父母もいとゞ我が子の慈愛しみは、不具なるも可愛く、愚かなるも愛しき世の中なるに、斯かる美形に自慢して、色々の媒選み、未だ初元結の黑髮、結ぶ緣もなくて過ぎ行きけるが、是れも同國沼垂と云ふ所に、宇平次に劣らざる富裕の里民の一子進之丞とかや云ひし男、七歳の時より所緣あつて京都にのぼり、大覺寺に給仕してゐたりけるが、父母の餘命傾きし故、本國に歸り住みける。如何なる緣にや、此の娘進之丞を垣間見て、静心なき想ひの種となりて、朝夕の食事さへ絶え〲なるほど焦れけるゆゑ、あはれ文かへすおもはくはともあれ、丸木橋の緣もあらば、戀の中川に渡してと、あこがれ暮しける。折ふしさる所緣ありて、進之丞方へ一筆の色に、

数々の想ひを述べて送り侍りけり。仲人やがて進之丞方へ密かに送りしに、進之丞も予て此の娘の事聞き及びしかば、取る手もたゆく開き見るに、

ながらへば我もあふ世の頼みとて猶惜しまるゝ我が命かなとは、未だ頼りある心とこそ思ひ侍れ。浮き身はかた様へ朝顔の日かげ待つ間の露の命、消ゆるを待つ事にて候。昔男が茂みの河なみに誓ひて、袖は濡ずやと云ひし古事も心なく、詠人の思路をきゝても、さまで哀れなるさまに思はざりしが、今此の身に思ひしりなば、忍ぶ思ひの辛さ、せめてあはれと聞にせ給へかし、人目の関に遮られ、心の門閉ぢて暮しなば、心のたけ思召し知り給へ。

物思ふ涙のはてのいかならむ逢ふ限りのなくてやみなば

つらからば絶ゆうつせみの身をかへて後の世までや人を恋ひまし

と、書きつゞけし筆のすさみ、進之丞も殊に思ひ焦れしが、いや／＼未だ縁も定めぬまさなき事、人の思はん所もありと思ひ返して、返事をだにせず打ちすて置きしに、娘はいとゞ思ひに堪へかね、その後々を消息して、露木のわつかに繋るばかり聞えしかば、進之丞も哀れには思ひしかど、つれなくのみ過ぎゆきける。ある夜進之丞燈を挑げ、外傳の書に心をすまし居たるに、夜も漸う草木も眠るといふ丑の刻に移る頃、雨さへ通り降りしきて、いとゞ物寂しく心細きに、障子にうつるものあり。怪しみ

思ひて、少し引きて見出したれば、庭の茂みより、螢籠火の如くなる青き幽なる火燃え出で、暫し消えもやらず。こは不思議やと見るたれば、その火の陰より彼の娘あらはれ出で、縁に上り進之丞が傍に来り、涙に咽び暫しは物も云はず、伏し沈みゐたり。進之丞怪しく恐ろしさに、是れも瞬りて物も云はざりしに、かの娘進之丞に申しけるは、「さりとは此の間文の数々書き送りしに、一度の返事さへし給はず、如何に御心にそまぬ浮き身なりとも、情なくて人を戀ふる物にてはなきを、恨めしき御しんのほど、いつの世にかは忘れはべらん」と、うち口説き聞えければ、進之丞、「御恨みは至極し侍る。我が身もその方の御事、忘れもやらず思ひ侍れど、父母の未だ定めぬまさな事、よそのそしりも如何と、態と情なくは打過ぎ侍る。とかく我が心の内、あらゆる神かけて、其方より外には見ゆべき心も侍らず」と、言葉を盡して云ひ交しければ、娘うれしげに、「其の御心底を知らで恨みし口惜しさよ。今よりは二世かけて語らひ侍らん」と、いと睦まじく寄りそふに、進之丞情の色に心とけて、其の夜より一つ衾に枕を並べ、来し方行く末をうち物語るに、夏の夜のならひ、暁の鐘と共に、飽かぬ別れの涙ながら立ち別るゝとて、娘、

　　もらすなよ道の[illegible]ふみわけし一よのふしの露の手枕

と、泣く／＼詠じけるを聞きて、進之丞、

わけわかぬ袖のわかれのしのゝめになみだおちそふ道芝の露

と、斯歎に詠じつゝ立ち別れけるが、泉庭に下るゝと思へば忽ち消え失せて、又前の大蛇となつて、漸々と空に昇り、行方なくなりぬ。それより夜々来りて契る事半年ばかり。然るに彼の娘只ならずなりて、月を重ね一人の女子を生む。されども其の子はそのまゝ死にぬ。父母怪しみて色々詰問するに、二十重の圍みなれば、暫く人の越え来るやうもなし。その上娘は父母の臥所に臥す故、不審をなすべきやうなし。強く問ひ極むるに、一筋で進之丞を慕うて、その思ひの餘りにや、夜な／＼通ひて契ると云ふ夢を見しより、外に覺えなしにと、あらゆる神かけて誓ひし故、父母も信を取りて其の後互の親相談じて、縁を結びけると云へり。一心通ひて契りし事、誠に不思議なる事なり。

二　雷の評話

關白秀吉公未だ羽柴筑前守と申しける頃、播州姫路に在城し給ひし剋、城外東隅に、大きなる榎あり。時に夏半ばなりしに、墨雲たな引きわたり、稲光頻りなりしに、雷崩るゝが如く鳴りはためき、閃うつるが如く、終にかの榎に喰ち掛りて、此の木二つに裂け、その間に雷挾まれたり、動搖する事數刻して、暫しありて空晴れたれども、彼の榎の邊、雲閉ぢて動き出まず、國中の貴賤集まり

て、是れを窺ひ見るに、雲、榎枝をかすめ、文色詳かならず、怖れて近づく者なし。秀吉公きこし召し、かの所に行きて見給ふに、人の申すに違はず、雲深く籠閉めて、その別ちさだかならず。秀吉公則ち雲霧を別けて、樹下に近づき寄り給ふときに、甚だへきえき強うして、動搖する事夥し。されども秀吉公少しも恐れ給はず、樹下に立ち寄つて宣ひけるは、「それ雷は陽氣を體とす、故に夏の初めに起つて、萬物も創長し、五穀是れにかけて稔る、全く他の害を爲すと聞きしが、斯かる妖怪を爲す事心得難し」と宣ふ。時に樹上よりうはがれたる聲にて答へけるは、「我は即ち雲雷なり、汝が申す如く陽德を備へて、五穀を成就せしめ、または衆生の善惡を正し、積惡の家に落ちて禍を爲し、其の惡を戒む、全く横道の禍を爲さず。然るに此の榎の内に毒龍ありて、人民に災を爲さんとす、天帝是れを怒りて、即ち我に命じて討たしむ、我是れを討つに誤りて、劈としてそのうちに挾まれたり。君願はくは仁愛を垂れて、我ふたゝび、雲上に歸る事を得しめ給へ、然らば必ずその高恩を報ぜんこと」と、云ひ畢つて暫くして動搖止みぬ。秀吉公即ち番匠を召して、この木を挽き割らせ給ふに、雲漸々と空につらなり、雲上に鳴り響きて虚空に飛びさりぬ。それよりほどなく信長を明智日向守弑して後、秀吉公大軍を起し明智を亡ぼし、唐まで從へ、武威を四海に振ひ給ふこと、雲雷の利生を施しけるなりと云ひ傳へたれ。

三　戀慕の迷魂

櫻は色深うして家苞に手折られ、杉は色なうして心やすく枝をかさぬ、人も色あれば忍ばれ、香にめでゝ迷ふ、されば聖も是れを語り戒めたり。志賀寺の上人は、御息所の窈窕に眞如の關緩びぬ。奈蓮法師が安樂行品の心を詠ぜし歌に、女郎花色香ふきそふ野邊はたゞよきてゆくべき法の此の身は、と詠ぜしも、理に覺り、迷ひ安きは此の道なり。爰に武州淺草の邊に、何某とかや云ふ富裕の町人あり、一人の娘を持てり。その美はしき事、小町が影の變らでと云ひし昔を欺き、龍神のかんせんでんの俤もかくやと思ふ許りの色に、未だ白地の若人は更なり、相生の緣を結びてし中に、嬰子を抱きしきうじの齡重ねしも、彼の娘の花の姿には、一夜限りの音に通ふ情もがなと、待乳山の嵐のつてに散り來る言草の數々、堆く山を爲しぬ。頃しも彌生の始め、彼の娘窈窕きし姿、垂簾の内にかしく、供の女子二人三人、深川靈巖寺に詣で、墓所の邊廻り行き、苔に枯れたる石碑の文字に、折節の物の哀れをも催し、此處彼處と休息みしに、此の寺の僧智闇とかや云ふ法師、此の娘の姿を見て、覺えず心地惑ひ、魂浮れ心ならず佇み詠め立てしかば、娘も此の僧の氣色怪しく、急ぎ寺中を出でしに、彼の僧も後につき浮れ行きしが、頃しも春の最中、貴賤うちかひ、人だまひに紛れ入りて、つひ

に見失ひぬ。力なく本堂に歸ると、佛に向ひ奉り怪れども、妄想の氣のみ立ちそひて、只忘れぬは彼の佛、よしや此のまゝにてはとても惡趣に墮すべし、思ひ切らんとすれど、妄想立ち添うて忘るる事を得ず。彼の方の行方を知らざれば、戀の便を頼むべき渡守もあらず。よしや此の上はこの深川の流れに身を沈め、一念の心鬼容しからずば、死後に思ひを晴らさんと、深く惡念を起し、永代島の濱に出で、既に身を沈めんとせしが、なからん跡に若し我がかたざまのものの尋ぬる事もやと、側の松を小刀をもつて押し削りて、二首の歌を書き留めぬ。

せめて我が心ひとつに沈む身の思ひの色を哀れともとへ
終にまたうき名やたたむ長らへて住み果てぬべき浮世ならねば

と書きて、終に水屑となりぬ。されば彼の娘、夕暮の事なりしに二階に上り、隅田川の行きかふ船を眺め居たりしに、暫しありてあつと云ふ聲と共に息絶えたり。父母驚き藥など與へければ、半時許りありて生き出でたり。「心地は如何ありし。」と問ふに、娘申しけるは「先にわれ川の面を眺めゐたりしに、水の面に痩せ衰へたる法師の浪の上に現はれ、我に向ひ青き火を吹きかくると思ひしより、覺えず。」と語る。それより心地煩ひて打臥しけるが、色々の譫語を云ひて「あら恐ろしや、法師の我が枕に寄り添ひぬるは見えずや。」と、あられなき事のみ云ひて、命をも頼み少なき體に見えければ、父母

驚き悲をあたへ、且しやうの祟りならんと、陰陽師に頼みて祈禱などしけれども、更に其の驗なし日にそひて頼み少なく見えければ、父母嘆きの餘りに、日ごろ娘怠らず信仰致せし故、殊に靈驗ありたる事をたのんで、淺草の觀音へ詣でけるが、頃しも卯月十七日、籠の男女引きも切らず、何某夫婦も娘の宿願いたさんと寶前に詣で、病氣平癒の丹精を致し通夜したりしに、觀音父母の夢に告げさせ給ひけるは、「汝が娘が病の本を教へて、宿願かなふる事との謂れあり。娘過ぎし彌生半ば、靈岸寺に詣でし時、彼の寺の智閑といふ法師、娘が艷なる姿を見て邪淫の念を生じて、つひに深川の汐水に身を沈め空しくなりぬ。彼が一念娘を惱ます所なり。されども娘常に我を信ず、その上邪の振舞なき爲さす。かれは法師の身として、佛の戒め給ふ邪淫の爲に身を失ひ、かつ人を惱ます。是れ積惡佛力を以て退けん事安し、必ず三日の内に邪氣平癒すべし」と、あらたに示現ましまして夢さめぬ。父母悦んで歸りけるが、程なく全く快氣して、幾程もなく婿を取りて、愈家富み榮えけり。その後文月魂祭の比なりしに、靈岸寺の住持閑所に入り休み給ひけるに、夜も漸う丑三つ過ぐるころ、緣に人のあかる音聞ゆ。住持夢さめて、夜陰に及んで訝しく思ひ、何者ぞと言葉をかけ給へば、應へもせず障子を開けて入るを見給へば、智閑なり。瘦せ衰へてありし姿とも見えず、燈の影に蹲りて涙に咽び居たり。住持、「汝は智閑なるか、何故に今來れるぞ。」と問ひたまふに、涙を抑へて申しけるは、「御

愚かしながら我仇なる色に迷ひて、斯く空しく淵水に身を沈めぬ。一心を轉じ妄想を拂ふべき彌陀の利劍も、惡業の敵競ひ來るをば轉ずる事を得ずして、終に惡趣に墮して、今宿業の獄中にあり。せめて思ひ沈みし人共に、一念の業火に焦れんと思ひ伴はんとせしに、我邪の妄念によつて、科なき人を惱ませし故、思ひ人に逢ひなく、我が業力愈重くして、刹那も苦しみの止む時なし、御不審あらば是れ御覽ぜよとて、障子を開けると思へば、ありし姿は消え失せて、夜の衾に烈々たる猛火燃え出で、その中に智閑が姿現はれ、手枷、頸枷を入れられ、燒け炭の如くなる形になり、苦しみの態ただふべきかたなし。住持の云く、汝が爲跡良く弔ふべし、心安かるべし。」と宣へば、ありし姿火々と共に漸々として消え失せぬ。

四　鶄呼夢物語

往昔、足利義政公御法體の後に慈照院殿道喜と號し、武功世にすぐれ給ふのみならず、かつ風流をこのみ、洛陽東山の麓に御殿を建て、庭の眺望其の比類ためしなし。築山にはやしほの紅葉、尾上の松、吉野の櫻、野田の藤、扨泉水の汀に井手の山吹、花菖蒲、三河の澤の杜若、周茂叔が愛したりし濁りにしまぬ蓮葉、我おちにきと戲れし嵯峨野の秋の女郎花、唐の日本の風景を、さながら庭に集め

給ふ、今の東山銀閣寺是れなり。其の頃大明より白[illegible]の鸚哥を捧ぐる事あり、その形美なるのみなら
ず、その言詞詳かなり。義政専ら是れを愛し給ふ故、殿中の女中殊の外羨み給ふ事斜ならず、其の
名を雪衣と號け給ふ。ある時義政女中を集め、雙六をうたせ見給ひしに、中にも義政寵愛の女中淺路
の局、雙六に負けんとし給ひしに、彼の鳥飛び來り、羽を以て盤中を打ち散らしぬ。義政是を始め、別
けて賞じ愛し給ふこと斜めならず、詩篇を教へ給へば、數遍にして卽ち覺え、忘るゝ事なし。ある雪
の夜、此の鳥淺路の局の鏡臺の上にのぼり語りけるは、「我ゆうべ夢に君と倶に南殿の側に遊びしに、
忽ち鷹飛び來りて[illegible]、速かに命をとると見侍りし。」と、羽を垂れて語る。淺路の局急ぎ此の事を義
政に告げ給ひしかば、義政憐み給ひて、殿中[illegible]、かつ是般若心經を教へたま
ふ、言下に覺えたり。「[illegible]此の經を讀むべし、汝が災難必ず除けん。」と委しく教へ給ひければ、怠ら
ず毎朝是れを唱ふ事、人間に變らず。年去つて延德元年三月の中旬、大覺寺の花盛りなる由聞召し、
[illegible]の女中數多、彼の鳥をも籠ながら愛し給ふゆゑ、御輿に入れ大覺寺へ御入あり。終
日[illegible]、鳥の籠輿へ入れんとせしに、忽ち北山の方より鷹飛び
來りて、彼の鳥を[illegible]けり。義政を始め御供の女中、御[illegible]、卽ち東山鹿園院の麓に埋め
給ふ。果して翌年義政も逝去し給ひけると云へり。

五　武功に因つて龍宮を見る

勢州安濃津羽山權太夫といふ獨樂の隱士侍りける。元より智德勇武相兼ねたる侍にて、詩文は李白韓退之を欺き、和歌は人丸赤人の下風を學ぶ。武は樊噲が勢ひを備へ、謀は韓信周勃が得ざる道を得、幕の中にはかりて敵を退けつべし。時は昔が跡を追ひしかど、世中の飛鳥も悉く離しとせず。或ひは冬の寒き時雨の、茅が軒端を訪るゝも懐かしく、羽山は燈幽にして卑小を友として、古今の書取りいだし、代々の興亡治亂考へて、暫くうち傾きたれば、夜も漸く子の刻ばかりに至るころ、門を敲く者あり。羽山「何者ぞ、夜更けて來るは心得ぬこと」と、烈しく答へて門を開けざれば、重ねてまた門を叩く。聞き馴れざる聲にて「一昔の武功を求め及び難く越し候。あはれ門を開けさせ給へ、もの申さん」と云ふ。羽山此の言を聞いて、やがて刀おつ取り、かしこに出でて門を開けて見れば、其の長三尺ばかりなる小人なり、大きなる龜に乗り來る。月影に見れば面は赤うして紅の如く、身には絹布の別ちも見えざる物を著したり。羽山その有樣の異相なることを怪しんで、刀の柄に手をかけ「おのれ何者なれば怪しき姿を現はすや、人にこそよれ、此の羽山を誑さんとは思ひもよらず」と申しければ、その時彼の異人、「御不審は最もなり、我海底に住む猩々といふ者なり。これな

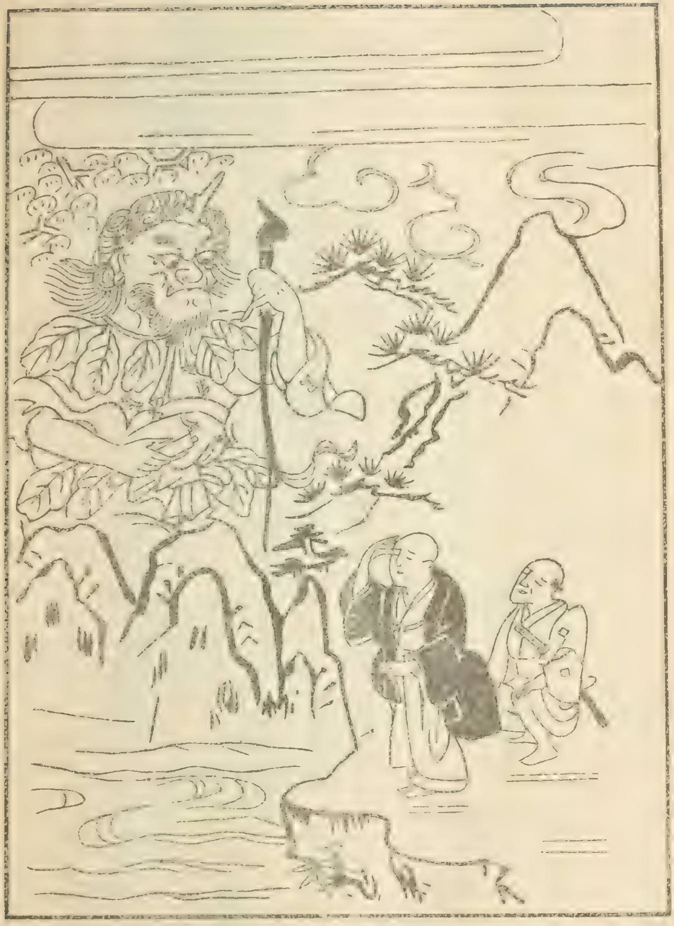
る龜年來餌を爭ふ大敵あり、是れを君の手を借りて退治せんがため、頼み奉る所なり。然るに我よくもの云ふ者なるがゆゑに、龜に雇はれ來りし」と答ふ。羽山あやしみながら、その云ふ所また謂れありと聞きて、其の意趣を問ふに、また應へて云く「此の龜は是れ御前の精靈なり、海中に於て年々子を生ずること夥しく、しかるに千年を經し鱗、東海に住へ、其れ來りて龜の子生ずる毎に是れを取り、龜、防がんとするに力弱し。然るに君文武の勇士なるのみにあらず、又射藝の達人なり、故に頼み奉らんため來りし」と答ふ。羽山つくづくと聞きて「申す所聞き屆けぬ、去りながら我人間の身として海底に入る事能はず。然らば汝が申す所、請合ひたりとも、又益なきに似たり」と答ふ。再ねて申しけるは「其の儀は請合ひ給へば、誘引し參らせん事いとやすし」と云ふ。羽山時に承知しぬ。時に彼の異人龜より降りて「此の龜の背に乘し給へ」と云ふ。羽山も怪しみながら龜に乘りしかば、忽ち海中に游ぎ入りぬ。白濤左右に別れ、海中十四五町も行きなんと思ひたれば、かう／＼たる平地に出でたり、蒼天白日常の如し。こはそも不思議の世界に來りしものかなと、四邊を見めぐらすに、草木土石の富麗はしき事斜ならず、目馴れざる言語に盡し難し。さて、龜より下りしかば、龜は何方ともなく失せぬ。時に先の異人「此方へ來り給へ」と導き行き、その間十町ばかりも過ぎなんと思へば、一つの樓門に至る、この綺麗莊嚴なること云ふばかりなし。門に入りぬれば一つの金殿

あり、その美なること又言語の及ばざる所なり。四方に蜀江百千の錦を掛けたり、庭には七寶の沙を敷き充てり、桃李の花おのづから咲き亂れて、長生殿も斯くや。われいの景色にて、さやしや天上に至りぬるかと怪しき程の美なり。彼の異人導きて殿中に請ず。暫しありて童女、未だ目馴れざる樹菓を金絲華の盆に積みて、羽山に供へたり、やゝ程經て、小龜を頂に戴きたる人立ち出で、羽山に一禮して云く、「我は是れさきに見えたる大龜の精靈なり。かねて談ぜし如く、爰に大敵あつて、我が子孫終に斷滅せんとす、故に君が武功を頼んで退治せんと思ふ。然るにかかる來臨悦びに堪へず」といひて、種々の珍味を捧げて羽山を饗應す、其の給仕の男女等、皆小魚を戴きし物なり、諸々の魚精と見ゆ。稍暫しありて上下騒ぎのゝめき「敵寄せ來りぬ」と云ふ。羽山則ち立ち出で見るに、東のかたよりその色黑くして、大山の如くなる者來る。羽山は二所どうの塗丹の弓にせき弦かけ、十五束三つ伏せ、眞羽に鴈股のわたり八寸許りなるこみを筈元まで打ち込みたるを、忘るゝ許り引きしぼり、南無八幡大菩薩と觀念して放つに、あやまたず彼の山の如くなる者の頭へはつしとあたつて、腦を碎きて立ちにける。射られて動搖すること夥しうして、地に倒るゝ響地震の如し。龜精を始め諸の魚精に至るまで、悦ぶこと限りなし。即ち羽山を上座に請じて、重ねて饗應の上、二つの寶を出し與ふ。その時に龜語りて云く、「此のうす衣は是れこれを著しぬれば、人前に有りと雖も人知る事なし。

又此の槌は打出の小槌なり、是れを用ゐれば心に隨つて萬寶を得る、此の度の御禮に是れを奉ることと云ひ終つて、羽山一禮して殿を出でければ、又一つの大龜前に現じたり。羽山龜の上に坐せしに、又水中をわくる事暫くして、忽然と我が門の前に出でぬ。それよりして羽山の終る所をしらず。

六　醫師の神占

永祿の初年、武田信玄未だ大膳大夫晴信と申し侍りける頃、甲府に一人の醫師あり、木口道庵といふ。醫師に妙を得て、能く病者の生死並にその病の根元をよく知つて療治するゆゑに、癒えずといふことなし。國中は云ふに及ばず、近邊五六ヶ國の内、病者あれば此の道庵を頼まざるはなし。ある時、道庵黄精膏を調合せんがために、黄精を需めんと志して、信州戸隱山に入りしことあり。深山に分けのぼり、山また山を尋ぬれども黄精なし。誠に此の藥は仙人是れを取つて、長生不死の藥を煉ると云ひ傳へしことなれば、容易くは有るまじと思ひ、なほ山に滯留してたづね求むるに、彼處の谷かげより人一人立ち出でて道庵に向ふ。その有樣を見るに、丈は八尺許りもやあらん、面は夜叉の如くにして、髮四方へ亂し、額に一つの角あつて、其の色甚だ青く、眼の光星の如く、恐ろしさいふ許りなし。道庵に近づき申しけるは「汝我を畏るゝ事なかれ、我はこれ一切の厄神なり。我が類、世間にわ



たつて、諸々の術を授けて人を救はしむ。汝、医道を行ず、是れによつて我が年来の術を伝へん。それ傷寒疫病その類皆同事にて、諸医分けかねたる内の邪気有り、六けいに属る。それ五臓内にあつて五声を出す、歌哭呼笑呻是れなり、五音も又五臓より出づ、宮商角徴羽是れなり。然れば病者の声を以てその腹中の邪気を察す。肺の邪気には声重し、脾の邪気には声軽し、肝の邪気には涙を流し、しかれども大多く吐くには、心経の邪気と知るべし。斯くの如く病者の声をもつて五臓の病を知つて薬を施す、是れを軒伯門といふ、古今の名医悉く是れをあかせり。これは是れ七情の邪気に感ずる故、諸々の寒暑湿の外、邪気虚に乗じて入る。また我が為す所の病は悪業の邪気にて、悪行鬼神等の及ぶ所にあらず。されどもその術なきにしも非ず、今黄精を求めて丹田に入る、その志また切なり。医道の鏡となつて人を救ふの志、我感心する故に、一つの秘術を授けん」とて、紙上にも顕はれたる秘書きたる一巻の書を授けしかば、道庵平伏していたゞきて右の書を取りしかば、翁神は何方ともなく失せぬ。それより道庵いよいよ道庵医術日日に秀でしかば、隠れなく打続きたる世の聞えに、その頃、昨を仰ぐ。

拾遺御伽婢子巻之二 終

拾遺伽婢子卷之三

一 因果の明鏡

明曆初年の頃、武江の下谷邊に、長谷川流意と云ふ醫師あり、娘一人持ちしが、その麗はしさ例へんかたなし。心ざまいうに優しく、春は上野の花詠めて和歌の題とし、夏は隅田川に船遊びして、三筋に若男の心を動かす。秋は月に和して、折からの物の哀れを思ふ。されば紫が石山のすさみ、伊勢が色文の奥義を極め、演說するに聞く者舌をふるひぬ。繪よく書き、花結びその外女のすなるわざ、一つとしてなずと云ふことなし、誠に織姬の再來ならんと沙汰しぬ。折から桃花の節句なりしに、鏡に向ひ化粧せんとしけるに、鏡の内に年の程十八九許りなる女の、いうに優しく嬋妍なるが、二歳許りなる小兒を抱き佇みたり。娘怪しみて、我が心の影にて若し我が姿をかくみしやと、心を靜めいろいろに見れども、疑ふべくもなく先に見えし如くなり。それより心に懸りて鏡を仕舞ひぬ。又程經て見れば前の如し。氣の毒に思ひ、父母に斯くと云ふ。流意元より博智の儒醫なりければ、かつて信ぜず。かかる事は氣結ぼほれぬる時は、有る習ひなりと用ゐざりしが、強ひていふ間、不審に思ひて見

しに、申すに違はず形見えたり。流意言をかけて云く、「汝何者なれば、斯かる姿を爲すや」と、現の人に云ふ如く申しければ、彼の姿答へけるは、「我は駿河國有徳なる百姓の妻に侍り、子一人あり、今御身の娘は是れ本妻にてありし。然るに亭主他行せし留守に、我はその子共を深き井に沈め、上より重き石を投げ入れ殺しぬ。扨亭主歸りしかば、我は子を抱き、何方ともなく逐電せしと僞りしかども、天命遁所を得ずして、終にはかなくなりぬ。その時の子即ち此の子にて侍り。過去の事なりと雖も、恨み未だ晴れず、少し宿縁あるによつて、御身の娘に生まれたり。我は業障拙うして、未だ惡趣に墮して、その苦しみ刹那も絶えず、その恨み骨髓に徹つて忘れがたし、故にその恨みを報ぜんと思ふ。娘必ず近き内頭ひつくべし、如何に醫療を加へ、佛神に祈りても、その甲斐あるべからず。其の内迎ひに來るべし」と、云ふかと思へば失せぬ。それより四五日を經て、娘頓ひつきぬ、さまざま養生せしが其の驗なく、終に空しくなりしと云ひ傳へたり。過去の宿業、再世に仇を爲せしこと不思議なる事なり。

二　世俗を岩木に寄む

天正年中に、大和の郡山に佐原民部と云ふ者、學智博覽の聞えありしが、天性隱逸にして、田舍に

ゝたつて下人に少しの田畠を耕させ、其の餘力をもつて今日を暮し、たゞ常に外傳の書に心を寄せ、居亭心あるやうにつくりなし、折ふしは四邊の小河に出でて釣を事とし、太公が古を學び、陶朱公が昔の樂しみを思ふ。やゝ人にも交はらず、流水の清きに自ら心の垢を雪ぎ暮しけるに、紅は園に植ゑても隱れなく、錐は嚢子の内より、其端顯れしが如く、松永彈正久秀、民部が博學たる由を聞き及び給ひ、戰國の軍慮の佐けとせんがため、原田權兵衞、石井孫三郎兩人を使者として、民部が方へ申し遣られけるは、「今戰國の砌、彼の三國の鼎を爭ふ如し、願はくは君が智力を以て、我が戰場の助けとせん事を思ふ。今山居して不自由なる生活に世を送らんよりも、我に從ひ給へ、領內にて二千石の領地を賜ふべし」と遣はされたりけり。兩人、則ち民部が草庵に尋ね入つて、此の由申しけるに、民部折節書に向ひ書を讀みてゐたりけるが、兩人來りて座につけども、振向きもせずして右の口上を聞き終つて、猶會釋もせずして申しけるは、「久秀頃日異國より白鷹を求め得て、方丈の金籠に入れ殿上に置き、いろいろの魚鳥様々の美食を與へ、寵愛し給ふと聞く。彼が心には、金籠に入れて殿上に置かれて、種々の美食に飽かんか、又山野を心のまゝに遊んで、大雪大雨大風の折ふし餓ゑに望まんか、いづれをか如何思はるゝ」と云ふ。兩人答へけるは、「それは彼が心を計るに、金籠に入り殿上にて美食に飽かんよりは、山野を心のまゝに飛行し、折ふし餓ゑても彼が樂しみ、是れに過ぐべからず」と

云ふ。佐渡守頷きて云ふ、「然らば我も今久秀の仰せに從ひ、二千石を領じ、家族と對し樂しみに耽るべし、是れ明らか自然の食祿に入れ、既に有つて美食に飽くに似たり。然れば樂生じなば、心驚色慾等の諸々の苦、其の内に變はらん。その上我々たまたま八に君子の道を聞き覺え、善惡を少し辨ふる氣あり。然らば慰を得ては、その福壽を願ひんが爲に、久秀不仁の儀あらば是れを諫むべし。しからば必ずその仰心に違ひ給ふべし、逆らひなばいかりくせらるべし。その上今身に於て不足なし、一兩人下人を召し置いて耕させ、わが爲の年貢を納め、餘有るをもつて飼人を養ひ、又或は小河の邊に出でて、釣を垂れ樂しむ。もとより妻子無ければ、貯ふべき家財いらず、たゞ明月清風に心をすます。今此の樂しみをすてて、久秀に仕へ奉らん事努々ならぬ事也。その上我に近き内、志す方有りて、永く此所に住すべからず」と云ひ終つて、惑はるゝ事もなくなれば、兩人も席を立つて歸り、此の由久秀に申しければ、實に重ねて久秀仰に諫ね給ひしに、佐渡守は早世有りよつて何處へ行きけん知らず。

三 女習器の敵討

明日と暮らす今日と暮らして飛鳥川、ながれて早き月日ぞかし。誠に過ぎにし事を思へば、夢とや云はん實とや云はん。こゝに正保年中のころ、早川作右衛門と云ふ侍あり、或る仔細あつて生野傳内と云

ふ者ニ不時に口論を仕出し、つひに討たれ侍りぬ。其の子作右衛門に二人あり、兄は作之丞とて九つ、妹はおはつとて七つにぞなりける。然るに作右衛門討たれて後は、京にありける母方の叔母の許に引取りてご養育しける。とゞまらぬは月日にて、既に兄は二十一妹は十九にぞ成り侍りける。兄弟打寄りて云ひけるは、「すでに父討たれ給ひて、もはや十三年になりぬ。此の年月敵を心掛くれども、我狙ふ由を聞きて、今は國にも住まず、東國の方へ落ち行きしと聞く。取りわけ今年は十三回忌の追善に、何とぞ敵のありかを尋ね出し、討ちて供養に報ぜんとおもふなり。汝も女なれども、侍の娘なり、我と共々に敵にめぐりあひて、一太刀恨むべし。近き内に東國へ旅立たんと志す」と云ひければ、妹は此の由を聞きて、「忝き仰せにて候。妾は女なれば足まといにもやならん、古里に留まれと仰せらるゝかと存じ候所に、かかる仰せこそ嬉しけれ。さらば近き内思召し立ち給へ」と、只管に勇みければ、兄も嬉しげにそれより用意して、明日は旅立たんと志しける日より、作之丞風の心地に煩ひ出しけるが、次第に頼み少なくぞなり行きける。妹悲しく思ひて色々勞りけれどもその驗なし。叔母も驚き様々醫療を盡し養生しけれども、その甲斐なく、今は早此の世の限りに見えし時、作之丞妹おはつを呼びて申しけるは、「元より人倫に生まれて、一度死の道定まれる理なれば、始めて驚く理にあらず。されども我は身に思ひのある身なれば、その功成り名遂げずして死せん事、誠に口

惜しき次第なり、併しながら是れ又力およばぬ事どもなり。何とぞ父の追善に、させる作善をばなさずとも、汝と共々に敵に廻り合ひ、討ちて手向けばやと思ひし事も、皆徒らごととなりぬ。汝、女なれども流石某が妹なれ、未練の心を持たずして、何とぞ敵に廻り合ひ、討つて父に手向け、又某が冥途をも休むべし。若しあらぬ方に心ひかれ、道ならぬ働きを爲しなば、草の蔭にても恨むべし、相構へて兄が云ひ置きし事を忘るゝなよと、泣く／＼庭訓を殘し、さて母に向ひ、此の年月の御奉仕、生々世々忘れがたく存じ奉り候、此の上ながら妹が儀賴み奉るといひて眠るが如く息絶えたり。母妹もろとも歎きに沈みけるが、さてあるべきにもあらねば、終に一夕の煙と爲しぬ。妹おはつは墓所に七日の間、心の及ぶ限り追善のことなどとり營みて、それより兄の云ひ置きし如く、東國に下らばやと思ひたちけるが、とかく女の身にて此のまゝに下りなば、道々宿々にて、如何なる憂かりし目にも遭ひやせん、然ればとて兄が志をも背くと云ひ、かた／＼口惜しかるべしとおもひて、丈なる髮を押し切り、童の體にてぞ下りける。此の事叔母に知らせなばよも許さじと思ひて、夜半にこきれつゝ、ひそかに忍び出でつゝ、東國へぞ下りける。されば叢野傳内は作右衛門を討ちしより、彼の子供ある由を聞いて、東國へ下り、とかく漂泊しけるが、緣を求めて今は陸奥國の守に仕へて、心やすくぞ暮しける。おはつは兼て此の事を聞きおよびしかば、陸奥國を志して、遙々と下りける

に、先づ東國につきしより、城下に徘徊して、何とぞと志しけるが、彼は城内に住所をしめて、しかも城外へ出る内は、供數多召し具しける間、心に任せずぞ過ぎ行きける。爰に同じ國の守に給仕しける伊佐半右衛門とかやいひし者、城へ出仕しけるが、おはつ城外にやすらふていたる、半右衛門つくづく詠めけるが、憎からぬ姿に感じ、心取れて側へ立ち寄り、御身は何處如何なる人ぞ、其の樣賤しからぬ身にて、かく人もつれず此所に徘徊し給ふは、如何なる御事にて候ぞ、昔御内奉公の望みもあらば、如何樣とも某計らひ參らせ候はんなど、懇ろに尋ねければ、おはつ是れを聞いて、爰に某此所にやすらひ候ふを御見咎め下され、若し御内奉公の望みあらば、御取持ち下さるべき由、近頃忝う存じ奉り候、私は是れより遙か上方の者にて侍り。さる仔細あつて親の勘氣をかうむり、當所白川に某が叔父にて候ふ者を頼み、頃日當所へ罷り越し候ふが、草深き遠國とは申しながら、上方にも勝る賑やかさ、故郷懷かしく、又は遠路の旅疲れをも晴らさばやと存じ、今日此所へ罷り出で候ふ處に、不時に御目にかゝり候段、淺からぬ御緣と存じ候ふと、うち歎きたるけはひ、いうに優しく見えければ、半右衛門妙なりし色に心とれて、「御名は何と申し侍る、又御宿にばかり御座候へば、御氣詰りにあるべく候まゝ、某方へも御立ち寄り候へかしなど、懇ろに語らひければ、おはつは敵のたより、屈竟のことかなと嬉しく思ひて、「私は早川初彌とまうし侍る、左候はゞ御宿へ

も折々御噂ね申し侍らんと云ひ、懇にうち語つてわかれけん、それよりおはつ折節に半右衛門方へ立ち入りければ、互に今は心安くなつて、ある時半右衛門初瀬にうち向ひて、此の月日おもひのあまりし心のたけ、なほ少しは色にも顕れ給はぬにやなど打口説きければ、初瀬顔うち赤らめさし俯き、暫し應へもせず涙に咽びて、

よしやよし袖の涙はもらすとも誰ゆゑとだに人のしらねば

とうち詠じて、よよと泣いてゐたり。半右衛門驚き、こは心得ず、如何なる御事にて候や、君は如何なる御心のうちに思召す事候や。此の日比斯くまで御心易く申し交せし事なれば、御心底を残さず御物語り候へ。某いかなる身にても、又御為にならぬことはあるまじきに、打捨てて語に聞えざれば、おはつ、よしや此の情の上からはと、歎に堪へかねたる風情見えて、嘆く處に、かく情ある御言葉、いつの世にかは忘れ候ふべき、今はことさら私は女にて侍る、父は早川作右衛門と申し侍りしが、播州姫路の藩内といふ者に討たれ、兄は作之丞とて候ひしが、去年の冬世を早うし、頼もなき身に侍りて、然るに其の節敵は遁れ侍りしに、敵はいま隠れ居る由、父作右衛門を討つて後、此の所に来り御領内に紛れ有る由を聞き、兄作之丞今年父の十三回忌の追善に、敵を討つて手向けばやと思ひ立ち候ひしが、不幸にして身まかり候ふ。臨終の時妾を呼び寄せ、女の身なりとも、なにとぞ敵にめぐり合ひて、

我が瞋恚をも休めよ」と申し置き侍りき。その言葉の棄て難く、女の身にて斯く遙々下りし志、哀れと聞かせ給へ」あはれ此の程の御精の上、何とご敵を討たせ給はらば、此の身の事は君に任せ奉る」と、涙をながし申しければ、元より半右衛門勇智相兼ねたる仁義の侍なる上、嘗て一義にも及ばず、涙を袖にひたし、しばし應へもせざりけるが、やゝ有つて、「殊に女の身にて有りがたき志かな。我たとひ此の身は刃の下に空しうすといふとも、いかでか此の志を無にすべき。然らば幸ひ今宵城外の町人の許へ傳内来ると聞く、道に待ちうけて討つべし、其の用意せよ」と、ともゞゝ仕度して夜に入るを待つて、城の大手の邊に徘徊し待ちゐたる。もとより此のこと城外密々に親しきかしこ者の方へは、半右衛門案内し置きしかば、忍び/\に彼處に來り、見物の貴賤また夥しく、かしこの石の陰、爰の高札の元に隠れゐて相待ち居り。幾野傳内は何心もなく城外へ出でゝ行く所を、おはつ立ち向ひ「如何に傳内、積悪の餘報如何で逃るゝ所を得ん。自らは汝が爲に討たれたる早川作右衛門が娘おはつと云ふ者なり、覺悟せよ」と言葉をかけられ「心得たり。」と討つて掛りしを、半右衛門家來棒にてしとゞと請け留め「暫く」と押へける。時に半右衛門「如何に傳内、我は御邊にさして意趣なしと雖も、汝が積悪を聞く。また此の女の貞節を感じて、義の爲に汝といま刃を交へんと思ふ。覺悟せよ、それ/\」といひければ、兼ねて用意したる事なれば、提灯前後に萬燈のごとく燈したり。

さて半右衛門おはつ二人うつてかゝり、傳内と切りむすぶ。傳内が侍ども、主を討たせじと打つてかゝる。傳内方は主從五人、こなたは半右衛門おはつ下人一人、つがふ三人なり。暫し切りあふ時にいづくより來るともなく、二十許りの男一人、白き鉢卷に襷かけて、敵の後へ廻り、さん〴〵に切りける間、傳内を始め殘らず討たれぬ。その時彼の男半右衛門に向ひ申しければ、「誠に此の度の御報じ忝く存じたてまつり候。即ち姉はその方へ參る。我は作之丞が幽靈にて侍る」と名乘り、扨おはつに向ひ「いよ〳〵貞心を守つて仕へ奉れ」と云ひ終つて、今こそ障患をやすみぬといふかと思へば、漸々と消え失せぬ。半右衛門とおはつと、奇異の思ひをなしぬ。さて此由太守聞召し、「一女の身にて稀なる儀、唐のはくきさいしにも劣るべからず。又半右衛門が仕方、古今侍の鏡たるべき」と御褒美の御言葉。即ち靈魂のいひし如く、おはつ半右衛門に妻に嫁せ付けられて、かつ千石の御加增を給はりけるといへり。たぐひ少なき事ともいへり。

四　妙本寺の蛇形の曼陀羅

相模國鎌倉の郡と申すは、大織冠鎌足がまだ丸と申せし時、田舎より都にのぼり給ひて、次第の官位滯りなく、天智天皇八年に藤原の姓を給ひて、内大臣に任じたまふ。昔この宿願ありしにより

て、常陸の鹿島に詣で給ひ、歸路のついでに相模國由井の里に宿りし給ふ。その夜の夢の御告によりて、多年たしなみ給ふ所の鎌を、大倉松が岡に埋め給ふによりて鎌倉となづく。その地景久餘國に稀なる風流、三國無雙の地と謂ひつべし。其の外不思議の靈地とも多し。ひきがやつ妙本寺と申すは、即ち山號を長谷山と云ふ、中ごろ日眞上人の開基として、法華一乘の靈場なり。往昔は此の寺淨土宗なりしが、日眞上人此の寺に至り給ひ、本尊の彌陀を御覽じて、大きに笑ひ誹謗し給ふにより、寺僧が憤りを起し、上人と法問して終に法問に負け、寺を開け退きしより、上人開山となり給ふ。則ち本堂の彌陀は、上品の彌陀にておはします、謂れはその頃上人寺に入り給ふきざみ、本尊を取り退けんとせしに、上人宣はく、「末世にいたつて凡人必ず疑ふべし、われ法問に勝ちて、他宗の道場を法華一乘の地となせし證據に、其の儘置くべし。」とて、今に本尊は彌陀にておはします。上人は法華多年の行者、殊に無雙の智者にて坐しけるとかや、委しくは縁起に見えたり。寺の重寶ども多し。中にも蛇形の曼陀羅といふあり、由來を委しく聞きしか、永祿初年のころ、北條氏直小田原に在城の時分、鎌倉中在家へ雜兵共亂入して財産を奪ひ取り、神社佛閣に亂れ入りて、佛像經卷を奪ひ取る事ありしに、わが妙本寺へも雜兵共亂れ入りて火をかけしかば、寺僧日蓮上人の御自筆の曼陀羅を持ち出さんとせしが、隱すべき所やなかりけん、傍なる井の内へ投げ入れたりしが、やゝ程經て兵火す

でに本堂へ掛らんとせし時、彼の井の内より大龍現はれて、陰雲寺中に充滿したり。このありさまに恐れ、雜兵ども皆逃げて去りぬ。程なく大雨降り出で忽ち本堂は助かるといふ。雨やみ火靜まつて後見れば、本堂の佛壇に彼の曼陀羅、隱然としてかゝりありしとなり。今に蛇形の曼陀羅とて、此の寺第一に重寶なりと云ひ傳ふ。

拾遺伽婢子卷之三　終

拾遺伽婢子卷之四

一　魚腹の鏡

去にし昔伯耆國川村といふ所に、龜木庄右衛門といふ者あり。比しも夏の末なりしに、常に釣を好む故、あたり近き沼へ釣針を携へ、僕に魚籠叉吸筒に酒を持たせ行きて、終日釣を垂れしに、漸う黄昏に及ぶ時、一つの鯉を釣り得たり。長さ二尺許り、その魚鱗光ること夥し。龜木よろこび僕にもたせ歸るに、比しも無水月二十日餘りなれば、月未だ出でず、宵闇のころなるに道明らかにして塵までも見ゆ。龜木怪しんで心をつけて見るに、かの魚籠に入れたる鯉の光なり。誠に不思議に思ひて家に歸り、その腹を裂きしに、果して腹中に鏡あり。大きさ一寸四方にして、裏に雨龍を鑄たり。その鱗また世のつねの細工にあらず、その光麗々として、深夜と雖も日中のごとし。又此の鏡を以て寫し見るに、遠方も掌の内に現はれ見ゆ。此の鏡を懐中せしに、暗の夜に是れを見れば、その身光明の内に在るがごとし。誠に奇異の鏡なりとて、秘藏して持ちけるが、程なく龜木は朝倉義景より、その武功勇智ある由を聞き及び、抱へん由を宣ひければ、終にしたがひて義景に仕へ、ほどなく掛川の

雷に討死しぬ。其の後かの鏡、何處へ行きけん見えずと云ひ傳へたり。

二　邪意神罰

それ我が朝は神國として、守神を尊敬し佛を敬ひ、常の道に住して忠孝を專らとし、且怪力亂神の利生あらたなる事を、かたくなに云ひ消さず、心地もひらけずして、邪に物推しする事なかれ。去にし天和年中のことなりしに、相模國さる村に里民兄弟あり、兄は家居在六町へだて住みけり。頃しも極月節分の夜の事なりしに、夕暮方に兄弟が方へ來りけるが、折ふし兄は節分のうち大豆を煎つてありけるが、弟見て申しけるは、「その豆は煎りて何にし給ふぞ」と云ふ。兄聞いて「改まりたる事を云ふ物かな。是れは今宵節分の打豆なり」と云ふ。弟嘲笑うて申しけるは、「誠に費えなる事をし給ふ物かな。その豆を煎りては、物の用に立ち難し、差置いて艶嗇のたすけともし給へかし。今宵豆を撒かぬとて、鬼にとられたる例もなし、また豆を撒きしとて、にはかに福裕になりし例を聞かず。それより年の近き理あり、豆をまきて福裕にならば、など御身は貧苦をばし給ふ、われ毎年豆をまかざれども、別けて煩ひかねもせず。いらざるなれらべの云ひ習はしを、信じ給ふことこそ心得ね。必ず思ひ止まり給へ」と、傍若無人に口にまかせて云ひちらし、立ちて歸らんとせしを、兄暫く留め

て二もち、汝が云ふ如く豆を今宵うちしとて福裕になるとにもあらねど、是れ時の祝なり。此の豆幸ひ我も用ゐて餘りあり、是れを持ち行きてまけよとて折に入れ渡しければ、弟是れを貰うて、不興げに門を出でながら、宿にて撒くも爰にて撒くも同じ事なるを、遙々と宿まで持ち行かん要なしとて、門口にて打ち捨てまき散らし歸りけるが、我が門口に入るとて、忽ちにわつと叫び絶え入りぬ。妻子姉にあたりの者寄り集まり、さまざま勞れども、更に正氣つかず、兄も程近ければ、早速來りて色々といたはるに、漸く初夜の時分になりて、息出でて語りけるは、我先に兄の許より歸り、門へ入らんとて、心ならず大山の方を見やりたれば、空にその長二丈もやあらん、髪空樣に生え上り、兩つの角鋭にして枯木の如し、眼は星の光の如くなる者つい立ちて見えしが、凄まじさに早く門に入らんとせしを、かの鬼形一さんに飛び來つて、我が胸を蹈ると思へば絶え入り、今も胸の蹴られたる跡痛み堪へ難しと罵り泣き叫ぶ間、あまりの不思議さに諸人立ち寄り、胸の邊を見るに、誠に胸に爪跡あり、血も出でず青みてあり。人皆舌をふつて驚き恐る。さて暫くありてまた絶え入りし間、色々藥を與へしかども、終に本心に歸らずして死す、不思議なる事なり。是れまのあたり見聞きしたる者語りし事にして、全く虚作にあらず。とりわけ四季節々の壽は、神道の掟、日本の風俗なれば、君を敬ひ親をことぶき、身を幸ひし子孫を祝ふのその一つなれば、怠るまじき事なり。

三　怪に逢うて淫慾を戒む

河内國佐山と云ふ所に、おだ木喜兵衛と云ふ富裕の商人あり。彼が一子喜平次は心さま情ありて、色好みの聞えあり。未だ縁も定めず暮しけるが、聊か所用ありて同國なぎさと云ふ所へ行きけるに、山際の少し木立茂りて、人もなく心細き折節、一人の老人喜平次が前に来りて申しけるは、「汝、父母に孝心深く、殊に里人に情をかけ恵む、されども色好む心は甚だ過ぎたり。是れ即ち汝が一身の病とす。是れによりて諸々の非道其の内に籠る、故に神明怒りの罰を給ふ。然れども此の心容易く離れがたし。我汝に一美人を授くべし。此の娘にあうて再び色好む心をたつべし、是れより四五里行きて必ず右の美女に逢はん」と云ひて、掻き消すが如く失せて、その行所を知らず。喜平次怪しみながら、四五里程行きぬれど、頻りに東西くらうして、物の文色も見えず。とかくする内に暗夜の如くになりて心浮れ、我ながら茫然として、其の是非をわけかねたり。然れども扨あるべきにあらねば、足にまかせて行くに、覚えずいづくともなき山中に入りぬ。こは如何にと左右を見れども、事とふ物もなく、しんしんとして物凄き事いふ許りなし。遙かに燈のかげ見ゆるを幸ひに、辿りつきて見れば一つ家なり。嬉しく思ひ門を差し覗き見るに、年の程十八九許りの女房、又類なく嬋娟なるが、獨り燈の

程に縁辺もありし、又かたのに入らなし、喜平次門を訪れ、一條の者にて侍るが、道にふみ迷ひ侍り、宿かし給へ」と言へば、女房しづかに立ちて門を明け、「未だ目馴れぬ方ながら、道に踏み迷ひ給ふとや、御痛はしや此方へ御入りましませ」とて、喜平次を内に入れ、自らも二世かけて誓ひしは、三年以前遁れ、かゝる住居を山中に結び、昔を思ひ出し、わびしき庵に蝶が手習してゐ参らせ候に、方様に御宿参らせて、終夜の憂き事をも語り、辛さをも忘れ侍らんと、睦まじく寄りみに、喜平次も一重の色深き心にうつりて、未だ夜を遂げぬ隔てにて、あかぬいぶせき山中の住生に斯くしも給ふ事、さりとは御痛はしや、我もいまだ初草の結ぶ縁も候はず、暫時の宿を寄すにて侍り、しかるに君の御姿を見るに、深見草のおもひの種、斯くうちつけに申すも、恐れぬ下もえの煙とあかねていへども、語らふに、女も岩木ならぬ態にて、やがてたゞ竹の一夜のふしの手枕に、ひなき仮名は立ちたぐへて、とはや打ちあらはれ、小夜の枕をかはしまの、水の心もかはらじと、いとわりなく契りけるが、喜平次暫くまどろみて夢さめ、かしこを見れば、燈漸く消えかゝりて、燈籠の火の細くなるに、喜平次も頻りに物凄くなりて、かの女房を見れば、有りし姿にてはありながら、ふしたけ一丈もやあらん、花の顔青ざめ、丹火の唇耳の根までひろく裂け、あふむきにおびふしたる態、喜平次ふた目とも見ず、肝魂も身にそはず、密かに門を出で、逸足を出して逃げ行きしに、

かの女聞くよりはかれたる聲にて、「情なしとよ、かくまでに言ひ交したるかねごとを、如何で無にはなすべき」と、跡を慕ひ追つかけ来る。その逸早きこと風の如し。喜平次も必死に逃げのび、半里ばかりも行き過ぎければ、かの女もいづちへ行きけん失せぬ。喜平次も暫く息を静め、山際の細道を傳ひ、漸うたどるに、不思議や今まであるとも見えぬ人家四五軒、左右に並び建ちたり。喜平次うれしく思ひ、あるかたに差し寄つて覗き見るに、人多く集まつて酒宴の體なり。垣の間より見入りしに、座中の者共は髑髏のあつて頭ばかりなる者、又は両足斬りされたる人の、首計りありて手足無きもあり、又は表は朱の如く色赤く、髪そら様に生ひ上りたる、或はその姿にて、色青き眼一つなる者、異類異形の化物、血を流れたり。座中には今切りし如くなる、人の手足の肉を引散らし、肴にかきたてたり。其の座にありし夜叉の如くなる化物、喜平次を見付けて、「今宵の一興、肴御座なき所に、鯖がある處までよ」と云ふ聲の下より、人の骸つい立て喜平次を目がけ追つかくる。喜平次も逸足を出し、辛うじて四五町逃げのび、跡をかへり見れば、化物も長くは追はず。喜平次も宵よりさま〴〵の妖怪に悩まされ、肝魂も浮るゝばかりにおぼえ、やう〳〵山道をたゞたどりと辿り、一里許りも過ぎぬらんとおもへば、人里近きやらん、鶏の声幽に聞こゆ。嬉しく思ひて足早に急ぐに、傍の木陰より、年の程六十許りの老女がつと起き出で、「珍らしや喜平次」とて、袂を抱き

つく。此の時にこそ氣を失ひ彼所に打伏しける。暫く有りて漸う人心地つきて四邊を見れば、未だ羊の下刻にて、所も山中にてはなくして、佐山の在家、ある者の家の後の畑に、茫然として佇みたり。これよりわが家に歸り、垂乳根にも斯くと語り、其の後出家して永く禁戒を保ちけるとぞ。

四　夢中の闘狼

下總國藤枝村と云ふ所に、原幸右衛門と云ふ者あり。彼は元由ある者なりしが、さる仔細あつて浪浪の身となつて、此所に引き籠り住居す。戸田一刀齋が流を酌んで、兵法の達人なりしかども、意と藝を隱して獨樂の生業、皆人よきに沙汰しあへり。又同國大瀧と云ふ所に瀬崎勘内と云ふ兵法の師あり、是れは近里指南して世渡の生計となす。かの兩人たがひに無二の友にて、をりふしは出合ひ古今兵術の奧義、傳說の秘術等物語しけるが、ある雨の夜うち寄りて、兵法の理義様々評して良く深更におよぶ。時に幸右衛門申しけるは、「それ傳書の載する所兵法の奧義、全く刀劍をもつて兵術をふるつて勝つにあらず、皆心理ををさむ、心轉動せざる所に、忽然として勝利を得。劍術をもつて勝つにあらず。此の旨を存するゆゑに、全く所作にかゝはらず」とまうしければ、勘内つくづくと聞いて云く、「尤も、兵法は心を納むるを以て元とす、全くしよさにかゝはるべからず。然りと雖も元所作なくん



ば、何を以て端とせんや。もと所作を端となし、其の心利に至る、初めより心を納むる理を說くと雖も、初心の輩は其の心趣を承知すること能はず、是れによつて空しく退屈して、終に其の道半ばにして廢る。かるが故に五ヶ八ヶ又は十二ヶ條を立て、所作の修行をなさしむ。是れはこれ事の輕きに似て、必ず重き理を修了せずんばあるべからず、此の旨を辨へ給ふべし」と、言を鮮やかに演說せしかば、善右衛門言葉なく默しけるが、互にその趣意を感じ合ひ、氣疲れけるにや二人ともに、眠れるが如く安坐してゐたりしに、兩人の耳より青き雲の細くなる者、漸々とあひ合ふ。四方にありし弟子ども、奇異の思ひをなして見るたれば、その内より心といふ文字現はれ、その中かふにたゝかひあうて、はたと當りては碎け、散つてはまた寄りあひ、秋風に浮雲を吹き散らすに異ならず。暫くして、又雙方の耳へ心氣立歸ると見れば、兩人目を開き、善右衛門申しけるは、「私今までねむりし内に、君と戰ふと夢を見たりしが、つひに勝負つかずして立ち退きし」と語りしかば、斷因「私も同じく見しこ」と云ふ。時にかたへにありし弟子ども、現の不思議を語るに、兩人眉をひそめて、「是れ誠にあさましき事なり。我々常に我執強くして、互にその上にかたん事を思ひて、其の理を云ひ消さんとはかる、是れによりて心の影となりてその形を現はす、全く本意にあらず。またその理別にあらず、互に心理を見るところは一にして、唯所作を用ゐると用ゐざるとにあり、元より奧義一なるによつて、且

勝負なし、必ず重ねて争ひ報ずること互にあるべからずとて、一紙の起請を書きて誓ひしとぞ。

拾遺伽婢子巻之四 終

拾遺伽婢子　卷之五

一　武功に因つて犠を止む

往昔元龜年中に、伯耆國汗入と云ふ所の山中に、小さき祠あり、所の氏神なりと言ひ傳へたりいつの頃より勸請したると云ふ事を知る者なし、只言ひ傳へし許りにて、人みな崇敬す。毎年神無月中旬に祭を爲し湯だてをし、かつ十五六の女子の形よきを一人身御供に供ふ。ところにあらざれば、遠國より金錢を以て求めて是れを供ふ。若し然らざれば風雨時ならず起り、五穀稔らず黎民困窮する故、毎年變る事なし。その頃引田安左衞門と云ひし者、武田の軍士なりしが、去年參州三方ケ原の戰に、武田方敗北して甲州に退きし刻、名有る勇士みな討たれ、家運やうやく傾くを見て、我御内奉公の身にてもなし、たゞ當分軍下に從ふまでなり、一先づ身を退き、天運開くる方へ從はんと志し、私かに甲州を立ち退き、播州姫路の城下に舊友あるをたのみ、はるばると北陸道の長途に赴く。漸く日數つもりて、汗入の在家につきぬ。早晩景に及べば、あたりの里民の家に宿取りて、暫く休息するに、初夜の時分、宿の主饗饌など持ち出し、暫く物語などし、序に申しけるは「明日にて候はば所の

鄙在の祭禮故、村中忙がしく、中々御宿仕り候事も成り難く候はんに、今宵故お宿仕り候も、
一方ならぬ御縁にて候」と打語るに、引田由を聞きて、「扨神明の祭は、大かた正月九月に行はるる、
餘日を用ゐること稀なり、取りわけ神無月は神事祭禮に用ゐぬと聞く。定めて故有る事ならん、語り
給へ」といふ。亭主聞きて申しけるは、「所の鎮守と申し習はせし神明、いつの時安置せしと申す事を
知らず。唯申し傳へ候には、當所の申合せにて容顔美しき女子を一人、毎年身御供に供へ申
し候。若しさもなき時は風雨時ならず起り、五穀も實らず、かつ疫癘の難あるにより、相變らず」
と語る。引田つくづくと聞きて申しけるは、「是れ誠に怪しきことなり。神明は衆生を憐み給ふを以て
父母の子を思ふが如し。然るに人の命を取つて犧牲にうけ、若しさもなければ、
祟りをなして人民を損ず、是れなんぞ崇むるに足らん、妖怪の所爲にして、眞の神明にあらず。我また
是れを聞きて忍ぶに堪へず、まげて明くるまで宿を貸し給へ。その祭禮の席にいたり、神明の所作を
見届け、正體神ならば犧牲として身を出さん。若し狐妖の類ならば、我必ずその正體を顯はさん」
と申しければ、亭主聞きて大きに驚き、面をそむけ、「これは思ひ寄らずの事かな。斯く祭禮を爲し、生贄を供ふ
るにこそ、風雨を起し五穀を損じ給ふ。然るに斯かる事を爲し給はば、君も御命あるまじ。又所に如
何やうの禍出で來たらんも知れず」と、舌をふるひ申しければ、引田彼が許すまじき氣性を見てけれ

ば、先づは犠牲を供ふる事不審なる故、斯く尋ねし物なり、然れども所の鎮守ならんには崇むるに如かじ、と申しければ、亭主頷きて勝手へ入りけり。引田よもすがら思案するに、我武門の家に生まれ、かゝる事を見ずして止みなんや、明夜犠牲を供ふと云ふ、然らば明朝出づる態をして密かに忍び、實否を見届けずば止むまじ。且は諸人の爲、また我今まで軍中に於て人を殺害せしは武門の家に生まれ、その處を討つ、各々私にあらず、其の外少しも邪の事を爲さず、仁愛を旨として生類の命を断たず、淫亂に溺れず、人の援けとはなるとも人を害ひし事なし、然らば何ぞ佛神も擁護の手を加へ給はざらん。武功の助け又は後々誉の種とも、是非實否を見届けずんばあるべからずと思ひ、夜明けぬれば宿をば暇乞ひして出で、あたりの辻堂にその日は暮し、明くる夜半になりしかば、わざと辻堂に夜を更かし、亥の刻に及んで彼の宮に行き見るに、燈火多くかゝげ、宮の脇に神樂堂とおぼしき所に、犠牲の女子に白き衣裳を着せ、そのあたりには御酒供物等を供へ、あたり五六間引き退けて、埒を厳しく結び、一方に口を開け、又戸ざしきびしく固め、里人ははや歸りたると見え、外に人音もなく、女子ばかり泣き沈みてゐたり。引田即ち差添抜き、埒の戸ざし堅めたる縄をずた〳〵に押し切りて、ともに召し連れたる中間に、戸びらかたへに寄せさせ、さてかしこに至れば、女子引田を見て驚く。引田女子に向ひ、我は先夜此の所にかゝる事ありと聞いて、其の實否見届けん爲に来れり。我力を盡し

て汝が命を助くべし、心安かるべし」と懇に申しければ、女子手を合はせて「誠に忝き御志に侍る。我は出雲のあき鹿の者にて侍る、然るに我が親家貧しくして、朝夕の煙を立てかねたり。我今年十七、今まで父母に養はれ人となり、高恩また言に述べがたし。其の上ともかく〳〵楽さんに、必ず父母上にのぞむ故に、父母には隠密して、今此の里人の銭五貫文に我が身を賣りて、父母の方へ密かに贈り、たつきの助けとなし、今宵悪霊の為に命を隕さんとなり。君若し我が命を助け給はば、永く仕へ奉らん」と誓ひ涙に咽ぶ。引田由を聞きて、その孝心のいたり深切なることを感じ、涙を袖に押へて申しけるは「汝が孝心是れ必ず天地神祇の感應し給ふところなり。我もまた今まで仁義をもつて邪を犯さず、必ず正利を以て悪霊に勝たん事疑ひあるべからず。されども我が理はれあらんには、その威勢に恐れて化物来るまじ、暫く忍ばん」とて、共の中間ともに拝殿の天井にあがりて窺ふに、夜も子の刻に過ぐる比、雨ひと通りふり、風そう〳〵として物凄き折ふし、数十人来る勢ひあり。引田いまやと窺ひ見るに、その面猿の如くにして、青き浄衣を着し、長さ五尺ばかりなるもの、拝殿にあがり、座上に着したり。又その面熊の如くにて、身體人の如くなるものあり、異類異形の化物ども庭に並び居たり。やゝ暫くありて又来るものあり、長四尺ばかり、身體太くして何れも怪しき者、是れも拝殿にあがり、座上につきて後、猿の面なるもの申しけるは「我此所にありて久しく、贄を喫くも

事、是れ然しながら、各我が威を助けて、禍を爲す故なり。急ぎ牲を別けあたへん、それへ。」と下知なせば、魚の如くなるもの、鎌の形なるもの立つて、大きなる俎に庖丁取りそへ庭に直し、さてかの女子を引き出さんとす。其の時引田天井よりどうと飛び降りたれば、座中驚き立あて、八方へ逃げ失せぬ。さればこそ引田早く上座にありしものを取つて押へ、燈明の影に見れば、年經たる狸なり。引田に押へられてきゝと鳴きけり。引田やがて刀を拔きかけて、その科を責めて申しけるは、「それ日の本は神國にして、正直に利正を施すを以て神明とす、然るにかゝる禍をなして犧牲をなさしむる。その積惡立所に來て、神明我が手をかりその力を助けて、今汝を亡ぼすなり」と云ひ終つて、一刀に刺し殺し、委細はやがて取り出し、委しく書き留め、引田は女子を伴ひ、播磨に至り舊友を尋ねて、遂に秀吉公に仕へ、武功世に現はし、子孫繁昌しけるとかや。其の後伯耆の國中に、犧牲供へざれども、風雨の禍ひなかりしといひ傳ふ。

二　義士忠に死す

應永年中より天下大きに亂れて一百餘歳、かの唐の三國の互に威を爭ひし古も、かくやと思ふばかりなり。まづ駿州に北條氏康、甲斐に武田晴信、越前に朝倉義景、周防に陶晴賢、安藝に毛利元

競、出雲に尼子、豐後に大友、肥後に龍造寺、參州に德川家康、近江に淺井佐々木、畿内南海の間には三好の一族、諸國都會の内に、武勇ある輩、其の數をしらず、其の威を爭ひ、龍虎の如く向へり。時に元龜三年十二月二十二日、甲斐の信玄五萬餘騎の勢を率し、遠州濱松に赴き、三方ヶ原に押し寄する。家康公卽ち二萬五千餘騎にて同じく、三方ヶ原に打ち出で給ふ。先手は平手監物、大垣卜仙、安藤伊賀守以下一萬三千餘騎にて、鳥居内須賀の在家少々を燒き捨つて、鶴月魚鱗の備へを爲し、其の旗を列ねたり。さて、後陣は大野下野守、瀧川伊豫守、酒井左衛門尉、毛利河内守、その勢八千餘騎にて、足輕の射手鐵砲の者共に圍ませ、陣を固めて控へたり。さて家康公の本陣は、その勢一萬二千餘騎、御馬廻には本多平八、榊原小平太、安部善九郎、大須賀、菅沼、設樂、奧平以下の勇士、隙間なく控へたり。扨、濱松の御留守居には、石川日向守を大將として、その勢二千餘騎にて、矢ざまさかもなく嚴しくして、城戸を固め控へける。扨、信玄の方より、小山田兵衛三千餘騎にて先陣に進み、家康公の先手平手甚左衛門と合戰になり、小山田追ひくづされて引き退く。二番に山縣三郎兵衛五千餘騎、酒井左衛門尉が八千餘騎とかけ合ひ、をめきさけんで戰ふ。しかれども、終につき崩されて、危く見えける間、信玄采ふり上げて、かく度ごとに味方おくれを取るを見ながら、いかでか救はざらん、此の上は我れ、こゝに下をさでは叶ふまじ」とて、大藤式部少輔を先手として、信玄二萬餘騎、

四郎勝頼、一萬餘騎、家康公の三萬餘騎と寄せ合はせ、兵陣を交へ、互に戰ふ。討つあひ突きあひ戰ふ、切先より出づる火は、澤邊の風に吹き亂る、螢よりも猶いさぎよく、走りちがふ汗馬の勢ひは、雲に轟く雷の如し。味方戰ひつかれて、左右へさつと引き退きたれば、血は野々として川をなし、死骸は野地に横たはる。敵味方討たるゝ者數を知らず。されば信玄の方大軍なる上、勢ひに乗じて家康公の勢小勢にて、面もむら〳〵に控へたるを見て、重ねて討つてかゝらんとす。既に危かりし處に、濱松の大手をかためける夏目次郎左衛門吉信といひし者、城に上り味方敗軍の體を見て、急ぎ大將石川日向守に申しければ、「唯今、某遠見致し候所、一定味方敗軍と覺え候間、某は陣中に罷り越し候」とて渡部半藏に大手を預け、我が手の足輕若黨百五十騎、濱松を打ち出で、三方ケ原に打ち臨む。去る程に彼處に至れば、案の如く味方散々に敗軍し、むら〳〵にひかへ、殊に家康公の御馬廻りは、近習の輩二十騎許り、思ひ切つて敵かゝらば討死せんと、固唾を呑んで控へたり。次郎左衛門いそぎ馬より下り、家康公に向ひ申しけるは「敵勝に乗じて味方既に勞れたり、大行は細謹をかへり見ず、速く落ちさせ給へ」と申しければ、家康公仰せられしは、「多くの士卒を打たせ、斯く敗軍に及んで、何の面目ありてか城中へ歸るべき。此のまゝ戰場に屍をとゞめて、死後に恨みを報ゆべしと思ふより外他なし。我また苟くも清和の流れとして、敵に後を見せんこと後代の恥なり。その上我これ

に控へし事、敵よく圍りて取りこめんとす、然るを何ぞ後を見すべき」と、たゞ打ち出でんとし給ふを、吉信御馬の口にすがつて、目をいからし言を發して申しけるは「それ勾踐は赤糞を嘗め、或いは獄屋の内に生命を惜しみ、終に天下を知り候はずや。匹夫はその命を輕んじ、大將は其の命を重くす、何ぞ天下の安否此の一戰に極まり候はんや。然れども今ひき給ひて、敵言ひ甲斐なきと君を沙汰せんと罵り給はゞ、畏れながら臣君の御名を名乘り討死仕りて、忠信が忠に比すべし。然らばなんぞ御陣に候ふべき」と、一度は怒り一度は涙を流し申しければ、家康公理に服し給ひ「然らば汝に我が名を許す」と宣ふ。吉信頭を下げて御請をなし、御馬を濱松へ引き向け、御供の衆に目くばせし、持ちたる鎗の石突をもつて、御馬の三頭をしたゝかに打ちければ、一散に走せ出でて、程なく濱松へ入らせ給ひ、此日の難をのがれ給ふ。吉信遙かに城に入らせ給ふを見送りて、今は心安しと、是も若黨百五十騎を二手にわけ、高聲に申しけるは「徳川の家康今一戰に利無うして敗軍に及ぶ、爰に討死して死後の恨みを晴すべし」と呼ばはつて、四郎勝頼一萬五千餘騎控へたる眞中へ、會釋もなく割つて入る。敵是れを聞き鶴の翅を開くこと雲の如し、吉信百餘人の若黨是を左右に立て、東西へ開き南北へ追ひくゝり、散々に打ち破つて、さつと引き退きて見れば、百餘人の若黨わづか二十人ばかりこそ殘りける。又その殘人を集め、敵中へ割つて入るに、敵大將と見てければ遁らさじと圍み、縱横に打ち破

り萬卒にあたる。さしもの大軍僅かの小勢に打ち破られ、討たるゝ者數を知らず、又打ち破つて引き退きを見れば、三十人の者僅か六人になりぬ。吉信も深手數多負ひ、持ちたる十文字の槍も片鎌突き折つて、氣既に疲れぬれば、暫く息をつぎ、いざや者共早是れまでぞ、最後の戰ひして討死せんと、又敵中へ打つて入り、終に討死してけり。信玄も家康公生害し給ひぬと思はれければ、軈て甲府へ歸られける。實に古今の忠臣義士、戰場に於て討死する輩多しと雖も、軍記に載する所、主君の諱をかり身代りに死せし事、開闢より此のかた其の例多からず、例少なき忠臣なり。

三　業因に依りて冥土に人死す

武江牛込に、橘屋甚六と云ふ町人あり、ある時所用あつて京へ上りけるに、折ふし鄰家の者も同じく京へ志し、旅立つよし申しける間、伴ひてぞ上り侍りける。然るにとつかといふ泊にての事なりしに、既に夜明けて立たんとしけるに、甚六何處へ行きけん見えず。つれ驚きさま〳〵尋ぬるに、四五間先の人家の裏なる廁にいたり、不淨のうちに頭を差し入れて居たり。急ぎ連れ來りて、行水をさせ衣裳を着換へさせけるに、甚六涙を流し恨みて申しけるは、「某さるやごとなき女を思ひ初め、既に中介をたのみ婚禮をとゝのへ、先へ婿入りして既に行かんとせしを、情なく引きもどしたまふものか

なること涙に咽び申しける間、友達大きに驚き、その日は道すがらさま〴〵宥めて伴ひ行き、やう〳〵
好色になれば、また江尻の宿に泊りけり。兼て心得て氣をつけ侍りけるに、夜半時分少しまどろみし内
に、甚六いづち行きけん見えず。つれ衆を誘ひて尋ぬるに、はたして廁に入り、不淨の内に肩先まで
浸りてあり。漸々に引き出し、とかく介抱してその宿を出ぬ。甚六申しけるは、「我姿に頭の許にいた
り、觀念を竪へて、既に流れんとせしを、情なくも引き戻し給ふものかな」と云ふ。
友達きに驚きて、宿主にその旨を語り、森の内に三里行き過ぎて、其の宿に泊りぬ。既に五更に
及ばんとする頃、伴ひし者ともかくの樣子にて、前後も知らず寢入りぬ。夜明け立たんとて甚六を見
るに、臥所におらず。重ねて驚き、又彼處へや行きぬらんと尋ね見るに、案の如く此の度は、不淨に總
身殘らず浸りて死して居たり。急ぎ引き出しぬれども、ここを限りの事なく、持物道具など古郷の妻
の許へ送りしと云ふ。如何なる故やらん怪しき事なり。

四　花情の吟話

すぎにし頃、西國浪人の何某とかやいふ者、近江粟津の邊に住み侍りけるが、若くより書生を好み、貴の住
び住む庵とせむとて、庭に生ふる草木をつねかへそひすみれの色を選び、優深き室の氣色に寄せて、

網戸を立ち出で、吸筒の小さきを腰につけ、杖を道しるべとし、道灌山に志し、かしこにいたりぬれば、咲き亂れたる花のもとに氈しき、幕うち廻し、琴三味線の調べ、えならぬ薫風に傳ふ、歸らん事を忘るゝと云ひしも、かかる折の事なめりと、古き言を思ひつゞけ、

八重櫻幾百人のおもひ花

とうち詠じ、諏訪大明神に詣で、しづかにほつせ參らせ懇に拜んで、それより叢をわけ、道灌の塚に詣で、暫く念佛して、誠に道灌は、賢智無雙の良臣、武勇の士たりしかども、運つきぬれば終に露にかゝり、かかる野邊の古塚にその名を留め、空しく身體は土中に朽ちぬ、あゝじんかたより外その俤もなし。南無幽靈出離生死」と廻向して、

ありし世のその名ばかりをとゞめ置きてむなしき塚に生ふる春草

と詠じて、人多きあたりは、隱逸の心がらいとらうがはしきに、かたへなる櫻のもとに立ちよりしき、さゝえの吸筒取りいだし、一盞に憂きをわすれ、花の色にめで、懷中のせき筆とりいだし、古ごとながら、

いざ今日は春の山べにまじりなん暮れなばなげの花の陰かは

と短冊を書きつゝ、傍の花の枝に結びつけ、とろ/\とせしに、不思議やかたへの叢より、年の

程十七八許りなるやごとなき女性の、八九歳程なる女の童一人供し、花の下に踞しき、暫く休らひしに、また同じ様なる女郎五六人群れ来つゝ、さゝえ取り出でこきざぶきしに、上座の女性「たゞ礼非常心なしとは雖も、花賞の時を違へず、又情の道もそれ〴〵に具へけるぞや、常緑の松に相生のためしあり、柳櫻へた色を並とす、繁路の中だちにも色のたとへには、春は櫻秋は楓、薄菊藤袴、みな色のためしならずと云ふ事なし、いざやわれ〳〵がいふやうを懐紙につゞり、慰みはべらん」とて、まづ上座の女郎筆を取つて、

櫻のみにことに山よりも上野山は咲そへ花の名にもはれある

と書きて筆をさし置きしかば、又一人の女性、

色かへぬ上野の山の初櫻所ご門がにことふ春風

と詠じ申しほゝゑて次の女性に筆をわたしかば、

忍ぶ岡の松とは聞けど上野山花色さそふ春風ぞふく

又次の女性、

ときはなる上野の山の松かげにたゞ萬代の花の白雲

またその次の女郎、

しづかなる上野の山の花ちりて音をかへたる峯のまつ風

とおい〳〵にうち詠じて、此處に飛花落葉、皆常なき世のためしを知らせ、人間愛著の殻を拂はれたるなり。されども我等はとりわけ仇なる名に呼ばれ、又色香深き仇名四方に立つも、にや罪なき輩、飛鳥川の淵瀬かはる青葉になりなん。」と、打物語るかと思へば夢醒めぬ。茫然とあたりを見れば、もはや夕陽になり、数々歌ひし諸人も、おのが様々かへりて、後はたゞ草ばう〳〵と、春風に落花の雪舗に満ちたり。げにや吉田何某が、人跡見たることそ祭見たるなれと書きしも、かゝる事なりと、人の定めなき世を思ひ、古の盧生は、一睡に五十年の夢花を見て、無常の國の巷をあらはす。我は一瞬に無常を悟る。彼は唐、我は日本、時代隔たると雖も、志は同じからんと、感涙を袂に押へて、

俤の襟にむねの霧はれぬ

と、腰を打ち〳〵薦被の庵室へ歸りぬ。

曾呂利物語

曾呂利はなしはし書

人の心を慰むることわざ、限りなくさまざまなれども、貴賤貧富のさかひありて、心に任するものはあそび事をおほし。其の中に上かみより下しもまで隔てなきものは、見るもの聞く事を口にまかせ語りたゞこれに如くはなし。爰に天正の頃ほひ、曾呂利といへる滑稽の上手ありて、太閤秀吉公に召されて、常にかれを愛したまふ。其の詞のたくみに花やかなる事は、春の曙が天日の暉、秋の霧が林鐘の詞にも越えたり。まことにすさまじき事を論じては、目に見えぬ鬼神も速やかに出できたる心地にうしろこそばゆく、艶に哀れなる事を談ずれば、たけき武士もよわ／＼と涙をながし、その諧謔滑稽の名誉なる事には、壺中に天地をこめ、一瓢より駒を出だし術にも過ぎたり。ある夜太閤のまへにしておもしろ／＼しき事を語れとのたまふに、十が十に及べり。近習の人々是れを書きとめしに、年久しく反故にまじはり、多くは散りうせぬ。わづかに残りしをかいやり捨つるも惜しと、其の品にたがへる物がたりの不思議なるを一つ二つ加へて、今また書き改むるものなり。

曾呂利物語巻第一目錄

曾呂利物語巻第一

一　板垣の三郎高名の事

駿河國太守より今川殿ときこえし人、府中に在城したまひけるが、ある夜のつれづれに家の子らうどうを集め御前に召して宣ふ様、「さてもたれか有る、今夜千本の上の社まで行いて来らん。」とのたまひければ、みなこゝろ有りながら、されば武者多しといへども、これは聞ゆる魔所なれば、あへて行かんといふ者なし。爰に甲斐國の住人に板垣の三郎とて、代々弓箭をとつては隠れなき勇者ありけるが、「私こそ参り候はん。」と申しあげゝる。大殿なのめにおぼしめして、やがてしるしをたぶ。板垣は大剛の者にて少しも恐るゝけしきなくて、殿中よりすぐに千本へぞ参りける。頃は九月中旬の事なれば月いとしろく、木の葉ふりしき物すさまじき道のうちを過ぎて行くだんを通りけるが、杉の木の上にあやしきものゝ一つひらめきて足もとへ落ちけるが、あやしみこれを見るに、へぎ一枚なり。かゝる時に何とて有りけるぞと思ひながら踏み破りてこゝを通りければ、われたる音の山彦にこたへ夥しく聞えけるを、不審に思ひながら、別の事もなくて、上のやしろの前にて一禮して、しるしの札をたてて置き帰りしが、い

いくともなく白きねりのひとへを被きて女房一人來れり。扨は音に聞きつる變化の物わが心をたぶらかすらんと思ひ、走りよりて被きたるきぬを引きのけて見れば、大いなる目一つ有りて、振分髪の下よりもならべたる角おひたるが、薄化粧に鐵漿黒々とつけたり。おそろしとも云はんかたなし。されども板垣騒しまたゞよはま一刎ものなれば、とて太刀をぬかんとすれば、かき消す如くに失せぬ。不審なる事ながら、せんかたもなく立ちかへり、大殿の前に參り、「しるしを立てて歸りさふらふ。御檢使をたてて御らん候へ」ともうし上ぐる。「まことに板垣にてなくば恙なくは歸らじ」と一同に感じあへり。「扨何事にもあひ候はぬか」と御尋ね有りければ、「いや何事も怪しき事は御座なき」と申し、かかりける所に、床敷も限なき月の夜なるが、俄にかき曇り、ふる雨車軸を流しける、酒宴興を失ふをりふし、虚空にしはがれ聲して、「いかに板垣、さきに我等が腹を何とて踏みわりけるぞ、懺悔せよ」とよばはりける。其の時まの／＼まとるして、「見申したる事あらば御前にて申し上げよ」とあん／＼せられければ、板垣千本にてのありさま殘さず申し上ぐる。然れども雨風猶やまず、稲妻夥しく、神さへ鳴りて殿中もの騒がしければ、「いかさま此の體にては板垣をとられなんと覺ゆ」とて唐櫃の中に入れ、各番をして夜の明くるをぞ待ちゐたる。さていかうちも次第にやみ、天の光もはれ行きて五更もあけ行けば、「板垣を出せ」とて櫃の蓋を取りて見れば、忽然として何も無し。これはいかなる事ぞ。

とふな人奇異の思ひをなす所に、又虚空より二三千人の聲してどつと笑ふ。走り出て見れば、板垣が首を縁上に落してけり。かゝる不思議も有ることにこそ。

二　女のまうねん迷ひありく事

越前の北の庄といふ所に、あるもの上方へまだ夜をこめて上るとて、さはやといふ所に至りたる在所有けるに、其の下より鞠一つたちて道にあるゝ。月影によく〳〵見れば女の首なり。彼の男を見てはしかみて笑ふ。男少しも臆せず、刀をぬきて切つてかゝれば、そのまゝ道筋をかへて上のかたよりくる。続いて追ふほどに、府中の町にみせといふ所まで追ひつけて見れば、ある家の窓よりうちへ飛び入る。ふしぎなることに思ひ、しばしたゝずみて内の様を聞けば、女房の聲にて男を起し、「あらおそろしや、只今の夢に、さはや野を通りしが、男一人我を斬らんとて追ふ程に、これまで逃げけると思へば夢さめぬ。汗水になりし」などいひて起き出つゝ語る。門にある男此の由を聞き、戸をたゝき、聊爾なる申しごとにて候へども、申すべき事あり、あけさせ給へとて内に入り、たゞ今の御物語は我等にて候。扨は人間にても斯る妄念ありけるか、罪業の程こそおそろしけれとて通り侍りぬ。女も身の程をなげき、「此のありさまにては男に添ひさふらふこともうし」とて京への

には、北野眞西寺に取りこもり、ひとへに後世をぞ祈りける。まことにありがたきためしにぞ。

三　女のまうねんは性をかへても忘れぬ事

年ごろ行ひたる僧の有りけるが、いかゞ思ひけん、一人の女に戯れて還俗しはてゝ、かくて年月過ぎけるが、かの僧、「つくづくと來し方思ひつゞくれば、一たび出家せし身となりて、うけがたき人身をうけながら、むなしく三途に歸らんこと、返す返すも口惜しけれ」とて、あたり近き所に貴きひじりのおはしけるに、よくよく申して、又行ひすましてぞゐたりける。されども彼の女をりをり、彼の寺に行きとぶらひ侍る。僧うとましきことに思ひながら、かの女日頃もけしからず心ざしもありければ、やうやうにいひ宥めて過ぎけるが、ある時僧いたはり出しけるが、かねて友なる僧に語りけるは、「かの女われをたづね來らば、物まうでをし侍るといひてたまはれ」といひおはす。案の如く、彼の女來りて尋ねければ、「その人は昨日物まうでの心ざし有りて、何處へやらん出でたまふ」といふ。女すこしけしき變りて歸りぬ。扨其の後僧は涅槃に入りぬ。さる程に日頃存じの事なれば、院主の坊かの女の方へ、しかじかといひつかはす。いそぎ女來りて少しも驚くけしきもなく、いひけるは、「彼の僧は五百年以前よりわれわれが敵なり、かの者の成佛すべき所をば色々に形を變へ、身を變じて障礙をなし

て物け侍る。其の夫は死門に逢ふならば往生を遂させまじきものをと思ひけるが、そのたけ二丈ばかりも有るらんとおぼしき蛇体となりて、口より火焔をいだし天にあがり侍る。しばし有りて雨ふりありて、つひに見えずなりにけり。かかることは仏も説きおき給ふとかや。恐れても慎むべきことこそ。

四　一條もどり橋のばけ物の由来の事

いつの頃にか有りけん、都一條もどり橋に毎夜よな〳〵変化のもの有りとておそれたる事あり。ここにそのかみ名ある武士、その頃は世をしのぶものに似せて洛中に隠れて侍りしが、かたかたなる事にて今に隠れなかりしが、此の事を聞き、さらば我もいかなるものぞ見届け侍らんと思ひ、ある夜かの橋の爪に鎧を打ち一束を蓄へに行きて、夜もすがら待ち侍る。さる所に俄に杖をつき入りと寝ひの有りけるが、町を経し来る十二三歳ばかりなる、しかもくし事といふ人なくては化物なしと見て、十七八ばかりの女の童を帰りける間、鎧に添へてよからぬといひければ、よもの事かかる、さらば見えて此のさしきに行きみとなにごとしたがひあたりを見び、待の物は中にて見えけるが、我が身に人様をみれば、夫婦なることの中にねぶかなりて、ばけもの見ん事もたたるうちに、



互におこし制する程こそあれ、後には性根を失ひ我が氣色にてうか〳〵とねぶりけり。かかる所に二人のなかへ彼の座頭飛びかゝり、長き手をさしのべて頭をおさへける。男驚き、「またりやかしこし」と起きあがり、太刀に手をかけんとすれども、網にかゝれる如くにて手足に纏まり侍るを、漸うに押しつけ、相傳の來國光を以て拂ひ切りにぞしたりける。化物一刀きられて少しひるむ所を、續けさまに五刀刺して、さて火を點し見給へば、手足は龍の如くにて、長さ一丈三尺五寸、かしらは繪にかける酒顚童子の如くなり。これぞ蜘といふ蟲の功をへて人をばかしけるなり。其の後橋にてさらして諸人にこれを見せけるとぞ。

五　ばけ物女になりて人を迷はす事

ある人奉公の心ざし有りて加賀國へまかりけるが、町屋に宿を借りてゐたりける。かのあるじの息女みめ美しく形儀に侍るが、彼の者物の隙より見そめ、ひたすら思ひしづみて、めし使ひける侍にいひあはせて、色々さま〴〵心ざしの淺からぬ由つたへければ、女もいつしか心とけて、たがひにむつまじくなりにけり。もとより人目を忍ぶ事なれば、夜ふけ人しづまりて後、かの男のもとへ通ひ侍りしが、ある夜女をとこのねやに有りながら、又あるじのあたりにも彼の女の聲しけるを、なかだ

お怪しと思ひ、あるじのあたりへ何となく音づれて見れば、紛るゝ所もなし。あまりの不審さに、なにがしの許へ行き、かたかげへ呼びよせ、かかる事の侍る由さゝやきければ、怪しみて、いかさま我が心をたぶらかさんと變化の物の態にてぞあるらんと思ひ、何となうもてなすやうにして、とりて引きよせ一刀させば、あつといふ聲のうちより、姿は見えずなりにけり。さて夜明けて血をとめて見れば、二里ばかり行きて山有り、山又山をわけ入りて見れば、大いなる岩あなの中にかの女の姿をなしてぞゐたりける。日數すぎ行くまゝに、常の死人の如くに凋れゆきぬ。あるじの娘も恙なし、いかなる事ともわきまへかねたる事どもなり。

六　人をうしなひて身にむくふ事

津の國大坂に兵衛の次郎とかやいふもの有り、いろを好む心ふかうして、召使ひける女を忍びて褄を重ねけり。本妻は例ならぬ物ねたみいとはしたなくて、かく雨夜のものがたりに、但馬頭がゆびを食ひきりしには増こえたり。さるに、なにがし他行のひまにかの女をとらへ、井のうちへさかさまにおとし、ふしづけにこそしたりけれ。なにがし此の事夢にも知らず月頃すごしけるに、一人の寵愛の男子有りけるが、以ての外に勞りけるを、色々養生祈念祈禱をしけれども其のしるしなし。其の頃あま

のふてらやの四郎右門といふ針たて、天下無雙の聞え有りけるを招き一日二日のうち養生すとある夜月のあきらかなるに、四郎右門緣に出て有りけるが、何處ともなくいとあてなる女きたりて、四郎右門にうちむかひ、さめ／＼と泣きゐたり。不思議なることにおもひ、「いかなるものぞ」とたづねければ、「恥かしながら此の世を去りしものなり。あるじの北の方あまりに情なきことの有りしにより、うらみ申しに來りたり。其の子は何と針をたて給ふとも、さらにかひあるまじ。いそぎそなたは歸りたまへ。さなくば眼前にうきめを見せ侍らん。」といふ。四郎右門肝をけし、「扨は亡靈にて有りけるかや、たゞし如何やうの恨みぞ。其方の跡をばねんごろにとぶらはせ侍らんに、うらみをはらし給へ」といふ。「いやとよ、此の子を取殺さではおくまじ。」とて歸らんとするを、餘りの不思議さに袖を控へ、「さるにても、いかなる恨みの侍るぞ」といへば、「しか／＼の事さふらひし。折檻は世の常、あまりに情なき事とも、ありのまゝに語りける。」扨女はたけ一丈もあるらんと思しくて、そのさまに生ひたち、髮は白がねの針をならべたる如く、角さへおひて、朱まなこ牙を嚙みたる有様、たとへて云はん方もなし。四郎右門一目見あはせて、そのまゝ消え入り侍りしが、あるじ來りて、こはいかにとやうやう助け起して、事の仔細を問ひければ、「かやう／＼の姿を一目見しより夢うつゝともわきまへず、たゞ入り候ふ」といふ。なほも委しく尋ねければ、はじめ終りの事こまかにぞ語りける。兵衞の次郎これ

を聞き、いかゞすべきと思ひ患ひ、又一兩日のほど過ぎて四郎右門を呼びに遣はし、いかゞすべきと談合しけるが、又其の夜四郎右門が枕上に來り、「いかに言ふともかなふまじ、日こそ隔たるとも、一門眷屬次第々々に取りて、北の方に思ひ知らせんに」といふかと思へば、屋根より大盤石をおとしけるが、彼の子は微塵に碎けて亡せぬ。母は月花とも眺めしひとり子を、かくおそろしき事にして、歎き悲しみ侍りしが、それより打續き、母の一門盡く滅びて、つひには母重き病の床にふす。人に憂き目を見せければ、かかりける事有りとは、昔物語にこそ聞きしが、今も有ることにこそ。

七　罪ふかきもの今生より業をさらす事

宮古北野近うに、貧なる女ありけり。まことに善根なる心ざしは露ほども無うして、惡業は須彌の嶺にも越えつべし。さるつれあひの男用の事有りて一條戻橋の邊を、曉方に通りしが、橋の下に死人の有りけるを、老女が引き裂き〳〵食ひけるを、よく〳〵見れば我が子の母なり。不思議といふも愚かにて、急ぎ我が屋に立ちかへり、母のいまだ臥して有るを起しければ、驚き起きあがりて、「さてさておそろしき夢を見つる中に、嬉しくもおこさせ給ふものかな。」といふ。「いかなる夢を見給ひつるぞ」と問へば、「橋の下に死人のあるを引きさきさきて食ふと思ひしが、夢心にもさこそ淺ましきことかなと思ひ

なかなか、食ふに嬉しき心地をなし」といふ。程なく彼のもの身まかりにけるが、今生の罪業深か
りしが、来世にてこそと思ひやるこそ不便なれ。

八　狐人にむかつてわびごとする事

寛永八年ひつじのとし、関東武蔵国さる御かたさまの屋敷に御遣水ありたる池あり。そのうへに白鷺を殺し置かれける所に、狐これを取りはべりしかば、おのれが殿気を立て、近習の人々にさがし付けらるゝに、其の日狐をとる事、にくき仕合なり、明日はうちころすの由を触れ、その夜次にある人の夢に、翁に、恐く候て「五百日つくる」人々へかしこまつて申し、しかれば其の夜宿直する人の夢に、鷺の御命をとられ候事、池辺に住む狐がとりたるとて、御腹立ち遊ばさるゝ事、迷惑に候。とも、さやうなる事にはあらず、他の狐がいたすなり。明日成敗せられ候はゞ、明日の狐狩に御掛らるゝやうに御頼み申すなり。由の如く見えけるが、ふしぎの夢を見申したるものなれども聞くなり。さりながらその日は暮れぬ。明くる日は殿に寄人ども寄り合ひしかば、狐狩をせんとて、過ぎし夜見し夢の様を詳しく思ひて情なき事よ、ほうへの白鷺を申すに、誰ぞと御言もよことよ、寄合人われこそ昨日の暮は動かれず、明日はすでに御成敗とはまりぬと、一夜もすがら

と見えしかば、餘りの事の不思議さに、御前に參り此の由をこまごまと申し上ぐる。殿も、「今夜不思議の夢を見つるなり。さらばまづ今日の狩をばやめよ」と宣ひける。扨明くるつとに、大きなる狐五匹を殺して緣にもておくとなん。これは昔物語のたぐひにはあらねど、不思議なるまゝに書きつけ侍るとぞ。

九　舟越大蛇をたひらぐる事

いつの頃にか有りけん、淡路國に舟越とて弓矢取つて名を得し有りけり。彼の知行所に大蛇すみけるといふ池あり、廣さ二町四方も有るべし、眞に凄まじき池の心なり。しかるに每年人御供をそなふること久し、怠りぬれば必ず洪水し多くの田畠損じけり。さるによつて今も在所の女を一人づゝ、池の中に牀をして供へおけば、大蛇來りてこれをとる。舟越つくづくと思ふやう、かくしつゝ、はて／＼は我が知行所に女といふ者たゆべし、縱ひごなきとて我が領する下に斯樣の事あらんを、いかで打捨ててはおくべき、いかさまにしるしを見せでは適ふまじと思ひ、重籐の弓に山どりの尾にて矧いだる大かりまた二つがひ、あし毛の馬にうち乘つて、かの池をさして行く。馬の太腹ひたるほど乘りこみて、大音聲にてのたまひけるは、「抑我ならで此の池に主有るべき事心得ず。このうへ地下の女子を

御供にとる、供へざれば洪水して多くの田地を損ふ事、かれこれもつて奇怪なり。まこと此の池の主たらば只今出でて我と勝負をあらはせ。」と高らかにこそ呼ばはつたれ。その時水の面俄に騒ぎ鳴動することやゝ久しうして、たけ一丈ばかりなる大蛇いで、角を振りたて紅の舌をいだしに、舟越を目がけてかゝりける。待ち設けたる事なれば、矢ひとつ打番ひ、其の間十四五間もあるらんとおぼしき頃、もと筈うら筈一つになれと、よつぴきひやうと放つ。此の矢誤たず大蛇の口につつと入る。乙矢を射る間のあらざれば、駒をはやめてにげ来る。大蛇はのがさじとおつかくる。舟越我が屋に驅けこみ門をはたとたてければ、門の上へ及びかゝる所を、内より乙矢を放ちければ、手ごたへしてはたとあたり、さすが大ひやうといひこの負手、なじかはもつてたまるべき、門の上に及びながら、大蛇は忽ち死してけり。されども舟越も其のまゝ氣をとり失ひ、三日めに空しくなる、かの葦毛の駒も死にけるとかや。

十　狐を威してやがて仇をなす事

ある山伏大みねよりかけ出で、ある野を通りけるに、こゝに狐晝寝をしてゐたりけるを、立ちより耳のもとにてほらの貝をしたゝかに吹きければ、狐肝を潰し行き方知らず逃げにけり。其の後山伏は

猶ゆきけるが、いまだ未の刻ばかりにやと思ふ頃に、空かき曇り日暮れぬ。不思議に思ひ道を急ぎけれども、野遠くして止まるべき宿もなし。ある三昧に行きて火屋の天井に上りて臥しにけり。かゝりける所に、何處ともなく幽に火の光あまた見えけるが、次第に近づくまゝに、よく見れば、其の三昧へ葬禮するなり。凡そ二三百人もあらんとおぼしくて、そのてい甚だしく、引導など過ぎて、やがて死骸に火をかけ、各かへりぬ。山伏は折しもあれ、かゝる所に來りぬる事よと思ふに、やう／＼燒けぬべき所、死人火のなかより身ぶるひして飛びいで、あたりをきつと見まはしけるが、山伏を見つけて、「何者なればそこにおはしますぞ、知らぬ道をひとり行くはおぼつかなきに、我と共にいで給へ」と山伏に飛びかゝりければ、そのまゝ山伏は消え入りぬ。やゝしばらく有りてやう／＼氣をとり直し見ければ、いまだ晝の七ツ時分にて、しかも三昧にてもなかりけり。扨こそ貝に驚きし狐の意趣とは知られけり。

曾呂利物語巻第二目録

曾呂利物語　卷第二

一　信心深ければ必ず利生ある事

南都興福寺の衆徒なにがしの律師とかやいふ人有り、又かすが山の麓にしのやの地藏堂とて靈驗あらたなる地藏おはしけり。彼の律師年月歩みを運びけるが、ある日少し紛るゝこと有りて、日已に暮れて酉の終りよりぞ詣でける。道芝の露拂ふ人もなくて心凄きところに、何處より來りけるともおぼえず、一人の稚兒忽然として佇みたり。「いかなる人にておはしければこゝには御入り候ぞ。」ちごのいはく、「そなたいづ方へ通らせたまふぞ、まづわが方さまへ入らせたまへ、こゝのほどこそわらはが庵にて候へ。」といふ。「いやこれは地藏へ參り候へば、それへは參るまじき。」といふ。ちご重ねて「まづ立ちよらせ給へ。」とて、強ひて手をとりてゆく。月かげに色あひ定かならねど、蘭麝の匂ひなつかしく、いとあてなる裝ひに、覺えず心ときめきして、やがて誘はれ行くかと思へば、程なくかの家に至りぬ。彼の體世の常ならず宮殿樓閣なり。不思議や此の邊には斯樣の家居はなかりつるものをと思ひたれば、所從眷屬あまた出であひ、いろ／＼にもてなし、酒宴さま／＼なり。あるじの稚兒も醉ひ

客の僧も醉ひ臥しぬ。夜ふけぬればたゞ假臥とは思ひながら、行くすゑまでのかね言も淺からずこそ契りける。曉方にふと夢さめてあたりを見れば、ともし火かすかにして有りけるに、かの稚兒給にかける鬼の形なり。恐ろしともいはん方なし。拔き足して次の座敷を見れば、こゝに臥したるもの十人ばかり皆鬼なり。いかゞして拔け出でんと、かたへ見まはしけれども、隙間も無く造り續けたる家なれば、もれて出づべきやうもなし。まづ椽の戸をあけて見れば彼の律師が飼ひける犬何處より來るともなく、尾を振りて出で來りぬ。不思議なることに思ひぬ。彼の犬僧の裾をくはへ門外へ出でぬ。僧に稚兒に逢ひたる所に引きて行く。僧はつくゞゝと犬を守り、汝は禽獸なれども主を守る心奇特ぞよ。此の世ならぬ緣なれば當來は必ず佛果菩提に至るべしといふて、常に持ちたる念珠を頸にかけてぞ放しける。未だ夜深ければ、僧はそれより地藏堂へ詣でけり。暫く拜し歸らんとしけるが、本尊を見れば、犬の頸に掛けたる珠數のかゝりてぞ侍りける。年月毎日怠らず詣で侍りしが、其の日は暮に及びしか、道にて稚兒に迷ひし事、犬の導きつる事、地藏の化現にてたうしんの眞蹟を示し給ふにやと、信心肝に銘じしかば、いよゝゝ歩みを運びけるとかや。今生後生たのもしかりける悲願かなと、感涙を押へかねてぞ。

二　老女を獵師が射たる事

伊賀國なんばりといふ所より、辰巳にあたりて山里あり。かの所に夜な／＼人ひとりづゝ失せぬ。何なる事にかと皆人不審しあへり。其の村に獵人の有りけるが、ある時夜に入り山に入らんとしける所に、山の奥より年百にも及びなんとおぼしき老女、髪には雪をいたゞき、眼はあたりも輝き、さもすさまじく出できたる。獵人は何ものにてもあれ、矢つぼは違へじと、大かりまたをもつて胴中を射通す、射られていづくともなく逃げうせぬ。かり人は前々なかりし不思議にあひしかば、まづ其の夜は歸りぬ。夜明けて彼の物射たる所を見ければ、道もなき山の奥を、かなたこなたと血を引きける程に、それをしるべに求めければ、我が在所のかたへ有り、不思議に思ひ見れば、莊屋が家の後なる小家のうちにひき入りたり。さて莊屋かたへ行き、ちか頃率爾なる事ながら、過ぎし夜の事共ねんごろに語りければ、莊屋不思議にたへかね、「此の家は我等が母のゐる所にて侍るが、夕より風の心地とて我にも逢はで事の外うめきゐられ候が、心もとなく候。」とて行きて見れば、家のあたり戸口より血したゝかに引きたり。いよ／＼怪しみおし入りて見んとすれば、雷電の如く鳴りはためきて、母は家の内より拔け出でぬ。件の矢は食ひ折りて軒にさしてぞ有りける。さてゐたる跡を見れば、夥しく血

流れ有り、脉をはつし此處彼處を見れば、人の背山の如し。それより在所の者共山々へわけ入りて見れば、深山の奥に大なる洞あり、此の洞のうちに古狸の大きなるが、胸板を射貫かれながら死してぞゐたりける。これを案ずるに、莊屋の母をば疾く食ひ殺し、我が身母になりてぞ。

二　怨念深き者の魂迷ひありく事

會津若松といふ所にいよといふ者有り、彼が家に色々不思議なる事多き中に、まづ一番にある日の酉の刻に、大きなる家を地震の搖る樣に動かす。次の日の同じ時に、何とは知らず家の内へはひり、裏口の戸を叩き初花々々とよばはる。主の女房聞きつけて「なんぢ何ものなれば夜中に來りかくはいふぞ」と叱りければ、ばけもの叱れて、右の方に久しく有りけるが、折しも戸をあけておきけるに、其所へきたりける。その姿を見れば肌には白き物を著、上には黒き物を著て、いかにも色白き女房、髮を捌き内へ入らんとしけるを、あるじの女房これはたゞ事ならず思ひて、御祓箱の有りけるを取りいだし、彼これに恐れずやとて投げつけければ其のまゝ消えぬ。三日目には申の刻許りに、かの女房臺所の大釜の前に來りて火を焚きてゐたり。うちの者どもこれをいかにと騷ぎければ又消え亡せぬ。四日めの晩のことなるに、隣の女房裏へ出でければ、彼の女垣に立ちそひ、家の内を見入れてゐたりけ

るを見付けて肝を消し、「鄰の化物こそこゝにゐて候へ。」と呼ばはれば、化物いひけるは、「汝がところへさへ行かずば、音もせでゐよ。」といひて又消え亡せぬ。五日めの事なるに、臺所の庭に來て打杵をもつて庭をとう〳〵と打ちて廻る。此の上は御念佛ごとより外の事は有るましとて、さま〴〵の祈りをぞ初めける。眞に神明佛陀の納受有る故か、其の次の日は來らざり。「すべてのばけ物こゝに來る事五たびなり、此の上は何事もあらじ。」といひもはてぬに、虛空より女の聲にて、「五たびには限り候はじ。」と呼ばはりける。扨其の夜の事なるに、いつも主の女房、いねざまになれば蠟燭を立ておきけるを、彼のばけ物姿を現はして蠟燭を吹き消しぬ。主の女房肝を消し絶入する折も有り。七日めの夜は女夫臥したる枕許に立ち寄り、頭どちをよせがまちにし、其の上夜の物を捲りまくり、冷き手にて足を撫でければ、夫婦の者は魂を消すのみならず、しばし物ぐるはしくなりけるとぞ。

四　足高蜘の變化の事

ある山里に住みける者、いと靜かなる夕月夜に慰みに出でたるに、大きなる栗の木の叉に、六十許りになる女鐵漿をつけ髮のかすかに見えたるを四方に亂し、彼の男を見てけしからず笑ふ。男肝を消し家に歸りて後少しまどろみけるに、さきに見えける女現のやうに遮りける故、心凄くて起きもせ

す寐もせでゐたる所に、月影にうつろふ者あり、晝見つる女の姿、髪の亂れたる體少しも變らず、恐ろしき比なくて、刀を拔きかけて、いかさま内に入りなば斬らんするものをと、思ひ設けてゐたる所に、明障子をあけて内に入りぬ。男、刀を拔き胴中をかけて切つておとしたり。ばけ物斬られて弱るかと見えしが、男も一刀切つて心を取り失ひける時、やといふ聲に驚き、各出であひ見るに、男死に入りてゐたりける。やう〳〵氣をつけられ、舊の如くになりにけり。ばけ物と覺しき物はなかりしが、大なる蜘蛛の足ぞ切り散らしてぞ侍る。かかる物も星霜經ればばけ侍るものとぞ。

五　行の達したる僧には必ずしるしある事

一所不住の僧、武藏國を修行しはべりしが、をりふし道に行き暮れて、泊るべき宿もなし、野原の露に袖を片敷きて明しける。をりしも秋のなかば、月の夜すがらまどろむひまもなかりけるに、笛の音幽に聞えけり。不思議や此の邊には人里もなかりつるに、いかなる物やらんと思ひけるが、次第に近づきて、程なく僧のあたりへ來るを見れば、年の程十八ばかりなる少人の、其のさま優なるよそほひなり。やんごとなき姿を見るに付けても、疑ひなき變化の物なるべしと思ひゐる。彼の少人いひけるは、「お僧は何とてかかる野原にただ一人ましますぞ。」と有りければ、僧答へて曰く、「かかる里離れ

なる所とも存ぜず行きくれて候。御身はいかなる人にてわたらせ給ふぞ」といふて、おそろしげなる有樣なり。此のけしきを見て「我をば變化の物とやおぼしめすらん、さやうの物にては候はず、月夜になれば笛を吹きあはせる心を慰むる者なり。さいはひに童が宿にともなひ奉らん、いざ給へ」と有りければ、僧おぼつかなく思ひながら、變化の物ならば、こゝに有りてもよも安穩にてはおかじと思ひ「御心ざし有り難う侍る」とて、則ち連れだちて行きけり。とある里に至りぬれば、ゆゝしき一つの城郭有り、彼の内に誘ひ入りぬ。宮殿樓閣を通り奥に小さく設ひたる座敷有り、少人いひけるは「此處に御泊りあれ、旅の疲れにもおはすらん」とて障子をあけられ、火を持ちて出で僧に與へ、菓など參らせて心殊にもてなし「我は此の障子の内に寢ね參らせ候、御用の事候はば我等が臥しどへ音なひ給へ」とて入りぬ。僧はかかる不思議なる所へもきつる物かなと、まどろむ暇もなく光明眞言などを唱へ心を澄ましけるが、やう〳〵八聲の鳥も告げわたり、鐘の音も物すごくこそ聞えけれ。しかる所に人あまた來りて「こゝに不思議なる坊主有り、何者なればかやうの奥まで忍び入りけるぞや、たゞ事にあらず、いかさま變化の物なるべし。蟇目にて射よ、さらずば鼻をふすべよ」とてまづ縛めんとす。僧「ことわりを申さん程のいとまを賜はれ」とて、宵のありさまこま〴〵と語りけり。咎めつる者どもこれを聞いて思ひの外にうちしめり、涙をながす人も有り。ことを委しく尋ぬるに、

其の城主の若君其の年の春の比身まかり給ひけるが、その亡骸にてぞおはしける。常に笛を手なれけるに、備前に漢竹の横笛を置きけるなり。茶の具嚢供を供へおきはべるを、僧には與へ給ふらんとお僧貴う思はれける故なれば、しばらく爰に逗留し給へとて、色々の追善を營み、其の後僧は歸り給ひけり。

六　將棊倒しの事

關東にある侍、主の命に背き、とうかん寺といふ寺にて腹を切りけるを、明日葬禮をせんとて、庫裏には其の用意をし、彼の死人を棺に入れ客殿におき、坊主十人ばかり番をしてゐたりけり。更けゆく儘に皆壁に寄りかゝり居睡りけるに、其の中に下座なる坊主二人は、未だ寐入らで物語りして侍るに、かの棺震動して、死人棺を打破りて立ち出で、さも凄まじき有樣にて、燈火の下に行き、紙燭をして火を付け土器なる油をねぶる。其の後上座にある坊主の鼻へ紙燭を入れてねぶり、次第に下座まで鼻へ入れてねぶり〳〵しける。二人の僧あまり恐ろしさに、息も立てゝ居たりけるが、次第に近づきければ、遁ぐるともなく走るともなく、庫裏へ倒れ入りぬ。各肝を潰し、これは如何なる事ぞと言ひければ、しかじかと云ふ。おのおの急ぎ行き見れば、彼の幽靈もなし。棺を見れば別の事もなし。

坊主たちをおこしければ、將棊倒しの如くいづれも死に入りにけり。いろ／＼氣を附けけれども、つひに生き出でざりにけり。

七　天狗の鼻つまみの事

參河國にだうしんといふ坊主、萬に付け、恐ろしきといふこと露ほどもなかりしこそ不審なれ。平間の奥に一つの宮有りけるに、此所は人跡絶えて深山幽谷なれば、いつしか宮つこもいづちともなく失せて、跡をとゞめず。しかしける程に、だうしん社僧となりて年月つかへ侍りしが、糧料など乏しくして有りけり。人家まで程遠しといへども、心ざし有る人にたよりて齋非時をこひ侍る。ある時在所に出でて暮程に歸り侍りけるに、寺近き所に死人有り、道のほとりなりければ、腹踏みて通るに、彼の死人坊主の褌をくはへて引きとゞむ。立ちもどり腹をおさへければ放しけり。踏みける時口を開き足を舉げたるにくはへ侍る。さも有りぬべき事と思ひ通りしが、何者なれば路頭に斯くと不審におぼえ、まづ夜あけば取り置き侍らんと思ひ、寺の門前なる大木にしたゝかに縛めおき、だうしんは内に入りていね侍る。夜更けて「だうしん／＼」といふもの有り。例の萬に驚かぬ者なれば、ねぶさに音もせでゐたり。されども彼のもの呼びやまで「我を何とて縛りけるぞ、解けや／＼」といへども猶と

りあはす。さらば解かんとて纏をふつ/\と切りて家にはひり、戸二重を入りける時、「何者なれば憎し」とて太刀を抜き、はひる所を斬りけるが、右の腕を節の際よりふつと切り落す。「あ」といふ聲より姿も見えずなりにし。程なく五更の空も明けにけり。彼の社に朝な/\詣でくる老女の有りけるが、いつも詣で侍れるが、此の度も來りていふやう、「今夜御坊さまは恐ろしき事に逢はせ給ふよし聞き侍る。まことか。」といふ。「いや/\恐ろしくはなく候が、過ぎし夜しか/\の事の侍る」と語り、「その手を見せ給へ」といひける程に、取り出し見せければ、「我等が手にてはべる」とて我が手にさし接ぎ門外へ出でけると思へば、丈もとの暗闇になりぬ。此の時にこそ初めて驚き消え入るばかりに成りにけり。次第に夜あけて、いつもの老女が來つて詣でければ、人心地おはせざりけるほどに、在所に行つて人多く呼寄せ、養生しければ生き出でぬ。それより此の坊主世の常の臆病になりて、此所にある侍りざりしとかや。常に自慢しける故、天狗の鼻をつまれけるとぞ。何事によらず、まへつ高慢なるものゝかならずはぢに逢へることこれに限るべからず。

八　越前國白鬼女の由來の事

越前國平泉寺に住める出家、若き時京うちまゐりをおもひたち、彼方此方を見物して歸りがてに、

かいづの浦に泊りしが、其の宿に女旅人ぞ泊りあはせける。かの出家若年なる故、件の女、宿の閨に行き、思ひ入りたる體なり。けしからずとは思へども、其の夜は一所にぞ宿りける。夜あけて彼の女は卑女にて、年の程六十ばかりかゐすほにきも凄まじき姿なり。則ち「いづくまでも御後を慕ひ申さん」とて、又同じ泊りにぞつきにける。女房伴ひ寺に歸らんこと、いかにも迷惑に思ひければ、「ここに逗留し侍らん」とて女を置き、夜の明方にひそかにといふ所まで逃げのびぬ。卑女の事なれば、珠數を引き、腰下して出でたちてゆく程に、やがて追ひつき、かなたこなた尋ぬれば、大きなる木の空にかゞみゐたるを「扨も／＼情なきことや、とてもそなたに離るゝ身にてもあらばこそ、命の内は離れまじき物を」といふ。僧此の上は力なし、「さらば同道申さん」とて、いまだ夜をこめて立ちいで、揖渡の深みにて取つて引寄せ、其のまゝ淵に沈め、平泉寺をさしてぞ歸りける。くたびれける儘に、ふと我が寮に入りて晝寢をしゐたり。師匠の坊「新發意歸りたるに逢はん」とて寮へ行きて見れば、長十丈ばかりなる白き大蛇、新發意を呑まんとてかゝりけるに、何としてか持たれけん、新發意家に傳はるとて、よしみつの脇差の有りけるが、己と拔け出で、彼の大蛇を切り拂ふ。これ故大蛇左右なく寄り得ず。其の體を見て急ぎ歸り、人々をして新發意をおこし、都の物語など申させはべる。師匠彼のよしみつを常々望みの有るに、また奇特を見ければ、いよ／＼欲しさぞまさりける。師匠も黄金

作を持たれけるが、いろ／＼云ひてよしみつに換へて取りたりけるに、大蛇思ひの儘に窟へ押入り、彼の猪を引き殺さしめおきて食ひてけり。それより彼の所をはくさおといふは、此のいはれとぞ申し侍る。

曾呂利物語卷第三目錄

曾呂利物語　卷第三

一　いかなる化生の物も名作の物には怖るゝ事

ある座頭都の者にておはしけるが、田舎へ下り侍るとて、山里を通りしが道に行き暮れて、とある辻堂にぞ泊りける。弟子一人を召し具しけるが、夜半ばかりに女の聲して、「ここは何處よりの客人にて渡らせ給ふぞ。妾が庵見苦しくは候へども、是れに御入り候はんよりは、一夜を明し給へ。」と云ふ。座頭、「御志は有り難う侍れども、旅の習ひにて候へば、是れとても苦しからず。其の上早夜の程もなく候間、參るまじ。」と云ふに、「さあらば此の子を少しの間、預け參らせ候べし。」とてさし出す。「いさいや盲目の事にて候へば、御子などえこそ預り候ふまじ。」と云へば、「それは情なし、すこしの間にて候ぞゝ、手に賴み奉る。」とてさし出せば、弟子なる座頭ぞあづかりける。師匠の座頭、「沙汰の限りなること。」と怒りければ、「少しの程よも別の事はあらじ。」とて懷に入れにけり。扨彼の女は何處ともなく歸りぬ。とかくする中に、「此の子少し大きになり候は如何に。」と云へば、「さればこそ無用の事をしつる。」と云ひも敢へぬに、十三四な程になりぬ。扨座頭を頭より喰ひまはる程に、「あら悲

しや、何となるべき。」と、泣き悲しむ中に、はや喰ひ殺しぬ。斯かりけるところに女来り、「何とてあの師匠の座頭は喰はぬぞ。」と云ひければ、「何としても寄られ候はぬ。」と云ふ、其の中に、座頭の家に傳はる三條の小鍛冶宗近を、琵琶箱より取り出して、「何者なりとも、たゞ一うちたるべし。」とて、四方八方を盲切りに切り拂へば、あへて近づく者もなし。しばらくあつて、彼の女は何處ともなく失せぬ。扨も怖ろしき事にてありける物かなと思ひて、猶も脇差を離さで居たる中に、早夜も明けぬ。「さらば立ち出でんと思ひ、道にかゝりて行く。又女ありて云ふやうは、「座頭は何處に消られ候。」と云へば、「あれに候ひつる。」と答ふ。「それは化物ありて、容易く人の消る所にてはなし。不思議の命助かり給ふことかな。此方へ入らせ給へ。」とて、吾が家に連れて行く。扨、「彼の脇差をちと御見せあれ。」と云ふ、座頭分別して、「此の脇差は總別人に見せ候はず。」とて、鐔元を抜きくつろげてぞゐたりける。又そばより云ふやう、「見せずば唯喰ひ殺せ。」とて、數多の聲こそしたりけれ。「扨は化物ついたり。」と云ふ儘に、脇差を抜き四方を拂へば、彼の者共かゝり得ず、少時戰へば眞の夜こそ明けにけれ。邊を探れば、元の辻堂に唯一人ぞ居たりける。それより座頭辛き命助かりて、斯くぞ語り侍るとぞ。

二　離魂と云ふ病ひの事

何時の頃にかありけん、出羽國守護何某とかや、ある夜の事なるに、妻女雪隱に行きけるに、稍ありて歸り戸をたてて寢ねけり。又暫く女の聲して、戸を開けて内に入りぬ。彼の何某不思議に思ひ、夜明くるまで守り明して、彼の女を二所に分けて色々詮索しけれども、いづれに疑はしき事なかりしかば、如何せんと案じ煩ふところに、ある者、一人の女疑はしき事侍りと申しければ、猶詮索致してより後、卽ち頸をぞ刎ねてける。疑ふ所もなき人間にこそ生しけるに、今一人こそ變化の物なるべしとて、それをも頸て切りたりけり。これも又同じ人間にてぞ候ひける。其死骸を數日置きて見たれども、變る事なし、如何なる事とも辨へ兼ねるたるが、或人の曰く、「離魂と云ふ病ひなり」と。

三　蓮臺野にて化物に逢ふ事

京都蓮臺野に、大いなる叢の中に、不思議なる塚二つありけり、其の間二町許りありけるが、一つの塚は夜な〳〵燃えけり。今一つの塚は、夜每に如何にも凄まじき聲して、「こはや〳〵」と呼ばはる。京中の貴賤聞き驚き、夜になれば其の邊に近寄る者なし。爰に若き者集まりて、「誰か今夜蓮臺野に行きて、彼の塚にて呼ばはる聲の不審を晴らしなんや」と云ひければ、其の中に力勝れ心あくまで不敵なる男、進み出で云ひけるは、「我こそ行きて見屆け侍らん」と云ひも敢へず座敷を立ち、蓮臺

野にぞ赴きける。其の夜折しも殊に暗く、めさすとも知らぬに、雨さへ降りて、もの凄まじとも云はんかたなし。則ち彼の塚に立寄りて、聞きけるに、言ひしに違はず「こはや〳〵」とぞ呼ばはりける。此の男「何者なれば、夜毎に斯くは言ふぞ」と罵りければ、其の時塚の内より、年頃四十餘りなる女の、色青く黄ばみたるが立ち出でて、「斯様に申す事、別の仔細にてもなし。あれに見えたる燃ゆる塚に我を具して行き給へ」と云ひければ、男恐ろしくは思へども、思ひ設けたる事なれば、易々と請合ひて彼の塚へと伴ひ行きぬ。さる程に彼の者、塚の内に入るかと思へば、鳴動すること稍久し。暫くあれば彼の女鬼神の姿と成りて、眼は日月の如くにて光り輝き、身には鱗生ひ、眞に面を向くべきやうもなし。さりければ又、「舊の塚に連れて歸れ」と云ふ。此の度は氣も魂も失せけれども、兎角遁るべき方なければ、舊の塚に負ひて歸る。扨彼の塚へ入り、少し程經て又元の姿に現はれて、「さてさて其方のやうなる、剛なる人こそおはせね、今はのぞみを達し、滿足身に餘り候。」とて、小さき袋に何とは知らず、重き物を入れて與へけるが、彼の男鰐の口を遁れたる心地してぞ、急ぎ家路に歸りける。前の友達に逢ひ、爾々と語りければ、各手がらの程を感じける。彼の袋に入れたる物は、如何なる物にかありけん知らまほし。

四　色好みなる男見ぬ戀に手を執る事

京より北陸道を指して、下る商人ありけるが、ある宿に泊り侍るに、亭主心ありてさまざまに歡待し、奥の間に請じ入れけるが、連もなくすごすごと臥してゐたりけるが、小夜更け方に、次の間に如何なる者とは知らず、如何にも氣高き音聲にて小唄を唄ひけり。男さても斯様の面白き事は、鄙にても未だ聞かざる聲音なり、斯かる田舎にては不思議のものかなと、いとゞ床しくて次の間に行き、「如何なる人にて御入り候へば、是れへ御越しありて。」とて、傍近く寄りたれば、女の聲にて、「奥の間には誰も坐せぬと思ひ、かたはら痛き事共を申し、返すがへすも御恥かしく候へ。」とて、なよやかに臥したる御姿なり。「今宵は添ひ臥して、御音聲をも承り、御伽致し候はん。」と云ふ。女「是れは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。左様に宣はば、はや外に出でなん。」と行く。男いとゞ焦れ、「これに不思議に泊り候も、出雲路の御結び合はせにてこそ候はめ。」と、いろいろ言ひ恨みけれども、女言ふやう「爰に左様に思召され候はば、我々未だ良人も持ち參らせ候はねば、永き妻と御定め候はば、兎も角も御計ひ從ひ候べし。さりながら堅き御誓言なくしては、仇し心はまことしからず。」と云へば、あらゆる神に佛に誓ひこめて、「童も妻を持ち候はねば、幸ひに我が國に伴ひ侍らん。」と云ふ程に、流石

岩木ならねば打解けて、妹脊の契り淺からず、秋の夜の千夜も一夜と歎ちけるに、斯くて夜もはや／＼と明け行く儘に、彼の女をよく／＼見れば、其の姿あさましく、眉目の悪しき瞽女にてぞ坐しける。男大いに肝を消し、亭主に暇を乞ひ、男へは下らずして、上方指してぞ上りける。ある大河を渡りて後を返り見れば、件の瞽女、杖一本に縋り、「やゝまし／＼」と追掛くる。男これを見て馬方に言ふやう、「其方を平に頼み候間、才覺をもつて、彼の瞽女を此の川へ沈めて給はれ。」とて、やがて料足を取らせけり。これも慾深く不得心なる者なれば、易々と頼まれ、彼の女を深みに突き倒し、さらぬ體にて歸りけり。其の後商人は日暮れければ、ある宿に泊り侍りけるに、夜半ばかりに門を荒らかに敲き、「これに商人の泊り給ふか。」と問ひければ、亭主立ち出でこれを見るに、彼の者の氣色世の常ならず凄まじかりければ、頓て門を閉て、左樣の人はこれには御泊りなき由答ふ。そこにて瞽女愈々怒りをなし、「いや／＼何と言ふとも、此の内になくては叶ふまじ。」とて、戸を押破り内へ入り、旅人の隱れてゐたる土藏の中へ押し込み、鳴神の如く震動すること稍久し。餘りの怖ろしさに、其の夜は亭主も近づかず、夜明けて見れば、彼の男其の身寸々に裂けて、首は見えずなりにけり。

五　猫またの事

山家の事なるに、あたまかりとて、山より鹿の下るを庵の中にて待つことあり。ある明宵より行きて待ちゐたれば、女房片手に行燈を持ち、杖に縋りて来り云ふやうは、「今宵は殊に寒く、嵐烈しく候ふに、疾くして帰り給へ」と云ふ。男思ふやう、何とて女房是れまでは来るべし、いかさま変化の物なるべし、「汝何者なれば、我が心を誑すらん、矢一つ参らせん、受けて見よ」と云ひければ、女云ふやう、「御身は物が憑きて左様に宣ふか、疾く疾く帰り給へ、誘ひ参らん」と云ふ。男たとひ妻女にてもあれ、あれ、夜半に是れまで来る事心得ずと思ひければ、大雁股を取て、胸中をかけて射通しけるが、手に捧げたる行燈も消えて、行方知らずなり終りぬ。男は我が家に帰らん、斯かる不思議に逢ひぬる夜は、はかばかしき事はなきものと思ひ帰りければ、門の口に血多く流れて有り。ここは如何に、面倒をしつる事かなと肝を潰し、急ぎ閨に行き見ければ、女房も何とて今宵は早く帰り給ふぞと云へば、さては恙もなし。それより血をとめて見ければ、飼ひける猫の年経たるにてぞありける。久しく猫は飼はぬものとぞ。

六　をんじやくの事

信濃國末木の觀音にて、山の峯に立ちたまひありけり。此處に若き者寄り合ひ、「さるにても誰かあ

る、今夜觀音堂へ行き、明日まで居侍らん。」と云ひければ、言葉の下にそこの者一人、「それこそ易き事なれ、さらば我行きて見ん。」と云ひも敢へず出でぬ。彼の堂は、人家より二十町行きて深山なれば、晝だにも往來稀なる所にて、狐狼野干の聲ならでは、音する物も無かりけり。彼の者堂の中に入りて、夜の明くるをぞ待ちゐたり。夜半過ぐる程になりて朧月に見れば、座頭一人、琵琶箱を負ひて杖をつき、堂の内に入り來る。不思議に思ひ、いかさま唯者にてはあらじと、先づ「何者なれば此處に來れるぞ。」と云ひければ、「扨は人の怪しけるか、其方は何人ぞ、我は此の山に居侍る座頭にて、何時も此の觀音に歩みを運び、夜は聲を使ひ候はん爲詣で侍る。常に參り通ひ候へども、人の有りける事はなし。いと不審にこそ候へ。」と咎めければ、「云々の仔細有りて來りたり。扨はよき連にて侍るものかな、向後は我等が方へも來り候へ、そんじようそこ邊にゐ侍る。」など語り、平家を一句所望しければ、「易きことなり。」とて、琵琶を調べて一句語りければ、「一世の常平家を聞き侍れども、斯やうの面白き事はなし、節より始め音聲息つぎ、中々目を驚したる事どもなり。今一句。」と所望すればまた語る、感感に堪へにけり。平家過ぎて後轉手きしみければ、をんじやくを取り出し絲に塗りけるを、「それは何と云ふ物ぞ。」と問ふ。「これはをんじやくと云ふ物なり。」「ちと見せ給へ。」と云うて、手に取りけるが、左右の手に取付き、何とすれども離れず。手は板敷に著きて働かざる時、彼の座頭、長一丈

もあるらんと覺しく、頭は棘立ち夥しき、口大きに裂け、角生ひて、怖ろしとも云はん方なし。「汝は何とて此處に來れるぞ」と云ひ、首を顔を撫で、色々にたぶり戯して後、何處ともなく失せぬ。男は漸うをんじやくを醒しけるが、無念比もなくてゐたる處に、松明の數數多見えて人來れり。見れば皆の座敷に有りつる友達なり。「やうやう夜も明方になれば、迎ひに來り候。扨何事も珍らしき事は無かりつるか」と云へば、「その事にて候」とて、始めよりの事ども細々と語りければ、皆人手を打ちてどつと笑ふを見れば、又件の化物の形なり。其の時にこそ消え入りにけり。夜明けて人來り濟うて氣を付けけれども、見る人毎に、化物の來りて吾を誑すと思ひて、少時人の心地もなかりしが、遂には本性になりて斯く語り侍る。

七　山居の事

世を憂きものに思ひ澄ましたる僧ありけり。都東山鳥邊野に柴の庵を結びて年月を送りける。彼の僧の俗たりし時の友達訪ひ來りけるが、年久しく隔てしかば、いと懇に物語し侍りし程に、秋の夜いたく更けて、色々の獸の近く音するもいと物凄くして、斯かる所に唯一人、如何堪へ忍びけるごと思ふところに、何處とも知らず、今宵こそんじようそれこそ客しくたゝぬ、日頃契約のごとく、御

出で候はば、とりおき給はり候へ」と云ふ。主云ふやう、「今夜はさり難き約束御入り候間、參るまじき」由云ふ程に、彼の何某、何とて左樣には宣ふぞ。ことに日頃の契約の上は、急ぎ行き給へ。」と云ふ。「さらば參り候はんずる。如何にも怖ろしき事有りとも、あなかしこ音もせでゐ給へ。頓て歸り侍らん。」とて出でぬ。彼の何某は常々にも、心に剛ある者とは云ひながら、唯一人殘りければ凄まじくこそ思ひけれ。漸う寅の刻許りになりぬと思ふ頃、何處ともなく光りて內に入りぬ。何某刀の柄を碎けよと握りゐたるが、魂は何處にか拔けつらん、夢ともなく門を守りゐたれば、繪に書ける鬼の形したる者一人、內へ押入りて、主の閨に行きて、少時物食ふ音しけるが、稍ありて彼の者、又光の中に何處ともなく失せぬ。其の時少し人心地出で來て、さるにても主の部屋の內不思議に思ひ、垣の隙より覗きければ、人の死骸山の如くに積めり。これを食ふなるべし、いとゞ怖ろしくぞ思ひける。夜明けて主歸り、「さても不思議の命助かり、斯くの如くの事に遇ひつるは如何に」と語りければ、「何時も左樣の事は有る事に候ふ」と、さらぬ體にもてなしゐ侍る。よく是れを案ずるに、何時の程にか人を食ひ習ひ、其の罪果して一つの鬼となれり。夜來つる鬼の形なる者は、坊主なるべし。

曾呂利物語卷第四目録

曾呂利物語 卷第四

一 聲よき者をば龍宮より欲しがる事

尾張國熱田の宮に、常に謠を好きて、夜晝ともなく唄ふ者ありけり。少し海上に地を築き出し、爰に一つの亭を造り、彼の一曲なほ怠らず。ある夜更過ぐるまで唄ひ侍りけるが、海上一丁程沖より、大音聲を出し、「いや〳〵。」と褒めたりけり。此の聲彼の者の耳に留り、いと堪へ難かりけるが、其の儘勞はりつきぬ。程經て心亂れ、既に末期に及ばんとす。時に一門眷族集まり歎き悲しむ。斯かりけるところに、沖の彼方より俄に震動して、身の毛よ立ちけるが、丈一丈もあるらんと覺しき男の、眼は日月の如く光り輝き、面の色朱をさしたるが如く、左右の眉は漆を塗りたるが如くして、眞に面を向ふるに、魂を失ふ程なるが、彼の座敷にむずと居直り、「何と養生するとも、明日の暮程に必ず迎ひに來るべし。」と云ひて、消すが如くに失せにけり。とかう云ふべき方もなく、「さあらば明日は番を置け。」とて、弓胡籙を持つて各宿直して待ちかけたり。又明くる子の刻と覺しき頃、海上鳴動して光滿ちて、件の者來れり。前かどは討ちもとゞめ、射も殺さんと犇きしものども、心茫然として足もな

えて、俄にかの氣色にてさまよふ内に、其の儘彼の婦人を抱きて海中に入りぬ。此の上は力及ばぬ事なれば、亡き跡弔ひ執り居たる座敷へ、又明くる戌の時ばかりに、彼の男を寸々に引き裂きて、「欲しくば返さん。」とて座敷へ投げ出す。如何なる事ともわきまへかねし。

一、御池町の化物の事

御池町さる者の家に、化物有りといふ事あり。昔も人に家を貸して外に出でぬ。斯くはいへど定かに見たるといふ人もなし。爰にをこの者二人寄り合ひ、「これにても彼の家にゆき、化物あるか無きかを見届けずばあるべし」といひて、彼の家に宿借りて居たるものは、鍛冶する者なるが、夜な／＼變化の者にも怖れず、又化物も何のさまをも見せで、上下二三人留守居る。彼の留主に案内云ひて、夜の戸なるを二人忍び行き、彼の家の有様、奧に茂りたる竹の一叢ありから化物は出づるなど云ひ、奧の戸堅く締め、多くの押しをかけ、又いつも出たる其所の上に、敷物なども多く置き、二十人許りしては動かし難く拵へて待ち居たり。丑の時ばかりに表の戸口に叩き音しけるが、程なく何物とは知らず來りぬ。二人聞きおけれど、いつもの如く其所を踏み鳴らす。其の夜しも爾目覺えたるが、二人ながら起きて隙を見れば、白きもの落ちたる時に、長七尺ばかりなるが、目、鼻、口もなきが其所を踏み、後

二三人の方へ顔を向けける。日頃は「如何やうなる化物にも逢ひたらば切りなん。」と云ひしが、息をも立てず居たり。程なく化物は何處ともなく失せぬ。夜明けて見れば、裏の戸も唐戸も宵の儘なり、不審とも怖ろしとも云はんかたなし。

三　狐再度化くる事

さる何某召使ひける男、妻に離れ幾何もなきに、彼の妻よな〳〵來り侍る。彼の男の心空にや有りけるやらん、化生の物とも知らず、いつもの如く思ひ夜な〳〵傍を離れず云ひ侍る。傍輩ども聞きつけて「斯かる不審なる事こそなけれ。いざ持佛堂を見ん。」とて、彼の者の家に行き伺ひ見れば、人の云ふに違はず。思ひ來れたるところに、二人相向ひてぞ居たりける。「とかく押入り、女も男も捉へ見ん。」と云ひ合はせて、彼の家に押込み、男女共に抱きとりけり。斯くする内に燈火消えぬ。「女を取り放すな。」と聲々に云ひて外に出で、松明を點してあれば、彼の男の主の飼ひける唐猫なり。騷がし、「麁相をすな、殿の御秘藏の唐猫なり。」と云ひければ、抱きける者、少したゆみける内に、「くわいくわい。」と云ひ藪の中に入りぬ。さては狐にてありけるものをと、人々頭を搔きけるとぞ。

四　萬のもの年を經ては必ず化くる事

伊豫國出石と云ふ所に山寺あり、鄕里を隔つること三里なり。彼の寺草創のはじめ、一位と云ふ僧果、本願として年月を送りけるが、何時の頃よりか、此の寺に化物ありて、住持の僧を捕りて行方知らず。其の後度々住持ありけれども、何れも幾程なく捉り終りぬ。今は住持なき寺になりしかば、如何にも荒れて、靈不斷の香をたき、星落ちては八月常住の燈火を挑げんとも請ひつべし。斯かる處に、關東より足利の僧とし上り、一位が許に來り、彼の寺の住持を望みける。一位が云ひけるは「此の寺は六十年の仔細有りて、中々一時も堪忍なるまじ。寺はさいはひ無住の事なれば易き程の事なれども」と云ふ。「さればこそ望みて參り候間、是非とも彼の寺に行きたし」と云ふ。一位更に請けずなりければ、押して彼の寺に行きて見れば、實に年久しく、人の住まざりければ、荒れ果てたる態、實にも變化の物も住むらんと覺え、暫くて夜に入り聞しあれば、門より「物申さん」と云ふ。「誰ぞ」「一位が許よりの使おこしけるか」と思ひたれば、內より何處ともなく、「どれ」と答ふ。「圓通坊は御內に御座候か、これは東野のけんやのばとう、こんけいが三足、こんさんのきうぼくにて候。御見舞申す」と云ひて參りたり。圓通坊出で逢ひ、樣々に歡待して後に、「御存じの如く久しく生魚絶えて無かりつるところに、不

思議なるもの一人出で来りはべる。御歓待においては不足なきことといふ。「客人も寔に珍らしき事有り、拙き饒事何よりの以ての御もてなしにてこそ候へ」、夜と共に酒盛を致し遊ばんと興に入りぬ。彼の僧は元より覚悟したる事なから、彼等の餌食にならんことも口惜しき次第なり。されにても化物の名字をたしかに聞くに、先づ圓遙坊といふは丸瓢箪なるべし、こんかのこねんは、坤の方の河の鯰、けんやのばとうは乾の方の馬のかしら、そんけいの三足とは、巽の方の三つ脚の蛙、こんさんのきうぎくとは、東の方の古き朽木の化したるにてぞあらん。彼等ごときのもの、如何に功を経たればとて、何程の事かあるべき。常に筋金を入れたるほうを衝きて来たり。彼の棒にて何れも一時の勝負たるべしとて、大音聲をもつて、「各變化の程を知りたり。前々の住持その根源を知らずして、遂に空しくなりぬ、我はそれには事變るべし」。手並の程を見せんとて、彼の棒を取り直し、爰にては打倒し、彼處にては追ひ詰め、丸瓢箪を始めて、皆一打ちゝに打ち割り、四つの物ども散々に打ち砕き、其の他眷族の化物ども、或はすふくべ、擂小鉢の割れ、缺けた鉢、擂小木、足駄木履、蘆の切れ、味噌漉、いかき、竹すんぎり、数百年を経たる物共、その形を變じてつきまとひたる所なり。彼の棒に一あてあてられて、何かは少しもたまるべき、一つも残らず打ちくだきてぞ捨てたりける。夜明けて二位が許より使を立てて見れば、僧は恙もなかりけり。さて二位は寺に行きて訪ひければ、有りし事

どもくはしく語る。眞に智者なりとて、則ち彼の僧を中興開山として、今に絶えず古跡となり、佛法繁昌の靈地とぞなりにける。

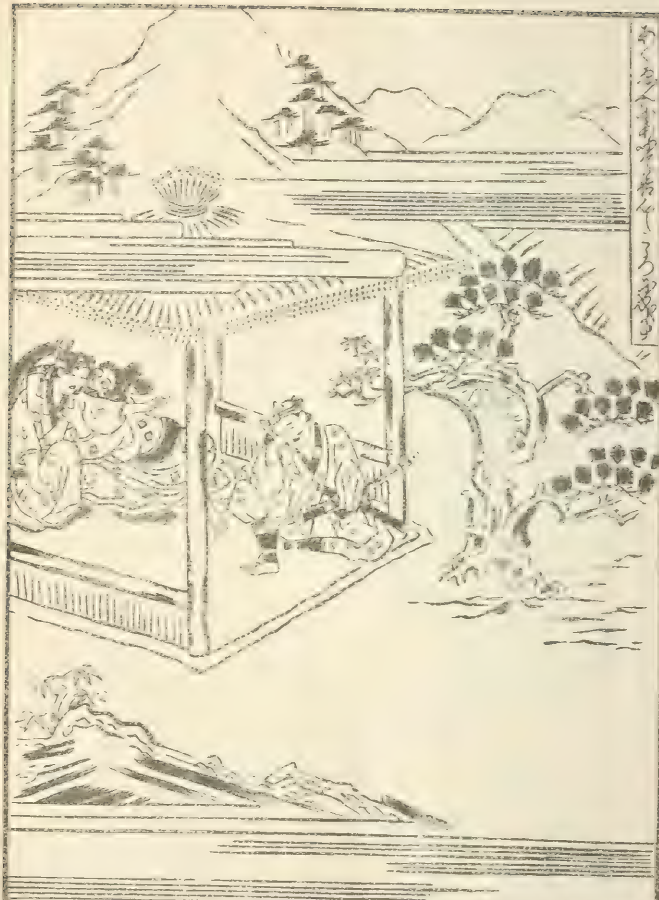
五　常々の惡業を死して現はす事

關東に宇都宮の何某とかや云ふありけり。彼の息の方、幼き時名をおちやあと云ひける。おかみさま、おちやあなど人云へば、年よりたる心地すなとて、や、年たくるまで幼名を呼ばせける。斯かる心より萬事不得心にて、召使ひける者をも、或は打叩き、少しの事にも折檻して、慈悲の心は露程もなかりけり。さるから身まかりけるに、臨終の有様怖ろしき事思ひやるべし。扨、邊の寺へ送りけるが、未だ葬禮をさせで香の火をとりに行く程をぞ待ち居たる。死骸を棺に入れて佛前に置き、番の者數十人、其の他一門眷屬數多、附近の僧など集まりゐけるに、眼に彼の棺震動する事夥し。何事にかと時人奇異の思ひをなしけるところに、彼の死人、棺の内より怪しからぬ姿にて立ち出でぬ。白晝の事なれば、諸人「あれや〳〵」と云ふ程こそあれ、見る内に面變りて、眼日月の如くにして、鬢はそゝけに生ひ上り、齒がみをしてつい立つたる有様、眞に面を向くべきやうもなし。かかるところに長老出で向ひ引導して弔はるれば、元の如くの死骸となる。惡心の怖ろしさ、佛經の尊さ、彼

これもつて疑ふべきことかは。

六　悪縁にあふも善心のすゝめとなる事

信濃國の守護に召使はれける某、或時人をあやまりて隠れゐたりけるが、かたき數多狙ひける由傳へ聞き、並びの國に所縁あつて、彼を頼み下らんと思ひ、夜に紛れて忍び出でけるが、一門眷屬にも知らせずして、女房をも留め置きけるが、女房は「道にて如何にもならばなれ留まるまじ。」とて、強ひて行かんと云ふ。げにも人に探し出され、如何なる憂目にも遇はんは、かへつて我等が恥辱と思ひ、「さらば伴ひ行かん。」とて、夫婦只二人、深山の嶮しきを分けて辿り出く。折節女房は唯ならぬ身にて侍るが、頻りに腹を痛みける程に、腰を押へて負ひたどり／＼と行きけるが、向ひの山に火の幽に見えけるを幸ひと思ひ、辛苦してやう／＼火をしるべに行きて見れば、辻堂なり。内に入りて少時息をぞつきたりける。かかりけるところに、人一人來り、辻堂の戸を荒らかに敲くものあり、「誰ぞ。」と問へば、「はるにて候。斯様に落ち行かせ給ふ由承り、随分追ひ付き奉らんと存じ山中を凌ぎ、やう／＼これまで參りたり。妾が事は餘の者とちがひ、幼き頃より召使はれ、片時も御傍を離れ參らせず、年月の御恩賞に、斯様に御先途を見屆け參らせではあるべきか。殊に御うへ樣たゞならず御



渡り候に、人一人も副ひ奉らず、斯かる險しき山路を如何で忍ばせ給ふべき、はや〳〵開けさせ給へ。」と云ふ。男餘りの不審さに、「女の身として斯かる險しき山路を、殊更夜中の事なるに、是れまで來る事覺束なし。よも、はるにてはあらじ。」と云ふ。「是れは御詞とも聞えぬ事を承り候ものかな、身こそはかなき女なりとも、心は男に劣るべきか、物ごしにてもやがて其れとは知ろしめされずや。遙々是れまで參りたる心ざし、如何で察しくださせ給ふことよ。」と、さめ〴〵と泣きければ、實にもはるが聲にてありけるとおもひ、やがて内へぞ呼び入れける。とかくする内に、女房は産にゐて、すこし心も安からねば、傍にはるを添へ置きて、居ねぶりてぞゐたりける。女房も流石山路の疲れと云ひ、殊の外に困じたれば、我かのけしきに寄り添ひゐたるに、後なるはる、女房の首の廻りをひたもの舐り廻しける。驚き目を覺し、「なう〳〵はるが我を舐りて怖ろしきに、これへ寄らせ給へ。」と云ふ。はるがいはく、「斯やうの時は、御血の心にて左樣の容事を仰せあるものにて候。少しも苦しき御事にては候はず、音もせで御休み候へ。」と云ふ。男は實にもさある事ならんと思ひ、油斷してゐたる間に、何處ともなく二人共に失せにけり。男目を覺して後肝をつぶし、「こは如何にしつる事ならん。」と、堂の外を尋ぬるに行方なし。ひた呼ばはりに呼ばはれども見えず。其の後山の上に聲のしける程に登りて見れば、谷の底に叫ぶ音しけり。又下手を見れば峯に聲立てるなど、彼方此方とまどひありく内に

夜も明けぬ。無念類もなくて、腹を切らんとしけるが、麓に寺の見えける程に、これにて如何にもならんと急ぎ下りて、寺の長老に向ひ「しかじかの事侍り、後世をば頼み奉る」とて既に腹を切らんとするを、坊主色々になだめ「兎角内儀の行方を尋ね給ひて、兎も角もならせ給へ」とて、弟子同宿其の外地下の人を入れて、至らぬ隈もなく尋ねければ、大きなる木の上に、すんすんに引き裂きてぞ懸け置きける。愈自害をせんと思ひ定めけるを、長老色々教訓して勸めければ、則ちそこにて出家して妻の後世を弔ひ、道心堅固にして終りけるとなん。斯かる憂目に逢ふことも、却つて佛の御慈悲にこそ。

七　女の妄念怖ろしき事

近江國さほ山と云ふ處に、昔ある何某はべりけるが、彼の者二人の妻を持てり。今に始めぬ事ながら、取りわき本妻妾を憎む事限りなし。ある時妾晝寢に居ければ、たけ一丈許りなる蛇、前に來りければ、「あら怖ろしや」と喚きしかば、人々出合ひける程に、何處ともなく失せぬ。其の後本妻産後に、殊の外病に臥し既に末期に及ぶ時、男折しも妾の處に居侍るが、此の由を聞き急ぎ歸り、色々養生すると雖も、叶ふべきとも見えず。彼の女云ふやう、「我は只今身まかりぬ。此の年月の怨念、生々世々忘

れ難く候。」とて、男の飲ませける水を顔にざつと吐き掛け、歯がみをして終に空しくなる。片時も過ぎざるに、妾の所へ忍び、首をねぢ切り、消すが如くに失せぬ。さて力およばず、妾の葬禮を致しけり。其の時件の首を手に提げ、橋のありける所に立ちてゐたり。本妻の乳母これを見付け、「あら浅ましの御姿や。」と云へば消え失せぬ。又妾の子、十一歳と九歳とになる男の兒子二人有り。此れも三日の内に病み出し身まかりぬ。男は取り集めたる歎き一かたならず、これも程なく失せぬ。總領一人殘りけるが、髻を切り高野山にとり籠り、父母の後世をぞ弔ひける。

八　座頭と變化の物と頭はり合ひの事

奥州の片地の里に、高隆寺と云ふ山寺あり、彼の寺へ昔座頭常に出入し侍りしが、何時の程にか行方知らずなりにけり。其の後二三人座頭立ち寄りしかども、いかになりけん、四五日程ありては、故なくなりける程に、其の後は絶えて座頭来ることなし。ある時りうばいと云ふ座頭、此の事を傳へ聞き、かたへの人にあひて、「我を此の寺へ具して給はれ。」と云ふ。「いやいや、此の寺にはしかじかの事ありて、座頭の行かぬ處なる程に、叶ふまじき。」と云へば、平に頼む由を云ふ程に心に任せけり。此のりうばいと云ふは、丈高く、腓太く、力は四五人が力もあるらん、兜なりしたる石の鉢を持ち、

大斧を袖短く裹へて琵琶箱に入れし、件の人を案内にて高隆寺へ行き、主の僧に斯くと云へば、坊主斜ならず喜び、則ち出でて對面して曰く、「此の寺は昔より如何なる謂れにかありけん、座頭來りては歸らぬと云ひ傳へ侍るが、それは昔の事なり、此の頃は更に別の事もあらじ。りうばいは、心安く思はれよ。愚僧が斯くてあらん程は、なんの仔細もあらじ。久しく平家を聞かず、一句語られよ」と云ふ。「心得候」とて平家を三句すぎ、とかくして夜も更け行けば、伴ひし人は歸りぬ。りうばいは「御伽申さん」とて、夜もすがら物語などうきして寢ね侍る。亭坊は邊を嚴しく圍ひて、「扨今宵は徒然にも候へば、何がなんして慰み侍らん。いざや頭をはりこくらをして遊ばん」と云ふ。「それは一段の御事にて候。我はどれからはられ候はん」と少時詮索して、坊主「まづ愚僧をはれ」と云ふ。「いやそれは恐れにて候ふ間、まづ受け候はん」と云ふ。「さらば、一受けて見よ」とて、こぶしを握りてかゝる中に、彼のかぶとかづきを待ちゐたる。「えいや」と云うてはりけるが、かぶとごしなれども更に打擲す。暫しが程は目くるめき絶え入りけるが、漸う心を取り直し「さてもいかめしき御拳かな、恐れながら私も一あてあてて見申すべき」と云ふ。「さらば受け候はん」と、起き居て待ちかけけり。座頭つくづくと思ふやう、「いやいや、此の者はさも人間にてはあらじ。たとひ何者にてもあらばあれ、斯かるをこの者を生けて置きては詮なし」と思ひ、彼の大斧をそろりと取りいだし、「えいや」と云ふほど

こそあれ、大力にて打ちける程に、たゞ打ちに打ち殺す、さて夜明くるまで待ち明し、内より戸を叩きて呼ばはりければ、同宿沙彌出であひてこれを見れば、小牛程大なる大猫なり。口大きに裂けて、尾は數多筋に分れ、怪しからぬ姿なり。さき〳〵の坊主をも食ひて、猫こそ住持になりける。

九　打きねうん市が事

信濃國善光寺の内に比丘尼寺ありけり、また越後國にうん市と云ふ座頭はべる、常に彼の比丘尼寺に出入しけり。ある時いさゝかなる事ありて、半年程訪れざりけり。少し快くして彼の寺に行きけり。主の老尼、うん市は遙かにこそ覺ゆれ、何として打絶えけるぞ。と云ひければ、久しく所勞の事候ひて、御見舞も申さず候。と云ふ。とかくして其の日も暮れければ、うん市は、客殿宿られよ。と云ひて老尼は方丈に入りぬ。爰にけいじゆんとて弟子比丘尼あり、三十日程さきに身まかりぬ。彼のけいじゆんうん市の臥したる所へ行きて、其の後は久しくこそ覺ゆれ、いざ我々が寮へ伴ひ侍らん。と云ふ。うん市は死したる人とも知らず、それへ參るべく候へども、御一人坐す所へ參り候事は如何にて候まゝ、えこそ參るまじ。と云ふ。いや〳〵苦しうも候はず。とて、是非に引立て行く。彼の寮の戸を内より強くさして、明くる日は外へもいださず、さて暮れぬ。うん市氣つまり、如何すべきと

思ひながらすべきやうもなし。あうけつにぎやうしの鐘の音しければ、「ぎやうしに逢ひて歸り候はん間、あなかしこ、よそへ出づる事あるまじ」と云ひて出でぬ。さて如何して出でんとあたりを探りまはしければ、いかにも嚴しく閉ぢあければ、出づる事もならず。夜明けてけいじゆんは歸りぬ。斯くする事二夜なり。其の中に食物絶えて迷惑の餘りに、三日目の曉ぎやうしに出でけるうちに、例の戸を荒らかに叩き呼ばはりければ、則ち寺中の者出であひ、戸口を蹴放し見ればうん市なり。「此の程は何處へ行きけるぞ」と尋ねければ、「爰にゐてこそ侍れ」と云ふ。見ればしゝむら少しもなく、骨ばかりにて、いとも恐ろしき姿なり。「如何に〳〵」と問へば、如何にも疲れたる聲にて、息の下より「しかじかの事にて侍る」と語る。「けいじゆんは十日ほど三昧に身まかりぬる」と云へば、いよ〳〵興さめてぞ覺えける。一つは、けいじゆん弔ひの爲、又はうん市が怨念を拂はん爲とて、寺中より合ひ口萬遍の念佛を修行しける。各鐘うち鳴らし誦經しける時に、何處ともなくけいじゆん形を現はし出で來り、うん市が膝を枕にして臥しぬ。念佛の功力に因りてや、ひた寐入りに寐入りの仕儀もなかりければ、斯かる隙にうん市枕を外し、「はや國に歸り候へ」とて、馬を用意して送りぬ。道すがらいかにも身の毛よだち、あとより取り付かるゝやうに覺え、行き惱みけるほどに、或寺へ立ち寄り長老に會ひて、「しかじかの事侍り。平に賴み奉る」と云ふ。「さらば」とて有驗の僧數多寄合ひ、うん市が一身

に、尊勝陀羅尼を書き付けて佛壇に立て置きぬ。さる程にけいじゆんさも恐ろしき有樣にて彼の寺に來り、「うん市を出せ〳〵。」と罵りて走りまはりしが、うん市を見付けて、「噫可愛や座頭は石になりける。」とて撫で廻し、耳に少し陀羅尼の足らぬところを見出して、「爰にうん市が切れ殘りたる。」とて、引き千切りてぞ歸りにける。さてこそ甲斐なき命助かりて本國へ歸りしが、耳切れうん市とて、年たくまで越後國にありしとぞ。

十　怖ろしくあいなき事

陸奥小野寺と云ふ山寺あり。その所に化物ありて、家どうじたき家侍る。爰に都より下りたる旅人其の里に泊りけるが、亭主さま〴〵に歡待し、四方山の物語の序に、彼の化物の樣子を細々と語り侍る。旅人は、「左樣の事を見置きて故郷の物語にもなるべし。」とて、其の夜、「彼の家に行かん。」と云へば、亭主色々に止めけれども用意す。夜半ばかりに彼の家に行き、奥の間にたて籠り、内よりかけかねをかけ、用心して、化物の虛實をぞ聞き居たる。如何にも茂りたる森有りけるが、寅の刻と覺しき時、森の方より、電の樣なる光物ちらと見えける程に、彼の男すはやと思ひ、腰の刀を拔きかけてぞ待ちかけたり。稍少時ありて、前の如くに光物座敷の内外明らかに見えける。丈餘りなる男の、

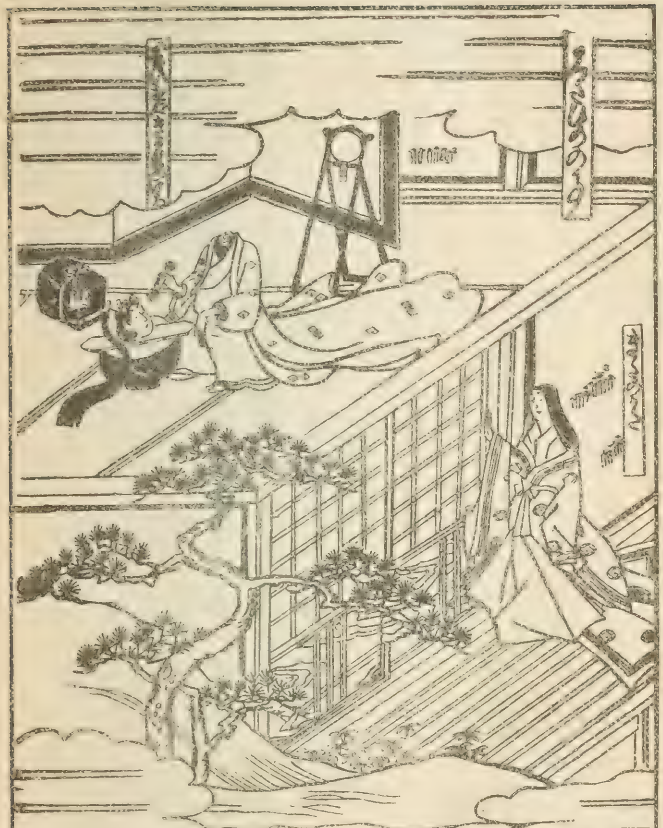
色青く如何にも痩せ衰へたるが、妻戸に取り付き大息つき、少時内なる男を守りゐたり、怖ろしとも云はん方なし。されども不敵なる者なれば動ぜず、かゝらば切らんと思ふ。彼のもの、こゝには口なし、さらば臺所へ參り候はん。」とて臺所の方へ行き、二重三重さしたる戸を易々と蹴放し、奥の間へ這入りければ、彼の男思ふは、變化の物ならば切りたりとも切りとめじと思案して、刀を捨てて走りかゝり、確と抱き付くを、化物に胸をはたと蹴られて倒れて、其の儘消え入りにけり。明くる日臺所の者共、「夕の旅人はいかなりつらん。」と行きて見れば、死に入りてぞ居たりけれ。やう／＼氣を付ければ息出でて、ありし事ども細々と語りける。其の後はいよ／＼其の家には人も住まずなりにけるとぞ。

曾呂利物語卷第五目錄

曾呂利物語　巻第五

一　龍田姫の事

何某の娘成人する儘に、女房達数多付け侍る。爰に何處ともなく、いとあでなる女一人佇みて、宮仕望みはべる由云ひければ、「幸ひ御内にこそ御身のやうなる人を尋ね侍るなれ。いざ給へ、北の御方に斯くと申さん」とて、云ひければ、則ちとゞめて置かれけり。彼の宮仕の心に入りたる事はさて置き、ゑかき、花結び、手跡美しく、縫物などはじゞの手にも劣るまじく、物の色合など染めいだせる事は、龍田姫も恥ぢぬべき程なり。ある時北の方、女の部屋を垣間見しに、夜いたく更けて燈火かすかなるに、己が首をとりて前なる鏡臺にかけ置きて、鐵漿をつけ化粧して、又わが軀につぎて、さあらぬ體にてぞゐたりける。怖ろしとも云はん方なし。さて主の殿に「斯かる事侍るを、いかゞ計らひ給ふぞ」と云へば、「先づ何となく暇をいだせ」と云ふ程に、女を近づけ、「近頃云ひかね侍れども、『人多く侍れば、一人も二人も暇を出せ』と宣ふ間、そなたのやうなる重寶の人はましまさぬ程に、いつまでもと思へども、いづれも譜代の者にて暇いだされぬ者共なれば、まづ／＼何かたへも出でら



れ候へ。その上良人の命背き難く侍れば、重ねて娘嫁人の折節は迎へ侍らんことを云ふ。其の時女氣色變りて、さては何ぞ御覽じて斯くおほせ候やらんこと、そばへ近く居寄れば、その方は何事を云ふぞ、又やがてこそ呼び侍らんことと、さりげなく宣へども、いや／＼請くもなき事なりことて、飛びかかりけるところを、男かねて心得けるにや、後に立ち添ひけるが、刀を拔きはたと切る、切られて弱るところを引直し、心の儘に切れば、年經たる猫の、口は耳まで切れて、角生ひたるにてぞおはしける、其の名を龍田姫と云ひ侍るとぞ。

二　夢爭ひの事

みやこに或何某とかや、本女房はなくして、腰元に召使ひ申す女二人あり。一人は出雲國の者、一人は豐後國のものなり。ある時二人の女碁雙六してゐける、間遠半疊ほどある。然るところに、奧の座敷に二人の女の聲にてうめく音しける。不思議に思ひ男忍びかけ寄り見れば、二人の女の丈なる髮がさかさまに生ひ上り、上にては一つに離れ合ひては落ち、または兩方へ分れなどして、なか／＼すさまじき事申すもおろかなり。さて二人の女の枕元を見れば、小さき蛇一尺二三寸許りなるが二すぢ、互に舌を出しひろめかし、喰ひ合ひては退き／＼する。此のとき一人の女殊の外、齒ぎりをして

呻く。是れを見て男は肝魂を消し、呆れ果てゝ居たり。さて其の後男はいつもの體にて聲をして、彼の女ども寐ねたる座敷へ行けば、二すぢの蛇は其の儘分れ、女の胸に上ると思へば、其の儘失せぬ。長き髪はいつもの如く美しく梳きたて結ひたる儘なり。そこにて男二人ともに起せば、目を醒しけり。見れば二人ともに汗を流し居たり。男云ふやうは、「何を夢ばし見たるか」と問へば、「いや〳〵、夢も見ぬ」と申す。一人の女申しけるは、「不思議や、人といさかひたると思ひたるばかり」と申す。さて男は怖ろしく思ひ、それより二人ともに暇をやり、重ねては獨身にて日を暮し侍る。女の妄念は怖ろしき故、男に勝れ罪も深きと、古より申し傳へ侍る。

二　信玄逝去の謂れの事

甲斐國信玄、唯かりそめの風の心地と宣ひて、醫療を加へ給へる頃、醫師作庵と二人奥深き所に居給ひて、少し晝寐し給へり。次の障子をさらりと開け、忍びて來る者あり、見れば白き小袖裲襠、さも優なる女なり。少時臥し給へる枕上に居寄りて、何の事もなく物思はしき姿にて歸る。作庵目醒めて是れを見るに、定めて奥方より御氣色見舞ひにこそ參り給ふらんと思ひ居たれば、信玄驚き、「今の女ばし見たるや」と宣へば、「さん候、御上﨟衆を見侍る」と申す。其のとき信玄宣へるは、「既に此の

世を去りし給ひぬ。不思議なる主従なり。己が郎に一丸と申すものありしが、其の郎にも死期に我を頼みければ、「一丸継うして行末覺束なし。汝養子として守りたて家門相續して異れよ」と云ひしを、一丸成人して後、互に争ふ事ありて、押寄せ討つて候ひし。其の恨み申したく、一丸の母来りて、我を迎へに来つるぞ、はや〳〵来よとて、手を提へて引き侍るほどに、行くまじきと云ふ。互に曳き合ひ侍りしが、退かれて行くと思ひしところに、夢さめてありければ、正しく一丸が母、枕元に有りしなり。それ故に此の度の煩ひ不復し難し」と宣へるが、果して逝去し給ひにきと倩語り申しき。

四　信長夢物語の事

信長と信玄の取合ひの時、信長の家來に少身なる何某、度々高名を表はして、寵愛せられしが、ある時彼の者に申さるゝは、「其方子供は無きか、さあらば其方死したりとも、子供を取り立て異れん」と御申しありつ。なにがし云ひけるは、「悴一人持ちて不便に存じ候間、頼み奉る」と契約して、程なく戰場にて討死し侍りぬ。さる程に信長もかの取合ひに事紛れ、其の事失念してありしが、年を經て信長世を去り、國治まりければ、彼の何某が子も成人して、微かなる體にて外樣に侍りしが、ある時母に向ひて云ひけるは、「我樣に有るか無きかの體にて、かせ奉公を致しては、たゞ〳〵母の心やす

き事もふしまさず。孝行に思ひまゐらする詮もなし。何方へなりとも罷り越し、立身致し侍らんと存じ候。」と云ふ。母のいはく、「汝が父の何某信長へ堅き約束のある間、今年許りは待ちて見給へ。」とて、色々に申し宥めてありしが、其の頃信長御夢に、彼の何某申し上ぐるは、「年月を過ぎ相待ち候へども、御約束の如く我が子に知行も下され給はねば、既に他國の志あり、不便には思召されずや。」と、いと怨めしげに申しければ、夢さめて後、扨も不思議なる事かなと思ひ、家中を詮索し給へば、誠にかすかなる外樣奉公にてぞありける。やがて呼び寄せ宣ひけるは、「汝が父は度々の高名世に隱れなし。然るを近年の亂世故、其方が事はたと失念したり。先祖の跡相違なく申し渡すところなり。此の上は尚おろそかならず、父に勝りて高名をせよ。」とて、色々のかづけ物して歸されし。斯かる事もありけることにやとぞ。

五　因果懺悔の事

のがれても同じ浮世と聞くものを、いかなる山に身を隱さん、隱し果てなんあらましに、東の方に赴きしが、此處は名に負ふ信濃なる、木曾の麻衣あさましく、やつれ果てたる旅姿、行方何方としら雲の、梢にかゝる深山路を、心すごくも分け行けば、こゝに年の程四十餘りに見えたる男、いかめに

製へたる大なる刀を横たへ、彼の僧に向ひて、「其の頸にかけたる平包を渡すべし」と、眼を怒らかして乞ひければ、彼の僧は、「是れは經一巻包みたり、別に召されても由あるまじ」と云ふ。「とかくの是非に及ばば害し侍らん」と、刀の柄に手をかけ侍る。元より命惜しむべきにもあらねども、流石に今はの際なれば、先の平包を解きて與へける。男岸の方に腰をかけてゐたり。「何樣此の者の面魂にては、はて〳〵は我を失はれすらん、これこそ方便の殺生なるべし」と云ひて、數千丈も高き岸より突きおとしぬ。未だ平包は岸に有り。取りて頸にかけてぞ下りける。日もやう〳〵傾きければ、とある家に立ち寄り宿を借りけり。さるにても今日は不思議の事に逢ひつるものかな、とまどろむひまもなし。斯かるところに主の聲と覺しくて、「此處を開けよ」と敲く。内より妻女出であひ、「今日は何とて遲く歸られける」と云ふ。「其の事なり。不思議の坊主に行き逢ひ、高き所より突き落され、はかなき命を生きたれども、岩角にて身を打當て、足も立たざるを、兎角して歸りぬ」と云ふ。僧は物ごしに是れを聞き、急ぎ垣を破り、拔道の用意をぞしたりける。女云ふやう、「是れに僧の一人宿を借りて座敷に侍る」と云ふを聞きて、其の儘走り逃げにけり。彼の主、座敷へ出でて見れば無し。「其は坊主は逃げたるものなり」とて、這ひ出でて、「今坊主のくせもの有り。出であひて留めよ」と云ひければ、在所の者殘らず出で會うたり。此の度は道を變へて、上りざまに逃ぐる。跡より聲々に呼ばはりける程

に、先には我ありと下出でおはせ、後より頻りに追掛くる、脇なる山にかけ込み、彼方此方と惑ひしが、如何にも茂りたる大木あり。これに登り少し息をつきたり。既に追手は、「道筋にはなし、山の内を探せ」と云ひて、手に〳〵松明を點し、岩峡間、木の枝葉残らず探しけり。茲に弓持ちたる男、「坊主こそ此の木の上にゐ侍るなれ。只今射落し侍らん。」とて、大雁股を持つて射たり。此の僧の心のうち云はんかたなし。かかりけるところに僧には中らず、何とは知らず大いなる獣一つ、矢に當りて落ちぬ。皆寄りて見れば大いなる荒熊なり。集まりたる所へ走り掛りたりければ、「一人にてはかなし、熊にてありけるぞ。」とのゝしりける。多くの人を喰ひ威し驅けまはりければ、一人もなく逃げて家にぞ歸りけり。其の内に木より下りて、とかくして道に出で、上方を指してぞ上りける。「今は後より人も追はず。」と、虎の口の難を遁れける不思議さよと思ひ、其の日の暮れければ、とある家に立寄り宿を借りける。又これも主は留守にて妻女ばかりなり。過ぎし夜の者にてはあらじと思ひけれども、いとゞねざめがちにて、客亭と覺しき所にぞ臥したりける。戌の刻に主歸りぬ。妻女出であひもてなして臥しぬ。僧は尚々心許さず、寐ねもやらでぞ居侍る。子の刻と思ふ時分に、又、「此處を開けよ。」と男の聲にて云ふ。女出であひ戸をあくる。内なる男大だなる刀を拔き、外より這入りたる男を討つてけり。僧こはいかにと思ひ、もつけなる所へ來つるものかな、如何せんと思ふところに、女云ふやう、「妻に坊

だと宣しけるが、「阿闍梨の給ふ」と云ひければ、「それこそあれ」とて、「いかに／＼御坊」と呼ぶこ
聲の入りたる縁にて、前までで寄りけるを、重ねて呼ばはる。はふ／＼起きたれば、男のいはく、「これなる死骸を負ひて給はれ、程近き所にて候まゝ、伴ひ申し候はん」とて、死骸を脊に入れしたゝり、坊主にてありしかひける「一發をば斬罪の有無にて、納としてか持ち參らせん」と云ひければ、殊の外怒りたる體にて、無理に後に負はせければ、詮方に怖ろしさに、是非なくて何方ともなく二三町程行きたれば、山の中に下ろさせて、男に鍬を持つて行きけるが、俄に頭一穴を掘らせける。「何かる目にあひけるも歳末の咄とあさましく、又否と云はば如何なる目にあはんと、云ふに任せて掘りけるが、疲れたる事なれば、掘りかねたる體を見て、男、「此方へ進さ」とて、はだぬぎになり、刀を捨てて汗水になりて掘りたりける。前の所でければ、前後を窺みて、或は掘りて立って殺し候はんなれ、刀を拔きて後より首をかけて打落し、又元の宿に歸り、惡人の種を斷たれと思ひ、女をも切りおほせ、其の所の騷亂をさしで又道にかゝり、ものにもうでこそ上りけること天の道にて、後より追ふ事もなくて、漸く美濃國にこそつきにける。ある宿に在りし前り一宿借らん」と云へば、是れも又女の宿住みなり。前を難に過ひつ／＼る畔の藪手前へいりとて、此邊を除外も聞で行きけるが、遂に行きくれ、泊るべき宿求めけれども、人なれに入れも見えず、日は暮れぬ、茫然として立ちたりけるが、向ひの山際に、火の影に見

えけるほどに、急ぎ行きて見れば人居るにてもなし。軒の傾きて破れたる古宮にてぞありける。近き所に寺のあるは人里あればこそ、燈明をば參らすべきなれと思へども、遙かに道は歩み心疲れ、宿求むべきやうもなかりければ、彼の拜殿の破れたるにぞ居たりける。來し方行末の事など案じつゞけて、夜更くるまで寐も入らでゐ侍るところに、何處ともなく歩み寄る者あり。月影によく見れば、一人の男髮をさばき、竹の杖に縋る。眼は朱をさしたる如く、色青く如何にも瘦せ衰へたる形眞に杖に縋らずば歩むこと難しと見えけるが、拜殿にぞ來れりける。僧はよも人間にてはあらじと、口には光明眞言を唱へてゐ侍る。男のいはく、いかにもかすかなる聲の中に、我は非業の死に赴きて瞋恚の焰熾んなりしが、御僧の順縁を以て道心の敵を討ちて給はりし故に、一業の罪を免れぬ。願はくはとてもの事に一日經書きて、亡き跡とひて賜はり候へと、云ふと思へば夢さめぬ。扨は過ぎにし人ども、ほんつまひつまの闘諍の有樣、あさましかりつる次第なり。彼の僧は諸國行脚は思ひ止まり、都西山のほとりに、いかにもかすかなる庵室を構へ、道心堅固にして、親疎平等利益と誓ひ、一期終りけるとぞ。寔に仰ぎ尊むべきは佛の御誓ひなり。

六　萬上々の有る事

土佐國に或獵師、ゑの庄右衛門と云ふありけり。山中に隠れなきゐたあり、これに一入さまぐの物寄ると云ふ。さ候へば彼の者、鐵砲を撃つこと上手にて、彼のゐたへ寄り狙撃たんと相待つ所に、先づ一番に蚯來りてゐたに入る、其の次に蟇蛙來りて彼の蚯を食して蟇蛙ゐたを打つ。其の次に蛇來りて蛙を呑む。其の次に蛞蝓來りて、蛇の廻りを二三遍經れば、蛇は忽ちに竦みて死しぬ。庄右衛門これを見て、扨々不思議なる事かな、其の上々があるにて、それぐに平らぐると思ふ内に、大きなる猪來りて、又蛞蝓を食してゐたを打つ。庄右衛門きつと見て、さはやと思ひ、鐵砲に火をかけ、既に撃たんとしけるが、待て暫時我が心、いやく斯様に上々があるにて、下々を平らぐるなり。あの猪を打ちたらば、又何者かありて我が命をとらんと思ひすまして案じけるに、我が名はゑの庄右衛門と云へば、文字こそ變れ、身の上と覺えたり。とかくして歸らんには如かじと、出で立つ所に、虚空より「扨も庄右衛門分別者かな。」と、呵々と笑ふ聲いづくともなく耳に響く、怖ろしき事に思ひて我が家に歸りぬ。されば、ものゝ報いは是れにしも限らぬ事ながら、知らぬ人こそおろかなれ。

曾呂利物語　大尾

百物語評判

而慍齋

百物語評判序

過ぎにし頃六條邊に、雲盧齋先生とて和漢の達者、儒佛兼學の老人あり。所謂天地山川動植古往今來の事に會通せずと云ふことなし。或夕暮の雨さへ降り、物しめやかなる折ふし、先生を訪らひけるに、往や四邊の好人二三人集まりて、世の不思議に恐ろしき事の百物語を始めければ、先生其の一つ一つに唐の倭の例を引き評判をし給ふ。其の道理細かにして、證據に通るゝ事多かりし。未だ百にも滿たざれども、夜も更ければ又の夜と云ひて止みぬ。僕も其の席に列なりて、聞き覺えし事を書きつけつ。頃日古紙堆の中より取り出して、かいやり捨つべかりしを、先生の講論なれば、人の求めに應じて梓に彫め侍る。若し理の背けるあらば、やつがれが記し誤れるにて、先生の罪にはあらず、見る人許し給へと云ふ。貞享丙寅の年二月中旬序す

目　錄

第二　角の事 附 晴明の察智 并 斎藤助宗手柄の事
第三　有馬山地獄谷庫頭谷の事
第四　箱根の地獄 并 富士の山三尊来迎の事
第五　産婦 并 幽霊の事
第六　垢嘗の事
第七　雪隠の化物 附 厠の神 赤舌の事

巻之三

第一　参州賀茂郡長興寺門前の松童子に化けし事
第二　道陸神の発明の事
第三　天狗の沙汰 附 浅間が嶽求聞持の事
第四　銭神の事 附 省陌の事
第五　貧乏神 并 韓退之送窮の文 附 范文正公の事
第六　山姥の事 附 一休の物語 并 狂歌の事
第七　比叡山中堂油盗人と云ふ化物 附 青鷺の事

百物語評判 巻之一

第一 越後新潟に鎌鼬有りし事

一人の云く、「某召使ひ候者の中に越後者有りしが、高股に餘程なる疵跡見え候ゆゑ、如何なる事にか疵負ひたると、覺束なく思ひて樣子を尋ねけるに、彼の者申すやう、生國または秋田信濃などにも多く御座候鎌鼬と申す物に切られ候疵なりと申す。怪しく思ひて委しく尋ねしに、またとはゞ所の者旅の者に限らず、道近を經過せし折から俄に高股こぶらなどに、鎌もて切れる樣にしたゝかなる疵出で來、口開けども血流れず、其の儘消え入り臥しける時、其の事に馴れたる藥師が來りて藥つけぬれば、程なく癒え侍る、命に障りなし」某も新潟より高田へ參り候時、此の鎌鼬にあひ申したる疵にて候。さして珍らかなるものにも候はず、されども都方の人又は名字ある侍には、此の災なく候ことと語りしが、誠に侍るやらんことと問ひければ、先生評して云く、凡そ天地の勢ひ、南は陽にて温かなれば物を長じ、北は陰にて寒ければ物をそこなふ、是れ常の理なり。されば其の越後信濃は北國の果てなれば、萬物の氣寒まり、風烈しく氣冷まじきをかりて、山谷の精魅などのなす業なるべし、

されども都方の人または名字ある侍に、此の疵ありたる者なきは、邪氣の正氣に勝たざる理なるべし。」と評せられき。

第二　絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事

傍の人の云く、「轆轤首と申すものは語のみかと思へば、此の頃絶岸和尚と云ふ僧、西國行脚の折から、肥後へ行きてしころ村といふ所に一宿せられしに、軒あばらなる假枕、風凄まじく吹き落ちて、夢もまどかならざりければ、夜更まで念佛稱名して居たまひしに、丑三ばかりに其の屋の女房の首骸よりぬけて、窗の破れより飛び出でぬ。怪しと思ひて燈に見れば、其の首の通ひし跡に白き筋の様なる物見えたり。是れこそ轆轤首よと恐ろしく、誠に過去の業因まで推しはかるゝに、夜明方になりて其の筋動くやうにて、又元の處より彼の首歸り、につこと笑ふやうにて己が臥所に入りぬ。夜明けて其の女房を見れば、首の廻りに筋あるやうにて別の變りなし。和尚も亭主に語らばやと思ひけれど、いらざる事よと默して歸りぬ。誠に出家の身ながら、恐ろしかりし。」と語られ侍りしが、此の事如何に。」と問ひければ、先生評して云く、「此の首の事唐にも侍り。博物志には、南方に戸頭蠻とて、毎夜人の首骸よりぬけて、耳をもて翼とすと見えたり、また搜神記には、女の首飛びし事を載せ

たり、これども轆轤の名は見えざりしに、此の頃元の陶九成が輟耕録を讀みしに、陳孚と云ふ者の南驩記行の詩に、頭飛如轆轤、鼻吸似瓴甋と書き侍る。されば此の詩の心は、南蠻の人には轆轤首ありて、頭顱を下し上ぐるが如し、又鼻にて物を吸ふ事、瓶に水を移すが如くなり。これ等の類をもつて見る時は、昔より多く南蠻の中に侍るなるべし。天地の限りなき造化の變に至りては、水母の目なく、蟾蜍の遒に恐れ、其の怪言したる類、一應の見識にて計り難し。されば此國にもあるまじきにもあらず、いかさまにも此方には稀にも聞き及ばず、すべて怪しき事は、遠國にある物ならんと思ひ給ふべし。」

第三　鬼と云ふに樣々の説ある事

一人の云へらく、「世に鬼と申すものは有る事に候やらん、又なく候やらん。なき物ならば、唐土より鬼といふ字も候まじ、またある物に候はば目に見え侍らん、何ものを鬼と申し候や、委しく承りたく侍る」といへば、先生いへらく、「是れはよき不審にて侍る、逐一に物語り申さん。」先づ世界の目に見え耳にふるゝ物は、天地も山川も草木も水火も土石も、凡そ生きとし生ける物、何れも陰陽の二氣にもるゝ者なし、是れを兩儀といふ。その陽の所作を神と云ひ、陰のなす所を鬼といふ。されば鬼

物の始まると長ずるは神にて、滅すると終るとは鬼なり。色々の委しき事侍れど、百箇の紙にも盡し難し。扨人間にいたりては、諸のよき事正しき事は、みな陽に屬する故に、聖賢君子の正しく直なる靈を神といふ。我が朝に崇むる神道も此の外ならず。又諸の惡しき事、邪なる法、皆陰に屬する故に、愚癡佞人のひがみ曲れる魂を鬼といふ。餓鬼疫鬼の類皆是れに外ならずと心得給ふべし。此の靈のより處なく祭らるべき方もなくて、暫く天地に流行し、様々の災をなすなり。又鬼魅の類といふも、山谷の木深き幽陰の所の、氣の積りより起るものなり、是れ又陰の類なり。」又問うて云く「然らば鬼と申すは、或は陰のなすわざ、又は靈の名にて、形のなき物に候や、地獄の牛頭馬頭あはうらせつ、又は我が朝の昔話の鬼大江山の鬼などは、皆僞りなるや。」答へて云ふ「佛説の鬼と申すも自業自得果と説き侍れば、迷へる罪障にひかれて見る所の名にて、聖賢君子の靈の成れる物にあらず。されば六道流轉は心より發るによりて、心の鬼と申しならはせりとかや。猶も儒家の説には、たれ地獄と云ふは、天竺の法に科人あれば、地を掘りて居處として是れを置くを名付けて地獄といふ。其の刑罰の法に舌をぬき臼にて杵き、さまぐ\の怖ろしき掟あり、さてまた夜叉羅刹鬼など云ふは、天竺の國の名にして、其の地中國を去る事遠ければ、人倫を離れて恐ろしき色々の形ありと云へり。かく生まれたる人に施す事なるを、流轉の久しく、過つて地獄極樂の説及び鬼と云ふ名を立て

たりとも云へり。また立烏帽子、酒典童子などには、強ち人を服するにもあらざるべけれど、己が勇力を頼み王法佛法に背き、悪を長ぜるをかく云ひならはせるにや。爲朝の渡り俊寛が流されし鬼が島など云へるは、只我が國の風俗にあらずして、物のあはれを知らざる夷を云ふたるべし。また芥河の邊にて、二條の后を一口に喰ひたる鬼は、堀河の大臣國經大納言とかや。鬼籠れりと云ふは誠なりと讀みしに、重行が妹を云へり。共に恐ろしき名なるべし。淺稻三郎が舅の鬼は、狂言綺語の戲れ事、鬼薊鬼野老鬼百合などに、共に逞しき稱たるべし。」

第四　西の岡の釣瓶卸并陰火陽火の事

一人の云ふ、「各の物語は何れも聞き及び給ひし事のみにて、是れぞ見たいと仰せらるゝ事も候はず。某去年五月の頃、西の岡へ参りて雨降り出しければ、一宿せよと云ひけれども、叶はぬ用事あれば戻り侍りしに、日も漸く暮れて人の通りもなし。冷まじく思ふ處に、さいの邊にて藪原を通りしかば、松か杉か何かは知らず、火の丸かせ鞠の如き物、下りつ上りつ見えければ、これは如何にと見る處に、さして外へも飛び行かず候故、逸足を出して逃げ通りしが、既に多年信心致しける觀音の守をかけ居り申し候故か、恙なくまかり歸り候、恐ろしく存ぜらるゝ。」と云へば、先生莞爾



と笑うて、「それは俗に云へる釣瓶卸と云ふひかり者なり、されども天地の間一色も陰陽五行の理にこもらぬ事なし、されば其の光る者は大木の精にて、即ち木生火の理なり。扨晝も顯はれず脇へも見えざる事は、火は闇きを得て色を増し明らかなるにあひて光を失ふ常の事なり。就中木の下の暗き所に現はれて見ゆるなるべし。されども若木に生ぜざるは何ぞや。それ陰陽の老變五行の相生は、四季の移り變るが如し。春暮れて夏來り、秋盈ちて冬成るが如し。其の始めの氣を盡さぬ内は、次の氣を生ぜず、されば寸木尺櫨も木生火の道理籠りながら、猶未だ木の氣を滿たねば、火の氣を生ずるに及ばざるなるべし、且又天地の間に火の數三つあり、星精の飛火、龍の火、雷の火を天火といふ。木を伐り石を磨りて出づるを地火と云ふ。人間にとりて心の火、佛門の火を人火と云ふ。其の火の中にて陰火陽火の別ちあり、陽火は物を燒けども、陰火は物を燒くことなし。そも又雷火などの適人家を燒く事もあるも、此の火陰火なる故に、水もて消し濡れたるをもて覆ふときは却つて燃え候。火を投げ灰を散らし防げば、其のまゝ消えはべる。是れ道理の妥かなる處なるべし。此の釣瓶卸とかやも陰火なれ、其れ故雨の降りたるには殊に見ゆるなるべし。又云く、一説釣瓶卸は陰火ならば、家を燒くに及ばざることさもありぬべし。然らば深山幽谷などにて、其の木の枝梢へ合ひて火を生じて、その木の燒くることは如何なることにや。又云く、一動くは陽の用、静まるは陰の用なれば、其の木の枝梢へ合ひはべる

けり、陽のわざをなしけて、陽火と變じ侍るなり」と云云。

第五　こだま并彭侯と云ふ獸附狄仁傑の事

一人の云く、「こだまと申す者は、山谷或は堂塔などにて、人の聲に應じて響く物を申すなり、されば文字には「空谷響」と書いてこだまと讀めり、又樹神と書き候は、いか樣にも化物の類、又は草木の精にも候やらん、然らば芭蕉の女に化けたるなどこそ、こだまとも申すべからんや」と云へば、先生評して云く、「いかにも仰せらるゝ如く、物の響く音をこだまと申せり、和歌にも山彦の答ふるまでなど讀みける。是れは險に何物も無き空なる所にて聲をあぐれば、其の向うにある物に當りて響く音なり。是れ努々生類にあらず、空谷響の心なるべし。併しながら草木に精なきと云ふにはあらず、又草木の精をもこだまと申すべし。唐土にても彭侯と云ふ獸は千歲を經し木の中にありて、狀狗の如しと云へり。昔吳の敬叔と云ひし人、大きなる樟樹を伐りしに、木の中より血流れ出で、怪しみ見れば、中に獸有りしが、彭侯ならんとて煮て食らひしに、味ひ狗の如しといふ事、搜神記に見えたり。是れたゞちに樹神なるべし。又唐の武三思と云ふ人の許に、何處ともなく容顏麗はしき女來りて、宮仕せんと云ふ。武三思其の形に愛で召使ひしに、よく歌唄ひ舞まひて琴棊書畫に暗からず、三思寵愛斜

ならずして、賓客の度に馳走に出し給へり。其の頃狄仁傑と云ふは、道德兼備の人なりしが、聊かの事有りて武三思を訪らひ給ひしに、三思奔走の爲に彼の女を呼び出せしが、此の女何處ともなく失せぬ。怪しみて求めければ、壁の間に平蜘蛛の如くに成りて隱れゐつゝ云ふやう、「我人間にあらず、庭前の牡丹の精なり、甞て君に牡丹を愛し給ふ故、人間に變じ參り仕うまつりしが、狄仁傑は其の德義正しき人なれば、出づる事叶はずしてかくの如し」と云うて消え失せしと、開天遺事に見えたり。又芭蕉の女に化けて、長篇の詩を作りし事、剪異録に見えたり。唐もかやうの類に事有りたり。

第六　見こし入道并に泉屋介太郎の事

一人の云く、「先つ頃大宮四條坊門の邊に、泉屋介太郎とかや云ふ者、夜更けて外より歸りけるに、門を遽しく叩きければ、内より驚きて開けぬ。扨介太郎内へ入ると齊しく人心なし。様々の氣つけなど呑ませければ、漸うに生き返りて云ふやう、『我歸るさに四條堀川の邊まで來たりしに、そこ〳〵の辻にて身の丈餘りなる坊主、後より覆ひ來りし程に、すはやと思ひて逃げければ愈急に追ひかけしが、此の門口にて見失ひぬ、それ故斯くの如し』と云ひければ、聞く人皆驚いて、扨々危き事かな、それこそ見越入道にて候はん」と云ひしゝ、皆驚きしけり。此の事聞近き事にて、その入道に逢ひし人、

申すもことごとくに二と云へば一座の人、何れも、怖ろしき事かなと云へるに、先生評して云く、「此の石橋は昔より一名を首坊主とも云ひ習はせり。野原墓原などにもあらず、只在家の門辻軒の下の石橋などの邊より出づると云へり。是れ愚かなる人に臆病風の吹き添ひて、自然歩行きの道に、氣の前より生ずる處の影法師なるべし。其の故は此の首前よりも來らず、脇よりも通らず、後より見こすと云へば、門辻行の旅人、或は夜更の火の光、月星の影などなるに、わが影法師首高く映ろふと、扨こそと思ひ氣を失ふと見えたり。坊主と見ゆるは元より影法師なれば其の形定かならぬなるべし。介太郎も此の類にて侍らん、唐にても日中に己が影を怖れて逃げたる者ありと、漆園老人も書きしとかや」

第七　犬神四國にある事

先生語りて云く、「四國に犬神と云ふものあり、此の犬神を家に受領したる人を犬神持と云ひて、今の世にもまゝある事なり。例へば此の犬神持、友達などの處へ行きかゝりける折から、その友の家に美食珍酒など侍るを見る事ありて、其の物に露ばかりもとかく心移り侍る時は、其の友必ず寒熱の煩ひをなして、そゞろ事には、彼の思ひし飲食のことなど云ひ罵れり。然る處に病者の家人、此の犬神持ちたる人に斯くと云ひ知らするか、又は隔心なる中にて云ひ出す事もなり難ければ、現也伏など呼

ひて費させる時、其の病癒ゆるとかや云へり。かかるうるさき事なれば、其の犬神持の家とは豫て遠ざかり、婚姻等には曾て結ぶ事なし。其れ故身もさがなき事にして、飽き果て悲しかれども、先祖より傳はり來れる邪神なれば、詮方なく身を恨み悲しめりとかや。其の筋のを語り傳ふるを聞けば、一つ犬を地に埋み、其の頭を少し出して、器に食物を盛り、其の犬の口先の上に置かんとする處に置いて、餓ゑ死しにして、其の靈を祭り納めて爲す事なりと云へり。唐土の蠱毒の類なり。併し今の世には、ただ犬神持ちたる人も、如何にしてか此の神のことかたへも行かん事を願へば、況して今更爲す者有るべからず、是れ名字をも知らず、無始世界の昔の事なるべし、扨此の犬神王城の人に憑く事あらずと云へり。さは云へど都の方にも犬神持ちたる人多し、萬に附けて待遇すべき人の、我をもてなさぬを嫉みて、心にかけ一向に云ひ出す處、是れ則ち犬神なり。盛んなる神を祭らねも人にあらず、盛らずとてとやかく思ふは畜類なり、又もてなされて其の情を知らぬは木石なり。すべて飲食の上に心を盡す人は、皆犬神の徒たるべし。」

第八　神鳴　附　雷斧雷墨の事

一人のいはく、「世に怖ろしき物の中にて、雷程なるはなし、何方へ落つべきとも定めなく、生類

にあらざるかと思へば形あるに似たり。いかさまにも委しき道理の侍らん、承らばや。」と云ふ。先生の云く、「雷の本說は周易に見えたり、唐土にも樣々說きたり。雷州と云ふ所にては、二月の始めつかた、山に籠りゐし神鳴共來りて火をこふ由を記せり。國史補には其の狀猗の如しとも書けり。斯やうの說多しと雖も正說にあらず、詳かに性理大全に宋朝の儒者の論を載せたり。荒々語りはべらん。夫れ雷は、陰陽相迫る聲なり、蟄せる蟲も是れより出で、根に歸る草木も是れより萌え出づるなれば、天地の間になくても叶ふべからず。さはいへど其の激しきは天の怒りなり。此れ故に孔子も迅雷には必ず形を變じ給へり、是れ努々恐れさせ給ふにあらず、天の怒りを愼み給へるなり。遙かに轟く處を云はば、天地の陽氣夏は天にあり、時に陰雲雨を催さんとて、江湖の水氣を乘せて、濕風に誘はれて、彼の空にある陽氣を包めり。元より陰陽は相剋するなれば、陽は動いて陰を出さんとす。かくてぞ天地に響き山谷をも動かせり。其の落つると云ふは、陰の氣、陽に勝つ時は其の聲靜かなり。陰陽等しき時は落つるに及ばず、陽の氣、陰に勝つ時は、其のあまる處或は中空にさがり、或は地に下りて、必ず積惡の家に落ちて惡人を災せり。されども雷に心ありてかく有るにはあらざるべけれど、其の積れる惡と怒れる氣の感ずる所なりけらし。唐土にても昔樊光と云ひし者、所の奉行になりて訟へを聞きしに、非公事の方より賄ひをつかひて賴みしかば、樣々理かたの者を惱

ましめ、またほ〻土木の責にあはしめしかば、其の者苦しみに堪へずして、我等なき事を申しかけたりと陳ぜし罪を負ふによりて、非公事の役勝ちたり。其の後天俄に掻き曇り、雷電頻りにして、終に樊籠ありし上に落ち懸りて、其の獄を引き裂き給ひしとかや。此の類擧げて數ふべからず。又さもなき人の強く怖るゝあり、是れは其の生まれつき精神元氣の薄きなるべし。人參一味を煎湯にして雷を怖るゝ者に與ふれば、曾て怖るゝ事なしと醫書にも見えたり。昔、大舜の徳を書きしにも、烈風雷雨にも迷はずとあれば、一つに書き出だしかば、其の怖れざるも聖賢の徳になぞらふべし。猶、佛家にも重き災難の時にとて、法衣を著し香花を供へ、經を讀み陀羅尼を誦し、佛力をたのみ奉れり。されば我が朝の昔延喜の御代延長年中に、清涼殿に雷震ひて、藤原清貫、右中辨希世、その外、殿上人一人二人身まかりにけり、世の人申しならはし侍るは、菅丞相の御靈のわざにこそと。斯かる怖ろしき例に依りけるにや、雷の時三度高鳴りし侍れば、近衛大將次將まで弓箭を帶して、御殿の孫廂に候し御門を守護し、將監より以下の官人、いづれも蓑笠にて、南殿の前庭に侍るを、神鳴陣と申すとかや。されば其の襲はれ死する人は、皮肉は損ぜずしてその骨のとろくる事は、雷はもと陰火なればゝ柔かき物を破ること能はず、固きを碎く道理なり。其の上落ちたる跡を見るに、宛ら鬼形の爪形に似たる事あるに付けて、いかさまにも獸副ひて落つる様に、京童部の云ひならはすれど、さにはあ

らず。又一說に陰陽の爲す處と雖も、又神ありて其の所を司り給へり。鬼神幽微の道究め難しなど唐土の書に侍れども、程子朱子の說には、陰陽の外を語るに及ばず。又雷の槌・雷の斧・雷の墨など云ふ物、其の落ちたる跡にまことに有る物の由、其の重み長さ色あひ能毒まで書物に侍るめれど、量り難し。彗星墜ちて石となる類にて、雷ごとにはあるべからず。」と評せられしかば、各申しけるは「此の說を承りて、少し怖るゝ心止み候ひぬ。」と申しき。

百物語評判卷之一　終

百物語評判卷之二

第一　狐の沙汰附百丈禪師の事

一人の云く、「狐と申す獸こそ、我が朝にてはさま／＼の不思議多し、高麗唐土の書物にも其の理や侍らん、しのだ妻の草紙に云へるも、定かなる事にやと問ひしかば、先生云へらく、「狐は妖獸の長にて三德を備へたり、されども、物を疑ふ性深き故、己が類と棄る事なし、氷を渉るにも、薄き氷の張りたるを尾を以て幾度も叩きて後步むと云へり。唐土にては、百歲の狐北斗を禮して美女となり、千歲にして其の尾わかれて淫婦となれりとかや。宋の王彥若と云ふ者、其の生まれつきおけて何とも心得難きを以て、九尾狐と名付けし事古書に見えたり。斯くある上は、しのだ妻も然る事にや侍らん、最も長生なりし、至つて智ある獸なり。昔し狐の龍虎を恐れて、「一朝何にせん」と云ひしに、其の中の老狐分別し出でて、虎に語りて云く、「汝我をぶくする事なかれ、我は諸の獸の長なれば、何れも我を尊ふなり、若し疑ひ給はば、汝我が跡につきて見よ」と云ひしかば、虎げにもと思ひ狐の跡より行きしに、諸の獸恐れて伏したり。それより虎だに狐を喰はずと云ふ、是れ狐に恐るゝにあらず、

その跡より來る虎を恐るゝなり。かくして虎を欺けるにこそ、狐は虎の威をかると云ふ。かく智ある獸なれば、我が朝にても幾春秋を經る狐は、稻荷の鳥居を打ちこして、神獸の例をなせりとかや。是れ世に所謂稻荷狐なり、其の外國々所々の宮居社塔につき隨ひて、多くは神の遣はしめなりと云へり。ある人の云く、『狐よく化くるにあらず、見る人の思ひなせる所によりて、女とも見え老僧ともなり、あらぬ物にも見ゆる。』と云へり。是れ淺き料簡にて、當れりと云ふべからず。誠に狐に變化する術あり。若し又思ひ做せる所のみならば、其の見る人の思ひなしに、とりどり變り有るべし。百千人の目に美女と見ゆる狐は、などや百千人ともに同じく美女と思ひなしぬべきぞ。その上、昔百丈禪師の說法せられし時、日毎に一人の僧來りて聞く。或時聽衆の跡に殘りて、禪師に向つて云ふやう、我人間にあらず、此の山に住み候老狐なり。其の仔細は、某過去生の時、此の山に住して法を說きしに、人來りて問ひて云く、智識は因果に落つるやと、我答へて曰く、博學多才の智識は因果に落ちずと答へたり。其の答への誤りしに依つて、五百生が間野狐身に墮し、かくて今に此の山に住み暮し候、其の迷ひの何とぞ晴れ申すべきやうに示し給はれ。』と云ひければ、禪師聞きて、『易き事なり、其方我に向つて問ふべし。』とあれば、僧問ひて云く、『智識は因果に落つるや。』と。禪師答へて宣はく、『智識たりとも何ぞ因果に落ちざらん、たゞ不レ昧二因果一。』と答へ給ひしかば、僧言下に悟りて、『我辱くも禪師

の一言によつて畜生道の苦しみを免れたり。』と云へりとかや。是れ禪學の深き話則にして、然も其の百丈禪師の狐を畜と見たまひしは、など思ひなしの迷ひ侍るべき、是れ其の變化の術有る事明らけし。哲人は狐に化されずと云はばよし、哲人の前には狐も化けずと云はばよからず、是れ眞人は火に入りても燒けずと云はばよし、眞人の前には火も燃えずと云はば非なるが如し。燃ゆるは火の性、燒けぬは眞人の徳、化くるは狐の術、化されぬは哲人の徳なり。かかる智ある者なれど、閑にかかりて身を失ふは何事ぞや、餌に絆さるる慾あればなり。此の故に古今に通る傳にも傳例に往へ、この行樣を貪りて、身を滅ぼし名をくだせし類多し、況んや狐に於てをや。又世に狐憑きと云ふ物あり、其のつく仔細は知りがたけれども、憑かるる所以は知りぬべし。内虛するときは、外邪その隙を窺ふ道理なれば、人の喜怒哀樂の七情一つにても過ちて、心の主人外に離るるか、又は其の心の過分にうつけたる者には、其の隙を窺ひて狐の襲ふなるべし。されば本心の正しき人は、千歳の狐も誑すことなし。さて又狐火と云ふは、同じく身をもつて夜を照らすものなれども、螢の火は物なり、狐の火は神なり。是れ故に螢はそのままに火を隱すこと能はず、狐は其の火の隱し消し、己が心に任すと見えたり。世俗には、牛馬の骨をくはへて、口にて火をともせりと雖も、博士の書には尾を打ちて火をいだし、やんごとなき珠を持ちたる故と記しはべる。されば陰陽師は福の神と云ひなし、稻かきは尾先に如

意寶珠の有けるも、これ等の故實にてや侍らん」と語られき。

第十　狸の事　附明の鄒智并齋藤助康手柄の事

先生のいへらく、「狸も狐の如く、さのみ奇妙なる事はなけれども、化くる事はなきにしもあらず、人を害するわざ卑くて深し、其の害きだに容死客族人をして人を欺けば、其の驕縦たる、いかでか人を迷はさざらん。世に所謂化物と云ふは、おほやう此の者のしわざならし。たゞ此方の一心さへ正しければ、魅にあふべからず。或は武勇の士は、其の武勇故心動かず、博學の學者は、其の博學故内明らかなり。戒律の出家は、其の戒律によつて邪魔来らず、其の道同じからねども、皆内に守りあれば、妖怪の者も害を爲すこと能はざるなるべし。其の例數へも盡すべからず。こと新しく云ふもくだくだしけれど、一つ二つ語り侍らん。近頃大明の代に鄒智とて博識の人有りしが、夜更くるまで書物を讀みゐられしに、其の窓先より大きなる手を出して、鄒智が顔を撫でんとす。鄒智怪しく思ひながら、定めて狐狸のわざなるべしと推して、朱筆のありけるにて、其の手の中に花と云ふ字を書き付けて、又元の如くに書物を讀む。始めは其のむきなりしか、夜の明方に及びて、彼の大きなる手頻りに泣き叫びて、『書きつけし花の字を落し給へ』と云ふ。鄒智猶も顧みず。彼の者云ふ樣、『我は此の邊に住み申

す古狸にて候が、過つて學者を犯せしに、君先に何心なく文字を書きつけ給ふゆゑ、われ化くる術は候へども、其のたゞしき心にて書き給ふ文字を落すべき術なし、此の文字消え申さず候ふ内は、歸ること叶はず、されば夜の明け候はば、人の寄り合ひて我を殺さんことの悲しく候へば、御慈悲に落して給はれ。』と云ひしかば、鄒智聞きて、『其の儀ならば。』と云ひて、硯の水にて洗ひしかば、よろこびたる聲にて、消え失せしと云ふこと、皇明通紀にのせたり。又昔備前國左衛門助康丹波國へ下りしに、日暮れて人宿遠かりければ、古堂の有りけるに入りて明さんとす。其の邊の者申すやう、『此の堂には昔より人捕る物の候へば、御無用。』と云ひけるを、助康、『何程の事かあらん。』とて泊りけり。折ふし其の夜雪降り風吹きて、聞きしに違はず物凄かりければ、正面の柱に寄り添ひてゐたりしに、庭の方より物の勢ひたるやうに見えければ、障子の破れより覗きけるに、何かは知らず堂の軒に等しき者來りて、彼の破れより大いなる手を入れて助康を摑まんとす。助康もとより覺悟なれば、其の手をむずと取る。取られて引き返さんとしけれども、助康大力なれば放たず、離しならざりける程に、開ひ障子引き放ちたり。其の障子を中に隔てて上に乘りしかば、暫し騒がしう聞えけるに、障子の下に成りては無下に小さくし、手も小さく成りければ、いとゞ勝に乘りて押へしに、きゝと啼きけり。其の時下人を呼びて火を持たせて見ければ、古狸にてありしを打ち殺しけり。其の後は其の堂に人捕ることする

事なしと云へること、著聞集に見えたり。」

第二　有馬山地獄谷座頭谷の事

又問うて云く、「有馬山に地獄谷と云ふ所ありて、其の谷の道筋に一穴候が、五尺四方ばかりの小さき穴なり。所の者申し候は、此の穴へ聊にても生あるものの入り候へば、忽ち死し、また其の土を取りてたわし等につくれば、其のまゝ倒れ候、是れ地獄にて候故、かくの如しと申し侍る。又座頭谷と申すは、昔盲目ありて、道を踏み違ひて此の處に死せし故、其の魂變じて大石となりて、此の谷に殘れりとて、其のたけ一丈ばかりなる石、座頭の如くに見えて今にあり、此の事いかんぞや」先生いへらく、「是れ覺束なき名に侍る、其の地獄谷と云ふは、元湯の湧き出づる山なれば、硫黄の精其の下にさかんなる所へ、水の流れ出づれば、其の水變じて温湯となる事、唐土の地理の書どもに見えたり。されば有馬も硫黄山なれば、其の地獄谷の近所も硫黄有るべし。水筋なき故湯涌かねども、其の硫黄の氣によりて、其の穴へ入りたる蟲のたぐひ死するなるべし。また座頭谷の事は、唐土にても望夫石の故事と相似たり、是れたまたま其の石の人形に似たるをもつて名付けたるへし、疑ひたまふべからず。」

第四　筥根の地獄并富士の山三尊來迎の事

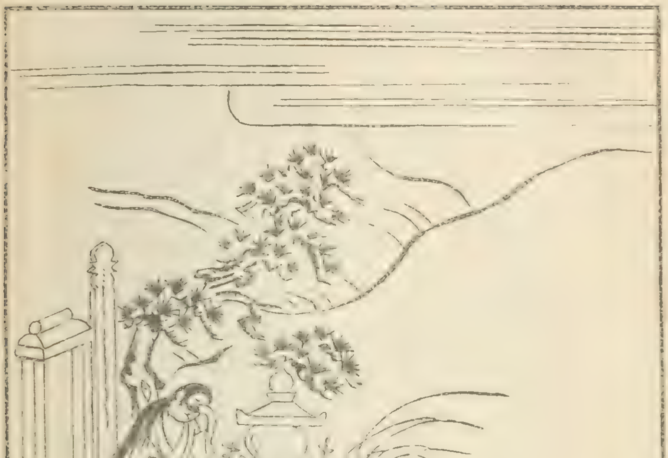
又問うて云く、「箱根山には地獄有る由申しならはし侍りて、人の死したる者などの物語にも、眞しき事ありし。其の上その地に行きたる人の身等に、紫色なる斑など出來候を、訶責にあひし跡なると申すは、結城入道が昔も思ひ出でられて實にもらしく聞え侍り。又富士山へ登りたる人は、朝日に輝きて三尊來迎の姿拜まれ給ふこと、諸人の申し侍るは何の道理ぞや」先生いへらく、「是れまた人の氣の前に見る幻容なるべし。委しく論じはべらば、かく申す上にて、我が儒の道を請ふにあらねど、各御存じの通り、佛菩薩をも敬ひ侍れども、根元佛道の本意は、別に佛身を立つるにあらず、たゞ是れ自性の正覺を本有の佛心と見立て侍ること、佛道第一の眼目にて御座候。されば其の佛道に於てのひとつの侍ると、愚かなる人の迷ひて實有に執着あらんを恐れ侍るのみ。これ地獄の事は、更の事にもいふもあるべく申し侍れども、又彼の申さん、彼の佛家に說き置き給ひし地獄の沙汰は、是非惡人の罪惡をなして、剛上でも上の報罰を免れんとして、恥づる事なき者の爲に、少時設けて教へを立つるのみ、いかでか人死し形つひえて後、さらに苦しみを受くることあらんや。然らば我が朝に云ふ所の箱根山、及び富士の山、立山、書寫等の出來ありといへ、涌き出づるを、申しならはしたることにて侍るべ

し、唐土にも名付けたる所あり、一統志、湖廣總志などに見えたり。又ある處に、我が朝にて人の甦りたる後、或は箱根へゆきし、又はそれ／＼の苦を受けしなど、まざ／＼申す者有るは、是れ日頃に聞て有る事を思ひ浮べたる氣の前の病氣を受けて、すでに半ばも死に入れども、甦る者なれば、其の本心は死なざるによりて、兼ねての事を夢に見る理なれば、此の病氣の中に、すゞろ事どもを日頃に思ひし如くに見るの類ひ申すなり。扨又紫色などのつきしは、熱氣などの盛んにして、滯りて色の變りしなり。ほてりなどにて相果つる小兒を見れば、皆紫色なり、是れたゞ積れる毒の現はるゝにて、更に閻魔の跡にあらず。其の上司馬温公の書儀にも、人の蘇生して後地獄へ往き、閻魔王殿に逢ひしなど云ふも、佛法渡りて後に皆人斯く申すなり。是れ迷ひ故なり、若し實にある事ならば、いかんぞ佛法渡らざる先に、世人も蘇生の者侍れども、一人も斯様の事あらざるやと申し給ひし事、千載不易の論なればこそ、文公小學にものせ給ひけり。或はしたしき親、別れたる妻などの死にて、物ごとかなしき折から、出家等のわたりて、そこ／＼を通りしに、其の死人よりおくれを送り給ひしなどいひて、死人に着せやりたる着物の袖褄などを持ち來る事多し、是れ皆手だて有る事のやうに覺え侍る。何れもさしもの學者達なれば、大方は推察し給ふべし。さて富士山三尊來迎の事は、朝日の光にて雲の色合其の貌に似たるを、日の光のまぶき紛れに、其の如く思ひ給ふなるべし。程子

石神の光をとゞめ給ふことと、思ひ合はせ給ふべし。昔和國の山川には、其の國の神を祭りけれども、中昔何時の時よりならん、名ある大山大川悉く、佛者の爲に領ぜられし事にこそ侍れ。」

第五　うぶめの事　付　幽靈の事

又問うて曰く、「世に語り傳ふるうぶめと申す物こそ心得候はね。其の物語に云へるは、難産の上にて身罷りたりし女、其の執心此の者となれり。其の形腰より下は血に染みて、其の聲をばれうれうと泣くと申し慣はせり。又人死して後他の物に變じて來る道理侍らば、此の事も疑はしく侍る御儀、如何に候やらん。」と云へば、先生のいへらく、「とてもの事に語り侍るべし。先づうぶめと申すは、唐土にも姑獲鳥又は夜行遊女など云ひて、かの中華にては此の鳥を鬼神の類なり、毛を着て飛鳥となり、毛を脱ぎて女人となれり。是れ産婦の死して、後なる所なれば、此の故に二つの乳あり、好みて人の子をとりて己が子となす。此れ小兒の衣類など夜は外に置くべからず、此の鳥來りて血を付けて印としぬれば、其の子必ず驚癇を病むなり、荊州に多く有りといへり。又本草の註には、此の鳥に雌なし、七八月の頃夜出でて人を害すと云へり。本朝にてはいづくに出づると云ふ事も侍らねど、かく申し習はし、又唐土の文にも委しく書きけり。されば、思ふに此の鳥なきにもあらざれど、其の始め産婦の死したる體、此の[illegible]



と生じて、後には其の類を以て生まるゝなるべし。もと生まるゝ所の氣蘊清なれば、其とありても其のわざをなせるにこそ侍れ。或は腐れたる魚鳥より蟲のわき出で、又は馬の尾の水にたれて申す類、腐草に其の類より他の物のわき出づる事は、當時の見聞する此の事なれば申すまでもなく候。されば是れより螢の生ずればさも有るべし。地獄の沙汰と申すこそ來れ、是れ化の名義は、おの〳〵かねて知り給へば、語るに及ばず。」又問うて云く、「然らば凡て人間の魂魄は、此の形死し候へば、とかく消え失せ候ものと傳へられるゝことなれば、或に地獄の諸事に、人の沙汰を聞き承りし事などは、候はざる事に見え、又左傳にも發生と申す者の幽靈來りて、死したる後に怨みを報いし事など書きのせし由承り及び候、是れは僞書にて候ふか、其の説明事なく候。」と云へば、先生いらへて、生死有無の論は、出類の見識有る人ならでは、語りも聞かせがたく侍る。すべて世の中の事に、常と變と御座候。人死して魂の散り失するを云ふは常なり、若干時久しく其の氣殘りて發生が如くなるは變なり、萬分の一なり。變とは常にあらずしてたま〳〵有るをいふ。たとへば人の氣衰へ、形疲れて病死する人は、火の自ら消えて、其の煙にも暖かなる氣の無きが如し。或は怨み死にしぬるか、又は其の類の上にて死する者は、其の氣も形も衰へざるに、俄に死するなれば、未だもゆる火に水をかけて消せる時は、其の煙もなるほどしばしはのこるが如し。されば其の人の剛怯なる次第によりて、其の氣殘

る事も淺深厚薄有るべし。」又問うて云く、「其の氣の殘る事は如何にして其の氣の殘りて形の生ずることは如何ぞや。」云く、「天地の間に生まるゝ物は、みな氣よりの起れり。氣のとゞこほるに依つて形を生ず、例へば煙の雲になるが如し。煙にて見たる時は形なく手にも取られずと雖も、其のつもりて煤になりたる時は手に取らるゝなり。是れ氣は質の始めなる所なり。されば其の氣の滯りて、或は形をなし又は聲を生ずる物を幽靈と云ふなれども、縱此の靈魂も、時節程ふるに及んで、其の滯りたる氣の散ずるに隨つて消え失するなり。又聖人君子等の教化に依りて消え失するは、素より妖は德に勝たざる道理なれば、其の教化に依りて其の氣忽ちに散ずればなるべし。されば中昔平將軍將門と云ひし逆臣、俵藤太に討たれて其の首をあぎとにかけられしかども、三年に餘るまで此の首死なずして眼を開き、永遠に怒れる姿を現はせしに、往來の人、「將門は米かみよりぞ切られける俵藤太がはかりごとにて」と詠みければ、一首の狂歌に鬱憤を散じ、眼を閉ぢ形を失ひて、髑髏となり侍るなど申し傳へけるも此の理にや。畢竟聖賢神佛の靈の今に殘りて、罰利生の正しきは、是れよき幽靈なり。然し世の常の人は、生きています時だによろしき事は稀にして、不祥事のみ多き身なれば、せめては忘れてかへして、其の執を留めざらんには如かざるべきわざにこそ。」

第六　垢舐の事

一人の云く、「垢ねぶりと云ふ物は、古き風呂屋に住む化物の由申せり。尤も荒れたる屋敷などにはあるべく聞え候へども、其の名の心得難く侍る。」といへば、先生いへらく、「此の名尤もなる儀なるべし。凡そ、一切の物其の生ずる所の物を食らふ事、例へば魚の水より生じて水をはみ、虱の汚れより生じて、其の汚れを食らふが如し。されば垢舐も、其の塵垢の氣の積れる所より化生し出づるものなる故に、垢を舐りて身命をつなぐ、必然の理たるべし。」と答へられき。

第七　雪隠の化物附唐の李赤が事

一人の云く、「世に雪隠の化物と云ふ物の有る由をいひ、又かの神なる由をも云へり。其の祟りに遭へる者、癩のごとに煩へる時は、諸の品、其の度の様にて、目をおかして身罷るとかや。此の事は如何なる事にや、覚束なく侍る。」と申ししかば、先生いへらく、「其の神にあへる時は、其のまゝ斃れたる跡なるが、血なかれしよしを申し傳へたれども定かならず。又唐にも厠の神を紫姑神と云へりとかや。昔壽陽の李景と云ふ人、紫姑の何麗卿と云へる女を迎へて思ひものとせしかば、本妻深く嫉みて正月十五

日に河の中にて殺せしに、彼の河靈驚駭りをなせしかば、其の後正月毎に祭りて、河の神と齋ひし事あれども、是等を眞體なりとも云ふべからず。又佛家には烏蒭沙摩明王と云ふを、雪隱の神なりと云へり。猶此の明王にも火焔ありて、惡魔を拂ひ塵垢を清め給ふ功德ましましけるとぞ。伽藍の數に數ふるには、前に此の明王を描きて、つねに香花を供へ置きて、法師たる者厠に行く時は、禮を爲して呪をとなへて、そこにて三衣をぬぎける法なりとかや。されども今の世の人適くあへる化物は、其の不淨の氣の積れる所のなしいたるべし。猶、柳子厚が書ける李赤が傳には、唐の代に李赤と云ふ者あり、李白が詩作に劣らずとて、自ら名をつきたるとかや。然るに李赤其の友達と伴れだちて田舍へ下りしに、先のひと屋にて其の友に云ふやう「我去る方へ聟入を致さんとて、旣に契約仕りしまゝ、此の狀を古郷へ遣り給はれ」と云ふ。其の友云ふやう「其方は古郷に妻子あり、何事を宣ふぞ」といへども、早「今宵其の方へ赴く」と云ひて、何地へやらん行きて見えざりければ、其の友達怪しみて尋ねけるに、厠の中へ入りて、其の壺の中へ首を差入れたり。驚き伴れて歸りて、「汝厠の鬼に犯されたり」と云へば、李赤申す樣、「舅の方へ行きて大方近づきに成りたるに、何しに伴れて戾り給ふぞや」と云ふ。其の友憂へて巫覡を呼んでさまざま祓などさせて、番のもの嚴しく附け置きたるに、夜ふけ方になりて、番の者少し怠りぬる隙に、又李赤見えざりければ、すはやと尋ぬるに、今度は身を

半ば糞壺の中に墜しゐたり。其の友漸うにつれて歸り、湯など浴せければ、李赤云ふやう、親類共と殘らず盃をして居りし所を、情なくも引き放ち給ひし物かなとて、涙ぐみたり。是れ只事にあらずとて、其の友夜の明くるを待たずして、所を變へんとて人數多守らせて、夜中より出でて三十里打越えて、先の宿に泊りたり。いかにも爰にては、よもやと思ひて氣を附けざりしかば、李赤終に厠の中に落ち入りてむなしく成りたりと記せり。是れ愚かなる者の、不幸を幸ひと心得て其の身を亡ぼす例へにて、實に此の事ありとも覺えねども、其の類を以て語りつたふと申されき。

百物語評判卷之二 終

百物語評判卷之三

第一　參州賀茂郡長興寺門前の松童子に化けし事

かたへの人のいはく、「某生國は三河にて御座候が、國元にて不思議なる事侍りしは、賀茂郡に長興寺と申す寺あり、門前に昔より松二本御座候が、龍の形につくりなし置き候故、人みな此の松を二龍松とも申し候。此の松大木にて、いづれの時より植ゑ置きしともさだかならず。ある時其の寺へ童子二人來りて云ふやう、「われらは此の邊の者にて候が、少し樣子の侍れば、硯を貸し給へ」と云ふ。則ち硯に料紙を添へて出しければ、一首の絶句をかきつけたり。

客路三川風露秋　袈裟一角事勝遊
二龍松樹千年寺　古殿苔深僧白頭

此の詩を書き置きてかへりければ、寺僧怪しみて其の行先を見るに、彼の門前の松の木陰に行くと見えて、跡形なくなりければ、皆人「松の精の童子となりたる」と申し侍るはさも候やらん」と問ひければ、先生評して云く、「此のこと既にこだまの事に附いて、其の例を語りき。猶も非情の有情に化

するごとは化生と申しならはして、目前にまゝあることとなり。朽ちたる木の蝶となり、腐れる草の螢に變ずる事、何れも見給ふ通りなり。殊更松は衆木の長にて、年久しきものなる故、君子の德に比へて候。其の童子に成りけんもさもありなんかし。既に童子と成りたる上は、寺の邊に住む者なれば、詩もつくるべからざるにはあらず、古き楓の木の人に變じ來りしを、智通と云ひし出家の卒らげし事、唐土の書にも見えたり。

第十　道陸神の發明の事

先生の云へらく、「世人の所謂道陸神と申すは、道祖神とも又は祖道とも云へり、旅路の恙なからん事を祈る神なり。左傳に祖すと云へるも、此の神を祭り侍る。和歌にはちぶりの神などよめり。紬中抄に云ふ、みちぶりの神と云へる心なり。貫之が歌に、わたつみのちぶりの神にたむけする幣のおひ風やまずもふかなむと詠めり。隱岐國知夫利の崎と云ふところに、わたつみの宮と云ふ神おはしますと云へり。古今の序に逢坂山に手向を祈ると侍るも此のことなり。唐土には黄帝の子纍祖と云へる人、遠遊をこのみて道に死に給ひしを、後の世に祭りて行路神とせり。かく云へばとて強ち黄帝の子を我が朝にも祭るとにはあらざるべけれど、和漢共に其のわざの通ずるなるべし。然るを今の世に用

各も亦も女童部の云ひならはし侍るは、道路に捨てたる石佛、さま〴〵の妖怪をなし、人を欺き世を驚かすと云へり。つら〳〵按ずるに、中昔の頃、亡き人のしるしの石を建つとては、必ず佛體を刻みて、其の下に亡者の法名を記せり。今の石塔毎に名號を彫りつくるが如し。その法名などは星霜經るに隨ひて、石とても消え失せ侍るに、佛體ばかりは鼻缺け脣缺けながら殘りけるを、聞き傳ふる許りの者どもはかなく成り失せて、道に捨てられ岐に放らかされて、何れの人のしるしとも覺束なし、只石佛とのみ皆人思へり。思ふに佛は拔苦與樂の本願、六波羅蜜の行體なり、菩薩常不輕の法身を具し給へば、まして佛體において人に捨てられ世に用ゐられずとて、かかる災を爲し給ふべきや、其の妖をなせる物は石佛にはあらず、其の弔はるべき子孫もなき亡者の妄念に依りて、天地の間に流轉せる亡魂、時に乘じ氣につれて、或は瘧の鬼となり又は疫神ともなりて人を惱まし侍るなるべし、それ故世に瘧疾疫癘はやり侍る時は、道端に捨てられたる石塔を繩もて縛り、或は牛馬の枯骨を門の戸にかけて、其の惡鬼をおどし侍る呪あり。或人の云く、「その佛をしばりて病の癒ゆること如何」。云く、「是れ佛をしばるにあらず、其の石塔に屬する所の亡魂を戒めこらすなり。」云く、「然らば卽ち其の石塔に刻まれたる亡魂、其の病者を知りてなやませるにや。」云く、「さにはあらず、天地の間、多く善惡の二氣なり、それ故こゝの惡鬼を退くれば、彼の惡氣も退くなり。是れ一佛を供養すれば、三世

諸病の本懐に叶ふと云へる心なり。」又云く、「瘧はもと脾胃の虚より生ずる所なり。其れ故に諸病と變り、起れるにも其の時必ず定まり侍るは、脾胃は五行の配當に土にして、五常の信にあたり侍れば、其の起れる時節の違はぬも信なり。勿論其の病を受くる所は脾胃なり。瘧は件の惡氣の世上の邪氣に與して、人を惱ましはべるなり。さればにや諸病と變り、此の一病は醫書にも呪ひ侍るなり。」また云く、「しばれる程なる行儀ならば、癒えて後も其の繩をゆるし、また香花を供へ供養すること如何。」云く、「我に災を爲さば邪氣なり、そも又退ける時は邪氣にあらず。兼ねては又我が願ふ所に應ずる物なれども、なぜかは手向のたかなるべき。其の上傳に寓する邪氣なれば、憎み果つべき謂れなし。」又云く、「既に其の理は聞きき。其の理を知りたる人の呪ひて癒ゆるは勿論なり。其の理を知らざる人も呪へば癒ゆる事如何。」云く、「萬の呪詛事、其の理を知りたる人のみせるにあらず、只、其の傳へと信仰とによりて、其の驗は侍るなり、その功は作者にあり、其の德は無窮に殘れる物なるべし。」

第三　天狗の沙汰　附　淺間嶽求聞持の事

一人云く、「天狗といふ物は、今の世に誰か定かに其の形を見たるといふ者なけれども、古より其の姿を繪にも書き、又怖ろしき物語ども多く御座候上、就中近き頃確かに怖ろしき事の御座候は、

伊勢山田に檜垣氏某たしかに物語致され候は、周防國智遁といふ出家淺間が嶽にきたりて、求聞持の法を行ひたき由望みけるに、此の所は魔所なる故、其の法成就しがたきよし申し候へども、たつて望みて其の法を修しけるに、二七日にあたる頃、俄に大風吹き來ると見えしが、彼の求聞持くりたる僧、いづかたへ行きしやらん見えざりければ、今に始めぬ事不思議の至りと思ふ所に、兩月許りありて、周防より、彼の僧いつ／＼の頃忽然として來りしが、今に人心地なきと申しこせしに、其の日ざし伊勢にて失せし日と同じ日なり。幾百里の道を一日が内に送りしも怖ろし。又其の古郷の寺へ屆けたるも怪し。此の事更に浮きたる事にあらず、其の外爰元にても礫打ちし事度々あり、如何なる術を得し物に候や、兎角心得難く侍る」と云へば、先生云へらく、「天狗といふ名は唐土には見えず、貛と云ふ獸の異名に天狗とはいへれども、此の類にあらず。また星の名に天狗星といふ星、史記天官書、天文志等に見え候へども、いかなる星とも量り難し、只魑魅といひ魔の障礙など云ふ、皆爰許に申す天狗の事なるべし。是れ皆深山幽谷に住む魑魅の類なり。國々所々にあり。尤も多年多力なる物にして、其の不思議をなす事狐に百倍せり。木を折り岩をまろばし、風雨を自在にし、大小の身を現はせり。順が和名抄には、あまのくつねと和訓して獸の部に入れり。思ふに此のもの天竺唐土の魔の類と一所にもあらざれども、所々の山谷の氣より生ずる所のものなるべし。其の形をさだかに見ざる

は、此の物元より變化の物なればなるべし。世俗に太郎坊次郎坊など云ひて、山伏の樣に云ひなせるに、其の住所、愛宕、比叡山、鞍馬など云ひて、出家の住所なればなるべし。日に三熱の苦しみありて、熱丸を服すると云ふは、人間とても怒れる氣に伴れて、瞋恚の焰をもやせば、熱丸を呑むに等しければ、其の怒れる心を例へていふなるべし。扨此の妖怪必ず人倫遠き所にあるは、是れ純陰の處より生ずるなれば、人家等多く續きて、正しき氣の集まれる處には、其の術もうすらぐ心にや侍らん。されば、淺間の嶽の不思議もさもありなんかし。天狗礫と云ふこと、多くは嵐の所爲なる由、古き文にも見えたり。狸を殺し煮て喰ひて、こらしめ罵りなどすれば、其の事自らやむ由、著聞集に見えたり。孔子の說には怪力亂神は元よりあらざる所なれば、箇樣の類に觸れたる沙汰も候はねど、たゞ人道を治むれば、其の怪しき事もおのづから消え失するにこそ侍れ。」と語られき。

第四　錢神の事 附 省陌の事

傍より問ひて云く、「世に錢神といふもの有りて、黄昏時に薄雲のやうなるものの氣、一村其の聲を爲して、人家の軒だけをさゝめき渡れり。見る人刀をぬきて切らんとすれば、錢多くこぼれ落つると云へり。然れども拾得たりといふ者を聞かず候、あるべきものにや。」と問ひければ、先生答へて云はく

く、「是れ世界の錢の精、空中にたなびく物なりけらし。何にても其の物集まれば其の精必ず生ず。陽の精は日となり、陰の精は月となり、金石の精は星となれば、錢もと人爲にいづる物なれども、其の集まるに及んでは其の精なきにしもあらじ。」又問うて云く、「子母錢と申す物御座候よし、如何なる事にて候や。」云く、「是れ仙術の一つにして、昔より申し習はし侍る。其の法は青蚨といふ蟬と似たる蟲の蠶の如くなる子を、草村に生じ置けるをとれば、其の母必ずたづね來れるをとりて、母の血を絞り八十一の錢に塗り、子の血をも又八十一の錢に塗りて、その一方の錢を以て市に出でて物を買へば、子母の契り淺からぬ故に、其の錢飛び歸る故常に減る事なしと云へり。子母錢成つて貧を患へんやと唐の人作りしも此の事に侍る。されど我が朝にては、誰試みしとも聞き侍らず。そも錢の起りは、外の圓きは天に準へ、内の方なるは地に象りて、唐土にては女媧氏の世につくり出せり。本朝には聖武皇帝の時に鑄初めけるとかや。其の文は開基太平、萬年勝寶、元寶通寶などなり。猶後には唐土にても、年號を加へて其の名とせり、開元淸和の類是れなり。昔より新しき錢出で來ては、古きは廢りし時もあり、又新舊共に用ゐらるゝ政もあり。皆其の時の宜しきに隨へり。猶此の銅錢どのはいかなる心よしやらん、智あるも愚かなるも近づかまほしく思へり。されども類を思ふ物にて、其の多き所には招かざれども集まり、少なき所には偶至れども、一夜の宿をも借る事なし。就中和漢共に

私に鑄る事はつよき禁制なり。金錢銀錢は名高き物なれども、私にも鑄るならはしも侍るは何事ぞや。錢は通用の寶にして、金銀は私の寶なればならん。夫れ人の富饒貧乏は天命のなせる分なり。萬通に通寶を鑄る時は誰か貧しからん。若し人の力を以て貧富を自在にせば、人よく天に勝てるなり。豈よく天に勝たんや。文錢の數を九十六文にせし事、何れの時より定まれりとも覺束なし。唐土にても時と所によりて、九十文或は八十文九十七文なるもあり、これを省陌と云ふよし、明の楊升菴が丹鉛總錄に見えたり。」

第五　貧乏神并韓退之が送窮の文、范文正公が物語の事

故人の云く、「さる物語に云へるは、何國あたりのいきはりて貧しき者、何事も左前にてあるが如く、暮るる年も忙しく、明くる年も心にかなはねば、とやせんかくやあらんと、身の置き所さへ案じ煩ふ折ふし、何とは知らず肩の上より、五寸ばかりなる物落ちたり、取り上げ見れば人形にて、目鼻口舌もそなはりたり。彼の貧者驚きて云ふ、「何者なれば我が肩より落ちたる。」と云へば、答へて云く、「我世にいはゆる貧乏神にて、日頃そなたの身に住みせし者なり。」と云へば、貧者よろこびて妻子を呼びて云ふやう、「扨も嬉しき事かな、此の日頃此の者我につきまとへばこそ、汝等にもかかるうき目を見せつれ、

向後よりは手前もなほり、物每潤澤なるべし。打ち殺しても捨つべきなれども、去ぬると云へば、其のまゝにて助けやるべしと云へるに、貧乏神笑ひていふやう、御悦びは御尤もなれども、我こなたの身を離るゝにあらず、こなたの身の上頂より足の爪先まで、ひしと諸方の貧乏神つき纏ひたる上に、此の頃また新しき神ども、諸方より集ひ來りし故、居り所なく誤りて落ちはべることといへば、彼の者興さめて、あきれ果てたりと申す事の候ふ、若し此の神候や、左候はばよるべの化物よりも、懼ろしき者にて御座候と問ひければ、先生評して云く、此の神を窮鬼と名づけたり。夫れ人の貧富は、天命の稟受の厚き薄きによれば、聖賢君子の德義正しく智慮深しと雖も、如何ともする事なし。孔子顏淵曾參原憲の類あげて數ふべからず。然るを愚かなる者は強ひて貧を去り富を求めんとして、其の身をくだし名を恥かしめ、後には刑戮に陷る類、此れ天命を知らずして、幸ひを願ふが故なるべし。常體の者は天命の說も事むつかしければ、佛家にいはゆる三世の說を立てて、過去の宿業と云へるも害あるにあらず、かく天運によるなれば、神有りて司るにもあらざれど、唐の韓退之と申せし大儒も、正月晦日に酒肉をのせて、文章一篇を作り、舟にて窮鬼を送り給ひしかど、一生が間不仕合の打續き候故、宋の陳簡齋といふ詩人の詩にも、韓愈推レ窮窮不レ去、乘大待レ富富不レ來と作りしとかや。又宋の范文正公と云へるは、宋朝一人の人品にて、學問才藝は更にもいはず、好んで人に

施し給ふ。後に饒州の守護職に成り給ひて家富み門榮えたり。然るに其の友に、きはめて貧しき浪人ありて、渡世の生業なかりければ、范文正公と莫逆の友なるによつて、合力に預からばやと思ひて、遙々饒州にいたりて此の事を嘆きしかば、文正公もとより人に物を惜しまぬ心なれば、太守たりと雖も一錢の貯へなし。折節六月の頃なれば、文正公仰せけるは、當夏の稅に麥を數萬石納めしを、悴某をして慰みがてら奉行に添へて賣りに遣はしたり。此の者歸らば此の金を與ふべしとて待ちたまふに、子息歸りて申さるゝは、『麥をそれ〴〵に賣らせける所に、古郷を通りしかば、親類共の貧しく候者に、殘らずあたへて歸り候。』と申されし故、文正公も彼の友達も力を落しぬ。其の後文正公仰せ出でらるゝは、『此の州に晉の王羲之が石碑あり、是れを石ずりにうつときは、一枚を黄金一斤には賣れやすかるべし。されども平人の是れをうつことあたはず、われ幸ひ守護なれば心易し。』とて、則ち其の石摺百枚を打ち給ふべき紙硯などとゝのへ給ひ、既に『いつ〳〵の日打ち給ふべき』とて其の近邊に觸を付けられ、既に明日はその所へ文正公も諸共に出で給ふべきと定まりたる今夜、俄に土民ども來りて申すやう、『今夜俄に夕立して、雷その石碑へ落ち候ひ、石碑微塵にくだけ、いづちへ飛びしやらん行方を存ぜず。』と申しけり。その友とかうすべき樣もなくて、手を空しくして返り侍りぬ。誠に結構なる文正公を友達にもちて、かく懇に預れども、其の數の盡きけるには、

世界にも及ばぬ事ならずや、東坡が、一夕雷轟薦福碑と作りしは、此の事なりと語られき

第六　山姥の事　附　一休物語并狂歌の事

又問うて云く、「世に山姥と云ふものありて人をとるよし、又は人の女房に化けたる物語なども候ふが、實の女にて候や、不審さふらふ」と云ひけるに、先生評して云く、「山姥といふは、深山幽谷の鬼魅の精たるべし。此の世界あれば此の人あり、此の水あれば此の魚生ず。其の氣のあつまる所にては、鬼魅の精靈あるまじきにあらず。併しながら其の姥といへるは、龍田姫山姫などの日本の云ひならはしなるべし。其の名に付けてしづはたのたくみにかゝづらひ、苧うみ、絲紡ぐ様に、諸の曲舞にも謡ふなるべし。さて又此の曲舞を一休和尚作り給へる時、『佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり』と作りて、此の間の詞を如何と思へる時、蜷河新右衛門來りて、『柳は緑、花は紅の色々と候はば、あとさき相應して侍らん。』と、附けられしと申しならはせり。又過ぎし頃某化物を題にして戀の狂歌詠みしに、山姥をよみしは、

左　とい程な涙を袖に留めかね聲をあけ路の山にふしぬる

右　春さればこなたのことや忘るらむ花をたづねて山めぐりして

第七　叡山中堂油盗人と云ふ化物　附　青鷺の事

かたへの人の云く、一坂本南杜権地の某坊と云へる人の物語に、そのかみ叡山全盛の剛、中堂の油料とて一萬石許の知行ありしを、東近江の住人此の油料を司りて家富みけるに、其の後世すはの時節に、此の知行退轉せしかば、此の東近江の住人世に本意なき事に思ひ、明けくれ嘆きかなしみしが、終に此の事を思ひ死にして死にけり。其の後夜毎に此の者の在所より光り物出で、中堂のかへ来りて、彼の油火のかたへ行くと見えしが、其の悪すさまじかりしかば、強ち油を盗むにもあらざれど、皆人油盗人と名付けたり。はやりを若者共是れを聞きて、如何様にも其の物の執心油にはなれざる故に、今に来るなるべし、しとめて見ばやとて、弓矢靭をもちて、飛び来る火の玉を待ちかけたり。案の如く其の時節になりて、黒雲一叢出づると見えし、その中に彼の光物あり。すはやといふ内に其の若者共の上に来りしかば、何れもあつといふ許りにて、弓矢も更に手につかず、中にもたしかなる者有りて見とめしかば、怒れる坊主の首火焔を吹きて来れる姿ありありと見えたり。是れ百年ばかり以前の事にて候ひしが、その後は絶えぐに来りて、只今も雨の夜などには、其の光物折々出で申し候を、湖水邊の在所の者は、坂本の者にかぎらず何れも見申し候。此の事かくあるべきにや」と問ひ

ければ、先生答へていはく「人の怨霊の来る事、何かの事に附けて申すごとく、其道にはあるべき道理にて侍る故、其の油盗人も有るまじきにあらず。しかしながら年経て消ゆる道理は、うぶめの下にて委しく申せし通りなり。その死ぬる人の精魂の多少によりて、亡魂の残れるにも遠近のたがひあるべし。また只今にいたりて、其の物に似たりし光物有るは、疑ふらくは青鷺なるべし。其の仔細は、江州高島の郡などに別してあるよしを申し侍る。青鷺の年を経しは、夜飛ぶときは、必ず其の羽光り候故、目の光と相応じ、嘴尖りてすさまじく見ゆること、度々なりと申しき。されば其の光物も今に至りて見ゆるは、青鷺にや侍らん。」

第八　徒然草猫またよやの事　附　観教法印の事

傍の人の云く、「徒然草に猫またと云ふ物有る由記されたり。其の外此の頃に至りて、彼処にも化けたり、爰にも怖ろしき事ありしなど風説多し、猫の化くる事の候やらん、不審し」と云ひければ、先生いへらく「古は猫魔と云へり、猫と云へるは下を畧し、こまと云へるは上を畧したるなるべし、ねこまたとは其の経あがりたる名なり。陰獣にして虎と類せり。其れ故に手飼の虎などとも云へり。唐土にても猫の化けて、其の主人を殺せし事多くしるせり。其の生まれつきを見るに、智あるにもあ

らず徳あるにもあらず、其のさま膝に戯し肌に馴れ、身を人に任すかと思へば、呼ぶ時は快く来らず、縄を以て引く時は必ず退く。強ち人にさかふとにもあらざれど、自ら能く疑ふ心あり、女の性に似たり。直なるかな化けて老女と成りて人を誑すと云へる事、猶其の内の能は和と通用せり。膝の上・一時に変りて大小有るも氣味悪し、況んや身の後だに皮の聲すらも、雅楽を亂る調子あり、心すごき物にこそ。其の上常の猫にてさへ、頭たとらしあんたに畜ひ置けども、又鼠よりさきまたけ有る事多し、只飼はざらんには如かじ。且又著聞集に、観教法印嵯峨の山荘にて唐猫を飼ひしに、よく玉を取りければ、秘蔵の守り刀を取り出でて玉にとらせけるに、件の刀をくはへて何地やらん逃げ失せぬ、人々尋ね求むれども行方知れずなりにき。此れ猫魔の変化なりと、人々沙汰しはべりしと記せり、兎角猫はあしき物にこそ。

百物語評判卷之三　終

百物語評判　卷之四

第一　攝州稻野小笹附吳隱之が事

某尋ね侍るは、「攝州伊丹と神崎との間の稻野と申す處に、方四五間なる笹原あり、是れ和歌に詠ぜし稻野笹原の名殘なる由にて、其の所の者申せしは、『例へば誰にてもあれ、その竹を伐りたる者候はば、忽ち狂氣になりし事數を知らず、其れ故只今は其の廻りに堀を掘り置きて、人のよらぬやうにいたし置きつ。これいでそよの歌名歌なる故にやと人々申しき。』と語り侍る。此の事先年有馬へ湯治仕りし時承り候うし、今に不審に存じ候が、如何なる事にて候や。」と問ひければ、先生のいへらく、「某も過ぎにし頃其の所を通りしに、皆人左樣に申しき。樣子を委しく尋ぬれば、此の地昔稻野寺と申す古跡の由にて候へば、伊丹は殊に近き頃まで、荒木一亂のきざみ戰場となりし故、何とぞ其の笹の邊に剛強なる侍の墓など候故、その氣殘りて不思議を爲し候か、又其の邊に古狐など住居して、かく人を襲ふなるべし。または何事もなき事なるを、古跡なればその竹をたやさじとて、賢き人の申し置きしを、愚かなる土民等の折りたる時、傍より皆人寄り合ひて、『汝彼の笹を折りたるや、

すは狂氣ならん」など云はん時に、元より愚かなる心故、自ら其の詞にひかされて、血あかり氣狂ふ事あるべし、正しき人のいらで叶はぬ時に折りとらんに、何の仔細か候べき、唐土にも是れに似たる事のあり。荊州に貪泉と云ふ水あり、此の水を飲めば必ず人ごとに貪る心出で來て、慾心深うなる由云ひしかば、吳隱之と云ふ賢人試みに呑みしに、いよ〳〵心清かりけりと見えたり。いなのを笹もさる事にや侍らん」と辭せられき。

第十二　河太郎附丁初が物語の事

一人の云く、「河太郎とは如何なる者を申し候や、某が女房の在所江州野洲河の近所にて候が、その河邊に子供の水泳ぎして居り申し候内に、折々は見え申さぬこと御座候を、河太郎の所爲のやうに申し慣はし侍る。自らも溺れて流れ候はんと存じ候が、如何なるやらん」と問ひければ、先生評して云く、「河太郎も河獺の功を經たるなるべし。河獺は正月に天を祭ること、七十二候の一つにして、よく魚を捕る獸なり。狀小さき狗の如く、四足短く毛色は薄青黑く肌は蝙蝠の如しと云へり。此の物變化せしこと唐土にもあり。丁初と云ひし者長塘湖の堤を行きしに、後より頻りに呼ぶ聲の怖ろしく身の毛よだちければ、怪しく顧みるに、容顏妙なる女房二八餘りにして、青き著物を著て、青

き絹笠をきたり。いかさまにも變化の物ならんと、足早に逃げ去りて、猶もかへり見れば、彼の女房沼の中に飛び入りて、大きなる河獺となれり。さて絹笠や着るものと見しは、蓮の葉にして破れ散りたると、太平廣記にのせたり。これ獺の化けにし例なれば、太郎も其の一門なるべし。太郎と云ふは河邊に長じたる稱にこそ。」と評せられき。

第三　野衾の事

又問うて云く、「野衾とは何ものぞや。」先生いへらく、「野衾はあながち化生の物にもあらず、鼯の事なり。此の物上古には獸なりとかやいへども、爾雅に鳥と註し侍れば、本草綱目にも、李時珍禽の部に入れたり。されども鳥の如くに羽ありてかける物にあらず、尾をもつて飛べり、低きには下れども、高きに登ること安からずとぞ。其の狀蝙蝠に似て、毛生ひて翅も卽ち肉なり、四つの足あれども短く、爪長くして木の實をも喰らひ、又は火焔をも喰へり。元山中に住める物なれど、里へも來る物なればにや、萬葉集にも、ますらをがたかまと山に攻めくれば里におちくるむさゝびの聲、など詠めり。此の鳥羽と覺しき物を廣ぐる時は、小さき衾をのべたるやうに見ゆ、かくてぞ野衾とは呼ばれけるにこそ。飛びながら子に乳を呑ませり、その子の啼くこと人の聲に似たり。宜なるかな和漢ともに

怪しみ怖ること。」

第四　梟の事　附　賈誼鵩鳥の賦の事

先生いへらく、「梟と申すも木菟と同類にして、晝は目見えず、洞に隱れ木のまたにゐて、獵師とても容易く見ることなく、夜は眼の光明鏡の如くにして、木によりては鳥を窺ひ、池に下りては蛙を摑み、室に入りては鼠を捕れり。世の風說に、何某の屋の棟より、いつの頃火の玉飛びしなど訝りあへるも此の鳥の眼の光ならし。猶、年長けたる梟は、其の眼の光に映じて、滿身共に光り侍れば、彼の青鷺の如く、さながら光物のやうに見え侍るとかや。されどもかかる妖怪ある家は、いつしか滅び主絕ゆるは何事ぞや。それ梟は怪鳥の最上にして、其の德さがなきものなり。かくてぞ漢の賈誼と云ひし人も、鵩と云ふ鳥の飛び來りて、座の隅に留まれるを見て、長沙の住居いと物味氣なく思ひて占ひし詞にも、野鳥室に入り主人將に去らんとすと見えけるに、鵩鳥の賦を作りて、程なく死にけるとなん。蓋し鵩鳥も梟の一類なり。おもふにすべて妖異ある故に其の家滅ぶるにあらず、此の家滅ぶるが故に、妖孽あるなるべし。猶斯樣の時にこそ、物の機を知る君子は、誠を盡し禮を守りて、上天地を仰ぎ下人心を和ぐれば、妖は德に勝たずして怪しみも破れ侍るとぞ。其の例あげて數ふべからず。

又梟と云ふ物は、至つて不孝なる鳥にて、生まれて六十日なる時は、必ず其の母を喰らふ。故に文字にも鳥の首を木にかけたる形容を以て作れり。人の首を獄門にかけしを梟首と云ふも其の心なり。されば唐土には五月五日に、此の鳥を羹にして群臣に給ひて、不孝をこらしめ給ふとかや、有り難かりける政なり。」と語られき。

第五　鵺の事附り弓に聖人の遺法有る事

又云はく、「鵺と云ふ物は深山幽谷に住める化鳥なり。源三位頼政、足手は虎の如き獸の飛び來りしを射て、後また誠の鵺を射し事平家物語に見えたり。また廣有が怪鳥を射し事太平記にあり。徒然草に、鵺の鳴く時招魂の法を行ふ事、眞言宗の書に見えたる由を云へり。いかさまにも妖怪を爲す物ならし。かやうの怪しきたぐひ、多くは蟇目の音に恐れ、又しとむるも必ず弓箭のわざなるは、古老の說に、凡そ諸々の器は、聖人の手より始まるとは申せども、大樣は其の形變じ樣かはりて、觚も觚ならずの類なるに、この弓ばかり猶古の制法に違はず、聖人の作爲のまゝなる故、鬼に限らず狐狸豺狼の類まで、此の音を恐るゝと見えたり。」と申されき。

第六　鬼門附周の武王往亡日に門出の事

傍より問うて云く、「世に鬼門祟りと申し候ひて、大様の人忌み恐れ侍るが、適に忘れてもおかし候へば、かならず禍にあふ事多く御座候は、なにと丑寅の方は人間の忌むべき方にて候や、覺束なく候」と問ひければ、先生答へて云く、「鬼門と云ふ事は東方朔が神異經に、東方度朔の山に大きなる桃の木あり、其の下に神あり、其の名を神荼鬱壘と云うて、もろ〳〵の悪鬼の人に害を爲す者を宰り給へり。故に其の山の方を鬼門と云ふと見えたり。かくはいへども、是れ正しき聖賢の書に出でたるにもあらず、其の外その書にも鬼門を忌むと云ふ事見え侍らず。元より我が朝の習はしに、丑寅の方を専ら忌む事、何れの御時より始まれりともさだかならず。さて又道理を以て推すに、東北の方を忌むべき義勿體なし。若し方角を以て云はば、乾の方は忌みぬべし。その仔細は、是れ純陰の方にて、陽氣の將に絶えんとする處、萬物の既に死する地にて、尤も不吉の方角なり。是れを忌まずして丑寅の方を忌むこと、如何なる謂れとも覺束なし。されども今の世は忌みならはし侍れば、我かしこげに鬼門に害なしと云はんも、時に從ふ中庸の心に背けり。大方は除けて然るべし。されどもたとひ鬼門へ向きても善事を爲さばよかるべく、辰巳へ向ひても悪事を爲さば悪しかるべし。猶、鬼門にか

ざらず、軍家にもてはやしはべる日取時取の善悪もかくのごとし。悪日たりとも善を爲せばゆくさき芽出たく、善日たりとも悪を爲さば後々禍あるべし。又其の家々にてもちゐる來れる吉例の日もある事に候。昔周の武王と申す聖人、天下の爲に殷の紂王と申す悪人を討ち給ふに、其の首途の日、往亡日なりければ、群臣諫めけるやう、「今日は往亡日とて往きて亡ぶる日なれば、曆家に深く忌み候、さ候はゞ御出陣無用」の由申し上げけるを、太公望聞かずして云く、「往亡ならば是れゆきて亡ほす心にて、一段芽出度き日なり」とて、終に其の日陣立して、尤も紂王を討ち滅ぼし、周の世八百年治まりけり。此れ故に武王は往亡日をもて榮え、紂王は往亡日をもて滅びたり。同日にして吉凶かくの如くなれば、名將の歌に、時と日は味方よければ敵もよしたゞ簡要は方角を知れ、と詠み給へるも思ひあはせられ、其の人によりてその日に依らざる事明らけし、各手前を愼み給ふべきなり。」

第七　雪女の事 附 雪の説

某いへらく、「此の頃多く誹諧の發句に、雪女と申す事見え申し候がいかゞ、此の物あるべき物に候や」と問ひければ、先生の云く、「雪女と云ふこと倭、唐土の古き書にも見えず、又誹諧などにするにも、かやうの事は確かに見たるやうには致さぬが其の法にて侍る。しかしながら物多く積れば、必

ず其の中に生類を生じ侍るなり。水深ければ魚を生じ、林茂ければ鳥を生ずるが如し。されば越路の雪などには、此の物出でんもはかり難し。是れを雪女と云へるは、雪も陰の類、女も陰の類なればなるべし。」又問うて云く、「雪は元、雨にて侍るに、白きは如何なる道理にて候や、殊に霜と同じ類にて候や。」と問ひければ、「如何にも霜雪共に同じ類にて、皆、雨露の結ぼほれたるなり。雪は六出と云うて必ず六出侍る、霜は三出と云ひて三出あり。是れ雪は純陰の物なれば、老陰の数六なる故必ず六出あり、霜は其の雪に半ばせる物なれば、三出なること勿論の道理なり。扨雨露の結ぼほれて白くなる理は、凡そ、世界の物の固まる事、皆五行に配當して、金氣の司る處なり。金の色は尤も五色も候へども、白きが則ち西方の正しき色なり。此の故に雨露もこり固まりては、必ず金の色を現はして白くなり侍る。況んや天空は金氣清明の氣の司るなれば、雨露の内に其の色を含みて、こりかたまりて降るものなるをや。」又問ふ、「然らば堅く凝れる物は皆白くなり候や。」曰く、「大かた白く侍る。生類の骨は白く、草木の根は白く、潮を煮固むれば白く、土のかたまれる砂は、白く侍りき。」と語られき。

第八　西寺町墓の燃えし事

一人の云く、近き頃西寺町の或寺に、切腹せし人を葬りしが、夜ごとに其の墓より火燃え出で候故、始めは小僧同宿などの見たるのみにて、さだかにもなく候處に、後には住持聞きつけ、世に怪しき事に思ひ、さまざま經文など書きて弔ひけれども、其のしるしなかりしに、此の頃は燃えず候由を申し候が、其の墓の燃ゆる程なる罪人にて、色々の弔ひを受けても消えざるに、おのれと靜まりたるも怪しく存ぜられ候。とかく此の理委しく承らばやと云ひければ、先生答へて云く、是れ不思議なる事に侍らず、其の理は去し頃切腹せし人なれば、血こぼれ出で、其の血より燃え出でたる火なり、是れを燐火と申し侍る。夜見え候は例の陰火なればなるべし。人の血のみにかぎらず、牛馬などを殺せし野原なども、其の血の固まり殘りたる處は、かならず燃ゆる物なり。扨其の靜かなりしは、彼の血も久しくなれば血の氣盡きて土となる故、おのれと止む理なり。さるにより其の血の氣盡きざる内は、其の僧の教化を得ても止み申さず。怪しき事に侍らず。元より水火は天地陰陽の精氣にて、分の正しき物なれば、其の有るべき處にありてはあらずと云ふ事なく、なかるまじき所にありては有る事なし。されども鬼神幽冥の道理なれば、人悉く其の理を辨ふるに及ばず、其の珍らしきに附けて、或は化物と名附け不思議と云へり。世界に不思議なし、世界皆不思議なり。」と評せられき。

第九　舟幽靈附丹波の姥が火、津の國仁光坊の事

或人問うて云く「西國又は北國にても、海上の風荒く浪はげしき折からは、必ず浪のうへに火の見え、又は人形などの現はれはべるをば、舟幽靈と申しならはせり。舟をさどもの云へるは、とわたる船、破損せし時、海中に溺れし人の魂魄の殘りしなりと申し傳るは、秦の武文が怨靈並に越中の守護名越遠江守、同修理亮、兵庫助などが妄執の事思ひ出でられて、眞しく候が、さに候ふべく」と問ひければ、先生答へて云く「其の海原に見ゆる陰火は、水中の陰火とて一通り有る物なり。是れ高き山の頂に水有るが如く、水中にも火有るなり。さは云へど其の溺れ死せし人の魂も、いかにも火と見え、形も現はれ侍るべし。其の形は底の水屑となりて朽ち果て侍れど、その氣の殘りし處、現はれまじきにあらず。彼の武文名越などにも限らず、壇の浦などの如く一度に大勢相果てたるは、猶其の怨靈も殘るべし。丹波のほうづ河に姥が火とてあり、是れも其の所の者申し習はせしは、そのかみ山田の邊に老女の候ひしが、數多人の子を肝煎るとて、其の生みの親のかたよりは、金銀を取りて己が有とし、其の子は此の河へ流せしとかや。其の砌いまだ世も治まらざる頃なれば、さして其の咎にもあはざりしが、天命の恐ろしさは、洪水の出でたるとき彼の姥溺れて足搔き死しけるが、其れより後

今にほうの河に夜毎に火の丸がせ見え候を、姥が火とかや申しならはせりと云へり。是れ其の捨てられし小兒の亡魂、又は其の姥が苦しみの火の靈たるべし。又津の國仁光坊の火と云へるは、これは先年攝州芥河のあたりに、何某とかや云ふ代官あり。これへ往來する眞言僧に、仁光坊と云ひて美僧ありしに、代官の女房ふかく心をかけ、さま〲口說きけれども彼の僧同心せず。女房思ひけるは、かく同心せぬ上からは、われ不義なることのかへり聞えんも計り難し。しかる上は此の僧を讒言して、亡き者にせんと思ひ、『仁光坊われに心をかけ、色々不義なる事申しかけたり。』と告げければ、其の代官甚だ立腹して、とかくの沙汰に及ばず、彼の僧を斬罪に行ふ。其の時仁光坊大きに恨み『此の事はかやう〲の事なるを、實否の詮索もなく、斯く憂き目を見するからは、忽ち思ひ知らせん。』とて、目を怒らかし齒を喰ひしばりて死にけるが、終に其の一類殘りなく取り殺して後、今に至るまで其の僧の體を埋みし處の山際より、火の丸が出で候が、其の火の中に法師の首あり〲と見ゆると云へり。かやうの事常に十人並に有る事には侍らねども、たま〲はある道理にして、唐土の書にもをり〲見え侍る。」と語られき。

第十　雨師風伯の事 附 殷の湯王唐の太宗の事

一人の云く、色々の事を思ひめぐらし候中に、風ほど不思議なることは侍らず。風の宮、風の宮など、神道にも崇め候へば、神有りて其の事を司り給ふにや。又唐土には風師風伯など申す由を承り候。是等などいたして、其の験の御座候も心得難く存じ候まゝ、くはしく物語を承りたく侍る。と云ひければ、先生答へて云く、一地の陰気は昇りて雲となり、陽気は降りて雨となれば、元より陰陽のなす所にして、外に司る鬼神も有るべきにあらず。されど雲行き雨施して、萬物の恵みを受くるより云へば、報恩の為とて、唐土にも山川社稷の祭祀を侍る。かく有る上は我が朝にも、風の宮有ること勿論の義なり。元より風は天地の噫気と云うて、陰陽の気の動き発する所にて、形有る物にあらず。東風の氷をとき水をぬるめ、花を開き物を乾かすは、陽気の所為なれども、秋風の露を結び水を氷らし、葉を落し物を害らすは、陰気の為す處なり。かくしてぞ四季による風の吹きやうも違なるべし。此の風の神を恐ろしき形に刻み、袋などを持たせたるは、神道の論に太鼓を書ける図など、それぞれの似合はしきかたに象れるなるべし。さて又日照に雨をこうて其の験有ることは、さもよしの理侍る時に、一天下の旱なれば、天下の萬民に叫び、一國の旱には國土の萬民に通じ、一郷の日照には其の郷の長の願ひにかなふべし。其の銘々の司れる分へは及ぶべからず、是れ當然の理なり。猶も自らなさず祈禱なき時は、身の穢れず心の至誠を以て祈らしめたる例多し。これ

ども自ら祈れるにこそ深き感應は侍らん。昔殷の湯王と申す聖人の御代に大旱ありしに、湯王自ら庭に出で給ひ、其の身を牲として身の過ちを責め給ひしかば、詞の下に忽ち大雨降りしと云ふ事、帝王世紀に見えたり。又唐の太宗と云ふ賢王の御代に、蝗と云ふ物天下にみち／＼て、民の害をなしければ、太宗曰く、「是れ朕が政の惡しきにより、天より禍を下し給ひ、天下の蒼生を苦しむる事其の謂れなし、若し天、朕をあはれみ給はば、此の蟲東海へ去るべし、さなくば朕を害せよ。」とて、其の蝗をとりて呑み給ひしかば、その蟲東海へ飛び去りて、太宗に祟りもなく、うち續く豐年にして、斗米三錢の賤しき御代になりける事、貞觀政要に見えたり。是れその君の眞實に民をあはれみ給ふ心の感應なり。又其の外一國一城の主の德義ふかき故に、旱に雨を得、洪水に害なく、虎の鄕を去り、蝗の死にし類、あげてかぞふべからず。これ世界の中に、人より貴きはなく、人の内にて心より上なるはなければ、其の心に感ずるところ、さま／＼の驗ありて、天人一理の妙なる事、儒學の極意なり。」と語られき。

第十一　黄石公の事

ある人の云く、「なべて人の存じ候張良に一卷の書を授けし老翁は、其の翁の言葉に、「われ黄石の

黄なり」と申されき」と。「さ候へば石も劫を経ては化け候やらん、訝しさよ」と云ひければ、先年答へて云く、「是れは石の化けたるにあらず。彼の黄石公と申せし人は、其の頃軍法の名人にて、張良の師匠なる人なれば、則ち智謀を用ゐたるものなり。其の故はわれ世をのがれし者なるが、此の書をたしなみ置きたり、汝に授けんとて云はば、人の浅まに思はん事を思ひ、かく怪しくいひて、世の信仰を起さしめんが爲なり。張良も其の心をさとりて、後に黄石を祭りしなり。かやうの事、軍法に於てまゝ有る事なり。」と語られき。

百物語評判卷之四　終

百物語評判 卷之五

第一　瘟の神疫病の神附斳鮐乙の字の事

或人問うて云く、「瘟の神疫病の神と申すものこそ、まさ〳〵有る物に候や、また唯病氣の上のみなるを、かく申しならはせるや」と問ひければ、先生答へて云く、「瘟の神疫病の神、共にあるべし。疱瘡は、古はなし、戰國の頃より發りたる由醫書に見えたり。元人の胎内に宿りしときは、母の古血を呑みて此の身命を長ず、其の滯りし惡血の毒、後々の時の氣に誘はれて、發して疱瘡となれり。されば其の根ざしは胎毒なれども、其の誘ふ物は時の氣なり、その集まれる處則ち鬼神あり、是れ瘟の神なりけらし。それにより世俗に從ひて送りやりたるも、輕くなる理なきにあらず。また疫病の神と云へるは、唐土の書には、上古の惡王の魂此の神になれりとかや云ひ傳ふれど、其の靈の今の世までさながら生き通して、我が日本に渡れる事も有るまじ。思ふに疫病のはやる時は、多くは飢饉の後なれば、其の道路に飢ゑ死せるやからの、生有る時だに一飯も別けらるべき方なければ、況して死後に祭らるべき親しみもなき亡魂共の、集まりて人に襲ふが故に、其の執に感じていふ容言、

多くは衣食の事のみなり。又兵亂の後にも行はるゝは、其の戰場にて果てし魂魄の疫鬼と成れるなるべし。其のうけたる人の強弱に從ひて、生死の品も變るにや。かくはあれど、孔子も鄕人の儺を忌み給はねば、其の惡鬼を避くる樣に擬ひて、名香をたき雄黄を嗅ぎ、又は神符など書き付けたるも宜しく、謹上家なに某乙といふ字を張りしは、羅諦羅餘僧の部に出でたる故事なり。元の末つ方天下に疫氣はやりし時、浙口と云ふ渡のあなたなる在所は、未だ其の類なし。ある時老僧一人來り、其の渡の船頭を呼びて云ひけるは、「唯今此の所を、黄なる裝束したる者五人來りて渡らんと云はば、必ず渡すべからず。此の五人は唯今天下にはやる疫鬼なり。若し強ひて渡らんと云はば、此の文字を見せよ」とて、老僧は行方知れずなりけり。船頭怪しき事に思ひけるに、案の如く五人の者來りて、舟に乘せよと云ふ。船頭諾はざりければ、五人の者大きに怒つて船頭を打擲せんとす。すはやと思ひて彼の文字の書きたるを見せければ、五人の者見ると齊しく、跡をも見ずして逃げたり。船頭扠は疫神に紛れなしと思ひ、急に追ひかけければ、五人の者の背に小さき籠を負ひたるが、捨てて逃げたり。船頭今は間も隔たれば、是非なく其の籠をとり歸りて開き見れば、小さき棺桶三百づゝを入れたり。驚きて在所に歸りて始め終りを語りて、彼の文字を家々に押しけるとなん。此の文字なかりせば、その籠の數は七人を殺さん爲なるべしと云ふ事見えたり。今の謹上乙は、これを用ゐたるなり」と語

られき。

第二　蜘蛛の沙汰并王守乙が事

一人の云く、「そのかみ源氏相傳の名劔に、蛛切と申す御座候よし太平記にしるせり。さしも頼光の名將にて、土蜘蛛に[illegible]との物に襲はれ給ふべきは、心得難く侍ること問ひければ、先生評して云く、「此の事さも有るべし、蜘蛛は小さき蟲なれども、智の怖ろしき物なりとて、文字にも蟲篇に知の字をかき、又網にふれたる物を誅する義有る故に、蛛の字を書けり、是れ誅の字を象る心なり。それ春の蝶の園を訪ねて花を吸ひ、秋の蟬の林をもとめて露を舐むるも、皆智の爲すところなるに、何とて蜘のみ智ある名には立ちけるぞや。眞に一寸の蟲に五分の魂なきも侍らねど、花を吸ひ露を舐むるは、只身の上の事のみなり。それ蜘はもろ〳〵の蟲の心をはかりて、事なきに網を設け、懸らんものを己が餌にせんと企めること、悪智の爲せる處なり。此の心を長じもてゆきたる大蛛は、人をも害する企み有つべし。此れ故に唐土の人も憎めるにや、王守乙と云へる人は、蜘の網を見る毎に杖もて破り侍り。人その故を問ひけるに、天地の間飛びかける類、皆身を動かして口腹の助けとせるに、只蜘のみさがなき企みを爲して、物の命を害ひて、身を養ひけるを憎みて、かく破るとぞ云へりとかや。」

第三　殺生の論并伏羲神農家の武備の事

或人の云く、士好みて殺生を為せし者に、怨霊来りて仇をなし、又は其の子孫に報ゆる事、世に物語多し。此の故に佛家には五戒の第一とし、儒者には庖厨を遠ざくとやらん申す由、承り候。されども、先祖の祭に膾をすき、饗應に生類を殺す事、これ又聖賢の掟なり。本朝には魚鳥を服すれども、四足を忌む事昔より無い、此の説いかゞと問ひければ、先生答へて云く、是れむつかしき論なるを問ひ給へり。先づ佛家には平等利益を宗ぶ故に、人の親を見ることわが親に同じく、蟻蟲を見る事、人を見るに等し。此の故につよく殺生の罪をたてて、一つの蟻をも殺さず、其の一つの蟲を殺すこと、猶我が親を殺すに等しと思へり。されば薙髪を剃り断を著て、三衣一鉢の儲けだにかつ／＼なるを本分の事とす、是れも又宜からずや。第六道流転を立てて、人間より畜生になり、畜生より人間に生ず。されば一疋の魚鳥を見るとても、是れ何ぞ過去生のわが親なる事を知るべからず、現在にても後れ先だつ親類の中、何れか畜生に生まれたらんも心得がたし。況んや闇に於ては、猶其の因縁を知るべからず。是れを以て釈氏の教へは、専ら殺生戒を重んず。行基の歌に、鳥へ野にあらそふ犬の声きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ、と詠まれしも此の心なり。儒家の説には、天を父とし地を

財として、其の見識の大きなる事釋氏に變らねども、その中に本末の差別あり。本末と云ふは、先づ我が親は天下の至つて懇なる者なれば本とす。それに次ぎて兄弟、又其の次は親類眷屬、其の次は朋友、其の次は知らぬ世界の人、其の次は禽獸草木なり、是れを末とす。されば天下を以ても我が親一人に換へ申さず、此の心を本末といふ。此の故に其の親へ懇なる心を推して廣めて兄弟親類朋友に施し、其の餘れる處を他人へ及ぼし、又其の餘れる心を禽獸に至らしむ。かく差別ある故に、禽獸まではその仁心同じ如くには至らねど、猶其の殺すに禮儀を立てて、天子國君も故なければ牛を殺さず、其の孕めるに當つては、小さき鳥獸をも害せず、又數罟洿池に入らずといへば、小さき目の網を以て、魚の子までを取り盡す事を厭ひ、草木も春夏の長ずるに當つては折り取らず、葉落ちて後、斧斤を山林に入るゝと云へり。是れ禽獸草木へ及べる愛心なり。それ天地開闢の始め、人は萬物の靈なれば、禽獸より遙かの後に生ず、既に生じては衣服なき事能はず。此の故に禽獸の血を吸ひ肉を喰らひ、其の皮を著るといへど猶その力の強き物ありて、人の害をなせしを、其の時の君これを制する事を教へ給ふ聖人を伏犧と云ふ。伏とは平らぐる心、犧と云ふは鳥獸といふ心なり。其の後人民多くなりて禽獸足らざりしに至りて、始めて五穀を喰らふ事を教へ給ふ聖人を神農氏と云ふ。是れ唯其の時節の宜しきによれるのみ、何ぞ其の心に變りあらんや。されば蛛は蠅をとり、雀は蛛をと

り、角は面をとり、圓はすをとり、大の持ちすを制して、強きが弱きに勝つは天地自然の勢ひなれば、人倫に悖りたる事も、猥褻にの例しといへども、既に其の覆すに禮儀を立つるは、人は萬物の靈たる證據の祖を失ひたるのみ、人を重んずる心を推し廣めたるのみ、是れ周公孔子の道なり。故に昔梁の武帝といふ天子深く佛法を信じ、殺生戒を保ち、動物を殺さず、宗廟の牲をも麪にて作り、臓物にさへ生贄を禁ぜしめず、其の國つ時に臨み、命を乞ひて、殺生戒をば禁ずるに似たればなり。かくは有りしかども遂に敵國に襲はれて、數多の軍兵を殺して、大を輕んじ給ふ餘業よりぞ亡びしが、後果して國亂れて梁帝は餓死し給へり。さればこそ世を治むる事も國民がと云ふにはあらず、上に申せし如くなり。其動物の命を救ひて、諸會を得、官位を得し類、いかで數ふべからず。これ又我が日本に問足を示す事は、本朝人皇の始め、既に天地の風氣開けて、五穀も實りければこそ、始めて四足の類を服するは稀なり、武事の是れしは我が國の風俗なりと、中國にて孔子の教に周通を用ゐしより、成人自然に生まれ付きて仁義は、我此の國に生まれし上に、天照大神と同體なる所、神璽の御前に當りて忽たり。國にては國に從ふが我が心なれば、孝悌忠信の事なりと自然に思ひし哉、それより出る事なるべし。我が國に見えたり。思ふに忽ちの心を修ひに天子の道を知る時は、人の道に近き道なれば、殺さざる風俗を守りしといはんや、我が國の君子國といふも宜なるかな。是れ其の禮儀となり、殺生を

好める者は、天地の心元物を生ずる事を好み給ふに背けば、何ぞ報いなからざらん。若し鷹かひ獵師などのたぐひは叶はぬものなりとも、面々の遠慮あるべき事にこそ侍れ。」と語られき。

第四　龍宮城幷山の神附張横渠の事

あるひと問ていはく、「滄海の底に龍王のあること、世俗にも申しならはし又諸經にも多く見えたり。俵藤太が物語には、湖にもあるやうに聞え侍るが、覺束なく侍ぞかし。猶も唐土に河伯など申すは、河の神の事にや、又山靈と申すも山の神の事にて侍るか、此の類いかゞ」と問ひければ、先生答へて云く、「山神水神龍王の類、祠られて有るべし。然れども其の形は其の類なるべし。若し其の年を經たる物あらば、偶人にも變化すまじきにあらねど、元人と同じ類にあらず。然るを其のさまを人間のやうに云ひ、住所も宮室のやうに作り傳ふるはひが事なり。佛經に八大龍王など云へるは、佛の說法によりて異類の感應したる道理を說けるなるべし。俵藤太が物語は、元よりさだかなる事にあらねば、論ずべきにあらず。そのかみ張横渠先生海神を祭りたまふに、其の形を人に寫して衣冠を著せ給へるを、張横渠の誤りなりと、朱文公譏りたまへる事、朱子語類に見えたり。また河伯の名は莊子が寓言に出でたり、酉陽雑俎などの妄說は信ずるに足らず。」と語られき。

ある人問うて云く、仙術と云ふものは、天仙地仙の別も有りて、千萬年の齢を保ちて、空をかけり地を潜り、千里を目前にちゞめ、丹子を煎煉になし、さまざまの奇特あり。なほ老子を元祖と爲せるとや。其又幻術と云ふ術も、魔法と一つにて、種々の不思議をなし、或は刀を呑み火を踏み、身を自由に隱し得する由なるが、いかやうの理ぞや。承りたく侍ることと云ひければ、先生答へて云く、

仙人の沙汰三代の時にはなし、戰國の末に起りて秦漢に盛んなり。老子を元祖と云へるは、老子傳に百六十餘歳とも二百餘歳ともいふ説あるを取りて、無理につけたる説なり。秦の始皇漢の武帝などして、不死の藥を求めしより此のかた、世々の帝王是を貴んで金を費し給へども、終に得給ふことあらず。其の仙人の大將たる者とく濫觴にあひたり。その徳のたることは言ふに及ばず。さて空をかけり雲に昇ることは、莊子の説に、人は陰陽につきて生まるゝ者なれば、決して其の理なし。若し山中に深く籠り居て、人事を離れ、身の煩ひを去り、松の葉を喰らひなどせば、人の壽命より少し長生をする事ありと云へる事、一種の書に見えたり。かゝる事をなしたる人をも愚かなる人の信じて、深山幽谷に籠り道を求め捨して、煙霞に交はる者あれば、神仙の書に記して曰く、後に羽化して其のゆく處を知らずなど、或はか

しきやうに申しなせり。又其の刑戮にあうて死にたる事を、正しき史官の書に記し置きたれば、又其の書には尸解せりと書きたり。尸解とは此の形をもぬけて、魂を自由になすをいふとなり。其の說の誣ひたる事例もあるべし。幻術の事は元天竺より起りたる事、こゝもとにて云へる魔法の如し。さまざまの術あることを記したれども、仙術よりはまたおとりたる事にて、一通りの法有りと見えたり。其の劍を呑むといふも實に呑むにはあらず、人の目に呑むが如く見ゆるなるべし。他の事も皆是れに同じ。まして仙道にても、幻術にても、まなんでよく得たる者ありて、人を欺く時は必ず害にあふ、畢竟實事にあらず。若しくは習ひ終せても、身をとゝのへ國を治むる便りにあらず。聖賢の云はざる處なれば、何の用にかたつべけん。その上こゝもとにても、其の術の益なきしるしには、彼の狐をつかふ者、白き狐を殺し其の靈をまつり、其の面の骨を裂き己が額につけぬれば、よく形を隠すと云へり。されども砂をまき置けば、其の足跡つき、日影にはかげうつり、さかしき犬あれば其の氣を聞ると云へり。是れ何ぞ逢けて益あるべけんや。すべて正法に奇特なしといふこと、世話ながらよく道理に叶へりと語られき。

第六　夢物語の事

ある人の云く、邯鄲の枕と云ふ事に禅僧様が、出處は何やと問ひければ、先生こたへていはく、山谷が詩に、四十歳功業一炊といふ詩の註に、異聞録を引きて云へり、これ仙術の事なれど、諸には佛道の事に譬へたり。ほにて申す如く、其の事なきにもあらねど、さる事もや侍らん。さて夢といふ物こそさまざまのやうに侍れ、先づ人の寐入りたる時は、五臓六腑の固まる處々、何れも其の體虛わといへど、精心の主人は寐入らず、故に思ふ處の事あれば、睡りたる後思ひ出して、是れを夢といふなり。さて其の夢にさまざまの變りあり、例へば心の火盛したる人は水を夢み、腎の水盛したる人は火を夢みるたぐひを精夢と云ふ。又其のかたちのふるゝ事について見る事あり。是を重ねて横に臥したる時、其の足上より落つれば、必ず高き處より落ちたると思ふ事あり、是れまた病夢の類なるべし。又心に富貴を願へば富貴を夢み、苦勞を思へば苦勞を夢み、其の思ふ處によつて其の事を見るは思夢といふ。孔子のいたける夢にたに周公を見ずと歎ぜられしも此の類なり。又靈夢といふは、丁固が松の夢、王濬が三刀の夢の類、よき事あらんとては、必ず前より其の氣の相感じて見る夢を云ふなり。彼の詩經に説ける夢占は虺蛇を見れば女子生まれ、熊羆を見れば男子生まるゝ類、吉し、凶しく其の事もとにて云へる。富士二鷹の類なり。又悪しき夢の見えて、必ず其の難の來るも、其の理又かくの如し。人の心は神明に通ずるものなれば、自然と其の善悪を前より悟るなるべし。されども昆

きゐて事に觸れ人にまじはるときは、他念多き故に其の事なけれども、寐入りたるときは、却つて心の働きも專らなるべし。又瑞夢にも思夢にも病夢にもあらず候ひて、兵庫の湊より天竺の風景を詠め、車に乘りながら鼠穴を通る抔とみるは、是れ實の夢にして、はかなき事なるべしと評せられき。

第七　而慍齋化物ものがたりの事

一人の云く、一宵よりの物語にさま〳〵の道理を仰せきかされ候が、先生は何にても化物御覽候や。と問ひければ、先生答へて云く、一業こそ化物多く見候ひて、此の事を恐れ申しはべる、其の次第を語り申さん。先づただ今は世に儒學はやり候故、我人ともに少し文字を讀み候へば、髪頭異樣に衣服きら〳〵しくつくろひ、賢げにもの云ひ、年よる人を侮り、露許りの學問に高ぶり、利慾は常の人に十倍して、口には見事に云ひなせども、實の律義露ばかりもなきは、俗儒腐儒など云ひて、儒者の化物なり。身には三衣を著し、口には五戒を說けども、誠の道心夢ばかりも起らずして、破戒無慚のやからは、出家の化けたる賣僧ならずや。其の外世俗のわざにも、傾城などいふものの仕方を見るに、思はぬ方に容轉し、髪を剪り爪をはなし、かたへに來りても女房の如く、ことかたにもさのごとく、人を誑し金銀を吸ひとるは、是れ女の化物なり。近頃は又歌舞伎太夫といふものあり、元より

男色の道も昔よりありたれど、此の頃に至りては殊更に盛んになりて、おのれより年寄りたるをも戀ひ慕うて傾惑ひやすきは、好色の化物ならずや。其の外判はんじはとのかひなどいふ物、一文不通の身にて人の分別を沙汰し、剃刀より薄きえりつきにて、人の貧富を論ずるは、如何なる化物ぞや。かやうの類多しと雖も、語り盡すまじ」と申されき。

第八　而慍齋の事　并　此の草紙の外題の事

一日或人の云く、「今夜も既に深更に及びければ、いざ御暇申し侍らん」とあれば、某の云く、「此の化物の咄手にはいふ事にて候へども、今一つおかしき不審の御座候。先生の物語を承り候に何事を尋ね候ひても、竪板に水を流す如く、然も其の古事の御噂ども、まざ／＼書物を御控へたまはれ候やうに聞え侍る。かかる上はさぞ御胸中もすゞしく、萬の事につきても御慍りも有るまじき樣に存ずる催に、而慍と御號をなされ候は何事ぞや」と云へば、先生答へて云く、「余が齋號は御存じの如く、論語に『人知らず、而るを慍らざるは亦君子ならずや』といふ心を用ゐ申し候。此の心は此に人あり、身にとりては習ひて積み置きたる才徳ありとても、元より人に賣るべき心ならねば、人知らずとて些かも慍る心なし。若しあげ用ゐるたらん時は、時に從うて行ふべきのみと思へるは、

仕すならすやと宣ふ。されば、某は君子にあらず、然る故にすこしはかりたくはへ置きたる才藝を人しらず。然るを、粗ゐが故かく藝能を備き申したるなり。中にも今更をこのまし事なれど、若きより書物にふけりて、そも書癖あるに似たり。此の故に經史子集のまなくなるに眼をさらし、上代帝より下明清に至るまで、世の治亂、政の得失、人の賢否、事の變易、一つとして覺えずといふことなく、或は天竺震旦相生の事まで殆んどきとし、中頃禪學を好みし故に、因縁をたんぬ白道のくだ/\しきはこともいはなく、諸宗の義論諸師の語録にほゞ通達し、我が日本の道は、淺香山の麓にはいりての頃り、にけてみうみのさかれにも汲み、連歌誹諧の小技まで心がけ候へども、誠に口惜しき事の云へる如く、頭かぎりに諸あげらはなるまでことなることなく、只寂しきに打ちまかせて、四書詳論、歴代要略、源氏家傳抄、百人一首解抄、伊勢物語言餘抄、つれ/\増補鐵槌、同別傳、かた記抄、其、本草增補、水鏡の抄、たが身いつへ、小さかけき、たからぐら、はいかい住やうなど、あみ置き候へ、人の望みに任せて梓に彫めしもあり、又家に殘せしもあり、かくして世にも數へられず、時にも知られず、草木と共に朽ち果てんは、何ぞ而慨ならざるべきや」と。某またいはく、「今夜の御物語を我々も聞け置きて、後に板行致さば外題を何と申すべく候や、此の草紙に論じ給ふ處、古今の不思議あきらかに聞え、其の博識治聞なる事、五車の書をも恥ぢざるべし」と云ひしかば、先生いはく、「若し今夜

の語を書き附け給はば、百物語評判と名附け給ふべし、淺き名のやうに侍れども、是れ古人の心に叶ひはべる。むかし張横渠先生東西の窗の銘を書きて、砭愚訂頑と名附け給ひしかば、程子是れをきらひて、ただ東西の銘と號せよと教へ給ひき、されば此の草紙もさまざまの名も侍るべけれど、只今宵の實事に從ひて、名附け給ふべし、と申されて、眠れる樣に見えければ、各退出致しぬ。其の後先生竟に、壬子の歳六月二十七日に、四十一歳にして果てられたり。若し是れにかすに年をもつてせば、いかばかりの事か侍らんに、殘り多く侍らずや。先生姓は平、山岡氏、諱は元鄰、字は徳甫、父祖は勢州山田の人なり。是れも其の夜の物語なれば書きつけ侍る。

百物語評判卷之五

跋

百物語評判すでに梓に彫みてければ、かたへの人問うて云く、「山岡而慍斎は、寛文壬子の頃身まかり給ひける由巻軸に見えたり。しかあれど評判のうちに、近頃の例をも引き用ゐられぬる事侍れば、故事ばかり評判さきだち、何とやらんついで物ぐるほし。或には而慍斎の外に、和漢の達者ありて評判加へながら、名かくし侍るもののやうに思はれ候。」予云へらく、「いかにもよき推量にてはべる。医家に用ゐる素問と云へる書は、其の説黄帝に起りながら、その書は戦国の末になりぬれど、なべての人は皆黄帝の時に成りけるやうに思ひあへり。又荘子と云へる書も、戦国の時漆園老人が著はしぬれど、堯舜孔顔のさながら宣ひける様につくろひなして、三墳の文にも見えず、三代の世も聞き及ばざる異人の姓名など書き載せ侍るを、寓言と申しならはせり。此の草紙もかかる例に類せるなんかし。」而慍斎の長子何がし博識洽聞にて、父の才徳にも越えたり。過ぎつる頃此の巻を予に示して云く、「乃ち翁此の書を編みなんとて、中半にして身まかりき。いざとよ父の志をなしてんや。」と云ひてければ、予聞いて、「あな賢よくも知らせ給ひし物かな。」とて疎きを補ひ、滋きを除き、

[illegible]此のふみなりぬれば、功を其の源の作者にゆづりて、かく梓になん彫あはべる。

狗張子

浅井了意

狗張子序

洛陽本性寺の了意大徳は、稚めて博識強記にして、特に文思の才に富めり。生平の著述甚だ多し、晩年に及びて筆力ます〳〵老健なり。去年庚午の春、往に編集せる伽婢子の遺せるを拾ひ、漏れたるを摭りて狗張子若干卷を作り、その續集に擬へんとす。其の年の冬に至り、既に七卷を撰び輯む。翌年辛未の元旦、遽らざるに遽然として寂を示す、都鄙驚歎して深くその才を惜しむ。顧ふに凡その人の常情、その德義を哀慕すと雖も、幽明途異にして、復見るべからざれば、必ずその生平の文字筆墨を尋ねて面晤に擬ふるのみ。それ此の書は、了意大徳晩年思ひを究め精を研ぎて、筆作せる眞跡にして、是れ實に大德遺訓の形見なるをや。是れ故に今その眞跡一字も改めず、梓に彫め世に行ひぬ。凡そ此の書の作、皆本朝の奇事近代の異聞、その文詞の富華に、旨趣の深奥なる、讀む者細かに翫ばば、唯其の見聞を廣うし、談話を資くるのみにあらず、兼ねて勸善懲悪の益あらんと云ふ。

元祿四年辛未十一月日

義端　謹序

狗波利子序

天地開け初まりしよりこのかた、人其の中に生まれて、時移り年更まり、後に生まれし人は、我が見ぬ世の事を昔と云ふなるらし。昔も其の時は今ぞかし、今を過ぎて生まれし人は、今をも亦昔と云ふべし、昔と今と更に變る所なし。月日星の周り、雨露の潤ひ、山は高く海は深し、樹の葉の細く蓮の葉の圓き、鳥獸昆蟲、色も聲も水も火も、只古に違ふ事なし。久しきを傳ふるには、幽にして細やかならず、近きを傳ふるには、正しくして詳なり。愚かなるは聞きて惑ひ、見ぬを疑ふ。賢きは心に修め、木を開らめ鳥の跡に殘して、敎へを垂れ戒めとす、千代萬世に傳りて絶ゆる事なし。されど廣き天が下に、語りうしなひ記し遺せる種々、限り知られず。今僅かに聞き覺えし事もあるに、心にのみ込めて思ふことと云はぬも、腹ふくるゝ心地して、手馴れし狗張子にむかひ、燈火と影と語り慰むも、友とするに勝るならずや。

元祿三年かのえ午むつきの十五日

洛本性寺昭儀坊　沙門　了意

狗張子總目錄

狗張子總目錄

第七卷

狗張子 巻之一

一 三保の仙境

駿河國宇度の郡三保の松原は、地景めでたき名所なり。北の方は富士の高嶺雲を凌ぎ空に聳えて、幾千丈とも知りがたし。頂には小さき竹生ひたり。燃しのぼる煙はその色青く、山の腰より下つ方には、小松の生ひて常に綠なり。冬夏ともに消ゆる時なし。淺間大菩薩の住み給ふ所、唐土よりは此の山を、蓬萊山と名づくとかや。萬葉集山部赤人の歌に、

　ふじのねにふりつむ雪は水無月のもちにけぬればその夜降りけり

南の方は海なり。西は宇度の山、千手觀音の靈地なり。田子の入海、薩埵山、清見が關も遠からず、釣する海郎の夜もすがら、浪に焦せるいさり火の影、岩根にかゝる白浪、尾上にわたる夕嵐、汀に遊ぶ鴎鳥、水に宿れる有様、草叢に住む蟲の音までも、とりどりに哀れなり。新古今集[illegible]が歌に、

　[illegible]にたれや田子の浦あまの藻鹽火たきえざるらむ

三保の松原は西より東へ、海中にさし出でたる事四十餘町なり。古天女の天降りて、羽衣を松の枝

に懸けて曝しけるを、漁父是れを拾ひて返さゞりければ、天女力なく漁父の妻となり、年經てのちに羽衣を返しければ、天女歡びて云ふやう、「妻となり夫となるも、前の世に少しの緣ある故なり。今は是れまでなり、我は天上に歸るべし」とて、仙人の道をこまごまと敎へて、天女は雲路に昇りけり。漁父は名殘を惜しみながら、道を勤め行ひ得て、遂に仙人となり、富士足柄の間に行き通ひ、猶今の世までも折々は人にまみゆ。齢もかたぶかず、限り知られぬ命を保ちけるとなり。能因法師が歌に、

宇度濱にあまの羽衣昔きてふりけむ袖やけふのはふり子

と詠みしは此の事なり。

二　足柄山

過ぎにし頃、興津と云ふ所に由井源藏とて、往日は鎌倉伺公の人の末なり。時世につけて家も衰へて住みけり。同じ友達に藤山兵次、浦安又五郎、榊原四郎とて、いづれも年若くて友なひけり。古き人の物語に富士足柄の山には、むかしより仙人ありて、志ふかき人には、出で逢うて物語して、をかしき奇特もありと云ふ。四人是れを聞きて、いざや我等山に入りて行ひ、その仙人に逢うて、長生の道を得ばやとて、うち連れて足柄山にわけ入りつゝ、深き岩屋を住家とし、峯に登り谷にくだり、

蔦を攀ぢ岩を歎き、肌を雪霜に曝し、骨を嵐にまかせて、食を減じ寒を堪へ、夜晝三年を重ぬれども、毫ばかりも驗なし、神原四郎は煩ひ出して里に歸る。藤田浦安思ひけるやう、一家を忘れ恩を棄て、身を顧みず行うて三年になれども、すこしの驗もなし。あたら月月を空しく暮して老い果てんより、故郷に歸りて、いかならん君にも仕へ、身を立て家を興し、榮華の春に逢ふべし。目にも見ずあて所なき行ひに、骨を折る程君に仕へなば、あがるまじき身にもあらず。無用の長生不死、今更望むも詮なし。」とて故郷へぞ歸りける。由井源藏は、「此の三年行ふ仙の道も、神君の意に叶はねばこそ驗もなけれ、かく願ひのあらんには、例令幾年行ふとも、更に驗はあるべからず。我は命を限りに、疑ひなく行はん。」とて、唯我一人山に留まり、いよ〳〵修練精行せしかば、神仙現はれて、丹薬秘術を傳へ、遂に大道を悟り得たり。故郷に歸りし二人は、仕官につきて勤めしに、家を興し身を立て、奉行頭人に經上り、世の敬ひ、人の尊む榮華開けて芽出たかりけり。或時二人暇の隙に、三保が崎に出で、磯近く遊びゐたるに、一つの小舟を漕ぎてその湖を過ぐる。漁郎の世渡る舟かと見れば、それにはあらで、舟の中には美髯青たる老人あり、棹をならしてゆく、その速き事風の如し。二人これを見る、正しく由井源藏なり。聲をかけて呼び返し、一別久しく逢はざりし間に、和君は猶山に留まりて、多くの年を重ねながら淺ましく衰へ、何の效ある事もなし。それ風は繫ぐべからず、影は捉ふべから





ず、行方なき事に、二たび歸らぬ年を積みて、老い果て給ふ殘り多さよ。我等三人は故郷に歸り、君に仕へて奉行頭人となり、世に懼れられ人に敬はれ、妻を迎へ家も榮えて、樂しみ多し。源藏は今その有樣にて、さこそ物事心にも叶はじ、何にても不足の事は、我等調へて參らすべし。」と云ふ。源藏うち笑ひて、「君は浮び我は沈めり、魚鳥と雖も、それぞれ心に叶ふ道あり。世に用ゐる所の物はほどほどにつけて事缺けず、此の山のあなた苔の下道に、桃の園櫻の林あり、その門の内ぞわがすむ庵なる。見苦しけれどいざ來て見給へ。」と、三保が崎より足柄山にわたりて、四人うち連れて峯を越え谷を左るに、一叢立ちたる桃櫻の林の末に、怪しげなる門あり。内に入りければ荊茅原道もなし。一町許りを行くに大門あり。樓閣重々玉の甍、虹の梁、道の傍には翠の竹、流石に高からず、青葉の間に白雲あり。風吹き來れば枝かたぶきて、絲竹の調べ響きに聞え、樓門の内には見も知れぬ花の木名も知らぬ草の花、深緑、淺紫、赤き白き咲き續きたる裝ひ、更に人間の境にあらず。匂ひ四方にかをりみちて、魂さわやかに、心たゞ清々として、雲に昇る思ひあり。内に入りて庭の面を見わたせば、植木の梢には、五色の鳥飛び翔り、囀る聲のおもしろさは、此の世のものとも思はれず、迦陵孔雀の鳴くに似たり、池の内には清き水湛へて、金白銀の鱗およぎめぐり、浮き沈み遊ぶも珍らし。並びたる木の枝に、赤き栗、緑の棗、大きなるは三二寸に及べり。敷き渡したる眞砂、立ち列び

たる巌の間より、靜かに水の流れたるも、さわがしからずぞ見えたる。かくて見めぐる間に、髮かたわにあけたる童二人出で、「此方へ」と呼び入れたり。書院の内には、飾れる棚には、琴・笛等の折琴、香爐香合、西湖の畫、蜀江の錦をつゝみとし、眞紅の緒にて結びたり。曲彔のうへには豹の皮をかけ、床に三幅一對の聯繪を懸けたり。暫くありて由井源藏、そのさま氣高く出でたり、三人に向ひて、禮儀正しく座につきて後、「遠く騷がしき世に住へて、心の安きいとまなく、いつも安らはしき住居に膝を容れ、重疊の峯に身を焦し、憂への煙に心を惱まし、此の年月を送り給ふには、さこそ苦しくはべるらん。少時こゝにて思ひの慰み、心をはらし給へ」と云ふに、三人ながら驚き怪しみて、とかくの言葉はなく、只手をつき頭をふせて、頷くより外はなし。童子四人美しく出でたり。服部清らかに据ゑわたす。種々の珍味いろ〳〵の肴、數をつくして出しけり。猩々の唇、熊の掌、鹿のはらごもり、麞の羮は、その名を聞きつたへたるばかりにて、これやその類なるべからんと、いとも怪しむあまりいふばかりなし。日既に暮になりて、九花の燈火をかゝぐるに、華やかに出でたり、小袖うちぎ清らにして、薫滿ちたる遊女十人進み出でて、夜もすがら今樣朗詠うたひ舞ひける有樣、つく〴〵見れば、世の頃海道に名を得たる遊君共なり。是はいかにと思ふに、その中に春とかや云ふ女は、東琴の上手にて甘たて撥へ彈きならすつま音、歌にあはせて、

花の宴の夕暮、朧月夜にひく袖、さだかならぬ契りこそ、心あさくも見えけれ。

と謳ふは雲に響きて、ひくは空に充ちたり。昔源氏花の宴の夜、内侍のかみと別れし時、扇をとりかへて出で給ふ。そのあふぎの歌に、

世にしらぬ心ちこそすれ有明の月の行方を空にまがへて

今宵かかる御對面は、思ひの外なればさだかならず、しどけなき御事と、心あさくやといふ歌の心ばへ、時にとりて歡待あるところなり。二人ながら此の歌に、心は少し浮れたり。

三保の松風ふきたえて、沖つ浪もあらじな、水に映ろふ月とともに、ながめにつゞく富士山、所がらなる琴の唱歌かなと、いとゞ浮きたつ爪音、風もしづかに海原の浪もをさまり、雲消えて詠めにあかぬ月影の、うつるも殊更おもしろく、三保より富士の見えわたるけはひ、何にたとへんかたもなし　源藏かくぞ詠みける、

夜もすがらふじのたかねに雲きえて清見が關にすめる月影

二人ながら興に入つて、やう／＼夜も早明方になり、野寺の鐘の音は聞えねど、鳥の聲は日のあたりに告げわたる、名殘はつきぬ事ながら、又こそ尋ね參らめとて、暇乞して立ち出でつゝ、半町ばかりにして跡をかへりみれば、霧塞がり雲閉ぢて、松の梢吹き送る風に、岸より舟に乘り家に歸り、今

宵に入の道女は、如何して由井源蔵が許へは参りけるぞ。一と問はせけるに、十人ながら一今夜の夢に、やごとなき人の御許、御名ある方々に逢ひ奉り、酒宴せしと覺えてさめ侍り、その所は何處とも知らず」と同じやうに答へけり。さはあたる不思議なれとて、重ねて使を遣はして尋ねさするに、家もなく門もなし。三人ながらわづかなる知行を取り、是れを恥しき事に思ひけるも、不吏に怖みけれど、その甲斐なし。

三　富士詣

近き頃より京・田舎も、富士垢離といふことの流行りて、毎日に河水に浸り垢離をとり、淺間大菩薩を念じ奉り、よく行へば奇特あり。如何なる病をも癒し、身の貧しきも徳つきて、めでたくなるとかや。大菩薩の靈驗あらたにましますとて、世にもてはやし奉る。攝津國に住する者とかやいふ甲に、高岡藤三郎と云ふ者の身きやうかなしくして、藥師の力にも餘りて、すべきやうなく、淺間の行人を頼みて、精進すなはち行ひけるは、まことに本復してこの歡びに富士まうでを思ひたち、先達を頼みて山に登る。折しも六月朔日の名山なり。峯は半天にかゝり、遥かに雲に入りて、夏の夜なれども雪降り、麓の山々は遥か下に見えて、峯の色こまやかなり。枝にすがり路を傳ふに、千丈の壁に登るが

如し、雲霧は足の下にたなびき、遠山は猶幽に隔たり、朧にして影の如し。攀ぢて上るべき藤蔓もなし、岩に蹲をつき、はふ／＼峯に到り嶺に及ぶ。昔常陸房海尊とかや、源九郎義經奥州衣川高館の役に、一族從類みな亡びけるに、海尊一人は軍勢の中を遁れて富士山に登りて身を隠し、食に飢ゑて食物のなかりしに、淺間大菩薩に歸依して、守を祈りしに、岩の洞より飴の如くなるもの涌き出でたる、甞めて試むるに味ひ甘露の如し。是れを取りて食するに飢ゑをいやし、自ら身も健かに心よくなり、更に日月の精を吸うて霞に籠り、遂に仙人となり、折ふしは麓に下り、里人に逢うてはその昔を語り、人の助かる事などに及びて、世に隠れてありと云ふ。然るに彌三郎、遠き旅路に疲れて心たゆみ足も弱り、岸近き所にて風に吹き倒され、轉び墜つること玉をはしらかすが如し。かかる所に年の頃六十餘りの法師、風に吹はれて彌三郎を捉へ留め、危き命を助けたり。彌三郎ひき立てられ、かの老僧に向ひ、手を合はせて拜みつゝ、「如何なる沙門にておはしますぞや、御庵はいづかたぞ、御名や、何と申すやらん」と問ひければ、「我は此の麓に住む法師なり、世を遁れたる身の、名乘るまでには及ばず。下向の道には便りもこそ[illegible]しければ、立ち寄りて休み給へ」と約束して、山より下るかと見えしが、姿は何方なく失せにけり。彌三郎かくて下向の道に、麓の邊をたづねしに、僅かに小さき門あり、葎蔓まつはり、草のみ深くきたなからぬをわけ入りければ、前の法師出でむかへ、一間ばかり

行きければ、山ある庵の内佛壇を構へ、本尊は大日如來、光あたりに耀けり。山より颪す嵐には自ら妙音を唱ふるかと聞え、海より歸る波には又、鼓吹を加ふるかと疑はる。妄想の雲は晴れ、無明の睡りも醒すとかや。觀行の功力に感じて、庭には時ならぬ花さきつゝ、煙消え霧はれて、浮世の外の住家なり。歸らんことを忘れて、或時物語なされし所に、法師語りけるやう「我はもと東國の者なり。久しく奧州衣川の邊にありて、心の外なる浪のありしが、かりそめに遁れて此所にかくれ身を行ひ魂を練りて、年の暮るゝ事を覺えず、獨り樂しみ終へて、折節は昔を思ひ出で、奧州にも行き通ふこともあり。元より住む所に住む故に、妻もなくへる物も無し、旅の憂れにこそなれ」とも合せ」とて、割子の内より[illegible]を取出して進めける。彌三郎ふかく情を感じ、「さるにても御名ゆかしくこそ、名乘りて聞かせ給へ」と云ふ。法師は涙をおさへて「名乘るにつけては怪しかるべし、眞は我が名は殘夢と云ふ。人に交はらねば時移り世の變るをも知らず、今の世の中は如何に」と云ふ。彌三郎の言ふには「其上尊氏公世を治めて、十三代に及べり。諸國の勇士そばだち起りて、互に恐れをなす中、遂にたがひに國をあはせ、功を募り、駿河には北條氏康、甲斐に武田晴信、越後に長尾景虎、常陸に佐竹、會津に蘆名、越前に朝倉、周防に陶晴賢、安藝に毛利、出雲に尼子、豐後に大友、肥前に龍造寺、伊勢の國司、近江に淺井、佐々木、畿內南海の間には、三好が一族同じく家人松永、その外諸國

郡郷の中に武勇ある輩其の數をしらず。小身なるは大家の旗下となり、弱きは強きに押し倒され、臣として君を策り、父子怨みを結び、兄弟敵となり、利欲を專らとして、佞奸を構へ、忠孝を忘れ、狼心を挾み、運に乘るときは、庸夫も國の主となり、勢ひを失へば、貴族も卑賤に下り、榮枯地を變へ、盛衰日をあらたむ。諸國一同に亂れて、須叟に止む時なく、その間の殘害、幾千萬とも知りがたし。然る所に織田信長公尾州より起りて猛威を振ひ給ふ。まづ暫く互に變を見合はせて、四海の波しづまらんに似たり。此の度また世の中、如何になりゆくべしとも知りがたし」とぞ語りける。彌夢法師つくづくと聞きて「安否は運に因る事にて、天理神明に任すべし、智慧勇力才覺にては叶はず、ただ無其正直をもつて本とす」日も早傾きて、落ちかゝる風の音も凄まじ。此所は夜に入りぬれば怖ろしき事あり、人の心を驚かすに、早く旅屋にかへり給へとて、送り出しに、又庭の内に歸るかと見えしが、空の氣色暗みかゝりて物凄まじ。彌二郎足早に行く／＼かへり見れば、庵はなくなりて、人の叫ぶ聲、煙に交はりて空に聞ゆ。先達云ふやう「こゝは富士の麓、地獄修羅の有樣、曇る夜は現はれ見ゆ。速く宿に歸り給へ」とて、彌二郎を伴れて我が宿にぞ歸りける。

四　守江の海中の亡魂

安芸国守江の浦の船上には、亡霊あらはれて人を悩ますことたびたびなり。往昔弘治元年九月に、右田
道[illegible]謀叛して、大内周防の国にしてあり、東国のために打まけ、治部少輔一味の兵[illegible]、ふ
ね[illegible]軍勢をもつて厳島に[illegible]る。毛利右馬頭入道は、安芸の城に陣をかまへて、吾[illegible]数十艘を浦上に漕出して、
押くだる勢やとがめらる。島津の舟にて暗き夜にうち渡る。番舟強くとがめしかば軍になり、薩摩
勢より炮烙火矢を投かけこそなひ、自ら味方の舟に誘はれければ、船中三十八人一同に焼け沈みけり。其
の中に中村新右衛門尉といふものの亡霊となり、船中往来の人を悩ますとて、宮家打[illegible]つてに見せこ
ろ、安芸国倉橋島のあたりにありし浪人、日向国佐土原といふところに住みけるが、故郷に帰るとて、この
浦舟にして既に落付き給ふて、さまざまの物語せられけるを、一同にきけばかかる嵐の中に来りて、人を悩
まし其はするぞやことと聞きければ、[illegible]日はしり[illegible]、往日この浦中の軍に、海に沈みて死にける中
村新右衛門といふ者なり。亡魂今も此所にさまよひて、浮きぬ沈みぬ苦しみを受くれども、我を弔ふ
者もなし。[illegible]の[illegible]しきに、今此の如き[illegible]に帰りて、苦しみを識すものなり。我が為に法事を営みて給へ」と
とて、夢も覚めければ、船中驚きて、安喜の湊に船をつけて、浦人に問ひければ、「誠に此日浦を通る
る旅人に[illegible]りて、[illegible]にあはるる事ありといふ。」さてはとて僧を請じて、三夜三日の法事を営み、[illegible]
に、[illegible]が弔軍の時、此の海にて沈みし者、[illegible]、男女入[illegible]ありて[illegible]をあぐ。あてて法

事の過ぐる前方に有り難や此の佛事の功德にて苦しみ少し緩やかになりける事よとて衆の鬼氣は睡りたり。それより後は亡魂も浮びぬらん、この頃は絶えて人にも寄りつきて、祟ひける沙汰もなし。

五　島村蟹

細川高國の家臣島村左馬助は、武備を心にかけし者なり、僅かなる過ちありて殺されたり。亡魂すでに蟹となり、攝州尼が崎に多く生き出でたり。世に島村蟹と名づく。餘所の蟹よりはおびたゞしくして甲の方に鎧多く見ゆ。さればにや顏の皺みたる人を、島村蟹のやうにと云へるは、此のことなりとかや。昔平氏の一門、長門國壇の浦にして海に沈みしその亡魂、悉く蟹となりて、長門國赤間が關に集まり、今の世までも多く有りけりと聞きつたへし。

横ばしる塩まの蟹の甲ふればあなさむけとやいそぎかくるゝ

と古き歌にも詠みけり。一念の迷ひあれば、如何なるものにも生まれかはる輪廻の有樣なりと、佛も說き置き給へり。治承の昔、源三位賴政謀反して、宇治川を隔てて源平の軍あり、討たれたる者の亡魂螢になりて、今の世までも年毎の四月五月には、平等院の前に、數千萬の螢集まりて、光を爭うて相鬪ふ。化して蟲類となると、賈誼が言葉容しからずや。

六　北條甚五郎出家

長尾謙信の家老北條丹後守は、越後國栃尾の城代として、大剛の名あり。其の弟甚五郎は、年いまだ二十餘りなり、兄に劣らぬ勇士なり。天正元年の春二月、心地わづらひ俄に死にけり。平生常とも法とも知らず、死するや直に閻魔王界に赴く。大王出でゝ宣はく、「汝世にありし時、いづれの功徳をかなせしや。罪科は山の如しといへども、壽の算いまだあり、宥して二たび人間にかへすべしさりながら汝が母すでに地獄にあり、呼び寄せて對面せさすべし、歸りなばよく跡をとぶらふべきなり。」とて、司録に仰せて召しけるに、眞にやせつかれたる有樣、見るにもあらぬを手械首枷を入れて、庭の面に引き据ゑたり。母は甚五郎を見て涙を流し、「我世にありし時は、人の色よき小袖を羨み、馬物具鎧太刀までもよくして與へ、和殿を世に立てて、嚴しく見ばやとのみ思ひくらし、佛法の事は外の事に聞きなし、空しくなりて頼るべき功徳も善根もあらばこそ。死しては直に地獄に赴き、劍の山を越え、銅の湯に突き入れられ、少時の間も苦しみの安らかなる事なし。汝は二度人間に歸ると聞く、わが跡よく〳〵弔へや。」と云ひもはてぬに怖ろしき獄卒、その母を引きたてて伴れてゆく〳〵泣き叫ぶ聲遙かに聞えしかば、甚五郎悲しさ身に餘りて、涙の落つる事雨の如し。閻王仰せられけるは

う。汝よく見て歸り、その跡とふことな忘るべからず、疾く／＼歸れ。」と仰せける所に、あまた／＼の鳥獸どもあつまりきたりて、甚五郎を目がけてかゝりけるを、閻王宣はく、「娑婆に歸らば、汝等が爲に功德を營み、皆人間に生るやうにすべし。早く赦して歸せや。」とあり。あまた／＼の鳥獸はみな退くに、赤く黑なる犬一つ殘り、甚五郎が衣をくひとめて放たず。「如何に。」と問ひ給ふに、應へて申すやう、「我が業因拙くして狗と生まれ、此の家に捕へられたり。甚五郎は軍の暇には、鵜鷹の遊びに日を送り、諸の獸に殺され、而て、さらば殺しもやらず、股の皮を剝ぎかけて、用ゐるに從ひて、切り截ぎて爪の間にせらる。その苦しみ事、心も言葉も絶えて、誰に訴ふべき頼りもなく、悲しき中に死にけるに、いつの世に忘るべき。その恨みを報ぜんためなり。」と云ふ。閻王きこしめし、ただちに、司命に仰せて錄し給ふ。「路にして忍の丈七とて、この程敵に討たれし勝業に進びたり。長七すでに甚五郎が首を抱へて、「我は只今地獄に赴くなり。我が父母に、一周弔ひて給はれ。」と言傳せしと屆けて給へ。」と云ふ。「いかに屆けにくるとも、印なくては實しからず。」と云ひければ、腰より一つの箱を取り出し、「これを印に。」とて、なく／＼別れけり。遂りける司命の教へけるやう、「誠ひ弔ひのため經を寫し像をつくるとも、非道に得たる金銀にて致しては、更に亡者の功德に成りがたし。その亡者の秘藏に思ひし物こそ、確かには屆け。」とぞ語りける。甚五郎道に進み、大きなる穴に行きかゝり、此の中

一篇つなと聞えて蘇り、忍が害傷でたりし寶は手にあり。その家に遺はしければ、二長七討たれしその亡骸を持出し時に、棺に入れて送りし物なり。網の結びなしとて、父母は泣く〳〵拝むて、葬送を致しけり。甚五郎は今、浪家の身となるほどこそ、つら〳〵打案ずる中に、弓矢執る身の習ひ、ひとたび世のみだれを後にせし咎は逃るゝに、君の爲には不忠となり、親の爲には家を失ふの不孝の上なり。只一時遁れしことは情なくも、世上の人にも笑はれ、はづかしめを受け、死後までも名をうたすなるべしや。今より出でゝ佛門に入るならば、或の報恩なりと物も迷ふ事、一つ、世の営みをも忘れ浪々はすれ、仕官出頭の身と成らばこそ、人も思ひ問ひ、君も恨ひ玉ふ物をやと、さまる時賞もなく、逆すもたゞ悲なり。専ら佛の心をも後にすべき、浪人となりて大事なれ、とかくの事を思ひ定めて、親を残して家を出でゝ、遁世なるたる修行者とこそ成りにける。

狗張子卷之一終

狗張子　卷之二

一　交野忠次郎發心

河内國かた野の里に、水崎忠次郎宣重ときこえしは、元は駿河國今川家にありしが、牢浪して河内に來り、交野のわたりに引きこもり、思ひかけず妻をかたらひて住みけり。本より武家の奉公人なれば、耕作商賣の所作もしらず、只然るべき仕を願ひて、軍陣に手がらをもあらはし、世に出て名をも取らばやとのみ思ひて明し暮すほどに、身上殊の外に貧しく、朝夕の煙を立てかねたり。或夜の曉、忠次郎眠りさめて、妻に語りけるは、「いかなる先世の報いにや、かかる貧しき身となり果て、わびしき目を見せはべる事、返す／＼も面目なき有樣なり。若し世にも出づるならば、又面白き世にも、逢瀬のあるべし」と語る。妻聞きて、「かかるわびしき所に來て、憂世を經たりとも、いかなる事のあるべしとも思はれず。營みとてすべき業もなし。かくて年月を送りて後は、道のかたはら細溝の中に斃れて、餓死するより外は有るべからず。さあては野原の末、往來の道筋に出でつゝ、手頃の者の行き過ぐるを窺ひ、打ち殺して剝ぎ取り、追ひたふして奪ひとり、我にもゆるやかなるを心やすくつけて給

いひとそ云ひける。忠次郎うち聞きて、我年頃は侍の道を立てゝ、正なき事は露ばかりもせじとこそ嗜みけれ、さりとりかゝるいぶしき中に、情をかけて深く契りしあひだなれば、其の別れんも悲しく、妻が言葉につきて思ひ立ちつゝ、夜の明くるを待ちかね、朝霧の紛れに刀を賜はりて、人離れ道を待ひ、二里ばかり行きける所に、年の程十七八かと覚えし女性の、小さき女の童に小袋を持たせてうち連れしを、前後を見るに人気もなし、刀をぬきてかけ出でつゝ、そのまゝ打ち殺し、二人の女の着物剥ぎ取り、小袋とともに持ちて我家に走り帰り、よき仕合致しぬとて妻に与へ、今年の程ぞ十七になりぬと見えたる、世にうつくしき女性なりけるぞや、如何なる卑の者の妻なるらん、いたはしきかな、かうゆゑしける哀れさよと云ふに、妻これを聞きながら、哀れとも思へる気色もなく、我はもとのあたりにゆきて、衣を並べつゝうれしげに笑ひながら、小袖につきたる血を洗ひける顔つき、心ねの怖ろしさ、鬼の如く思はれ、ありきたる中に疎みはてゝ、半時にてもわが妻とてそふべきものか、情なのむやと、これを菩提の種として、元結押し切り家を出で、足にまかせて諸国を修行して、三年に当る頃ほひ、大和国吉野に分けゆきて、日すでに暮れしかば、山本の里に宿を借らばやと思ひしに、道の辺に稀れなる茅舎の内に、燈火幽に見えしに、立ち寄りて戸を敲くに、内より若き女性の出でて、「誰人ぞ」と云ふ。「諸国修行の聖にて候、日の暮れたれば宿かし給へ」と云ふ。「易き程の事」と、衣を

あかし給へとて内に呼び入れたり。粟飯とり出でて、これにて旅の疲れを休め給へとて、我が身は持佛堂に打向ひ、念佛しける間に涙を流さふこと幾しきりなり。忠六郎入道此の有樣を見て、やうやう粟飯くひ果てて、持佛堂に參り、諸共に念佛しけるが、何となく物あはれに覺えて、そゞろに涙のおちけるを、念佛果てて後、主の法師と只二人、うち向ひ物語せしさま、一すぢに只今念佛のをりふしに、しきりに涙を落し給ふに、いかなる仔細の候やらんと問ひければ、主の法師こたへけるは。「語るにつけては悲しさの、かかる身になりても忘れがたきことの侍り。我は往日三河國日向寺の家人なりし、幼くして父におくれ、母方の祖父は有徳なりける故に、その家に養はれ、人となりて後、武家ちらのうき世の中なれば、只わが名跡をつぎて世を安くせよとて、近きあたり田宮の里に住ませたり、北條村より妻をむかへしを、幾程もなく盗人のために殺されて、悲しくも口惜しさ、今更にかぎりなし。その憤りの忘られず、餘りの事には彼の盗人の在所をきかば、たとひ虎ふす野邊、鯨寄る浦と云ふとも、只一人ゆきむかひ、妻の敵は討つべきものをと、別れを慕ふ涙さへ、少時が程も止まらず、袂のかわく隙もなし。かかる時に世をすてずば、生死の苦も覺束なく、逢ひの夢もさめがたかるべしと、浮世の中はこれまでなり、佛道に身を棄てて、果敢なき妻の菩提をも弔ひ、来生にはもろとも一つ蓮の契りをむすばんと思ひ定め、此の山元に籠りて、念佛して居はべり。今日は殊更に、別れ

し妻の三年に當るを思ひ出でて、佛に花香を奉り、空しき跡を弔ふ中に、

うらめしく又なつかしき月日かな別れ三年のけふと思へば

すつる身ながらも離れかねて、かく思ひつゞけはべり。そなたにも同じ世を背きし人なれば、道
縁ながら弔ひて給へ」とぞかきたりける。忠次入道つくづくと聞きて、

一年ふればわすれ草もや生ひぬらむ三年のけふと思はれもせぬ

此の歌を聞くにつけて、恥かしき事こそ侍れ、その女性を殺せし者はそれがしなり」とて、始終
の事共に語りて、我もこれゆゑ世をそむきて、諸國を廻る身の、とりわけ今宵此の庵に泊りしは、逢
ふの縁ありとはかやうの事なるべし。嬉しうはべり。その折からは、さこそ口惜しかりけめ、誠は我
なり、疾く〳〵首を打ちて、本望を遂げ給へ」と、首をのべてさしむかひけり。主の法師手を打ちて、
さよ今年三年目の命日には、妻の敵の首を手向けさせたまへと、佛にも祈りはべりしに、今宵し
もここに泊り來給へることも、其の志あるゆゑぞかし。今は讐ひの花しぼみ、妄念の雲晴れたり。
此の世にてはれたる讐を、いかでか菩提の道に入らん、御僧は妻より起ると、我の恐れさまれ、ふはこ
れにありし。今は恨みも殘りなく、よろこびの種となり、一味の雨の潤ひける九品の蓮の縁をむす
ぶ。一同に妻の菩提をとむらはしまして」とて、一しかの法師額をあはせて、歓喜の涙をこぼしけれ

の上は何かくだしのあるべき、しばらくこゝに留まり、念佛申してとぶらひ給へ」とて、十日計りは二人おなじく行ひしが、忠次入道暇乞して出でけり。後にその行くすゑをしらず。主の法師もそれより四年ののち、七日ばかり病みしを、あたりちかき村人、夜な〳〵來りて看病せしに、さのみは苦しき色もなく、後世の物語いたして、遂に臨終目出度く、念佛の息諸共に正念に往生す。人々とりまかなうて、塚に埋み標の木を植ゑて、男女あつまり念佛して、弔ひけるとかや。

二　死して二人となる

小田原城下の浦に、百姓の住みける一村あり、家中の侍も少々すみけり。北條早雲の時に、西岡又三郎とて、中間煩ひて死にけり。夕さり夜更けなば、野原に埋み納めんとて、傍輩ども集まりて、日の暮るゝを待ちける所に、見なれぬ男の來りて、人々には會釋もなく、死人の前に坐して、聲をかぎりに嘆きければ、哀れなるまでに聞えしかば、定めて近き親類又は親しき友なるべしと思ふところに、死したる屍俄におくと起き上る。此の人もおなじく立ちあがり、摑みあひ打ちあひけり。物をば云はずかなたこなたせしまゝ、集まりし人々は、大いに驚きながら、すべき樣なくして、戸をさしこめ出で退きけり。二人閉ぢ込められ、戸より内にて打ちあひつゝ、日の暮れがたにしづまりければ、人々

はなはだしく、二人おなじ枕に臥してあり。髪のたかさ、すがたかたち、顔の有様鬢鬚、その身に著たる衣服までも、すこしも違ることなし。常に馴れたる傍輩も、いづれをそれと見知るべからず。棺を同じく二人を一つにして、塚を築きて埋みけり。

三　武庫山の女仙

天正年中に、京都七條邊に、小野民部少輔とて、もとは然るべき人の末と聞えし、世におちぶれて京の住居も物うくして、津の國武庫の里にしたしき人を頼み、かしこにくだりて住みけり。寂しき田舍のすまひ、我と等しき友もなく、春の日のうらゝかなるにいざなはれて、心にまかせて武庫の山もとに到り、

見渡せばすゑのえ遠し武庫山の浦つたひして出づる舟人

と、打誦じて、谷一つ渡りて、あなたの茂みにさし入りければ、年の程二十餘りの女只獨り立ちてあり。花を訪ねて遊ぶにもあらず、薪を拾ふ賤の女とも見えず、身には木の葉をつゞりながらも、いやしからぬ有様、民部怪しく思ひて、近く歩み寄りつゝ、「君はいかなる人なれば、かかる山中にただひとり、おはすらん」と問ひければ、女打笑みて、「我はもとより此の山に、年月をかさねしものな

り、昔をかたりて聞かせまゐらせん。古、神功皇后は、高麗唐土新羅國を討ち從へ、此の日本に歸陣あり、弓箭甲冑兵仗、あらゆる武具を、此の山にうづめ給ひしによりて、武庫の山とは名づけられけり。その後天長の帝の御時に、第二の妃この山に入り給ひ、如意輪觀音の法を行ひ給ふ、故に如意の尼と申し奉りけり。こゝは辨財天の住所、廣田明神常に守り給ふ。白き龍に變じて現はれ、石となりし御形を殘し、なほ今も此の山にましませり」。空海和尚この所にして、如意寶珠の法を修せられしに、辨財天女現はれ給ひ、我此の山に留まりて、あらゆる貧人のために寶をあたへんと誓ひ給へり。如意の尼すでに伽藍を建立し如意輪の陀羅尼を誦し、空海和尚を請じて、秘密灌頂を享け給へり。此の年天下大いに日旱せしかば、守敏空海兩人の祈り有りけるに、如意尼素より持ち給ひし浦島子が箱を、空海これを借りて大祕法を行ひ、雨降りて天下をうるほし給ひけり。此の山の上に大きなる櫻木有りて、朝な夕なには光さして輝きけるを、空海に仰せて、此の木を伐つて佛像をつくり、浦島子が箱をば、常の中につくり込め給ふ。御后此の山に入り給ひし御時、二人の女官を召しつれ給ふ。一人はこれ從四位上和氣眞綱の娘眞子と云ひ、今一人は相馬將門の娘將子と云ふ、今の我が身これなり。如意尼に仕へ奉ること、露ばかりも怠りなし。我は常に瀧の水をくみて閼伽の供へとす。ある時瀧の水のもとに、いとけなき兒の未だ二歳にも足らざるやうにて、色白くうつくしきが這ひ出でて、我を

を見て嬉しげに笑ひけるを、いとほしく愛して、時のうつりて遅く帰りしかば、『いかに今日は遅かりし』と仰せ給ふ言。かうかうの事侍りて』と申す。『その子抱きて帰りて見せよ』と仰せけるを、又麓の下にゆきければ、いたいけらしく匍ひ出でて笑ひけるを、かき抱きて帰るに、門に入りしかば、此の子怪しく成りて、枯木の根の如くにて、重く覚えしを、如意尼近く寄せて御覧じければ、幾世へたりともしらず、大きなる茯苓と云ふものなりけり。是れは往昔聞き及びし仙人の薬なり。これを食すれば、白昼に天に昇るとなり、限りなき命を延ぶる薬なり。直に蒸して奉れ』とあり。柴三束を焼きつくしてすゝめ奉る。みづからきこしめし、二人の女官にも賜はり、皆のこりなく喰ひつくし給ふ。それより心はれやかに、身も涼しく日を重ねて、如意の尼と姫君は天に上り給ふ。我は心すこしおくれて、つれても昇り得ず、此の山にとゞまり、松の葉を食とし、数百年を送りて、夏とても熱からず、冬もまた寒からず、谷峯を走れども苦しくもなし、身はかろく形は若うて、さて今は如何なる御治め給ふ御代にてはべるやと問ふに、民部は「かかる奇特の物語、またなき御事なり。天皇の年よりこのかた、御代は百人あらたまり、数百歳を経つる間に、人王は百七代にあたらせ給ふ。年號は天正と申し侍り、世の中乱れてしばらくも静かならず。国さわぎ民くるしみ、上下ともに穏かならねば、たゞ浮雲のごとし。かゝる奥ましのありさま、まことの地仙にてあはしけり」とて背を地に

つけて飛ゐけるあひだに、女仙は行きがたなく失せにけり。民部不思議に思ひ、麓のさとに入りて、ただ今此の山中にて、かかる人に逢ひけり、年頃も此の人に行き逢ひたる例ありやとたづねければ、主大きに驚きて、「されば此の家の祖父、八十有餘なりしが、昔若かりしときに、柴刈とて山に入りしかば、何とはしらず十餘りの女の、顔うるはしくつややかなるが、身には木の葉をつづりかさね、岩の上にたちてありしを、あれはといふ聲を聞きて、飛ぶともなく走るともなく、嶺にのぼりて失せ去りぬ」と語られし。狐狸の化けたるにや」といはれしを聞き置き侍り。それより後には、見たる人もはべらず」とぞいひける。民部奇特の事をも見つる物かなと、思ひつづけて歸りぬ。

四　原隼人佐鬼胎

原加賀守は武田譜代の家臣、世にかくれなき武勇の侍大將なり。秋山伯耆守が娘を妻としてそひけるに、久しく子といふ者もなかりしに、或時ただならず煩ひ出しけるを、醫師を頼みて、さまざまに療治すれども驗なし。ある人來りて「是れは正しく懷妊なり、さのみに藥を與ふるに及ばず」と云ひければ、家は悦出たき事なりとて、月の滿つるを待ちけるに、既に十月になれども子も生まれず。病いよいよ重くなり、十六月にあたりて、日遂に果敢なくなりたり。惠林寺に送りて、塚の主とぞな

しける。其の夜しも月あかかりけるに、塚の内に小兒の啼く聲聞えしかば、怪しみて塚を發きけれは、死したる子の生まれて、母の屍に纏りつきて啼きけるを、父の許へ云ひ遣はしければ、急ぎむかへとり、乳母めのとをつけて生立てしに、逞しく生ひたち、ほどなく成人して、器量骨柄人なみならず、心根賢しく利根なり。年十五より初陣して、度々の軍に手がらをあらはしければ、信玄も祕藏の者にぞ思はれける。或時信玄仰せけるは、「汝が父加賀守は、前代從五位下左京大夫信虎公の時より、夫婦の内まれ忠節の者にたらず、武田譜代の侍にて、かたがた心やすく思ふなり。汝も其の子として父が遺體に生まれしか、常に自分の働きに怠る事なかれ。武道の功者に近づき、よき事を聞き習ふべし。智恵のすすむ事少なければ、物知る事博かるべき。その上には國法をよく守るべし。國法軍法を背く者は愚痴不忠の科人なり。主君の御蔭にて、命をつなぎ妻子を育み、心安く身をたてながら、其の家の法をそむき、御恩を報ずる志を忘れ、わたくしの遺恨をもつて身命を打果すは、主君の御用にもたたず、其國家の盜人ならずや。かかる不覺人は、生まれてあれども義理をしらず、恥をも知らぬ故に、大事の場に逃げくづして、味方の負となるものなり。先祖親祖父は誰しとても、子孫までもかくのごとくにはあらず、自分の行跡よき働きなくば、世に名は聞ゆべからず。他人の作法、父には[illegible]の年に[illegible]一心を、兎に角に心を正直に、家を治め百姓をあはれみ、忠節を専とすべし、ことこそ

宣ひける。然るに隼人佐は、武勇才智遠慮分別首尾相應の武士なり、殊更に自國他家に比類なき一能あり、父はもと甲斐國高畠と云ふ所の人なり、武邊に名だかく、方向の陣取を得ものにて、築のたうといふ事を仕いだし、たび／＼勝利をあらはせり。子息隼人佐におかひても、それ故は何にても、弓矢の道に一つの得物あるやうに努めて嗜むべし。」と云ひ置きけり。されば此の隼人佐は、他國に行きても、たづきもしらぬ山中の道、未だ踏み見ぬ所なりとも、見つもりして踏み分くる事、陣どり合戦の場、山野の見わけ、更に其の國の案内者を藉らずして、隼人が善きと申す地は、諸卒大小上下心よく疑ひなく、皆したがひゆくに違ふ所なし。昔平家の一門都を落ちて津の國一の谷の城に籠りし時、九郎義經攻め下り、鵯越におもむき、「此の山中に案内知りたる者やある。」と宣ひしかば、武藏國の住人平山武者所すゝみ出で、「季重よく存じ候ふ。」と申す。土肥畠山とりなしに、「武藏國の人始めて此の山を通り、津の國播磨の境なる山の案内、いかでか知るべき。」と笑ひしに、平山云ふやう、「鹿のつく山は獵師か知り、鳥のつく野は鷹師が知り、魚の寄る浦は漁人の知るなり。芳野泊瀬の花の色、須磨や明石の月影は、その里人は知らねども、數寄ものは知るならひなり。色をも香をも知る人ぞ知ると云へり。桃李ものいはず、下おのづから蹊を爲すとかや。敵をまねく城のうち、軍をこめたる山中には、剛の者こそ案内者よ」とて、鞭をあげて先陣にすゝみけりと云へり。其の道に心を入れて、よく／＼工夫いたさば、な

か至らざらん。昔西土胡國の路に、管仲が老馬を先に立て歸りしは、例なき事にもあらず。天正八年庚辰九月下旬に、武田四郎勝頼東上野に出でて運見せられけるに、上州由良の城より使を…たる事に、武田方利根川にて戦ひ、城は未だ取りはせざりし、人數はおほく討たれたりし中にも侍大將原隼人佐は、敵兵七八人におかうされ、防ぎしに、小道に足を踏みはづし、頂より眉間をかけて切りつけられ、深手おひければ打負されしを、當淵庄左衛門肩に引つかけ、城外に出でて郎等に渡し、甲府に歸りて養生しけれども、世には沙汰ありけれども、眞には隼人佐、心に悔むことあり。武田の家運の衰へを見しより、このかた、家老諸侍みな死に失せて、隼人佐僅かに只獨り生き残り居て…惜、勝頼大敗の…に押されし、武田の家運末になりし有様、…遠きにある者を知りて、遠く遊行し、昔を思ひ、世を厭ひ、山ふかくわけ入りつゝ、仙術の道を尋ね、長生の方を求め、遂に仙に逢ひ、その術を習ひ、…其の後山人に…て、武田の家の亡びたりしことを聞きて、憂へたる色ふかく、これは武田原隼人佐昌勝といはれし者なり、本は天上にありけるを、少しあやまることありて下界に流され、武田の家にしばらく身をかくして居たりしを、期終りて、今は天上に歸りしなりとて、足元より雲を起し、まつ空に昇ると見えしが、隱々として失せにけり。

五　形見の山吹

都の南泉河の邊に、菅野喜内とて、色好みける人ありき。文祿年中のことにや、春も末になりゆけば、あだに散りゆく花の名殘、いづくにか又殘れる梢もありやなしやと、あらぬ太山を思ひ、青葉まじりの遲櫻もあらましかば、初花よりも猶めづらかならんものをと、住家をうかれ出で瓶の原鹿瀨山をうち過ぐる。

都出でてけふみかの原泉河川風さむし衣かせ山

と古き歌まで思ひつゞけて、木津の里に行きかゝる。年のほど十七八と覺しき女の、簾の間よりさしのぞきける顏ばせ、昔女三の宮、手飼ひの猫のつなにひかれて、御簾のかげよりのぞき給ひ、柏木の衛門も僅かに見初めまゐらせける、たがひの心ぞ通ひける例も、かくこそありつらめ。家居も流石に故ある人の住みわたりぬらん、軒端は物古りたりけれども、賤しからぬ有樣、喜内はこれを見そめしより、心亂れ魂浮れ、近きあたりに立ち寄りて、「あの軒端古りたる家は、誰人の住みける所ぞ」と問へば、「大内義隆の牢人高梨三郎左衛門とて、今は身まかりて後家と娘と只二人、女の童を召しつかうて、幽なる住居、御いとほしく侍る」と語る。喜内聞きて娘の名を問へば、「彌子と申して今年は十

ん なり」と云ふ。喜内は堪へかねて、一筆をかつゝむべき、かりそめに見初めし俤、我が身をはなれず思ひみだれ侍り。せめて此の事を露許り知らせしたゞ、しからば何事の御恩といふとも、これには勝らじ」と云ひければ、主の妻元は京の人なるが、情ふかく頼まれ、「御文参らせ給へ、届けて奉らん」と云ふに、喜内うれしさ限りもなく、肌に着たる白き小袖の衣裏をときて、書きしたゝめけるに、中々言葉はなくて、

　聞にかく思ひそめしもこれもはや心に忍ぶもぢずりの跡

その夕暮、主の妻行きて物がたりすとて、私かに文をわたしけり。彌子袂に入れて閨にいりつゝ、此の文を見るに、荻の葉につたふ風の便り、音聲のすゑいかならん、露のかごとにいひしらぬ文も、艶かしきをいかゞせんと、いと物わびしく、あはれなる方に覺えければこそ、吹きもさだめぬ浦風に、靡き果つべき煙の末も、遂にはうき名にたつべしと、心強きを關守になして過ぐるほどに、喜内は宿に歸りながら、いつとなく寢もやらで夜を明し、起きもせで日をくらし、返しやありやと待ち侘れども、よしや戀ひいなせ顏、いなせの返しもなかりしかば、主の妻私かに行きて、御返しは如何にと責めければ、彌子「恥かしながら、

　わきのたゞ詠めし夕煙思ひきえなむとさへやかましやは

と云ひければ、かう／＼つれなくおはすと云ひつかはしければ、喜内いよ／＼焦れまさりて、

戀しなば煙をせめてあまのすむ里のしるべと思ひたにしれ

今はこの世のかぎり、たとひ空しくなりゆくとも、心は君があたりをたち離れじなんど、おそろしきまで搔口說きて、

面影はをしへし宿にさき立ちてこたへぬ風の松にふく聲

只情なき御心に思ひ碎かれて、音にたてゝ啼く蟲のたぐひまで、云ひしらぬ文の數、千束にあまる程に成りければ、彌子も哀れと思ふなさけの色深くうち靡れて、親しさければ、あづまぢや佐野のふなはしとりのかやは壞へては人の戀ひわたるべきと、思ひしつのる有樣なりし、さてかくぞ詠みける、

世々かけて契るまでこそかたからめ命のうちにかはらずもがな

と書きてつかはしければ、喜內この歌を見て限りなくよろこび、その夜を定めて、主の妻に案內せさせ、垣のひまより忍び入りて、障子をひらきければ、一間なる所にともし火かすかに、ものはゆくうちまえ居たるにかたらひよりて、日頃の物思ひ、心を碎きけることどもより、行末までの契りをかたるに、彌子は言葉すくなう聞えて、

ことの葉はたゞ情にもありなまし見えぬ心のおくはしられず

とこそ思ひけめ、室内ふかく暮して、

おいそめし後の心の闇もしれむくしの道の絶えしとこそ思ふ

かうそめにたれにしれば、人目忍ぶの路をかけて行き通ひしに、はかなき世のならひ、嫩子が母なれまの病して、程しく枕の上にあり、参しきいふばかりなく、うちこもりけるに、霜に消れ行く草の上に置ふの命とるとぞ、室内も又は居が畔におひけるや、幽閉未免公に召されて赴くとて、室内も陪ひ帝て都會に行きたれば、程ほどもなく帰りかけは、吉野山にして性害せられ給ふ。このそかきに玉章の申し背づれもうち絶えしかば、

我や憂き人やはつらき中川の水の流れも絶えはてにけり

かく思ひつゞけるうちに年もくれ、春過ぎ夏も経たける程に、物思ひの重なる故にや、嫩子いとたく心地痛みて、遂に世のなく成りたり。今は此の世の名残も惜しすくなくなりし程に、室内のひたて夜あこすたり、かされこなて言葉もいふ事ども、こあらいかきりにて、

嫩子のうちわれはたとれにし程みえはいたらぬ雲となりなん

とよみて遂に息たえぬ。嫩子伏しぬかれ涙とともに詠めて、

いにしへの跡ぞはかなき高野山なかいの身に残る身の世

と詠みて、そのまゝ絶え入りて、遂に空しく成りたり。あたりの人痛はしがりて、近き野邊に埋みて塚の主とぞ爲したる。住みあらしたる家なりければ、柱もかたぶき軒もりて、淺ましき崩れ屋となり果てけり。かくて三年の春秋を送りむかへて、喜內は泉川に立ち歸り、主の妻はいかにと尋ねしに、此のほど身まかり侍りきといふ。彌子が家にゆきて見れば、軒くづれ柱倒れ、草のみ生ひしげり、住みける人の跡もなし。あたりに立ち寄りて問ひければ、日頃の有樣殘りなく語るに、あまりのかなしさに、その邊一間のうつぶれたる壁を引き除けしに、棹にかけたる黄染の小袖の、竿にかけながら地に墜ちて、朽ちたる隙より山吹の生ひ出で、恨み貌なる花の色の、ところどころに咲きたるを見るに、朽ちても黄の色をわすれぬ形見の花と思はれて、喜內はいとゞ悲しく、血の涙を流して泣きけれども、くちなし色の花の名殘は、應ふることもなし。さてもなき世の有樣、かくぞ思ひつゞけける、

　山吹の花こそいはぬ色ならめもとの宿をもなくなくぞとふ

猶も心の置きどころなく、墓に詣でて見めぐれば、人の通ふ道とも覺えず。山かげなれば日すでに暮れかゝるに、野寺の鐘入相の聲も心ぼそく、萌え出づる草葉も袖も露滋く、吹きおくる風も身にしみて、涙と諸共に念佛申して、

　埋もれしその面影はありながら塚には草のはや茂りぬる

かゝる世の中のあだに消えなば、今もし思ひこりずば、又いつの時をか待つべき、世にしたがへば望みあり、叶はねば怨みあり、かりの色にまどひて、執心ふかく思ひみだれては、中々輪廻の妄念となるべし、それなきて行には、悲しかるべき弾子にも、来世にはさりともと、一つ蓮の縁を結ぶと頼みおりし、宿に帰りて家の柱に、

とけきつゝはかなき世の中のわが身世をたゞめぐるべき心ちこそせね

とかくつ[illegible]て、朝疾く出づると見えしが、遁世して行方なく失せにけり

狗張子卷之七 終

[illegible]卷之一

狗張子　卷之二

一　伊原新三郎蛇酒を飲む

元龜年中に伊原新三郎といふ者、久しく牢浪して、夜日宮へ出でて、三州岡崎の原に出でたり。夏の日の暑氣甚しきに、前に路する輩の蹄すゞしくして、衣襟に汗みちぬる程に、日すでに山の端にかたぶき、風やはらかに吹きおこる折から、道のほとりに林あり、木の間より見れば、あたらしく作れる家居の五六間見えたり。餅酒やあきなふ店とおぼしく、立ち寄りて休まんとするに、年のほど十五六なる娘の、顏うつくしきが立ち出で、「爰は武家がたの出でて遊びし給ふ所なり、暫く休らうて御通りあれかし」といふ。言葉つき愛らしく、家に入りたれば又餘の人もなし。新三郎戲れいひければ、此の娘はしたなくもいはず、「父も兄も内にはあらず、何か憚るべき」とて、いと懷かしげになれかゝるを、新三郎戲れて、燈火ともすほどに暮れたり。「さだめていまだ何をも召さで、疲れたまふらん」とて、餅とり出してすゝめけり。「酒はなきか」といへば、「良き酒あり」とて、奥に入りて一樽とりそへて出だしけるを、新三郎もとより飲みなのみければ、娘と共に二つ三つ飲むに、無くなりければ、また取りに

たるけるを、甚三郎も起出して、奥の方を見るに、大きなる蛇を狩りまけし、刀を抜てその蛇を腹を割きて、血の滴るを傍にうけて、何やらん唱へて、席に蒔しけり。甚三郎心怒び、恐ろしくなり、急ぎ戸を出して走る。番頭より追ひかけて連りに呼はふ。東の方に聲あれはこて、一あたる物を取り追しけるを、さぞふ。番頭甚三郎をおとへれば、その長さ一丈許りなるもの追つて来る。已に林の中に入りけれど、何とも信しければ、音も高く鳴くなるもの、木の本よりはなるゝ。林の外に人の聲ありて、この青柱の音を聞き迎ひしとは、明日は我も大きなる蛇を受くべし、それ迄なりとて戸ぼけへ、甚三郎も〳〵怖ろしくて、漸うに町外れまでかけりきて、家の戸を敲て、戸をあけて内に入らしかば、番頭は皆もて待ちければ、しばらくありて、かう〳〵の事ありしとかたれば、主おどろきて、この林の邊には、未だ人をなす家居もなし、されども妖物にあうて、恐ろしき目を見たるものは遠き昔の人は、所々などにかくれて、夜もすがら帰られ、明けて後には再びいたりし人もあり、甚三郎は早く逃れて、ことなきこそ目出たけれ、といふ。隣りの不思議さに、甚三郎宿に歸りて、人數多語らひ、その邊既にし所に行きて見るに、家もなく草茫々として、人氣稀なる野原のみ、只荒草を落して、鶏鳴き出し市に、草に覆はれて長さ二尺許りの蛇子の、手足がし頭け損じたるもあり、これを籠に取り行くとせし時に、その長さ二尺許りなる色黒き蛇、更に頭の毛を押付けて

死してありし。それより東のかたには、人の骸骨一具あり、肉は雨露に曝されて、手足筋骨はつゞきて、白き車輪の如し。皆悉く打ちくだきて、薪をつみて焼きすて、堀の水にしづめけり。荊三郎は日頃中風の氣あり、癩がゝいて侍りしが、蛇酒を飲みける故にや、病は根をぬきて癒えけるとぞ。

二　猪熊の神子

元和の末の年、京都四條猪熊に、年老いたる神子あり、一人の娘を持ちたり。神道の事に露ばかりもしらず、神の御託宣とて、あらぬことを偽り物をとり、珠數をひく〳〵と云ふ事をいたし、占兆を云ひ、愚かなる女童を誑し、雨ふり風の吹くにつけても、神の御告なりとて人をおどしすゝめ、祈禱をさせて、小袖帯などまでも誑し取り、佛法の事は耳にも聞きいれず。とかくして世をわたること、すでに七十餘年を送り迎へ、娘は位おはする家に宮づかへをさせて。此の神子殊の外に老い衰へ、今は世の中の事もあらで心細く、なかなか動作も苦しく覺え、いくほどもなき命も頼みなく、來世のことも心許なし。されば迚て今までなせし業も、打ちすてがたく思ひ歎きつゝ、北野の神日参に参りて、我が身此の世の生業は、すぎはひのために人をたぶらかし、利得を望み、諂ひいつはり、正直の道にそむくこと、神の恵み佛の教へに外れたるものなり。只願はくは死して後の恥を隠し、魂を

たすけて給はれ、と願ひ奉る。最の心情にとはれて、御のおつなことを申の願し。それよりは深あれば、常に御ごとに拝み奉りけり。月日重なりて、御子彼に嘗廻り、此の世の願ひと思ひければ、彼の寺へ度々詣しけり。年頃に御子に謁といはれんには、人もおとしめ給わんは口惜しかるべしと、草の有様とかく聞えて、寄りれのたまりを被えてに忍びけるを、此の度は生身の終り、其の前に戦にたれば、人には言はで、はやく御り給へといひ遣はす。嫁おどろきて、いそぎ行きければ、限なきに見ゆ。言ひ含みを得しけに見あまり、ものとゝ語る人もなし。辛いまだわかき顔なり、かかること聞何にさへ打罪たなく、只涙を流みてよそれい。嫁そんなどと日過ごけれども、家居とぼしき嫁なれば、衣食を問ひにてはすべきなし。日ころ夜に纏めて、貯を土倉因五六条りて、「これは朝日寺にて、常に見なれたる人をも、「死に行は此を隠してたべ」と深く頼みけるまゝ来れるなり」とて、甲斐甲斐しく遠言ひ、処を用意して野を納め、阿彌陀仏に行きて大事にし、「此の人の事来世も心安くぞほるべし。供養としく頼みまひ奉らせん」とありしかば、嫁悲しき中にも有り難く、やがて朝寺に詣出にて、「御名は何と申すぞ」と問ひ奉れば、二朝日寺の正觀音と尊ねよ」とて出て行き帰り給ふ。白き御衣に着給ひたりと、一とも奉らせたり。次の日に成りて朝日寺に参りて尋ねしかども、この寺にさる人の侍はずと答へたれ、怪しく思ひながら、堂中に参りて拝み奉れば、昨日ま

ひらきし高貞は、師直うたれしのちまで、御頭の上に香合はのせておはしましけり。妻これををがみ奉るに、有り難きかたじけなさ、此の御本尊すでに母を葬り給ひし事は疑ひなし、来世もかならず救ひ給はん、現世後生ともに、斯く頼み給はぬ大慈大悲の御誓ひかなと、感喜の涙おき所なし。かくて下向の後、常に歩みをはこびて、母の菩提を祈り奉りしに、娘また良き幸ひありて、和泉の境にてたゞ然るべき人の妻となり、子供数多まうけて、家栄えけり。

三　甲府の亡霊

武田勝頼は、織田信長公に没落せられ、其跡は一片の野原となり、草のみ生ひ茂り、狸の臥所、狐の住家となりたり。そのあたりには、百姓の家所々に立ちたれども、昔にもあらずさびわたりて、ものすさまじき有様なり。折々は怪しき事も有りて、人をおどろかし侍るとかや。諸国修業の僧行雲房とて、もとは竹田の人なり、世を厭うて家を出でつゝ、諸国をめぐりけれども、所に閑を求め、遂には知音もなくて、心安く往来も成りがたし。此の甲府にめぐり来て、日の暮れければ、怪しの茅屋に宿を借りけるに、主の云ひけるやう、旅の僧に宿をかし奉らんはいとやすし、夜更けて怪しき事のあり、それだに苦しかるまじくば、入りて泊り給へかしと云ふ。行脚聞きて、本より棄つる身なり

ひ、たとひ命は失はれ侍るとても、何かくるしかるべき。宿なき野のすゑ、山路のあひだには、岩根木の本古き社の傍にも、一夜をあかすこと多し。ましてをりおはすには、不足なしとて内に入りければ、亭の奥、薦の上に置きて、粟飯したゝめて寝けり。松の火をあかしに點し、木の代わとし、さて物語するやう、「其日は由々しき城にて榮華きびしく、堀の外には諸侍の屋敷軒をならべて建ちつゞき、にぎやかなりし所なりけるを、今は沒落して、かゝる淺ましき賤が伏屋のみ、わづかにすみわたるばかりなり。往昔の人の執心殘りて、あやしき事のはべるなり、おどろき給ふな」とこそ語りける。かくて夜も更けければ、主は内に入りて、好雲只偏に念佛し心をすまして、臥しけり。かかる所に一人の女、年のほど十七八と見えしが、枕元の障子をすこしひらき、内に入りて立ちたり。顔うつくしく、こぼれかゝる鬢のあたり、その膚は雪にあらそひ、すこしうち笑みて、「秋の空いと静かに、閨の外さびし、夜もすがら月のもとに吟じ、更けゆくまゝに風さえまさりて、閨の葉もふれわけがたく成るまゝに、此の夜を朗側にあかしかねつゝ、これまで参りぬ。」とて、

庭の蓬も露も我が身の上なればほさぬ袂だに月やどるらむ

とうち詠めて、「いかにお僧は、夢もさめ給はぬや」と言ふに、好雲物をも言はざりしかば、女又言ふやう、「斯く申すも、二の瞳か苦患も悲しく、消えゆく月の影も悲しきに、涙一つ浸みて、旅の心をも、

などさのみはやゝとそゝのかせども、更にものをも云はず。丈夫いふやう「こそのゑにつらくくわたし色の、絶えて何をも宣はぬぞ。たとへば戀路の闇に迷ふ人の、まだ下紐のとけぬにも、また一言葉は聞ゆるぞかし、いかにとかくのいらへもなくておはすらん。」

いかにかく問へどこたへぬくちなしの花も染むれば色に出づるを

丈夫うちあげて詠ずる詞に、

黄帝上天時　鼎湖元在茲
七十二玉質　化作黄金貲」

好雪聞きながら、心にもかけず物をも云はでゐしかば、丈夫座を立ちて歸ると見れば、形は跡なく消え失せたり。されば好雪が心を引きて、亂るゝ思ひあらんとせし所なり。後の詩の意は、昔黄帝は鼎湖といふところにして、鼎に乘りて天に昇り給ひしに、七十二人の臣妾は、その身生きながら化して、黄金の寶となれりしを、地中に埋まれりしと云ふ事なり。これは此の塚の跡に、黄金を埋み置かれしを、今我に心をうつし賜はば、その有所をしらせ侍らんと云ふ心ばへなり。人の心を亂す物は、色と財と二つにあり、好雪これを遁れて、よく治めたるゆゑに、何の禍にもあてられざることこそ有り難けれ。今は心安しと思ふところに、夜すでに丑三ばかりになりしかば、月も漸うかたぶくころ、庭

の頭ふとく眼ひかり、そのたけ九尺ばかりの男、その手に[illegible]の矢を持ちて、[illegible]の障子をあけなげて引きあけて、内に入らんとす。[illegible]おくと起きて、手前に置きたる弓を取りて、ここぞと射ければ、眼にあたると見えし、[illegible]に失せにけり。[illegible]火をともし、庭に出でて見ければ、庭の[illegible]事もなし。夜もやうやうあけがたになりぬ。[illegible]雲も霧だつ[illegible]にけり。後にその[illegible]所なし。

四　隅田宮内卿が家の怪異

人の家のほろびんとては、必ず怪しきことのありと云ふ。これとても心をうごかさぬには、かへりて吉き事ともなるものなり。禅に[illegible]時によりて[illegible]は、[illegible]十五年の春に、武田[illegible]をほろぼし、信長公小田原の城に寄せし[illegible]、[illegible]大[illegible]、[illegible]ほしける文功の者たちも[illegible]の時に破れけん故にや、よろづ心にかなはず。かかる世の中にいつまであるでも、たゞ[illegible]有様に[illegible]、[illegible]とて[illegible]引き[illegible]に、家の内にありしその[illegible]、その[illegible]、[illegible]の[illegible]物は、[illegible]ひけり。内に召しつかはるゝ者ど

も、若し宮内卿の事をかたれば、空より誡めて、汝等主君のこと語りはべらば、宮内に告げて、世のおきめにせさすべし。」といふ。これに因りて善悪更に沙汰する事をとゞめたり。夫婦物語して、この化物の事を語れば、「いかに我が上の事を云ふぞや、あゝくいはゞ家のため禍になるべし。」と、其の聲をかしく打ちならして聞ゆ。朝夕とり扱ふ道具衣類、今までありと見るも忽ちになくなり、家うちに尋ねても行きがたなし。とばかりすれば目の前にあり。家うち上下これに倦んじて、山伏をやとひて祈禱をさするに、符を張れば片端よりまくり捨て、盛物をとゝのへて壇をかざれば、引きくづしけるほどに、山伏腹をたてゝ、いらたかを押しもみ、神呪を唱へ印をむすべば、その手の指とぢつきてはなれず。此の上はとて山伏は出でて去にけり。神子を頼みて梓にかくれども、如何なる者とも名乗らず、弓の弦を打ちきり／＼、空のあひだに笑ひける聲聞えて、その答なし。さらばとて、巫を頼みて祈らするに、何とはしらず、巫の後つめたくおぼえて取り出せば、大きなる木枕をさし入れたるなり。祝詞を唱へて御幣をふりたて祈りければ、妖物屋の梁にのぼりて云ひけるやう、「汝等我をうるさがりて、あらぬ者を呼び寄せ、祈禱の有様烏滸がましや、その儀ならば、唯今此の家をくづさん。」とて、梁の上鋸にて挽き切るやうに聞えて、夜に入りてます／＼はげしかりければ、火をともして梁木のあたりを見すれば、火を吹きけし、いよ／＼つよく挽き切る聲あり。家内悉く外に出しつゝ、

霊に火をともして見れば、果は元のごとくにして、その跡もなし。妖物手を打ちて笑ひけりと、貴き僧を請じて経誦みつゝ、家に五辛をとゞめられしかば、妖物は静まりしかども、これや家のさとしなりけん、宮内卿は心そゞろにはやり出でゝ、笛吹峠の軍に討死して、断絶えにけり。

五　大内義隆の歌

大内義隆は、其の家百済の琳聖太子の御時より始まり、周防国山口といふところに城郭を構へ、中国の大名となりて富貴にふけりしかば、従二位左京大夫に補せられけるを、いたく奢りて人に悪まされ、政道軽くなり、酒色の道に耽りて、老臣陶尾張守に国を奪はれ、二十四代の家系を失ひ、生害せられけるが、世の盛りなりし時に、京都より雅やかの人々を数多呼び下し、花の春紅葉の秋、雪のあした月のゆふべ、歌詠み、詩作り、酒宴遊興に隙なく侍りけるに、忽ちに滅び給ひける事と、心ある人はいたはしく思はぬはなし。その頃義隆忍びて通ふ女房の許へ、文をかきて遣はされしを、その使聞きあやまりて、本御臺の御方にもちて参りつゝさしあげけるに、御臺此の文を見て、義隆の通はれける女房の許へかく詠みてやりける、

楓わかき行末かけてかはらじと我にもいひし人のことの葉

父義賢の御方へ、

　おもふことふたつありその濱千鳥ふみたがへたる跡とこそみれ

義隆此の歌を見て、御臺の心のうち大きに恥かしく、その使をば敢なく手討にせられ、それよりして御臺のかたへ通路を切り給ひしが、すでに沒落の時は伴ひて、泣く泣く城を迯出でられけるが、頼む方なく、義隆以下主從十一人一同に腹切りて、大内家たちまちにほろびしかば、御臺をはじめて近く召しつかはれし女房、たがひに刺しちがへて重なりふしける有樣、哀れなりしことどもなり。暫しが程は、死にほろびし深川の大寧寺の内に、夜ごとに女の聲にて泣きければ、寺の僧衆無遮の法會を行ひ、經よみて弔ひしかば、その泣きごゑも止まりけり。

六　深川左近の亡靈

左京大夫大内義隆の家臣黒川市左衞門尉俊昌は、大力武勇の侍なり。山口の城外にありて、つらつら思ふに、世の人死しては二たび聞き通はすべき便りなし。前に空しく成りたる者歸り來りて、生まれ所をも語り、吉凶をもしらせなば、さりて恨みも有るまじきにと惟ひ居りけるを、その傍輩に深川左近と云ふものあり、「我も内々は此のうたがひあり、來世の事はありやなしや、何れさきだちたら

ぬ者、かならず来りて告げしらせ侍らん」と契約して、年月を経るあひだに、左近病して先に死したり。数日を過ぐる所に、黒川たゞひとり坐して書院にあり。日すでに暮れはてて、物さびしかりしかば、燈火とらせ、書見てありし所に、庭の面に跡ふむ音して、「黒川殿宿にや、家の内静かなる」といふをきけば、まさしく深川が聲なり。「あな珍らしや深川殿、ここに」と云ふに、「燈火を消し給へ、近く参りて物語せん」といふ。黒川燈火を吹き消したれば、深川内に入りて、過ぎにしことども語る。その物語つゞき、深川が世に有りし時に少しも替らず。「さて後世の事を聞かばや」といへば、「後世はある事ども、罪ふかければ地獄に堕され、次に深きは餓鬼道に到り、罪障のふかき浅きに差別ありて、よきは畜生に生まるゝもあり。いづれも少しなれども、罪科の報いなしと思ひ給ふな。我より道に到まかりし者、修羅の苦にうかるゝもあり、又人間に帰るもあり、善悪の理露ばかりも違ふことなし」とかたる間に、急に打ぬれてきたなき匂ひの座中に薫じければ、黒川怪しみて、くらまぎれにうち挿へて、深川が身に手のあたりければ、殊の外に冷く覚えたり。亡霊ならばいかなる形はあるぞ、しかも妖物の所為なるべしと思ひ、心を静めて猶おかく居よりて、手をもつて押しうごかすに、おほかた重し。既にして深川は、「今は暇申して帰らん」と云ふ。「平に留まり給へ」といふに、頻りに帰らんといふ。漸く曙に及ぶ。火を點して見れば、深川にはあらで、その長七尺ば

かいなる大の夫の屍なり。死して久しく日數を經たり。その上暑天にあたれりと見えて、股のあたりは爛れたり、臭きこといふばかりなし。その屍をば遠き野原にすてたり。あたりの在郷より人多く出でて、此の屍を見つけて、「あな淺ましやわが兄なり、家の内にて宵のほどに死したるを、忽ちに失ひけり。」とて、屍をとりて歸り、葬禮を營みけり。

七　蜷川親當亡魂に逢ふ事

都の東山鳥部野は、古空海和尚の御師範石淵の勤操僧正遷化したまひけるを葬りしより、今に及びて墓所の名をすてず。人のあだなき例には、歌にも詠むことなり。上の山を阿彌陀が峯となづく。露けき野原も時世かはりて、その所だにたゞしからず。永享年中のことにや、將軍義教公は、京都の公方として天下を治め給ふ。家臣蜷川新右衞門親當は、かくれなき武邊の勇士なり。その頃鳥部野には妖物あるといひはやらかし、女童はおそろしがりて晝もゆかず。新右衞門聞きて、自ら心根をためさんとて、ある夜只ひとり長刀打ちかづき、鳥部野の邊に到る。さなきだに物のあはれは秋にこそあれ、風も一入身にしみて、ゆくへもいとゞものの悲しく、蟲の音までも、更けゆく秋をかこちがほなり。草葉も色かへて露しげきに、かくぞ思ひつゞけける、

鳥部野の草葉色づく秋の夜はこと更蟲の聲もかなしきに
奥ふかく行きけるに、人を葬り薪をつみて燒きける火に向ひて、一人の女坐したりけり。親當行きかゝ
り、女のうしろに立ちてかゝる野原の人氣も稀に、すさまじきを怖れもせず、ひとり坐しておはす
る、その心ありや。」と問ひければ、女言葉はなくて、

夏蟲のもぬけのからの身なればや何か殘りて物におそれめ

と、いひければ、親當重ねて云く、「かくこたふるは何ものぞ。」と問ふに、女は面を見かへらずして、

巖松無聲風來吟

と、いひ消すやうに失せぬるを、蜷川すこしもおそれずして、燃ゆる火の前に立ちよりて、女の居
たりける跡を見れば、髑髏のくだけたる有りしかば、長刀の柄にかけて、火の中にうちいれ、暫く
念佛廻向してかへりける。人ばなれなる野中に、蟲の聲のみ聞えて物すごきに、狐火ところどころに見えて、
松の梢をわたる嵐より外には、又異なるものもなし。そのあひだに東の山の端に、月しろあかりしを
燈明にして、獨り家にぞ歸りける。

狗張子卷之三終

狗張子　卷之四

一　味方が原軍

永祿天正のあひだ天下亂れ、近里遠境たがひにあらそひ、弱肉強食をなさんと挑み戰ふ。臣として君を謀り、君は又臣を疑ひ、兄弟敵となり父子怨みを結び、運に乘りては數國を奪ひ、勢ひ盡きぬれば牢浪し、榮枯地をかへ盛衰日にあらたまれり、そのあひだに死する者幾千萬ともかぎりなし。兵亂打ちつゞき、京も田舍も靜かなる時なし、かくては世の中に人種も絶え果てんとぞ思はれける。

元龜三年十二月二十二日、甲斐の信玄五萬餘騎にて遠州濱松におもむき、味方が原に押しつめらる。德川家には信長公よりの加勢として、平手監物、大垣卜全、安藤伊賀守以下九頭を遣はさる。岡崎白洲賀まで、敵の軍を迎へて取り續きたり。水野下野守、瀧河伊豫守、石川河内守を初めて、備へを堅くして待ちかけたり。かかるところに信玄の方より、小山田兵衛先陣にすゝみ、德川家の先手内藤三左衛門と合戰を初め、小山田追ひたてられて引きしりぞく。山縣三郎兵衛つゞいてかゝる處、酒井左衛門尉に突きたてられて危く見えしを、四郎勝頼横相にかゝりて防ぎけるに、北條氏政の加勢大藤式

郎小勝、高田刀とかを打ちかけし鎧胴に、鐵鞭を打ち込まれて、馬上より遂に落ちて一突に突かれけれ、勝川實勝に鞭打て突いて殺た。本多平八郎、榊原小平太、安部善七郎、大須賀、菅沼、櫻井、設樂、足助の人々、すきまもなく攻めつけしかば、武田が切り立てられ、淺瀬上の床が原上の隅に、峰の湖とて深き谷あり。武田の軍勢此の谷底にまくり落され、いやが上に重なり、己が太刀のため自ら傷つけられて、死する者多し。行く手に陣を構へて防ぎ、亡魂の諸に纏りて、夜な〳〵戦ひの聲きこえ、徳川家より僧に命じて、五色の幡に經文を書かせ、さま〴〵の作物、種々の花、色々の供物、七日七夜よりも九日まで法事を営み、念佛供養を勤められたり。此の念佛を呼ぶ念佛と名づけ、これより之れを火の念佛とし、毎年の七月には、今も盛りに行はれ、佐倉念佛の名殘ありとかや。

二 田上の雪地藏

元祿年十二月の中ば、俄雪降しきり、古里はたゞ一夜のうちにすつかりうづもれてしまひ、見わたす限りの山も野も白妙に、さながら白銀世界となり、木々の枝は花でもさいたやうな景色、道ゆく人の足をのぞいては絶えてなかつた。近江の國田上といふ所の子供らは、雪をよろこびつゝ、野でころげまはりて遊び、その中に雪で地藏を作り、花を手向けて拝んだりして雪にて作りたてつ

つゝ、岩の上に据ゑて、供養の有樣を營みけるに、年のほど十二三ばかりの童を供養の導師とさだめけるに、かの童供養の意趣を宣べて曰く、「そも／＼この地藏菩薩の尊形をつくりて、供養する志は、素よりこれ眞の雪なり。六道の巷に雪地藏を本尊とする、此の菩薩の御ちかひの事なれば、日の長閑にならん時に、殘りなく融き申すべし」とたはぶれたり。かりそめの戲れ事に似たれども、刹佛、刹祖の理にかなへりとや。この童しかるべき種にやありけん、後に法師になりて、ならびなき說法の師となり、明阿僧都とかや聞えし、學匠の譽ありて、天台の教相形のごとく學して、講師をもつとめしに、ある時心地患ひて俄に絕え入りけるを、脇の下溫かに、頗道の師ありければ、葬禮をもせず、弟子ども守り居たるに、一日一夜を經て、蘇りて語りけるは、「過ぎし夕暮二人の冥官に引き立てられ、或所にいたる。玉の階を渡り、瑠璃の地を歩みゆくに樓門あり。內に入りしかば、寶殿のいらか黃金の垂木、鳳の瓦虹の梁、此の世には見なれもせぬ植木の梢に、花咲き亂れたり。若しこれ天上にあらずば、又何れの淨土なるらんと、怪しみながら見めぐらせば、御殿の左の方に幢あり、その上に人の頭二つを載せたり。右の方には黃金の臺に大きなる鏡をたて、四方に幡をたてて、中央に輝る。靑衣の官人玉の簾を卷きあぐれば、內に七寶の牀あり。垣より外には、囚の罪人手械首械をいれられ、大いに慟れ悲しむ有樣、哀れなること限りなし。こゝに於て閻魔王宮なりとは知られけり。閻王

出でて玉の牀に坐し給へば、冥官二人明源僧都を請じて牀に坐せしめ「新造の精舍供養の爲こゝに迎へたり。供養をのべて法事を行ひ給へ」とあり。僧都中門の廊にかゝる所に、若き法師一人來りて、「我は是れ往日供養せし雪地藏なり、汝かりそめに開眼せし功德に依りて、諸佛學道を得たり。閻王感じて精舍の供養に迎へ給へり、汝に此の懇意を負ふるなり。此れをあげて妙法を說きのべんに、辯舌泉の如くに涌いて、滯る事あるべからず」とて去り給ふ。僧都すでに精舍に入りて、高座に登るに、閻王を初りとして、諸の冥官司錄、各位に從うて列なる。說法初まりて、大悲智の眞際を述ぶるに、聽聞の群衆隨喜しけり。「此の上は何にても望みある事を申し給へ」とあり。僧都「我出家の身として名利を離れたれば、別に望む所なし。願はくは母の生所を見せしめ給へ、乳哺長養の恩を報ぜんと思ふ計りなり」と申せしかば、閻王敕を下して檢するに、僧都の母今叫喚地獄にあり。冥官一人をそへて、地獄に行かしむ。鐵の築地鐵の門、燃え上る猛火の音、鳴り下る雷の聲、罪人の叫ぶ聲、肝魂もきゆるばかりなり。冥官鐵の門に迎へ、戸びらを敲くに、猛火門を開くに猛火迸る。明源上人の母を問ふに、炭頭の如くなる物を、鋒に貫きて投げ出す。凉しき風吹きければ、炭頭うごきつゝ、頓之して人の形となる、僧都の母なりけり。是れを見るに悲しきこと限りなく、涙に咽びて泣き沈めり。地藏菩薩現はれて宣はく、「我此の母の歎くを見るに、救はんとす

るに力足らず、早く娑婆に歸りて、法華經を書きて弔ふべし。」とありけるを、夢の如くに覺えて蘇へり、母のために金字の法華經を書き寫し、金色の地藏の形像を作りて供養するに、其の終ての日の夜夢に見けるは、母の顏よろこばしく、兜率天に生まるゝなり」と。夢さめて僧都も喜びの眉を開き、いよ／＼道心ふかく修行怠らず。かの地藏は田上の草堂におはせしを、打續きたる世のみだれに、燒け失せ給ひしとかや。

七　柿崎和泉守の亡魂

越後國長尾輝虎入道謙信の家臣柿崎和泉守は、世にかくれなき武邊の侍大將なり。一年甲斐の信玄と河中島の軍の時も、柿崎を先手として、手柄のはたらきありける故に、謙信いよ／＼祕藏し給ひ、越中國にさし置かれ、北越の諸侍みな親しみつきて、その進退にしたがひけり。柿崎あるとき京都へ賣馬を上せしに、極めたる逸物沛艾の名馬なり。織田信長公、これ柿崎が馬なりと聞きて、價を高く買ひとり、又その上に柿崎方へ御書を遣はして、重ねてもかやうの良き馬あらば、何時にても上せらるべしと書きて、呉服一重さしそへて賜はる」柿崎いかゞ思ひたりけん、此の事謙信に聞かせざりしを、程經て聞き付け給ひ、大いに怒りて柿崎を城中へ呼び寄せ、是非なく殺し給ひけり。その亡魂

目惜しくや思ひぬらん、をり〳〵出でて謙信に見えて、怒れる有様凄まじかりしかば、流石に武勇の大將にて、物ともし給はずとは雖も、いく程なく謙信は、天正六年三月九日、卒中倒して人事をかへりみず、痰喘聲を鳴し、喉の内鼾睡のごとく、面赤くして醉ふがごとく、汗つゝりて珠に似たり。家中の上下手をにぎり足を空になし、四方の醫師あつまり、牛黄清心蘇合圓、神仙妙香通關散をもつて、風氣を通ひくだし癇氣を補ひ、人中合谷に灸治をくはへ、百會の中に鍼を刺すと雖も、露ばかりも驗なく、同じき十三日遂にはかなくなり給ふ。春秋四十九歲とぞ聞えし。時の人みないふ、一科もなき忠節の家臣を殺し、その恨みによりて、いまだ武略弓箭の盛りに、柿崎がためにとり殺され給ひけり。」とぞいひ傳へける。

四　死骸舞ひ踊る

文祿二年の春、山崎の庄屋宗左郎と云ふ者の妻は、河内國高安の里のものなり。素より放逸無慙にして、後世のこと露ほども心にかけず、年經て住みけれども子もなし。日蓮宗の流れを汲みながら、題目一遍をも唱へたることもなし。家のこと田地のこと牛馬のこと、召しつかふ者にも憐みをおもふ情もなく、物いひはしたなく、つらめしく云ひ罵り、朝夕に只世話をやきて、年月を送りけり。たま

たま人ありて、後生の大事を語りいだせば、「目にも見えぬ來世の事より、まづ此の世こそ大事なれ。人を倒して後生だてせんよりは、願はぬこそましなれ。」と、口にまかせて恐ろしげに罵りければ、下百姓の男女ともに爪彈をして憎みけり。かかる人にも逃れぬ無常のならひ、かりそめに煩ひ出して、空しくなりにけり。葬禮は明日こそすべけれとて、屍の前には香をたき、疎き親しきそのまはりに居て、寐もせであかすに、日も既に暮れて燈火をとり、しめやかにもの悲しく覺えけるに、遙かに西の方に音樂の聞え、漸々に近く響き渡りて、庭の面に來る。人々殊勝の事に思ひけるに、妻の死骸動き出でたり。音樂すでに家の棟の上に在るが如し。妻の屍むくと起きて、樂の拍子に合はせて立ち上り、手をあげ足を踏みて舞ひ踊る。人皆肝を消して、跡にしさりてまほり居たりければ、樂の聲又家を離れ、門より外へ出でしかば、妻の屍も臥しまろびながら、同じく門に出でつゝ、樂の聲のゆく方に從うて步みゆく。家中怖れ騷ぎて、「松明よ。」「ともし火よ。」とひしめき、月だにくらき折ふしなり、宗五郎も呆れまどひてせんかたなし。庭の前なる桑の木の枝を、手ごろにきりて杖につき、酒うち飲みて醉ひのまぎれに、跡を逐うて尋ねゆくに、半里ばかり野原の末に墓所あり。生え茂りたる松原のうちに、樂の聲しきりに聞ゆ。やうやく近づきて見やれば、松の木に火ありて明く照らす。屍はそのまへに立ちて舞ひをどりけるを、宗五郎杖にて打ちければ、屍は倒れ火も消え、樂の聲もとゞま

りぬ。屍をかき負うて歸り葬る、何故とも知ることなし。

五　非道に人を殺す報い

寛永五年の秋八月のことにや、周防國野上の莊に、關久兵衞尉兼元とて、武勇の侍あり。往日天正十八年に伊豆國山中の城責の時、比類なき手柄を顯はし、高名あるをもつて、中國にありつきけり。召使ひける下人夫婦ありしが、さしたる科にもあらぬ事を、邪に云ひかけて、無理に打ちころしけり。夫婦ながら最後にのぞみて、「我らさしたる科もなきに、殺さるゝこと力なし。年來私なく召使はれしかども、いま斯く憂き目を見る、此の恨みいたりてふかし。宿世のことなくば是非に及ばず、未來にも魂のあらば、思ひ知らせ參らせん。」というて、首をうたれたり。家の西の方十町ばかり、廣野に埋みけり。死して七日にあたりける夜より、その塚に火の燃え出で、子の刻になれば輪の如くになりて、野道をつたうて關が家にゆく。はじめは軒にかゝりて、火の色青く光すくなかりけるに、百箇日過ぎてより、火の色さかりに赤くなり、塚をはなれ出で關が家に飛び來り、門の戸は強くさしかためたるを、戸より内に入るかと見えし、關が子忽ちに脅えおどろき絶え入りけり。家内肝をけし、騒ぎあひけるうちに、その火やがて出でて歸れば、關が子正氣に成りて甦る。蟇目を射れど

たま人ありて、後生の大事を語りいだせば、一目にも見えぬ來世の事より、まづ此の世こそ大事なれ。人を倒して後生だてせんよりは、願はぬこそましなれ。」と、口にまかせて恐ろしげに詈りければ、下百姓の男女ともに爪弾をして憎みけり。かかる人にも逃れぬ無常のならひ、かりそめに煩ひ出して、空しくなりにけり。葬禮は明日こそすべけれとて、屍の前には香をたき、疎き親しきそのまはりに居て、寐もせであかすに、日も既に暮れて燈火をとり、しめやかにもの悲しく覺えけるに、遙かに西の方に音樂の聞え、漸々に近く響き渡りて、庭の面に來る。人々殊勝の事に思ひけるに、妻の死骸動き出でたり。音樂すでに家の棟の上に在るが如し。妻の屍むくと起きて、樂の拍子に合はせて立ち上り、手をあげ足を踏みて舞ひ踊る。人皆肝を消して、跡にしさりてまほり居たりければ、樂の聲又家を離れ、門より外へ出でしかば、妻の屍も臥しまろびながら、同じく門に出でつゝ、樂の聲のゆく方に從うて歩みゆく。家中怖れ騒ぎて「松明よ。」「ともし火よ。」とひしめき、月だにくらき折ふしなり、宗五郎も呆れまどひてせんかたなし。庭の前なる桑の木の枝を、手ごろにきりて杖につき、酒うち飲みて醉ひのまぎれに、跡を逐うて尋ねゆくに、半里ばかり野原の末に墓所あり。生え茂りたる松原のうちに、樂の聲しきりに聞ゆ。やうやく近づきて見やれば、松の木に火ありて明く照らす。屍はそのまへに立ちて舞ひをどりけるを、宗五郎杖にて打ちければ、屍は倒れ火も消え、樂の聲もとゞま

りぬ。屍をかき負うて歸り來る、何故とも知ることなし。

五　非道に人を殺す報い

寛永五年の秋八月のことにや、周防國野上の莊に、關久兵衞尉兼元とて、武勇の侍あり。往日天正十八年に伊豆國山中の城攻の時、比類なき手柄を顯はし、高名あるをもつて、中國にありつきけり。召使ひける下人夫婦ありしが、さしたる科にもあらぬ事を、邪に云ひかけて、無理に打ちころしけり。夫婦ながら最後にのぞみて、「我らさしたる科もなきに、殺さるゝこと力なし。年來私なく召使はれしかども、いま斯く憂き目を見る、此の恨みいたりてふかし。來世のことなくば是非に及ばず、未來にも魂のあらば、思ひ知らせ參らせん」というて、首をうたれたり。家の西の方十町ばかり、廣野に埋みけり。死して七日にあたりける夜より、その塚に火の燃え出で、子の刻になれば鞠の如くになりて、野道をつたうて關が家にゆく。はじめは軒にかゝりて、火の色青く光すくなかりけるに、百箇日過ぎてより、火の色さかりに赤くなり、塚をはなれ出で關が家に飛び來り、門の戸は強くさしかためたるを、戸より内に入るかと見えし、關が子忽ちに脅えおそろき絶え入りけり。家内肝をけし、騒ぎあひけるうちに、その火やがて出でて歸れば、關が子正氣に成りて甦る。蟇目を射れど

も用ゐず。僧を請じ經を誦み、山伏を呼びて祈らせ、御封屋札を押して防げども、少しも驗なし。毎夜の事なれば、家うち疲れ草臥れたり。二人の子は病み出して、宛然驚風の如し。醫者にかけて養生すれども、漸う弱りて、兄弟同じ日に死にけり。然れども塚の火は留まらず。妻女歎きの中より煩ひ出し、狂氣のやうになりて狂ひ死にけり。闔も力なく、自容長老とて活僧の有りしを請じ、塚に卒塔婆をたてて塚を祭りしかば、亡魂これにやしづまりけん、火は燃え止みしかども、闔もいくほどなく死にければ、跡遂に絶えたり。

六　塚中の契り

西國大伴家の侍淺原半六は、世に名をきこえし武邊の者なり、二人の娘をもちたり。半六が弟半三郎は身まかりて、これも娘一人有りしを、孤兒なれば捨てがたく、半六が家に育てて、三人の娘同じほどになりけるを、半六まづ我が娘ばかりをありつけて、半三郎が娘のことは、何の用意もなく沙汰にも及ばざりければ、うち怨みて詠める、

　をし鳥のとり／＼つがふつばさにもいかに我のみ獨りすむらん

此の娘心地わづらひて、何とはなしに痩せつかれて、遂にはかなくなりたり。城の東の野に葬り、塚

に頃ふて、骨を供養し経読み、念佛して弔ひけり。同じ家の婦は岡田庵七とて、年いまだ二十餘りな
り。父早く死して、その跡にはらず奉公をつとめしに、実男なかりければ、依頼いくれと嫁を持ちたる
人は、望みて婿にせんとあらそひけるに、何處ともなく失せにけり。嬢は焦れまどひし、人の騒みて
聞かん寄みことけらず。賓のためにうれひおそれれん、此の塚原寺表のあひだを尋ねよとて、人を
使みすすにしの白紙を求めけり。昔ふ、雪降りて、野は白妙に積りけるに、ものの哀やいたましきにく
ありし前の縁の、士と寺に出でてみしとの。これぞことして引き出しければ、土の底より機せる餅
として、何者かれば人の謀るひ守ぞとて、言ふ。いうけよりふ時人りたるらん、槍の中に名と謎
ところに記し、その脇に朝牛とせしに見しかれ、顯したた下に辞世に書きたるものあり、取り
あげ見みし読かへ一言は、つゆたへて、

忘れこりうる名こそあらず草かくれ結びし水の下にかゝれとも

聞かれ君をたとこよ身にはあらねども消えし跡にも残るさびしさ

哀なしすにこ辞せし云々、

聞くべくやそのかみの人の跡を見て

折にふれたる哀をこそ身につけて思ひ出てもあはれなる

此の歌どもを取りそへて宿に歸りしかども、權七はたゞ朦々として人心地もなし。山伏を頼みて祈らせしかば、日を經て元のごとくなりたり。半年ばかりの後に、召使ふ小女に彼の亡魂のうつりて、「我ら恨めし、つゝみし事の露はれて、浮き名のもれし恥かしさよ、前の世の然るべき縁ある故に、暫し契りをかはしもの、亦のあはれとも云ふべき人もなし。はやく忘れし人に、二たび契る故あり」とて、涙を流しけるが、その夜俄に權七空しくなりければ、「彼の亡魂二世を契る約束やありけん」とて、女の塚に一つに合はせてつき込めけり。

七　霞谷の妖物

伏見開道稻荷の北の方に小橋あり、世に朽木橋と名づく。橋の詰に農人喜衛門と云ふ者、年頃住みわたりけり。藤の森に知人ありて、麻の種を需めに行きけり。とかくする程に日既に暮になりて、酒には醉ひて心おもしろく、裏道より野道を通りに家に歸るとて、小歌うたうてゆく／＼見れば、手燭に蠟燭をたてて立ちたり。怪しみながら近く歩み寄りて見るに、法師二人あり、身には衣をも著ず、手には珠數もなし。一人は色青き小袖を著し、今一人はその頃流行りし龜や島の小袖をはぎ高に著なし、喜衛門を見て、「怪しかる男かな、農人と見えて鋤をかたげたりな。夜此の道をゆくもの、たやすくは

通すまじ、こゝかしこ来よ〳〵と喜衛門が腕をとりて引きたてゆく、法師のたけは九尺ばかりにて、然も力のつよさ、喜をたぐれども出であふ人もなし、引きたてられて山に入りつゝ、猶深く行きて、彼の谷にさそはれける、傍なる洞穴に突き入れて、二人の法師その口にさし詰めて守り居たりき、いかにすべきやうもなし、案内知る人も見えず、立ち出でんとすれば、更につき入れて動かさず、二夜三日物をも食はず、年若き法師の[?]しさに、洞の内に入りて、いかにせんと泣く〳〵法師もつかれたらん、[illegible]眠りけるを、隙間を見て手に持ちたる斧を取りなほし、面を切り出で、左右に二人ながら打ち伏し、足に任せて走り帰り、家の内にかけ入れ、[illegible]たり、宿には喜衛門が行方なく失せたりとて、あたりの者集ひつゝ求めて、[illegible]り、走り帰りしかば、いかにせし事ぞとて、枕元によりて問ひければ、答へもせず、とかくして夜もあけしかば、やう〳〵にして起きあがり、かう〳〵と語るに、彼は[?]の谷にて妖魅にあひけり、何の有様こそ心得なけれ、ゆきて見よとて、あたりの若き者十人ばかり、弓矢などもちて、洞を見探しければ、[?]の谷に行きて見るに、洞の口の前に、長さ一尺ばかりの蟇と、同じき蟇と二つ打ち殺されて倒れ死してあり。頭にてうたれたる痕あり。此の物の妖けたるなりと[illegible]なし、其の後は山にもたかりき

六　木島加伯

京都誓願寺本堂の南のかたに、南寺の内に佛壇をかまへ、地獄の變相を繪圖に現はして懸けたり、安養寺とかや名づく、京田舎の子供の死にたる、その衣類またはもて遊びし物を、家に置きて見るもかなしく、親の思ひの堪へ難さに、こゝにおくりて佛に奉り、せめて歎きを忘るゝやとものすれども、恩愛の憂へはいやまさるなり。ある人いとほしき子におくれて、かなしさのあまり、その子の衣を安養寺に持ちて佛に供養し、のちに參りて見れば、撫子を摺縫にしける衣なりけり。涙と共にかくぞ詠みける、

　なでしこの花の衣はうつし繪の蟬のもぬけし殼とみるぞかなしき

元和年中に、長門國萩といふ所に、木島加伯とて慈心無道の人、此の人世には黄金有て隣の分限とぞ沙汰しける、然に子ありしかどもみな先に果てて、今は家を讓るべき子だにもなし、年は既に六十夫婦共、浮世の思ひでに、心のまゝに樂しみたきはや、年をあそび暮し侍らんとて、めづらしき名ある酒を蓄め、味に飽き盡さに和しながらも、他人には與へず、夫婦のみ盃をあはせて、飲み食ひてたのしみとす、其の中に形の如くたる者來りて、夫婦の喉をつかみて曰く、汝何なれば我等の財

を貪り、妻子とりける金銀をもつて、身の榮耀につかひ棄つることの悪さよ。」と云ふを、加伯、「下より肴をくはへ、酒をものむべからず、衣服の美をもかざるまじ、家をもつくるまじ、おのれ子孫身と同じものにして世をすごすべし。」と、すこん〳〵意見するに、或はなきて異えて、夢のやうに醒あしから、鯛おもかげにはなれず、怖ろしうかぎりなし。これよりのち、若しは花の下月の前に、容ともとの酒を費ずて、興を催しまさんとすれば、彼また来りて責め尽がりけり。加伯、とばせんかたなく、かる斯き時に逢ふてこの事を語る。僧のいはく、「それ大悲をもつて、理の中に財寶を貪るものに、佛の道にそむき神の慮にたがふ。天理の中に我があやまりたつる者あり、その子孫ふたたびに、よく前世の報より、神明眼前につきそふなとつて、彌いよいよおそれ、譴のうち死へ至らしめ、餓鬼のことくし。日頃思ひつつて胸をのぶ。佛法僧の三寶にうやまひ、信を起して後の世の事よくよく勤めて、萬事ものやうやみ、今の心を改められよ」と、懇にすゝめられければ、加伯は涙ながらに上として、年頃の非を懺悔し、これより諸にのはか、寄附寺に参り、堂塔を修造し、一心念佛の行者となり、妻養子にかはらる先祖の菩提を祀て、いよいよ後世を大事と思ひ、加伯はから此を訴り、聞く人嘆ずる菩提をとむらひ、墻下にたて出さまに、倉も過ぎの有様をかたりつたへて、その事を見るにつけて、信じん心する人もありきとかや。

九　母に不孝の子狗となる

永正年中に、都の西鳴瀧と云ふ所に、彦太夫とて百姓あり、有德にはあらねども、又世を渡るに人並の身すぎをいたせし。田畠よくつくりて住みけり、その生まれつき無道にして、神佛のこと更に敬ひ貴む心なく、さるまゝにあたり近き寺にも參りたることもなく、沙門法師の來るをも、荒けなく罵り、少しの惠みを施しあたふる事をしらず、母を養ふに、不孝なることいふばかりなし。たゞ明暮つらあしく當りて、僅少にも心にたがふ事あれば、殊の外にいひはづかしめ、母の年傾きて、よわく拙きを見ては「はやく死して隙をあけよかし、娑婆ふさげに無用の長生かな」と、呪ひいましむること毎日なり　母これを聞くに物憂さ限りなく、「汝は誕生み育ててかくは世のなりた、つれなく命の生きる事よ」と、我が身を恨みて涙をおとさぬ日もなし。母嫁にかゝりて、食のあたはひ心よからず、新婦をたのみて、單衣の衣を賣りて、その代を彦太夫にわたし、「これにて魚を買ひもとめて與れよ」といひしを、魚の代は取りながら、魚は更に求め與へず。鄰の人あはれがりて、鯉の羹をつくりて來りあたふるに、母には參らせずして、おのれ盜みて皆食ひつくしけり。忽ちに膝をいたみ、さまざま藥を用ゐれども、その痛み少しもやみたるけしきなく、呻び臥して晦き間のうちに籠り、夜晝九日の

うちうめきけるを、人行きていかにと問ふに、その身變じて狗となり、蹲りて咆しけるに見えける
を、食物をあたふれども食はず、百日を經て死ににけり。不孝の報い目の前にありと、みな人に怖れ
おどろき、親ある人は皆孝行をいたしけるとぞ。

十　不孝の子雷にうたる

慶長の初め、大宮七條の邊に、池屋彌介とて商人の有りける、二人の子をもちたり。彌介は空しく
なり、兄は彌一郎とて親のあとをつぎ、身代ともかうもいたし、弟は彌三郎とて、三條堀河にすみ
て、耕作を營みするに、手前の貧しさ、朝な夕なを明け暮れにも侘しき限りなし。母は家にあり、
年かたぶきたり。兄彌一郎いひけるは、「我が家ばかりにて養ふべきことにあらず、弟のかたにも母
を一宵はね、兄弟二人十日がはりに定むべし」とて、朔日より十日のあひだは彌一郎が許にあり、中
十日は堀河に行きて、下の十日はまた大宮に歸る。かやうにせし内にも、あさましき弟の方は在りや
すく、兄はもとは不孝にして、新婦さへすげなく侍るゆゑに、母もすゝみ愛さことに思ひけり。ある時
母いまだ弟の許にありて、上の八日その家失食し、「參らすべき物なし、きはめたりし日數、いま
二日あれども、この體なればは兄彌一郎かたへゆきてたまはれ」といふ。九日の朝飯を出したてて、七

條大宮にやりけり。兄彌二郎門に出で迎へ、「いまだ二日は彌三郎方にあるべき事なるに、何しに早くは來れるぞ、疾く／＼歸りて、二日をすぎて後にこそ。」とて、門の內へも入れたてず。母は悲しくて新婦にむかひて、「弟のかたには食物絶えて、我ははやく來れり。今二日の暮、何かきの人に答ふべき」といふに、「いや／＼、ただ初めのごとく、日限をきはめて來られよ、一日にてもかなふべからず」といふなりし、舅姑の出來たりと見つゝ、道も遠ければ、それを少しあたへよ、つかれをたゞさめて、「弟が許へ歸らん。」といふに、新婦は返事もせず、飯の上に物を覆ひて隱し、彌三郎はあらけなくもつらかしくも云ひ罵りて、追ひ出しければ、母なく／＼出でゝ、彌三郎が方へたち歸るに、いまだ五町ばかりも過ぎざるに、天にはかに雲覆ひわたり、雷しきりに鳴り渡り、彌二郎が家に落ちて、新婦は門口まで引き出してうちころし、又いかづちも撃ちて、彌二郎が首くだけて、隱しける飯をば面中にうちまき、あさましとも云ふばかりなく、一時のうちに家絶えたり。

狗張子卷之四　終

一　今川氏眞沒落附三浦右衛門最後

駿河國今川義元は、織田信長のために討たれ、その子息氏眞これを繼ぎ、國を守りて恙なかりし所に、氏眞若年より家風殊の外に替りて、武道の事は疎かにして、風流の奢りを極め、武藤新三郎とて、白面の若衆を、氏眞限りなく愛せられ、日夜傍に近づけつゝ、酒宴遊興に日を暮したり、亂舞淫樂に年を送り、詩歌の道の戯れに過ぎて、政道は[illegible]、萬事を亂しければ、三浦右衛門佐に寵せられ、また茶の湯の道を好み、風顛山居の幽景をしたひ、數寄者の[illegible]有樣、泉水の遣水植木の枝つきまで、かのれと翫りなし、三浦が心に叶ふをもてよしとし、和泉の堺に聞えし紹鷗が持ちたる高麗茶碗を三千貫に買ひとり、[illegible]秘藏せし青磁の香爐を五千貫を出してうけ求め、その外夢窓國師の天龍寺の青磁の花入れ、忍性上人の鎌倉の柿色の眞壺、或は唐子の肩衝、緑葉の香合又は高麗の香合、卓机に至るまで、唐の日本の名物を集めたるは、財寶を惜しまず買ひもとめ、蜀錦の裁縫に[illegible]とし、沈檀[illegible]の[illegible]を寶とす、この費ゆる所幾千萬とも限りなし。天より降るに

もあらず、地より涌くにもあらず、土民百姓を貪り、賦斂重く課役しげく、責めとり虐げ取りて積み集め、これを散らし使ふこと砂をまくが如し。譜代忠功の侍と雖も、少しの科あれば、所領を押へ職を追ひあげ、家中の制道内外の事は、皆これ三浦が計らひにてありしかば、權威高く耀き、上下傾きはてて、大かたもてあつかうてぞおぼえける。三浦が申す旨に依つて、武田信玄のためには氏眞は正しき舅なるが、中惡しくなり、今川の老臣朝比奈兵衛大夫と三浦右衛門佐と心よからず、諸侍みな三浦を猜み疎みけるほどに、武田がた此の有樣を見すまし、永祿十年十二月六日、武田信玄三萬五千餘騎にて、駿州に押し寄せける。氏眞聞きつけて、庵原左馬頭を先手として、岡部小倉七千餘騎、氏眞は二萬五千餘騎を率して出で向はれしに、朝比奈心變りして引き入りしかば、諸陣何とはしらず引きはらひて駿府に歸る。氏眞の旗本色を失ひ、落支度をいたせしかば、力なく清見寺の本陣皆くづれて、府中に歸られけり。諸侍みな色をたて別心をおこし、たがひに目を見合はせ、一言の評議にも及ばず、只今敵の寄するにも、防がんと思ふ義勢もなし。氏眞は城にこもりて討死せんと思ひ切り給ふ所に、三浦申しけるやうは、「賤機の山家へ引き籠り、時を待ちて軍をおこし、本意をとげ給へ」と申しすゝむるに依つて、小原備前守、朝比奈備中守、長谷川次郎左衛門等がはからひにて、わづかに五十騎ばかりにて、懸川の城に入り給ふ。城中七千餘騎、いづれも聞ゆる兵共なり。武田方その跡

に押しかけ、駿府の館に火をかけしに、折ふし風はげしく吹いて、雲霧と焼けあがる。さしも年頃つくりみがきし、大厦のかまへ、一時に灰燼となりはてたり。次の日御館の焼跡に、かくぞ詠みて立てたる、

　甲斐もなき大僧正の官領が塵にするがいおもたふすゑよ

三浦右衛門は一朝に威をうしなひ、罪といふことの恐ろしさに、手ふるひ足わなゝき、初めの心も替へて、鎧甲・馬物具きらびやかに、兵士とつれて駿河の館をば出でたりしかども、とく先道せば、いかにもして身をかくし、命をたすからばやと思ひ、さしも重恩をうけたる主君を打棄て、たゞ一人駈けまどひしたり。昔が世の時にこそ、駿河遠江三河のあひだには、いかなる大身高功の輩も、三浦に向ひては手をつかね膝ををり、媚び諂ひ機嫌をとり色をうかゞひしに、数年の積悪こゝに顕はれ、天に跼り地にぬきあしすると云ふが如く、世を忍び人に隠れ、面を頭巾して汗を拭ひ、薪を負うて焼野を通る恐れをなし、馬をはやめて通る所に、「すはや落人の行くぞ。」と呼ばはりしかば、村々より出であふ百姓ども、聞きつたへたる輩、長刀をひつさげて進み寄り、「これは三浦右衛門ぞ、遁すな。」と言葉をかくる所に、「何條その三浦を捕へて、年頃の怨みを思ひ知らせよ。」といふ。一只剝ぎにはぎて赤裸になし、突き出して首をきらせよと云ふ。前後にとりまはし「此年来主君の寵に誇り、百姓を貪り、我等

し妻子資財まで取り、酷虐をなし、責めとりことゝり、或時は簀巻水牢、ある時は打擲蹂躙、又は人夫たなさしめつゝも、貴賤を使ひしその報いは来世までもなく、こゝにて思ひしらせ、嬲り殺しにせよやとて、馬より引きおとし、鎧直垂下の小袖まで引きむくり剥ぎとり、赤はだかに為しければ、三浦は百姓どもに向ひ手を合はせ、せめてその小袖一つは得させてたべと云ふ。若き者どもは、一度に打たんとはせで、高手小手にくゝしあげ、木の本に結ひつけて、おのおのまゝに打ち殺せと罵りけるを、年寄りたる者どもはさはのけて、このみはなさで、只のたしても追ひやれとて、憎きをつゝみて、三浦は命ばかりは助かりけれども、赤裸なりければ、破れたる菰を前にあて、いぎれたる古き物を腰にまとひ、泣く泣く夜もすがら道にもあらぬ田の畦をつたひ、そこともしらぬ山路を辿れば、手は荊にさゝれ、足は石に躓き木にたふれて、やうやう三河の高天神の城にたどりつきて、小笠原与八郎を頼みければ、与八郎始めの程は、世の聞を憚りて、三浦を呼びいれ、小袖肌着まで出しあたへ、暫く労りていに饗応しけるが、氏真すでに懸川を開けのきし小田原へ行きて、人数もすくなになりしと聞こえしほどに、小笠原与八郎忽ちに心変りの色に出でたり。城師を押し出し、三浦右衛門を搦めとり、年ごろ日ごろわがまゝを働き、諸人に慮外無礼を致し、主君を曲事に陥ませしめ、傍輩の諸侍、一門の貴族と雖も、己が心に叶はねば、無礼を押へ、讒を打ちあげ、凡下の者なりとも我が気に入りぬれば取りたてつゝ、君を昧

まし家をみだり、上下困窮をふりかへりみずといふばかりなし。今すでに主君の運かたぶき、国家亡ぶるに至りて、恩を忘れ君を見離し、天道神明の冥慮に背き、人の嘲りにそむく、悪逆無道の事をしらずして、命助けて置き給はふまじきにあらねども、疾くし冥途に遣はし、閻魔の裁許に任せんとて、人あまたに隠せて、輿に引き渡されけれは、三浦右衛門尉は大きに驚き、これはさも情なきはからひかな、夢とも覚えず、まさしく聞きしに、さあらぬ命の惜しさには、なくなる声を雨の如くに流して嘆けの時、斯きければ、小笠原が侍、足助長七といふ者、切手にて傍に立ち寄り、さらば何とぞ申し入れて、命ばかりは助けんとて、その代りには、鼻をそぎ耳を切りて許すとも、それとても命が惜しきかと問ひければ、たとひ耳鼻をそがれてなりとも、命をだに助けられなば、限りなき御恩なるべし」と答へたり。是れを聞きける人々、扨も卑き心ばせかな、あれ程を無慚にこそ、重恩の主をすてて、これまで落ち来たりけると、首を刎ねて、不忠不義の輩の懲らしめにせよやとて、といへば、三浦右衛門尉は、足ずりをして、声をはかりに泣き叫び、起き伏し歎きけるを、最後は只今ぞ、念仏申せよと云へども、前後ふかくに取乱して、太刀のあて所もなかりければ、太刀取も不便に思ひて、二つ三つ首の辺を斬りかけ、遂に首をうち落しけり。死骸を野辺に捨てたりければ、鳥獣あつまり、肉を掴み、腸をつかみ、また狼羣がりて、手足を引きあらそふ。時を争ふ往来の人是れを見て、哀れと

はいはぶして、「因果の報いはかくこそあらめ。」と、彈指してうち通る。運に乘じて威を振ふときは、大龍の雲にのぼり猛虎の風に嘯くが如くなりしも、一旦に果報盡きて、屍を草叢に曝し、恥を殘すこそ哀れなれ。

二　常田合戰に甲州軍兵の幽靈

甲州東郡惠林寺の奥に眞言の寺あり、上求寺と名づく。本尊は不動明王なり。強盛忿怒の相好は、放逸無慙の輩を戒め、本來究竟の智劍は般若實理の性を示す、六賊四魔自ら降伏し、四生五趣あまねく利益したまふ。その時の住持は、賴胤阿闍梨とて智行兼備の德たかく、四曼相即の花の本には白馬嘶き、三密勤行の月の前には青龍雲に吟ず。至極上乘の心の底には五部相應の玉をみがき、瑜伽中臺の胸の内には三業即是の香をつゝめり。効驗掲焉の明匠なりとて、諸人たふとび敬ひけり。加持護念護摩灌頂その功をあらはし、谷の響きに應ずるごとし。武田信玄は國主なり、その本卦すでに豐の卦にあたり、本尊は即ち不動なりとて、ふかく信仰の念ひをかたぶけ、いつも出陣の時は、まづ上求寺にして護摩を修せられ、御館しづかに軍勢無爲、大將勝利の祈禱をいたされ、信玄みづから參詣あること、毎度の式例なり。天文二十一年三月に、越後の長尾景虎入道謙信は、千餘騎にて信州の

地藏峠のこなたまで働き出でられ、長尾義景三千餘騎先手として押し出でたり。武田信玄一萬三千の人數をもつて馳せ向ひ、互に陣を張り、足輕を出して迫り合ひけれども、はかばかしき軍もなし。謙信いかゞ思はれたりけん、陣を拂ひて越後に歸られたり。義景靜かに退きて峠にあぐるを見て、武田がた飯富兵部、小山田備中、郡内の小山田左兵衞、蘆田下野、栗原左衞門佐、眞先にすゝんで義景を喰ひとめる。義景はすこしも驚かず、甲州がたを峠中まで引きつれ、手勢三千を只一手につくり、大返しに取つて返してたゝかふに、武田方立つ足もなく、坂より下へまくりおとされ、散々に切りくづされ、小山田古備中は討死し、栗原、郡内の小山田は、深手負ひて引きかねたるを、武田方旗本の前備へ甘利左衞門尉、馬場民部、内藤修理かけ合せて、向ふ敵を打ちはらひ突きたふして、栗原小山田をば肩にかけて、味方の陣につれて歸りしが、二人ながらいくほどなく死にけり。されども義景は、武田の大軍に人數七百十三人うたれ、わづかに三騎になりて引き歸す。武田方も三百七十一人うたれ、手負は數しらず。いくさは勝に似て、歷々の侍大將をうしなひけり。此の度の軍立にも、護摩を上求寺に修せられしに、護摩木ふすぶり灑水こぼれたりしかば、賴胤阿闍梨あやしく思ひながら、ふかくつゝしみて人にもかたらず、しかる所に二十六日の亥の刻ばかりに、鎧武者三百騎ばかり、上求寺の門をつきひらきて驅け入りたり。小山田古備中が聲かとおぼしくて、軍兵を支配す。寺中にあり合は

せたる同宿小法師原おそれ慌てゝ、縁の下天井の上に隠れたり。頼胤は篤實の老僧にて少しもおどろかず、軍勢の打ち入りたるは、さだめて甲州方敗北して逃げこみたりと思ひ、窗よりさし覗きたれば、大庭に備へをたて、苦しげに見えたる武者ども立ちならびたる所に、跡より又六七百騎もあるらんとおぼしくて、鎧武者こみ入りたり。打ちあひつきあひおし出し、こみいりて攻め戦ふ。鉾より出づる火は、澤邊の風に吹きみだるゝ螢よりなほかゞやき、馳せちがふ汗馬のいきほひは、雲居に轟く雷の如し。かくて両陣鬨の聲をあげたりしかば、甲府の地下人この聲におどろき、こゝは味方打ちまけて、敵軍追ひつめ打ち入りたるぞ」とて、俄に騒ぎたちて、親は子の手をひき子は親を助け、資財雑具をかつぎ背うて逃げ隠るゝ。館の留守には典厩信繁、穴山伊豆守手の郎等同心被官二百人、太刀よ長刀よ馬物具よとひしめき、しかも空すこし曇りて闇の夜なり、暗さはくらし松明手毎にともし、上求寺にはせつきたりければ、門は嚴しく閉ぢて、軍は大庭のおもてに打ち合ふ音しきりなり。人々下知して扉を打ちやぶりかけ入りければ、いままで両陣一千餘騎にあまりし軍兵ども、入り亂れたゝかふとぞ見えしが、雪霜のきゆるごとく、皆一同に消えうせて、たゞ松風の音のみ梢に殘れるばかりなり。頼胤阿闍梨あまりの不思議さに、戸をひらき立ち出でゝ、典厩穴山に對面し、始め終りの有様ものがたりありて、いかさま只事にあらず、味方おくれをとりたるかことと、手を握り肝をひやし、

[illegible]に[illegible]軍兵をもよほし、宿直の者定め置き、夜もすがら護らせられし所に、夜半に[illegible]出来してこそ、
中将は[illegible]まりしかど、うたがひし妖怪ありしとも、修羅の巷におもむき、嗔恚我慢の業因に惹かれて、かゝる禍をなしけるなるらん。[illegible]の迷ひの有様、[illegible]は悲しかるらめ。[illegible]障あり、妖怪が討たれたる者どものため、[illegible]に於て佛事を営み、[illegible]を供養し、七日のうち[illegible]て、幣金帛はれしかば、此の後は事故なかりしとかや。

三　女郎花

[illegible]の女郎花は、[illegible]にて、[illegible]世にすぐれ、[illegible]ことに心たえ[illegible]、[illegible]に、備り色深く愛らしき者[illegible]ければ、[illegible]人におもひかけ[illegible]の足軽[illegible]とて、武道かくれなき者あり。[illegible]思ひこめて、やるかたなく覚えて、

身にあまりおき所なき心地してやるかたしらぬわが思ひかな

と思ひつゞけてなぐさむるに、心たゞ空にのみ憧れ、せんかたなく色に出でつゝ、[illegible]にふれて、[illegible]はんける

[illegible]なきをも[illegible]れど忍ぶ心の[illegible]てやなるらむ

思ひ堪へなば、なか〳〵死ぬばかりなりと書きつかはしければ、彌三郎これをよみて、限りなく心に染みて哀れにおぼえつゝ、返り事せし言の葉の奥に、

人のため人目忍ぶもくるしきや身獨りならぬ身をいかにせむ

といひつかはしければ、藤藏いよ〳〵心まどひ思ひ亂れ、今はひたすら色に出でつゝ、

いかにせむ戀にはてなきみちのくの忍ぶばかりにあはでやみなば

もらさじとつゝむ袂のうつり香をしばし我が身に殘すともがな

神にかけ命にかけて書きつかはしけるに、彌三郎深き情の色に誘はれ、その夜忍びて逢ひにけり。千年を一夜にかたりあかし、名殘のきぬ〴〵別れて出でたり。藤藏かくぞ詠みける、

ほどもなく身にあまりぬる心地しておき所なき今朝の別れか

彌三郎聞きて返し、

別れゆく心の底をくらべばや歸る袂にとまる枕と

又いつと云ふ契りもさだめず、殊さら今の世のありさま、靜かならぬ折ふしなれば、今日ありて明日をもしらず、今朝の別れや限りならましと、その俤のしたはるゝも、つきせぬ思ひは數々なりと、たがひに泣きしをれたるばかりなり。次の日軍起りて、朝倉義景人數を出して木目峠に馳せ向はる。

武田が競り合ひたるかふに、洲河藤蔵討たれしかば、弟三郎大いに悲しみ、命いきても何かせんとて、軍法を背き、旗本よりして只一騎かけ出でつゝ、討死しけるこそ哀れなれ。二人の屍は陣中に取り返し、甲冑わるなく葬らりし事、家中に隠れなかりしかば、人々あはれがりて、一つ塚に埋みけり。日を経てその塚より名もしらぬ草の咲き出でたり。是れは男郎花とて、世にまれなる草花なり。定めて藤三郎兄弟二人の亡魂のしるしに、生じたる物なるべしとて、みなさりを知る人は、眼をつけて近くよるしより、世にその草のたね多くなりにけり。

四　原隼人佐道喜指射

上杉憲政の家人、原隼人佐は、手よく書きし歌の道を好み、情深き武士なり。和歌をよむとはいひ、わかいに違ふ人あらば、語らひ寄りて、いにしへの昔までも思ひ出はかりの言葉を述べては止むことなし。たまへ事もなし。かくて月日を送る間に、人我の世は名草の徳を以て、もり事やさしくの、その手書之家は生年十四歳、門弟人の子と共にてあかず、習日してただならかれ、心すさ欲に、近ふるとに競しかりまこ、結ぬ間これを見とめて止むことなく、身をとどめて通ひて、手なれし指南をすべき、四書五経にも通用なく、教へ得ければ、文学にたゞ、忠義の常とよみて、内外なく勤めてぬ

にこそ侍りける。とかくせしほどに互に思ひしみて、德之丞新五郎とわりなくかたらひけり。歌の道までも心ゆくばかりに詠みなし、志をつらねて月日を經るまゝに、彌生の頃にや、家の軒端に忍といふ草の生ひ出でたるを見て、新五郎かくぞ詠みける、

　ことの葉に出ではいはじ軒に生ふる忍ばかりは草の名もうし

德之丞心はやく思ひわたりて、

　我もかゝる人も忍びていはぬまのつもる月日をなどかこつらむ

　ことの葉の末の松山いかならむ波こしたにもわれは頼まむ

互に言ひ交し深く契りて、德之丞すでに十七歲、卯月の初めつ方より何となく煩ひ出し、さま〴〵の療治をいたさしかども、露ばかりも驗なし。新五郎も身をもみて、種々養生をくはへ藥を用ゐるのみならず、神佛に願だてし祈りをかくれども、つひにその驗なく、今ははや此の世の賴みもきれ果てつゝ、時待たすなるより外なし。親一族手をにぎり、いかゞせんとも思ひわくる方もおぼえず、かゝる時に德之丞は、とおきあがり、くるしげなる中に新五郎が手をとりて、

　すゑの露の淺茅がもとを思ひやる我が身ひとつの秋の村雨

といふかとすれば、息にや絕えにけり。新五郎はかなしさ哀れに心惑ひ、同じ道にと歎きけれども甲斐

たゞ、野邊の送りをいとなみ、苔の下塚の主と爲し、塚の前にて髻をきり、宿にも歸らずして遁世して、

　めかれもせし命のつれなくぞ戀しかるべき今日の暮かな

と詠みて、足にまかせて出でにけり。西國の方に赴き、國々殘りたる靈佛靈社殘りなく拜みめぐり、やう／＼年も過ぎ、卯月の末つ方故郷に立ち歸り、人しれず德之丞が舊跡に行きて見れば、草花をしげり[illegible]も荒れたり。[illegible]昔にかはりて、[illegible]德之丞が菩提を[illegible]、[illegible]新五郎入道、それはそれかと近く寄るにかき消すやうに失せたり。心なしつゝ經を讀みて跡を弔ひ、泣く泣く又立ち歸り、東國の方に行きければ、世のなか[illegible]、行くさき[illegible]しかば、今はながらへても何かせんと思ひつゞけて、

　昔の身のおき所こそなかりけれ野にも山にも秋風ぞ吹く

と書きて松の枝に結びつけて、あなしの池に身を投げて死にけることを哀れなれ。目のあたり知る人あるゆゑ、見る人は取りあげ、德之丞が塚の前に、共に土中に埋みしとかや。

五　毛蟲祟りを爲す

元和年中の事にや、西國の侍柳岡甚五郎某とて、武道に名を得し者、大友が手に屬して、世にかくれなならし時ふきけるを、軍に手を負ひつゝ、その身合戰し難く牢籠して、山城の里に住みけり。その子を孫四郎と名づく。年未だ十二歳なりけれども、心様おとなしく、同じ程の子供にも違ひ、生れつきおとなしく、物靜かに生ひ立ちあがり、手習ひ物讀みに心をいれ、更に怠りける業なし。おとりもなかとも、父母これを哀しびて沙汰しけり。然も容顏美麗にして、人並には遙かにすぐれたり。後には身をたて家をも興すべしと、親も喜び思ひけるところに、元興寺の稚兒物語聞えし法師、殊にすぐれとて勝の序に、知れる人ありて山城の里に立ち寄り、孫四郎が姿を見給ひしより、戀しく思ひみて、京へも上らず少時こゝに留まり、便りをもとめてかくぞ傳へはしける。

江南柳寵緑　尚愛枝葉陰
眞佐黄鸝囀　誰嫌侍春深

葉をわかみまだふしなれぬ呉竹のこのよをまつは久しかりき

と書きてやりければ、孫四郎幼き心にも、哀れとや思ひけん、文をばふかく袖にかくし、返事せんもしらずながら、朝夕思ひわづらひつゝ、かくぞ詠みける。

おなじ世にいきて待つとは聞きながら心づくしのはてぞはかなき

昔僧は此の寂ちに隔きしより、心空に涙し、修行學道の事は世の外になり、寺へもゆくがれ出で、山城の里に行き通ひ、人目をも忘れてあたりのかくし忍びありきけり、親聞きつけて、情もしらず腹を立て、僧ぞ法師の有様かへ、新田郷年また廻りぬる程に絶し、とかくすることも安からねば、わが子さらに門より外には出さず、それとなしく住みなれたれば、いまそらん人名商家へもやらず、武達ひはたなるも人目を紛かし、人をに習ふかな、我が聞へたる事をも聞す様やとこと思へ、寺にこもり兒學ともなり、頭にははや法師の姿せけ若衆になりければ、命たえて便にかはせん、寺をすてつるものあなにすほ世にたることもやり、その法師のたりへ行きすべからず、上下、雨も上りて云ひ出ければ、孫四郎にしるここしるもらず、親に告申しけれど、かまはしかる有様、身の悪をに開かざるべし。

いかにそのあとのありのいかん職うるものためのつかる身を歸りかこの所にて、身に殺すとおもしかば、寄く法師は思ひに迷へかねて。

さまかに二て、斉ひの悶がなくて、さらぬひとつに手をこれすらむ口惜しき世の有様かな。同じくあればこそ、物をき惜しき事にとも、我が身に思ひつむ事のも、こかりつるあとしるひ、死して思ひけはいこんもあるど、一すぢに思ひさだめし、胸のうちに引きこもり、断食して死にければ、同學の者來りて戸を押く、少時は音もせず、やゝありてより、

かに障子をひらき、立ち出でたる姿を見れば、痩せ疲れたる姿形、兩の目は血を刺したるごとく、くぼ〳〵と落ちいり、頭の髪は此の間に色變じて白くなり、筋ふとく骨あらはれ、凄まじき事いふ許りなし。同學の僧さしよりて、「いかに淺ましくも執心ふかく見ゆるかな。さなきだに生死の迷ひ晴れがたくして、世々の聖賢だにおそれ給ひ、身命を省みず、行ひすまして得道し給へり。その外多くの修行者達、棲家をはなれ山にこもり、或は諸國を抖擻し行脚の身となり、妄念をとゞめ煩惱をひすらまで、眞の行ひを致し、菩提を求め功徳をつみてこそ、輪廻をのがれ解脱の悟りに入るといふに、大事の未來を餘所になし、浮世の戀慕に思ひ沈み、魔道に墮ちて永きまよひに沈まんこと、人界に生まれし甲斐もなく、六道の巷にさまよひなば、悔むとも歸るまじ。たゞこの一念をひるがへし、狂氣をとゞめて早く思へ、凡夫を轉じて聖者とならんは唯今ぞかし。鑊湯劍林遠からず、眼の前近きにあり。」と諫めしかば、青侍聞きて涙を流し、「一世に有り難き法門を聞かせ給ふはさる事なれども、思ひ結ぼし胸内は、ゆめ〳〵とけ侍らず。千度百たび心を返せども、返され侍らねば力なし、とても此の世は知しかや。重ねて受くべき惡道の妄執は、定めて過去世の因果なるべし、樽岡甚五郎は生々の怨家なるべし。たとひ死して死出の山には上るとも、よしや是れまでぞ。」年頃同學の情に、只今出でて此の世の暇乞をするぞや。志あらば跡を弔へかし。とく〳〵歸りたまへ。」とて、障子を引きたて舊のご

とゝこもりけるが、済もなく病と共に疲れはてたり。かくても日といふに、遺髪の前に打倒れて死にけり。前栽あつまりて屍を野邊に出し、其夏の畑に焼きければ、舊説を念佛して弔ひけり。その夜弥四郎夢とも覺ともなく、宥快法師棺に入り來ると見えし。それより病みつき、時々は熱氣に責され、おどろへ踊り、あるは、濫師を罵りさわぐ／＼いたはるに更に聽かなし。漸々に衰れて、遂にはかなく成りたり。母の歎き譬へんかたなし。泣く／＼遺骸を土中に埋め、卒塔婆をたて謹みて弔ひけり。彌四郎の引きへるを見し時に、正しく宥快法師が靈として彌四郎殿の命をとりけるといふ。此の家の上に井に臨ましこと聊みしければ、十五日を過しけるに、此は五月の初めつ方、家の東の井の邊りに、き時に、毛蟲の出でたり。五月雨の降りつゞく頃に、柿なる木片よりわき出るやとおもひけるに、それにはあらで其五郎が家にかぎりて、庭前には一つもなし。拾ひ寄せ掃きあつめて、堀に捨て河に流すこと數石に及ぶといへども、猶よりわき出でてつくる事なし。後には北の土藏にさはらんは、皆これに觸れて身を痛め、目を腫ては眩けて瞎になり、群れ積んで、人の膝に至り、衣裳に取りつき、或は飯の中に交りてうち消し、或は食物の中に入れ交れば、いかさま是なん頃事にあらず、宥快法師が亡魂の寄る所為なるべしとて、光興寺に申し遣はし、同學の僧を頼みて弔はせしかば、寺の僧も憐れみて、祭文を作りて佛事を營み、懇にこそ弔ひけれ。

維時元和二年龍集丙辰今月今日、元興寺住僧宥快入名於釋門、凝志於學道、觀智温雅之德修行練行之功實出群之要基也。一朝魔風扇動而禪座散落、宍塵飛蕩而定水汚濁、神驚魂碎死而爲蛸。嗚呼哀哉。觸小蟲爲、生不少、汝毛、擡起如豪、刺端兩岐若鼠、臨脊相混之蟲。比准四十之矢。其頭長面尖、其嗣綿剝卷。蓋雖生死輪廻之苦、流轉因果之報罪福各如符。緑芥藏無意四生別、六道七種凡聖、一念之界執一心之惑倒、變而爲蜹化而爲物。豈所謂化而爲無爲、清涼所言輪轉化爲土木金石爲。此故八濤娘孃子爲女郎花、松浦佐夜姬成石、變志浮者則情非非情焉所不爲爲、嗚呼哀哉。汝之業力、假令雖強盛今所行陀羅尼、光明眞言消伏式加持、應速遂迷情疾闢魂精、到安穩之樂城。謹奉偈章。

かく行ひ加持して弔ひければ、三七日の間に蛸ことごとく絶えて、あとかたなく成りにけると也。其の浮びける事疑ひなし。

六　杉谷源次 附 男色の辨

文禄二年の事にや、伊勢國國司の家に、深見喜平とて才覺利口の侍、よく奉公を勤めて、知行三百貫までとりあげ、外樣をゆるされ、奥までも召しければ、漸く重きものにぞなりにける。奥方の局

惟谷源次と云ふ者は、勝れて眉目美しかりければ、喜平心をかけて、とかく云ひけれども聞きいれず、あまりの事に文を書きて、源次が袂になげ入れたり。なかなかに言葉は少なくして、

但馬の浦あら磯によするうきみるのうきながらみるは見ぬにまされり

あながちに人にも語らぬ、忍ぶの杜の言葉もかれなば影浅き井手の玉水、心の底も波にあらはれては、末までも如何せんと書きやりけるを、源次いかゞ思ひけん、只かりそめのやうに、傍輩に洩らし語りしかば、家中に隠れなく聞き渡りて沙汰あり。喜平は人の見る目恥かしく、源次が返事せぬまでこそあらめ、人に洩らしけることそ安からね、定めて我を失はんと謀ると覚えたり。命ながらへば如何なる見苦しき事にやあはんと深く恨み、源次朝疾く起き上り、寝屋より出づる所を敢なく打ちころし、みづからも腹切りて死にけり。諸共に墓に埋みしに、夜な夜なその塚に火燃えて、日暮るればそのあたりは、人の通ひも絶えたり。国司此の事を聞き給ひ、悪き有様ながら、執心の程もいたはしく、僧を請ひて、塚の前にて経読ましければ、その火それより燃えずなりたり。国司法力の奇特を感じて、寺の僧を召して法門など聞きたまふ序に、「男色の事は、経論にも見え侍るか」と問はれしに、僧答へて申されけるは、「仏経の中には、わきて男色といふ説はなく、邪淫戒の中に、非道淫戒をあげられしに、唐土にて周の穆王の慈童を寵し、漢の高祖の籍孺を愛し、恵帝の閎孺を執し、

哀帝の董賢を寵せられ、衛の彌子瑕、漢の鄧通、皆これ男色に惑へる例なり。史記に佞幸の傳あり、太平通載に嬖幸の篇あり。晉書には、西晉の武帝咸寧太康の年より、男寵の事いたく興りて、女色よりも甚しく、或は夫婦離別にいたり、多く怨みを起す事ありと記せり。是れ古より佞幸の寵、その終りを全くするものは少なし。それ財をもつて交はる者は、財盡きて交はり絶え、色をもつて交はるものは、花落ちて愛弛むとかや。人常に若き時なし、年の暮れやすきことに、たとへ寵渥あるも水のごとく、行きてまた歸らず。たとひ美しくみやびやかなる姿と雖も、いく程なく過ぎ去りて[illegible]速かに衰ふ。蕣朝顔の日影待つまの有様なるすら、[illegible]の文に任せ、追尋す少年の時は、自氣まさに壯りなり、習業の[illegible]所謂[illegible]明らめ難し、[illegible]に幾くもなし、既をわかち盛を待つ。まれなしといふに足れり。此れ實に生死の牢穽、未だ荒ひ根ざし易からずと云へり。宋の世に至りて學問を事とし、此の道稍衰へたり。本朝の往昔、[illegible]業平を[illegible]て、この常磐の由の昔つゝしいに[illegible]こそあはれと詠ぜられし。中古に[illegible]、[illegible]金崎にて討死し、[illegible]右衛門の田野にして討死をし、みな男色の惑ひに陥りたる故なり。近ごろは髻を刺し腕をひきて血を出し、志の誠ある事をあらはせり。古き歌に、

思ふこゝろ色には[illegible]身を[illegible]して紫の千しほ[illegible]としれ

をかしけれ。たゞ此物語は戒をつくりて、愛で悪し侍り。女にもあらぬ女にらうたき、非道の色にすゝみ棄て
家を失ふもの、女色よりも甚し。身を亡し家を滅し、家を覆しずを亡ぼす者、古今にわたりてか
ゝる事あり、誠に慎むべき事なり」とこそ語りあへりける。

狗張子巻之五 終

狗張子　巻之六

一　塩田平九郎怪異を見る

摂州花隈の城に荒木摂津守は、織田信長公に楯つきしかば、瀧川左近将監に人数をさしそへ責めさせらる。野村丹後守を初めて、雑賀の者ども、百余人みな討たれて、城には火をかけ焼き崩しけり。塩田平九郎といふ者、只一人遁れ出でて故郷に帰り、暫く世の有様を観じ見るに、行末とても頼みがたく、兎にも角にも果てしなき身なり、いたづらにたださんよりは後世の大事を求めばやと思ひさだめ、墨きり衣をすみに染め家を出でつゝ、心の趣くかた、足にまかせて野くれ山くれ村里を過り国々の風俗所々の有様、聞き傳へし名所舊跡拜まぬ靈地もなし。又その間に富みて豊かなるあり、侘びて住む人もあり、はしたなき情ふかき、何れしな〴〵等しからず。ある時はたづきもしらぬ山中を迎り、湖江の道を尋ね、ある時はそこともわかぬ野邊にまようて草刈に里をもとめ、または住家まれなる長崎に日を暮し、宿かさぬ所に行きかゝりては、木の本塚原に夜をあかし、筑紫肥後國阿蘇の深谷にいたりしかば、日のあたりなる地獄の有様、燃えのぼる焔のすゑ、煙につれて天を焦し、鳴りくだ

る責苦の日、山も更に漏るゝことなし、罪人のよばひ叫ぶ聲谷の底に聞えて、いく千萬とも知るべからず、かゝる事を見ても怖れず、聞きてもおどろかずば、誰とてもかくあるべしと、懺悔の涙は留めかねけり。心に懸つる身なればこそ、かやうの事を見聞くにつけて思ひ知るかなと、獨り心に感じて、それより猶ほ、道の末はるかなる薩摩潟、硫黄が島にわたりて、俊寛が古この島に流されて、哀れと心の詞で、今見るやうにぞ思はるゝ。浦回の海士のしわざとて、折節に棹さして千尋の濤に漂ひて、日より暮のよび聲は通道に聞こえて、潮をはこび柴をとり、賤やく煙の心ぼそく、玉藻を拾ひ礁業をしても、喰ふる事はいつくとしても、安からぬことを物うけれ。四國一島のあひだを通りて、やう／＼讃州善通寺のある跡を經て、又故鄕に歸り、指を折りておそふるに、十八年にぞなりたると、變りゆく世の中に譬へもなく、浦里の住家も、そこともしらずなりたまひつゝ、花園伊丹の城跡、こゝは昔の城の跡、何れにもあらず見えければ、ともかくに哀れに覺えて、

かへるこの門を問ふ身には秋ともなしに露でおきける

はや夕暮になり、野寺の鐘の聲かすかに聞えしかば、

見るまゝに過ぎにしかたは入相の鐘や昔の跡に聞ゆる

更にて千町田の穗を摘のゆくに、心のまゝに荒れはてゝ、蔵王寺の生ひ茂り、薄かるとに秋をわぶる蟲の

日々も寒くなり。四方の山々いたく暮れはてて、又問ひよるべきよすがもなし。草原の中に、古き軒端の有りけるに入りたりければ、住む人もなし。軒傾き板戸破れ、上漏り下濕れて淺ましげなるに、入り居て靜かに經讀み念佛す。月漸く東の山の端に出づる頃、誰とはしらず三人つれて入り來る。半九郎入道思ひかけず、壁にそうて密かに見れば、そのさま隔たりから物語すること、此世の風俗にはかはりて、異様にかなへり。その中に一人云ふやう、「さても此の世の中、いにしへ永享の頃より、諸國にほこりたち、強きは弱きをしたがへ、大きなるは小さきを併せ、天下已に四分五裂して、暫くも絶ゆる時なし。此のあひだ甲斐國には武田信玄、北越には長尾謙信、北條・織田の家々、人數を集め、謀を巧みにし、ひたすら戰國の七雄、三國の亂れと云ふとも、今の時にはよも勝らじ。いつか一統の世と成るべき」と云ふ。また一人の云ふやう、「天下の治亂は、時運の變異天地の妖怪なり。或は飢饉あるひは疫癘の天行る事も、みな此の類なり。時到り道定まりて、徳たかく行ひよき人の手にこそ入りて、天下は一統すべし。そのあひだに家をとりたて、黨を結び軍兵を聚めて、地を爭ふ人あれども、天理にかなはずしては、中ごろ亡びて絶ゆるもあり、眞に吉凶は、天理に依つて人事にあらず。されば信玄・謙信・北條氏康は、みな他界せられ、世つぎは有りながら、いづれも父には似ずとかや。中にも武田四郎勝頼は、武勇諸家にすぐれたれども、愚闇にして才智に乏しく、みづから武勇に慢じて、諸

[illegible]の盛なること[illegible]は、やがて亡びの基ならず。一世は[illegible]の武威重く、敵に勝
つ事あれども、[illegible]に[illegible]なく、或は敵の計につられ、又は奢りを好み人を失ひ[illegible]。或は
侫臣[illegible]の言を信じ[illegible]もの出頭させ、[illegible]を遠ざけ、我が武勇に慢心をおこし、
我意にまかせて[illegible]、味方の[illegible]、[illegible]を失ひ[illegible]を亡ぼ
す事、古今に[illegible]を背き
[illegible]、武田[illegible]、一萬八千[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
武田の[illegible]
麓にして、[illegible]
地の利に[illegible]

なく義もなく、智謀もなき上に、血氣の勇に任せて時日を選ばず。父信玄は軍を大事にかけ、山本勘助が丸日取、前原筑前守が相傳せし日切の日取、小笠原源與齋が八方懸の日傳、いづれも秘術の大事なりとて、丸日取の圖を軍配團の裏に書きてもたれたりとかや。こと更五月は中夏にして、南の方に旺す。二十一日は辰巳午の三時に、破軍の劍鋒北の方或は艮の方にむかふ。然るに勝賴の陣南に向うて鋒へむかひて、然も辰巳午に軍を初めたる、皆これ天の時に違へり。其の上長篠の城に取りかけ、本陣を道窟山に取りたり。道窟日は萬事に忌むことなり。名詮自性の理、未だ戰はざるに敗北の兆あり、天の時をたがはれたり。信長はわざと廣みを前にあて、切田堀切片拆なる殺所をのこし、柵を三重にふりけるは、勝賴を小心きて川を渡させんが爲なり。待ちて戰ふべき所ぞかし。斥候をも出さず、無理に懸りて軍せしは、地の利に反けり。其の上去年東美濃發向の時より、旗本外様近習衆と諸牢人方信濃衆と、三方の內證不和になり、長坂釣閑と內藤修理と中惡しくなり、勝賴は家老方を惡み思ひ、內外大小はだ／＼になる、軍事の評定に締りなし。それに強み過ぎたる大將を釣閑かうばいして、家老の諫めを讒し申せし。國の大なるを恃み、人數の多きに誇り、武威をあらはさんとする、これ家運の傾きたると見て、家老諸侍はみな打死せしものなるべし。其の時の落書に、

信玄の跡をやう／＼四郎殿敵の勝賴名をばながしの

此の様また如何なる世に、移り行くべきもしらず。」と語りければ、又一人の云ふやう「無用の長物語、[illegible]の[illegible]はそれは如何にもあれかし、あん〳〵身の上の事、行くすゑこそ怪しけれ。」と云ふ「まことに此等の事を忘れて、由なき物語せんより、心をのべて慰むには如かじ。」とて、其の中に色白く痩せたるが、一篇を吟じけり、

[illegible]

[illegible]

又一人、その[illegible]に[illegible]にふくまれけ[illegible]、吟じける言葉に、

[illegible]

[illegible]

又一人、その[illegible]に上りし長低く、[illegible]れたるか、吟詠して曰く、

[illegible]

[illegible]

「斯く[illegible]し、此[illegible]ぶる楽しみは、千年経るとも忘れじ」と云うて遊び戯るゝに、[illegible]

郎入道[illegible]にも[illegible]の心でなり。詩の心も言葉正しからず、故ある[illegible]

るべしと思ひて、身を繕ひて一聲念佛しけるに、二人ながら燈火と共に、雪の如く消え失せにけり。夜も早明けがたに成りしかば、不思議の事に思ひて、あけはなれ出でゝ、あたり近き人の家に行きて、「此のあばらやには怪しき事はなきか」と問ふに、「さればこの家は人の住む事もあらず、荒れ果てたるに、折々は人の聲聞えて、笑ひどよめく事侍り。定めて狐狸の所爲かと思ひ侍る。あたりの家に怪しかる事はいまだにもあらず」と語る。平九郎入道聞きて、「我は諸國行脚の僧なり、こゝに通り來て日暮れにかば、かりそめに此の茅屋に入りて、夜を明かさんとせしに、かう／＼の事あり、しか／＼、一首の詩をつくる、その詞すぐれたるには侍らねど、一篇の心ばせこそ怪しく聞きなし侍り」とて、主の男共の昔語共をかたらひ、あばら家の内をさがしけるに、破れたる團と破れたる鍋と小さき擂木と、眞に古きが、土に埋もれ、塵にまみれてありしを、これらの精魅のあらはれ出でたる物なるべし、詩の心も是れにて聞え侍り。されどもこれを燒きすつる事はあるべからずとて、一色のものを他所の山際に一つに埋めけり。それより後は怪しき事もなかりしとなり。

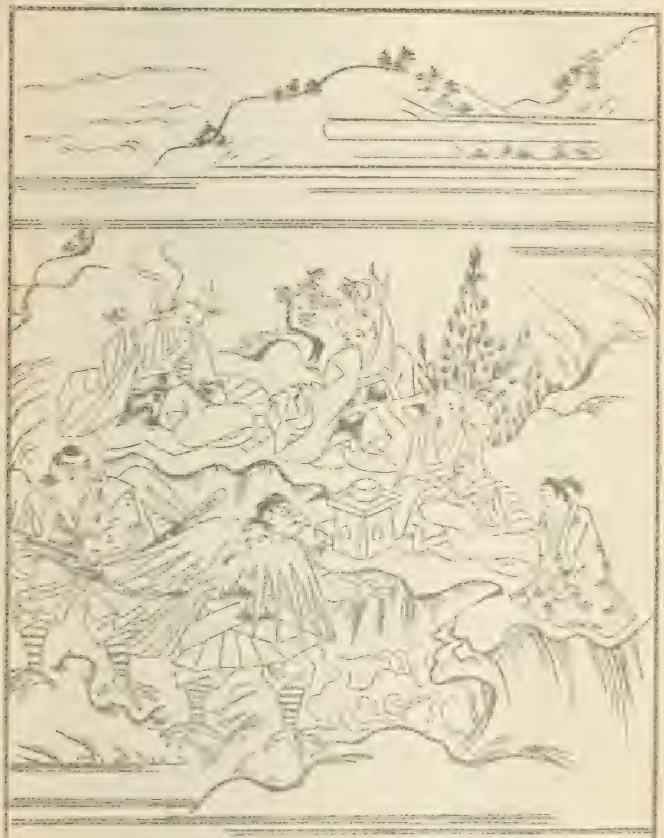
二　天狗にとられ後に歸りて物語

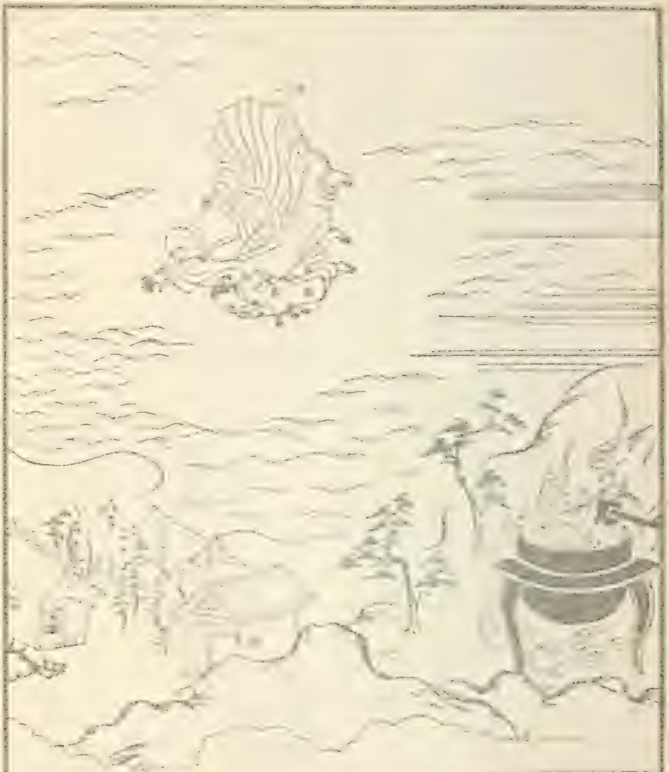
慶長の末の年、藤の森に彥八とて、常に田畑を耕作し、伏見木幡の人、若し明神に御湯神樂をまゐる

ふすれば、彦八出でて太鼓をうち、御託宣あるには、まさしくふだをもいたしけり。さつ子は次郎と名づけて、社家に抱へ置きて、宮地の掃除をもせさせ木の葉をかかせけり。心だておくれたるやうなりけれども、正直なる者にて、十六七までは暇ある時は、伏見かいだうの子どもに催しけり。ある時行方しらずなりければ、親思ひもかなしみて、稲荷山の奥、霧が谷の谷までも尋ね探しけれども、跡もなし。かくて五年の後次郎帰りて、大きなる松の木の枝に跨がりて居たりしを、彦八見つけて、次郎にてはなきかと云ふ。声の下より下りつゝ、親とつれて家に帰り、初めの間はそれ在所近き山の奥の洞にて、天狗と住み、雨の夜は蝶のごとく飛び、嶺をも越えたる、暁とかけ、海を遊びて遊び、食物も宜しきやうに、あてがひ賄はせて養ひければ、十日ばかりの程にもの人心地つきて物いひ出でたり。御山の人々いさ寄り、とて来よりの来りて、「いかに次郎、久しく稲荷に住みて、故郷のこひしくもなかりしや」と問ふ。次郎是れより語りけるは、「今年かぞふれば我が年二十二になる、他所をありしことも、丸五年に及ぶかと思ひたり。其の頃は八月の初めつ方、風やうやう涼しく、朝暮の聴なる折ふしに、ひとり、社家の方にうち寝たるに、何処ともしらず継けたる声に、一葉の森の方に、家の空実をうけ、門に出で見ければ、かの麒麟の獣の飯盛をもち、「いかに次郎よ、我がゆくかへ、道はなれ、悪しうはせじ」とあり、手を取りて招かれて、いくくともなく空を飛ぶ様にして、京の東福寺か鹿といふ山の峯に

休みて、再び御前に岩に尻かけて居たりけるに、怪しき小法師ども、手毎に食物を持ち来り、御僧にも奉り我にも食はせけり。何といふ物とは知らず、味ひ甘きこと限りなし。やう／＼日暮方になり、御僧仰せられしは、「驚くべき事有るべし、汝かまへて怖るゝな」とあり。いかなる事のあるらんと見る所に、同じ様の僧七八人来られたり。それより鐘の音落ち下り、巌のまへに金輪に乗りて坐り給ふ。その次に坐したる、眼に向ひにして、南の端に異なる法師二人、何れも鳥の如く、緋色の衣に太刀を帯き、左右並び高座に突き、甲冑をきたる鬼にて、白銀の茶碗に鐵の汁を盛にさしいれ、銅の湯を盛りて、七八人並み居たる僧達に参らするを、僧衆うたて變へたる色顔はれ、茶碗を取りて飲まれけるに、僧衆一同にふし轉び、頭の上より黒煙たちて燃え上り、空の間にはぱく／＼と鳴り響く音して、凄まじき限りなし。暫くして僧衆は、燃えし躰の様に黒くふすぼり、とばかりありて夢の覺めたる如く、又起きて座せしかば、本の如くの僧となり、互に禮儀正しく散りわかれて歸りけり。初めの御僧、次郎にむかひて、「此の有様かまへて人に語るな」と、よく口固めし給ふ。「我漸く飢ゑもなく只眠り来るを、今宵は臥して疲れを休め、明日は夜明けより起きあがるべし」とて、窟の内に入れらる。夜明けて、また此の僧につれられ、空に上りて飛びゆく程に、霞をひらき雲をわけて、「こゝはいづくにて候」と問へば、「讃岐国白峯」とぞいふなり。日はまだ卯の刻そ、「飢ゑたらば物食はせん」とて、大き

なる家の内につれてゆき給ふに、[illegible]人あまた[illegible]けれども、誰も次郎を見とがむるもの
のなし。次郎心に適ふもの取りくはせ、それより出でて雲を踏みつゝ、[illegible]を足の下に出て、[illegible]
に高く上りてゆくがなと思ひ、眼下と見下せば、所々住み[illegible]にある家ども、[illegible]
かけ、[illegible]一村軒の[illegible]、[illegible]
屋の煙のたちのぼるけしき、薄墨に書きたるやうにも思はるゝ。西の方は海はるばると見えわたり、
波みたて[illegible]、[illegible]
に海の中に[illegible]、高き山に[illegible]
伯耆国大山[illegible]谷を越えて大いなる楼門あり、あはく近うきて案内をもつ[illegible]
法師[illegible]、宗次郎と共に門の内に入り、主の僧出でて、年のほどは
十計りと見ゆる[illegible]、物語[illegible]、四五人[illegible]
[illegible]、其の中に主の僧宗次郎[illegible]、大事[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]、今の世に学道[illegible]





に至らんを知れりと思ひ、得ざるを得たりとおもふ、我は人には劣るまじと、すぐれたるを悪み、勝るをそねみ、我慢増上慢、山よりも高く海よりも深し。我等あまた下に使はれても上の師には仕へず、魔道の門にかゝる人のみこれ多し。またさらに他の障碍にも依らず、みづから大道を妨ぐるぞかし。修禅寺の三鳥山長老は、唯識法相の宗義を極めしめ、華厳法華の玄に達して、つねに講談して、数百人の弟子を得たりけれども、その志、我が宗流をたてゝ、他の宗義をおとしめ、心に我慢を挫き、自然の名僧達あり、彼の人は、説法に言を飾り、聴聞の男女を誑惑し、一切経を読みたて、仏像を作りて供養を営み、世には仏のやうに尊びしかども、一生のあひだ、只経論よりの仏像、他の財物を求め、既に求め得ても、貪る心の起れて、功徳は有るに似て却つて貪欲の煩悩となる。[illegible]無光寺の門、我法師は、往日我門の碩学なりけるを、怒りに武器をすてゝ魔道に入りけれども、その俗家にありしときは、理をまげ法を破り、百姓の財産を奪ひ、人を痛めて取る所の金銀を、寺に入れて堂舎を建てらる、此等の輩、共に我等の障碍に依らず、死して魔道に入り侍り。又世の士大夫諸侯の出家と云ける、もの、幾千万とも数しらず、何もなく智もなく、旦那に諂ひ、偽りをかまへ、慈悲のふかきことを務めもなされ、施主のあしきことを在家に過ぎて世をわたる法師、死しては地獄に堕ちて、信施の報いをつぐなふ。或は儒道を学ぶもの、又は清淡閑散の気を養ふことに

しからず、詩を作り文を書くとても、心にもなき偽りを筆に現はし、五常の道は猶更にすたれて、人を[illegible]しき顔を消し、手を出して恵みせぬ許りに月日を送る。天神に背き神徳に違うて、死しても本徳に歸る道なく、三悪道に墮つるものなり。在家は世渡り身を過ぐる間に、後世の道を願ふとはすれども、愛慾に引かれて眞實の思ひなく、多くは地獄に墮つとかや。今の汝等もかかる咎より、魔道に入りて他の嘆きを苦しみをうけながら、懺悔の心を起さず、却つて佛敵法敵となる淺ましさよ。」と云ふかと見れば、此の僧はいふに及ばず、數多の法師原まで、俄に悶え苦しむ聲と共に、宮殿の柱につながれて働き得ず。空より猛火燃え下り、宮殿樓閣一同に燃え上り、をめき叫ぶ聲と共に燒きくづれて、殘る人はなし。次郎ばかりは繋がれずして、只谷かげに倒れ伏したり。とばかり有りてさきの僧来りて、次郎をつれて山を出でつゝ顧みれば、一宇も作りなくし山中の宮殿樓門は跡もなし。是れより次郎は僧に連れられ、又空を翔りて、西國のおびただ殘らず廻りて、又京近く歸るとて、播磨の灘にて便船を請はれしを、舟子どもはしたなくいひへて乘せざりければ、僧すでに歩よりゆくゆく、「いで己らに思ひ知らせん」とて、沖の方に向ひて印を結ばれしが、俄に黒雲おほひ大風吹きおこり、舟の面暗闇のごとく、荒浪高くあがり、雪の山をなし砂の山をなすは、數多の舟ども鏡にてひるがごとく、艫をかへ櫓を打ちかけて、磯近く寄せんとすれども叶はず。舟の内には伊勢の方に向

うし拝み、観音経を讀み念佛申す。やう／＼日の入りがたに、風やみ浪しづかになりて、多くの舟じて、蘇りたる心地して室の津にかゝり、兵庫の浦まで吹きよせられ、辛うじて命たすかり、悦ぶ人も多かりけり。僧は又それより程もなく山崎まで來りて、夜の明方次郎に物くはせ、都にいりて西の岡より北山を經て東山に出でければ、五條川原に能ありとて、都の人貴賤上下見物に群集して、芝居に入り集まること雲霞の如し。棧敷には色々の幕うち並べ、誰とはしらず歴々の人共見物するを、僧は次郎をつれて見廻りけれども、咎むる人もなし。能は既に初まり、名高き上手ども入り替り／＼いたしけるに、諸人心を空になし、萬事を忘れて見居たるを、僧すなはち次郎に語りて、此の奴原があまりに物の心も失ひたるに、諸人の目をさまさせん。とて、舞臺の上に坐して、何やらん唱へられしに、忽ちに三條西の洞院より焼け出で、黒煙舞ひ上り、一面になりて燃えわたる。風あらく吹きしきて、焔飛びちりければ、町つゞきを越えて、爰かしこに燃えあがる音すはや火事よといふ程こそ有りけれ、幾千萬ともなき見物の諸人等、上を下にかへし、棧敷よりころび落ち、芝居楽屋鼠戸一つになり、我先にとこみあひ押しあうて、蹈みたふし蹴しまろび、女童の泣き叫ぶ聲、物あひ更にわかれず。とかくして火も靜まり、僧は次郎をつれてあゆむともなく、飛ぶともなく都を出で、[illegible]しが山中ごえ、比良小松、今津海津をうち過ぎて、越前の敦賀に出でたり。いまだ[illegible]雲[illegible]見のこす

ところもなく、風景をもしらぬ憂さをまぎらはさず、東国の方をまねきて、聞わたる、富士の高嶺浅間の嶽、田子の入
海清見が関、箱根の山よこ親浪江、鎌倉山の古の跡、聞きつたへし名所に、みても慰さる方もなし。
存じたる見もすほとで、今の時も、心にくるしむこともなし。剛くも身を宿めて、天が下を行きめ
ぐり、山神河神の面をも見て行くにては、新な貝物みしきこと希物のことを、心のまの遊の間に、年の
暮れ月日のたつも知らず、みな年の首を迎ふ。一二年ここに留りもせで、なおも時にあたり
国を訪ふもの、ことのほかに久しきにて、此さるも高橋を商人にあらはれて、此所にとどまり
たり。此のほどの上迄とおもひけりて、橋本を宿本の所、あまれたる閑窓を独し居たる。世の常の八
年ふる結ぶなかにて、観念の心もて、迚かく読みける老僧は、迚かく読みにて病みふせ
る語るを、彼のやうなる法花三昧を読みあげ、さて朱の筆に聞かば、亦を借りてたへて暇乞して
徒に日を送りて歳月はけり。橋本宮橋本の家にて、古き家にあらず、柄もほてたりとかや。

三　板垣信形天狗に逢ふ

板垣信形は、甲斐の国主、武田大膳大夫晴信と號せし時より、武勇の名にかくれ、諸方に誉に下
情ある者なりければ、晴信殿の勇士なれば、家の重宝と思ふも他人に勝れたり。されども忠節ある

て思慮なく、庸にして頑なる故に、麁忽なる事多しとかや。ある時信形表に出でたるに、年の比五十あまりと見えし山伏一人來りて齋料をこふ。その言葉世の常の人にも變らず、眼ざしすさまじく色黒うして長たかく、筋ふとく骨あらはし、まことに行法に苦勞したるものと見えたり。信形心に怪しみ内に呼びいれて、客僧はいづくの人ぞと尋ねしに、是れは出羽國羽黒山の行人なり。去年は大峯葛城に行ひ、それより熊野に詣り年ごもりして、此の頃こゝもとに下れり。やがて羽黒山に歸り、一夏を行ひ申さんとて、かたの如く齋料を乞ふ事にて候ふといふ。信形重ねて問ひけるやう、御房只一人にて候ふや、又同行の侍るか。といふ。山伏こたへて申しく、同行あはせて十人候ふ、それを打散りて家々齋料の爲に廻り候ふと云ふ。信形いふやう、見苦しく候へども、今夜は是れに御宿申すべし、同行の山伏達をも、これへ呼び寄せ給へと云ふ。山伏聞きて、近ごろ有り難う候ふ、さらば同行をもよほし候はんとて門に出でつゝ、腰につけたる螺の貝を手にとり、よせ貝と號して暫く吹きければ、山伏九人俄にあつまり來る。其の中にも前の山伏は先達と見えて、九人の山伏はいづれも年若く、然もつゝしみ敬ふていたり。日も暮方に及びしかば、燈火をとり、非時の料したゝめ、さまざま饗應しけり。信形年頃は佛事信心ふかく侍り、いさゝか思ひければ、山ぶし達を饗應のためとて、子息一郎を初めて、被官の中間ども二人その座に呼び出し、すでに酒宴におよび、客僧も主も數杯かたぶ

見たり。先達の山伏いふやう「思ひがけざる御芳志に預り、心をのぶるのみならず、旅のつかれを休め候こそ有り難けれ。我等一生 諸 の行法をつとめ、諸方の名山靈地、およそ行ふところにあらぬ奇瑞を顯はすといふことなし。されば我等の成就する所、常にはふかく包みてあらはさぬ事なれども、此の上は何をかさのみに秘すべき。それ御側にても奇特を致して、主に見せ参らせよ」といふ。下座の山伏、「畏まり候」とて、座中の膳にありし器をも取り集め、何やらん唱へて印を結び、座の中なる盃盤に投げたり。暫しありて、長一尺ばかりの鎧武者行人許り群り出でたり。各驚き目をすましてし見居たりければ、東の方の席中に魚鱗に備へて立ちたり。先達の山伏いふやう、「とてもの事に軍をさせて御目にかけよ」と申す。次の座の山伏是をたるて、首に入れたる紫扇子をとりて、采配の如くに摑みければ、又鎧武者二百ばかり、鶴翼に備へておし出でつゝ、両陣たがひに睨み戦ふに、小さき聲に鬨を作ると、喚きさけびて突き合ひ切りあふ有様、人間の軍するに少しも違はず。両方とも暫し戦ひ暫く戦ひ、両陣互に引きのくと見えしかば、客のさきに扇子をつきさし〳〵打叩きたる者ども、宿役あまりの面白さに、一興は當家譜代の者にて、近年諸方の霊験を興行するに、いつも先達をつけたまひけり。かゝる御折檻をたまふといふ事なし。敵なたとひ命をもつて防ぐとも、必らずしては叶ふまじと、生捕をいへのがす、道に疲れをとりし事なし。世には武勇の者は稀にして、臆病者

のみ多しと思ひとりて、飯綱の法も目取も方角もいらず、只武勇なれば小勢にても、大勢の臆病者は突き崩すに、手間もいらずとこそ覺え侍りつれ」とにて、鎌弾三郎は、少し心の後れたれば、其が鋒先には似申すまじ。あはれ珍らしき術法の、軍に便りとなるべき事あらば、傳へて給べかしとこそ申されける。先達の客僧聞きて「何にても軍のたよりに成るべきことと、有るまじきにては侍らず。去りながら座中の輩を退けたまへ。主一人に教へ申さん」といふ。さらばとて彌三郎も中間をもみな外へ出して、飯綱兵法の傳受をぞ致しける。下座の山伏うけ太刀して、信形に指南する太刀打刀取り出し、打ち合ひ突きあふ音しきりにして、夜すでにほのぼのと明けわたる。中間若黨ども、障子の隙よりも忍びて覗きみれば、山伏と思ふものは人にはあらで、或は鼻のさき高く聳ち、或は口のほど烏の觜の如く、又は身に翅あり、異類異形の者共なり。「これはそもいかなる事ぞ」とて、中間若黨共、「太刀よ」「長刀よ」と喚き、障子をあけてこみ入りければ、十人の山伏共は、何地へか行きけん、皆消え失せて、信形は前後もしらず勞れ臥したり。精進奇麗の膳部肴以下は少しもくらはず捨てちらし、酒はこぼし流し、疊の上には鳥の足跡の如くなるが、よごれて踏みたる有りさま、一疊ふ所もなく天狗共のあつまりけると、家中の上下は怖れつゝしみけり。信形は其の日の暮方に、やうやう睡りさめて起きあがりけれども、只まうまうとして有りけり。元來したゝか者なりければ、別の事は

なく、何條かやうの側は、武家にはあるものなり、あざむき侮るゝに足らず一とはいひながら、他所へ披露にせさせず、隠密してありしかども、後に聞えて評議あり、若彩比の頃武邊の名誉に高く、面ふ所の軍にかたずとおふ事なければ、武勇に慢を起し、敵方には手足もなきもののやうに思ひ侮り、家人原もおなじく奢り、慢心を起せし故に、かかる妖怪をまうけたり。是れより若彩心だて上気になり、分別あしく、軍法の掟へも違ひ、宜き怪我をいたし、終に討補上閉蟄の罪に行死しけるも、心たゆりし故とかや。

四　亡霊をいはひ、神に鎮め祭る

寛永の頃とかや、吉川某の家人松岡四郎左衛門と聞えし者は、武道に堪能あり、忠心ありて、正直の武士なれ。然るを傍輩の讒言によりて、打首にして殺されたり。すでに死期に及びて云ふ様、「日頃もいへる通り、あらぬ讒言に依りて命をうしなふことは力なし、せめて魂をだにしづめずして、打首にすとも、こゝに霊となり末世まで祟りなさんことは是非なし、消えずしてあるものならば、此の怨みは報すべき」ともいふて、その時に討たれぬ。七日の後四郎左衛門が亡霊現はれて、生きたる時の姿の形、讒せし者は勿論打ちたるものまで、猛き死に絶えたり。それのみにあらず道に行き通ふ輩、

男女老少おほくこれに死するもの、一千餘人に及べり。僧をやとうて經をよみ、種々に弔へども驗なし。埋みたる塚をかぎり、陰陽師に仰せて、祭られどもしづまらざりければ、社をつくりて八幡と號し、祭を初めて祝ひ鎭めしより、亡魂の怨みとけて、その後は永く靜まりぬ。

五　杉田彦左衞門天狗に殺さる

武藏國小澤郷に、杉田彦左衞門といふ者あり、心操不敵にして物に畏れず、年二十の頃より、日光の今市、月毎三たびの市に必ず行き向ひ、歸り足には山賊して道行く人を追ひ倒し、或は剝ぎとり或は打殺し、家の内財寶豐かなり。十七八人ゆる〳〵と世をわたり、不足なることなし。ある年の九月に、今市より馬にのりて歸るに、板橋の間にして、日光山の孫太郎と云ふ天狗あり。その身を化して長け八尺許りの山伏となり、大道に立ち塞がる。乘りたる馬は身ぶるひして、進みえず、ふす。彦左衞門刀の反をまはし、柄に手をかけ、「汝は日光の孫太郎か、その道あけよ、馬を通さん」といへば、山伏かたはらに退きざまに、「さもあれ來年四月十五日には、必ず汝をとるべきものを」とて、忽ちに姿を見失ひけり。彦左衞門元來したゝか者なりければ、物ともせず、駒に鞭うつて宿に歸る。何となくすさまじきやうに覺えて、それよりは日光へもゆかず、年も暮れて春になり、二月の末つかたより心

地よみしかられず、彼方此方するあひだに、四月になりつゝ、いよ／＼わづらひ重く、遂に十五日にいたり、苦しみ悶えし、大熱狂亂して死にたり。國西寺の國道和尚を引導の師として、稲荷の家より葬禮をいだしけるに、風荒く雨の降ることはうつすがごとし。墓所ちかくなりしより、雷電頻りにして、はたゝ雷既に棺の上におち掛るやうに響きて、空に聲ありて、その尸骸を此方へ抑渡しあれ」と云ふ。和尚は一たび契字して喝喝となへり。たとひ如何なる事ありとも、此の屍は渡すまじ」とに、術・文字の驗をあらはしけるを、雷落ちかゝり、覆棺をもぎとりて去りけれども、屍はとられずして納めたり。心静かに引導し、難なく葬り畢せられけり。その験者は尚今もこの寺の住持なり。後に和尚の語られしは、「杉田彦左衛門はその心無不敵にして、身のほどよりはかなはぬ望が如き心ありて、人を以て物とも思はず、佛神天道の冥慮をも恐れず、殊に惡行多かりし、人を惱し財寶を奪ひ、昆弟をさへ家の物とす。其の故にかかる怪しき事を感じけり。妖は妖より起ると云へり。邪氣勝つときは正氣を奪ふとかや。我が心術の邪氣の基となれるゆゑに、かの正氣を喪ぼされ、妖怪におかされる。眼に一翳あれば空花散亂すといへり。虚空もとより花なし。眼るにはあらず、眼に病ありて、虚空の間に花の散るを見るが如し。正氣正念の時には、外の妖魅は犯すことなし。達磨の中に說くところ、世間の五蘊六塵の境界に、この心法を奪はれてわきまへなくとも申さい、

常に迷うて苦しみをうく。その心をとり戻して、とゞめ得たる所にこそ、靈理不思議の正見正智は出生すべけれ。此の正念を萬境にうばはれて、蟬の蛻の如くならば、諸の妖邪は、しば〳〵犯すにたより近し。譬へば守り疎かなる家には、盜人の入り易きが如し。またそれ天地廣大の中には、奇怪不思議の事あるまじきにあらず、人に魂魄あり、その精氣正心なれば、正理にして非道なし、正念にして非義なし、德自ら備はるを以て妖邪おかさず。自ら行うて、正心正念を返し求むる事のかなはざる愚人は、神に祈り佛を賴みて、うやまひ尊びて信を生ずれば、神力佛力に依つて、自ら正念に成るなり。往日は關東がた、人死すれば火車の來りて骸を奪ひとり、ひき裂きて大木の枝に懸け置きたる事も多かりしを、今は佛法の敎へひろく、諸人みな後世を願ひ佛神をたふとび、ふかく信心を起し、正直正念になりたる世なれば、火車の妖怪も稀に成り侍り。只怖るべきは我等の惡行妄念なり。地獄鬼畜も餘所よりは來らず、自ら招く罪科なり。此の度仕損じては二たび返らぬ一大事ぞ、ふかく信じて願ひもとむべきは、佛果菩提の道なり。」とぞ、懇にすゝめられける。

狗張子卷之六　終

狗張子卷之七

一　細工の唐船

永享四年九月、將軍義教卿富士山御詠覽のため、東國駿河國に進發を催さる。此のこと前年より思召し立たれ、駿河の國守今川駿河守範政に、兼て仰せ付けらるゝと雖も、執權斯波細川畠山等各諫言をすゝめて、「今天下暫く武威の化に屬すと雖も、大亂の後にして國衰へ民疲れて、而も南方の強敵いまだ悉く亡びず、かかる時節は好事もなきには如かず。只希はくは思召し止り給へ。」と、たびたび諫め申すにより延引に及べり。然れども多年の御深望たるによつて、終に思召し止らず。駿河守は此の事前年より承知しておもふやう、將軍は定めて此の地に來りたまふ、饗應世の常にしてかなふべからずと思案して、家臣共をよび集めいひけるは、「來年九月の頃、京都の將軍富士山御詠覽の爲、此の地に來臨あるべき由、先だつて御教書あり。然るに此の御待いたすべき御主殿の前に、大きなる泉水あり、此の水の上にて、何か珍らしき御慰みの事はあるまじきや。」と詮議有りければ、末座に一人ありて、「それがし細工に妙を得たり。あはれ一年の御暇賜はらば、國本へ罷り歸り、何ぞ御なぐさみ

にもなるべきこと工夫仕らん。」と申しければ、駿河守、「それこそ易きあひだの事、國にかへり如何にもして細工仕り見候へ。」とて、暇をたびけり。細工人歡び國に歸り、一間所へ引きこもり、たゞひとり明暮工夫を費してこしらへける。すでに同年九月將軍駿河守が館に御入あり、やがて御主殿に請待し紫微の心おこたらず、珍膳佳肴數をつくして饗應す。將軍も感悅はなはだしく、夜は舞樂の宴を催し、晝は高亭に登りて、富士山を詠覽し給ひ、

みずばいかに思ひしるべきことの葉もおよばぬ富士と兼て聞きしも

かく詠じ給へば、駿河守返歌、

君がみむ今日のためにやむかしよりつもりは初めし富士の白雪

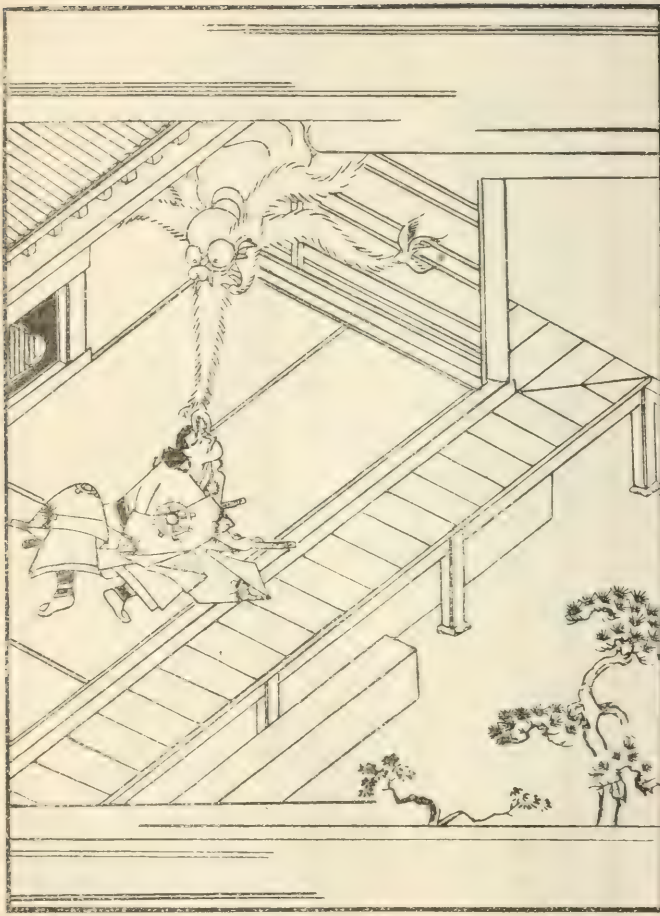
かくて將軍の御機嫌を見合はせ、かの細工人に仰せて細工の物を取りよするに、何とはしらず一つの大きなる箱を獻上す。將軍これは如何にとて開かせ見給ふに、長さ三間横五尺ばかりの結構に拵へたる唐船にてぞありける。昔隋の煬帝の數千の大舶を作り、數多の宮女諸共に、舞樂を奏し酣歡して、かの西園の名木奇花をたづねしありさまも、かくやとおぼえておびたゞし。龍頭鷁首あざやかに、舳樓金殿かゞやけり。すなはち前なる泉水に泛べしかば、數の人形動きいで、桂の櫂蘭の槳、滄海に棹さして船唄歌ふ。その氣色、げにも巧みに拵れり。暫くありて色黒き人形ども、横になしたる帆柱を

そろり〳〵と引きあけておし立つれば、多くの綱をたぐりつゝ、日よみの經とうち見えて、日隱しする人形もあり。また年のほど七八十ばかり、これより明州の津までは八百里、海底にいりたる大石もやあるらん、又大風の變を案じ、破軍武曲文曲のひかり、北斗の星に參商の二つの星を考へ、時變運氣に心をくるしめ、凝然として立ちたる人形もあり。さて管絃の始まると見えて、麗はしく裝束したる伶人の人形、それ〳〵の樂器をもち、面白きふき物鐘をならし太鼓をうち、六律六呂の調子をそろへ、太平樂を奏すれば、又美はしき美人の人形五六十人、けつこうなる裝束し、音樂の調子にあはせ舞踏して、しづかに簾中に引き入れば、又さもしをらしき童子の人形百ばかり、手々に拍子うちそろへ、蓮城樂のさしあし、ぱとうの上のぼちがへを、げにあり〳〵と舞うたりけり。音樂謳歌の聲、玉の甍風にひゞき、黄金の瓦は日に光り、こゝろも言葉もおよばれず。およそ五六百の人形、みなそれぞれの働きありて、一時ばかりの藝をつくすと見えたりしが、そのうち小さき人形一人軋柱の本にて、何やらん火うちのやうなる物を取り出し、二つ三つ打つとおもへば、鐵砲のどうぐすりを入れはねさせける程に、その音天にひゞきて夥しく、數多の人形一つものこらず打ちはらひ、たゞ泉水の白浪のみぞ殘りけれ。滿座大きにおどろき、たゞ茫然と呆れたる許りなり。將軍興をさましたまひ、かの細工人を召しけるに、彼の鐵砲のさわぎに亡せさりて、尋ぬれども知れざりける。「これはいかさ

「天下再度兵亂起りて、人民失せ亡ぶべき前表ならん」と、みな人沙汰しあひければ、將軍も駿河守も共に眉をひそめて、ふかく隱密すべき旨仰せ出されければ、その一兩年の中は、さだかに知る人もなかりけるとぞ。

二　蜘蛛塚

昔諸國行脚の山伏覺圓と云ふ者あり、紀州熊野に參籠し、それより都にのぼり、先づ清水寺に詣でんとす。五條烏丸邊にて日漸く暮れたり。こゝに大善院とて大きなる寺院あり、覺圓幸ひなりと寺僧に請うて一夜を明さんとす。寺僧則ち相許して、堂の傍なるいかにも汚き小屋を借しけり。覺圓大きに怒りて、「一夜ばかりの宿、僧徒の身として此の修行者に、かかる不德心は何事ぞや」といふ。寺僧打笑ひて、「これ全く修行者を侮るにはあらず。實は此の本堂には、年久しく妖ありて住めり、凡そ三十年の内三十人、その死骸さへ見えず。この故に本堂をば借さず」といふ。覺圓聞きて、「何條左樣の事あらん、夫れ妖は人によりて起るといへり。豈此の知行兼備の行者を犯すことあらんや」と、寺僧は再三諫むと雖も、敢て用ゐざれば、やむことを得ずして本堂の戸をひらき、あらましに掃除して誘へば、覺圓しづかに佛を禮し念誦して、心を澄まし坐し居たり。然れども彼の寺僧の詞の末



おほつかなく思ひ、腰の刀を半ばぬき出し、柄を手に持ちながら眠りゐるところに、夜すでに二更に及ぶ頃、ぞつと寒くなり、堂内しきりに震動して、風雨山をくづすがごとし。その間に天井より大きなる毛生ひたる手をさし出し、覺圓が額をなづ。則ち持ちたる刀をふりあげ丁ど切る。物にきりあてたる聲ありて、佛壇の左の方に墜つ。夜將に四更にいたる頃、又さきの手をさしのぶ。此の度もすかさず刀をふり上げてはたときる。やうやく夜明けて、寺僧心許なく思ひたづね來る。覺圓前夜の樣子を語るに、寺僧奇異の思ひをなし、急ぎ佛壇の傍を見るに、大きなる蜘蛛死してあり。長さ二尺八寸許り、珠眼圓大にして爪に銀色あり。寺僧ます／＼驚き、堂の傍にこれを掘り埋め塚を築きぬ。且また此の山伏の行徳いちじるきことを感じて、暫く此所にとゞめ、一通の祭文を書かしめ、かの塚を祭り、再び妖怪なからんことを祝す。猶今に到るまでその塚ありて、蜘蛛塚と云ふとかや。

三　飯森が陰徳の報い

豐臣秀賴公の侍大將鈴木田隼人佐は、中西國の敵を押ふる番船の下知をおほせ付けられ、穢多が城に居住せらる。其の家臣飯森兵助といふ人、盜賊奉行として二心なく、鈴木田に忠功を勵ます。天性心直にして慈悲深く、其の意貧しうして弱きを憐み、富みて驕れるを制す。故に人自然と其の

裁斷に服して、賦くに忍びず。ある時ひとり政所に臨んで訴訟の事を判斷す。一人の囚人あり、その名を土井孫四郎といふ。罪狀まぎれなきによりて、面縛して誅伐せんとす。孫四郎私かに兵助にむかひて「我はもと不義を爲せるものにあらず、名ある武士なり、智謀勇力世の常ならず。あはれ君よく我が科を察して、命をたすけ再び故郷に歸し給へかし。然らばかならず君が爲に力を盡して、その厚恩を報ぜん」といふ。兵助つく／＼彼が面顏魂を見るに凡人にあらず、詞色雄長にして臆さず、まことに豪傑の士なり。兵助心にこれを助けんと思ひ、わざと偽りて關を出でいして許さず。その夜更けすぎ人靜まりて、私かに獄屋の役人をよびて、かの囚人を免し歸さしめ、則ちその役人も亡げ失せさせて暇を出し、翌日「獄中囚人一人迯けいでて、又役人もにげ失せぬ」と披露す。鈴木田大きにおどろき、「これ卒爾しながら兵助が越度なり」とて、しばらく出仕をやめて閑居せしむ。その頃徳川家康遠州大宮に在陣し給ひ、大須賀陣渡守に仰せ付けられ、織多が城を攻めさせらる。城中勝利をうしなひて敗北す。兵助も馬にのり士卒を下知して、命を惜しまず防ぎ戰ふと雖も、大勢無勢にして叶はず。遂に城を攻め落され、鈴木田やう／＼一方を切り拔け、萬死をいでて一生を全うし、秀頼公の館に歸參しぬ。それより兵助旅客牢浪の身となり、あなたこなた漂泊せしが、後には備前を覆容しよして、困窮甚し。呻吟と漂ひて播州の地に至る。或大きなる在郷にゆき掛り、その郷の代官職の人

の姓名をきけば、土平孫四郎といふ。我が昔放しやりたる囚人の姓名と同じ。平助不思議に思ひて、その屋敷をたづねて案内をこふ。孫四郎大きにおどろき、急に走り出でておがみ、よくよく見れば疑ふべくもなき昔放しやりたる囚人なり。昔のことども語り出でつゝ、眞に命の親なり、日頃なつかしくおもひしに、よくこそ尋ね來りたまへり、とて拜謝し奔走し、即ち別に座敷をきよめて据ゑ置き、晝夜酒宴を催し、相共に寝臥して歡びをきはむ。凡そ十日あまりに及ぶと雖も、遂に我が居宅にかへらず。ある夜孫四郎その居宅に歸れり。平助折ふし廁に行きけり。此の廁と孫四郎居宅と、たゞ壁一重隔てぬ。ひそかに事の樣をきけば、孫四郎妻の聲として、「君此の間殊の外にもてなし給ふ客は誰人ぞや。此の廿日あまり、晝夜つきそひてかへり給はず。」といふ。孫四郎答へて、「むかしあの客の大恩をうけて、危き命を助かり、今かゝる榮華をきはむるも、これ偏にあの客の陰德によれり。何を以て此の大恩を報ぜん樣をしらず。」といふ。妻の云ふ、「君は愚かなる事を宣ふものかな。それ人の一生富貴浮沈、古今めづらしからず。時を得ては人を制し、運窮まりては身を屈す、何ぞ今更過ぎ去りし昔の事をかへりみん。諺にも大恩は報ぜずといへり、且君むかし難にあひ、囚はれにかゝり給へる事誰知るものなし。然るに今かゝる接待し給ひ、若し他人にもれ聞えなば、重ねての恥辱なるべし。早く誅戮にしたがひて、いかにも思慮し給へ。」といふ。孫四郎返答もせざりしが、やゝ久しくありて、「げ

にも汝が云ふところ尤もなり。かれ智謀を以てよきに計らはれ、必ず過をさとらるゝ事なかれ」とい
ひて出で去りぬ。兵助聞きすまして、大きに恐れ驚き、衣服荷物悉くすてて置き、すぐにその家を走り出
で、馬をかり鞭をはやめて逃げ去り、その夜の初更の頃までに、十里あまりを過ぎて羅州界に到る。
ある旅店に宿をかりぬ。その様甚だあわたゞし。兵助が僕これ何故ともしらず怪しみ問ふ。兵助しば
らく喘ぎの息をすゝりて、具に孫四郎が厚き大恩を忘れて、却りて野心をさしはさむ有様を語り、
溜息をついて嘆きけり。僕これを聞きて涙を流し、その険悪を感ずるあひだ、忽ち床席の下より、
予て隠れたる男一人刀を携へて出で来る。兵助声を消して驚くに、この男の曰く、「我は軍中忍び
の達者にて、而も仁義の侍なり。彼の孫四郎我を頼みて君が首をとらしむ。然れども不思議に今の
物語を聞いて、かの孫四郎が放逸無慚なる事を知り、君は真に智仁兼備の君子なり。危いかな過って
殺さんとす。我義に於て君を捨てじ、君もし早く逃入ることを知れ。なにとて此の間に君がために、かの孫
四郎が頭をとりてかへり、君が忠義を顕さしめん」といふ。兵助恐怖して、「よきにはからひ給はれ」
といふ。彼の男刀を手に提げ門を出づると見えしが、程なく一つの首級を携へて、そのはやきこと飛ぶ
がごとし。既に夜半に至りけるに、「敵の首を討ち終へぬ」と呼ばはる。火をともしてよく見れ
ば、即ち孫四郎が首なり。その男すなはち暇乞うて辞り去る、その跡忽ち見えず。それより兵助は諸国

抖擻して、後には都にのぼりて兵術の師範となりて、その身を終りしと云ふ。

四　五條の天神

京師五條西洞院の西に、五條の天神在せり、これ大己貴命を祭れるなり。往昔命、少彥名命と天下の政務を謀り給ひ、かつ人民疫癘疾苦の爲にその療養の方をさだむ、その天下後世に仁惠あること、神農黃帝の下にあらずとかや。故に代々の執權奉行職の人、ことに尊信し給ふといふ。應永年中、此のわたりに壽玄齋とて醫師ありけり。わかきより學術に眼をさらし、黃帝岐伯の玄旨を探り、秦越人の深意をたづぬと雖も、未だその堂奥に達せず、かつ身の不遇なることを歎きぬ。則ちこの天神に祈りて、信仰のこゝろ怠らず、歲時には必ず祭りて敬ふこと、年すでに久しくなりぬ。ある夜夢見らく、「朝疾く宿を出でて、天神の社に詣で、恭敬の頭を傾くる所に、忝く天神社壇の扉をおし開き、目のあたり壽玄齋に告げて宣はく、「汝われを祈り其の誠を竭す、なんぞ感應なからんや。汝今身の不遇にして困窮を歎く、然れどもこれ則ち却つて汝を福する所なり。それ日本は神國なり、天子は則ち天照大神の繼體にして、その統道を更めず。かるがゆゑに神道を尊崇し、王法を興隆し、仁政を施し、朝憲を正しうすべし。曩昔王法神道に合する世には、世すなほに民淳うして國家安寧なり、

風雨時にしたがひて、飢饉餓死の愁へなし。況んや謀反叛逆の禍をや。後世に到りて、元暦に安徳天皇、承久に後鳥羽院、元弘に後醍醐天皇、これみな君徳明らかならず、叡慮はなはだ短くして、天下を讐敵のために奪はれ、宸襟つひに安からず、或は邊裔の花むなしく壇浦の風に迷ひ、悲泣の月いたづらに台嶺の雲に隠る。いかんぞ王威十善の徳をもつて此の極に至るや、これ神道の本を忘れて、政道人望に背けばなり。こゝに於て王法始めて衰へて、神道も亦廢しぬ。又悲しからずや。しかりしよりこの方今の世に到りて、人道益廢れ、子として父を弑し、臣として君を窺ふ。上道のはかるなく、下忠義の心を失ふ。人君國守としては、仁義に暗く慈悲の心なく、賦斂重く課役滋くして、國民を貪り取り家人を剝ぎ盡して、畢竟我が身の樂しみとす。驕奢無道の富に誇り、濫階不次の賞をたのみ、能もなく智略も淺く、行跡非禮不義にして、善惡邪正を論ぜず、阿り諂ふ者を賞翫し、忠孝なる者を却つて罪科に行ふ。會武藝學問に志有る人も、利祿名聞の爲にして、忠良の志露許りも無し。凡そ武藝學問は、みな聖經賢傳の旨を明らめて、我が忠功を遂ぐるのみ、何ぞ名利を事とせんや。然るに一切鍛錬研磨の功を終へずして、雜法小利に走り、先賢の古轍をすてて、專ら奇兵詭譎を先とし、また正兵の極致あることを識らず。又終日聖賢の書を讀むと雖も、行跡却つて直ならず、仁義の心なく、學問をもつて利慾にかへ、君に諂ひ友を妬み、素より誠なければ、利を見て義を忘れ、大慾

無道にして、一生遊興に長じ、富貴榮華を羨み、衣類美麗を好む。斯くの如く臣下を貪りとりて、その身の榮耀を極め、臣又上に侫媚して、一家の奢侈をつくす。凡そその費ゆる所の財寶費用、天よりも降らず地よりも出でず、これ皆人民の膏澤を絞りとり收斂したる所なれば、ゆく／＼天下再びみだれて、人民困窮し、四夷八蠻互に國を爭ひ、大なるは小を併呑し、強きは弱きをしのぎ、盜竊爭鬪區々にして、又その間に饑饉疫癘流行りて、天下手足を措くに處なからんとす。爾今かかる時節に生まれたり。爾強ひて身の不過を歎きて、一旦の利祿を僥倖すと云ふとも、久しく保つこと能はずして、却つて災あらんとす、如かじ貧に安んじ跡を藏めんには。かつ爾に一つの靈方を教へん、水上の浮萍よく疫癘を癒す功能あり、おほく求め貯へて、其の時を待つべしと、今の世の狀態將來の事變、鑑にかけて宣ふと思へば、夢はさめて夜はほの／＼とあけにける。壽玄齋感心膽に銘じ、盥漱盛服して急ぎ天神に詣づれば、夢の面影あり／＼と、社壇の扉少し開け、異香四方に薫郁たり。それより壽玄齋世のなり行く狀態を見るに夢中の告げに違はず。永享の年に及んで京都鎌倉確執の事起り、鎌倉持氏朝臣京都將軍に恨むることありて謀反す。京都度々大軍を起し、討手に差向けらる。持氏父子敗績して自害す。これより諸方戰爭起りて靜かならず、國家衰廢天運否塞して大きに疫癘流行つて人民多く死亡せり。壽玄齋かの天神の告げを思ひいで、試みに浮萍を調和して與ふるに、大方癒えず

といふことなし。人みなその神效に驚きて、これ正に醫王善逝の變作なりとて、貴みつゝしむ事世の常ならず。其の後今川上總介が父の疫病を患ひければ、上總介なゝめならず歎び、修驗道分に頼みて請ぎ、遂にわが國に伴ひ下りて、身終るまで尊敬しけるとなり。

五　鼠の妖怪

寛正年中、京師四條の邊に、徳田某とて百年あまりの商人あり、家富み榮えて貨財倉庫に滿てり。其の頃世の中いたく亂れ爭ひやむ時なく、殊に山名細川兩家、權をあらそひ野心を挿し、度々戰ひに及びしかば、洛中これがために騷動し、人皆おそれ恐て、たゞ薄氷を踏んで深淵に臨むおもひを爲す。徳田某もこれによりて、都の住居物憂くおもひ、北山賀茂のわたりに閑寂のありければ、密かに移へつゝけり。則ち賀茂の在所の傍に、常盤の古御所のありけるを買ひもとめ、山莊となして、しばらく此所に隱遁せんとす。然れども久しく人も住まぬ古屋敷なれば、いたく荒れはて、軒かたぶき壁くづれて、凡そ幾年經たる屋敷とも知れず。徳田まづあらましに掃除打ちして修復しぬ。京にある親類つたへ聞きて、打ち來りて賀儀をのぶ。主人歡びて、賓客を堂上に招じて饗應し、終日酒宴を催し、數盃沈醉して遊び、夜に入りければ、客皆共に大いに醉ひ出でて、前後もしらず打臥しぬ。その夜夜半ば

かりに、外より大勢人の來る音して、急に表の門を敲く。主人怪しみ門を開きみれば、衣冠正しく美うるはしき人、先だちて入りて云ふやう、「是れは此の屋敷の舊の主なり。我一人の子あり、今宵始めて新婦を迎へ侍り。その婚禮の儀式を執り行はんとするに、わが今住む所は狭くきたなし、たゞ今夜許り此の屋敷をかし給へ。夜明けなば早々立ち去りなん」と、未だ云ひも果てぬに、はや大勢入りこみて、「輿よ。」「馬よ。」と犇き、提灯大小百あまり二行に列ね、まづさきへ飾り立てたる輿、打續いて乘物かず／＼かき入る。その跡よりは供の女房いくらともなく、笑ひのゝしりて來る。又年の程六十有餘の老人、大小の刀を帶びて馬に乘り、歩行の侍六七十人ひき連れて、前後をかたく守護すと見ゆ。その間に結構に塗りみがきたる長持挾箱、屏風衣桁貝桶の類、數限りなく持ちつれ、貴賤男女凡そ三百人、堂上堂下に並み居て、大いに酒宴を催し、珍膳奇羞山海のあるところをつくし、且舞ひ且謡うて、興に入るまゝに、主人や賓客をまねき出し、「かかる芽出たき折から、何か苦しかるべき、こゝへ出でて遊びたまへ。」と云へば、主人も賓客も倶に和し興に乘じ座敷に出づ。まづその新婦と覺しきを見るに、年まだ十四五ばかりと見ゆ、少し細らかに色しろく、また類なき美人なり。次第に並み居る女房たち、何れも艶なる容貌花の如くに出立ちて、皆一同に立ち騒ぎ、新婦の手を執りたはぶれて、「今宵はいかで強ひざらん。」と大きなる盃を進むれば、新婦いと耐へ難き氣色にて、彼方此方迯げ

かくるゝを、逐ひ捕へんと騒ぐまに、風はげしく吹きおちて、燈のこらず吹き消しぬ。主人賓客はつと驚き、しばしして又火をともし見るに、人一人もなし。やう／＼夜も明けてよく／＼見れば、背にことなくしく持ちはこびたる道具と思ひしは一つもなく、却つて主人の日頃秘蔵しける茶の湯の道具より、家具雑器に至るまで、みな悉く引きちらし、くひ裂き噛みちらし、害ひ破らざるものなし。そのうち壁にかけ置きたる古き懸物、牡丹花下に猫の睡れる所かきたる絵あり、名消え印かすれて、誰人の筆とも識れず、これ一幅許りぞ露許りも損ぜずありける。皆人、よからぬ怪異なり、とて眉を顰む。こゝに村井潜介とて博學治聞の老儒あり、主人に向ひていふやう、これふかく懼るゝに足らず、老鼠のいたす妖怪なり。それ猫は鼠の怖るゝ所なり、かるがゆゑにその絵と雖も敢て近づかざる事斯くのごとし。かかる例、傳記に載すところ尠なからず。是れ其の氣自然と相容れずして畏懼す、所謂其の天を畏ると云ふものなり。その類一二を擧げてこれを示さん。われかつて或古記を見るに、昔ある事の中一つの村に、童子大きなる蛙數十、汗池叢の下にあつまるを見る。進んで是れを捕へんとす。熟視れば一つの巨蛇叢の下に蟠りて、恣に葉莖を喰ふ。集る蛙流りかたまりて、其ゐゝを待ちてあへて動かず。又ある村の叟、蝦蟇一つの蛇を逐ふを見る、行く事甚だ急ならず。蝦蟇漸く近づけば蛇また動かず、口を張いて待つ。蝦蟇竟にその腹に入り、時を逐えて出で、蛇遂に斃れ

ぬ。村の叟其の蛇を深山のなかに棄つ。十日あまり過ぎて、往きてこれを見れば、小さき蜈蚣數知らず、その腐れたる肉を喰らふ、これ蜈蚣卵を蛇の腹の中に産みけるなり。又昔一つの蜘蛛、蜈蚣を逐ふ事甚だ急かなるを見る。蜈蚣逃れて離檣竹の中に入る、蜘蛛又入らず。但足を以て竹の上に跨り、腹を搖かす事あまた度して去る。蜈蚣を窺ふに久しく出でず、竹を割いてみれば、蜈蚣已に節々爛れ斷れて蟹醢の如し。これ蜘蛛腹を動かす時、溺を灑ぎてこれを殺せるならん。物は其の天を畏るゝ事斯くの如し。今鼠の猫の精を懼るゝもまた同じ、豈久しくその妖怪を恣にすることを得んや」と、重ねて主人に教へて、其の鼠の穴を狩らしむ。屋敷より一町ばかり東の方に、石の多く重なりて小高き所あり、その下に大きなる穴あり、その中に年經たる鼠かぎりなく羣れり、みな捕へ殺して直に埋めぬ。其の後は何の事もなかりけるとぞ。

六　死後の烈女

福島角左衞門は、生國播州姫路の者なり、久しく宮仕もせずして居たりしが、其のころ太閤秀吉の内、福島左衞門大夫とは、すこし舊好ある故に、これをたのみ然るべきとりたてにもあひ、奉公せばやとおもひ、故郷を出でて都に赴く。明石兵庫の浦を過ぎて尼ヶ崎に出で、やう／＼津の國高槻の邊

に至りぬれば、しきりに喉かわきぬ。路の傍を見るに小さき人家あり、その家たゞ女房一人あり、その容貌の美しさ、またかかる邊鄙にはあるべきとも思はれず、窗のあかりに向うて綻を縫ふ。角左衛門立ち寄りて湯水をこふ。女房「やすき程の事なり。」と、隣の家に走り行きて茶を貰うて與へぬ。角左衛門しばし立ち休らひ、その家の中を見廻らすに、竈かまどの類もなし。角左衛門怪しみて、「いかに火を焚くことはしたまはずや。」と問ふ。女房「家貧しく身衰へて、飯を炊きてみづから養ふことかなはず、あたり近き人家に傭はれてその日を送る。まことに悲しき世渡にて侍る。」と、語るうちにも綻を縫ふ、その氣色はなはだ忙はしく、いとまなき體と見ゆ。角左衛門その貧困辛苦の體を見て、かぎりなく憐れに覺え、またそのかほかたちの優にやさしきに愡れて、やゝ傍により手を執りて、「かかる艶なる身をもちて、この邊鄙に貧しく送り給ふこそ遺恨なれ。我にしたがひて都にのぼり給へかし、よきにはからひ參らん。」と、すこしその心を挑みける。女房けしからずふり放ちていらへもせず、やゝありて「われには定まれる夫侍り、名を藤内とて布をあきなふ人なり、交易のために他國へ出づ。わが身はこゝにとゞまりて家を守り、つゝしんで舅姑に孝行を盡し、みづから女の職事をつとめて、貧しき中にも、いかにもして朝暮の養ひをいたし、飢寒に及ばざらん事を謀る、今已に十年に及べり。幸ひ明日わが夫かへり來る、はや疾く立ちさり給へ。」といへば、角左衛門大きにその貞烈

を感じ悔い愧ぢて、僕に持たせたる破籠やうの物をひらき、餅果取り出し、女房にあたへ去りぬ。
その夜は山崎に宿しけるが、あくる朝かの女房のところに、所要の事かきたる文とり落しけるゆゑ、跡へ戻りける所に、道にて葬禮にあへり。「いかなる人にや。」と尋ぬれば、布商人藤内を送ると云ふ。角左衞門大いに驚きあやしみて、その葬禮にしたがひて墓所にいたれば、すなはち昨日女房にあひし所なり。今見れば家もなく跡も失せて、たゞ草蕭々たる野原なり。その地を掘り葬る所をみれば、藤内が女房の棺あり、棺のうちに新しき箸一雙、餅果ありのまゝ見ゆ。またその傍に古き塚二つあり。これを問へば即ち「その舅姑の塚なり。」と。その年數を問へば「十年に及ぶ。」と云ふ。角左衞門感激にたへず、送りし者に有のあらましを語り、鳥目など配り與へて、共に送葬の儀式を資け、且跡の弔ひの事まで懇に計らひて、その後都へ上りける。あゝこの女房死すと雖も婦道を忘れず、舅姑に孝行を盡して夫を待つ、況んやその生ける時は知りぬべし。かの世の寡婦室女、いやしくもその夫を忘れて再嫁し、或は邪僻淫亂にして、終に媿づる心なきもの多し。この女房の風儀をきかば、すこしく戒むる所あらんか。

狗張子卷之七 終

諸國新百物語

俳林子

諸國新百物語序

軒をめぐる雨したゝりて、琴を調ぶるかと怪しく、徒然なるまゝに、ひとり燈の影にむかふをりから、友とする人ふたりゐたり、秋の夜のなが〳〵しきを、いかにして明さんと訪ひ來れり。予が云ふ、凡人の心を慰めしむる道、さま〴〵なりといへども、形を動かさずして、然も見ぬ世の人を友とすること、昔物語にしくはなし。爰に百物語といふは、おどろ〳〵しき話ばかり百に滿たしめて、不思議あるを待つ事とぞ。それは血氣盛んの若人武士などは好ましかるべし、わが如きは唯何となく見聞きしたることを打ち交へて語らんこそ、此上なう慰めわざなるべけれ。といへば、各これに同じて、ひとふたと語り出で、十づゝ十餘りにて其の夜は話し明しぬ。それが中には、艶なるあり、哀れなるあり、をかしきあり、怪しきあり、恐ろしきあり、これかれ證據正しき話を拔書して、話百に滿たずといへども改めず、諸國新百物語と號け、梓に彫むと云ふ。

元祿第五龍集春青陽上澣日　　洛下俳林子序

目錄

卷之一

卷之二

巻之三

一 菩提は縁による縫の佛 附 遊女の懺悔語

二 昔がたりの今井物語 附 慈母の邪見観音の慈悲

三 執心の深き名の海 附 悪を捨つる善心

四 恥を雪ぎし御身拭ひ 附 振袖喧嘩の種

巻之四

一 水で洗ふ頬傾城の情 附 幽霊消えたる雪の夜

二 難波の醫師は御後家 附 誰にか見せん姥の花

三 命は人間の魂の奴隷 附 代ていへる男

四 姫の皮被る姿の猫 附 越中自由のきた

五 不思議は物、妙は不思議 附 百物語

巻之五

一 名は顕れし山女有り 附 蛇の逢ひたる因果の報

二 懐かけたる命の緒 附 天狗物語

諸國新百物語　卷之一

一　志賀の隱家附尺八の叟

江州志賀の里は、往昔、景行帝大和國纒向の珠城の宮より、此所に移したまひし舊都の跡にて、さゞ波やしがの都はあれにしをと詠みしも、この邊の事なりしとかや。去にし年、修行しける比ほひ、此の山本に柴の扉を締めて、世を輕く渡ると見えし人あり。髪を禿にし、身には白き衣をかけたり。實に異なる形、これなん有髪の僧といふべしや。方一間餘りの庵室に佛壇を構へ、繪像の釋迦をかけて、松の眞青く供へし傍に尺八一管置けり。昔、長明が折琴琵琶を竝べし方丈もかくや。庵の外面に出でて、浦の名所目の下に、辛崎の松、堅田の浦、鹽津海津、瀬田の橋遠く詠むれば、竹生島も霞の内に在留めて、いと尊く見ゆ。往來の旅船比良の根颪に誘はれ、よるべ定めぬ様、また人の身の浮世の浪に漂ひけるもと思ひ合はさるゝに、いとゞ常なき心出で來て、庵の内をさし覗けば、僧尺八とりて、音取しめやかに吹き調ぶるに、四方の鳥獸翅を憩め、手足を束ねて聞きゐる態、あはれなる類さへかくあれば、身も安く心も進みて行くに、此の僧尺八をやめて、「不思議や此の調子に、人の音なひ

聞え侍るが、誰人にやと庵の外を見出したるに、やをら立ちよりて、「これは都方の尼にて侍り、御僧の徳をほの聞き、法の道の事出たきことをも、承り候はんと詣で候ふ。さても隱れたる御住居、有り難くこそ候へ」と云へば、僧うち笑み、「よくこそ來り給へり。されば人閑かなる所に住みて心を澄ますは、隱遁の宅なるにはあらず、たゞ市中に在つても、心動かざれば身も靜かなり。この故に、

世の中はあるに任せてあられけりあらむとすればあられざりけり

遠き里深き山に隱れても、心隱れざれば市中にも劣り侍らん、この心を、

世を遁れ山にいる人山にてもなほうき時はいづちゆかまし

などとも詠めり。されば予この尺八に心を澄まして、世の憂きを忘るゝこと年久し。茲に天然の妙を得て、この調子に種々の奇特を見聞くことあり。今暫し待ち給へ」と、尺八執り吹き出す中に、色鳥三羽飛び來れり。この時僧尺八を止めて、「今この鳥の鳴く音を聞くに啼聲あり、何樣師を慕ふの事あらん、見給へ」と。言下に忽ち鳥が音かしがましく、一つの木の實を奪ひつゝき狂ひけるが、白が羽風に驚き、何處ともなく飛び去りぬ。其の後に大きなる猿樹に在つて、叫聲腸を斷つかと物悲し。この時、僧語つて、「世の人はたゞ猿の鳴く音と許りぞ聞き給ふらめ。この猿一つの子あり、母猿に遅れて又後の雌猿をもてり。この猿始めの子を憎むこと甚しく、毬ある栗を喰らはしめ、忽ち咽に立

おいて暮しが、斯かる畜類だに、睦しき中の念ひは備へしき事ぞかし。親猿これを口惜き悲しみ、我に助けよと聲々に侍りしと云ひも敢へぬに、この猿小さき子を肩に乗せて來て、血なる涙をぞ流しゐける。僧、加持し呪念すれば、咽の栗飛び出でぬ。時に二つの猿、再拝して行方知らず。僧の言ふ、斯かる事は珍らしくも侍らず、いで都の客人に、をかしき業して見せ申さんことと、又尺八をとり出し、春の調子を吹き出せば、四方の梢色めき、時ならぬ櫻花藤山吹の色深し。不思議やと見ゐるに、夏の吟を吹きならせば、峯の櫻も散りしきて、青葉の木々の茂みより、蟬の鳴く音もいと涼し。秋の調子物悲しく、庭の草葉の露ながら、蟲の枯聲物寂しく、鹿笛にはあらねども、鹿のもろ聲ほのかにて、誰が玉章かけて來し、雁南に翼をつらね、冬の吟にうつり行けば、嵐凩窓寒み、山邊は雪の白妙に、香爐峯も斯くやあらん、摧敗零落の時を感じ、樹木凋み枯れて色を失ひ、千草消えて形なく、盛者必衰の理、生死無常を、一時に表はし給ひしにぞ、いとゞ殊勝に覺えける。「さるにても御名は」と尋ね參らするに、定かにも答へ給はねばやみぬ。かくて日もいたう闌けて覺えければ、暇申して都へ歸りぬ。この僧の德たふとかりしく、この後彼の所を訪ねるに、はや僧は見えずなりき。如何なる人の世を遁れ住み給ひけんと、いと不審しく、こゝに書き侍れ。

一　夢の通路[illegible]の怪

世に氣諸の六つ物、[illegible]上下の座敷に下戶の交りあはれなる、能き事でも親の意見、扨は思ひ女郎おもひ[illegible]にしてこれを筵には洩らし置きけれ、上野の春の花もよそにのみ、盛りを聞いて見し人の中、[illegible]も六へ、千里の外までと詠みし秋の月も、隅田川不忍が池に繭つる涙は[illegible]、永き日[illegible]の夜は、[illegible]逢合なしとて、せめて心を慰むる[illegible]ここに或人の息女、歳は十六の月に[illegible]、かたちらうたけて心ざまも優しければ、呉を傾けし西施の姿も斯くやと[illegible]しつ父母の御待遇[illegible]かなし、[illegible]の[illegible]御身に[illegible]てより、御こゝろ常ならず、[illegible]と面瘦せ、[illegible]聞召さねば、[illegible]の結び[illegible]事も危しと、寺社に[illegible]招き、[illegible]に驗もなく、[illegible]日頃[illegible]深く思召しけるおさごの方といふ女房、御側近く[illegible]寄りて、いかなる事にか斯く[illegible]しう見えさせさぶらふ。たとひ外様には御包み候とも、自らには何の憚りかおはし侍らん。命にかへても御志はるけさせ參らせんものを」と、細やかに物すれば、「扨は[illegible]に出でて物や思ふと[illegible]給ふにこそ、今は何をか包み侍らん。去にし[illegible]日の夜、[illegible]に忍び、この年比の物思ひ、ある時は

限ふ或は職を営む輩に、いは木なら我は人に心を張竹の、一夜ばかりと睦き初めて、いとうさを遣るかこく、夕には早く維へ、わがせこが来べき夢路を待ち、更け行く鐘に飽かぬ別れの憂め行く客を疏く、これさへあるに一日二日隔てわびても、通ひ給はぬ夜半もあり、一向渡のやつことなりて、かくまでは腹は晴れ侍る」と打ちかこち給へば、さこのなかいと不審しく其の部屋の口に寝ぬ夜の番ていはでゐけり、数に通ふ人もなければ、この上は貴き要職に仰せて御祈りあるべしとて、たのこる阿闍梨を招き、名誉の僧を召し寄せしが、有り聖界例にあれども、更に験なし、御心町こと言ふはいはひ、罷り出でて、其のあけの日より御祈禱と偽り、やうやう夢のつかへ人は来のけるやと問ふに、来りてと答へ給ふ、又其の頃より日毎して問ふ、まことに、かく四六時在所に侍合せ、隅信氏、雛の御部屋の内外を廻り、加持祈念すること又五度、若宮の裏の覚えより、幾度目とも知らぬ夢を覚めし、此の鶏の所為なりと云ふに、人を聞き侍しし、大河に流し捨てしが、其の後夜の通路も絶え、御心地いさぎよく、事出たき類を重ね給ひしとぞ、覚さく、鷹に馴りし女、かかる類あることは比類なき事、自ら変じたる実の年廻りて、来ること夜毎たり、其の良夫といへる者を捕き、鶏を殺す者ありて、或時夏良夜の鄰家に行くに、自ら遁、門の敷居を枕にして臥したり、即ち内に入りて、ゆうべ何故に夜来るや、と問ふ「来れり」と言ふ、こゝに妹を狐の宿貸へる事を悟り、彼

の猫を捕へ殺し、其の肝を取つて丹に煉り合はせ、女に與へ飲ましむるに、心地清浄しく何の仔細もなかりけるとぞ。阿部氏も此の故事を能く覺えて斯くは振舞ひけん、誠に奇特なりかし。

三　あけて悔しき文箱　附　義に輕き命

東海道のある邊に禪林寺あり、弘法めでたく見えて僧徒多く、小姓數多ある中に、美野部庄之介と云ふ男色、顔ばせ殊にすぐれ、昔男の初かうぶりせし姿、鐵拐がふき出せし美童もかくや。參學の窓に螢を集め、才智院にすぐれたれば、老和尚の覺えあはれみ殊に深し。同じ寺内に眞悔とかや云へる牢人あり、去る仔細有りて弓矢の家を出で、竹林院と云へるは母方の伯父なりければ、是れにつきて顯性成佛の心法を學ぶ。されど止め難き情の道、若きも老いたるもと書きたる、實にさる事ぞかし。或夕暮、庄之介を垣間見てより、思ひの火を胸にたき、夜はすがらに寢ねもやらず遣る方なさ、此のまゝに思ひ死なんも流石なれば、夢許りなりとも知らせばやと思ひ入り、日のかげ頼む同宿の僧にかう〳〵と語れば、いとやすく事受けしぬ。眞悔限りなく嬉しく、或は詩に思ひを述べ、ある時は和歌の文字を列ねて、恨みかこち云ひ送りける程に、庄之介もまたなくあはれにたへて覺えければ、是れよりまみえ初めて限りなき情をかさねけり。又ある夜少年の部屋に忍び行きて、雨の徒然を語る

隙、少年の云ふごとく此の日比の御情淺からぬに、此の身を任せまゐらせながら、我ばかりこそ明日なき期せぬにて候へこそ、思ひ遂れ給ふを積憤うち聞きて、などやか心に露も違ふことは候はん、我が一兄弟の約をなし、二世かけて思ひ侍る上は、たとひ一命は吾君故朽ち果つることも厭ふべき物かは、南無八幡大菩薩、努々変じ申すべきにあらず。いかならん大事にてもあれ、是れまで隔て給ふは情なしこなどうち恨めば、少年世に心よげに「扨は嬉しや頼もしくこそ候へ。今は何をか包み侍らん、我はこれ大事の親の敵を覗ふこと久しく、敵此の国に住むよし知りて、朝な夕な狙へども、我若輩の身にて兼ねて心を討たせざれば、能き便も定まらず、空しく月日を送るに侍る」と、涙に咽んで語れば、「其は何にて候ふか、我かくて在るからは御心安かれ、其の敵の何者にや」と、猶かきくれて聞へば、「洩らし給ふな、敵の名は竹尾武右衛門、只今は名をかへて隠れ住み侍る由、其方の家にこそ」と云へば、男は信解はるゝ云ひ、「其の武右衛門は我ほのかに聞きし事あり。此の上はいかならん謀をも廻らし、一たび彼に廻りあはせ、本望を遂げさせ申さんこと、何の疑ひかあらん」など、いと頼もしくこそあれかたるのありけるに、山寺の鐘の声に気遣く、鐘の響遠ざかるまでに聞けば、暁ともなりにけるに帰り入りぬ。其のあけの日頃僧の許よりとて、文箱に封つけたる、あわたゞしく持ち来れり。心ならずひらけば、

書き置き申す一通

あだしのの露とりべ山の煙、立ちのぼらぬ世のためし、一代教主だに逃れ給はぬ此の道、まいて愚かなる此の身に於てをや。誠にいかなる因縁にや有りけん、かりそめに見初めてより、心もそらになるとなる、あはぬ辛さをとやかくと歎き、やう／＼心も白雪の、とけて互ひにいとほしみまたあるべき事かは、哀れいかならん不思議もあれかし、命を君に参らせなんと日頃思ひ川の、かゝるまで深き心とは、いかで人は知り給ふべしや。ゆうべ承り候ひし百介が親の敵。武右衛門、只今は貞節我にて侍り、根を断つて葉を枯らす敵の末にしあれば、討ち申さんこと籠鳥の如く易く覚え侍る。されど我が手にかけて、いかでか君を殺し申すべきや。誠に人多き中に敵と敵、廻りあひ、兄弟の約をなす事、例なき因果の道理にこそ侍れ、其の上我一命にかけても、敵を討たせ申さんと誓ひを立てし事あり。此れ故にかく思ひ定めぬ、急ぎ首討つて親の孝養に手向け給へ、實兄弟の契り朽ちずば、一返の廻向をも、よのかたの百千にも勝り申すべく候。

一、此の事夢ばかりも知らせ申さぬ御恨み、鏡にかけ覚え候、かくと申し侍らば、いかで我が望み叶ひ侍らん、此所よく御辨へありて給ふべく候。

一、思ひ置く事もあらず候、見苦しき物ははや疾く仕舞ひ申し候、大小と小袖は住持へ御遣はし

たまはるべく候、自筆の歌仙一巻、黒髪は其方へ送り申し候、朽ちぬは筆の跡とふみ承り置き候まゝ進じ申し候、以上。

春の花秋の紅葉の一葉だに浮世に殘る色はあらじな

十月三日夜染ム之ヲ　　　　眞　悔

美野邊庄之介殿へ

と書きたる。少人此の一通に驚き走りつきて見るに、甲斐なくして腹十文字に切り、心もとを貫き伏しぬ。邊の僧出で合うて事の樣を聞くに、少人かうかうと語り、「我夢にも知らぬ事、かやうにはあらじ物を」と、死骸に抱き付きて嘆き悲しめども歸らず、命は義によつて輕しと云ひければ、かゝる事にや」と、各墨染の袖をぬらし、其の夜同宿うち寄り、葬の式嚴かに取り行ひぬ。其の後一七日の暮に、庄之介佛前に押肌ぬぎ、既に自害に及ぶを、同宿ども見つけ取り付きたれば、和尚も御出でましまし、さまざま教訓あそばし、惜しきかな十六の秋其の日、すなはち發心して亡き人の跡弔ひ、尊靈菩提、ともに一蓮托生の追善廻向を為し給ひけるが、世に類なき道人にてありけるとぞ。

四　女櫻狩もあそびなし男

都の舩岡山は、昔、容顔秘術の開基として洛陽五草所の其の一つなり。無常なる世の例に、續いた
きにはあらねど、貴人それ人となく、此所に送り捨て煙となすに、今更氣味く、往來の人、佛の御名
などうち誦じ過ぎ行くことに侍り。其のこなたの舩岡山と云ふ。いつも花の頃は貴賤うち集ひ、毛氈
を敷き座を設けて、幾等輩の中やら嫌はず、樽の前に並びなすゝめ、心浮れては自らが家路に歸るこ
とを忘るゝ。頃は彌生の末の一日、大師入定の日とて人々御室に詣で、菊木櫻の散りもせず、咲きも殘
れる花の色よにあかず、歸るさは舩岡の舟岡に人集ひて、所狹きまで賑あひぬ。こゝにある花
の林陰をかりて、清館の幕二つ六つ幕を重ねたる年頃の、きらやかなる女郎を
始め、二十歳三十餘りの女房數多、華麗なる衣裳、艶にうつくしきいひたる樣、遊けき雲の上人、大内女
郎等ともいふべしや、其の外次々下々の女まで、にくからぬ粧ひいとゆかしきが並み居て、上には
いとしめやかに酒の宴を爲しぬ。不思議やかゝる女中に、供の侍仕丁などの見えねば、いかゞと訝
しく、茂りたる叢よりやをらさし覗けば、たゞしめたる薫琴の音など、峯の松風に聞えたるまなら
ず、下の女の童散りくる花に嘯きて、空にしらぬ雪ぞふりけるなど戲れたる又優しく、うち並びた
る女のかくまで打ちそろひて、いみじき姿には在りけめ。昔、平維茂の逢ひけん戸隱山の女も
かくやはと思ひ出で、怖ろしきまでに詠め居れば、此方のかたより若人一人出で來れり。衣服手をつく

し、腰刀金を鏤めて、無下に賤しき人とは見えず、供の奴に草箒など樣の物提げさせたるが、一木
の松の高きより藤の內見下して、頤口かしがましく指さして、「あの君の惡ならず者なりとも存ぜん、
或は人殺しもならむ、面にあてつけさを」と、傍にはわけもなきことと云ひ散らして、耳を塞ぎ顏を覆ふ
ばかりなれば、藤の內より御簾を透りて、くゆる思ひを知らず顏なれど、取りあげもせず、直衞に默
書きて述ぶること、忍れを喚ぶ色もなく、道に緣につき、樣々の惡口雜言なく、女中が
たより人して、此方へと呼び入るゝに、男いなみするまでもなく藤の內へ入りぬ。やゝありしてこと
なき女郎、顏ばかりに赤らめ手をたゞく揃へて、先ほどよりあれに一人おはしまして、御徒然にこそと推量
參らせ、かかる御事も深き緣にこそ生まれ、一つは慰みにされよ、と思ひのたる緣に爲し給へは、
「有り難き仕合、あはれ此の世にこれを一夜かけて」と、ねと盃を引受けて飲み干すを、傍なの女郎達で今一つ、
一つと、引くに引かれぬ樽弓、手をかへて、杯、盃の數しらぬまでに重ねける程に、日も西の
山の端に傾くは、この若人主從ともに醉ひ臥し前後も知らず。其の時女中、心靜かに萬取りをさめ打連
れて歸る、跡を慕ひて見るに、在所ばかりの南に立ち並びたる屋七八丁、各々是れに打添ひて、
下々の女中御供の侍數十人、遙の跡後につきて、何れともなく行きぬ、いかなる人とも知らず。あ
りて若人はさむれば見るに、この人共にあとさきもいかで臥したりしか、人々に驚かされて、やゝら起きあ

ありたれど、足もしどろに舌しゞまりて、誠に可笑しき有様、ゆかしかりし衣紋も横に着なし、羽織りも、いつか取られけん知らず。是れまでもいまの女中、さりとては情なしなど走りまはりて、木の根蔦葛に躓き轉び惑ふ。花見にとて來し諸人、手を擧げ足を空になして、どつと笑ふ事止まず。かかるさへあるに晴れたる空かき曇りて、春雨頻りに降り來れば、顔も手も泥になりて、一身雨に浸りぬ。げに女の業には、賢しくも計らひし事なりかし、是れ偏に酒と色とに迷へる物なり、かかる恥かしき目にはあひけり。佛は女を夜叉と說く、酒は是れ量りなけれども、亂れに及ばざれと、古りし聖も敎へ給ふ物をや、謹みて畏るべき事にこそ。

諸國新百物語卷之一　終

諸國新百物語 卷之二

一 輕口も[illegible]は直し[illegible]好物問答

武州江戸の或商家の中に、何某彌宗次、助之進とかやいふ二人あり、傍輩の中なれば、わきて親しく深く隔てなき友なりしが、彌宗次は酒を好みて、煙草を嫌ふこと人に過ぎたり。助之進はまた煙草を好みて、酒は手にだに觸れず。二人ともに雜言賢しく、然も輕口の聞えありし。ある非番の暇、打ちよりて世の噺しける序、助之進いふ、「日頃貴殿の酒を用ひ好み給ふこと人に過ぎたり、是れもと[illegible]にして、氣血を廻らすの[illegible]、[illegible]此の故に過酒すれば、[illegible]起つて[illegible]を生じ、[illegible]に[illegible]て[illegible]の[illegible]なれば、佛は五戒の一つに戒め、孔子も酒には[illegible]しと敎へ給へり。今貴殿[illegible]、[illegible]の[illegible]」といふに、彌宗次打笑み、「げにや諺に曰く一を知りて、他の一寸を知らずとかや、眞なるかな、そこのかたにも又、事は見え侍るにや。凡そ其のかたの煙草者を見るに、朝未明より夕まで煙管を離す暇なし、此の草は是れ毒藥にて[illegible]、[illegible]の[illegible]あり、さればよしなき物にて、年中の冗費いくばくぞや。[illegible]

おもはゞ聞かん」と云ふに、助之進聞いて、「實愚心にはさもおはしまさん、いでさらば煙草の徳を語り申さん。抑此の草といふは、往昔の傾城の下逢つて鳥となり、灰吹の中に打ちまじりて、三度草木成佛し、其のゝ陽精陰神顯はれまし、其の後、地下にて劍を聞召して、あな甘しゝ煙草のみあまたを賞ひしとぞ。さらば人より先の煙草なればぞ、盆に雎うして貴人高位の座に列なる。天竺佛在世には、草木國土悉皆成佛の書あり、是れ則ち煙草の事なりとかや。唐にては大宗皇帝の愛ひ人、楊貴妃といふ美人ありしが、馬嵬が原にて殺されたり。帝此の別れを歎き思召し、はや／＼詔勅なりし。二つの塚より生まれ出でたる草なればとて、相思草と名づけ、わきて戀の因緣に打ち附けて、世の眷人の戯れとす。是れを服すれば思ひなき壽命を保つ、仙藥とて長命草などとも云へり。實永寺年中明くとかねたる恙を助け、まなまし物を小夜更けてこ、通はぬ男を恨みれるにも、せめて心を慰むるは此の草ぞかし。又吉蒔と云ふ藥に煉りては、人の離れ物を癒し、是れをきざみ附くれば、切疵に妙あり。鬱憂は言葉のすがら物語にはなれず、日待月待の眠りを醒りて更に慰みとなし、凡そ此の草の名皆多しといへど、甲斐の國、攝州の服部、丹波の窪、此等は皆上なる草の類をあらそへど、名にし負ふ吉野の薫に如くはなし。此れ故に當實他に勝れてもて與する。此の心を伊勢物語に、

みよしののたばこのかねのひたぶるにきみがこはでもよるといふなり

など〻と詠めり。されば一所の重さ百六十匁は十六善神、一滴の目の四匁は四天王の象なり。故に佛神の守護なきにしもあらずと言ふに云ひあへれば、彌宗此聞いて二根よくも言ひけるものかな、まづ我が好む道の事を云はず、天地未だ別れざる時、丸がれたる形は鶏利の如く、澄める物は至つて高き者を天となり、下つて暖きは濁り酒となれりける、しかありしより素戔嗚尊は、やまたの大蛇を殺さん謀に八つの酒壺を拵へ呑ましめ給ふ、是れ神代にも上戸の有りけるしるしに侍り。是に又の春の屠蘇酒、上は天子より下庶人の賤に至るまで此の壽を賀すに、幾桶を酌く、やとなるとかや。端午三日の桃花の宴、曲水の盃が闇の桃を浮らせけし例ひあて、三千歳にたるてふ種り、と詠みしも此の事ぞかし。重陽の菊酒、是れ又不老不死の良薬なり。去はて、神社にては三献の形様あり、神に上ぐるを神酒と云ひ、岑宮の迎人を酒迎へと唱ふるも是れ皆酒の霊れぞかし。昔きく淵明は一盃を楽しみ、詩にも酒家門外に日に盞を遊すなと作れり。誠に楽しき中をも和げ、味作酒から輪り、或は音迹の仮令、何れか酒にあらざる。斯かる佇まひに有明の月見花見道山観来、只酒を以て宅とするにあらずや。た、戦しく呼びとこたへて黙に云へば云はるゝものぞと上戸の舌打ちなから、驚きの盃の上に何事を言ふのこととて、いざ、さらば石火の燧の中に煙草をますっと戯れたる一時に徒なる世を思へば、一様の種花の露より猶くも心地、一草の煙草消ゆる間の人の身ならば、誰も彼もはかなき夢とぞいはるらん、短き世に

戒を保ち、足を運び何にかはせん、只のむには如かじと、杯取りて傾く月のこるまで飲めば、煙草きしなき咳ひつゞけて、夜も白々と明けがたに別れ歸りぬ。をかしき事どもなりかし。

二　祈りに誠ある福神　附　心の白鼠

加州の金澤の邊に、四郎六郎といふ商人あり、天性遊興に長じ酒に耽りて、然も色の道深し。斯くあれば家衰へて、商賣の便絶えだえに、軒は雀に閉ぢられとてや、あばらなる住居、實に哀なる世渡りなりけり。されど福を祈る心ふかく、大黒天神を勸請し、いつも甲子の日は供物を捧げ、燈明を燈けなど、誠に殊勝なりけり。ある月の甲子に當りて、例の如く燈ともし捧げて、一心に祈念するに、何方ともなく白き鼠の大きなるが、忽然と顯はれ出でて供物を食する。亭主是れを見るより、有り難や我年來念ずるの感通じて、福神の遣はしめ、今宵に來現し給へりとて、喜びあひて、其の翌の日は親しき友達呼び集め、此の事を語り祝事をなし、日暮るゝまで酒の宴を重ね、友達の者ども、實に目出たき事に侍り。されば其の白鼠とやらんは名のみ聞きて未だ見たることなし、目出度物語の種にも拜まればや、今宵待ちて一目見せ給へなど云ひあへるに、亭主諾ひ、其の夜又燈明を捧げ、各集まりいるるに、案の如く白き鼠出で來れり、人を見るよりあつと云うて立ち騷ぐに驚き、此の鼠逸早く歸る

と見れば、常の黒き鼠と成りて失せぬ。各怪異の進みし跡を見るに[illegible]
其の通りける壁の穴を求めけるに、其の[illegible]に[illegible]を[illegible]家あり[illegible]の中に隠れ住みしが、
直に爰へ来れる故、白鼠とは見えけり。人々の立ち騒ぎけるに驚き、慌しく駆けの[illegible]
にぞ、[illegible]
[illegible]事の[illegible]に[illegible]、[illegible]大黒神に向ひ
て、泣く〳〵恨み申しけるは、「我れ此の年来[illegible]の中に[illegible]、[illegible]へ[illegible]玉はぬ
[illegible]、打歎き歎きけるに、大黒神亭主の枕元に立たせ給ひ、[illegible]御心に「まこと
に[illegible]
与ふれども、[illegible]にのみ耽りて、金銀の集まれる[illegible]を[illegible]中[illegible]家に[illegible]
[illegible]事のいつもあるとは思ふなよ夏のあつさに冬の寒けさ
と詠みし、此の心にて弁へ知るべし。又古の聖の書にも、宝道[illegible]て入るものは、又[illegible]出づる
[illegible]此の故に宵の鼠盤亀に[illegible]れ出でたるも、汝に富貴の道教へ[illegible]、大鼠の
[illegible]、不思議[illegible]しと、[illegible]在へ[illegible]の[illegible]教への如く見る
に、[illegible]は[illegible]の形なり、[illegible]

祈らばぞかかなしかしに大麥の身を粉になしてかせげよの中

とありし。亭主是れより改めて遊興を止め、一向賣買の業をなしけるが、程なく富貴の家となりけると

ぞ。人は神の徳によつて運を添ふといひしに、誠なるかな。

三　恨みに消えし露の命田村が野邊の女鬼

惜しめどもとまらぬ春の夕暮、名殘も流石、げに明日を期せぬ人の世の仇なる樣、又の年の花見たこと も、更に頼むべき命かはと思へば、住み荒れし柴の編戶、引きたつる霞の空に心も浮きて、都の東を北に歩めば、是れなん東三條の林頭とかや、纔かに其のかた許り殘りて見ゆ。こゝは往昔、鵺の化鳥此所より顯はれ出で、禁裏に災を爲しける跡なりしと。續きて岡崎の里聖護院村あり、朝夕に西に靉靆くと詠み給ひし、紫雲山眞黒谷を拜み行けば、御所女郎童、花見の往來袖を連ねて櫻に躑躅折りそへたるぞ、見ぬ人のためがほなる。猪山を越えて吉田の御社に詣づ。抑も此の御神は貞觀の昔、中納言山蔭卿の建立勸請ありしとぞ、大内近く宮造りましまし、帝祚の長久を守り給ふ事著し。此所に兼好の住みける舊跡あり、さばかりの歌仙道人なりしかども、名のみ殘りて今は目馴れぬ草のみぞ生ひ茂れる。山を跡に過ぎ行けば、或道野邊に人多く羣れ居て、立ち寄るべくもなく、彼方

に罵り此方へ走る。「則何なる事にや」と尋ぬれば、「或る嫉妬強き女の死にたるが、鬼になりたるに侍り」といふ。さて珍らかなる物語をも聞ける事よとて、やや近づきたる時より、人の隙間よりさし覗けば、歳の頃三十と言ふべきにはあらねど、いかに衰へしか、烏羽玉の黒髪はふとく逆に立ちて、目の内朱の血汐になりたるを見開し、歯も口も黒く節立ちたればこそ、まことに鬼と云ひけめ。「さるは、そも如何なる事の様を聞くに、上京のある家に御乳母民部とかや、色好み明暮、日頃傾城に通ひしものが、心当りの人目の間を忍び、此の比ほひは外なる家に美しき女を置きて、又なく契りあひけるとぞ。此の本妻は嫉妬深く、年月嫉みを焦しけるが、夫のみと恨み、いと恨み嫉り、胸の火に焼でかけ、我が思ひの晴は晴くことを願ひけると数月に、夜は燃ゆる胸を打ちかけし、提子の水の浦を遡らむとはなくなく在りけん恨みしが積りに「と怖ろしきまでに覚えしに、民部も今は持て扱ひ兼ね、とやかく訴へ合ひて親里へ帰し遣はし侍りしが、是れより此の女、心狂乱して、野を走り山を漂ひ、遂に鬼とは化したりしならんか、此所にて狂死にけるとぞ。此の怨霊在田を離れて、民部も妾も心地煩はしくなりて空しくなり、家亡びけるとかや。其の間、此の霊魂の猛き事、一酷の心にて、至つて言ふべくもあらざりしかば、昔より長宗と云ふ官に訴し給ひ、此が為に、天台の僧侶なる、忍びて通ひ給ふを知りあり、其の身へ聖道を遥にさるゝに、此の女を顧りて、御霊前へ祈らせられけるに、鋒を御覚ありて、

賴むなよ行くすゑかけて變らじと我にもいひし言の葉の末

と短冊に遊ばし、女の方へ送り給ひ、又義隆公へも、

かよふかたふたつありその濱千鳥ふみたがへたる跡とこそ見れ

と詠み送り給ひしに、女いと恥おもひて、御暇申し出でければ、義隆公も此の後割なく語らひ坐しけるとかや。かく貞なる志までこそはあらざらめ、あさましくも迷ひけるといと哀れなり。斯かる愧物語、古くいひ傳へたれど、げにとも思はざりしが、今まのあたり見聞きけるに、いとゞ菩提の道願はしくこそ覺え侍れ。

四　問ひ落したる言詣 附 戀の濡衣

何れの御時にか在りけん、山城深草の里に、何某織部といへる聞えし人あり。橘の氏人にて畏しうはありけるが、さる仔細あつて此の所に隱れ住みけりとぞ。娘一人持てり、貌類なきのみか、心ざま迄に優しければ、昔の縁につきて、幼きより大内の或方に宮仕へして、琴の調べ歌の御席に列なりけるほどに、小町、式部が流れを汲みて、筆の跡又美し。されど上なき色ごのみにて、浮名のみ高雄の由と云ひ立てられつゝ、院地の内の住居かなはず、親なる里に下りゐたりけり。頃は卯月末の五日、北

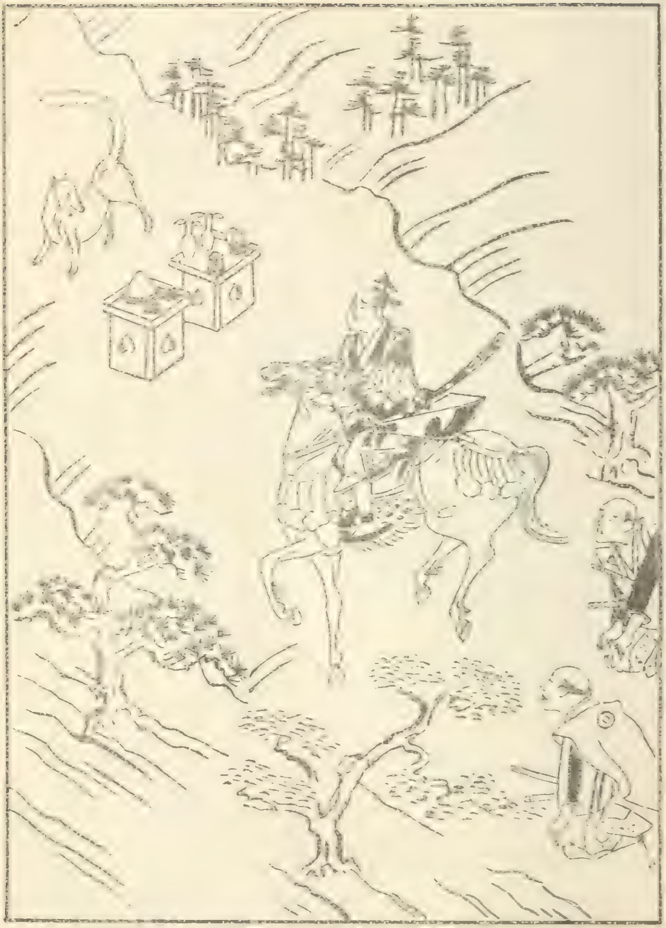
野口翁の途上なればとて、供の女一人供して遙々と詣で、歸るさまには坊門を東へ京極を南に行きて、
向ふより二十歳頃の男の、顔ばせ清らかなるが、今樣の伊達手を盡して、早からず歩みたる、髭よく頭に眼を見
合せしに、此の男いと情らしく、振り歸り見たる面ざし、又あるべきとも見えず、此の女心を奪はれ
けれは、歸三ヶ月を經て後に此の若人は如何なるかたにて、何處の邊に住給ふやと
思へど、誰れ目に見えぬ所に、ほうノ＼の人に問ひ、日々と、日數く語り捨て行くに、何となくなご
り惜しき心地に胸迫りければ、此の女の面影見ゆる樣のはなきも推らでありけるを、
暮うたれ待ちなく、是を戀ひ、涙の床に臥して、いとゞ言に色深き女の、夜ごとく思ひ初めける樣に、其
の男をゆかしく思ひしかなき戀に臥れて、此の人に見せん包み、我は涙の此に臥して思ひ續くれ
け、白雲のあとはかなく行く身も誰ぞ住まのしるべなかりける、と詠みしに、是れは又誰をして斯くと
ば思ひ遣すべき便りもなく、此の事に戀死なんよりは神にも佛にも祈り見ばやと、遂に逢けを音羽山の
清水寺に、七日の詣して、暮々祈りけれど、露にもはかばかしき驗もなけれど、白瀧詣でせしけるが、其
の寺の後なる瀧に落ち下りて、白き衣を着てひたすら一心に祈りて、瀧より本堂を廻り奥の千手に詣でること、三十
三度にて、この頃はいと寒き折から、なほ透通りて凍しさ言はん方なし。三十三度終
りて、或晩方の罷に出て歸るさま、東山此の頭を望み、我此の日比願しき明に逢ふまじの業あら

は、菩薩より下へと仰せてたべ。若し然もなきに侍らば、此の身を五の木の枝にかけて、命を取りて給はれ。南無観世音」と諸共に叫ばんとするを、後より今暫しと抱き止めて、「若殿なる聞き侍るに、優しくも哀れたる心ばへ、抑何なるが故に思ひ煩ひ、いとへにかく佛までも頼み、命をかけて切に祈り給ひけるぞ」と云へば、女嬉しうつぶき、「恥かしながら今際の限りに候へば、何をか包み申すべき」と始終を語りて、かう／＼の事にはべり、若しや彼の人に邂逅のかたに幼さば、此の哀れを御物語し給へかし、殿中にと云ひ捨て叫ばんとするを、女猶頻く引き止めて、さても不思議や其の聴はるゝ男は我にて侍り。今宵不思議なる御告により、まだ夜深けれども詣で来りけるが、かゝる事にはあへ侍りぬ」と云へば、女さもやと思へども、東雲のほの闇さに判然たる能はで、物の色あひも定かならねば、「いと恋しからずや」など打疑ふ。男「さらば此方へ」と御堂なる御燈明を挑げ、互に顔を見合はするに、此の日頃慕ひ悲しみける男なりけり。かく御佛の引合はせ給ひければ、二人共に連れ帰りて、永き契りを重ねけるとぞ。彼の若人も勝れたる色好みなりければ、是れまでもあまた佳人にてゐけるか、此の女の色のやごとなく見えけるのみか、深き心ばへに感でける程に、浅からぬ妹背川の深き中とはなりけり。誠に著しき佛の利益にはありけれ。

五　初聲は家の榮え附夜啼の評

小兒の夜啼といふ事、世に多くあり來れり、さりとて重き病とも見えず、醫書には心經に熱ありて此の患ひを爲すといへり。されど藥にて治せざるもあり。此の時、巫に頼み、或は神言の貴き僧の加持などにて、鎮まることも[illegible]。然れば邪崇のなす業[illegible]、一概にして論すべからざるなり。むかし或國の守にておはしけるが、御台の[illegible]まで[illegible]御世嗣もましまさず、家中此の事を憂ひ、神佛に祈り[illegible]に祈る事年久し。何時の頃よりか、御台のお心[illegible]ならず、月滿ちて御産の紐成に安らかなり、御顔みえて玉の如き若君なれば、上樣においては更なり、下が下まで喜びあへる[illegible]。醫師・陰陽師、家傳の方藥[illegible]、祈禱の功者、種々の法、神道の[illegible]もて[illegible]はらひ、[illegible]を[illegible]して、初聲を[illegible]ど、[illegible]なかりし。されども夜啼し給ふこと[illegible]、[illegible]にやまず[illegible]、[illegible]の[illegible]、一間の[illegible]に[illegible]て、[illegible]、[illegible]にかけて、夜もすがら[illegible]。[illegible]守[illegible]召し、寺西河内といふ老功の侍を召し、委細に仰せ含めらるゝ事あり。寺西畏まりて[illegible]、[illegible]の[illegible]にて[illegible]を[illegible]、門外[illegible]の事[illegible]、[illegible]、[illegible]





巳なる山に青貝にて巴摺りたる鞍置き、供廻なほ汚穢を拂ひて、御城の後に茂りたる山有り、其山まで馬乘り寄せ大音聲にて「そもく、此の國の守殿何某男子誕生あるところに、夜啼の禍在りて止む事を得ず。早く此の難を止め申すべし。若し驗なきに於ては、一國殘らず狐狩あるべし。」と仰せによつて、寺西何某罷り向ひ侍る。」と呼ばはつて、持たせたる供物をそなへ、馬を控へ呪念する所に見えしが、忽ち大きなる白狐出で、供物をとつてはや失せぬ。寺西馳せ歸りて、右の次第を申し上ぐれば、國の守御機嫌よく見えさせ給ひし。是れより夜啼とまりて、芽出たく生長したまひしが、才智發明の名將にて坐しけるとぞ。かかる野狐の類までも、守殿の命を重んじけるか、はた寺西が術をなしけるか知らず、不思議なりかし。

諸國新百物語卷之二　終

諸國新百物語 卷之三

一 [illegible]

一年七(?)月路に[illegible]、[illegible]、[illegible]

[illegible]かくは住ひけんとさし覗けば、年の頃三十餘り[illegible]

[illegible]」と藁席敷きたる一間に誘[illegible]

[illegible]

はらと流れの女にて、常盤と云ひしものに侍り、げにうきふししげき呉竹の、彼方に離き此方に枕ならべて、通ふ男おほき中に、何某右衛門と云ひし方、わきて志浅からず、此の世の外かけて又なき契りをなし、浮き身の末をも其の方に任せ置き侍りしに、頼まれぬ人心、今更にはあらねど、昨日の淵は今日の瀬と変りて、女郎も多くある中に、此の男わが傍輩なりし若山と云ふに逢ひて、深き情を盡しぬ。此の辛さ妬ましさ、物狂はしきまでに恨み思ひければ、若山も亦我に心をおきの火の、身を燃し胸を焦して、互に執ねき妬みなりけれど、傍輩の悲しさ一つ所に起臥して、心に深くおもひ寝の夢の枕を並べけり。或夜又二人相共に臥したりし夢に、若山此の夫の事をいひ出で、息巻きのゝしると思へば、忽ち二つの角生ひ、怖ろしき顔、我に向ひ飛びかゝる。「よしや我こそ命かけし夫をわごぜにとらせ、胸に焚く火の消えやらぬ、是れ見給へ」と吹き出せば、火焔となつて互に掴みあひけると覚えていと苦しく、一身汗に浸り夢さめぬ。傍に臥したる若山が、甚う魘きけるを動かし起し、「只今かかる恐ろしき夢を見し事よ」と語れば、若山も同じく、「露違はぬ夢を見けり」と、是に於て二人ともに慙愧懺悔し、日頃の妬ましきを語り合ひけるに、たゞ煩悩の闇にのみ迷ひて、暗きより猶暗きに辿り入りぬる浅ましさ、恐ろしくも悲しく、此の夜二人共にかざり下して密かに忍び出でけるが、若山は妙吟と改め、都の嵯峨野の邊に住めば、妾は妙安と改名して、此所に住ひ侍ること九年、年月

衆の罪障[illegible]く、彼方此方より通ひ来りても、[illegible]集め、三尊佛を自ら素手にし奉りぬ。此の頃は中將姫の昔を慕ひ、かく彌陀の像を[illegible]と、下に一向[illegible]の事[illegible]思ひ煩ひ[illegible]、一冊の[illegible]を開けば、[illegible]の本尊たりし。傳へ聞く證空上人の菩薩[illegible]、昔し江口の君[illegible]、かゝる事にやと思ひ出で、[illegible]、法の[illegible]、日を西に傾けて[illegible]、日に過の[illegible]て、人皆の道に[illegible]野中[illegible]人の執を[illegible]、途[illegible]つゞけし千束の文[illegible]の像[illegible]下に[illegible]の[illegible]として、男女の道を守り給ふとぞ。それは上代[illegible]に又末世に、[illegible]まで[illegible]奉り安置しけるは、[illegible]志、[illegible]心の因もある[illegible]にて、[illegible]に[illegible]侍りぬ。

二　昔なつかしの今井物語[illegible]

[illegible]方に、今井何某といふ[illegible]あり、[illegible]なく、若干に[illegible]殊に[illegible]一人持てり、名を松[illegible]と申[illegible]幼[illegible]賢傳を[illegible]て、[illegible]智世に超え、陽明が[illegible]かゝやとまであやし。されば儘ならぬ世の例今更にあらねど、[illegible]王[illegible]にまおくれ、悲しみの涙袖くちて、ほす日をいつとしら波の、お[illegible]に[illegible]給ひし後の[illegible]は、[illegible]、[illegible]か、[illegible]世の[illegible]しきほど、うた

ししまはるらむで二人のわか子を置いて、有人の童子を精なし奪れたに、これには引代へとよかりか
た、松王は御菩提にたふことは、これなき、一家の陣上井筒御、我の悪行にも思えあて、世の事
に御台所の使を挟み給ひけるに、ただ黙りの水に薬を添へて、「若殿こそ昔の母上をあけしに、御方
は偏て補て思う給へたなど、古老のの申すものの、あれば、いと〳〵怒り給はして、東の方にて曲
水の宴にことよせ、毒の酒をすゝめ殺し申さんと、御身近き女房達に申し合はせて、既に其の日を待ち
給ひけるこそ恐ろしけれ。松王かかるべしとは知り給はず、繼母のかた萬づよくあたり給へば、何かにつきて
昔の母上戀しく、今は一向佛の道に入りて、尊靈菩提のため、毎日三十三卷の普門品を怠りたまはず。
今宵もまた御勤め終りて、佛の前にやゝまどろみ給へば、在りし冥土の母上枕元に現はれ、松王の袖
をつく〴〵とうち詠め、「いたはしの有樣や、我世に有らば、何か小姫女房どもそれ〳〵に傅き、然もゆ
かしからんものを、それにはあらで斯く侘しく閨を篭り給へるさま、あな、いとほしの此の若や。さて
も繼母とよのかた、吾君をにくみ思ひたまふのみか、ゆう〳〵の事にはかりて、殺し奉らんと企み
れ、祖師へて心ばし許し給ふな。我かくと知るよりも、悲しさのやるかたなく、冥土の大王に暇申して、
今宵に來り知らせ侍ふ。はや冥土の約も近くなれば、又こそ逢に歸るに侍り。あな名殘をし。」といふ露
の、かい消ち給へば、松王夢さめ四方を見れど人もなし。まさしく今のは母上にて、世にも嬉しく、思

ひしに、扨は汝にてこそありけめ、我と知りせば覺めざらまし物をと、今更袂を絞り給ひしが、さるにてもあらたなる夢の告げなればとて、上巳の宴は心地あしきよし僞りて出で給はず。是れにこそ繼母の手段には、誰か松王に知らすべき者のありて斯くはしけんと、父上に讒をかまへ、あらぬ手段をなし給ふに、散りし梢のあとは薄く、今咲く花に目をくれ、やがて松王を追ひ出したまひぬ。こゝに邸より二里隔てたる里に觀音寺あり、往昔聖德太子櫃の木一本をもて作り給へる千手の像にて、いと尊き御佛なりき。其の所の住持某の法印は、松王の乳母の兄なりければ、賴りて月日を送り給へり。是れまでもとより心猶やすからず怒り罵り、平内と云ふ下部を召し「かうかう謀らひ、首取つて參らせよ。」と。再三拒み申し上ぐれば、母公氣色世に怖ろしくかはりて、恨み息まき給ひける程に、今は爲方なく御請け申しぬ。既に其の日もくれは鳥、あやなくくらき闇の夜なるに、彼の寺に忍び、有り樣を窺ひ見れば、松王殿は佛前に念誦してゐ給ひしを、いたはしながら後ざまに刺し通し、首掻き切り引下げ歸り、母上に見せ奉れば大きに悅び給ひ、平内には引出物あまた給びてけり。首をば庭なる松の木の下に深く埋め給ひければ、いかなる人の所爲とも知らざるぞはかなき。其の翌の夜松王の父何某、不思議の夢を見給へり、年は八十ばかりの翁の、雲の内に立つて宣ふ、「扨も汝はかなくも、女の色に深く迷ひしより、一子の松王丸繼母の爲空しくなりぬ。爰に先だちし母是れを恨み、天帝に

訴へ悉皆に成就し、鬼神怒りを含めり。夜明けなば隠田とよりかた、不思議の天災に逢ふべし。猶松王が首に、そこ／＼の松の下に埋めり」と、誠にあらたなる告げ有りて夢さめぬ。斯くて其の夜も早く明けて、午の刻ばかりに俄に黒雲たなびき、雷電山を崩すが如く此の家に落ちかゝつて、親母とふたつにひき裂き失ひぬ。此の後雲霽れ雨止みて、元の蒼天とぞなりける。今井氏もさるものにこそ、其の人の首に夢を託かず、或は在世に焼くる所あつて、これも夢ならねど、さらに信用せざりしが、此の不思議に驚き、猶夢に任せて一本の松の下を掘るに小さき箱物あり。是れを開けば観音の御尊像の血に染りたるが、光明赫奕と照らし拝まれさせ給ひぬ。「さしも松王はいかなる所に忍びゐ給ひし」と尋ねたまへるに、「かう／＼の御寺に坐すことを知らせ参らする人あり。其は其の御仏の告げなるり。」といと尊く、急ぎ自ら彼の寺へ詣り、松王の行方を訪ふに違ひなく、久しき親子の対面を為し給ひけり。其の後御戸開帳して拝し奉るに、千手の尊御髪はなくして、御形ばかり拝まれさせ給ひぬ。見聞の人々信仰の頭を傾け、さては御仏の身代りに立たせ給ひけるに疑ひなしと、各々涙を流し、彼の切られし御髪をつがせに、元の御本尊とぞなり給ひける。今井何某も眼のあたりかかる奇特を見ければ、先非を悔い、俄に発心し、名跡は松王に譲り与へ、仏道修行の身となりしとぞ。今に首切れの観音とて、いと尊き御像なりけり。

二　執心の深き妻女の嫉妬の事を語れる事

無下に近きころ、東のとうふゐんの邊に、伴の善七郎といふ美男あり。其の先は去る御所に中小姓の宮仕しけるが、聞いたまれる事ありて、暇乞申し里にかへりつ、世に昔の人にてありけるが、田中の宇治其の一つの様なりしとなん。折ふしは源氏物語徒然草伊勢物語など講じて、細やかなる世渡りをなせし、同じ世帯町に隣借しけるが、縫うて家業とする家に娘あり、名をきぬといふ、容貌すぐれて又なき色このみなりけるが、何時の比か善七を見初めしより、ひとへに心を寄せ、恋の思ひ堪へ難く、燃ゆる思ひもあるに、只うか／＼と眺り居る所に、思ひ余りし懐より歌を書き、かの男に得させけるが、あるいは語るに易く請合ひ、便りの度に善七に心を尽さんと約したれども、いと優しく哀れに思ひければ、密かなる宿許にて、互に見えそめしより、たがひに情の深かりしが、女は文字を知りたる機転もいと勝る心持ちにて、誠に浅からぬ中となりけるが、ここに

ひけれど、胸ふさがりぬ。かくても叶はぬ事にあらねば、さまかへも断へといひ遂り、密宿にて名残など惜しみけるに、人聞き悲しきことも目もあてられず。それと近き五月の比は、迎への人を上せなんに、心長く待ち給へこなどいさめ、宿の夫婦も教訓して、涙ながらに別れまゐらせぬ。實に哀れなる樣なりかし。あくれば日柄よしとて東路におもむく。八幡の山崎まで宿を出づれば、曉の霧籠をうちはらし、いとゞ恐れたる心地して、三條の橋を東へ行くに、南を見れば稻荷の社大佛殿遙に朝霞こめていと尊く見つゝ拜み過ぐれば、昔能因の、都をば霞とともに出でしかど秋風ぞふく、と詠みしはゐなかく、是れは山城の白川を越えて、あふ坂につきぬ。これやこの行くもかへるも、と聞こし關路、小町のあとふりし關寺を拜み、湖水の八景眺めて、逢ふことは粟田の浦の名もつらく、昔に近江の國とことぶき、瀨田の長橋足とかゝる浪打ちわたりて、草津より石部の宿につきぬ。始めのほどこそはあれ、あけの日より病づきけるに名所を見捨て、古きあとをきかず、土山といふに伊勢の桑名につきぬ。都の手つだひなど、やどの主に案内させ行く道野邊に、都の女さまのかた、飛脚に便にたてり。「こはそも如何にして爰へは來り給ふぞ」といへば、女聞きて、「さればこそ君にわかれ參らせ、ながらふべき心地もなく、此のまゝに思ひ死に侍らんよりはと、女心のはかなくも、君に逢ひ參らせんと、夜を日になして參りぬ。東とやらんへ連れ給へ」と打ちなげく。聞くもいと怖しく、

心地とゝえさけれど、諫めていふべきことに武藏までは遙けき旅のそら、殊に女には難しき切手なくと申すことの何とて、たやすく下らんことは難し。是れより歸り給へかし」といへど、うけひかねば、すんかた波の海人が舐、鎮へも先へも行きやらで、田舍頼びるけるが、かくて日數ほどふりて、はおしかりなべし。一まづ都に歸り上り、其の後ともかくにもせばやと、是れより女を具して歸り上りぬ。宿も近くなれ、我もそかになるで、此の女の父母に未だ見參せず、然にあれど此の度對面し、此の事を語りいあらんずとせばやと思ひければ、直に女の親里に行き、先づさまを門に殘し、自ら門に入つて、女の父母に逢ひ、前後を語りければ、いとやうく\に侍ることと云へば父母聞きて笑び、「不思議や我が娘のさまは時の父母の覺を離れず、今まで病に在る事のみ、昔し入道へにこもりゐること有るに、二さらば」といひて、門の外なるさまが手を引きて父母に見せ奉るに、少しも違はぬ娘なり。これは怪しと手前いで呼び給ふに、内より出づるを見ればまさしく、誰も雲ふ衣裳も等しからず、同じ娘二人忽然と顕はれもとか、見る内に二つの形一つに合して只一人の娘とぞなりにける。此の時娘病癒し、われと我をしり、君に別れ參らせしより夢にいかにも忘れず、偉を逢ひて名まで下ると思ひくしけれども、これは我が魂の惑れ出でたるにてぞあるらん、恥かしくも思ひし頭の程ぞや、と、且は泣きみあるに戦まで、御身方の病上り愛娘を助け、愛娘の側にうまなかへり、奇しき人の執心ぞえる/\しき、日の

まへに見ければ、世を厭ふ心つよく、是れもおなじく發心して、東へもゆかずなりしとかや。是れなん唯識師も菩提なるべし。

四　恥をそゝぎし御身拭并振袖喧嘩の種

都の嵯峨清凉寺の釋迦は、赤栴檀の尊影にして、毘首羯磨の作りしとかや。三國傳來ましまして、今此の土の衆生を化度し給ふ、霊験著しく、諸人歩みを運ぶこと他に勝れり。中にも大坂の御堂の邊因、此の御像を拝まんとて、遥々の道を經て詣で、御戸開帳し、まのあたり拝み奉るに、卯木宗連にまみえさせ給はず、いと悲しみ、是れより年々詣づるに拝むことを得ずと。如何なる罪障にありてか、かくは在りけんと後悔しき。いへも彌生の初めの九日は、御身拭とて殊勝なる法事あり、さらでだに詣づる輩の引きもきらぬに、まして照る日の春霞、人の心の浮き立ち、後生にたるものも、自ら歩みを運ぶことになん有りけれ。こゝに種日の小路に、何某志し篤とかや云ふ商人あり、其の獨りなる家に嫡之家とて、やごとなき少年ありけるが、とやかく云ひかたらひて、人しれず男道の契りをなせしが、今日しも又人目包みすたゞ二人、嵯峨の方へ志し行き、佛の御前まへに佇み、且し送りて、行衛なくくも見えきた、やゝやすらひて心静かに念誦し、本道は人目しげしと、野をかたへの細道をつたひ、下嵯

賊へとあゆみ行く。向うより大の男のむくつけきが、其方に目を見合したる、最早心地と見えて、そゝ
ろ歩しもはかなく滅び亂れ來しを、是之衆を見て三度頭を下げし顔をや、かく迄遊びのほど結構がましくこそ
候へ、これに一ツ手を止め、替に手をいれなど、鼻高なる奉公、惡七郎兵が扱ければ、二には理不
盡なる人をやる、此の日下無用の事有りて、下賤へ那るものに仕り、そこ除け通し給はれ、と云
ふ、聞もし申すとて、其の甲斐もと云はせて、二人の男と代はり、左右より引張りていふ、先ほど
是おもふ少年を見知りしに、偏寵を心くれしいかんとも詮方なし、思ふに此の若人に、其の身の方が
東寝せんとて、かれら若衆は此のかた一段すぐし、是非に茂げ出して、其の手を若刀を抜いて、腕元
につけしを見てかた國もれ此之衆と、かく手柄にあひければ、腕方なくおかれて一歳に徒の筆に御
心の若き首領の、替りかたに入るを得て、去りながら此れを渡し参らせなば、一分いたさず申すべく、ただ
との若衆かたは、こに譲かれ、身を此のまゝに刻まれ申すとても、ふつと存ぜぬ儀にまじ、只今は手く
いかにしても衆堪へも得ず、年をうちならせ、各の御心をはんけずと申されに、御許しあるかな、とい
ふに、いつも皆し、偏愛へる際して、實誼へらされたる料簡なく、さあらば、と刀を納め、打連れ酒に
出で、かの家に入りぬ、酒一通りのすみて後、諸とふふ懇望を示し、山海の珍肴を調へ、一歳に下
田の御身方、重き遊を仕すにぞ、これは御挨拶に候へ、せめては國立されよかし、とて、打ちとけて、杯

四數十ヶ二つ三つ指折るゝ所には、三人共に酔ひ出で、少しもこたへぬ體なるを見て、忠七も茂之介も、物々ともさせず先に行きぬ。やゝありて茶店の亭主出で、今日の唯銀申し請けたし、といふに鼻を透き直り、「其の値は酒菜の支配なり」、それ〳〵にといふを亭主重ねて、「いや其の二人の輩なれば、先程より此の中さまして此の時、人手を引つて、早に然にて付ふて、未だ遠くはゆかじ、追ひかけなん」と走せ出でしを、亭主押し止め、「先づ今日の代を濟し給へ」と言ふ、責むれどもなど聲高なるを、連の衆も聞きつけ、喧嘩者達すなど云ふ程こそあれ、手をに棒を携ぎ、箱の如くなしけるほどに、一類も家も諠ふれぬる日惜しやことと、當惑をなせども道なし、持ち合はせたる金銀もなければ、脇の代りに刀脇差を各茶屋に預け置きて、面目なければ、人目これに宿を出で、都の方へ歸り行きぬ。旅籠の割にて忠七茂之介待ちかけ、「これへ見ゆるは、先ほどの暴者二人と思ひけるには似たれども、道中の際はいふにやは及ばぬことと、二人一度に抜き合ひたる。酒に足う酔ひぬ、兄腰の力なく、足ふみしどろに擧草てきわぐを見て、すかさず切つて廻りけるが、一人は遁げのびぬ。一人は即ち伏せられ臥したりしを、猶し止め明かし、死なぬほどにと刃のむねをもて、手も足もたゝき痿えらし、兩人は何處ともなく立ち去りけり。後々人の噂を聞くに、纔隙ありける茶店は、路人の日頭の懸の中宿にてありければ、積つてかくは謀りけるとぞ。まことに正直を旨をふるひ、義氣を手にとつてき謀なりしと、人々

[illegible]物[illegible]卷之三[illegible]

[illegible]

諸國新百物語　卷之四

一　水で洗ふ煩惱の垢附幽靈消えたる事の夜

武藏の品川の邊に、もとより貧賤なる人あり、名を庄八と呼ぶ。妻はさる武家の御家に給仕して、貌形すごとなき女にてありしを、此の男垣間見てより戀ひこがれ、縁につき便りをもとめて緣をむすび、偕老の後の世に比翼の契を結び、末にわかなき中なりしに、此の女憂いたはる事ありて、程なく空しくなりぬ。夫は歎き沈むことのみしたるはかりにて、佛前燈明にしつらひ、夜日をわかず此のまへにありけるに、口說き悲しむやう、「昔十九我二十五の時、いと假初に見初め、父母の目を忍び、人目つゝみて深きまぜにいひ迷り、との事にのみ心を苦しめ、やう／＼召抱に主君の命を許され、昔の宿に迎へしより、まだ三歲をば過ぎずして、戀しき我をば捨て置き、知らぬ無常の旅に赴き給ひけり。かゝる思ひの數々を、今一度なりと歸りて、我れとばかり給へこそなれ」、飲み食でさへも聞き入れず、共にしなんの命のみ一向思ひ亂れけり。其の日も辛き涙に暮れて、すでに夜半の鐘のころ、在りし女房忽然と出で來れり、「妾背に戀らるゝ未しかば請ひ讀くのにこ、未だ朽ちせぬ契りの侍りて、是れまで通ひ侍ること云

へば、夫婦じき限りなく、一昨日や昨日の臨思ひ、いかばかりとかは思すこそいへど、盡きもやらぬ睦言に、
はや東雲の白々と、更に其のまゝ消え失せぬ。是れより夜毎に通ひ來ることと爲し、庄八が眼には、其の
顔なる外に別に見つくるに、着せし物のみこしあたりは言はず、庄八が夜な／＼通ふことを萌さで
いと嬉しくて、ある夜の夜いよいよ更けて、常よりも肉をさしのぞけば、庄八それたる首に打ちむかひ、果
まづ笑ひて、妻なるをさればこそと淺ましく覺えければ、其の夢に、德行ていと良き妹惜しける
に氣付きて、一箇頭々の事と信ね、ある折思のべる姿敷化やさ爲し給はずかし。こゝにて、心を了けて
あへ、其の夜庄八が家に忍び、斬の下に窺ひ寄ふに、ここに五りしに逢はず、庄八驚きて頸でる、
頸赤き顔なる時にも大浴やうなる夜の場に滿々と云ひしも、何よりも庄八に振りつけ給ふ。頭は再見
目の耳、腕に名々の枝振にて、いとゝたに慕はきに、炎々へ暴う溢でたれば、一身東え出でて據の體
さるものに、隠書はかい消えて失せぬ。此の時上人、庄八に爲む證しさか、己が無常觀の一
心にて、己れにも殊しみを増し、則ちより歎聞を遂はれたる。されば寝に興はぐ、こ、進へる格
たる爲のくとぞ見えつゝかれ、耳をされたる骸にてあるさ。更に浦浄の水をかけて、頭骸のあらはに滿
ち、眞白になりける時、又更に消えて骸骨なし、是れ本來無一物たり。背六道輪迴の輔、直こら
東城に寄して水陸となる、定業の内觀至に轉ぜし、爲に入り給ひし事、世味して知る所なり。

只念々に轉をうつして、運びに念佛すべし。」と勸化なし給ひけるに、庄八此の時更りて彌陀の寶號を唱へし、佛の道に入りしが、心法の悟り開けて、別事もなくありしとぞ。實に有り難き示しなりけり。

二　難波の隣は都後家　附　誰にか見せん梅の花

一年難波の原へ出に罷りしことあり。主は隔てなき昔の所縁ありければ、夫し方夜もすがら打物語に夢も結ばず、未だ夜の暗きころより、魚物を始め品々を賣りのゝしり、聞くればは四つの時より町々の氏子、思ひ〳〵心々の裝束、狂言放下迄に拵へたに、事を巧みにしれを出づる。誰が手とは知らねど引きさまらす、夕さればは御神輿迎への數百艘に點しつれたる提灯、晴るゝ夜の星、宇治瀬多の螢とも云ふべしや、都にもをさ〳〵劣らぬ神業拜みつくしぬ。其の翌日の餘照りつゞく日かげに、納涼の地求めんと、旅店の塵拂はせ、綺席に身を宿せば、夕風やゝそよぎて夏なき心地するころ、對の六尺四人して、籠乘物を飛ばせ來る。紅紫の布團かさね敷きたる、ほのめきて、空焚の薫りわが袖にうつるかとあやし。右の方につきたる、三十年比の女の賤しからぬが、走り行きて向ひの家に案内すれば、亭主と覺しきが、手燭に點して迎へに出づる樣なり。籠の戸打開けさせて出づるを見れば、三十餘りの女顏なきな、髮を中切にし、明石縞の目立たぬに、紫の帯太からず、後より女の童、守りたる書扇持ちて

細く、暫しありて文宅を轉く出で、庭に打水の香く露呼し、旅宿の主に、小野として、兩何こゐあそと語り語るに、多年洋士で、あれは石鶴翁なめり、其の文は武藏の江戸に住ふで、其の宿江何某とかや、武門に生まれ只雨殿の人なりしが、さる仔細ありて禄を辭し、相州小田原の邊に纔かの庵結びて大城住みぬ。雨夜くて、宿江氏心頭修みて此の世を厭うす。此の女、一寺に剃髪に這入れ、手跡拙からず、いと心かしく見て、人の浮世の衣上より、たぎりて流る涙津濱の、降る合はんずを嘆き、千歳の史に書つき告ぐる者なし、されば瑳郎の心押く、彼の文をあかしてここに手だにも觸れず、人に聴知らざりと聞る。我日頃我く起きるるに、七十年の昔もまま來りし介ふ一流、ら、語に繰ある事いたねの、我一つの賢契なきては、諸氏合宗の道ありといふと、其の巻そみる事なし。此の書は之れ清贊をつゝ給て、師も功績ある書をあけたり。是れを藏みて所を持に、世讀み寄書に上と一つの巻頭なるの前にうし置き、讀き消えて失せぬ。さ迄れを讀き見るに、誠に筆にあたへて寫しおきの所、得れ文字をまゝ見せり。是れよりの優、言を添ゆるに、聊たる事をさとす、古時の趣へ戻らすと、文緒の歌とく、昔時と此より一朝夜の時に神ありとて、やことなき方へと省しあやまれば、まつるに宿書ふく、繪師にへぐるを稱ふ。是れを肌にに、偶めに風を無とに來む處べて歌と云ひ、古の書の秋宿して、倉つ五のそしく、或は若き娘の人相れを眺ひなど、世の聞なる賢論には、見たるので消ゆ

盡すことを得ず。此の故に餘病と爲して、療ずるに却つて命を過る。眞に女達は憚りなく打ちとけ、病の樣を物語れば、其の元を推して藥を與ふるによつて、治することの易きなるべし。なほ悋氣強き大持ちたる女、男など入らぬ奧方へは、能き醫師にておはさずや。」と語りぬ。眞にためしなき醫師の名を取りしとぞ。名は聞き忘れぬ、いと殘り惜し

三　命は入相の鐘の奴　附　一代せちべん男

つら／＼世の人の心狀を見るに、癖といふ物、各備へて離るゝ事なし。我きく晉の王羲之は、然ばかりの文學に達して德も厚かりけるが、手跡を好む事の甚しく、至つて勝れたれば、後の人其の名筆を呼びて、其の德を知らず。昔何某とかやいへる弓法の達者、堂前を射るに、必ず諸人の癖ありしとぞ。されど通矢數千に及びて、天下一の譽を取りし。これ等は皆能き癖の類にして、世の人の及ぶべき事にあらず。爰に惡しき癖あるをば如何はせん、後世願ひに心の直なるはなく、貧しきが習へる名人の異風の癖あり。此の故に慈鎭の歌に、

人ごとにひとつのくせはあるものを我にはゆるせしき島の道

と詠み給ひし、實にさる事ぞかし。爰に都さる邊に、富み榮えの男あり、金銀山を重ね、米錢藏に滿

ている。されど天性利勘にして、一錢をも惜しむこと其の癖なり。此の者母の胎に宿るより、父母共に僅に生魚の美味を嫌ひ、唯精進香の物、蕎麥の類を食し、月滿ち、算盤を抱き生まれ出でたり。昔天竺の愛染明王が弓矢を持ちて誕生し、吾妻どの業袋を持つて生まれし例もかくや。赤子の頃よりは、兩の手を握つて開かず、乳母が乳味も頭振りて呑まねば、手育てにし、髮置の儀式、金元結結び、いやがる程に貰はずにすまし、父母のたでつけし烏羽玉の黒髮も、源氏花の露さへ油臭しと嫌ひ給、取り上げたる事もなく、其の儘の禿頭とぞなれる。十二三の比より手習ひ業しけるも、書物の指南に背いて止むこと無きなどしては文字にする程に、白紙一枚も費えさせず。十六七の若衆盛りも色黒く、戀の道は如何なる事やら知らず、只算盤に心入れて、何處に在るやら、手の指のたことも知らず、若衆女の小手招ぎも見ては、近付でない者と、不審を立つるほどの諸知らず、[illegible]を催にして、小娘のこ心は夢にも知らず。斯かる程なれば世間の交際もなく、人を招待もせず招待れもせず、たゞ不受不施の氣質となつて、三十の比は善い分限者といふ程なれど、羽二重加賀絹は更なり、日野紬も肌に觸れず、[illegible]の小細工作りて、其の腹に焼鹽を詰め、朝夕これを食ひて人目を能くし、あらゆる物は皆にかけて買ひ、頭高な藁草履にしゆんだれ、[illegible]、鯖にて尾頭の長きを合はせて取り、門前の腥物を[illegible]の間に湊かすなどさせ、斯かる人すへ止めがたきは[illegible]でなし。[illegible]を

呼び、二三枚くる〳〵と捲き、じよき〳〵と刻み呑みて、「是れは氣に入らぬ。」「あれは惡い。」と買はず本に戻す程に、刻み餘りの取りてもりかれば、是れにて毎日の煙草餘る程、一生錢出して呑む事なく、かく始末に年經りて、今日の比は銀高五千八百貫餘、「是れでも家は買はぬ物ぞ、一歩の利には廻りかぬる店借こそ只よけれ、風雨の氣遣ひ修復の思ひもなく心安し。」と、此の外の仕業、筆に餘りの言葉に絶ゆる事ぞなかりしが、ある日心地煩はしく、俄に氣を取り失ひて伏したりしを、人々驚き安心散丁子圓など口に入るゝに、齒を喰ひしばりて開かず、如何はせんと周章て騒ぎし。此の男の女房耳によりて、大きなる聲にて、「是れは醫者の藥ではない、只貰うた藥ぢや。」と呼ばはりけるに、口あきて呑み、人心地つきけるとぞ。命にかふる寶何かあるべきといとをかし。是れは都の今分限、しはんぼと云ひしは此の事とかや。

四　嘘の皮剝る者の雷鳴越中白山の沙汰

世の諺に、商人と屏風は直にては立たずと云ひし、宜なるかな、然は云へれど利分あるをなき貌に、白々しく云ひ罵らんは、我ながら恥かはしき心地ぞせめ、況して其の外の虚言をや。實に僞りのなき世なりせばと讀みしも、さる事に思ひ合はさる。何時の比ほひにかありけん、伊勢の松坂の町に

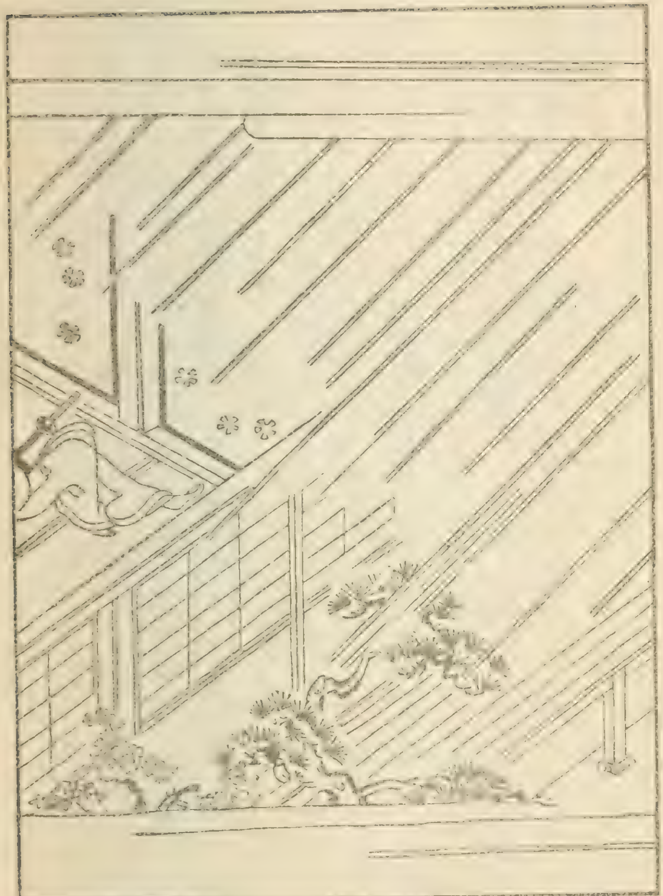
富裕の人あり、名は定かならず、遥けき東の都に館を構へ、唐や倭の絵巻物、あけ行く春の曙より、霞の衣きさらぎ、夏の夕べ風薫る、あやめの帷子引きかへて、しのぶもぢずりの紐ゆゑに、みだれがうしのなら柳、四季折々の衣服、夜を追ひ日を重ねてくだす家にし侍れば、誠に時めく粧ひなりし。娘一人ありて、年は十五に一つ二つばかり、他に類なく、貴妃の姿も、西施が百の媚ある粧ひを羞むばかりなれば、思ひ思ふ在所もありしが、ある日いと假初の風の心地と云ひこいたはりしに、父母親しき人々集り、医師の薬も詮なく、神に祈り佛に誓つに験なく、惜しや無常の嵐、つぼめる花を散らして、露の命の五日過ぎに空しくなりてければ、父母の歎きは更なり、よその哀れも今更袖を浸しぬ。亡骸は煙と野辺に送り捨て、七日々々のあと懇ろに弔ひしに、されば行く水の流れはやく、月日また同じき習ひなれば、悲しかりし年も暮れて、又の年の一周忌の追善など催しけるに、怪しき僧一人たづね来り、何国の僧とは見えねど、主に対面申したき事の候ふと云ふに、主立ち出で、「御僧何なれば斯く御尋ねなさるぞ」と云ふ。されば候ここそよ、我は是れ一所不住の僧にて、諸国を修行して侍る。去にし年の水無月比ほひ、越中の立山に籠り侍るに、山なかばにて年の比十六計りなる娘、此の僧を呼びかけ、「我は伊勢の松坂の何某が娘千世と申す者に侍り。斯う／＼の事にいたづきて、空しくなり侍りしが、日頃人に思ひ慕はれし罪障の山深く、行くべき先も見えず、斯

く中有の旅に迷ひはべる。今偶諸國修行の御僧と見奉りて頼み申すに侍り、相構へて此の事を語り傳へ、亡き跡をとはしめ給へ、と云ふ。さるにても何を以てか、君に逢ひける證據とし侍らんや。と云へば、懐より自ら着物の縫ある片袖とり出し、是れこそ自らが心に入れて、日頃秘藏しける執心つよく殘りて、片袖を取り歸りて、今身に隨へ侍り。此の殘りはそこ〳〵の長持の中にあるべし。是れを孝養に申させ給へ、と片袖を渡し、掻き消ちて失せぬ。是れ御覽あれ。とさし出す。手に取るに實にも娘の秘藏しける小袖なり。教へし長櫃の蓋を明け、とり出でて見るに、片袖は千切れて跡許り殘れり。此の時にこそ一入歎き、疑ふべくもなき我が娘にて侍りつ、と、父母諸共今更歎き悲しみ合ひけるが、一時ありてこそあれ、今日一周忌の夕、斯かる事を聞くと云ひ、日のあたり此の奇特を御覽ありし御僧なれば、誠の生佛にこそ侍れ。是れに暫しおはして亡き跡をも弔ひ、吾々をも教化し給はれかし。と云へど、夫れ遙かなる修行の旅なれば、心急ぎ侍る。など云ひて立ち出づるを引き止め、是非左様におはしまさば、頓成佛の追善、如何ならん事をも爲したまはれ。と、黄金若干取り出し僧に與ふ。僧是れを受取りて、暇乞ひ出で行きぬ。此の家の手代何某とかや云ふ才智發明の男、始終此の物語をば聞きゐけるが、いと不審しく跡について僧を慕ひ行くこと二町餘、此方なる在所の或家に入りしを、かたへの窗よりさし覗けば、死に給ひし娘の腰元つたと云へる女、少し仔細ありて疾くに追

召出されしか、こゝにありと見ゆ。前は此の者に失せしか、世に見らひ顕し、両人其斯かる謀を致しけると見えし程に、やがて家に入りて、二人共に捕へ糺明しけるに、悉く顕はれけり。件の片師は、前元祖の家に遣り出されける時、密かに引き手切の出でけるとぞ、いと怖ろしき心ざしにはあらばや。斯く盛形もなき事なれば、黄金をも取り返しけり。直に此の郎出にて斯かる霊験に逢ひける事、まさしく正直の人なれば左も有りなん。誠是れは偽りにてあらず、誠に案じぬる手代なりし。」と、各感じあへり。

五　不思議は妙、妙は不思議十百物語

武蔵の國葛飾に、隠居にもやされたる翁あり、世事心にもらず、名利を思はずに歳の暮へて、世事を知らず遁れ居て、心安くわたれしは、時しも秋の末、常に通ひ、蟲の聲や、哀れに寂しき夕、声を聞くるものの、枠しき萩の上風にやと見れば、日頃隔てなき二三子の友訪ひ来て、八重むぐらさしこもりしに、光の庵に踏み入りし御訪ね、先づ此方へ、と、一間なる方に寄りゐて、来し方行く末、咄しの仁頼に重なりて、何となく世に聞かぬるに、一人の云ひ出づる二ケ打寄りたる序に、いざ百物語して、世の云ひ伝へ怪有りや無しや試みん。先づ云へる人々、百もと寄り寄り、それ





が中に中老の男、此の法度をとゝのふ。先づ青き紙をもつて行燈を張り、燈心百筋立てたり。話一つに燈心一筋づゝ消して、百に滿つれば、座中闇となりぬるに定む。斯くて一人々々おどろ／＼しき物語を續けける程に、九十九になれば、燈心只一筋の光、陰に物悲しく、われかの氣色になりて、鼠の啼聲も耳に怪しく、風の音さし覗くも殊に氣疎く、語り盡す百に滿つれば、燈打消して偏に闇の如く、如何なる事かあらんと、固唾を呑んで一時許り、別の怪もなければ、又燈火を挑げ、互に顔を見合はせて「往昔よりいひ傳へたれど、さ許りも無し。」など打笑ひぬ。「夜の明けなん程もなし。」と、人々其の儘に轉び臥しぬ。斯くて遠寺の鐘、里の鶏、東雲を告ぐるに、各起き出で見れば、只今切り捨てたる如き女の首たつ、黑き髪を亂し、翠の黛、紅の顔、美しきが、朱の血汐に染みたるが、一人一人の枕元に並べ置きぬ。座敷の戸は宵より強く鎖おろしてあれば外より通ふ窓もなし。此の不思議さ。戸ざし明け出で是れを見るに、更に變る事なき女の首なりければ、皆取り集め、近き野邊に捨てなし歸り見るに、今までありし女の首、一時に髑髏とぞなりける。されば此の百物語は、是れ魔を修する行にして、怪異を顯るの法なり、宵より餘事を交へず、此の事に念を凝らしたればぞ、斯かる不思議はありける。是れを思ふに佛を念ずるの心至つて誠あらば、何ぞ佛果の妙に叶はざらん、魔道佛道異なりと雖も、念ずるの心又一つなり。是れ悪に是れ善なれば、速かに悪を去つて、偏に菩提心を

驗ふには何かせじ、

諸國新百物語卷之四　終

[illegible]

諸國新百物語　卷之五

一　名は顯はれし血文あり囘廻り逢ひたる因果の敵

昔遠州のある邊に、並江治部右衛門と云ふ士あり、其の息に熊之介といふ少年、顏色世にすぐれ情ありて風流類なし。其のころまた牢浪にてゐける鐵心とかやいふ人、熊之介を見初め戀ひ侘びければ、便り求めて、くゆる思ひのふじの煙と燃えて上なき思ひを知らせ、或は道行く隙を求めて文を遣けやりなど、いとかしがましきを父の治部聞きつけ、怒り腹立ち、所詮此の者の前髮の迷はしければこそあれと、理不盡にひたひをいれぬ。斯くありて猶面ごし憎からず、人戀草の種茂れり。爰に隣なる里に、伊吹屋の久米と云ふ女あり、是れは吉原の小比里にて、葛城と云ひし女郎なりしが、ある仔細あつて、此の旅店の遊女となりゐたりけり。されば熊之介此の女に馴れて、わりなく語らひ通ひければ、此の女も熊之介に身を任せて、外には又男ありとも思はぬ氣色なりし。さても熊之介は、今宵通ひ行くべきと兼て契りし日なれど、今日しも障る事ありて心ならず暮し、漸う戌の過ぎ亥の前に宿を出で行けば、向うに大の男、とある松を小楯にとつて待ちかけしが聲をかけて、「いかに熊之介、われ

其の日ごろ吾君を馴ひ馴れて、錦木の千束徒らに朽ち、けふの細布胸あはで、寐ぬる間とても安から
ず、とやかくと云ひ送るに、一度の返しだになし。しかさへあるにひたひやいるゝ、是れ然し我を欺
く所なり、覚えたるか。」と切り付けたるを、云ひわくべき間も無ければ、飛び退りぬき合ひ、火を散ら
し戦ひしが、悪心はなりと云へ手者なりければ、熊之介受太刀になると見えしが、あへなくこれが爲
に討たれぬ。敵は仕済ましたりと悦び、何處ともなく落ち失せぬ。熊之介が供の童、所用あつて遙か
の跡に遅れしが、此の由を見るより、一散に在る道敵に走り帰り、父母に斯くと申し上ぐれば、治部
が家の子、走りつきて敵の行方を尋ぬれど、早くも遠ざきたれば爲方なく、熊之介が亡骸を見るに、さ
[illegible]の宵にも[illegible]ければ、香清せんと申け起し、肩にかけて家に帰りぬ。こゝに久米の方は宵よりも
待ちわびて、あかぬ別れの鳥はものかは、と詠みしなど思ひ出でければ、何となく胸騒ぎ心許なく覚えける
折から、熊之介の亡骸を持ち来り、「斯う／＼の事侍りて、君は討たれさせ給ひぬ。一まづ父母へ知らせ奉
らせ、其の亡骸へ参り侍る時、甚う夜も更け候。」と語りも果てぬに、久米「扨も／＼」と悲しや、
如何なる者の所爲ぞや。自ら女なりとも其の時に参り逢ひなば、斯くは爲し参らせじものを。」と悲し
み、[illegible]「其の者はまさ侍るや。」と云へど、一遍かの跡に遅りたれば、如何なる者とも知ら
ず、[illegible]と、[illegible]臥して歎きける折柄、裏の戸を叩く音す。「如何なる人

ぞ」と問へば、「是れは旅の者なるが、道に踏み迷ひて來れり。見申せば旅宿と覺えぬ、一夜を明させてたべ」と云ふ。「されど獨旅人はかなひ申さず、外に宿し給へ」と云へば、「情なし、小夜更けて何地と定めたる方なし」と、たゞ打恨めば、何となく哀れに覺え、許し入れ一間の座敷に誘ひ、酒など進むるに、旅の男久米が姿の美はしきを見て、「如何にぞや鄙い里離れに、斯くては勤めゐ給ひける」など思ひ入りたる體に云ふ。「妾は今物思ふ事に侍りて、よその御言の葉は身には入り候はず」と振り切りて座を立ちぬ。されば此の男先より家の隅々を見廻り、萬氣遣へる樣に見えけるが、久米の方いと訝しく、とある障子の破れよりさし覗けば、男は人見るとも知らず、大の刀の血にぬりたるを拔き、懷より紙取り出でて拭ひけるが、又元の鞘に納めて、後は燈を背け密かに臥したり。久米の方是れを見るより、扨は此の男こそ熊之介殿を討ちし者よ、御參なれ、天の與へと嬉しく、守刀を提げ、近々と立ち寄りしが、又心を靜めて思ふやう、若し此の男敵にて無くば、如何はせんと案じ煩ひけるが、四方に拭ひ捨てたる血紙あり、取りて見れば狀なり。何々今宵日比意趣あるによつて、熊之介を討ちたまふべき由、かやう〳〵に謀り、たばかり出し申さん、鐵心參ると書いて、先の名は定かにも書かず、扨は疑ふべくも無き夫の敵と守刀を拔いて、鐵心が心もとを刺しとほして、「熊之介が妻、夫の敵覺えたるか」と云ふ聲に、口惜しやと起き上らんとしけるが、大事の手なれば叶はず、やみ〳〵と

討たれぬ。此の騒ぎに宿の亭主驚き目を覚し、此の由を見て、「如何なるゆゑに、旅人を斯く殺しけるぞ」と。此の時久米箱の終りを語り、則ち治部方へ告げたりければ、喜ぶこと限りなく、骸を乞ひ受け心の儘に行ひけり。されば熊之介、さばかりの疵とも見えざりしが、日数いたはりて是れも空しくなりぬ。久米の方、この由を傳へ聞きて、ふたゝび人にも見えず、みなみなかざり下して尼僧の姿になり、偏に熊之助かたきの心共に、頓生菩提の廻向をなしけるとぞ。誠に一宿に泊り合ひし中に、此の家に廻り來て、淺ましき死を遂げける、因果の程こそ怖ろしけれ。

二　命をかけたる鳶の秤　附　天狗物語

世の中は夢か幻か、現とも夢とも見えず、あるにもあらぬ身の程、暫しも安く閑ならんことを、心の水の清き、ある瀧の邊に住める僧あり、名を眞雪と呼ぶ。臨運の心替れ、身に上する衣も、墨の袖に着なし、そもそも初めたる墨染の袖も、綻びたるをかけたる。木の葉衣を纏ひ、千草に浮ぶ、誠に古りたる栖なりかし。頃は神無月中の六日、東福禪林寺の開山忌とて、諸人袖をつらね踵をつぐことおびたゞし。承出せる靈寶ども拜まんとて、此の僧も都の大路に出で、萬里小路を通り、五條の坊門を東へ行き、夜に皆を明けて人三人、はきたる男を捕へ、此の儘にや殺さん、又目鼻をも削

あれ人々言ふを此の僧たち聞きて、哀れにも淺ましき身に沁みて覺えければ、人々に詫びて云ふ、「我大僧の昔より、斯かる殺生の命を救はんと深く誓ふ事あり、願はくは此の命愚僧に賜はれかし」と手を合はせ再三に及ぶ。一人の男眼を怒らせ、「御僧は何事をか言ふ。我が家に傳へし言葉あり、かくの如き鳶の大きなるを、酒煮ること七日して膏となすに、諸の腫物癒えずと云ふ事なし。日頃得ずして折りから、御幸なれ」と、あわけなく言ふに、僧、「然らば此の鳶の替りに、死にたる鳶を求むるの價を得させん。我此のことに所願空しからんも心憂し、平に御芳志あれ」と云ふに、漸う心解くれば、「然らば」代を出し與へて、鳶は虚空に放ちやりぬ。「淺ましき事に目のあたり行きけるよ」と獨言して、僧禮を與へ、扇南へ赴くに、俄に旋風烈しく、砂を吹き上げ小石を飛ばせ、偏に闇の如く、雲の中に怪山伏立ち向ひ、「扨も只今途中にて、危き命を御僧に助けられ參らせ候。此の御恩何にしてかは報じ奉るべき。御僧の運び給はんには、御寺の法事終りぬべしと覺ゆ、いざ此方へ」と手を取りて行き、未だ十歩にも足らざるに、東福寺の門前に至る。貴賤群り集まりて寸地も無きを、「只我に隨ひ來り給へ」と手を引きて佛前に参ること安々と、心靜かに拜み、緩々と聞くに、人の上を乗り越え乗り越え行けども、咎むる人なし。山伏の云ふごとくの事に違はで、奥に行き届け奉りぞ」と北を指して行く。其の日の御講聽けて云ふ、「誠に只今の舞見奉るに、更に此の世の有樣にあらず、皆極樂の

振舞なり。然るを先に[illegible]の男に[illegible]に仕[illegible]れ、[illegible]こと[illegible]して[illegible]と　山伏[illegible]て、[illegible]すれば大天狗と仰がれし時は、大敵を滅ぼし國家を治め、數萬人を随へ人の[illegible]、是れ[illegible]人の力なり。又[illegible]人と[illegible]て[illegible]となる時は、只一人の力なり、[illegible]の[illegible]く[illegible]の[illegible]て、一月に[illegible]、[illegible]に此の身を變ずるの苦しみ有り。此の時に至つて又鳶の力より外になし。[illegible]是れを[illegible]に魔境とも天狗道とも云ふぞかし。皆一心の憍慢より、然許の[illegible]、[illegible]に入り給ひし。[illegible]は道心堅固に然も名利なし。是れをよく知りて慢心の[illegible]ことなく、[illegible]して[illegible]給ふ。[illegible]」と[illegible]に[illegible]なし。[illegible]は夢の[illegible]にてありしが、[illegible]見[illegible]に、[illegible]近くなる[illegible]の[illegible]に[illegible]て[illegible]より[illegible]に[illegible]て、[illegible]給ひしとぞ。是れ[illegible]心の[illegible]より、[illegible]きして、行ひ済まし給ひけり。ありても有りたきは慈悲、願ひても願ふべきは佛の道なりけり。

三　思ひは色に出づる[illegible]

[illegible]言葉ばを[illegible]、[illegible]身を[illegible]

大きな事どもなりし。ここに都のある渡に、何某左吉とかや、色好みの若人あり。幼より父母に後れ、腹變りの兄にかかれて、道齋と云へる針醫の許に人となりし。斯かる好き者なりければ、和歌の道を好み初め、筆の跡つたなからず、誠に優男とも云ふべし。其の頃かけのこうぢに、酒つくる家に娘あり、顔形世の常に勝れ、心の優なるいと事出たき姿、たとしへなき姿、又胸をも聞きし法華經の何に選ばれて、歌草紙物語など讀じて、いと情け深かりし。されば如何なる縁にやありけん、彼の左吉をあからさまに垣見しより、心も空になるかみの、鳴神の足踏ひして、是れより忘るゝ暇もなきに、人傳して云ふ由もなければ、心一つに思ひ煩ふ。左吉も又此の娘を垣間見てより、只管此の事に身を責め、我は我れ如何なれ人風の便りもがなと思へど、身を浮草の根を絶えて、頼りもなく、いとせめて戀しき時は烏羽玉の、夜の臥所に逢ひ見ん夢をと、思ふより外もなかりし。かく萬年に一つかな、ふかくも思ひ暮しけるほどに、見なりける道齋、然る腹立ちて其の家を追ひ出しぬ。遣る方なく悲しみ思ひけれど、爲方波の寄邊絶えて、猶り川の末に昔召使ひし者のありけるが、此の許に日を送りゐる。誠に然るべき縁やありけん、彼の酒屋の何某より、手代の男を尋ねて此の宿へ來る。左吉牢浪の身なればとて、彼の家に行き目見えし、召し抱へられて宮仕しけり。人體骨柄にして諸道に賢く、疎かなる事なければ、酒屋の何某も惜み殊に深く、かく睦しき物めしたれば、相に思ひ見ること

[illegible]

[illegible]

[illegible]

れば、白き小袖に水晶の珠数手にかけたり。扨は思ひ切り給ひけると覚えければ、左吉中々なく〳〵負ひ参らせ行く。闇さは闇し雨さへいたう降りて、道もさだかならず、昔業平の二條の后を盗み出で給ひけんも斯くや、漸う運び行きける程に、都の北に當れる雙の岡に着きぬ。とても此の身は召し連されて、二人諸共添ひ果つべきにもあらず、淺ましき恥を曝しなんよりはと思ひ切つて、女

逢ふ事をいつくにてとか契るべき消えむ浮き身の行方しらねば

と口ずさみければ、男、

逢ふ事はおもひ入日の影たのむ西の空こそしるべなりけれ

斯様に詠み捨て、先づ女の心元を刺し通して、押し伏せ、其の身も腹十文字に切りて、女の上に倒れ死しけり。惜しきかなただ二十五、女は十六の秋の霜と消えぬ。女の親も夫の兄もいと情なきものにて、亡骸を其の儘に打捨て置きければ、此の邊の農民哀れがりて、ひとつ塚に築き込め、しるしに松を植ゑ置き、其のころ何人かしけん、雙の岡に無常所求めてと書きて詠みし、兼好が歌を翻案してたてけり、

ひとつ塚松とならびの岡のべにあはれいくよの恥をさらさむ

四　行き暮れて此の辻堂を宿る附 鞠する翁の事

中比近州の草津より、鎌倉へ通ふ商人あり、天性心すなほにして慈悲深く、しかも儲に事あることいたれり。いとゞたゞ其は商賣を習ひなるに、いつとても世渡りの種いと悲しき物はあらじ。是れは老いたる母を置きて、年々に住み馴れし宿を出で、遙々と東の方へ赴き、今切の渡越えて、熱田の古りし宮居を拜み、古郷に殘し置く父母を守らせ給へとて、念じ過ぎ行く。これしも雨見月、定めなき時雨して、行くべき先きわかねば、とある辻堂にやすらひ晴れ間を待つに、不思議や暮れかゝるとは覺えざりし宵、頓に東西暗くなりて、道すがらの並木も、行きかふ人も見えず、はるかなる山元に、狐火數々ともし連なるなど、物の凄く、此の所に一夜を明しなんとて、のたれ伏し敷き、斷ち來し古里のことなど思ひつゞくるころ、翁一人まみへ來れり。見れば草の葉を重ねて衣となし、葛を以て帯となせり。凡此の翁にたゞならぬ光あつて、いと怖ろしきが、此の男に向ひ、是れは何方へ渡りたまふ人ぞことゝ。草津より鎌倉へ罷るものに侍りと云へば、二箇はいや冬の夜の寒けさ、凍ひやられ候、いで火を焚きて煖まりはれませと申されけると、火打取り出でうち散らせば、四邊の小石忽ちに火となつて、恰も爐の如く、皆一所にかき集めて、互に手をさし足を温めて憂きを忘る。時に翁は虚空にむかひ打ち招けば、一

人の童子銚子に杯そへて持ち來る。旅人にもすゝめ、我も打ちのみて心地よげなり、其の酒味はひもつて比ぶべき物なし。翁また傍なる僧に囑げば、上古ならぬ僧、生栗生れり、取つて旅人に與ふ。是れなむなるに憂事を忘れて更に愁へなし。此の時翁其の上を語りて云ふ、「我は是れより東、菊川といふ所の者に侍り。此の川上に菊園あり、此の露の滴つて河下へ流るゝことを、一年に一度。われ視に幸なることいたれり、故にその恵みによつて、不思議に此の露をなめて、顔色老いず。雲を招いて是れに乘るにはまた怪なし、一日に千里を遊行し、終夜に數百里をかへる、今年滿りて五百餘歳、頷なる昔に逢らず。唐にも南陽縣の菊水下流を汲みて仙道を得と爲し、世擧つて知るところなり。されば、此處の道ある事我に勝れり、此の故に今夜に出でてきたれり。われ思ふに、君來る月不盡の病に死する災あり、さるに依つて此の所にとゞめ參らすこと一年、災難を免れ給ひぬ。今よりは更に患ひなく長生なるべし。」と、さめやかに語り掻き消ちて失せぬ。かくて夜も白々と明くれば、此の不思議さに男東へも行かず、引きかへし國もとに歸る。父母御覽ありて、「如何なれば此の一年が間、文の便りもせざりける事よ。」と打恨み給へば、其の時男手を打ち始め終りを語り「僅か半日一夜と覺えしに、扨は一年になり侍るにや。」と今更に驚きぬ。是れより東への通ひを止め、孝々孝を盡しければ、いつとなく富榮の家となり、芽出たき世渡らひしけるとぞ。金銀珠玉は世の器にして、果を

かる時あるべければ孝養に足らず、只珍寶に代へても、孝の道こそあらまほしけれ

諸國新百物語卷之五 終

玉帚木

林義端

玉帚木序

僕竟日文窓に坐し、終年の典籍を左右にし、しば／＼披閲して、聊か聖賢道徳の奥義を窺はんとすること、やゝもすれば晷を終へ、しかして眠りを思ふ。凡情の嗜むところ、俗習未だ除かざるにや、譎怪しく戯れたる稗官小説を見及びては、心におぼえずこび面に記しておくこととは知らず、ひとの書編に求むるのみにあらず、凡そ三都の好事の人々、此の堂に過ぎるには、先づその郷里を問ひ、その所に聞ゆる奇事を尋ね記しこゝろみ、かの雅趣に通ふ人々に伝へて草稿せしを、先年友人の需めに應じ、補遺して玉帚と名づけ梓に附けし、頃日蘭香亭の需に応じて、今年病中の遺文を集め、未だ聞くもしらぬ世間の人の眼にもまたことを連ぬるに、御の披覧に備へずして、またくへ玉帚木六卷をいだしぬ。ある人、難じて曰ふ、子の宅より出せる書は慢遊戯なりして、歌道和詞に達せず、しかもその説くところ六の皆を力なき奴に倣たる、その作意勤めたりといふとも、誰か読び伝へんや。僕答へていはく、誠に然なり、然れども始めより人に示さんとにはあらず、たゞ我とへとしき雅品を好む事に与へ、暫くこの時を止めるのみ。かつ世にも内を繋うて、嗜好を嗜む人もあれば、重ねてことゞむることなかれと。

元禄九年冬十一月朔日

義端謹序

目録

第一巻

第二巻

第三巻

上卷末卷目録

寛永寺を見す

武州江戸東叡山は、關東天台の霊場にして、諸人の渇仰他に異なり、江戸より丑寅に當れば、都の比叡になぞらへ東叡山と號し、寺も延暦の例にならひ、寛永年中の草創なれば寛永寺と號せらる。江戸の鬼門を守り悪魔を退け、國家安全武運長久の祈念怠らず、永久に天台圓頓の法燈をかゝげ、佛法三諦の妙門を啓く名山なれば、かずかずの神社佛閣年を追うて光を増し、五重の塔は雲霞に聳え、霊寶殿にうつして遠くきこゆ。東照宮その外代々の御霊屋、水晶瑠璃の柱を並べ、黄金珊瑚の[illegible]いつくしく[illegible]。五色の扉は朝日に輝き、數重の軒は春雲に映ず、結構美麗いふばかりなき有様にして、寶相莊嚴の金光曜も讃歎なきにあらず。殊更春は數本の櫻花皆白妙に咲きつゞき、吉野初瀬の名所にも越えたり。山上より見下せば、不忍が池、目のあたりにて、宛然志賀の湖水を映し、中の島の辨財天は竹生島の思ひを起せり。近代雅人の詠ぜしにや、

水[illegible]にてなにをかくさむ不忍が池

こゝに當山の傍に、清水寺とて觀音堂あり、都の清水寺を移せり。本尊は千手觀音、惠心僧都の作と云ふ。昔平家の侍主馬判官盛久が持佛堂の本尊なり、靈驗眞にあらたなり。先年江戸金杉橋の邊に貧しき老人あり、舊は都方の者なりしが、ひさしく牢浪の身となり、緣に任せて此の所に隱れ住みけり。不幸にして妻に離れ、男子も二人ありけれども、成人の後に時疫におかされ、うち續き死に失せたり。漸うわすれがたみに、十一になる孫女のありけるを、悲しきなかに養育し育てけるが、容貌も人に勝れ美しく生ひ立ちければ、如何にもして然るべき人にめあはせ、そののち心安く臨終せばやと思ひけれども、牢浪孤獨の身にて、然も齡かたぶきたれば、よろづ心にかなはず、物がなしき事のみにて、誰にかこたん方もなく、寐られぬ儘につく〴〵と思ふやう、凡そ人力の及ばざる事は、佛神に祈りて幸ひを得ると云ふ、いでや東叡山清水寺の觀音は、靈驗あらたなりと聞く、孫女が行方を祈らんとて、是れより毎日東叡山に登り清水寺に詣で、普門品を讀誦し信心怠らずありしかば、或夜觀音夢に告げて宣ふやう、汝われに歸依して祈念甚だ勤めたり、なんぞその誠に感應せざらん、われ汝が爲に此の身を現じ、まのあたり相見ゆべし。來月十七日の朝不忍が池の邊に出でて待つべし、青衣にして白馬に乘り、たゞ一人來る武士あらん、是れ即ち我なり。あなかしこ疑ふことなかれ。」と、宣ふと思へば夢醒めたり。老人感涙袂をうるほし、歡ぶ事かぎりなし。豫てよりその日限を待ちかね、や

うやうその日に六ありければ、ただはのべらさに支度し、東山の方へ急ぎけれ。家の者此のていを見あはせ、「何を持へ、今何なる事にていづかたへ行き給ふにや」と怪しみ尋ねけれども、始めはさだかにも云はざりけるが、只管に問ひ極めければ、小聲になりてかうかう、觀音の告げありしと、あらまし打語りて走り出でければ、聞く者、こは有り難き次第や、此の世にして正身の觀音を拜み奉るは、末代稀有の御事なれ、何事か是れに如かん」とて、聞き傳へにおひおひ老人の跡を慕ひ集まる程に、百人許りにもなりぬ。「今やおそし」と待つ程に、案の如く、夜明けて後、北の方より年ごろ二十許りいかめしき若侍、青き色の狩衣を着、白馬に乘りて只一人馳せ來る。「すはや是れこそ觀音の來現なり。」と云ふ程こそあれ、老人を始め皆々一同に手を合はせ禮拜し、彼の侍を中にとりこめ、前後左右より圍繞禮拜することひまなかりけり。かの侍はこの體を見て大いに驚き肝を消し、「我は左樣の覺えなし、唯世の常の凡夫なり、許し給へ」と云へども耳にも聞き入れずとりつきければ、後には此の侍はらあしく思ひ、是れは何でふ我を侮りなぶるところぞ、と腰の刀引きぬきさんざんに切り拂ひ、爲方なく落ち失せたり。老人をはじめ皆興をさまして歸りけるが、此の侍は此の邊代官の一子なりしが、日ごろ惡人にて、親の命に違ひ、此の晩密かに家をぬけ出でける、この所にして思ひかけず、かく群人に取りまかれ、剰へ正身の觀音なりと拜みければ、その不審はれやらず、這うに逃げのび、

ひそかに東叡山の内、相知れる寺に入りて、事の仔細を尋ねてこそ、我が身観音の告げに聊かも違はざりし故なりとは知りぬ。此の侍つく〴〵思ふやう、是れ鮮しながら當山清水寺の観音、大慈大悲を聞て我如き極悪人を、わきて救ひ悟したまふ善巧方便なるべしと、信心肝に銘じ、忽ち日頃の悪念を改め善道に歸し、清水寺に詣で改悔懺悔し、いと懇に禮拝して、是れより奥州の方に出で、松平陸奥の太守に宮仕へ、無二の忠義を勵ましければ、太守その誠を賞美し、三百石の俸禄を與へ給ふ。この時しばらく暇を乞ひ、故郷江戸に歸り、父母に對面し身の歡びを述べ、是れ皆観音の御方便なりとて、かの老人を尋ね出し、いつきかしづき養ひ、その孫女を迎へとりて妻女と定め、再び奥州に歸り、[illegible]榮華出たく榮えけるとぞ。

妖物實徵

この頃伊達家に片桐何某とて武道の侍あり、若き時より武勇をはげまし、殊にすぐれて力業を専らとして、かつて怪神の奇特世の妖怪を信ぜず。或時若き友達五六人打寄りて語るやう、「奥州金華山は峯高く谷嶮く、樹茂れて嶮岨なる魔處なれば、天狗妖物やうの物ありて、人里に容り得ずと云ふ。片桐聞いて、「何條さる事侍らん、大方は臆病なる人の云ひ傳へにて、實はなき事なり」と云へば、衆中

聞けて、「一貫が不貫が貴殿着に後の山へ登らふ輪へ」とて、はや晴にたゝければ、片桐が「我が力試しにその霊験に登りて、汝に見せまゐらせ侍らん」とて、その後唯一人金峰山に登り、その絶頂に一宿し、夜半過ぐるまで心をすまし、四方を見渡すに、たゞ松風谷水の響より外更に音なふものなし。やうやくと山を下り帰らんとするに、曙方になりて忽ち人の足音たかく聞えて、本堂の方へ来たれり。片桐すはや是れぞ妖物ならんと、傍にかくれて窺ふに、何者とはしらず息づき荒く喘ぎ来り、既に持ちたるものを本堂の中へかばと投げ捨て去にけり。片桐その跡を付けて、草履の中を尋ね捜しければ、何やらん丸くして重き物を得たり。いまだ明けざれば何とも見えず、やうやう麓下りて見れば、人の首にてぞありける。只今切りはなしたると見えて、血したゝりて甚だ新し。堂の縁の下に投げこみ、夜明けて後、さらぬ體にて家に帰りけるが、友達出でむかへて「いかに山上にて怪しき事なども見ずや」と問ふ。片桐思ふやう、首の事を告げたりとも、人定めて信ずまじき事に候ひ事もなしとは思ひ候」と答へうち過ぎぬ。この後片桐三四十年の間、或時は主人につきて在江し、又ある時は引き退きて浪人となり、あなたこなたと經歴せしが、終に本国伊賀を立ち退き、紀州に来り、福島大夫殿に奉公しけり。ある夜同役傍輩の侍一所に集りて、種々奇怪の昔物語しける序、片桐何心なく、かの若き頃金峰山にのぼりし次第を語りければ、聞く人の皆々

その武勇を感じける。その座に七十ばかりの侍ありしが、此の物語を聞いて暫くものも云はず、殊に更に怪しみたる體にて、その山に登りし年月を問ふ。片桐その年月を具に答へければ、此の侍手を拍つて大いに驚き、「其のとき生首を投げすてたるは我なり、その故はそれがしが父の敵伊豫に住みける、年来狙ひうかゞふに、嚴しく用心して本望を遂ぐるに便りなし。或夜敵の方に客人を招き酒宴しけるに、夜更けて客かへりしが、上下酒に酔うてその跡の門を忘れてさしかためず。その隙間のあきたるより、燈幽に見えけるまゝ、ひそかに敵の閨にしのび入り、難なく敵の首を切りてひつさげ、足ばやにぬけ出で、すぐに金毘羅にのぼり、草むらの中へ投げすててかへる。すでに一里ばかり山を下りて忽ち思ふやう、此の首若し人に見つけられては悪しかりなんと、元の處に引きかへし、首を取りてかくし埋めんとするに、すべて見えず、たゞ須臾の間の事なれば、外へ行くべきやうなしと、そこら隈なくさがせどもなかりける。こゝは元より人も通はぬ魔處なり。さては悪鬼天狗やうの者にとられたるにやと、思ひ出す毎に不審はれざりしが、さては君その首をとり隠し給へるにやと云へば、片桐も呆れて、「その折しも我見あひたることそ不思議なれ。是れにつけて思ふに、凡そ古より、世俗の語りつたふる妖怪變化の類は、皆人々の臆病にして迷へる一念より生ずと見ゆ、なんぞ怪しみとするに足らんや。金毘羅山の怪異、兩人相疑うてはれざる事四十年に及べり。今夜始めて是れ皆人爲

にして、さらに妖魔の怪にあらざることを知れり。是れ又一つの證據とするに足へたり」と語れば、聞く人もさもと感じける。

小野篁公

洛陽北山鷹峯に瀬口忠助とて米穀を賣る商人あり、才智かしこく慈悲心ある者にて、家富み榮えける、然れども妻が色を好む癖ありけり。京より眉目よき妻を迎へ、二世までと淺からず語らひけるが、産すのそのにいたはりて空しくなりける。忠助大いに別れを悲しみ、晝夜わすれもやらず歎き、忌日には僧法師を供養し、ねんごろに弔ひけり。是れより世の無常を觀じ、後世をねがふ心いで來つゝ、讀經、口唱念佛の勤作おこたらず。殊に諸方の寺々に說法談義の場には、必ず詣でて聽聞しけるが、或る時思ふやう、凡そ諸寺の說法に冥途地獄のありさま、此の世にて罪を犯し惡を作れば、死して忽ち冥途の中に墮ちて、劍樹、刀山の苦患を受くるなりと教化し給ふ。然れども是れ皆說き傳へたる計りにて、誰あつて死して蘇り、まのあたり地獄を見たりと云ふものを聞かず、いと不審なる事なり、いかに冥途の有無を知らまほしくおもふなれども、此のうたがひはれやらず、未來輪廻の往生は如何あらんと、朝夕こゝろにかけゝるに、ある時又思ふやう、幸ひ此の鷹峯の北小野郷草村には、小野篁の社ありしま

す。されば此の篁はもと破軍星の化身にて、測らざるの人なり。そのかみその身は朝廷に仕へながら、暇あれば地府冥途に通ひて、閻王倶生神を友とし、常に魂遊行して天堂に至り給ふと聞きつたふ。いでや此の社に詣りて、我が生世の中に一度冥途に行きて、地獄の有様一見し、自らの疑ひはらし、人にも語りきかせて、今生後世、流転、因果、應報の違はざる道理を信ぜしめんとて、年久しく此の篁の社に祈誓しけり。或年の秋清水に参り、歸りざまに六波羅の方へと赴くに、日やうやく暮れかゝり、野寺の鐘も間近く聞ゆる頃、忽ちいづくともなく衣冠正しき貴人、黒き裝束に笏を持ち、馬上にて出で來り給ひ、忠助に向ひ、「我は日頃汝が念ずる小野篁なり、いざ此方へ來るべし」とて、珍皇寺の内に伴ひ、馬をば傍の櫻の木につなぎて、忠助が手を執り、「爰は六道とて冥途に通ふ道なり。これに離れず取り付いて來れよ、遅るゝ事なかれ」と宣ひ、庭前の草むらを押しわけ給へば、そのまゝ一の通路開け、歩むともなく落つるともなく、しばらくの内に渺茫たる野原に出でにける。見渡すに、いづくを限りともなく、その廣さいふばかりなし。その間に樹木禽獣も見えず、遙かに北の方へ十里ばかりも歩みゆくに、又ことゝふよすがもなし。人倫たえて物寂しく、風蕭々として水音かすかに聞え、いとゞ心細く思ふ所に、一つの樓門に着きたり。打仰いで見れば、金殿紫閣甍を並べ、築地迴廊の装ひ廣大壯麗にして、人間世の大内裏の如し。篁案内乞うて内へ入らんと仕たまふに、

門を守る官人、忠助を見て咎め聊か入れざりける。篁「然らば暫く門外に待つべし、我内に入りて冥府の公役を勤め、かつ汝が出入免許の簿籍を取りて帰るべし」とて門内に入り給ふ。忠助詮なくて門の側にしりかけ休息し、半時許り待ちけれども出で給はず。門はきびしくさしかためたれば、こと問ふべきたよりもなく、如何せんと退屈して、四方をながめまちわびける。かかる所にいづくともなく蘭麝の香しきにほひして、小歌をうたふ声しけり。怪しやと見出したれば、えもいはず美しき女房四人、聲面白くうたひ連れ、足許もしどろに歩み来るにぞありける。その顔形ただならずきよらかにて、あたりも輝くばかり粧ひし、然もその頃世にはやるといふ、御所染人にもやうある世の華やかなる小袖ひき纏ひ、さきに立ちたる女房、忠助を見て笑ひながらさし招き「此方へ来り給へ、道連にし奉らん。いかに寂しく一人待つらん」といふ。忠助とかうの言葉なく、これはそも如何なる雲の上の上臈の迷ひ来り給へるぞや、笑めるかほばせは太液の芙蓉の如く、こぼれかかる髪は未央の柳にたとへ、古の楊貴妃も斯くやあらんと、目もあやにながめしが、さすがいやしき身なれば、まねき給ふとても、近づかんはいかが」と憚りければ、四人ともに忠助にとりつき「何かはさまで怖れ給はん、われ/\は憂きふししげき川竹の、流れにしたがふ身のゆくへ、誰かあはれとよし問や、高砂唐崎千歳とて、四人ともに傾城にて侍るなり。げにや柳のかげのやどり、往き交ふ袖のふりあはせまで、皆是れ他生の

縁ふかく、いざ／＼此方へ来り給へ。」と、ひたぶるに慕ひ寄り、はやなれそむる懐衣、袖のかをりもなつかしく、身にしむ許り語らひける。されば愛著の道その根深く、源遠し、六塵の楽欲は皆厭離すべけれども、たゞ此のまどひのみ止め難く、身死し生を易へても猶免れざるにや、忠助心惚れ／＼となり、怨む篁の事もうち忘れ、たゞ嬉しとのみ覚えて、いづこをあてともなく、遥かに南を指して誘はれ出でける。さる程に鷹峯の家には、忠助かりそめに清水詣でとて出でけるが、その日の夜にいたれども帰らず、父母怪しみ歎きて、東山辺をあなたこなた尋ねけれども知れず。あまり求めかねて六道の内へ入つて見ければ、一かまへの草むらの中に、こけ倒れて死し居たり。父母大きに悲しみやう／＼にたすけ起し、物にのせて涙とともに鷹峯に帰り、死骸をさぐりみるに、いまだ胸のあたり温かなれば、まづ葬送の儀もさし置き、いかゞはせんと歎きけるが、父母きつと思ひ出し云ふやう、「忠助多年小野篁の社に祈りて、此の身ながら冥途を見ばやと願ひしが、よし左様の態にてかく俄に死したるやらん。いかさまにも篁の社に参り、再び蘇生を祈らばや。」とて、父母諸共に篁の社に通夜して「忠助を再び此の世に返し給へ。」と祈誓しける。此の夜の夢に篁、父母に宣ふやう「汝が子忠助偏に我に祈りし故、冥途へ誘ひし所に、かう／＼の次第にて愛著の念にひかれ、我いづるを待ちわび、四人の傾城にさそはれ南をさして行きしなり　今天眼通をもつてこれを観察するに、かの傾城

と見えしは、淺ましくも畜生道に墮ち、都の南、鳥羽の里、百姓某の家に飼ひ置ける猫の胎内にやどれり。忠助も一念五百生繫念無量劫の業によりて同じく猫となれり。しかれども汝が歎く所もだしがたし、我神力をもつて加護すべし。いそぎ鳥羽の百姓に訪ねいたり、その子をとりて忠助が死骸の耳元にさしあて、光明眞言を七遍唱へ、力に任せておしつくべし」と、教へ給ふかと思へば夢さめたり。父母ありがたき事いふ計りなく、是れよりすぐに鳥羽の百姓を尋ね、「しかじかの事やある」と問ひければ、百姓出でて、「いかにも我が家に飼へる猫、昨夜子を五疋産みたり」とて見せける。げにも夢の告げに違はず、女猫四疋男猫一疋ぞ産みけり。父母悦び、この男猫を貰はんと云ひけるに、百姓たやすく與れざりける。父母ありのまゝに語り、只管乞ひとりて鷹峯に歸り、夢の教への如く耳のもとへおしつけければ、此の猫の子強くおしつけられ、一聲泣きて死にけると思へば、忠助夢のさめたる如く、何のなやみもなく蘇りける。父母よろこび、親子三人共に篁の社に詣でて、ねんごろに禮拜供養し奉り、ますます佛道に歸依し、此の事普く人にも語りて懺悔し、殊に世の人の心まどはす色慾に耽かず、おのおのいたく戒めとなすべきよしかたりけるとぞ。

狐中國に渡る

往古には阿波讃岐伊豫土佐の四國をすべて二名島と號せり。人王第八代の帝孝元天皇の御宇に、此の島の人民一同に逆心を起し、王命を背きて國中をみだりける。此の時天皇の御弟、借瀟居將軍の官に任ぜられ、二名島に下向し、逆民を征伐し國中を平治し給ひ、即ち國守となり給ふ。是れを伊豫の王子といへり、伊豫とは伊に與ふと書けり。此の王子の御子孫代々相續し、その末葉後世に至りて河野氏となれり。こゝに寛喜年中に前河野通直の妻女、ある夜庭に行き給ひしが、かへるさに忽ちその身變化して二人となれり。面體容色よりして衣裝立居にいたるまで、露まがふところなし。是より此の妻女はならびなき美人にて、かほばせきよく、山の端出づる三五の月光照りそふ裝ひ、月花の粧春山の眉、いふばかりなくあてやかなれば、世にまたたぐひあるべしとも覺えぬに、今斯く不思議に變化して二人となり、笑ふも語るも立つも居るもすべて一様にて、別ちがたき有様は、かの近衞院の御時、源三位頼政鵺と云ふ化鳥を射たりし恩賞に、殿上にてその名も高き官女あやめを下されし時、頼政が心底を試みんとて、同じさまなる女房をならべ、「此の内にて選びとりてわが妻とすべし」とあり。頼政とりあへず、さみだれにさはべのまこも水こえていづれあやめとひきぞわづらふ、と詠みたりし昔の事も思ひ合はせて、人皆怪しみ驚きける。通直大きに立腹し、「何れ一人は妖物なるべし」とて、手いたく詰責し給へば、此の二人口を揃へ、「我こそ此の身の本妻よ、彼は變化の者なり」と、いやあ

れこそ妖物のしわざよ。」と、互にあらそひ罵り、後には泣きわめきて摑みあひしかども、更にいづれと定め難し。名醫來りて、「是れは離魂病なり、俗にいふ影の煩ひとて一女二女となる、和漢その例なきにあらず。」とて、湯藥の事へ、又は禪僧來り見て、「是れ先德の古則に所謂倩女離魂の話とて、一身兩身になる不思議なり。」とて、一喝一棒の示しを爲し、その外山伏の祈禱、道心者の加持、すべて世にある法術を盡して治せんとすれども叶はず、通直今はせん方なく、二人の女を捕へ籠舍に押し込め、番の者をつけてその體をうかゞひ、數日を經るうちに、一人の女、食を食らふこと少し變れり。すはやこの女こそ妖物ならんとて、つよく責め拷問せんとするに、籠の外にありながら、われは正身の本妻なるを見忘れ、かゝる憂き目を見するは何事ぞや、通直はいづくにましますぞ、なさけなの武士どもや、われも同じ正身なるを、過ちして後に悔むな。こゝを放せよや〳〵」と喚き叫びけるが、主命なれば番の武士ども用捨もなく打ち倒し、大勢立ちかゝりて責めふせければ、案の如く此の女息はずみ、眼くらむと見えしが、忽ち正體を現はし、幾年經たるとも知らぬ古狐となりける。通直大きに驚き、「さもこそあらん、おのれ何方より來り、おふけなくもわが妻をかくまで惱めしぞ。畜類の身として憎きしわざ、片時も生かして置くべきものにあらず、急々にさし殺すべし。」と下知し給ひ、既にかうよと見えしとき、四方よりも大勢の聲して、「暫く、訴訟の事あり。」と呼ばはりける。いづ方ぞと見廻すに、





其の門前に何物とはしらず、僧俗男女四五千人ばかり走せ集まる。「何者なるぞ」と咎むれば、「われわれは四國中の狐共なり。暫く事をしづめて聞き給へ。只今殺さんとし給ふ狐は、忝くも傳狐明神の眷屬、稲荷社の使者長狐と名づけて、總じて日本國中の狐の君主にて侍り。一旦その神慮を試みんがために、君が本宮に妖けて人々を悩めしかども、是れもと不慮の戯れにて、命を取り家を亡ぼすの害を爲さんとにはあらず。まげて御宥免し給へ。もしさもなく切り殺し給ひなば、本妻を始め一家残らず死亡の大災あるべし。此の長狐はわれわれの主君にて、しかも神變奇特の師匠なれば、今よりたちまち變化の法斷絶せんことを歎き訴へ來れり。願はくはその命を助けたまへ」とわめきける。通直聞き給ひ、「さては名譽の野干にこそ、かく大勢詫びるを無下に殺すも不便なり。然らば重ねてまた斯かる障碍を爲さんも知らず、今より後は四國中に狐一疋も住むまじきと云ふ誓文を致し、皆々舟に乗りて中國にわたらば、此の長狐が命を助け跡より宥し渡すべし」と宣ふ。大勢の者皆々よろこび、「有り難き御慈悲なり」とて、稲荷五社の神號を書き寫し、事々しき誓紙をさゝげ、「是れより後は再び此の地に來るまじ、急ぎ長狐を助け給へ」と契約して、一同に數艘の船に取乗り、中國の方へ渡りける。通直誓紙を留め、長狐を宥しやり給ふ。これより四國には狐住まずと云ふ。右の誓紙河野の子孫に傳へて猶今に至るまで家寶とし給ふ。然れども若し此の誓紙末世に至り斷滅せば、また昔のごとく住むべ

き聞なりと、狐共も云あへりとぞ。

耳嚢巻之一 終

玉帚木　卷之二

蝦蟆の妖怪

細川右京大夫勝元は、將軍義政公の管領として武藏守に任じ、富貴を極め威權を輝かし、凡そ當世公家武家の輩ことごとくはその下風につき從ひ、その命を重んじ敬ひあへり。かかりしかば貨財珍寶求めざれども來り集まり、繁榮日々に彌増しにて、よろづ心に叶はずといふ事なし。その頃洛西等持院の西に徳大寺公有卿の別莊あり、風景面白き勝地なれば、勝元請ひ受けて菩提所の寺と爲し、義天和尚をもつて開祖とし給ふ、今の龍安寺是れなり。勝元居宅の書院を引いて方丈とせり、この故に造作の結構世の常の方丈とは變れり。勝元元來權柄天下を傾けければ、私かに大船を大明國につかはし、書籍畫圖器財絹帛の類、かずかずの珍物をとり聚めて祕藏せり。その時の船の帆柱は大明の材木にて造りしを、此の龍安寺普請の時引き割つて方丈の床板とせらる。その幅五尺ばかり、眞に條理堅密の唐木にて、和國の及ぶ所にあらずといふ。方丈の前に築山を構へ樹木を植ゑ、麓には大きなる池あり、是れは勝元自らその風景を指圖して、景氣面白く鑿り開き給ふとなり。水上には鳧雁鴛鴦所得顔に羣れ

道ひ、島嶼環廻して松杉波に映ふ、古人の緑樹影沈んでは魚木に上ると詠じけんもこゝなれや。色々の奇石を疊みたる中に、勝れて大きなる石九つあり、是れぞ勝元自ら配り置き給ふ、その作意絶妙なりとぞ。勝元政務の暇には常に此の寺に來り、方丈に坐して池中の景を詠め、酒宴を催し、殊に盛夏の中は暑熱を避け、しば〳〵池の邊に逍遥し、近習の人を遠ざけ、たゞ獨りひそかに衣服を脱ぎて赤裸となり、池水に飛び入つて暑さをしのぎ、しばらくあなたこなた游泳して立ちあがり、そのまゝ方丈に入つて打臥し給ふ。ある年の夏の夜に、此の邊を徘徊する曲者の盗賊ども七八人、此の寺に入り來り、ひそかに方丈の軒をうかゞふに、人一人も見えず、いと靜かなり。盗賊ども思ふやう、今日は細川も來りたまはず、寺僧も他行せしと見ゆ、究竟一の幸ひならずや、いで〳〵しのび入つて財寶を奪はんとて、池の岸根をつたひ、隔ての戸ども押し破り、方丈へはひあがらんとするに、おもひもよらず方丈の眞中に、その丈きさ一丈ばかりの蟒蛇うづくまり、頭を上げ眼を見いだし、その眼光研ぎたる鏡のごとし。盗賊ども膽を消して絶入し、そのまゝ斃したふる。此の蟒蛇忽ち人と變じ、勝元となりて立ちあがり、傍なる刀押取り、汝等は何者ぞ、こゝは外人の來る所にあらず、と大きに怒りければ、盗賊ども懼れ戰き、わな〳〵震ひけるが、まことは盗人にて侍る、命の惜しさに忍び入りしなり、御慈悲に命を助け給へ、と、一同に手をあはせひれ伏したり。此の人打笑ひ、しか

あはれ」と、床の間にありし金の香合を投げ出し、「汝等貧困に迫り盜竊するが不便さに、これを與ふるなり。かならず只今見つけたる體を人に語ることなかれ。とく／＼歸るべし」といへば、盜賊ども香合を受けず其のまゝ戻し、「ありがたき御芳志なり」といひも敢へず、跡をも見ずして逃げ出でけり。遙かに年經て後、此の盜賊の中一人、勢州北畠家に囚はれ、此の始末をかたりけるとなり。抑此の蝦蟇は池元の本身にて、かくまでかたちを顯じ、思ひかけず亂れ入りたる盜賊共に見つけられたるにや。然らずば又此の後の山中には、蛇谷姥ヶ懷などいふ木深き惡所もあれば、かかる妖怪の生所もありて出でけるにやと云ふ。

碁子の精靈

武州江戸牛込に清水昨庵とて隱者住みけり。生得に甚だ碁を好きて、ひねもすよもすがら碁をうちくらしては、如何なる大事あれども耳にも聞き入れず、寢食をわすれ魂をなげて、ことごとしき勝負をあらそふほどに、大かたは狂氣にやと人も怪しむほどにありける。かく年月を積んで好き好みけれども、元來下手なれば碁の工夫も進まず、相對する度に負けければ、人皆かたぶけ笑ひて、石馬と異名しける。打てども上らずと云ふことなるにや。ある年の春の頃、あまりに碁をうちつゞけ、心つかれ

日もくれゐければ、暫く醉氣を醒さんとて、小僮に瓢箪やうの物を持たせ、地木村瑞照寺の方へと赴
み給ふ。此にも此の寺は境致絶景にて、世の騷客を誘ひ、心有る隱士文人ここは常に徘徊し、詩
つくり歌詠みて一時の興を催せり。ことに今は花盛りの比なれば、あなたこなた三々五々つどひ
とひぞくしかるはたい非嗚なればなでこゝをかしこ花を詰する所に、寺の門前にて不思議の道連れ二人
に行きあひたり。其に花を賞しみる輩にて、一人は色白くつやゝかなり、今一人は色黒くすこしたる人
なり。此寮をみやびやかなる[illegible]で一花だに梅の花をながめ給ふにや、互何に親しく興なりつる。我輩二人は常と
に日々日課を廻しぬありき、然れども見院花綠らかなる人、まことに是のまれなるに、花とも蝶のここ云
ふ。諸聖己上の見面なりされば、心得手邪にて、いふをまことに思はれ、寺内を徘徊するに、此の二人花下
の香と[illegible]せしを、古今世に[illegible]ふ學者書家の風流たる品行を論じ、一雅筵の興は古來にして、その物
へ向ふ遠る席にければ、幾世に[illegible]はらず、猶は尋常の如、たゞ何となく安らかなるが、しかも撰れる
とぞ給はず、いかなる時手、今の代にはまれ／＼に見ゆるは、たゞ語りけれは、專ら論ふしき高論を人誰
く抛かなと云、其を語りしが、言さるにても此の瑞照寺、名木瑞の鞍の離れを慕ひしのは二ゝと云ふ
ての點き誤聞と云ふこゝに行き人のしる所なれど、碑ではなゝ〳〵詣に[illegible]ひ、寺民の諸に、むかし
植木右衛門何とておはせしか、源氏しなさきの上き、月[illegible]を常に寺中に居、其の木草にたとへる

れしに、此の右衞門督をば柏木によそへらる、いつも常盤なりける姿を譬へていへるなるべし。ある時源氏蹴鞠を遊ばしける御つめに、右衞門督參られけるが、御殿の御簾の内より猫の驅け出でけるが、綱にて簾のすこし開きけるひまに、女三の宮を見初め奉りてより、たえぬ思ひの色に出で、しのびしのびに忍びたよりて行き通ひ給ふ。或時はなだの帯を忘れて源氏に見つけられ給ふ。源氏何となくほのめかし、右衞門督に酒を強ひて、御心よからぬ目使ひをし給ひしより、右衞門督心の鬼にや、うしろめたくいとゞしく物狂はしかりける。斯くてしばらく此の村に流され給ひしが、程なく召し返されし給ひしかども、いたく心地惱み、久しく打伏し失せ給ひぬ。女三の宮は右衞門督の御子をはらみて生み給ふ。五十日の祝ひのをり、源氏かの若君をかき抱き、女三の宮の御傍に立ちよせ給ひて、

たが世にか種子をまきしと人とはばいかゞいはねのまつはこたへむ

と詠み給ひしかば、宮は云ふばかりなく恥かしと思しひれ伏し給ひしが、右衞門督失せしより物かけにならせ給ひ、これも程なくかくれ給へり。かの若君をば後に薫大將と名づく。生まれながらにして御身に妙なる薫をそなはりし故の名なりとかや。右衞門督此の所に流され給ひし時、手づから植ゑられし櫻なりと云ひ傳ふ。花は蕊長く、匂ひ四方に薫じ渡り、見に來る人の袂までその移香をのこしける。かかる謂れある故に、花を右衞門櫻と云ひ、村を柏木村と名づけしなり。」と語り續けけるに、寺

の[illegible]内に[illegible]る花あるを、今一人の[illegible]と歌[illegible]吟して云く、

ひらかざる花のかたちや重か半

折[illegible]に[illegible]人[illegible]見て[illegible]、

我がもにつ[illegible]る花見かな

木の間に[illegible]る人のあるを見て、

幕串はすみかけて打て花の下　　白

明暮れとこていひて[illegible]ける[illegible]、不[illegible]なることとていふ人々かへ、此[illegible]作とさしにる[illegible]手の[illegible]り、日ごろ[illegible]は気に[illegible]はあ[illegible]から、左に[illegible]中なれは、今日は打るつれ出でつるか、あかる云ひ[illegible]ても[illegible]にことと[illegible]したり。ここにて此の二人[illegible]が作れたれか[illegible]を呼びて、[illegible]は[illegible]黒[illegible]の[illegible]て、花の[illegible]に[illegible]つべし、能[illegible]の[illegible]は[illegible]人のあるゆるこそ[illegible]して[illegible]れ、[illegible]を[illegible]るなことと云ひて、

花によき所をとるや先手後手　　黒

人々のあ[illegible]まて[illegible]に[illegible]を打つて、下を向うて[illegible]せよ[illegible]上いへ[illegible]けて、

遊山する地をやぶられな花の陰　　白

昨庵此の句どもを聞く毎に、可笑しくも面白くも覺え、耳をすましけるに、傍に幕打ちまはし、大勢並びゐて、酒宴を催し花を詠むる中に、年のころ十四五ばかり、いふばかりなくあてやかなる美少人の、俤ほのかに見えて、歌ひ舞ふ聲しければ、

見や花ののぞき手もがな幕の内　　黒
花見にはせめあひなれや順の舞　　白
中手こそならね花見のまとゐの場　　黒

昨庵如何したりけん、群集の所にて此の二人を見失ひ、たゞ〳〵しくまどひゆくを、二人見つけて聲をかけれど、えしらず通りければ、

手をうつを知らざるに何花の友　　白

やがて廻りあひければ、

見落しをせぬや並木の花盛り　　黒

あれを見ん、いやこれをと爭ふをききて、

四鳥にやかゝりがましき花の友　　白

圓照寺の花は今日を盛りなり、その中に且咲き殘りたるもあり、又枯れて時知らぬも交れりけるを、

所々だにさうらぬや花ざかり　黒

いたみてやまだ咲きもせぬ花の枝　白

鹽竈と云ふはゆかに散り過ぎたるを見て、

あげはまとなる鹽竈のさくらかな　黒

爰に當寺の名木頑瞎ひたはし、あたりへ人を寄せず、元より色殊更に見えければ、

守りて[illegible]園はやぶにも花ざかり　白

寺の庭草の縁、爰かしこに酒宴しけるを見て、

さしかはす花見の酒やかたみ先　黒

よわからぬ相手もがもな花見酒　白

花に酔うて皆持となるや下戸上戸　黒

酒宴する人々の中に、餘りに呑み過しなば歸るさうたていふべし、程へられよと頼む人あれば、その飲人にかはりて、

興うなるのたのはいかに花の酔ひ　白

たの内ひとりは下戸と見えて、上戸もあへぬけしきなれば、

杯は打つてかへしに花の友　黒

亭主の人と見えて、手づから茶をたてゝさし出しける、その人に代りて、

こふたてゝ見るは花なる白茶かな　黒

白き禪門花の下に立ちよりて、此の一枝折りて家苞にせまほしけれど、人の見る目おとなげなし、如何はせんと云ふに　昨雲聞いて、「これほど澤山なる花なれば、何かは苦しかるらん、只々手折り給へ」といへりければ、

花の枝は助言のごとく切つてとれ　白

折る人にはねかけよかし花の露　黒

よそに見る顏して折るや打ちがひ手　白

折りえたる花や情の遣ばひ手　黒

「花守の咎めたらん時には如何はせん」と云へば、

手を見せよ折るか折らぬか花の枝　白

花守や折るを見付けて追ひおとし　黒

見とれては目あり目なしよ花の色　白

[illegible]に逢ふ[illegible]見まし若稲道　黒
打ちはさめちる二またの花の雪　白
高みより飛ぶ手に散るな花の枝　黒
[illegible]　白

家の内にて小さき枝を見るさへうれしきに、まして此の遊山はとて、

花咲し活けてだに見し竹の節　白

「今日此の寺に打寄れたる人数いくらにや。」と云ひて、

もゝく[illegible]花の山　黒
種や人まくこおよばぬ花の[illegible]　白
夕日にはむかへど花や東じろ　黒

最前より昨庵が小僕、花の蔭に筵うち敷き待ちわびるたり。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なたは何事も思ひよらず、あまりの無興に覺えければ、

窓の前は朽ちぬに尽る化見かな

と詠じて人に示し、さるにても指道は、いかなる高貴の世を迎へ給へんぞや。然も圖案のよき人と見ゆ、その法を指南し給へかし、と云へば、一人答へて、我が師元より凡人にあらず、一人は雪道より出で、又一人は自家より來り、終に雪道の茶はゆるされ、名を知を知白と云ふ、雪堀山數石会る仙嘱を結び、又その真法を學へり。此を日本六十餘州の名山靈窟を廻り、ゆゐあまた仙人道士に親しみ友とし、或時は又世間に出でて道具になおり、自ら慈する所あれば、年古稀の齢れと爲して見ゆるす。今は見れとてなり、と一通の文書を授け、行方知らず失せにける。昨宵留の罪ひを詫し、室に歸り、熟々書の次第を案するに、かの二人、我とに深く通じぬありと云ひし、是れ是ふべしとなす業の縁變は是れ、我に言葉を交せしなり、急ぎかの文書を披き見るに、古文字に書けるが見ゆり、その文に云く、

驅馳道自動搖處　往來一轍兩無多

一種秋水無人汲　知者知音是何窓

是すとの宗旨自然と圖案の名人となり、始め失ひし者も、悉く打ちまけ、後に江戸中に名を殘し給

地獄を見る

周防國大内左京大夫義隆は、居士琳聖太子二十七代の末葉にて、防長豐筑四箇國の太守たれば、家門の繁昌世に超え、當時都鄙に肩を雙ぶる者なかりける。この故に、義隆驕奢の心日々に長じ、國の政民の愁へを省みず、明暮華車風流を事とし、春は花の下に遊び戯れ、秋は月の前に詩歌をすゝめて、[illegible]茶の湯の會を催し、饗應の備へは山海のある所珍味美食をつくし、酒[illegible]遊興に追なし。此の時天下一同に戰國の世となり、いづかたも穏ならざれば、公家門跡、その外諸藝伎樂の譽ある者まで、皆義隆を頼み來りて集ふほどに、當國の風俗漸々に美しく、上下賑ひわたりければ、宛ら洛中の繁昌に異ならず。こゝに義隆の大佞臣、相良遠江守奢りをきはめ、家傳の大老陶尾張守全姜入道隆房[illegible]二、義隆へ讒言せしによつて、陶、義隆へ恨みを爲し、天文二十年九月朔日隱謀を企て、義隆[illegible]口高嶺へ取りかくる。義隆思ひ[illegible]らざれば大きに驚き、高嶺を下つて法[illegible]寺と云ふ寺へ入らせ給ひ、種々あつかひを好み給へども、陶、承引せざれば、石州津和野へ立ち越し、吉見大藏大輔正頼を頼まんと思召し、長門の内瀬戸崎といふ所へのがれ給へば、後根壹岐守籠り出で、大

新艘を用意し、義隆を始め三十餘人をうち乘せて、瀬戸崎の岸を漕ぎ出す。浦は遙かに押し出されたるに、而に漕ぎすれども逆浪立ちて、義隆の運命の盡きぬる程こそ無けれ、俄に向ふ風荒く吹いて、大浪山を重ねたる如くなれば、再び瀬戸崎の元の浦に漕ぎ返しつくる。「此の所要害の地ならねば、敵を防がん所にあらず、長門深川の大寧寺然るべき」とて彼の寺へ入らせ給ふ。其の頃は大寧寺に異雪和尚とて、博學の名僧ましましけるに、法談の問答ありて、夜既に明けんとする時、陶が先陣已に寺を取り卷き、る者大勢寺の内へ亂れ入り、義隆を中にとりこめ矢を射かけ、前後左右より責めければ、籠の鳥の如くのがるべきやうもなく、義隆自害し給ふ。辭世の歌に、

討つ人もうたるゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀

其の時一所に自害せし人々には、冷泉判官隆豊、一忍軒、小幡四郎、黒川刑部少輔、岡部右衛門大夫、禰宜民部少輔、大田隠岐、岡屋、これ等なり。中にも冷泉隆豊は指を噬り、その血をもつて大寧寺の門の扉に辭世の歌を書き給ふ。

みよやたつ雲もけぶりの中空にさそひし風のすゑものこらず

かやうに家臣皆忠なれども、義隆の智謀も拙になり給ふをば、たゞ情けなくも陶が手にかけて生害するこそ哀れなれ。さればかかる大悪無道の逆臣なれば、果して天罰の報ひ遁れず、陶も後に元就に

に渡の謀計にてけるところ、爰に飯田藤兵衛と云ふ者、[illegible]の住人にて家に仕へ、今は家富み榮えし
か、主君の行跡を見限り、本宗を[illegible]周防に參り、[illegible]有樣を[illegible]けるが、武時謀叛の
事あるを聞きし時、[illegible]二三人相談し、細川の陣を[illegible]けるに、夜より上に飯田が首を[illegible]
討たれ、[illegible]と近寄り見れば、既に見知らざる[illegible]、[illegible]文箱を[illegible]し出し、[illegible]
けるに、飯田[illegible]、[illegible]捕ふる[illegible]。[illegible]その名は八[illegible]、十[illegible]
せしに[illegible]の名を聞き、飯田が[illegible]名その[illegible]にあり、飯田と[illegible]しければ、[illegible]
飯に[illegible]、[illegible]
をり給ふ、[illegible]
給ふと聞[illegible]
飯の[illegible]
と、[illegible]
る。安宜[illegible]
年[illegible]
實[illegible]

逆すれ。此方より看しに遙にぞしは、己の時に生まれし者の罪なり、生れ落ちしより後は悪業の至りならずや」と、大きに怒り給ひ、罪業の者を地につけ與へて、その罪を定め、立ち上りて又黄の道へ走り行きぬ。冥官に向ひ、一某、平生ぞせる罪根重しと雖も、又殺生偸盗の悪事に馬ま良に此の罪を懲し、西の大門に返し給へかし」と歎きける。冥官打笑ひて、「真に汝が只今其の地に来る者にあらず、使者入道へし、汝が戻り、帰り来れ。さらば大門に逐しやられる」とて、門外に作せ出で給ひしか、「汝今不思議の縁にあうて爰に来れり、よき序なれば見せ得させんことあり」と宣ひ、直に色の分れ極めて遠く隔たる二つの山の間に誘ひ入り給ふ。この間すべて常夜の闇にして、前の黒白も知られず、道の両に累々たる山の頂の月もなく、何處を指すとも方角を知らず、唯足跡を辿る心地にて、漸う歩み行けば鐵の門あり、叫喚と云ふ額ありて、此の内にその様を聞くも恐ろしき声の流る。此の底より大焔の燃えいづる事、宛も夏の雲の立つが如く、黒煙天にみちて、猛火の熾く燃え昇る有様は、さながら百千の雷の一度に落つるが如し。其の門にあふるる罪人の数は甚だ夥しく、焦がれて、黒くすなり、燃え焼の苦しみいふばかりなく、戦慄して罪り降ること、遂なく此土にある事に候に、その苦患に耐へかねて思ひまた泣き叫ぶものさへ、見るに心消え、魂を失ふばかりなり。冥官獄卒に向ひ、此の罪人等多くは汝が同國の者どもなれば、見知りたる人もあるべし、是れ則ち高防なる内裏の通

時、關白[illegible]、千鳥[illegible]、其の外[illegible]

伊賀[illegible]、[illegible]の[illegible]して、[illegible]、人民を[illegible]せ

し[illegible]

[illegible]

[illegible]

いかなる罪人にか侍ることと問ふ。[illegible]

に[illegible]

の頃暫く陶が右筆となり、某夜の[illegible]を書きし科あり。[illegible]

至りぬる故に、池府の使者を遣はし召捕らしめし所に、世には[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

を退ても、[illegible]の[illegible]とせずんば、又た斯くの如くなるべし[illegible]

ふ[illegible]

歸るべし、是は卿がはじめ來りし道なりとて、冥官は城中に入り給ふ。飯田心細くも只一人、是にまかせて行く程に、案の如く忽ち人間世に出で、はじめの竹輿に乗りて過ぎたりし防州深川の邊に着きにけるが、さては冥途より我が故郷にかへりけるよとうれしくて、身を省みければ、赤裸にてぞありける。是は如何せんと歎きおもふ所に、ただ今ありし最前の飛脚出で來り、はやはや故郷に歸るべし。道引に及ばず、たゞ魂の寄るにて。後悔すとも益なかりなんと大音にて叱り、その背をはたと打ちける。飯田はつと驚くと思へば、夢の醒めたる如く蘇生しける。飯田死して三日になりければ、家人うち寄り、すでに火葬にせんとこしらへける所に、忽ち起き出でければ、飛脚のいへる道引ぞ益なかりなんといひし事、此の事なりけりと皆人怪しあへり。

玉帚木巻之二　終

[illegible]堂の由

近世の[illegible]小野[illegible]、世に[illegible]れ塵俗を厭ひ、ひとり心を澄まし常に詩を暗誦て風雅を事とし、更に他の外[illegible]を[illegible]ず。居處の内に醉月亭とて小高き亭あり、亭の前には泉水清く流れ、さゝやかなる魚戯れあそび、[illegible]うには築山面白くつくり為し、松柳の木立物ふり岩[illegible]芝生の間々には、四季に應じて花咲く草木を植ゑ並べ、眺めあかぬ風景あり。ある夜風しづかに月晴れて最興ある頃、表の門を叩き案内を乞ふ者あり。久庵怪しみながら出でて迎へければ、誰とは知らず異相なる老翁、葛巾野服さび／＼としたる體にて來り給ふ。久庵恐れ入りて亭に招請し、春[illegible]り、詩の奥義を議論するに、その辨釋精微[illegible]し[illegible]、未だ嘗て聞かざる事共なり。久庵大いに驚き、「此れ[illegible]人にあらず、その姓名を名乘りたまへ」と言へば、「我は詩仙堂石處士なり。君が隱逸にして詩を嗜むと聞いて、ゆかしくて來り訪ひしなり」とのたまふ。久庵益々驚き、腰を折り手を束ね、「某は市中の[illegible]士なり、豈はからんや處士の斯く目のあたり來臨し給はんとは、冥加至極なり」とて限りなく

[illegible]ひ、願はくは頓て此座に留まり、猶々詩作の秘訣を授け給へ」とて、心のかぎり歓待し、酒肴を出しければ、處士、「我は平生酒を好まず、醉心故にはあらず。」と宣ふ。又宣ふやう、「わが門人平岡子を知れりや。」と。久庵畏まりて、「某年來入の詩集を讀みて、久しく平岡子の名を聞き及べり。」と言ふ。處士「然らば今宵の相客に呼びにやらん。」とて、片簡を認め僕を遣はし給ふ。暫くありて平岡子來れり。久庵走り出でゝ迎へ、座上に請じける。平岡子處士に向ひ、「何事のありてかかる市塵の中へは來臨し給ふ。」と問ふ。處士答へて、「此の亭の主人閑居隱遁にして、而も李杜の癖あるを喜びて、假そめに立ち寄りしが、時刻移れり。いざ共々に語り給へ。」と宣ひ、また僕に命じて、「李賀良を呼び來れ。」と言ふ。暫くありて年の頃十五六ばかりの容顔美麗なる少年出で來る。處士久庵に向ひ、「是れは我昔召使ひし從僕なり。幼少より李賀を敬慕して、ただ詩賦を好めり。眞に唐の李賀に似たる所あり。我深く賞愛して、名を新賀良と呼び、ゆくすゑ我が詩賦の統を傳へんと思ひしに、不幸にして病に罹り、我に先だちて死にたり。いまや君とちかづきになし侍らん、良き風雅の友ならん。」とて引き合はせ給へば、新賀良うやうやしく禮儀を述べて末座に伺候しけり。處士又宣ふ、「近頃われ[illegible]圓光寺に詣で、寺内の幽境に入り、終日逍遥して詩を詠ぜり。我が詩先づなれり。」とて見せ給ふ。その詩に曰く、

[illegible]

秋気巻二清筵一。雲[illegible]。[illegible]

雅[illegible]

その時新賀良臨和して曰く、

迎レ客花開公下筵。[illegible]

[illegible]

登二山[illegible]

慮士[illegible]新賀良が此の[illegible]作[illegible]、[illegible]たり」と賞美し給

ふ。久庵右の両詩を拝見して、[illegible]沈吟して[illegible]、某も恐れながら和韻して見侍らん。」

とて、即陸に筆を走らしめて書き写し、新賀良の前に[illegible]、某が詩は[illegible]

ず、世人[illegible]云ふて其の詩に云く、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是宙已過寺居人。　翠樹亭阿閑閣連。

處士も一聽して大いに驚歎し給ひ、是れ程に詩を作れるもの我が門人の中にも稀なり、なかなか英材あれども、閑職として世に名を求めず、眞に希代の逸士なりことと感賞を起し給ふ。時に半閑子問ふ、世の常斯く定式の律詩絶句のみ作り、變體の詩を詠ずるもの少なし。變體も時々詠ずべきにや。と。處士答へて、杜子美なども、偶には作りたれども、後人常に好んでは作るべからず。折節自然と句意が出づれば作ることもあり。さりながら別して詩が良くなければ詮なきことなり。皆上手の所爲と見ゆ。下手の及ぶ體にてはなし。我もまゝ作りて見れども、意に適ふは稀なり。と宣ふ。半閑子又反體の詩を問ふ。處士答へて、是れも好んでは作らぬ事なり、たゞ是れも詩の一體と云ふまでなり。然れども古人の詩にも多くは見えず、偶のことなり。おりおり作りてもあるべしとなり。時に酒三獻ありて後に濃茶を出せり。皆々興に入りて物語の序、異國本朝茶の品々を問ふ。處士語りたまふは、唐土には味の外、茶の風味を重んずと見えたり。茶の異名に龍鳳の團茶と云ふは、印判によりての名と見えたり、團きゆゑに團の字を付くるならん。雀舌寒月鷹爪等と云ふは、皆芽の生えいづる時の葉によりて名付けたると見ゆ。緑塵月花などは皆色にて云ふなるべし、松風、澗泉、鳴蟬などは、茶を煎ずる時煮る音を云ふ。魚眼、蟹眼、若花、乳花などは、煎ずる時の泡なるべし。總じて茶の拵へも本朝とは相違

せり。茶の木も嶺上には大木ありと見えたり、巴川峡山には、抱へ圍なる大木あり、枝を伐つて葉を取ると云へり。顧渚、建溪、北苑などに茶の出づる名所なり。凡そ宋朝より盛んになりて、後代にはその用ひたり。さて茶の水の吟味が重きなれ、陸羽が茶經の論、中々細かなる次第なり。本朝にても豊臣太閤の時茶を撰み出だされて、宇治川の水は他處よりの水の量目が輕きとて、宇治橋三間の水を汲ませ並ま毎日の茶の湯に用ひられしなり。今に宇治橋にそのしるしあり、是れは利休居士と相談の上に極め置かれし由なり。其の外他處にも水の善惡はあるべし、世に名水と云ふものあれども一々賞翫せず。そもそも本朝茶を賞翫せし始めは桓武天皇の御宇、唐土より到來し植ゑ弘めらる。これより後、建仁寺の榮西禪師にいたり、上品の茶の種を我が朝に傳へ、榮西より栂尾の明惠上人に授けたまふ明惠上人此の風味を賞して、此の種を栂尾に植ゑて愛せらる。是れより宇治に移して普く世上に流布せり、鎌倉北條政務より足利の代々、次第々々に茶を興じ、別して盛んなりしかば、尊氏の孫北山の大相國道義の孫東山殿義政公、様々の風流をことゝし、茶席四疊半敷とさだめ、書畫奇物を飾り給へり、此の道の堪能なりと云ふ。是れ皆祖父北山殿の遺流を守りて、ますます潤色し給へるなり。此の時能阿彌、珠光などいふ此の道の達人出でゝ、世下においても茶湯數寄の道おこなはれて、さまざまむづかしき作法を立て、調度にいたるまで、亭主の作意を沙汰し、器物の善惡を吟味して、稽古も容易からぬ

やうに隱れ出でしより、利休居士にいたりて、猶々此の道異樣になりもて行くほどに、すべて昔のさまからかに清味を減じて、驕奢を養ふとぞいふ。閑人の諷諫はしらざるに似たり。後世に殘れる此の道の末にわたりて、立花の道なども斷えし如し。嘆かはしき事にあらずやと宣へば、皆を心にと思ひわたりぬ。此の時宿中の諷聞しければ、平岡子いふ、いと殊にあらずや、といふ。居士一期に入る迄に、彼の道付たるあらましをきかせなれと、二人相伴うて門を出でけるが、居士は速りて私かに何ぞに宣ひ、此の寿命の盡くるなるべし、二年を過すべからずとなり。久居今更に一盃き由驚くべし、門外まで送りけるに、二人東を指して半町ばかり步み給ふと見えしが、跡かたもなく見えずなりける。其の夜は酒に醉ひて歸り、あすの日起き出づるを聞くし、つくづく昨夜の夢を案ずるに、かの二人は數年先に死去し給ひ、今は此の世に亡き人なり。不思議の參會なりとて、ますます驚きて其に宿に尋ね怪しけれども、私かに近邊の者に告げ知らせて、一旦居宅を換へて、其家を移し給へと云へど、更に信ずる人なし。何條さる事あらん、久安日ごろ異風の人なれば、狐狸の化に誑かされたるならんとて、嘲笑ひける。久安は其所をのがれ出でけるが、いづち行きけんその住所さだかならずと云ふ。案の如く、その年の冬近邊大災ありて、人皆思ひあたりけるとぞ。

増田城に入る

さりながら増田三郎の一族に、長岡紀伊守と云ふ者あり、豐前の城に預けられしが、惡逆[illegible]ありて、主と賴みたるに依つて、許すべしと思はれけるに、又々謀叛を企てけるに因て、遂に殺さんとせられけれ共、城を出つて落行きけり、其子三郎又も叛き、其子の後に討ち死に及び、其身に一命を遁れ、又三郎の遺跡を繼ぎ、増田藏人と云ふ者あり、其の母は長岡紀伊守の情婦なりしが、かの増田丸を以て三郎に嫁せしめたり。此の時三郎は未だ藏人を生みて居られしこなれば、此時増田丸は藏人の母なり、故に藏人の母が長岡に在る事を申すに依りて、今更に詮議の中、來ば其の母を召出されて、長岡の罪科を免るべし、若しさもなくば、我等が汝を誅伐すべしと、ひそかに云ひ送られければ、藏人是非を云ふに及ばずして、即ち御請を申し、是非を申さず御供を遂げんとは申しけれ共、家來の者共これを聞いて、中々叶ふまじ、藏人殿主に向つて云ひけるは、我主人を殺して賴み給ふ事は、所詮、城の内へ入れ奉るべからず、と云ひて、下知して、門に立ちふさがり、主殿を取りかこみし、上意とて増田藏人を殺さんとて來たる、と云へば、門より外へ、藏人殿にてもあれ、入れ申すまじ、と嚴しく申して防ぎけるに、と云へば、藏人殿手を以て云ひけるは、上意を承つて來り、我一人門より内へ入らん

に、入るまじきとは何事ぞ」と互に問答する中に、「增田殿御一人にて在さば入らせ給へ」とて、門を開けば藏人引具したる足輕をば門外に殘し置き、我獨り門より內に入りければ、素より肥後守覺悟したる體なれば、藏人を見るより早く、「御說は定めて上意を聞きて、切腹させん其の爲に來り給ふと覺えたり。極意を聞かれまでもなし、我に於ては働き死なん所存なり」と高聲に呼はれば、藏人聞いて「さればこそ其の事にて候。三齋より御意の次第數箇條あり、先づ〱これを聞き給ひ、其の後は兎も角も心に任せらるべし」と誠しく謂ひければ、肥後守是れを聞いて「さらば〱是れは尤もなり、先づ上意をば承るべし」とて、居たる座上へ請ずれば、藏人上座に直りて、懷中より箇條一卷取り出し、「是れ見給へや、此の箇條の中、一々申しひらき給はば、御赦免有るべきとの旨なれば、何とぞ思案を廻らして、理の品あらば言上あるべし。」と懇に告げければ、肥後守是れを聞いて、御內意は最もなれども、我が身今更人を恨む處なし。此の箇條を見るに、第三番目の箇條に至つては、嚴父の閨に於て、夫婦寢物語の事なれば、世に漏れたるとは思ひもよらざるに、我が身夫婦、人間に盡きたればこそ、三齋の御耳に入りたれ。さあれば殘る箇條は見るまでもなし、はや妻子をも生害したれば、世に思ひ置く事もなし。御說も早く歸りて此の由を申し上げられ候へ」と、事もなげにぞ答へける。藏人聞いて「扨は此の箇條の中、一言の申し開きもなきござるや、口惜しき次第なり。さりながら我も

又吉が言いかで立ち去るべき。某、牢人にて居たりし時、偏に肥後殿の御厚恩を受けしこそ、當家の禄をば離されね、あはれ今度御運を開かれ候へかしと、願ひし事の空しくなりて、忽ち敵に極まりたり。身不肖には候へども、十左は、いかに悔しく、討死の御覚悟に於ては、人をへも御相手になるべしと、一言申して言ひければ、肥後守是れを聞いて、これこそ嘆き申すなれ、誠に御邊は常に長刀の名誉ありしが、われは又昔の家の苦しみをやいひければ、今日の御奉公、願はすべし。藏人殿、尤も宜しかるべしと云ひて、其の時肥後守云ひけるは、最前妻子を殺害したれば、娘の卑陋なを心を悪しければ、其の首を少し隔てて置きつゝ、勝負を決すべし。藏人殿も其の用意有しかるべしとて、軈て云ひ付けて其の膳を出しける間、家色打ちつて、既に尋常の時ならば、藏人殿へ取寄せて、御馳走申すべきものを、と顔色まけに挨拶し、さらば時分よく庭に出でんとて、袷押取って藏人に向ひ、御家も定めし御用意あるべし、取り給へと云ひければ、藏人聞いて、心得たりと云ひて、門脇の床に在る、大刀と持ちながら、と云ひければ、門外の足輕共が手を振り越えて、一頻りに内へ入らんとす。藏人大きに怒って曰く、只今取り合ふ所に於ては、定めて後ろで別人を取り入れんとするならば、用心も宜呼ぶべしと云ひて、下知を加へつゝ、互に庭中に踊り出で、親子念連二人の諸術を盡す。長刀の響、門外に聞えければ、家に藏人が制服を見ては、皆、驚いて伺ひける。勝負果てければ、長刀彼に握り両脇を

打ち倒し、遂に生捕られ、首をのべて待ちにける。肥後此の有様を見て「藏人殿は疲れて休み給ふか、さらば息をつがし緩々と勝負を決せん。」と云へば、藏人聞いて「少しも疲れ侍らず、唯今までは最八の忠勤なり。若し早き返達の御恩を報ずる為なれば、早く首を刎ね給へ」と首をのべて待ちにけり。肥後此の有様を見て、槍を杖につき黙然として立ちたりけり。爰に肥後守が甥に岩助と云うて十四歳になりけるが、一刀を組んで藏人が首の邊に擬へども、藏人流石の勇士なれば、聊か顧みたる気色なし。肥後是を見て岩助に云ふ様は「覚悟は見事なれども、この様になるべき道理なし、されば人たる者、窮まつての因は入らざる事よ」と、常々思ひしに少しも違はず。藏人と交はり浅く侍らば、何ぞ只今助けんや。然るを汝を頼みたるに、我悪心にひかされて主に不忠を為したる其の責、早く来つて武士を害す。誠に其の罪なる我は罪深くべし、自ら企てたる謀は遁るべき所なし。今更忠義の上をもつて宜き事あらば、よしよし切腹致すべしと云ひて、槍をかしこに投げ棄つれば、藏人是れを見て「さては切腹行ふべきや、我が身の本望是れまでなり。有り難き御志、言語に絶えたり」と云へば、肥後守岩助を呼び、「急ぎ藏人殿の介錯を進じ申せ」と云へば、岩助右の言に念を入れ、「心得候」と返し奉らんかと申しけるが、肥後打寄つて「これ聞き給へ藏人殿、岩助が念を入れたりし志の程違はず、あつはれ君の御用にも立つべきものを、今は早我が悪逆に陥つて、共に亡ぶる不便さよ」と、無常の涙に袖

や去らでは、職人も共に滅びんずらん。其の後更に寺僧両人を召寄せて、各々申し入れ、右の趣意を語りつゝ、さるほどにすたる者の霊に云ひ聞かせ、其の霊魂を退くるものぞとて、寺僧其の霊は讀經して後、よつて社は、家の後より火をかけて焼き拂ひたり、後ふたゝび是に近づく、其の間僧しづく、各に向つて饗應し、静かに経を唱へたりける。若者は首を落ち、職人に組みつゝ、我も若者の頭を打ち破りたる、職人の手の甲を咬みつけたりとぞ。

果心居士

近き頃京都に、他宗の祖を行ふ果心居士といふ者ありし、種々の奇特を為して人の耳目を驚かしたりとはいへ、[illegible]

催しけるに、その客の内一人果心居士をよく識りて、かの幻術の奇妙なる事ども語り出でければ、満座耳を傾け怪しみけるが、又一人云ふやう、「あはれその居士此の座へ迎へ、此の人々の中にて何にても幻術をさせて見まほし、さまでの奇特はよもあらじ」など、すこしは疑ひけり。始めの一人云ふ。「思ひ給ふは道理なり、我は此のごろ心易く語らへば、今夜呼びにやりて見せ侍らんか」といふ。人々大きによろこびて、「急ぎ呼び給へ」と云ふほどに、彼の人直によびに出で、しばらくして居士と同道して来れり。一座出でむかへ、「今夜中俄に請待せしところに、早速の来臨忝き由のべたり。居士すこしもところせき気色もなく、静かに座敷になほり、「幸ひ近所に居侍るまゝ来りしなり。何にてものぞみ給へ、慰みにみせ侍らん」と云ふ。かの少し疑ひたる一人出で、「それがし小智偏見にして、終にかかる大変奇特を見ず。あはれ何を先づそれがしが身に就いて、奇特を見せ給へ」と云ふ。居士打ちわらひて、「わが見さする上で他の奇特をうたがひ給ふな」とて、座中の楊枝をとり、かの人の上歯をすらすると左より右へ一遍撫でければ、忽ち上歯残らずぶら〳〵として浮き出で、抜け落ちなんとしける。かの人大きに驚き悲しみ、「あはれ御慈悲に元の如く直してたべ」と、涙をながし望みければ、居士、「よく驚き給ひたりや、是れにこり給へ」とて、また右の楊枝にてこの度は右より左へ一遍なでければ、歯々とかたまりて元のごとくなりける。人々驚き怪しみ、「とてもの事に此の座敷の真中にて、なにぞ

難しく、速かなる幻術を申はゞ見せ給ひかし、我々末代まで千載物語の種となし侍らん、と望みければ、居士、それこそ易き事なれ、とて、何やらん咒文を唱へ、座敷の奥の方を指にて麾きければ、その時、大洪水湧き出づる音こそすれ、これは〳〵と驚く中に、諸財雑具總て座敷に有る程の物、皆な浮び流れ、はや人々の膝を浸すまでに浸り、足の立てども覺えず、途方に暮れ果てたる上に、額を去ること僅かに、前に高く、一面に満ち〳〵、大波頭にうちかゝつて、いつそ遁げんやうもなく、いかに成り行く事やらんと、呆れ惑へる折に、又奥の方より瓢に乗りたる居士、角を摑み目をあきて人々を見つけ、頭を顫立てて出で來る。此の時人々慄へ上りて云はん方なく、且くれ魂消えて、逃ぐるともなく轉ぶともなく、座敷の外へ駈け出でんとしけれども、この洪水に押し流され、皆な水底に打臥し、溺れ死にけると覺えけるが、或る日人に起こされ、座敷を見るに、總て常に變ることなし。かゝる奇異を爲しける故、いづくにても此の沙汰のみ云ひ騒ぎける。

そのころ、山城國の人、多門城に居住しけるが、此の由をきゝ傳へて居士を招き、或る時に語りて言ひける、我、又、居士に向ひ、我一生いくさの道場に臨み、刃を爭ひ、危ふき時にいたりても、終に懼れたる事なし、いでおそろしき事を、汝は、我に幻術を行うて、我を驚かせして見よ、と云ひければ、居士、心得侍る、然らば近習の人々を退け、刀物は小刀一本をも持ち給

はず、燈をも消し給ひつ。など云へば、彈正其の言の如く、人を退け、大小の刀をわたし、暗がりに只一人閑坐して居れり。居士のいと座をたち出で、廣縁を歩み、前栽の方へ行くとぞ見えし、俄に月くらく雨そほ降りて、風さらに蕭々たり。蓬壺の裏にして瀟湘に漂ひ、荻花の下にして潯陽に彷ふらんも、斯くやと思ふばかり。物さびしく味氣なき事いふばかりなし。さしも強力武勇の彈正も氣弱く心細うして聞へ侍らひ、いかにしてかくはなりぬるやらんと、遙かに外を見やりたれば、廣縁に佇む人あり。雲さへ晴れ、誰ならんと見出しぬれば、ほそく痩せたる女の鬢ふり亂し、行き下りたるか、よろよろと歩み寄り、彈正に向ひて坐しけり。何人ぞと問へば、此の女大息つき、嘆しげなる聲して、今宵は遠しく幸しからん、御前にてさへなく言ひしことといふを聞けば、疑ふべくもあらぬ年頃寵愛し、會ふぬ別れをかなしみなる妻なりけり。彈正あまり凄まじく、ただ驚きに、果心居士いかにあるぞや、最早止めよと呼ばはるに、件の女忽ち居士が聲となりて、これに侍るなりといふを見れば居士なりけり。もとより雨も降らず、月もはれ渡りて曇らざりける。いかなる魔法ありてか是れほど人の心を眩すにやと、さばかりの彈正も呆れけるとぞ。

玉帚木 巻之四

[illegible]女[illegible]

[illegible]といふ。[illegible]を持ち[illegible]、名を[illegible]といふ。父母の[illegible]して後からず、[illegible]の内に[illegible]れ、年[illegible]十六になりけり。みめかたち美はしく、[illegible]、やさしき[illegible]は、[illegible]の内に[illegible]深く[illegible]、世の[illegible]、[illegible]を[illegible]、[illegible]和歌を詠じ、やさしき事ども[illegible]、世れを[illegible]、人を頼み[illegible]めを求め、[illegible]、[illegible]たの[illegible]、[illegible]器量すぐれたらん人に娶はすべし、[illegible]、[illegible]心[illegible]、[illegible]、なかだちの人を頼み、かうくと[illegible]、[illegible]ふ所の幸ひなり」とて、一言の

異議に及ばず、娘を送るべし。」と返事しけり。その後日限をさだめ、婚禮の儀式華やかにとり繕ひ、たゝめの輿を入れければ、采女正人知れず喜び、かず〳〵のことぶきに銚子かはらけとり交し、幾千世かけて變らじと、結ぶ契りも甲斐ありて、後にはいと睦まじき中となり、暫時の別れも互に怨むる程になりける。然る所に天正十八年の秋より、太閤秀吉公高麗を攻めんとの催しあり、内々に諸國の大名衆へその旨を觸れ知らし、一兩年の内必ず出陣あるべし、その用意すべし」となり。素より龍造寺方へも案内ありければ、采女正もその期には供すべきに極まりける。菊子此のよし聞いて、かねてわが夫に別れんことを悲しみしが、さるにてもその高麗とやらんは、限りなき海山を隔てて、古より今にいたるまで、人の通ひも稀々なりと聞くなれば、此の度の出陣もいとまことしからずと、女の心のはかなくも、たゞいつとなく月日を送りける。それより二年過ぎて文祿元年三月、果して各出陣事極まり、明日は高麗へ船を出すなりと、いづ方も事々しうのゝしりあへりしかば、菊子は今更のやうに驚き、しばしの別れさへ別れとなればかなしきに、これはまた果てしなき人の國に、然も戰陣に赴き給ふなれば、重ねて相見んことは、片絲の撚る方しらぬわが身のはて、後にとゞまり命ながらふべきとも覺えず。」と、袂にすがり泣きける。采女正も爲ん方なく、大かた夜も半ば近う更けしかば、やう〳〵にすかしこしらへ、行末のことなどかはらじとのみ語らひけるに、はや明方の空になりて、

別れを惜む馬の聲々うちしきりしかば、采女正一首の古歌を詠ず、

身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬかゞみのかげは離れじ

「わが心ばへは此の鏡の如くなり、是れを形見に參らする」と、疊紙に書きつけて渡しければ、妻もしばし涙を押しとゞめ、數遍讀吟して、ふところにかたみに入れて、これも一首の古歌を書いて贈る、その歌に、

かずの上て頼る、これのことをとに下さまほしきは爺なのけり

かくて夜間の駕籠に出ければ、采女正は今はこれまでなりとて、泣く泣く振りきる門出で行けば、菊子は泣き伏し倒れ、押しとゞむ心地もなかりける。かゝる君まつらむ事こよなき嘆き、その別れを悲しみて、身を悶へひけるのこる名残れ、かくてあらんと覚えけり。そのの采女正事もあなく下着し、高麗に在陣しけしが、夫のしたふ名残りの思ひ、忘れがたく思ひければ、夏は蚊遣の煙忘るゝひまなく涙れ、如何にとぞへわかなくにと思はずさうらふに、あはれ心細さや、せめて思ひの程を文に書きやらんとて、たよりの船を待ち、ことづけて送りける。その文に、

たまの緒の船をこそ、一首、たゞるに筆を染め參らせ候、たのみもなく候心細さ思ひ消し候へども、あはれを問ふ人もなければ、閨さびしく誰ひとり寝をのみなく蟲のわれから焦す胸のけぶり、

ほのゝ消えんき涙の雨、いつしか霞の露の身の、消えやらぬ程もなかなかに果敢なくて、その身もはま
しき露か知らず参らせ候。其のほどは公の事しげき紛れ、こゝほどの事はお察し申さず、一筋
に便りつゝ、夏の宵の夢ほどに御心とゞまらぬことゝ、思ひの種胸の中に湛り合へぬる、硯に
向ひとり煩ふ、筆の墨も涙の海とやなる、

浮く文にいと書くまゝも、はかなきは思はぬ人を思ふものかは

と詠みし和歌の古事まで、わが身の上に覚えて、昔の人の心の内推量の少しは慰さめぬ。思へば
思ひはたえ参らせぬ昔も有りつるに、こは何の報いにて斯くはなりしや、あさましき我が心かなと自ら念
ひ返せど、ただいや増しの思ひさても如何にせん、思ひのあまり恥かしながら、自ら詠ぜし歌、首書
きつけ参らせ候、

かくあらむとはかねてより頼みつるわが心を言の葉にかこちたれ、

此の頃は慰しさの積りにや、なほ堪へられぬ心地わづらはしく生ける甲斐なく苦しみ侍れども、いまだ
まみえぬ今一度見もし見えもし、積る事どもはらし参らせたく候ひて、聊つれ仇なる露の玉の緒も、
長かれとのみ祈るばかりにて候。何事も／＼御推量のありて、あはれと思召し出され候はば、か
すかな御情しく思ひ参らせ候。申したき事ども数々／＼ながら筆にせし候へども、あわただしく申出

の急ぎに取り紛れ如何申し候や、見許し候べく候、芽出たくかしく、

五月九日　　　　　　　　　　菊

瀬川うねめ殿

此の頃西海の船路、夥しく難風吹き荒れて、往來の船悉く破損せし事あり、菊子が文ことづてたる船も覆り、その載せたる荷物雜具あなたこなたに漂ひ、博多の浦へ流れ來りけるを、浦邊の漁人その荷物を見付け拾ひ上げけるに、この中に澁染やうの紙にて能く包みたる物あり。ひとへ開き見れば、何やらん篋と思しき物なりしを、又ほときたれば蒔繪などもけだかく、世の常ならぬ文匣なり。漁人驚き、わが如き賤しき者など、みだりに披くべき物にあらずとて、所の奉行へ差し上げぬ。奉行も亦私に披見すべきにあらずとて、尾州名古屋へ持參し、太閤の御近習へ差し上げ、「かうかうの次第なり」と言上しければ、即ち文匣の封をも剪らず、直に太閤へ捧げける。太閤右筆にて侍る山中山城守をして讀ましめ御一覽なさるゝに、女の文にて筆勢云ふばかりなく美しく書きつゞけたり。前後共に御覺ありて、「これは瀬川采女正が妻、夫の別れを悲しみ、僞りならぬ思ひのほどを筆に表はし、私かに便りの船に言傳て送りけるが、その船難風に遭ひ、此の文彼方此方傳はり、今爰に來ると見えたり、これ亦稀有の例ならずや、此の志が嘆く所不便の事なり。」と宣ひ、即ち龍造寺方へ、此の

瀬田采女正を急ぎ故郷へ歸し遣るべしと御内書ありければ、采女正思ひ寄らぬ幸ひにて肥州に歸り、再び菊子に逢ひて「かう／＼の次第にて有り難き御免許を蒙り、俄に歸り來たるなり」とて、喜ぶ事限りなし。菊子も嬉しさの餘り涙を流し、「はかなき筆のすさみ御上覽に入りし事、よに愧かしゝも亦畏れ多き事なれば、いかなる御咎めもあるべきに、今更却りていかなる御計らひ、世に例なき惠みぞや。いさゝか此の忝き御禮を申し上げまく思ふなり。如何あらん」と云ふ。采女正「かくこそ思ひまゐらせたるなれ。我もさることを思ひつれ」と云ふ。菊子「然らば君も一所にいざさせ給へ」と勸め、夫婦同船にて名古屋へ參り、太閤の近習なる尼崎藏主を頼み、その趣を言上す。「此の度菊子わたくしの文に忝くも大君の御上覽に入り、離別の嘆きを思召しやられ給ひ、不思議の御免許を蒙り、再び夫婦相逢ふよろこび、何れの日か忘れ侍らん、眞にありがたき御惠み、かゝる大君をや民の父母と仰ぎ奉るべし、返す／＼有り難く存じ奉る趣、よきに披露なし給へ。また憚り多く侍れども」とて、袖より短冊をとり出し一首の詠歌を奉る。

　　物事のあはれを惠む天つ神の心にかはる君のたふとさ

藏主則ち御前宜しく披露しければ、太閤「神妙なり」とて夫婦共に召し出し對面し給ひ、かずの引出物を遣はされ、御暇たびけり。時の人此の事を聞きつたへ、皆太閤の慈愛の程を感じあへり。

入定奇瑞

鶴岡岡山の風俗、女子婦人迄の外花奢風流を好み、容色の美しきを賞す。貴人高家まで、色を賞れもて好み流れ、一度美色を得ん時は、必ず人に誇り寄せて自慢し、貧しき者見えたは夜中座敷に覧け出し、この具かすててる細論を見物の隙をせには、富家の妻を娘をせ、難題にあたりつくれして、そいの家中の事をはする気色もなくなふめき歩く様に、皆き男子共は目もあやに籠めやり、あるいは手をとり袖をひきて、使者がはしき事ともありけるかりなる者にしこて、離縁したる者もなかりける。男子どもあまりに実に眩り、おのがぞし打たふるでは、他の事をせずして、たゞ女の噂見あぐたる妻好の美悪を論じ、或は、その衣服に着すかするけはひあかしは何時の何某が変たり、今日の美女の隣一なりと、一物色し小袖着たるは誰がしの娘第一なりこと噂高に語りあひつゝ、互に羨みを競ひあふ。この頃の人に中肉も有ける上て、身上高諸なる者あり、近頃都より妻を迎へたり、きけば一筋に美しく、顔色麗佳、此土高國に雙ぶ者なし、この妻出てゆく時に人皆目を驚かして、心ならたずふけてといふ詮なせ、或は君なる好みの妻に、いでや衆ひさえんたなを企みけるが、此もこれ大有御前と来武家の二男にて、如何ならたけり、特に、理なさの心根、面に顕はれたる者なれば、此の妻に近き辺の人も近づ

ら踏ませけり。九右衛門が家に、竹内権平といふ者ありて、才智諸芸人に勝れ、人皆よく之を賞したり。然れども、行跡放埓にして正しからず、博奕を好み、常に遊女遊冶の席に夜日を明し、すべて渡世家業を怖とせず。この者また定廻にて、九右衛門が家にしば〳〵寄らず、九右衛門留守なれば、常に権平と意に交はりをなして、たゞひとへに心を寄せて、奥の閨房の中までも行き通ひける。九右衛門いつしか権平が悪事を見とめて、久しくせず心を痛めけるが、ある時わが妻に向ひていひけるやう、一世の人皆諸国中第一の美人なりといふ、然れども都家権平も悪しき世にたぐひなき美女なり。いかにもして添ひ、かくの思ひをかはしまつり、露の情もあらばや、死すとも恨みあらじものをと云ひけり。是れより貝権平がかりに行き通ひて、ひそかに思ひを遂げける。権平も日を過しければ、その間の覚え、昔九右衛門が方より、密かに猶に触れ事にまかせて、金銀をもつて賄ひけり。権平もまた九右衛門家に参り、昔日よりすから遊芸を十分に、金銀を以てよるよる皆にや、近頃遊芸好きの若者らをさそうてつるべ時り、まで〳〵廓人に遊興しまし、ある、都より白拍子の類を呼びくだし、酒宴の友とし、または其三味線常世殿などに具したる芸者をあつめ、色々のたのしみを盡しけるが、遂には廓人の妻も此の遊興の席に列なり、ともに酒を飲みまじはり遊れける。九右衛門かれて権平が妻に寵愛しければ、猶有ける上に、かくとも云ひ出しがたく、とかく心を痛めるに、権平がきたつて早いかに思ふのみぞ

犯すことを知らず、[illegible]九右衛門が[illegible]なる性に、[illegible]にてよろ[illegible]風流なるに心奪れ、私かに心を通はせ、[illegible]に[illegible]のうるはしく、しかも偽りならぬ色に[illegible]、[illegible]九右衛門[illegible]とは露知らず、[illegible]座敷のしつらひ等いとまめやかに調へ、[illegible]心を賢女[illegible]よろこびける。

九右衛門は富裕なる者なりしが、かやうにかず[illegible]かつ[illegible]、妻ひそかにその金銀[illegible]拍子をもとめ[illegible]ば[illegible]ひけるほど[illegible]、九右衛門[illegible]白拍子に[illegible]門帰れば、妻、召使の女と心を合はせ、[illegible]体にもてなし、[illegible]常に酒を強ひ給へるを[illegible]り給へると聞くと等しく[illegible]げ帰られし。」と、げに[illegible]

まじく酒宴などする事あれば、わづか三杯にも過ぎざるに、甚だ酔ひ臥れて打ちたふれ、前後もしら
ず寐入りける。そのひまに権平ひそかに忍び出で、九右衛門が衣服を着し、心のまゝに妻とあそびた
はぶれ、夜を明し歸れども、九右衛門さらに覺えず。是れは妻かねて悪酒をこしらへ置き、ひそかに
九右衛門に飲ましめて、性念をみだしける。その謀は皆権平が教へいたさせける。毎々かかる相図
にて、容易く忍び通ひしける。傍より此の體を見て笑止がり告げしらせけれども、九右衛門右の
謀に迷はされ、曾て咎めず。かくて一月ばかり過ぎて、ある夜こゝち煩はしく、寝間に臥し居ける
に、権平其のあたり出入しける。九右衛門早くも見咎めければ、妻わざと知らざる體にもてなし、権
平此のほどは来り給はず」と云ふ。九右衛門目を醒め、「先に見えしはよくも権平に似たる者かな。こ
れわが夢中に眼くらみ、あらぬ妖怪を見たるにや」と云ひければ、妻げにげにしく云ふやう、「日
頃権平が事に心をかけ、その戀かなはざる故、忘れもやらず思ひくらし給ふほどに、狐狸の類その性
念のみだれたるを窺ひ、かく権平に化けて見え現はれたるなるべし。よくよく慎み給へ」と云ふ。その
次の日権平九右衛門を誑さんとて、面に緑青をぬり、髪を朱に染めふりみだし、異形の姿をつ
くり、妻と九右衛門が見る前を、物も云はずあらはれ出でたり。九右衛門見ると齊しく、わつと叫び
肝をわなゝき、氣をうしなひて臥し倒れしが、これより悪寒發熱がはるがはる起りて、昼夜悩みける。

賊共よりあつまり、これ皆妖邪の爲すわざなり。」とて、藥治祈禱かず／＼盡しけれども、いさゝか驗なし。こゝに城下を去つて十八里奥の山中に、了脚上人とて眞言密宗の高僧おはしますが、德高く行ひすまして、しば／＼靈驗を現はし、萬人の渇仰なゝめならず。九右衛門一族おの／＼山中に立ち越え、上人の前に跪き、九右衛門が病狀を述べて、「哀れ慈悲を垂れ、此の妖邪を退け一命を救ひ給へ」と願ひければ、上人また辭退し給ひ、「われ此の深山にかくれてより、高家貴人の召しにも應ぜず、すべて人間世の事にあづからず、堅く辭すべし。」と宣ふ。一族皆々心をあはせ、「上人より外にまた頼むべき人なし。」とて强ひて庵室を出でさせければ、上人も今は詮方なく、「然らば。」とて護摩の壇を飾り、燈明を挑げ一心に祈念し、稍ありて九右衛門が過去未來の因緣を觀られしとて、その後身を潔め入定し給ふ。さて體死人の如く息絶えて打臥し、あくる曉がた甦り、ためいきつきて宣ふやう、「さても昨夜入定の中に高野の奥にもあらず、幽冥不測の境人間世より遙かなり。われ終に聞かざる不思議を聞きたれ。」と、おの／＼感嘆して皆々禮拜し、「そのありし次第を聞かしめ給へ」と乞ふ。上人宣ふ、「我入定の中に、伸しすゝむ道をあゆむ間に、俄に小さき堂宇あり、その中に冥府地神おはします、その前に今の九右衛門が祖父孫大夫、ひざまづき訴訟して言ふやう、「それがし孫九右衛門、鄰家權平げとの妻を奪はれ、剰へ惡名を蒙り、又は妖邪に託して、僞し、その命を奪はんとす。いそぎ神力

以て献幣を發し給はるべく候と云ふ。地神宣ふ、いづれも神位卑賤にして、人間の賞罰心に任せず、急ぎ出雲の大社に參り訴へよ。幸ひ今日、八幡大神、春日明神大社に會合し給ふ。ひたすら歎き申さばよきに計らひ給ひなんと教へ給ふ。大夫たゞ、いぶかしとて前へ進出して我に向ひ、貴僧は九右衛門が一族に頼まれ、病苦本復の祈念し給ふこと有の儘に、いざとて給へ、共に出雲へ參り兩神に頼み奉るべしとて、西の方に歩みを思へば、其の中、大社の拝殿に到りぬ。案の如く八幡、春日の兩神と覺しくて、拝殿に衣冠正しき老翁二人ましおはす。一人は赤き裝束、また一人は白き裝束に十徳を着し、頭に烏帽子を戴き給ひ、地神先づ一人前に進み出て拝伏して、九右衛門が病状、平生の念を述べ、願ひけり。然れども、八幡、春日の兩神は返答もし給はず。我等二人まさしく畏れ入りて歎き申しければ、其のうちに弓射の給ひ、赤き裝束の老翁默然として宣ふやう、いと悲しいかな人間愚惑の甚しき事や。それ神明とは他にあらず、一理を云ふのみ。易に所謂積善の家には余慶あり、積不善の家には余殃ありと、理の必然にして信ずべきものにあらずや。然れば清浄正直なれば家栄へ、邪僻淫乱なれば身を喪ふ、自ら招く所にして、他の神明の加損する所にあらず。かの世の貧窮の輩、思へらく、神佛まで人間の業を轉じて災となし、禍をさけて利を得しめ、病を癒し寿を延べ給へりと。是に於て専ら神佛に心力を用ゐ、利益を幽冥の間に求む。然れども、平生に其の心正しからず、其の身修まらざれば、

[illegible]せん一世を欺[illegible]紅毛人下賤の輩や、平生作業を[illegible]て事とする[illegible]、兵器に至り
た[illegible]、[illegible]、[illegible]に[illegible]、[illegible]
を[illegible]して[illegible]を[illegible]し、[illegible]の[illegible]を[illegible]めて[illegible]、[illegible]の[illegible]に[illegible]へ、文と
す。[illegible]しかしながら[illegible]を[illegible]すると云ふ[illegible]、[illegible]人間の中にて、[illegible]
者の[illegible]を[illegible]、一旦[illegible]の[illegible]を受けず、[illegible]
を[illegible]、[illegible]
[illegible]すと云ふ、[illegible]、[illegible]
に[illegible]、[illegible]
れに、[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中に妙なる音樂の聲幽に聞えしかば、白き裝束の老翁つい起つて、「遲なはりぬ、いざさせ給へ」とて簾中へ入り給へば、始めの老翁も續いて入り給ふと見て、夢のさめたる如く覺りたり。有り難き奇瑞にあらずや。かくの如くなれば九右衛門は、祖父の餘蔭にてこの度は本復すべし。權平はこなたより責めずとも、頓て亡びなん」と宣ふ。一族皆々感涙袂をうるほし、上人を禮拜して歸りける。果して神明の告げにたがはず、いまだ一年も過ぎざるに、權平腰骨殊の外にうづき痛み、十日ばかりの後癰疽大いに發して、苦痛惱亂いふばかりなし。當時の名醫どもに見せけれども、「是も色慾過度の故に腎虚し、精竭きて藥方灸治も及ばず」とて、敢て療さんといふ者なし。かくて半月ばかり、あら苦しや悲しやつらしやとよばひ叫び、狂死に息絶えけり。死後にその妻その娘皆心貞固ならず、怪しの下臈の爲に身を任せ、淺ましき恥を晒しける。九右衛門は病氣本復して、行末事故なかりけるとぞ。

玉箒木巻之四　終

玉帚木 卷之五

[illegible]

に、直垂の袖のいしやうをぬぎすて、如何にも輕く括袴を着し、雲霧[illegible]大勢に大刀[illegible]に斬入の有様、面骨たくましう、眼ざしつらだましひ、人に[illegible]て[illegible]。大庭に[illegible]取つて立ちたる體勢、[illegible]の敵に出合ひ勝負を決する[illegible]、[illegible]太刀を自由にふつて、[illegible]弓手妻手へ一間二間飛び、廣庭に[illegible]、八方[illegible]、大勢の[illegible]一方の隅へ追ひ入れ、[illegible]太刀を[illegible]樊噲が怒りもかくやらんと、諸侍[illegible]め目を驚かし見物せり。[illegible]今の振舞、かたき二百も三百も有る中へ一人切つて入り、[illegible]にし、[illegible]文字、[illegible]二[illegible]たる[illegible]、[illegible]太刀を自由自在にふりけるに、木刀よりもかろうし、兵法の位一刀齋にも劣るまじ。此の卜官と日本人、[illegible]ひあへり。一刀齋是れを見、此の[illegible]を聞き、卜官に白刃の長刀を持たせ、われ扇にて[illegible]、[illegible]いて[illegible]、卜官を[illegible]めて木[illegible]刀を持たせ、一刀齋は扇を持つて[illegible]に、卜官[illegible]、[illegible]たる[illegible]、[illegible]上の[illegible]とし、[illegible]を[illegible]、[illegible]、一刀齋[illegible]とは[illegible]、一刀齋[illegible]、[illegible]てかゝる。卜官いよいよ[illegible]、大[illegible]に取つて長刀を大[illegible]に[illegible]、切先を[illegible]にあてて[illegible]しかし、急に[illegible]、

る時は、一刀跡へしさり、一刀手をひろげてすゝめば十官退き、廣庭にし追つつまくつゝ、かけつかへしつ、面白き春の園生に蝶鳥の、散りかふ花に立ちうかれ、入り亂れしあそぶが如し。然るに一刀齋飛びかつて、長刀をふみ落しければ、十官も見物衆も興をさましたり。「弱よく強を制し、柔よく剛を制すとや、一刀齋が術はかり難し」と云へり。

酒家滅亡

上京安居院貧しき酒家に與右衛門と云ふ者あり。生得心正直にして家業に精を盡し、家來も持たざれば、手づから萬の器に念を入れ、汚れを去り新しく淨めければ、酒の風味他家よりは勝れてよろしかりけり。此の故に遠近聞き傳へて、たゞ此の家の酒を需めはやらしければ身上も賑ひけり。男子一人女子二人持ちけり。嫡子二十餘りになりければ、父與右衛門いづれ然るべき富貴人の家より、娘をむかへて新婦とし、家督を讓り、妹娘の十三四なるは縁にまかせ、連々に婚姻させ、わが身はやがて隱居し、家業の世話をたすかり、せめて老後のたのしみに、安閑に月日を送らばやと思ふ所に、嫡子由兵衛いつしか後世を願ひいだし、或淨土宗の長老の說法を聞き入り、家を忍び出でて出家になりけり。父母いと本意なき事に思ひ、怒り腹だち、「幼少よりあさからぬ慈愛に養育し、かく成

人として好み聞こしも嬉しく、老後の杖とも頼みつるに、親の行ひを厭ひての不孝さよ、親子の好みを是わきまへなく、剛情せんとも守りまゐらす、日頃家に出入の比丘法師とも、折目をこらへめでこの世ただで賢の語らひ事にことよ、出家剃髪は、目出度善根功徳なれば、親の恩はとてもかくても出びまく、五蘊の[illegible]、求め来世ぞ大事なる。其の身は家に住し給はず、或は[illegible]、或は[illegible]わが若[illegible]にまかせて、来世に地獄へ堕ちる結びなん、みな怖れしかるべき、さりながら蓮府に不便のさらば、然ば在家の[illegible]とみしるに、いとまなき渡世身に勤め、辛勤苦労して儲け置ける金銀をおくれ、かの出家を亡破ける。坊主の[illegible]不便がりて、時々の財物を納むれば施かの出家は天性遊惰にて、何の所見もなく、ただ六時中尊名の文字と大事と念じけるが、非の時は施し得るものこそ、これこそ真の根[illegible]なれ、梵網経には布施の功徳広大なることと説かれ、而時間には無性の利[illegible]深[illegible]にある義と説[illegible]なし、きたる[illegible]につる間に、財[illegible]貪著心ある[illegible]、早は[illegible]いと安く財[illegible]して、女をこしらへ一夜の[illegible]と、[illegible]れ[illegible]と世に[illegible]遣[illegible]けり、かくて、就は[illegible]気少し[illegible]徳がたき、この家業の助けともならず、ちよいちよい遊びくらすしが、いつの間にかお話、勝なるまゝにして、是れに[illegible]在所にす、あて、[illegible]

[illegible]
心なくだき操ぎけれども、[illegible]
[illegible]浪しけるが、年月の苦労にや、父母ともに[illegible]
[illegible]
しける、[illegible]因縁[illegible]
[illegible]
[illegible]人も[illegible]
[illegible]
[illegible]音聞えけり。不思議なりと障子を開き見給へば、向[illegible]

たるに、諸手足を鐵索にて縛られ、頭の程には鐵の籠を冠られたり。此の籠火炎になりて、消えてはまた燃えあがり息斷やむ時なし。寺の靈場地の柱に繫りければ、柱燃て燒け上りけり。瑞應すさまじくおぼえて、いかに御身なれば、かかる怖ろしき苦患を受くるぞやと尋ねければ、かの罪人苦しき息の下より、我は此の院の前住永忍上人なり、世に有るとき親に不孝にして、常でその厚恩を報ぜず、剩へ父母の育を離き、血を絞りて儲け蓄へたる財物を貪りとりて、わが身の榮耀とせり。此の罪によりて斯かる報いを得たりといふ。瑞應重ねて、然らばいかなる方便佛事をなしてか、此の苦患を救ひ得らるべきと問ふに、永忍答へて、更に他の佛事供養を願はず、わが弟及び妹の二人、皆な在俗の貧に窮して今某所に居侍る。わが在生の時身に付けたる程の財物、悉く賣代なし、皆貧窮へ施し給はば、せめてもわが罪科輕んじて、此の苦をのがれんといひ終りて、行方なく消え失せける。瑞應いそぎその財物を賣代なし、かの兄弟を訪ねて分ちあたへ、忌日には懇に佛事を修し弔ひければ、そののち永忍幽靈も見え來らず、ただちに成佛得脱しつらんと、人みなたつとみあへり。かの鐵の籠のつきたる築地の柱は、猶今も燒け焦げ殘りて、これより代々住持誠戒のためなりとて更に作り改めず、諸人に見せしむといふ。

遠碧軒記

[illegible]の[illegible]は、[illegible]の[illegible]にて[illegible]の聞えあり、[illegible]の僧、あるときに[illegible]
[illegible]けるに、[illegible]の[illegible]の道場を[illegible]には、[illegible]僧あり
ければ訪ね入り、その夜一宿し給ひけり。夜半ばかりに俄に行き、何心なく歸り給ふ所に、俄に[illegible]
[illegible]より[illegible]時に寺[illegible]の[illegible]より、[illegible]なる[illegible]色[illegible]して[illegible]たるに、[illegible]
より下は皆血に染り、物[illegible]しき[illegible]にて出でぬ。[illegible]物は[illegible]して、空中に文字を書き[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]と[illegible]、[illegible]
[illegible]は、[illegible]中に書にて[illegible]、[illegible]、其を[illegible]、其の[illegible]と
宣へば、幽霊悉く[illegible]つし消え失せけり。長老奇異の思ひをなし、夜明けてかの[illegible]に、昨夜の
[illegible]、[illegible]と[illegible]、[illegible]をひとつかへその
[illegible]、[illegible]、[illegible]
拷問せられ、死して後七日寺に來り、かかる奇怪の事をなし侍り。されば誰にも[illegible]出來たる人、[illegible]
[illegible]は、[illegible]、[illegible]中に書き[illegible]けたり

ましければ見る人もなく、おびえ倒れて絶入し、一人も問答せし僧なかりしに、長老昨夜の答話ことごと有の事申されしかば、長老聞きたまひ、是れは稀なる物語、その行跡を委しく語り給へと宣へば、かの僧、始終なからんとしき事なれども、あらまし語り申さん。そのかみ高氏将軍より三代、左兵衛督義詮公鎌倉に坐し、御政道めでたく諸国永久に治まりしところに、官領上杉安房守憲顕が言葉によつて、京の公方義教公の下知として、関西の軍兵を催し下り、鎌倉の御所持氏公討ち負けさせ給ひ、永享十一年己未二月十日、鎌倉に於て長男義久公並に滅亡したまひぬ。次男春王殿三男安王殿御兄弟は、鎌倉を忍び出で日光山に入り、衆徒をたのみ隠れましましけるに、結城七郎氏朝此の由を聞き、累代の主君にておはしませば御迎へに参り、結城の館に入れ申し、いつき傅き奉る。安房守憲實鎌倉山の内にありて此の由を聞き、結城は二重なれども四十里の隔りあり、火は小さきよりなるより一切の物を焼き亡ぼし、毒の虫なれば頭を拉ぎて鏖をとり、敵の末まで胸を刳きて肝をとるとかや、両君を生かし置いてはいかで大敵なるべしと急ぎ京都へ此の由注進に申す。両若君を討ち申せとの綸旨を下し給ふ。安房守此の御綸旨を諸国へ遣らし、関八州は申すに及ばず、北国出羽奥州の軍兵、我も我もと下野国へ馳せ来たり、其の勢十萬餘騎、結城の城を二重三重に取り囲み、軍兵充満する事雲霞の如し、鐘攻め鯨波をあげて囲ふといふとも、此の城には叶ひ難し。然れども此の

城は前に大河流れ、後に大山にはし峰を隔へ、且たやすくは通ひ難し。城にたて籠る人々、結城七郎光久、舎弟八郎光義、早川弾正忠家、千葉備後守成吉、長井齋藤兵衛尉、高尾権太夫、松井筑前守、藤岡信乃守親、今川修理亮、小山孫七郎、高橋四郎左衛門尉、大和田備中守、石橋太郎兵衛尉、久下但馬守、宮古右近大夫、曽禰兵衛尉を始め、宗徒の侍五百余騎籠る。敵は大軍と申せ、各城にありて攻めよせけるに軽からぬ。大将はけるは、此の城に籠る者共、志を一同し、命を主君にまゐらせて討死せんと存ずる上に、天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずとあれば、地と云ひ人和といひ、此攻めには攻め難しと、攻めあぐんで見えにけり。大手に向つて矢軍ばかりにて、数日を空しく送る。七郎申しけるは、前将軍に未だ合戦を見たまはず、いざや敵に押目にかけんとて、南岳を高矢倉にのぼせ申し、大手の高櫓頭にあらねば、二百余騎を引き具し、家々の紋旗ささせ、大将軍には七郎光久、鶴月毛の八寸あまりの馬に、燃地に金ぞうたる白鞍置いて、白練の陣羽織かけ、小櫻縅の鎧着、牛月の兜猪首に着し打乗つて、大手の門を押開き、閧を作りあげて家を明け、真先かけて切つて出づる。まつつきくつて駆せちがひしける風情、梅の蕊の風にふかれて散るをたとへ見れ、花を散らしてぞ面白さに、敵も味方も目を驚かす。左右に馬を寄せて、互に畑を叫ばすしつ、一時ばかりの戦ひに、首を取らるもとりられつ、討し返して死する者もあり。七郎光久は敵と馬上にて組んで落ち、押へて首をとり、太刀の先

にて、自害せんとせし時、軍中にて兩若君の御目にかゝる。兩若君見知れし御事有りて、□光をぞ□場の振舞由なし。』と宣へば、味方も敵も皆盾を敲いて、『猛大將此勇有るべかりき。』と褒めたりけり。しばしがほどの戰ひに、矢きはまり筋力もつき、息もつぎ敢へねば、互に疲れのあまりにや、相引して退きにけり。兩若君御前に召され、『今日の働き忠功淺からず。』と御感有りて、七郎を賞る□に、『□□、□□に□□の者なれば、各々源を汲む、其の流れを□□し、武士の家に生まれ、君の御恩に命を捨つるは人の常の□、□□□□□なるべし。』と、家□□同じて申しければ、其の時七郎が兵の□にあれば、大音上げて申しけるは、『兩若君御運に討死せんは、家の面目一門の名譽なり、ゆうしたければこの地に骨を埋むとも、名は雲居にあげんとおもへば、命に於て塵埃ほども惜しからじ。されども、七郎が始め一門が其の中に、老いたる母と幼き娘數多持ちたり、彼等が死なんことこそ不便なれ。纔か二十人の内外なり、助けたまふべきならば、城内へ出さん。』と呼ばはる。安房守此の由を聞き、女の儀ならば何人も出し候へ、命をたすくべき、と云ふ。七郎聞いて、あら嬉しやと□出されけるんとて、□□□□の數につくり、女房二十人の内八人ばかりやうなる娘を車に乘せ、城中を出す。安房守是れを見て此の内に若し兩若君やおはしますと、よきに探せよと下知すれば、雜兵の武士輿の戸を開き見るに、常に鎌倉にて見なれ申せし事なれば、いかでか見損ずべき。兩若君是れに在す。』と云ひけ

れば、一度にどつと鬨を作る。七郎是れを聞き、扨は露はれ給ふかや、御運の末の悲しさよ、痛はしさよと涙を流し、いざさらば人々討死せん。縱ひ此の世に生き殘りてあればとて、千年を送り萬年の齡を持つべきや。兩君の御爲に討死し、名を後代に殘さんと門を開き、五百餘騎を喚き叫んで切つて出る。頃は嘉吉元年辛酉六月二十四日申の刻、大軍備ふる其の中へ驀地に破つて入る。今日を最後の合戰なれば、父討たるれども子援けず、陣を割り鎬を削り、前へ進む者はあれども、命を惜しみ一足も退く者はなし。刀の鐔の碎くるを限り、光を限りに戰ひ、半時が其の内に、五百餘騎枕を竝べ討死す。昔漢の田横が、高祖の召しに從はず、義を重んじて自害せし時、あとに殘りし家中五百人の士卒、是れを聞くと齊しく皆自殺して、主從名を萬代に遺せしに異ならず。今此の世に越えたる忠臣なれば、いさゝや此の七郎光久を、關東の軍神に崇めらん。とぞ云ひあへり。合戰果てぬれば、安房守思ひの儘に兩君を生捕り奉り、急ぎ京都へ此の由申す所に、兩君を京都へ上せまゐらせよとの御旨なりければ、兩君を輿に乘せ申し、毛利文右衞門、漆桶三四郎、兩人の乳母御供す。其の外武士數百騎前後を圍み、鎌倉へ立ち寄らせ給ふ。父持氏公御自害在す永安寺を、御輿の内より見給ひ、御手を合はせて廻向し給ふ、御心の内こそ哀れなれ。老若男女貴賤上下皆涙を流しけるとぞ。是れより急ぎ行けば、さても鎌倉中名殘惜しく[illegible]、[illegible]片瀨腰越相模河、[illegible]鞠子川、波立ちあぐる浦傳ひ、小

小田原に著き給ふ。それより箱根山、爰は持氏公御合戰場の由聞召し、御涙を流させ給へば、見る人皆袖をぬらしけり。諸行無常の鐘の聲、響く嵐はうつの山、現の夢を都路の、便りを今ぞ菊川や、青野が原にかゝらせ給ふ所に、京よりの飛脚警護の武士に行き向ひ、「兩若君の御事は、首にて京著あるべし」との宣旨の由を申す。御兄弟は聞召し、「何事ぞや」と問ひ給ふ。二人の乳母、「是れは只御喜びの御使」とぞ答へける。春王殿、

よろこびの世にあふみとはなりもせで青野が原の露と消えまし

と詠じ給へば、安王殿、

あひ川や裾をひたして行く袖にたる井の露と消えやはてなむ

と詠じ給ふぞ勞しさよ　御輿を此の垂井金蓮寺の道場へ入れ奉る。上人對面あつて、『われ素藤澤に候ひし時、故鎌倉殿御芳志を蒙りたり。每日佛前にて廻向仕る。其の故にや兩君の御入寺、本望かな。』と杯を出し、上人拵へ給へば春王殿扇を取つて、『いざや舞はん、安王も連舞せよ。』と有りしかば、安王殿も同じく立ちてぞ舞ひたまふ。

古郷は、跡に鳴海の恨めしや、袖行く水の哀れをば、誰弔はん、後の世をたすけ給へや上人

と舞ひ納め給へば、上人は墨染の衣をぬらし給ひけり。一人の乳母、『この中路次の御疲れ、御寢なら

せ給へ」と申しければ、暫し御猶予有りけるを、御傍へ立ち寄り三刀ざし、補し奉る。春王殿十三歳、安王殿十一歳、同じう嵐の秋の末に、同じ時の露と消えさせ給ふ。御最後の御有様語るに言も無かりし。かの乳母の女房は、始終傍に付き添ひて仕へけるが、御最後の折節は、警固の武士ども遠く囲み隠しければ夢にも知らず、あくる日御首は桶二つに入れたるを見て、呆れて消えいり、暫しは稍あつて息をつぎ、「御最後と識るならば、われ諸共に参りつゝ、ともに介錯仕り、いまはの際の御有様をも見奉らば、斯程に物は思ふまじ。情なの次第」とて、流涕焦れ悲しめば、武士共も共に、道理なりとて、共に涙を流しける。かくて御首は京都に差上しかば、義教公御實檢あつて後、御遺骸とし、また垂井の宿へ返し、此の金蓮寺にて御首も骸も一緒に葬し、一つの塚の主と為し奉りける。乳母の女房は、奉行職うけ取り、つくづくからめて、「今度の御謀叛に與する人數は誰々ぞ、ありのまゝに申すべし。少しも包隠せず、いさぎよく」と問ひ給ふに、乳母聞いて、「女の身にて候へば、何事も更に知らず。又若君とは只二人在せしを、斯様に爲させ給ふ上は、何の御不足ましまさん」と、只さめざめと泣けるなり。奉行共、「さらば痛めて問ふべし」とて、錐にて膝を揉みければ、忽ち血煙立ち、聞くも中々哀れにぞ覺えける。その外七十餘度の拷問は、目もあてられぬ次第なり。漸くありて乳母「物申さん」といふ。暫く、拷問を留めければ、無慙や乳母、高聲に念佛十遍ばかり唱へて、

白く苔蒸ひけるを、むしろへこそは捨てにけれ。侍者共これを見て、古へありてこそ謝をかへけれ、今は是れまでなり、とて皆はなちやりけり。然れども五體もつゞかず紅になりて、命生くべきやうもなし。さうなくて東山の庵室に入り、僧を頼み髪を剃り、六字の名號百遍ばかり書き写し、更に一首の辞世を書きたり。

消えはつる露の命の終りには法の身となりにけるかな

とかやうに書きとめ、つひに空しくなりにける。その亡魂も闇路を迷ひ、此の世に来り、死後までも猶侍しく人に見えたり。然れども今は長老の有り難き法則に頼り、忽ち本来空の道理を開悟せり、と見舞ひ、殊に東世帰有の古跡議からこと、感涙を流しける。長老つきても哀れなる物語を聞きつる御方なとて、まづ隔晝見慣共に、出離生死無明菩提の發向いと哀れに寫し結び、かの信に暇を乞して、寺を出で其の給ひける。その後その終る所をしらず。

玉帚木巻之五　終

玉帚木　卷之六

大佛建立

山城國二本幡の里に又次郎と云ふ百姓ありけり、壽命芽出たき者にて百二十歳に及び、近き世までながらへけり。聊か老衰の氣色もなく、目も明らかに足健かなりける。生得心正直にして慾少なく、只管後世を願ひて、日毎に東山知恩院へ參詣しけり。時の和尚この由を聞き給ひ、ある夜又次郎を密かに方丈へ召し寄せ、酒など與へ、よろづ昔のこと尋ね給ふに、性念正しく物覺えも確かながら、流石下臈なれば、高家貴族の事跡は聞傳へたる許りにて定かには知らず。只壯年の昔、太閤秀吉公東山大佛殿建立し給ふ時、人夫に傭はれ働きければ、その間の普請作事等悉く今見る樣に覺えける。和尚い、興ある事に思召し、委細に尋ね給ふ。又次郎答へて申しやう、「その頃は太閤聚樂の城に居住し給ひ、京中の繁昌ならん事を願ひ、大佛殿を草創せんと思召し立ち給ふ。その旨前田徳善院玄以、淺野彈正少弼、增田右衞門尉、石田治部少輔、長束大藏大輔、この五奉行の衆へ仰せ付けられ、その[illegible]の、ころは、東山佛光寺の地と定めらる。往古よりの舊跡なればとて、堂の高さ二十丈、佛像

の南京とも、今更持講無しとぞ。この像即ち華厳説法方廣佛の像相なり。この故に寺號を方廣寺といふ。始め大德寺古溪和尚を住持とせんとす。然れども建立成就せざる先に遷化し給ふ。是れによりて後に照高院道澄をして別當職と為したまふ。佛像は昔のごとく唐金にて鑄立てんとせば、長遠にて期限に及ばざらん。いかゞはせんと太閤も思慮まちまちなる折から、豊後國に震旦の佛工ありける由聞き及び、急ぎ召し上せ聞え給ふに、鄭重に大像のことには、木像にして其の外を漆喰にて塗りたてなれば、百年は保ち侍る由を申しければ、その儀に從ひ、佛師宗貞兄弟に仰せ付けられ、木像に造り下地を漆喰にて塗り、その上を彩色施すべきに極まりける。手傳人として寺西筑後守、早川主馬頭、片桐東市正、古田兵部少輔、糟屋内膳正、間島彦太郎を付け置かる。震旦の佛工指圖として、當像出來たる已前に、漆喰の用意に、鷄卵一萬個取り寄すべしとなり。此の手傳人池田備中守、滝見肥前守、上田主水正、奉行堺の今井宗久、是等の人々右の指圖に應じて、伊勢を限り諸國へ取りに下しけり。されども漸く取り集る量かざれば、纔にぞ來るなり。兎角して當像大佛出で來しかば、漆喰を塗りはじめぬ。そのころ近江國守山の邊に遁世の沙門あり、常州岱海の功徳聞えたることを信じ、高野山に入つて大佛造營を勸め進むし、極めて普請の道に緩急せる聞えあり。太閤尋ね需めて、後にはこれをば大佛造立の願主とし給ふ。此の沙門、かねてこれを願ふ所なれば大いによろこび、

即ち大[illegible]門にかまへ給ひ、[illegible]・[illegible]と定め、[illegible]しまゐらせて下知と仰せければ、[illegible]速成の功加はりぬ。殊に高野の下法師どもは、日頃にかやうの大伽藍の造作に馴れて、手業の健かなりしかば、殊に[illegible]も多かりけり。[illegible]の[illegible]に[illegible]ける[illegible]を[illegible]せて、[illegible]、[illegible]と[illegible]、[illegible]を[illegible]に[illegible]造作たやすく引きうけ、十人寄りし[illegible]、[illegible]の百人寄りに[illegible]引きあけ、[illegible]に自由を得しか。されば[illegible]も[illegible]に[illegible]たる時、在[illegible]の衆へ仰せ[illegible]には[illegible]にて、二十年に成就しける上面を備ふ。其の後は工夫を[illegible]、[illegible]年にて其の功果の[illegible]と[illegible]を[illegible]、一を[illegible]ることなく、あらはしてまはりまじ、[illegible]に[illegible]一人として[illegible]なくしょうこの、[illegible]院[illegible]に打寄りて[illegible]し、[illegible]の[illegible]、[illegible]外[illegible]を[illegible]せ、[illegible]に[illegible]、[illegible]の[illegible]に、非上[illegible]五[illegible]へ[illegible]堺三へ呼び[illegible]しける。即ち諸職人ども皆良き[illegible]、悉く上京し、[illegible]にいたりしかば、各[illegible]下手職人の[illegible]しを[illegible]に[illegible]を[illegible]し、[illegible]に[illegible]しけりつゝ、在[illegible]と[illegible]の[illegible]にでし疲労し、各々所存を言上しけれども、皆く御気色にかなはず、暫く[illegible]して[illegible]せられけるは、[illegible][illegible]の[illegible]より、[illegible]の[illegible]に[illegible]、[illegible]にて、[illegible]、各[illegible]して、[illegible]に[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]材木の[illegible]て[illegible]を[illegible]しつ[illegible]見られけるに、[illegible]、[illegible]、[illegible]州、

信州、甲斐、紀州、熊野、これ等よりしかるべきに極まりけり。諸々の遣はすべき奉行二十八人定まり、十人選び出し、太閤の御目にかけしかば、御気色よろしかりける。さて諸国へ下知したまひ、一同諸大名の人々に、土佐の山中へわけ入りて材木を伐り、筏に組み伊勢の国へ運び出すべしと。伊勢の国の人々は、木曾山の材木を出し川に流し入れ、伊勢の桑名に着船し、それより大船に積み、南海を経て大坂へ、京の、諸所の大名に運び出しこなた、このうち棟木に植れたる大材を求めたまふに、木曾山飛騨山国々に見えざりければ、富士山を見せしめ給ふに、然るべき大木ありといふ。番匠（棟梁）を遣はされ見せ給へば、いかにも棟木に用ゐるべき霊木なり、棟柱進しけり。即ち徳川家へ仰せ遣はし使をさしつゝ、熊野浦へ廻して大坂に着船しけり。凡そ此の木、船の費、人数五万人、黄金千両の入用にてありしとかや。東山方広寺大仏殿は、大仏の周囲に普請の奉行を遣し、五畿内中国九州を二十一ヶ国の人数を三つに割りて、大仏の周囲と石垣、築山、この三つの普請を相勤むべしと定められける。然れども石垣積みて大造なるに依つて、後は何れも一所に石垣に加はり、重ねて北国勢をも加へられける。初めは小さき石にてつませ給へども、太閤仏法殿へ出で給ひ、石垣小さきは盗人の便りも安かるべしとて、重ねて諸大名に仰せて、極めて大きなる石を集めて築き直し給へり。蒲生飛騨守引きし石は、二間に四間もありける。都て是れ等の大石は世の常にては引き得べからずとて、まづ大石を台車に乗せて



て包ひ廻し、木遣音頭取りの者、異形の裝束にて風流に出たち、聲面白く歌をうたひ舞ひ踊り、その間には鉦鼓笛の響をならし、幾萬の人數を勇め、眞に夥しき催しなれば、洛中の老若男女、見れは稀代の見物なりとて、我先と競ひ來り群集する程に、道も押し分けられざりける。北白川の奧より大佛に至る第七日なり。高野興山上人毎日手傳人五十人宛雇取り、作事等に使ひしが、日數漸く二千日に及びけり。されば建立成就し、莊嚴鋪設供養を遂げ給ふまでの金銀の費えを考ふるに、中々言語の及ぶ所にあらず。是れ偏しながら佛法興隆の功德莫大なりと云ひながら、また國家の費え人民の愁へなきにもあらずなど、眉を顰むる輩もありけると聞えし。この後慶長元年閏七月大地震ありて、佛像堂舍顚れたり。太閤大きに怒つて、「佛の神通力を以てその身の破るゝをも知らずは、凡夫に劣れり。何ぞ崇むるに足らんや」とて、弓を以て佛を射給ひぬ。かくて信州善光寺の本尊こそ、三國傳來正身の如來と聞き、是れを請じ入れて大佛殿の本尊とせんとて、信州より迎へとり給ふ。時に七月の頃なれば、殊に暑さ甚しく照り乾きける折なるに、俄に天寒く冷えわたりて大雪降りて、宛も嚴寒の如くなりしかば、神佛の祟りならんと皆恐れければ、また舊の如く善光寺へ返し入れ奉りぬ。これより十七日過ぎて、八月十八日太閤逝去し給ひける。」と、果敢なく昔の事ども語り傳へける。和尚、珍らしき事を聞きつる物かな。さるにても汝、稀なる長生を保ち、然も今に聰慧なるの珍しきは、前世

[illegible]

め、家に歸りては田を耕し、すべて身を勞して[illegible]

[illegible]

[illegible]實にする長生の道に符合せしことを深く[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]六、京都の管領細川政長に奉公せんと願ひけるに、政長喜悦し、[illegible]は名ある武士なり、急ぎ上京すべし、扶持せんと云ひ遣はしければ、治部左衛門大きに悦び、既に首途を祝ひ、故郷を出でて都に赴く、旅の空さがしき山路をわけ行くに、頃しも冬の末なれば風寒く消えわたり、大雪しきりに降りし事なり、ふかき谷を埋め、通行を塞ぐに鳥獸さへも通はず、まして往來の人は跡絶えて、いとゞ寂しくも心細きに、雪に惱みて馬も進まざりければ、かの韓文公の南方潮州に流され、山中にて雪に遭ひ、詠吟せし詩を思ひ出し、「雲横二秦嶺一家何在。」と唱へければ、誰とはしらず後の方より、「雪擁二藍關一馬不レ前。」と次の句をたかく唱ふる人あり。治部左衛門驚きふり返り見れば、抖擻行脚の禪僧と見えて、わづかに三衣を肩にまとひ、平包を頸にかけ、たゞ獨り杖にすがりて來るにぞありける。寒風はげしく、雪の吹雪面をうち目にしみ、眞に堪へがたき折なるに、此の僧さのみ惱める氣色もなく、悠々として出で來り、その風儀瑩然として殊勝なり。治部左衛門是れ世の常の凡僧にあらずと深く信仰し、「道すがら伴ひ給はらんや。」と云ふ。此の僧喜び、「某も都にのぼるなり」とて、是れより道づれとなり、互に生國を語るに、與に同國にて聞き及べり。此の僧も治部左衛門が名ある武士にて、しかも才智なるをよろこび、道すがら禪法頓悟の要義を物語しけるに、治部左衛門感心に堪へず。すなはち問うていふやう、「われら如き武士の身、佛法修行勤まり難し、いかゞ[illegible]

[illegible]と、[illegible]不覺にて[illegible]。[illegible]一
[illegible]し、[illegible]て、千萬人の中に[illegible]て、一陣に[illegible]し、力量の[illegible]
[illegible]は、[illegible]、心を[illegible]
[illegible]、[illegible]奈に負くべしと思ふ人は有るべからず。その故は、
[illegible]られば、何人かその力量に怖
[illegible]ゐるずしては叶はざる役人なり、
少しも機を[illegible]し弱々として居なば、[illegible]
[illegible]、外物の爲に煩は
[illegible]悲しまず、動ぜず、[illegible]
心となるを成佛と云ふなり。よく意得給[illegible]と云へば、治部左衞門[illegible]
くも留まるも、肩を並べ[illegible]し、心置きなく語らふ[illegible]
如くにして、更に相逢ふことの[illegible]
なひけり。既に近江地に入つて同じく[illegible]、[illegible]日の内に[illegible]
[illegible]、[illegible]ひ云ふやう「それがし[illegible]上るは[illegible]、年來の願望として、

観音の像を造られしと念ふ。台座仏具ともに我が願ひの如くかう／＼造らんには、凡そ幾ばくの金銀や
いるべきと、まづその用意の為に、僅かに二百両はこゝにありしとて、平包を上を広げ、遠慮もなく引
き散らし見せける。殊に世智に疎く我が無慾なるから、他の利心あるを知らざりける。治部左衛門是
を見て、忽ち悪心出来て思ふ様、暫く此の僧を留め置くと思ひ慇懃して、我が金銀を固めて懐中なし
おきたる時に、いかなる大分の金子を持ちながら、今まで隠しけることぞ安からね。我今畠山の家臣なら
んに、[illegible]へ[illegible]、家来の用度に金銀たらず、何さまにも謀あるべからし、此の命の[illegible]
奪ひとらばやと思ひ、さらぬ躰にもてなし、殊勝の思ひたちこそ、[illegible]の如く仕なして[illegible]に
は、今すこしも不足なからん。然れども何時も我が京都の宿所に来りたる[illegible]、[illegible]施主にし、則ち[illegible]
むすび、建立らんのことといへば、僧は何心なく打聞きて、日も暮れければ肱を枕として眠りける。その夜
子の刻ばかり、風雨烈しくして船の行くこと[illegible]。僧目をさまし起き上りて、船端にとりつき
溺しける。治部左衛門はやすき事なると、[illegible]まぎれに後より水中へ突き落しける。その僧声をた
て「人々助けよや／＼」と呼ばはりけれども、船は暫しもとまらず、遙かに行き過
ぎければ、船中の人々如何ともせん方なく「あな哀れや、いかに過ちてか落ちたまひつらん、宿世の
業因にこそ」と言ひあひて、かかる企みとは知る人更になかりける。治部左衛門一旦の悪念に[illegible]れ

て、をくには囲ひ置けれども、[illegible]とやらんそら怖ろしく大きに後悔し、急に舟より上り、水練の人をや
とひ、その儘に下職なしかづかせけれども、死骸さへ知れざりける。力及ばず、それより都に上り、畠
山が家臣にて[illegible]、何事も首尾よく相とゝのひ、一家安堵しけり。されども治郎左衛門、人知れぬ心の
内に、かの僧の最後の有様おもひやりて、報いのほど恐ろしく胸にかゝりて、夢現にも独言に、かの
僧の事をのみ語り出でつゝ、物狂はしかりけるが、一年ばかり過ぎて[illegible]、精神錯乱し、眼
力搦花ちらめきて、かの僧の姿あらはれ、總身水にぬれながら打萎れ、恨みたる體にて来ると見えけ
る、凄まじさいふばかりなく、顔をおほうて右に向へば右に在り、[illegible]
さに目を塞ぎて見まじとすれば、目の前に見えける。これのみならず酒を飲めば、[illegible]の中にもその面影
映り、鏡に向へば鏡の中に[illegible]は見えずして、かの面影見えける。起きたる時も居る時も、とかく
眼が身を離れざりければ、治郎左衛門今は覚悟を極め、妻子を招きよせ懺悔し、有りし儘に[illegible]、
我この度の病は癒ゆまじきぞ、さのみ医薬[illegible]をも用ゐるべからず。その故は我[illegible]
を害せし罪なりし、[illegible]此の度都に上る時、かうかう[illegible]念心起りて、かの僧を[illegible]海に沈め[illegible]
しが、[illegible]他人の目には見えずして、[illegible]、我が命も
んや。」また懇に[illegible]の子に遺言して、我は多年武士の道に心を寄せ、智謀勇力人に劣らず、こ

四條に[illegible]において、官禄に富み、家富み栄えたり。然れども一生の間[illegible]に[illegible]れて、[illegible]

に[illegible]を失ふ、[illegible]。汝よく慎みて正直を守り、幽暗の中細微の事と云ふとも、

不義の心を起すべからず、一念のあやまち悔ゆるともかへらざるに到る。それ思慮の起るところ、善悪

の依つて分るゝ初めなり。是に於て省察勘弁し、妄りに動くべからず、是れ人間第一の工夫なりと

涙と共に教訓しければ、その子治八郎未だ十六歳なれども、天性孝行の誠ありて、昼夜衣帯も解かず看病し

ける。今この遺言を聞きてますます驚き歎き、如何にもして父の命を救はんと計りけるに、人力に

ては適ふべからずとて、江州多賀の社に詣で、此の度父が命旦暮を計らず、かの僧を殺せし科に因り

て命終るとならば、その代りに我が命をとりて、僧の恨みを償ひ、今一度父が命を全うし、本復なさし

め給へ。感應なしからずば、此の所願を納受して、靈驗あらせ給へ。とて、丹誠を抽んで日夜斷食し

て祈誓し、家に歸りても猶心中に弛みなく念じける。ある日門外に旅の僧来り案内を乞ひ、[illegible]

衛門に對面せんと云ふ。家来の者訝りて、「主人只今九死一生の病體なり、叶ふべからず」とて入れざ

れば、旅の僧重ねて理を云ひ、「我その病體について、不思議の靈夢を蒙り来りたり、自らに主人に

逢はせよ」といひける。治八郎内より是れを聞いて、急ぎ走り出で、奥に請じ、「いづくの御僧なるも

知らねども、父が重病故に来り給ふと聞くなれば、何やうにもよきに計らひ、本復なさしめ

給へ」とて、かの僧死霊の[illegible]、涙をながして[illegible]打領き「心安く思召せ、われ不思議の神力を以て、[illegible]八郎[illegible]父子の[illegible]一日[illegible]に驚き怖れ汗を流し、やうやうにして治部[illegible]に向ひ、[illegible][illegible]しく訪れもなかりし事よ、い[illegible]に存命にして死せず、死せざれ[illegible]ふべからず。先年船中より押し墜されたる時、[illegible]たこなた游ぎめぐり、とかくして岸に匍ひ上り、[illegible]たび對面せばやと思ひし[illegible]

て父が命に祈る。汝急ぎ彼が宅に入りて救ふべしと宣ふ。われ訝しく覺えしかど、明神の告にまかせ、夜を晝に繼いで走せ來れり。然るに但なく大事に及べり、眞に明神の告げに違はず、まことに靈驗あらたならずや。急ぎ神德を仰ぎ、我死せざる事を會得して、本心に返り給へ。君、もと武門の大丈夫にあらずや、何ぞ兒女子の涕哭にならうて、見苦しく惱み給ふやとのたまへば、病人忽ち本心になり、僧の顏をつら／＼睇り、涙を流して手を合はせ、われ昔をあやまりて後、ひたすら心にかゝり、報いの程を怖れて、世の安き暇もなかりし、今貴僧佛神の加護ありて活命し給ふ、せめても我が罪科の少し輕まる心地して歡び侍り。この後は快く臨終を遂げなん。即ち治八郎に命じて、先年奪ひ取りし金子持ちのまゝ僧にわたし、前もその年月を數へ、利息を加へて償ひけり。僧辭退に及ばず受取り、然らば多年の宿望なれば、すぐに佛師に贈りて、觀音造立しはべらんとて、金子を提げ暇乞して歸りけり。是れより治部左衛門正念になり、かの僧も見えず、病愈え本復しけり。親子ともに虔く、の戰陣に功名をあらはし、遂に立身しける。それつら／＼憶ふに、財利の人の明智を昏ますや、險惡僕變せずと云ふことなからしむ。眼前の親しみも是れが爲に吳越の隔てを爲し、その變りやすきこと倏忽として風雲のごとし。然れども上天の鑑したまふこと、昭々として明らけし、暗き間ふるとも何の補ひかあらん。あゝ徳塚僧を墜せし一事、まことに利を貪つて恥を知らざる者の戒めとするに堪

へたり、富塚翁畔にして一日を隔の花雪を見たり。然れども彼の骨未だ嘗て死せず、何ぞ祟りを為さん、一心の所変なり。妖魔外より来るにあらず、所謂杯中の弓影、是れ蛇に見らるることを知らず、世の人平生に盛悪を為し、其期に臨んで怨を賠すこと勿れと云ふ。

玉箒木巻之六 終

金玉ねぢぶくさ

章花堂

金玉ねぢぶくさ序

儒佛教へ異なれども、理は一つなり。孔子は理を說き、釋迦は未來を述べ、それ〴〵の機に順つて切磋琢磨の道を立つる。然れども其の規模とする所は、皆人仁に義に忠に孝ならんことを思ふのみ。こゝにおいて余も亦怪をいふ事を恐れず。理となく方便となく交へ記しぬ。是れを金玉ねぢぶくさと題すること、金玉は人の愛する所、ねぢぶくさの如く常にこれを懐にせば、初學の爲に便あらんかと、爾云ふ。何ぞ博識の人の前に、誇りを得る事をうれへんや。

元祿十七甲申歲初陽吉辰

章　花　堂

金玉ねぢぶくさ　巻之一

鯉魚の精の事

昔し伯樂と云ふ馬の目利有りて、然うして後に千里の名馬出て、人に聖人の明徳ありて、然うして後に賢人世にはる。然れども人見るに物の善惡をわかたず、聞くに善惡邪正を知らず、これ時に有、同じ世に、和漢正賢の變りある事、如何なる事ぞや。古への卞和は玉石の辨に、二代の王に刖れずといへども、捨てるに忍びず、終に良工に逢うて光を發し、世に類ひなき美玉となり。然れば玉は常にあれども是れを知る人なく、知る人はあれども又良工人なし。玉を以て世に賢き伯樂にあはねば猶以て駑馬に等しく、珠玉も良工なければ、瓦礫と同じ。されば其の道に長じ其の藝を嗜みぬれば、商賣人も又然なし。一年長崎の町人、伊勢屋久右衞門方へ唐人來りて歸國の時、内藏の石垣に付きたる南石一つ有るを見て、掘り出し呉れ候やうに所望す。亭主、易き事なれども、此の石一つ抜けば石垣崩れ、其の外普請に障り候間、昔しの時節迄は置き、重ねて渡海の時、進じ申すべき由にて、由を約す。唐人云ふやう、一旦歸國して又來ることは不定なり、願はくは只今望みの由にて、則ち彼の石の代りに

金子百兩取り出し、これにて普請の造作を賄ひ與れ候やうに」との事、亭主いよ／＼邪智ふかく、さては此の石玉石にて斯くは望みに思ふならんと、さのみ五十兩、百兩を珍らしく思ふ身代にもあらねば、惜しみて終に與へず。唐人出船以後彼の石を掘り出し、玉磨を呼んで見せければ、「玉とは見えねども、いかさま常の石にもあらず」と申す。周りを缺きて磨かせて見れども、さして變ることもなく、光も出でず。後には退屈して二つに割らせて見れば、中より水出でて、其の内に金魚の如くなる鮒二枚あり。扨は邪智に迷ひ百兩の銀を取り逃しぬと後悔して、彼の石の割れを捨て侍り。其の後彼の唐人又來り、金子千兩出して此の石を所望す。主いよ／＼後悔して石の趣を語る。唐人驚き涙を流し、「われ此の度數千里の波濤を凌ぎに來るものは、彼の石を求めん爲なり。御身の心若し千兩にて不足なれば、三千兩までは與ふるつもり、則ち其の金持參せり。」とて新しき箱一つに同じ包の金三百入れて、上に水魚の玉石代と書付を出したり。亭主後悔の餘り、彼の石の仔細を問へば、唐人答へて云ふやう、「此の石を摺り、水極一分の間に置いて磨けば、底より光起つて誠に絶世の美玉なり。殊に大きさ方面七寸五分、上方圓滿なる中に、おのれと水を含み、其の中に二疋の金魚ありて、動く形光に和して美なること世に並びなし。王侯の心を喜ばしめ、其の値千萬金、我是れを得て、富貴を極めん事を欲し、遙々と來朝し、不幸にして此の玉を得ず、是れ玉の世に傳はるまじき天命なり」と歎

きぬ。誠に斯かる奇石も世に有る習ひにや、彼の唐人は、石垣の中より選んで、これを玉なる事を知り、其の道を知られざれば、亭主は是れを破つて瓦礫となし果てぬ。こゝを以て思へば、玉のみに限るべからず、今治まりたる世にも賢人は多く有るべけれども、良き主君を得ざれば賢才を埋らすことなく、徒に市井の賤人にあはさるが如し、瓦礫となつて朽ちはてなん、是れ惜しむべき事なり。玉は眞寶にあらず、たゞ人は人を知るべきこと肝要なり、人の己を知らざることを憂へざれ、人を知らざることを憂へよとは、聖人の教誡なれば、今更云ふも愚かなるべし。とかく人の君たる人は、明德を明らかにして、彼の唐人の石を見て眞珠と知り、伯樂の馬を見て麒麟を知る如く、臣下の善惡をよく見分けて用ゐ給ふこと、天下國家の幸福ならん。昔虞公の百里奚を用ゐ、項羽の韓信を失ひしに、恥ぢ給ふべきものか。

讃州南鐘の事

讃州高松の城下より五里去つて、西南の方に寒崎と云ふ所あり。後は山に連つて峯高く、前は海に續いて浦近し。晝は樵歌牧笛の聲風に和して聞え、夜は漁歌の聲岸打つ浪の音に夢をさまして、誠に面白き風景、馬手に金毘羅、弓手に屋島壇の浦、遠く加茂の岳、相引の鐘、西海の多景を居ながら兩眼の

内に盡せり。去んぬる天和の頃、高松の御家中に、一國名取の男色植木梅之介とて、未だ二七の花の盛り、兄分と云ひ交せし人、聊か過ちの事あつて、御仕置に親疎なければ、是非なく切腹仰せ付けられ、梅之介へ書置・通殘し、則ち御菩提寺に於て、潔く武士の本望なる死を遂げ侍りぬ。梅之介其の節は病氣にて此の事を知らず、少し快氣の折節、久しく對面せねばゆかしく思ひ、長々の病中つひに一度も訪ひ給はぬ事もなんど恨みて、文細々と認め、是れを屆けよと下人に渡しければ、親たる斷かる病中に右の事を知らせなば、病氣の上に悲歎を重ね、愈々病さかんになるべし、此の返事いかがと思ひ煩ひ、漸く一つの謀を設けて、「去んぬる頃上より御使者役仰せ付けられ、既に江戸へ發足の砌、御身へ暇乞の爲、これへも來られ候へども、其の節は御身病氣十死一生の折節なれば、對面させ申さず、事叶はで歎く、我々の曖のみにて歸したる」との物語。梅之介殘念なる顔付、さてはそれなれば、永々訪れなきも理、然し病未復の折節見よとて、一筆の文にても殘し置かれぬ所、聞えもなしとて、神ならぬ身の、且は恨み又は戀しく、江戸にての隙入、道中上下の日限、指を折つて數へ、一もはや御歸りも程近し。」と、男色の情の道に、露と消えし人を待つもはかなし。其の後病氣次第に本復して、「今日は溫かなればぞ」とて月代を剃り身を清め、食ごなしのため、杖をさゝへ、病中度々見舞に預りし少年中間への禮ついでながら、彼の人の屋敷をなつかしく、廻りて其の門前を通れば、不思議

の屋敷換ありしと見えて、門に我が友達の宿札、内を覗けば、折節主在り出で梅之介を見付け、「さて
も永々の大病御本復、今日は初立と見奉りぬ、先づ／\こし忘れへ御入りあれ」とて、是非に座敷へ伴
ひ、四方山の物語。見れば書院のかゝり庭の木立、ありしに変らぬ體。梅之介何とも不審晴れず、「扨
もこれは綺麗なる所へ御屋敷換へ、いつとてか忘れへ御移り候やらん」と問へば、主の返答に、「前の屋敷主
切腹の以後、早速此の屋敷拝領致し候へども、忌中五十日遠慮、先月よりこれへ移り、長家の端々ま
で何れも普請余さず、我等に過ぎたる大屋敷なれども、当分修復の世話もなく安堵致したる」
との物語り。梅之介はつと驚き、委しく様子を聞はまほしけれど、こゝにて聞かんもはしたなき事に思
ひ、心を鎮め、主へ暇をこひ此の屋敷を立ち出で、道すがら供の下部を責めて委しく様子を問へば、
あらん限りを語るにぞ、梅之介いとゞ難儀を極め、我が屋敷へ帰りて、一昨日も藤介暇乞に来たり
たる事を語りて、兼て死なば一處と申し交せし中を、我等病氣故其の節對面さへに遂げず、嘸や最後
の際までも、われを恨みて果しならん。然れども知らざる事は是非もなし、延引ながら不断に回向を
心の時に在りふる時は、衆道の一分立ち難し。不若の枝、御役を蒙り、我も彼の墓前に於て自害を遂
げ、同じ所に葬ひ埋みて、生きては人に恥づる事なく、死しては後の人へ男色の意地を立て、
一世の契りを結ばんと、此由父母へ色々なだめ、愁歎の餘りさほどに思ふは理なれども、死して

何の益かあらん。もはや日数も程経ぬれば、追ひ付く事もかなひ難し。親の歎きを義理に代へて、必ず思ひ止まれ」と、たつて教訓もだし難く、竊かに屋敷をぬけ出で、彼の菩提寺に行き一堆の塚の前にて、袴の上押寛げ、既に自害に及びし處に、折節和尚物陰より此の體を仄かに見付け、刀を奪ひ、様子を段々詮索の上に、尤も一通りは義理にて、それは血氣の勇のみなり。仁義の道には叶ひがたし。主の追腹切り、親の敵、兄分の助太刀を討つは、武士たる人の常の道なり。只今これにて自害し給ふは、忠にもあらず、孝にもあらず、心中の誠も立たず。唯親へ不孝、君へ不忠となるのみにて、無益の事に命を棄つれば、思ふ人の爲にもならず。誠其の人の事を大切に思ひ給はば、命をながらへ、修行の功を積んで跡を問ひ、追善を爲し給はざる」と、義を説き道を立て、理非分明に教化ありしかば、梅之介忽ち悟道發明して、「扠々有り難き御示し、我が身無學愚昧の小人、愚癡の闇に迷ひ、仁義にあらぬ死をとれり。此の上は師弟の契りを結び、ながく教へを垂れ給へ」と、父母一門にも暇乞して、直に此の寺に閉ぢ籠り、螢雪讃仰の功を積んで、翌年三五の月の形を機散の春の落花とともに、つひに翠柳の髪を剃りおとして、惜しきかなや紅顔の男色、墨染の袖に散り果てぬ。然るに此の寺も大樹の菩提寺なれば、家中よりの参詣繁く、古の友を避くべき陰室にあらずと、彼の室崎に来り一宇を結んで、晝は遠浦の歸帆に目を悦ばしめ、夜は松吹く風の音に心を澄まして、親族の縁を切り世の

交はりを断たば、自ら人も訪ひ来ず、慾もなく怒りも起らず、偏に後生菩提のみを心にかけて、道心堅固に行ひすましぬ。然るにこゝに雨鐘とて、奇代の事あつて、雨降れば何処ともなく鐘の音幽に聞えて、念佛の声はなし。定めて狐狸変化の所為なるべしとて、所の者恐れあへり。此の道心、不思議の余り、如何様の事を見届けてこそ後世の疑ひもはれ、修行の為ともなるべけれ。と、終夜心を澄して、終に鐘の鳴る所を見とゞけ、其の所に印をして立ち帰り、翌日村の者共数多伴ひ、彼の所を掘らせければ、土より四尺程下に楠の板一枚あり。剥ね起して其の下を見れば、歳のほど四十許りの法師、黒衣の大衣を着し、両眼と痩せ衰へ、前に鐘鼓を据へ、手に撞木をさゝへ、西向に結跏趺坐せり。人々驚き、鋤・鍬を捨て逃げ散りぬ。然れども此の道心少しも騒がず、「抑御身は如何なる人ぞ。」と問へば、彼の法師、「我は去りぬる頃此の土中へ入定せし者なり。其の節一国の人民、われに結縁のため、貴賤群集してわれを運ぶ中に、齢二八許りの美女一人、天機の露を含み、芙蓉の水を出でし姿にて、棺側に我が前に跪ひて、一蓮託生と手を合はせて去りぬ。われ三界を出離して安養の念なし、諸行無常に寿尽きて此の定に入りぬ。然れども最後の期、鳴呼美しと、彼の娘のあだなる貌を唯一念心に思ひしより、見濁の業に引かれ、五蘊のかたち未だ破れず。されば其の娘、恙なく世に在りや。」と問ふ。道心、愈不審晴れず、思ひ／＼、御身の入定、世に知れる者なし。年号は何れの歳、時

代は何時の時に當れる」と彼の法師答へて謂ふ樣、鎌倉の將軍義詮公の御代。年號は是れに記しぬ」とて、彼の鐘鼓を差し出す。さては光陰遙かに隔たり、三百七十餘年を經たり。其の娘は疾く死せり。今は子孫も世になし」と云へば、入定の法師、是れを聞き「嗚呼々々。」と云うて目を塞ぎ、見て居る内に、肉身朽ちて霜の消ゆるごとく、四大分散して唯一連の白骨となる。衣を取り上げて見れば、灰の如くばら／＼と消え失せぬ。誠に一念五百生繋念無量劫。恐るべく愼むべきは愛著なり。それより此の所に一宇を建てて、彼の鐘鼓を什物とし雨鐘と號けて今に在り。

金玉ねぢぶくさ巻之一　終

金玉ねぢぶくさ　巻之二

蟷螂蟬を狙へば野鳥蟷螂を狙ふ

人は前に慾ありては後に来る禍を知らず。若し其の大きに欲する所を押へて、先づ其の事の邪正を慮らば、たとへ願ふ所は叶はずとも、其の為すことに害はあらじ。禅定は有無の二つなれども、先づ其の勝たん事を念うて、身代を打ちあげ、或ひは先づ其の利を先に見て、高い物を知らず買ひ置き、或ひは前に得る事を見て後に治を失ふ事を忘れ、人と争ふ時は我が身の邪を忘る。盤上の遊びすら、勝つて益へ、負けて損なき事なれども、相手の石を囲はんとて我が石の切らるゝ事を知らず、先へ仕掛けん事のみ念うて、我が手前の詰る事を省みず。今度、長崎の町人小橋仁兵衛、一圖に商賣して、石の猫睛百四十六粒をもとめ、然るに下直なる時の来、大分買ひこれ持ちて、それ程の上りを受けても、其の益を覚らず。異客の町人、誠の其の慾の深さを見限り、其の値をはつせてもなれば、他町へ行きて出せんとすれども、先々に是れを悪みて、かねて身代富貴なれば、なかなかに屋敷求め置き、長崎中に其の十七粒を留め、家を持ちながら、終に我が家に住する事叶はず。それかたなきの余り、簡善寺へ行

ずし、三日も間寺にて暮しぬ。然るに外の檀那共云ひ合はせて、斯程の悪人を隠まひ給はゞ、我々は檀那を引き申すべしと言ふ。いやはや、一人の大勢には換へ難く、終には寺をも追ひ出されて、当分路頭に立ち侍りしとぞ。誠に善悪ともに十指のゆびざす所、十目の見る所、是れ天道の印なり。近年草木は不作なれども、米穀の高直なりしは皆有徳なる町人、窮民の憂へを顧みず、利を得んとて我がちに買ひ置き、値段上らざれば何時までも売らざる故、是非なく、百の上げに上げれども、久しく囲ひし間に米の性も損じ、或ひは銀の歩を費して、仕舞ひに所利を得る事少なし。我が利を得る事少なうして、人の害になる事多きは、米商人の市の上げなり。人を利する者は天是れに福ひし、人を害する者は天是れに禍すと、聖人の戒め給ふを忘れ、不義にして富まん事を欲し、貪りの心深きは、譬へば魚の人を食らふ事を知つて、己れ却つて其の身の破るゝ事を知らず、魚の餌を見て釣針を見ざるが如し。水無月の末、涼しき木の枝に蟬一疋とまりて声潔く吟ぜり。然るに蟷螂是れを見て、蟬をとらん事を欲し、斧を振り上げて後より忍び寄る。野鳥又蟷螂をとらんと、其の跡へ続いて、鳥さしまた是れを見て、小鳥を捕らんと其の跡へ忍び寄る。蟬は己が吟ずる事を楽しんで、跡なる蟷螂を知らず。蟷螂は前なる蟬をとらん事を欲して、後に野鳥ある事を知らず、野鳥は蟷螂を見て、下より鳥さしの狙ふ事を知らず。鳥さしは鳥に性根を入れて、足元を見ずして踏み外し、岸へ落ちければ、是れに驚いて野鳥

ぜり、鳥に就いて甘蔗を遂ず、是れを見て蟬も飛び去りぬ。然れば世の中の事には、蟷螂蟬を狙へば、野鳥蟷螂を狙ふことありとて、我が欲する事ある時は、先づ其の事の邪正を能く遠慮して行ふべきことなり。

貧鬼人を食らふ

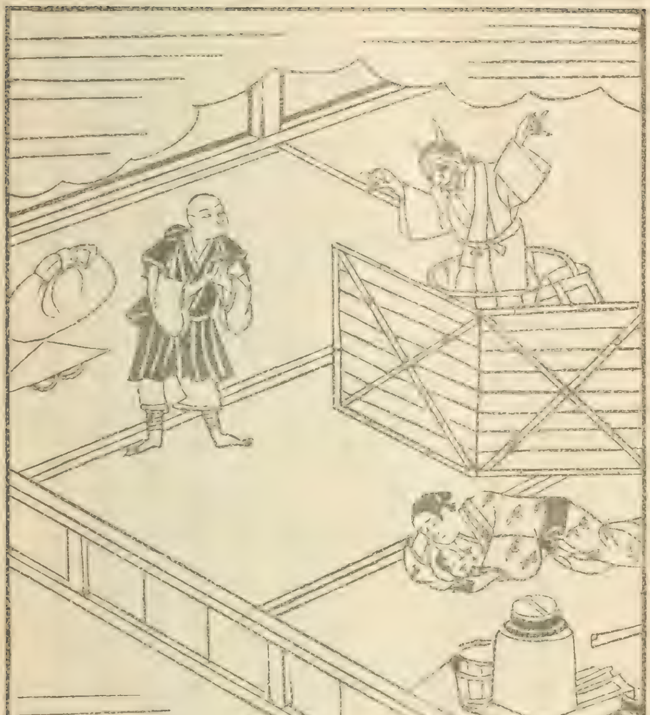
高野山は三國不雙の名山にて、山の像八葉に開け、八つの峯峙ち、寺は卒都の内院を表して、四十九院をうつせり。大師生身の出世を待つて、奥の院に入定し給ひ、佛法不退轉の靈地なり。僧侶に有つて、僧侶、行人、聖と名づけ、大衆三段に分ち、上通り、中通り、下通りとし、上に三つの靈寳あり。まうもう山、摩尼山、天岳山と云ふ。是れ九品の淨刹を學ぶ、世の清浄潔齋の道人、皆浄地を求めて此の山に往生す。中頃學侶下通りの寺僧、南藏院の深覺坊とかや申せし僧、其の身螢雪の功を積みたる學者にもあらねど、唯自然と心法治まり、人我を離れたる道人なりしが、ある時熊野へ參詣の志ありて、もとより我が寺は貧寺なれば、一僕に留守を調ひつけ置いて、たゞ衣嚢に道のまうけを納め、只一人寺を立ち出でつゝ、熊野の方へ赴かれしに、其の日は早く宿を求めて、一夜を民屋の假寐に明し、翌日は心靜かに日出でて宿を立ち、とまり定めず、急ぐべき道にもあらねば、たゞ足に任せ

其行き侍りしに、此の近年こそ久しく天下泰平にして、野の末山の奥まで人の行き通はぬ所もなく、自から道も開け、いつとなく人家立ち續きて、山路に踏み迷ふべき岐もなく、狐狼惡獸の怖れもあらねど、其の頃は未だ兵亂の後久しからずして、端々には盜賊徘徊し、殊に高野より熊野への道は、其の間山坂のみにして田畠少なく、農民の住家も稀に往來なければ、人を迎ふる旅籠屋もなく、日暮に山の端に入り給へど、行先に人家も見えず、過ぎ來し跡の村里は遠し、如何はせんと案じ煩ひしが、「よしや沙門の身には、いかなる所に心を留めぬこそ修行なれ」とて、道の邊の木の根を枕とし、三衣袋卸して、暫くまどろみ給ひしが、山間の嵐はげしく身に浸み、心細く覺えて寢られぬまゝに、「斯かる山中には猛き獸もありて、若し今宵我を喰ひなば、防ぐべき便りもなうして、つひに喰ひ殺されぬべし、今少し先に宿を求むべき人家もやあらんか」と、又起きて袋を首に懸け、辿りつゝ行けば、折節九月末つ方、月なき夜の足元は暗し、道は狹うして巖峙ち、雨になだれて木の根現はれ、弓手の方は峨々たる岩聳え、馬手は數千丈ふかき谷底と見えて、流るゝ水の音、幽に聞えたり。やうやく二時ばかりして、峠と覺しき所へ出でたれば、馬手の方四町許りが程に、幽に燈火の影見ゆ。「さればこそ人家はあるなれ」とうれしく思ひ、彼の火を目あてに、谷へ下り峯に登り、道もなき茨原を分けて、彼の所に至り見れば、住み荒したる一つ家の軒傾き、扉破れて燈火の影さへ洩るゝにてぞありける。深

覧、日を蔵きて、熊野道者、日に行き暮れ、宿をもとめ兼ねて、火の影を目あてに尋ね来れり。一夜を明させてたまはれ」と申せば、内より主不審を立て「此の山中に人間の訪ね来るべき道なし。殊に今夜の暗き闇路を凌ぎ来りたる者は、定めて鬼神変化の類にてあるらん。然らば目に物見せん」とて、鐵砲に二つ玉込み火繩さしはさみ、火蓋を切つて待ちかけたり。深更、全く左様の者にてなし。高野法師の熊野へ参詣すとて、日に行き暮れ道を失ひ、燈火の影を便りに、是れまで迷ひ来れるなり」と答ふ。「さては、かかる僧にかかれ侍、其こそには左様にましますか、さぞ夜寒もおはすらん、早く参りしながら御宿申さまく侍れども、今宵は我が家に亡者あつて、熊野道者は火の穢を忌み給ふ事あり。向なる古寺に休みおはしませ」とて、戸口を開け、鍵を取り出し、「是れなりとも夜風を防ぐ便にしたまへ」とて出しければ、深更申されければ、斯かる折節、出家の此の所へ訪ね来たるは、定めて当世の因縁にてぞ候すらん。仏前へ夜の不浄は苦しからず、一夜の宿を貸し、亡者への追善にし給へ」と申しては、すなはち内へ請ひ入れて、誠に今宵は不思議の宿違なり。我が身は此の山中に住み、不断、鹿鳥を取つて世を渡る業とする身さへ、斯様の暗き夜は、山路を遠慮し侍りぬ。殊に案内もしらぬあまれの御僧の、誠に迷ひて来り給ふは、とりわき宿すべき縁にこそ」とて、さまざまに歓待し、爰其の上にて語りけるは、「今宵の亡者は我が為に妻にて侍りし者、去年の初秋の頃より心地煩ひ、初めの間は、その

り、打臥して惱む程にも侍らざりしが、日數經るに從ひ重り行きければ、斯かる深山の鄙の住居、賴むべき醫者とてもなく、與ふべき藥もなければ、唯其の儘に捨て置きしより、次第に食も食らはず、形衰へて、過ぎし夏の頃より、殊の外病重り、今は限りの樣とて、親子兄弟呼び集めし事、度々に及べり。此の二三日以前にも正氣取り失ひ、今を限りと見えしかば、一門親族集まりて、既に末期の水まで與へしかども、定業ならざるにやまた性根つき、此の頃結句食も進み、心地も凉しく見えしかば、親類も安堵して昨日皆々歸りぬ。然るに今宵遂に娑婆の緣盡きて、斯く相果て申す上は歎くべきにあらず。然れども此方より知らせざる内は、親類も訪ひ來るべからず。是れより一里ばかり隔たれる在所に親兄弟住み侍り。何とぞ今宵の内に告げ知らせたく候へば、我彼處に行きて歸らん程、留守し給はれかし」と申せば、「それこそいと易き間の御事、匆々に告げ來りたまへ」と、主悅び火鉢に火をつけ、鐵砲打ちかたげて出で行きぬ。扨、深見兵勝手を見れば、下女と覺しき者乳房の子を抱きて竈の前に臥しぬ。亡者は納戸の間に、前に疊にて圍める二枚屛風を引き廻し、其の上に燈火を細くかゝげたり。さなきだに女は五障三從の罪深し、況んや斯かる深山の奥に住んで、常に佛とも法とも聞く事なければ、一入愚癡の闇深く、殊に連れ添ひし夫は、殺生を營んで渡世とする獵師の家に、歲を經て、さぞや罪障も深く、未來は無間奈利の底にや沈みぬらんと、不便にて、光明眞言寶篋印陀羅尼、たゞ讀

解して亡者に手向け、醜なる中敷居を枕に支へ、暫くまどろみければ、何やらん物の響き音に目をさまし、其の趣旨を問せば、彼の寒風にかけたる手拭、あなたより引く體にぞ見えける。然れども心法治まりて、終に一生物に動じたる事なく、怖ろしいと云ふ事を知らぬ法師なれば、枕もたげず、定めて狐などの銜へて引くならんと思ひ居たりしに、つひに彼方へ引き落しければ、いかさま不審晴れず、立つて様子を見れば、縄切れて納戸の戸開き、亡者の身體を開き、瘦せ衰へたる顔、襟に角立た口なれば、常を廻はし、頭に雨後ミじを有様。若し外の人見れば絶え入りぬべき程なり。然れども、家僧一念を動ぜず、暫時に叩かれて、臨終にさまざまの悪相を表はすは世の常なれば、平生北の方の胸中のほどを思ひやり、一入不憫にて、御暫く南無回向して、眼を撫でふさぎ、掛け蓋をし、又枕をさゝへなどなしに、宵に知らぬ山路を踏み迷ひし勢れ出でてや、覺えず寐入りける處に、暫手の如く礎しくて、女の聲にて、「おつゝ」と呼びけるに、目をさまし枕元を見れば、怖はこけて亡者はなし。如何なるわざならんと、勝手を見れば、彼の亡者、宵に竈の前に臥し居たる、下女と幼兒との首を喰ひ切り、左右の手に提げ、口より下は朱にそまつて、又深雪に踊りかゝる。深雪彼の時鳳を以て、「迷故三界城悟故十方空本來無東西何處有南北」と二つ三つつゞけて打ちければ、亡者の體、忽ちに空虚つて流れ失しぬ。深雪痛みしながら、二つの首と共に本の棺へ納めて、主の歸るを待ち居けれ



は、暫くあつて戸を慌しく敲きぬ。内より「誰そ」と問へば、亭主の聲にて「只今歸り侍りぬ、早く戸を開けて給はれ」と聲懸けて呼びぬ。深雪「さては」と戸をあけて「自然道にて不思議の事に逢ひ給はずや」と問はれければ、亭主申すやう「されば我等漁師を家業として、一生此の山中に夜と明え、月なき夜、雨、雪を厭はず如何なる谷峯に入りても、終に怖ろしき事を知らず、然るに今宵一門共の家を出でて、半分道歸りし頃より、頻りに恐ろしく覺えて、跡より何やらん物の追ふ樣に思はれ、未だ身柱元の寒き直らず」と、顏は草の葉の如く色を失ひ、冷汗を流して語りければ、深雪「なるほど其の筈の事、内にも留守の間に、不思議なる事侍りし。納戸へ行きて御身の留守、亡者の有樣を見給へ」といへれば、亭主驚き恐れ「内には如何なる事か候や、語り聞かせて給はれ」と云へば、「語るまでもなし、今亡者の有樣を見て、樣子を知られよ」と、無理に手を執つて納戸の内へ連れ行けば、雖も、猶は恐れ戰き「是非共に樣子を聞かせて給はれ、さなきに於ては我亡者を見得ること能はじ」と、既に戰きてありければ、深雪申されけるは「亡者は數年御身の偕老同穴の睦の内に、無摩懐昔の因みを遁れし愛慾の紲、其の上三密清淨の出家は、身外に被甲護身の印明備はり、纒ひ付き給ふ火の中へ入りても、身に刀杖の怖れなく、殊に阿字の一刀を具足して、生死煩惱の大蛇をだにも切れば、如何なる執着愛念も、法衣を怖れぬといふ事なし」とて、衣の袖を覆ひ手を執つて引き立て、亡者

の有樣を見せければ、卒土涙を流し、誠に懺悔には重罪を滅ぼすとかや。聖人の御慈悲、一に此の罪人を助けたまはれ。我一念の邪淫に心亂れ、思ひたる下女を愛せしより、本妻の女嫉妬の思ひに胸を焦し、嘆き悲しく思ひし折節、因果の爲せる所、下女が腹に此の子を懷妊して、此度の夏無事に平産せし故、本妻の瞋恚の念盛んになり、飲食も喉に通らず、妬み死に今宵臨終に及びしが、終に一念の惡鬼となり、現に因果を現はし侍りぬ。我斯かる不思議を見て、未來の程思ひやられ、淺ましく候なり。是れのみに限らず、一生物の命を取りし殺生の數々惡業を思へば、高き事五岳にならび、罪障を顧みれば深き事四瀆に過ぎたり。今是れを見て後世の怖れに身の毛竦立ち、一念發起致し候間、髮を剃り御弟子となされ、未來を助け給はれ」と、涙と共に歎きしかば、深覺も哀れを催し、親族の來るを待つて、右の趣を申し聞かせ、師弟の契りを爲し、熊野よりの下向に此の道心を伴ひ歸り、皆人其の故を問へども語られず。此の法師常に師を尊み、一生大切に常隨給仕して、道心堅固に作善の功を積みしかば、一念阿彌陀佛、即滅無量罪の功力に因つて、さほどの重罪を消滅し、臨終にはめでたき往生を遂げ侍りぬ。誠に佛種は縁より生ずるとかや、有り難かりける結縁にぞ覺え侍りぬ。

金玉ねぢぶくさ卷之二　終

金玉ねぢぶくさ　巻之三

米良の上うるし

君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の和したるを、聖人も五倫と宣ひ、是れ人の慎むべき道なり。然れども、夫婦は色愛の仲なれば格別、大方は君無礼に、臣忠を思はず、父には慈悲なく、子は親へ不孝に、兄弟睦まじからず、朋友偽りあり。されば其人は五倫を具足するを以て人倫と云ふ。昔しは是れを紊す時は五倫に等しく、貴きも賤しきも、朋友親しまず、兄弟睦まじからずして、諸道成就する事難し。

一年、日向国米良と云ふ所は漆の名所にて、一山餘木を交へず、漆の木のみ能く茂れり。一郡の人皆漆を掻いて彼の耕作を営まず。然れども山険しうして道を登る所なし。然るに奥山へ至りては、道絶えて嶮岨にて、人の通ひ絶えたる所数多あり。左様の所をこなたより望み見れば、別けて木の勢ひよくはこゝ、枝葉茂りて、一人漆沢山に見えたり。然れども道絶えぬれば、皆人望むによしなし。爰に一人の手にする所なれば、木の性良く肥えて、已に枝より流れ出て、土へしみ出に流れて、山は宛ら漆の如し。此の里に安左衛門と云ふ漆掻有り、奥山へ入りて谷川の流れを要て、大きなる淵へ、取りに行

して鎌を落し置つ。折節此の男水練を得ぬれば、彼の鎌を求めん為に、水底へ入りしに、不思議や下は一まいに皆漆なり。人の通はぬ山々より、雨になだれ日に蕩されて、往古より洪水の度々流れ出でたる漆、みな此所にあり。安左衛門大きに悦び、人に知らさず密かに是れを取りて問屋へ出しぬ。漆は水に有りては、其の性損ずることなし。殊に水の底に年数を経し、漆の潤うなること得も云はれず。其の上毎日大分の漆を出して、暫時の間に大銀を出来しぬ。近所の者ども、斯様の漆を如何して出すぞと、皆々不審を立てしが、別して弟十兵衛、此の事何とも合點行かず、或日心を爲して、兄が出で行けば、毎日其の跡を慕ひ、つひに彼の水底に有る事を見付け、其に是れを取りて問屋へ出し、快く大分の銀を儲けしが、兄安左衛門是れを知つて物憂き事に思ひ、呉々思案を廻らし、細工人を頼んで、大きなる龍頭を拵へ、角色には金銀を鏤め、誠に生けるがごとく結構に仕立て、彼の淵の水の落合へ沈め、逆さまに水におのれと動く様に仕懸け、脇へ退きて是れを見れば、上なる岸には樹木生ひ茂つて、ほの暗き淵の底に、彼の大蛇紅の舌を出し、眼の光水に映り、其の凄まじさ言ふ許りなし。案の如く、弟是れを見て、誠の大蛇と恐れ得取らざりしが、兄安左衛門おのれ獨り取らん事を悦し、大きに悦んで則ち淵の底へ望みしに、彼の龍頭あまり結構に拵へし故、大蛇とも思はれず、我ながら怖ろしくなりて、其の身も是れを得取らず。それより家へ歸りて能く〳〵思へば、元我が拵へたる作

仰ぎ見るを恐れ、猛迷ひの手かと思ひ、又行きて見れども、大蛇頻りに動いて既に一口に呑まんとする勢なれば、上へ昇ることも能はず。然れども底なかうなし何程云ふ限りも知られねば、わきのせん方なさに人に語り、大勢催し行きて見れば、此の龍頭に纏ひ落ち入り、中々邊人ども寄せず、其上日常に淵の上に雲霧起り、霧の如くなる毒氣起りて、若し是れに觸るゝ者は、或は頭痛、又は死するもの甚だ多かりき。此の物語にも貪、瞋、癡の三つを以て三毒の大蛇にたとへ給ひしか、今此の安左衛門も、父の遺言を背き、心せまく己が兄弟に惜しみ、掠め取らんとせし貪慾の心深く、彼の大蛇の魂となり給ひ、あさましき[illegible]此の様を見付けたる時、たとひ[illegible]の事にてありとも、兄弟一緒に心を合はせ、よるに[illegible]になるべきを、[illegible]を以て威さんと企みし心には、すぐに鱗も生えぬべし。古の[illegible]の合ひ、末代までの[illegible]を流し、今の安左衛門は兄弟不順の貪慾の心に、一期に悪名を流して、世間にも、兄弟は他人の始めと云へば、おのづからなる人は、大方妻子いよの[illegible]を忘れ、兄弟の中に[illegible]なれり。是れ五倫を缺くのみにあらず、萬事に渡りて[illegible]

堀伊賀之介が事

長尾謙信の小小姓成伊織之助、十三歳にて謙信へ召し出され、一萬石に一萬兩宛の遣金を拜領して家大きに富あり、實に天のなせる麗質なればにや、世に類なき美男、謙信寵愛の餘り、常詰をさせては、若し氣うつりにて病もや出でられん」と、二人の横目をつけて、非番の時は下屋敷へ下げ、獨りの母へ孝行を盡させ、恩を與へ賞を施して、我が領地にも換へまじき程に愛し給へり。然るに伊織業平の顏麗にや、一國の人民貴となく賤となく、老となく若となく、愚となく智となく、男となく女となく、一度此の人の姿を見し者は、戀慕の念ひが胸を焦し、叶はぬ戀に死を爭ふ。其の中に、直江山城守が若黨、菅半助と云ふ者、如何なる垣間見にや、此の人を戀ひ侘びて、涙の枕の獨寢にじめつばかか思ひの火を吐き、焦るゝ胸には鹽竈の煙を立てり。しかれども其の身は數ならず、伊織は謙信の寵愛ふかく、如何して思ひ絶えなんとばかりを、知らすべき風の便りもなければ、何とぞせめて彼の人の家來となり、不斷姿なりとも詠め暮したく、いろ／＼と工夫をつひやし、さま／＼に稽古の功を積みて、髮さかやきに一國名取の名人となれり。誠に古より藝は身をたすくる習ひ、終に願ひ成就して、伊織方へ召し出され、不斷姿を見るのみか、朝夕御髮を手にかけて、命にかけし本望、偏に冥理に叶ひぬと嬉しく、あはれ此の人の御身の上に如何なる大事もがな出で來よかし、一番に御為に死して忠と思ひの二つを表はし、せめては死後になりとも哀れとおもひ知られて、手便一通の御廻向に

と捕らば、未練と臆病の言を設けて、二世の契り何事にこそ動かんと、真実あさての間もなく、又姫に厭ゐはへり、伊織を半助の忠節心に激へて嘆くも思はず、間分別をかけしかば、半助いよ〳〵堪しさ限りなく、况して思ひのたけを迫りて知らせ、ただと熊部に憎まれ、御手討に頒ると、薄かる我が人の手にか、およそ、露と消えん事、もとよりの願ひなれば、一封の書章を御側なる間にもと、首尾を窺へども、二人の横目者夜ぞ番を離れず、隠す心の甲斐もなう徒らに月日をすごせり。ある時伊織殿のことに偲びたでし建る私を、彼の定紋をよく見れば、中に細字に書きたる想ひの文あめ。繕く欺きて綴りこめたれば、遂くて見れる読むに、「思ひの数の詮ずるところ」と、書き留めしかば、伊織殿の判官にもして、二人の横目に、其の送りをたへ申したれば、殿へ、我が身直ちに申すべけれども、左様にて貯入たるもの〳〵の御評定となるべきか。飽何卒人まいらう〳〵御意に任せて候やうにと言の聞、さもさ人も二半助が宗表として、主を憎りし無念の程は悪みしことと、其のことに申し上げるば、定めて御上に用うかして、姫にて挽めるべし、其の上伊織は一河名家の男なれば、縁甲の女にできて、愛で逢ふを、現えや此年の男盛りに、彼が身を忘れし仏か年なりとて、縁の儀に彼は許し給ひなれば、聞だけの心の贔屓に不便なしにはて、御腹立ちつとも、然しながら、此の養を上へ申し上げては、半助事いかなる憂き目に逢はんと何れ離しゝ、其の上二人たの形の美しさに、彼が

漬ても痛からず。兎角私共さへ沙汰なしにすれば、波風なう済む事。其の上彼は此方の御家来なれば、死罪になりとも追放なりとも、心の儘に行ひ給へ。上へ仰せ上げられんは不便の事なり」と云へば、伊織いよ〳〵腹立ちして、「各には、我等身の上に怪しき事あらば、たとひ隠し候とも御詮議を遂げらるべき役人の、其の職を守り給はず、斯程の事を却つて隠密に仕給ふこと、不吟味の至り、如何にとも合點参り難し。我等は君の御厚恩深ければ、忠義に於て私なし。所詮此の段、直に申し上げ、御目鑑を掠めし所を表はすべし、各にも来り給へ」と、袴を着し駕に乗れば、二人は慌てて「何なりとも、仰に從ひ奉る。伊織御前へ出でて、右の通りを申し上げなば、諸役人遁れ難からん。何樣とも、行ひやうを伊織に計らひ候へ」とのよし。伊織望みけるは、「私此の頃数十腰の新身を打たせ候へども、未だ刃鉄を試し申さず。心許なく候へば、此の者の體を以て刃の利鈍を試みたき」よし所望しければ、「ともかくも御勝手次第」と許しを受けて、屋敷へ帰り、今日明日は精進日なれば、明後日殺すべきよし、何れも倫、長刀の新身を數々取り出し、研屋を呼んでねた刃を合はさせ、半助は庭前の梅の古木へ縛りつけさせ、さて其の夜は家老に云ひ付け、彼の二人の横目を酒宴にて大きに饗応し、「誠に今日は我等にも御苦勞、其の上、御兩人の御指圖を背き、さぞ我が儘の至りに思召すらん。然し其の段は若輩に免じ給へ」と、もとより其の家富貴なれば、山海の珍物を調へ、嘉肴美味の數を盡し

て、さまべに歓待しけれども、二人は曾て満足ならず。さて〳〵形に似ぬ情知らず、定めて今は半助も卒且かりに誤ちしを、さぞ後悔に思ふらんと、思ひ詰め果て愛想も尽きて、中々酒も過ぐしたまひけしが、伊織二人が酒盃を取つて、一片の涙を自ら傾け、彼方へさし此方へ進らし、種々馳走の数を盡けし、しながらして興を盡せば、元より伊織石百萬石の領分に並びなき美事、恵質持の牢人なれども懇意の親よりも濃き間の望みなれば、彼方二人も嗔を捨ざれて、いかさま思へば誠につれなきことなれ、其の杯を下さんにも貫はれぬものかと、意趣を捨て守るべき諸も忘れて、正體なく酔ひ臥したれば、伊織は今宵こそと喜びけれど、二人ともに前後不覚の體。家来を呼びて直に其の處に寝かさせ、扨さて今宵は下々までも緩りと休息致し申すやうにと云ひつけ、夜も更け人靜まりて後、伊織は座敷の書院の床に行き、半助に謁を致し、さぞや不慮よりの變面を構へ、定めて情知らぬと理しつらん。嗚呼ここに到りて思ひ我等を大切に思ふ人を憎むべき道理なし。然れども御身の頼み難き趣り、二人その時噂聞て、二人の瑳目の守を破しければ、情をかくべき便りもなし。其の上そなたの心底は、何事も手にかかつて死するとも、露恨みぬ覚悟と見届けし故、心の外につれなく當り、誠に可愛く思はれし者共も、一人の手に結ぶらんと、今のいましめを解き放ち、自ら手を取り脚へ入れ、苦しめ助くべき首尾だうして、我が手にかけて殺しなば、未来に必ず兄弟の是れ受くべきの杯にとて、思ひもよらぬ

ぬ御情に、半助夢とも辨へず、嬉しさと怖ろしさとに身も慄ひ、申し上ぐべき言の葉もなく、涙ぐみたるばかりなれば、「はや夜も更けぬ。」とて、錦繍の褥の内によもすがら本望を遂げさせ、有明の月も傾き八聲の鳥の別れを催するに、殘る詞をきぬ〴〵に包みて、又宵の如くに梅の古木へ縛め置きぬ。二人の横目は昨夕の大酒に二日醉ひして、其の日も漸う日出でて起きぬれども、「斯樣の情知らずに氣遣ひして、我々をつけ置き給ひ、二人に千石餘の費えも、大名なればこそ跡も明かね、たとひ我々が油斷したればとて、氣遣ひ氣の有る若衆ならず。」と、それより二人の横目も次第に氣を怠れば、毎夜思ひの儘に情をかけしかども、我が近習の家來さへ曾て是れを知るものなし。最早五夜に及びぬれば、伊織半助に申しけるは、「伊勢の海阿漕が浦に引く網も、度重なりてこそ世には漏れけめ。もはや今宵が今生の暇乞、明日は首尾よく命を助け、此の國を追放すべし。他國にて奉公稼ぎ、今の情を忘れ給ふなことと、則ち道の助けに一歩三千下帶の縁に含ませ、長き別れの名殘を惜しみぬれば、半助涙を流し、「扨扨有り難き御情、何時の世にかは忘れ參らせ候べき、兎角御手にかゝり相果てば、結句思ひは淺かるべきに、命助かり只今別れ參らせ、末の闇路を思召しやらせたまへ。」と、隠るゝうちにも嘆きを案じて、又いましめの繩をかゝり、彼の梅が枝によりそひける。伊織其の翌日、「今日は半助をころすべし」と鞘をふるはせ土壇を拵へ、槍、刀を取り出せば、家老城刑部いさめけるは、「古より人の執

心を受けて傷をかけぬは格別の事、罪に行ふ閑と云ふもたゞ當時には高き禮しきと云ふ隔てたし、只今彼を殺し給はば、世上の取沙汰宜しかるまじ。それ伊織はたとひ小人たらばとて、情を知る者心なり。彼之の君には色塞り、情なき事は致すまじくも、宰に動けて経てぬと云へば、二人の横目もはなれず傍に、斯々と注進す。伊織がやまれぬ風情して、我は一命を君への恋を大切に思ひ、人を憚りて黙して、投じんと思ひしかども、源三太の嗜みもれし嬉しさに、此の上は如何やうとも、二人の御意に任ふて、見も聞きもならぬやうにせられ、と云へば、伴助がいましめを解き、一両日を送り、此の國へ足向をするに於ては、見合ひ次第打ち捨つべし、と申し含め、國を追放す。此の事殿中に隠れなく、このよ伊織は形に似せぬ情知りぞと、「選り好みの」人もつまでも焦れし男女も、胸を焦がし、取わけては諸の侍衆は、半助伴助にて此の尊き心を感じて、斯程まれなる情知りを、世上に惜しく淡くする由口惜しさよ。上と、下﨟の心の悲しさえ、有りし次第を一人二人に言分すれば、こまごまと漏らしたる其事情いまだ、殊更に語り傳へ、一度彼に迎へれば何れ時に歳の翻れとて、一宗中に非、終には勘當山野へ入り、剃髪の姿の作らしく、伊織にはあはせて、今は半助を尋ねられしが、これまでなく、半助と竟の恋は闇にまれけりや、国後へ立ち越え、伊織が身が宮仕へにきたれり、彼の死跡にて自害を遂げ、二人ながら行方の露と消え果てぬ。後には噂も得度あつて、伊織が情を深く感じて、惜しき小姓

を違背したりしことにて、言の洩れしを後悔したまひしとなり。誠に事は密を以てなる、語は洩るを以て敗る、と、智ある人の戒めけれども、實にさることと覺え侍りぬ。

金玉ねぢぶくさ巻之三　終

金玉ねぢぶくさ　巻之四

富士の影の山

いつの頃にや、さる公家の青侍二人、諸朋輩の中に別けて深くむつまじく、互に死なば一處とこそ云ひかはして兄弟の契りをなしける。然るに一人の青世の無常なる事を觀じ、彼の睦まじき朋輩に語りけるは、「たれ人の世にある百年三萬六千日の光陰は實に軒下流の水の如し。此の間に浮雲の富を願ひ、如露の身を扶くる爲、萬事は一夢なり、誰か百年を保たん。斯かる果敢なき身を名利の爲に使はれ、様々の煩惱に積みて一生を送るこそ本意なき事なれ。我此處に宿道して、限りある浮世を捨て、乾坤一鉢に姿を變へて遍く諸國を修行し、目馴れぬ事を見て、命ある心を慰め、此の度生死を離れ、未來は永く實相常住の都に至り歸りたき願ひ、然れば日頃うらなく語ひ交はし申す也」と言ひけるを、進むる朋輩に語ぐらべり、命ながらへて一度立ち歸らん事も不定なれば、是の形見、折々は、在る間に時を其の日として、一遍の囘向をもなしたまはれ」と言ひおきければ、彼の人聞いて僧は涙を流して、「我とても同じ如露亦如電の假の身なれば、何とぞ我も此の世を背

るべき。いざや偕に發心を遂げ、諸國を同行して未來までも、一蓮託生の契りを違へじ。」とて、二人等しく髻を切り、昔の袂に棲をかへ、一人は名を春知と改め、今一人は春忍と呼びて、何れも道心堅固に行ひすまし、それより直に國々を修行し、先づ東國を殘らず見まはり、奥州の外の濱より蝦夷松前の浦々島々まで悉く一見し、其の年も暮れ、迎ふる春も立ち夏も過ぎ秋風も立てば、夫れより西國行脚と志して一まづ都に上りぬ。幸ひ道の便りなれば駿河國において、富士禪定の志起り、彼の山路にさしかゝりぬ。抑も此の山は、扶桑第一の名山にて、上には法界體性智大毘盧遮那佛鎭座在し、下は放逸邊地の淨土なれば、火の踏合ひ又は心の不淨なる人禪定すれば、樣々不思議なる事多し。然るに二人の道心出家の身は、淨穢不二と心得、素より長袋なれば、別行別火の改めにも及ばず、直に麓の道を分けて、山の景色を詠めば、折節雲晴れて一點の霞もなく、峯は霄を凌いで空に現はれ、道は明らかに見えて天に懸橋を傳ふ。不思議や暫くありて影の山とて峯二つに岐ち、道左右に別れて、何れを山何れを影と辨へ難ければ、二人前後を忘じて麓の原を彷徨ひ、其の日も漸うに暮れぬ。然れども求むべき宿もなく、彼方此方せし程に、とある山陰に杉の生垣を構へて、物靜かに住みなしたる家形あり。窓の折戸の隙より燈の影洩り出でて人の音なひに聞えず。二人の法師悦び、編戸を押しあけて一夜の宿を求めんと內の樣子を窺へば、東屋作の板屋を綺麗にしつらひ、其の風流なる景色得も

開かれん。菩薩の摩頂を開け放しつゝ、三十六萬の化身人、一度の許に集まりて、見る者に草紙をひろげ給ひ入れたるありさま、其の美しさ世に比なく、八十種好に三十二相備はり、遊仙窟の十娘か、雲雨宵の契り、いかでか上界の仙なるべし。斯かる幽の山中に、斯程の美女の住む事、人間とは見えず。其の外には人の往行も見えず、樵子と覚しき所もなし。一人の法師思ひけるに、一定これに世尊の菩薩の化をとなへて道心を崩し、もし愛欲の心を起さば、其の便りを窺ふて我れを魔道へ導く如くの謀をなしつらめ。一大の心を嬲らんと構へたるものなるべし。いざや立てのきて此の方を逃れんといへば、寺あり、いかでかぶ方へ東かへりて、而も其の後は変化ならば、たとひ逢ひたりとも恐れはせじ。其の菩薩の者に逢ひては、一つは修行のけさと見えて、只兩面来の者に副をかはし、面影に逆向けたる人共に菩薩の如きものゝ寄り、我をば諸国修行の法門なるべし、富士禅定の道に赴き、其の上日に行き落れ、路に臥すべき宿もなくして、願はくは哀れを垂れて、一夜の宿を貸し給へと申すに、思ひきや気色もなく、しさらぬ気色にて、誠に諸国修行の者か、世に貴き御身なれば、旅僧の宿をなさせたく侍れども、今宵は主遠く出でて、夜ふけて帰り侍る、留守に御宿まゐらせんも、歸りて尋ねられなば、叱らるゝ時は嫌き由、いとしきさまに、二人の道心気を奪はれて、たとひ誰も化生の者にもあらばあれ、害せられ惜しむべき命にもあらず」、涙を催して不審を

問はんと語しからば故主の御諱を見これにて待ち請け申したさ、由緒あれば、女申しけるは「主も高聞えある人にて、わけて旅人を痛はり侍りぬ。殊に御館に御宿まゐらせ候事、當時にしも此方は苦しからず。左樣に思召され此方へ御入り候へ」とて、一間なる座敷へ請じ、合ひ合はせの襖を立て切り、「それに御休み候へ」とて、文元の見臺に向ひ、草紙に読み入りぬ。扨この邊を逃れて、夜の褥を始め、萬の調度に至るまで、華やかなること、更に人間の類にあらず。燈の隙微火の影より見れば、彼の女の容貌の美しさたぐふべきものなし。さては魔魅變化のわざならんと、心も肝も消え失せ、思ふは如何なる者にかあらん、油斷をせば彼等に眼せられなん、と、護身法を結び九字を切りかけ、二人ともにかしこまりて、不思議のことの現はるゝを今や〳〵と待ち居ければ、漸う夜も更け過ぐる比、またりて、何處ともなく轡の音りん〳〵と聞ゆ。二人怪しみ「さればこそ此の山中へ騎馬の來るべき謂れなし。定めて是れも變化の所爲なるべし」と、氣をつめて窺ひ居ければ、彼の轡の音漸々にして近く聞え、庵の前にて鳴り止みぬ。馬上の人、馬よりおりしと覚えて、草鞋の音がら〳〵と聞ゆ。さては亭主の歸りたるならん、と、後の襖より望めば、年齢壯年の男、色白く器量さかんなるが、紅の鉢巻を締め、白鉢巻の鎧直垂に、白柄の長刀を携へ、あゆみ戸を開けて内へ入りぬ。彼の女立ち出で「今宵の首尾は如何に」と問へば、「嗚呼無念、今宵もかなはず」とて涙を流しぬ。さて座に着き草鞋の足あらを

見し、其の故を問へば、女房、「されば今宵旅の修行者として御僧二人渡らせ給ふを、結縁のため宿し參らせて候。」と云へば、男、「それは何處に渡らせ給ふぞ。」と、云ふを聞いて、二人の法師襖を引き開け、「我々にて候。御留守にて候ひしかども、道に迷ひ日に行き暮れ一夜の宿を申し請け、旅の勞れを晴らしゆるりと休息、辱なき由申せば、彼の男、二人の話を聞いて、「さて／＼羨ましきおの／＼の境界、誠に我等こそ御僧一宿の結縁に因つて罪障を滅し、おつつけ苦患を免るべしと、ありがたく覺え候。」と、二人に饗待しければ、二人の道心、さるにても君には如何なる御方の御事にて、苦患の御身に在はせ給ふぞ、御名を名乘らせ給へ。」と云へば、夫婦ともに涙を押へ、申すにつけて恥かしけれど、我は昔の曾我十郎祐成、これなるものは大磯の虎、二人が御魂は裾野が原の露と消えしかども、執心は數百歳の苔の下に、讒言邪淫の罪に引かれて、斯く修羅道の苦しみを受けはべるなり。それにしても我が弟の五郎時宗は、幼少より箱根に住みて、毎日法華讀誦の功力に引かれ、今人間に生れ歸り、甲州信州二ヶ國の主、武田晴信入道信玄と云はれ、然れども兄十郎亡の跡に因つて前生のことを識らず、願はくは御僧此の事を傳へて、追善を爲し我が跡を弔はせ、成佛を得しめ給へ。」と、則ち印に金の目貫を片し取り出し、二人の僧に與へて、「最早夜もいたう更けぬれば、暫くまどろみ勞れを晴らしおはしませ。」と、四人一處に假寝して、松吹く風の音に驚き、枕をもたげて

邊を見れば、四阿屋作りの館と見えしは、枯野に殘る薄となり、主の姿と思ひしは、苔蒸したる石塔の前に、二人茫然と起きあがりて、富士山よりの下向道に直に甲州へ立ち越え、即ち目貫を以て右の通りを申し上げ、これは、信が期せぬ對面ありて、懷中より目貫片し取り出し、今の片しに合はせて見れば、金も模樣も一具して、分毫も違はざれば、信玄涙を流し、彼の幽靈の追善の爲、千部の經を書寫して、千僧を以て供養し、其の後彼の二人の侍をもてなし歡待し、都へ送り歸されぬ。これは信玄ほどの物に動ぜぬ大將の、何とて目貫の一具したればとて、世に類多き證據を以て斯くまで信ぜられしぞと、其の因縁を尋ぬれば、此の人誕生の折節、左の手を握り詰め、いろ／＼開けども終に其の指延びず、漸くも七月目にいたりて、おのれと始めて開け、内に此の片しの目貫を握り居給へり。何とぞ仔細あるべしとて、深く此の沙汰を世に祕し給ひしが、今の目貫と一具せし故、疑ひもなく證據に用ゐ給ひしとなり。斯かる奇特を思へば、若有聞法者無一不成佛の例、有り難かりける事どもなり。

若狹祖母

若狹、越前、加賀、能登、越中、五箇國の間を徘徊して、住所を定めぬ一人の祖母有り。歳五十計りに見えて、頭は蓬の如し、眼中は青く光りて、齒は一枚も落ちず、歩む事速うして龍馬も及ばず、

力強うして頭に一石の米を戴き、走る時は飛ぶ鳥を抓み、怒る時は孤狼悪獣も怖る。さればとつて不断山中に住み人と交はらず。數百歳生きて己が年を知らず。多くは奥山に住んで形を人に見せず、寔は里近う出でて[illegible]人あり、[illegible]人を見ず、人は[illegible]怖る。[illegible]にもあらず、昔し人に逢へば懐かしげに見遣り、五年、十年に一度づゝ人に近づいて物語する事あり。古き世の事を問へば、昔は越路に住むと見えて、[illegible]太平記時代の[illegible]、而して金崎の落城、一宮親王、並に新田の一族[illegible]大宮[illegible]比類なき[illegible]、[illegible]物語す。依つて世の人[illegible]老母のなれる果てと云へど、さにはあらず。近頃越中の山[illegible]、[illegible]山中にて此の姥に逢へり。山伏呼びかけて暫く物語し、「御身は[illegible]、[illegible]我も其の[illegible]、唯自然と[illegible]、[illegible]、愁へもなく、樂しみもなく、慾もなく、怒りも起らず。一夜に[illegible]行[illegible]、[illegible]通力[illegible]住んで、一人の[illegible]此の[illegible]出で浦に釣を垂れ、毎日我が家へ立ち寄りて、父と偕に[illegible]、世話を離れ、月の色も一入[illegible]白く、其の上此[illegible]、[illegible]山中へ行きて見

おば、世に面白き風景、山の景色、此の國の内とは見えず、宛然畫繪に書けるが如し、岩は皆翡翠の石にして、五色の光耀へ輝き、草木は皆唐木にして、樣々の目覺ましき花開きたり。樓閣の欄間より異香風に和して薫り合ひ、遠き音は音樂の調べに似て、さながら仙境に異ならず。暫く行きて茅萱の住居の内に一人の嫗を招へ、喰き種々の枯竹を以て造てたり。其の輕らかなること、有馬皇子の曲禁の部し、座敷へ請じて酒を勸め、さまざまの山海の珍菓子を錦に盛り、最に綺麗に住みなしたる有樣、人間の境界とは見えず。菓子と含みては口中に溶け、酒は天の甘露の如し。暫くありて肴に、魚肉ない。とて三寸許りの美しき嬰兒の死骸を組に載せ、見る前にてこれを料理し、膾の鉢に盛りて差し出せり。我は此の仙神仙の類にはあらず、鬼神變化の所爲ならんとて、恐ろしき限りなく、彼の肴には手もかけざりしを、世に類なき珍味なりとて、一切三切ほどはさみて差し出せば、聞くも彼が心に背かん事恐ろしくて、是非なく鼻紙へ受け、喰ふ顏して懷中へ入れ、暇を乞ひて麓に見送られ、それより足に任せて迷ひ歸れり。若しや跡より追駈くる事もやと、餘りの凄まじさに、途にて懷中の肴を披くる間もなく、漸う我が家へ歸りて氣を取り失ひ、暫くあつて性根つき、彼の肴を捨てよとて、詮索せられしに、我幼少の時にて、何心なく鼻紙の枕許にありしを引き散らして肴を見付け、一切其に喰ひ侍りぬ。其の後彼の翁も再度見えず。餘りの不思議さに人數多語りしが、彼の山中に入りて色々

尋ね求むれども、左様の怪しき所はなし。されば暫く造化の巧みを奪ひ得たる仙室にてやありけん。彼の小堂の花紙と見えしは、人魚と云ふ魚の肉なるべき由、さる博学なる人の料簡いたされしとぞ。我が父之れを聞くが、食することは能はず、我島の男之れを食し、壽命數百歳を經たれど、全く道果仙術の類にあらずとぞ語り傳ふ。誠に人魚は不老不死の良薬とは謂ひ傳へたれど、外に是れを食したりとて長生せる人を聞かず。されば其の異常の長命なる事も遥かには信じ難し。昔より仙人とて不死の人ありと言へど、何處の者如何せしに書き置きけれど、是れとて其の人とて長生の人も出でず、世界に繁昌の人は皆有限なる者なり。無常の嵐は神仙も滅ぜず、生を享けし程は貴賤ともに免れずして、五蘊の形の破れぬと云ふ事はなし。古より誠の仙人と云ふは全く修の長生するを云ふにはあらず、人其の徳を積して、後代まで名の朽ちぬを誠の仙人とす。堯、舜、禹、文、武、周公、孔子、釈迦、達磨、則ち之が聖の王、其の外孫子、太公望、張良、諸葛孔明、是等の文武仙と云ふ。其の人等は在世より數千年を經ぬれど、今に至るまで其の美名朽ちず、皆人仙人の命を永う生きるは、大きなる僻事なりけり。

金玉ねぢぶくさ之四 終

金玉ねぢぶくさ巻之五

血達磨の事

智仁勇、忠は士の守る所なり。勇に大勇あり小勇あり、忠に節あり義あり、其の可なる所をえらんで死すべきに死し、小恥を忍んでのがるべきをのがる、是れ大勇なり。又忠節なり。命を輕んじて人にはづかしめを受けず、強きに誇つて弱きを凌ぐ、是れ血氣の勇なりとかや。節を捨てゝ義を守り、仁を離れて勇をとるに、智者のせざる所なり。しかれども武士は武威を耀かして、人を制し亂をしづめ、國家を治むる役なれば、長劍を横へ面に勇を張ること、是れも出家は出家の役にて長袖を着るが如し。此の道理を識らず、命を輕んじ死を懼れず、僅かの義理に人と討ち果し、祿の代りに報ずべき身を私の意趣に失ひ、君の御用に立たざるは、金を土に換ふるが如し。されば細川幽齋公の御時、さる浪人兄弟、いづれも器量盛んなる仁物、當御家を望みしかば、ある日御前へ召し出され、「汝等二人武藝は如何やうの事をかする」こと、御尋ねありければ、「何にても事に臨んで人の得致さぬ事を仕り、御用に相立ち申すべき」よし申し上ぐる。幽齋二人が骨柄勇鋭なるを見給ひ、頼もしく思召し、

兄に四百石、弟に三百石遣はされしが、其の後江戸の大火事の節、御上屋敷へ移りかゝり、武蔵鐙に書きたる如く、大風烈しく猛火煙を巻いて防ぎとめられぬに相極まり、大事の御用の道具は悉く除けんに、如何したりけん、別して御秘蔵の達磨の絵の懸物一幅、御殿の床に懸りしを、其の儘にて取り忘れ、殊の外惜しみ給ひ、御機嫌悪しく見え給へば、近習の面々手足を握り、今未だ御殿へは焼け掛り候はねども、常人の及ばぬ御用を達すべき由申し罷りあり候へば、彼の新参者二人に仰せ付けられ、片時も早く取りに遣はされ然るべしと申し上ぐる。幽斎げにもと思召し、彼の兄弟を御前へ召され、今一度御屋敷へ行き、焼け候はずば取り来るべし。自然御殿へ火掛りなば、必ず身を顧るべきと由、二人は上意を畏まり、息をはかりに駆け付けて見れば、只今御殿へ燃え付ける体。後の門を乗り越えて、火煙の中をくゞり、やう／＼御殿へ入りぬれば、屋根は一まいに猛火なれども、未だ下へは火もうつらず、彼の達磨の絵は恙なく床にありしを、早速外してくる／＼と巻き、羽織に包み出でんとすれば、最早十方焼け塞がり、つひに二人は焼け死にぬ。火鎮まりて後、匆々灰を除けさせ、彼の死骸を見せ候へば、兄が手にかけ弟の首を討ち、咽喉をくり腸を引き出し、彼の懸物を羽織に巻いて其の跡へ押し込みつゝ、己は腹を十文字に切り、其の口を引きあけ、弟の骸を我が腹の中へ押し込んで、抱き付いて死し居たり。懸物を引き出し見れば、よく／＼羽織に巻きし故、絵には血

ものはれりしが、左右上下の縁少しく、血にそまれり。誠に二人が潔き行爲、武士の鑑なるべき働きなれば、殊の外御感ありて繪よりも深く惜しみ給ひ、血に染みたる懸物を、態と御修復も加へられず、彼の兄弟が上下著て、此の繪を守護する體を繪像に寫させ、倶に三幅一對とし「細川の家の血達磨」とて、御家の寶物となり、今に御祕藏なさるゝ由。戰場に先を驅け死を爭ふは、もとより武士の常なれども、事急なる猛火の中にて、其の繪を救ひし働きを念へば、智あり忠あり勇ありて、漢の紀信が高祖の爲に滎陽の圍みを解き、楚の項羽に燒き殺されしも、なか／＼是れには及ぶべからず。

現業の報

佛善巧方便して、六種の衆類を度し、衆生に三世の因果を信じて、捨惡修善の志を爲す、誠に佛法流布の御代とて、老いたるも病者も幼きもかたはも、疊の上にて定業の壽命を果すは、有り難かりける事どもなり。世に生死の掟なく、人に因果の理なくんば、強きは弱きを凌ぎ、長きは短きを嘗き、盛んなるは衰へたるを侮り、智あるは愚かなるを欺き、互に爭ひ互に奪ひ、世は皆偸盜の寄合にして、正直に商ひをもし、職を營み、耕作を爲す者はあらじ。農工商のそれ／＼の家業を營み、妻子を養ひ親へ孝行を盡し、他人を敬ひ己を慎み、欲しけれども盜まず、惜しけれども手放して、道に背け

る念へ旦は今、或は蒼鷹に推し、江戸へ道は半を踏み過ぎ、兄弟の[illegible]に積んで某縁まで下す由ありて、遂の杖一枚にて僅かに凪ぎ目、皆人固くを頭の戀を抑へ、兄弟をせめに因れり、薬種の数へ立ち、天下豪傑にも、忽ち女房をなさず、因果とぞなり。されば兄弟の仲は、人皆言ひて互に疎斥するが如し。去んぬる頃、平田紀州濱野に入道隠保國と云ふ名ある商門、貫子一人有つ、然も男子なりしが、頭か心に入らずありけるにや、十三の年出家しけるを、未だ幼少なれば、師も如何やらむ不孝ありとて、勘當とはお許行かず、離爾し、其とても行脚を為させたまへ、我をも夢に志望を叶へ、而後は渡邊なる心も止めさせて、千部の世間をも勤出して、兄弟いかやうの事なりとも、親達の御意を背かせ申すまじと、由、一門ゆへの人と説きけれども、彼の商門貸し、承引の色なし、終に他人を養子にしてそれに跡を譲り、一瞬を離ち、大徳寺に法體をとて浮世の世話を遁れ、終に菩提心深く、不動寺下向を仕とし、もとは江戸に縁に住みけれとも、猶ほ人のよきまの果報と人是れを云ふ、然るに実の富を受けし親子を、暫くは興隆寺に隠れ、且つ等しかも、離門寺の外護に[illegible]ひとりか江戸へ下りて、暫く江戸は勝負の面白きまで商賈を相持ち、誠[illegible]やうにと親心の僅かなる[illegible]を求めて江戸へ下し置きぬ。然るに此の者成人するに随ひ其の心に背き、断じ一生勘當をうけて不孝の罪を消し得ず[illegible]、終に江戸に一用家を建て、邪曲に[illegible]、良き法師となりて、[illegible]

に、さまん〴〵詫事の文を上せ、佛は父母恩重經を説き給ひ、聖人は五刑のたぐひ三千、罪不孝より大いなるはなしと、戒め給ふ。私幼少にして御機嫌に背き、不孝の身となりし事を後悔し、せめては一子出家すれば九族天に生ずとかや承り、棄恩入無爲、眞實報恩者の身とまかりなり、二親の菩提を訪ひ參らせ、御恩を送り參らせ候へば、あはれ御勘氣を御赦し、老少不定の娑婆にて候へば、御存命の内今一度對面仕りたき由、經文を引き神妙なる文ども、度々のぼせ、をり〳〵は、御明にしたまへかしとて、文に少しづゝ實を入れても送りしが、如何したりけん此の法師、江戸にて仕あはせ良く金銀をため、京都へ綸旨を頂戴に上る由にて廣島へ來り、叔父伯母從弟諸親類に對面すれば、何れも悦び、兩親も最早老年、二人共に恙なきうちに、片時も早く對面させたく思ひしに、よき折節の御のぼり、さだめて親達にも久々にての對面なれば、さぞ滿足に思はるべし。」とて、禪門へ其の通りを云へば、禪門にがにがしく存じ、「思ひもよらぬ事、縱ひ出家となり、如何出世致し候とも、昔彼を勘當せし時、今生にて再度對面仕るまじき旨堅く佛神へ誓ひを立て置き候へば、思ひもよらず。」と申せしを、一門は云ふに及ばず、鄰家の町人まで挨拶に入り、「それは餘り堅過ぎたる御分別、その時は漸う十三歳の事なれば、善いが善いにも惡しいが惡しいにもたたぬ、東西不知の幼子なり。今不孝の心を改め、殊に出家して剩へ正しければこそ、自身出世して長老にまでなり給ふ。況んや出家は佛の形

なれば、御子を手に持ち給ふ事、此の上の悦びあるべからず」是非とも不孝を赦され候へ」とて、理を盡して親父を意見ししかど得心せざれども、無理に抑へて彼の伜を呼び寄せ、親子對面の杯をさせければ、禪門是非なく父親子の緣を結んで、流石恩愛の因果なれば、顏を見てから今迄の心もやみ、四五十日留めてつまなく歡待し、其の後彼の法師は又別れて江戸へ下りぬ。然るにそれより百日餘りを經て、彼の禪門休閑を大事の召人の由、江戸より御尋ね遊ばされ、夫婦ともに江戸へ御召しなされ候へども、何とも合點が行かざれば「定めて人違へにてあるべし」と、近所の者も沙汰し、勿論一門親族は猶は以て科の品を知らず、國に於ても不審ながら、御詮議を遂げられ「身に覺えなくば、江戸にて首尾よく申しわけ仕り、歸り候やうに」とて、夫婦共に嚴しき籠輿に入れ「大事の科人なれば」とて、宰領も數多付けられ「自然道にて煩ふ事もや」と、醫者までを添へ、道中は宿次に人足五十人宛つゝ、所々の地頭より與力同心數十人にて、其の領分を通る間夜の召人を警護し、其の嚴しきこと言ふ斗りなし。一門親族此の體を見て「是れは不慮なる災難、さりながら天道誠を照らし給へば、少しも過なし給ふな。科なき段を申し開き、やがて芽出たく歸り給へ」禪門「いやさにはあらず、江戸より道々召さるゝ事に、何れ辛酸のあるべきぞ。思ふに彼のいつぞや上りし法師が、勘氣を許し、親子の因をなしける故、定めて天下に並びなき程の大惡事を仕出し、其の災が一類に及び、

親にも見放されねばなるまいと覺えたり。江戸へ下つて萬に一つも助かりはせじ。これが各々への今生の暇乞、必ず惜み給ふべからず。とても我が身は殺さるゝ命、いづれもへ懺悔の爲、因果の道理ののがれ難き、僅かなる懺悔の話を聞かすべし。是れにて我が所行を、各にも悪心あらばやめ給へ。我若き時、惡性の數を盡し、大坂にて親より讓りの金銀家財を殘りなく盡しあげ、諸親類にも疎まれ果てられ、身の置き所もなきまゝに、友達共のあはれみにて、僅かの路錢を用意し、一先づ身上稼ぎの爲江戸へ下りて、十年餘りの光陰を送りしが、其の内に仕合わろく、一錢の貯へも出來ず、餘り故郷の戀しさに、今一度大坂へ歸りたく、路銀なければ中仙道より無心をなして上りしが、信州の山中において、今俗にいふ高野聖の商人法師、東國へ下り荷物殘らず賣り仕舞ひ、只今都へ歸ると見えて、あまたの笈を道の傍に下し、前後も知らず臥し居れば、我が心に悪心起り、誠や此の商人聖は大分の荷物を仕入れ、國々を廻つて、都へ戻る時には其の金を肌につけて居る由、我此の儘にて大坂へ歸り、元手なければ何を商ふべき仕覺もなし。いざや此の法師を殺し、彼の金を奪ひ取らんと前後を見れば、折節二町三町の内には往來の人影も見えず、良き首尾なりと刀を拔いて枕元に寄り、既に殺さんとせしが、よく〳〵思へば盜みは不義の第一、其の上に人を殺し、剰へ出家と云ひ、殊に罪を重ね、重罪に五逆を積んで、報ひ長者になればとて、未來の程も恐ろしし。よしや大坂へ歸り、たとひ

袖乞をせうとも、今生は僅かの間、それからそれまでの娑婆と諦め、抜いたる刀を鞘へをさめ、此元を立ち退きしが、よく／＼思へば、江戸に十年餘の星霜を送り、大坂にては古の親しき友も疎うなり、諸親類とは久しく因を斷ちぬれば、折角此の度のぼりても、立ち寄るべき心當の宿もなし、いやいや是れは天の與へ、切り殺して錢を取らんと、又立ち還り法師を見れば、如何にしても後生の程の怖ろしさに、念佛申し惡心をやめ、それより十町ばかり歩みて、道すがら思へば、どうでも此の願を遂げないでは故郷へも歸られずと、又引き戻す途中に、よしや未來は奈落へ落ちなば落ちよ、不便なれども彼を殺し、是れを元手に稼ぎ貯し、追善にて此の恩を送り、未來の罪をも輕くせんと、又立ち歸り樣子を見れば、未だ法師目をも醒さず、前後なく臥し居ければ、遙か脇より目をふさぎ、走りかゝつて切り付けしに、あやまたず大袈裟にかゝり、乳の下まで切り下げたり、其の時法師むくむくと起き、眼を見ひらき一目睨みし其の有樣、身の毛もよだち五體も竦みて、絶え入る程に怖ろしかりしが、斯に深手なれば動きもやらず、見て居る内に息絶えしかば、立ち寄りて懷を探り、三十五兩の金子を奪ひ、大坂へ上り安堵を構へて、商ひも仕合よく、段々に稼ぎ貯して、今の女房と夫婦の語らひを爲し、一人の子を設けしに、彼の昔道中にて殺せし法師の形に少しも違はず、成人する程よくよく觀ければ、我因果にて彼の法師の子と生まれ來たることを知り、恐ろしく思ひし所に、十二の

歳悪さなしを呵りければ、小さき眼を見開き我を睨み付けたる有様、彼の聖の最後の睨みたるに少しも變らず。其の怖ろしさ云ふばかりなく、追付我が命をとらんことを恐れ、何とぞ親子の縁を切りたく、勘當を致せしかども、因果なればのがれなく、勘當を赦すや否や、今斯様の仇を爲せり。先日對面の時、成人の像を見れば、法師となりて微塵も違ひし所なく、古殺せし聖なれば、我二目と得見ず、眼を塞いで逢ひしなり。此の度江戸へ召さるゝは、待ち設けたる因果の報いと、覺悟を極め下りしが、案の如く、謂ひしに違はず彼の法師が重罪を犯し、三族を御成敗にて白髪首を討たれしとなり。

金玉ねぢぶくさ巻五　終

金玉ねぢぶくさ 巻之六

里見義弘武を悟りし因縁の事

人は己を知つて出ず入らずに事を行へば、萬事に於いて過ちなし、出過ぎたるを奢りとし、足らざるを無禮とし、分際に相應せねば、過ぎてもよからず、足らぬも惡しし、先王の法服にあらざれば敢て服せず、先王の徳行にあらざれば敢ておこなはず、先王の法言にあらざれば敢て言はずと、孔子も誡めたまひしなり。一年安房國里見義弘鄰國の敵と戰ひ、後に和睦して、其國の會盟を學び、互に國境へ出會ひ、向後意趣あらざる旨を誓はんとす。我に劣らぬ郎等四五人從へ、既に城下を離るゝこと三里にして山あり、谷を隔てて此方なる岨道を通るに、何處ともなく臥長十丈ばかりの大蛇一疋現はれ、大きなる牛を見付けて、終に追つつめ引きまとひ、唯一口に飲みぬ。人々驚き「あら凄まじの有様やと、暫く馬を控へて眺め居ければ、彼の大蛇牛を呑み仕舞ひて、下なる谷へ下る。ころがるに從ひ大蛇の背次第に縮まりうなり、とうとう谷底へ落ちては、やう／＼一尺許りの小蛇となり、草叢へ隠れんとす。然るに空に鳶一疋舞ひしが、此の蛇を見てさつと下り、蛇を引つかけ、二三間許り彼方なる





辻堂の屋根にて、忽ちに引き裂きくらひぬ。人々驚き、「是れ唯事ならず」と、不思議の念ひを爲しければ、義弘申されけるは、「されば此の大蛇の、始め十丈の形の時は、大きなる牛をだに呑みしが、變成諸形の通力は得ながら、今一尺の小蛇となりては、鳶をだに制する力なし。されば蛇のみに限るべからず、人も大身小身の品あつて、身代相應の威を輝かし、大身なれば大身の力を用ゐ、小身なれば小身の力を盡す。是を以て、大象兎徑に遊ばず、鸞鳳燕雀と棲を同じうせずと云へり。しかるに我今日會盟なればとて、小勢にて敵に赴く、是れ大蛇の小蛇となつて叢に遊ぶがごとし。定めて氏神八幡大菩薩の武運を守り給ふ御示現なるべし。若し敵と參會して、旦事の變あらば、小勢にて如何すべき」と、それよりいそぎ取つて返し、再び會盟に出でられしとかや。眞に大名は大名の行儀を崩さず居る時は邦境を守り、行く時は行列を備へ、軍には紀律を示し、陣には隊伍を調へ、武を張り威を輝かして、盜賊を押へ、亂を鎭め、其の國を安泰にしてこそ、其の家は久しかるべし。若し己を識らずして、武家は公家の眞似をし、百姓が侍の眞似をすれば、兩方共に禮に叶はず、終には家を失ひ身を滅ぼすに遠からず。兎角出家は出家、町人は町人、山伏は山伏、醫者は醫者、とたれ〲の風俗を守り、聖人の掟に背き給ふべからざるものか。

箕面の瀧は辨財天の淨土

攝州箕面山は、役の行者の開基、本尊は辨財天女、山は峨々として巻石峙ち、瀧は滔々として布を晒せり。行者貧窮無福の衆生の爲に辨財天を祈り給へば、八臂の天女出現まし／＼、江州竹生島、鎌倉の江の島、安藝の嚴島、紀州の天の川、とともに日本に五ヶ所の天女鎭座の靈地なり。抑辨財天の利益をたづね奉るに、本地は十一面觀音垂迹を宇賀神將王とあらはれ、福德、壽命、辨財、愛敬を司り、二世の悉地を得しめたまふ。十五童子三萬六千の眷族有りて、この尊信心の衆生を守り、貪慾、飢渴、障礙の三惡神を降伏まし／＼、惡事災難を拂ひ給ふ。こゝを以て、此の天信仰の輩は、軍は寶棒の御手を借り、富貴は金財童子の御請取り、眷族は從者童子の請取り、酒屋は酒泉童子、百姓はたうもう童子、智慧は印鑰童子、舟持は船車童子、問屋は牛馬童子、遊女申樂は愛敬童子、學問手跡は筆硯童子守りたまふ。されば士農工商の輩、何れか此の天の利益を蒙らざらん。ここを以て一度此の尊に歸する輩は、定業の貧を轉じ、當來にては無三惡趣の御願を蒙る。凡そ諸佛悲願まち／＼なれども、濟度利生の方便、わけて著しきは大梵光明如意滿珠福德天地無上虚空天滿自在天女十五童子の御本誓に留まれり。されば弘法大師の寶文にいはく、諸佛の大事は與樂を本とし。

年中の間ある所は福徳を得たまふ、菩薩の六度も宇賀の福田に発り、菩薩の万行も神王の秘蔵より出でたりと、況や世の中の誰か是れを仰ぎ何れか是れに帰せざらん。爰に津の国神崎の住人矢野門四郎右衛門と申しし人、親代より商ひを業とし、万の心を尽くし、次第に住みはせ世に落ちぶれ、何とぞも一度富貴を願ひ、生業福徳の御前に帰依し、毎年正月七日の富に歩みを運び、終に一の富に突き当りぬ。是れより猶信仰の首を傾け、同年の月下旬に参りの為、一家の男女残らず参詣し、神前に詣で、それより奥の院へ登れば、草木の景色まで外に異なり、山は貴く、んで過去の葉を拾ひ、滝は白布に似て水勢をなし、眞に奇なる風景なり。少時上の滝壺の辺り彼方此方へ、草を分け遊びしに、如何はしけん当年九歳の女子一人、滝壺へころび込み、それをと云ふうちに、さかまく水に舞ひ入れられて、姿も見えずなりにけり。夫婦大きに悲しみ、里遠ければ人を頼みて死骸をたづねさすれども、其の内には千尋の底へ沈みつゝ、再度姿だに見えざれば、夫婦上下せん方なく、泣く泣く下向して、扨も大きなる富貴は、たとひ御利生にて如何ほど富貴になるとても、子を失ひて何かせんと、固く歎き、夫れより無常の心を起し、誠に老少不定の習ひなれば、妻子珍宝及王位、臨命終時不随者と心得、富貴の望みもやみぬれば、自ら家業も怠り、次第に身代衰へ、家も宝の田地にも離れ、たゞ少しの人類もなく、その事に住みはせ申して、貧き

の内に光陰は移り、いやしくも七年の星霜を経たれ。[illegible]
に在る心を起こし、天然自然の理をも[illegible]、明暮修行の功を積みたれ、今日は七回忌の[illegible]
て、[illegible]心ばかりの追善を[illegible]
[illegible]

より、扱も結構なる門へ行き、窓には瑠璃の簾を張り、地には七寶の砂を敷き、黄金の山金の堂塔、紺青の川の其上に、白銀をのべたる欄干の橋数百を渡へ、錦繍の帆を巻きかけ、珊瑚珠の車に瑪瑙の輪を補ひ、琥珀の牛馬に掛け、荘厳美々しく、数多の宝物つき給て、「是れは汝が親の許へ送り届くる宝なり。然れども汝が親の過去の貪着強き故、今少しの信心の功を積み、宿業をはたき尽させ、追つつけ授け與ふるなり。早々歸りて此の通りを親に告げよ」と宣ひしが、歩むともなく飛ぶともなく、正山廻に歸りたり。自ら我の家を離れ、何處へ歸り申すべきやと云へば、則ち人不思議の思ひを爲し、彼の土中を掘りて見れば、土三四尺程は土濡れ、それより下は土堅く、何處へ通ぜし道も見えず。扱段々に仕合宜しく、願ひ求めして買入れ田地の、賣りたる物は其の跡より、耕作をすれば年に水旱の損へなく、一家九族の者皆、後の末も長命にて、次第に富貴の門繁栄なり、病患悪事災難なく、子孫繁昌の家となれり。眞に信心堅固なれば、千質の福者も容しからず。皆人我が宿業の悪しき事を知らず、そのまゝ願ひ叶はざれば、却つて疑ひを起し信心をさます故、御内證にかなひ難し。富樂すと云ふ事は、自業をはたかせ、或は火難又は大損、一度に過去の餘罪を盡させ、それより富貴を與へたまふ、有り難きわけある結構なり。

山本勘介入道五徳の事

人の習ひ、其の貴賤の高下に分れたる時、既にそれ〳〵の天命を受けたる上は是非もなし。其の中に如何なる人は云ふに及ばず、譬ひ愚かなりとても日頃能く嗜みて、事に当つて俄に動ぜぬは其の身の一徳なり。武田晴信の家臣、山本勘介入道道鬼、在城せし留守に、土蔵の囲爐裏に据ゑたる五徳、己と動き出でて、一家の者を驚かす。其へ人を走らせて、道鬼に其の通りを告げければ、道鬼使に向ひて云ふ、予が帰るまでそのまゝにして置け。五徳の事はよくある事にて、先づは知らぬ事なり。必ず沙汰なしにして、下々にも知らす事なかれと云ひて返しぬ。其の身は信玄の前にて、さしたる用事もなかりしかど終日物語して、漸う暮に及んで屋敷へ下り、彼の五徳の事は尋ねもせず、段々家来の出でて語るを聞き、其の動きし五徳は如何にもやうも知らず、さまで騒がずにて其の夜は明しぬ。翌日非番にて何方へも出でざりしに、又五徳動き出で、今日は昨日に増り、二つ並びし五徳二つともに動きて、後には囲爐裏より這ひ出で、其の辺へ灰を散らし、不思議なる有様云ふばかりなし。道鬼此の体を熟と見て暫く思案を廻らし、奥より唐銅の五徳を取り出し、其の動る五徳とならべ置きけれども、是れは静まりて動かず。家来に言ひ付けて、彼の動きたる鐵五徳を取り寄せて、右の五徳と並べければ、是れも同

然と動いて、三つ共に暮に到るまで踊りやまず。入道篤と思案して打頷き、右の五徳を板に並べて、奥の座敷へ直させければ、三つ共に忽ち鎮まりて動きやまぬ。扨それより國中の山伏共を呼び集め、「若し何れもが行力にて、是れを祈りとめ候事ならば、疾く致させよ」と達ねれば、何れも己を顧みて請合ふ者なかりし處に、遙か末座なる山伏一人進み出で、「私事師匠より傳授の密法にて、只今まで度々の事を祈り、其奇特を顕はしたる事御座候」と申す。「然らば其方祈りて申すやうに」とて、座敷に留められ、すはや室の間四角に壇を構へ、肝膽を砕きて祈りければ、誠に行力の奇特と見えて、それより五徳も少し鎮まりぬ。道喜やがて彼の山伏を縛らせ、「汝何とて我が屋敷の五徳を動かせしぞ。有りやうに白状すべし。若し偽りを言ふに於ては、たゞ今これに殺害すべし」と、責められて、山伏申しけるは、「全く外の仔細は候はず、斯くの如くに五徳を踊らせ置いて、私が祈りての後は、誠に奇代の事と思召し、向後御帰依に預り、御領分の山伏の棟梁となり、一國を祈禱旦那に引請け、富貴心の儘に成らん事を欲し、斯くの如く巧みしなれども、信玄公の御城内へは聞えもなく、君には御家老の御事なれば、御城内も同然に存じ、料理人齋藤左兵衛を語らひ、よく馴れたる磁石の我が天作、はさみ、石の桂にて五徳を動かせ、我等祈禱致し候内に、彼の磁石を取り捨てさせ申す様に相図を極め、其手並の施しは事成らざる内に方便現はれ、却つて御前にも御詮議にあひ、其上は

事も往古になり、楚國に崇敬せられん事も叶はず、一つ〳〵の謀を引き出し擒はれぬることあめの[illegible]に白状せしかば、道善が一身の石の缺を取り出し、其の石を道士にしてはたきか、[illegible]せし内五尺の石を取りてみるに、[illegible]。さるにても不思議の石なることとて、其の[illegible]し五色を取り出し、二尺の石を[illegible]、動けば再び上つて我が右へ飛びつき、力を入れて[illegible]。五色の石を以て[illegible]、道善が五徳を[illegible]、石の性は[illegible]、五徳を[illegible]し、ゆく〳〵[illegible]。道善が[illegible]に向ひて定めて[illegible]に從ふ[illegible]。[illegible]、故を以て悪事に入り、味方の[illegible]へ窺ふなきべし、其直に白状すべしのこと、再三考問に及びしかども、別の仔細もあらざる故、誠に[illegible]を以て我を[illegible]とせし事、[illegible]の網に大寶を待ち、[illegible]とするに至し、然れども、[illegible]と云ふには、常に小事にも油斷すべきにあらず、とたれまた用心を[illegible]、[illegible]は死罪と[illegible]、これよりも國中には[illegible]、一所に[illegible]、是れより道善が[illegible]、いよ〳〵軍も名高く、鄰國の人も懼れ侍りぬとかや。

金玉ねぢぶくさ卷之六 終

金玉ねぢぶくさ 巻之七

豊州専念寺の燕の事

烏啼が悪ければ、不祝儀の前表と忌み、鼬が啼けば火に祟ると嫌ふ。其のほか鶏の宵鳴、犬の長吠、何れも人の忌み来りし事なれば、さだめて是れも仔細あるべし。片田舎にては「燕の巣かくる家は、其の年火難にあはず」とて、若し例年巣くふ家へ燕の来ぬ年は、いたう氣に懸くる事なり。人はへ明日の身の上の災難は知らぬ事なれど、彼は未然に是れを知つて用心深く、火事にあふべき家へは一年まへより巣をせぬとかや謂ひ傳へしが、實にさる事もあるべし。豊前國小倉の専念寺といふ禪寺に、毎年来つて巣をかけ侍りしが、ある時住持燕を見て「汝等鳥類なれども、我が寺に来つて巣をかくること多年、然れども其の恩を思はず、子供成長して一度飛び去つて後、又来る事なし。但し世話に汝等を、常世の國より来り、また常世の國へ帰ると云へり。されども是れも信じがたし。若し汝物知ることあらば、重ねて其の國の印を取り来り、我が疑ひを癒せしめよ」と、戯れて謂はれしに、誠是れを聞き入れぬと見えて、翌年また来りし時、直に持佛堂へと飛び行き、佛壇において羽搏きし、

何やら丸き物を落せしを、取り上げて見れば、草木種の一つにて、物種と見えたり。人々集まりて評議すれども、終に日本の地にて見馴れぬ物なれば、何といふことも知らず。土地を選んで此処に蒔置きければ、芽を出して何日うか／＼と延び、枝葉ほこり蔓りて、瓜の如くなる菓を結べり。日を経て見事によく熟しければ、「古へ橘の種も常世の國より来れり、是れも定めて仙家の菓の類なるべし。いざ破つて賞翫すべし」とて、人々数多集まり、一つ二つ破つて中を見れば、中は石榴の如くにて、細かき袋數千に分れたり。皆不思議に思ひ、見て居る内にはら／＼と離れ、小さき小蛇と化して、おのれと動き出で、縁に満ち座敷へ這ひ出で、驚くべきやうなりし。庭に大きなる穴を掘り、彼の木を根より引き抜いて、彼の穴へ埋め、其の外の蛇どもをやう／＼集め、取り盡して一所に埋め、其の上へ火を焚き、あくをかけ、重ねて這ひ出でぬやうに留めぬ。實に、燕の齎す常世の國と云ふは、仁義を知らぬ南國にて、蛇を捕りて食物とし、國中に小蛇多ければ、燕は是れを怖れて日本の地に來り、子を雛立てて、秋の頃に歸ると、俗説に言ひ傳へしも、斯様の例を思へば疑はしからず。されば今の燕の此の種を取り來りたること、燕の保持の爲めに、とても成長して其の國へ歸るものを、子ばかり此の國にて畜すと云へば信じ難し。何れ常世の國より來ると云ふ證據を取り來れりと云はれし詞を聞きし人あれば、「我が國にては、蛇に子を捕らるゝ故に、益々此の國へ來り、御厄介ながら御寺内を

借り、子を育てて歸り候。其の仔細は是れを見て知り給へ」と云ふ事なるべし。まことに人間、鳥獸、境界かはり、其の詞は通ぜざれども、ものを感ずる心法に、彼と是と變ることなし。こゝを以て思へば、獵師の燕を捕る心に、彼の國の蛇心なるべし、一切有情に佛情あることを知つて、皆人殺生を愼み給へ。

蛙も蛇を捕る事

唐土には、鴆と云ふ鳥あつて、一切有情の大毒なれば、一日に千里を走る猛虎も、僅か雀ほどなる鴆を怖れて、竹の林を城郭とせり。竹は又鴆の爲大毒にして、鴆ある上を飛びぬれば、おのれと落ちて死するとかや。此の鳥江に下りて水を飲めば、一切諸鳥毒あらん事を恐れて其の水を飲まず。山より犀と云ふ獸出でて、又其の水を飲みぬれば、毒を消せん事を量つて、それより諸鳥も飲むとかや云ひ傳へ侍り。然れどもそれは見ぬ唐土の沙汰、近くは蛇、蛙、蝸牛の三敵として、蛙は蝸牛をとり、蝸牛は蛇を害し、蛇は蛙を取る事、草うつ童子まで皆人の知れる所なり。ある人の庭前に荒れたる泉水あり、水の汀の菖蒲、眞菰生ひ茂りたる中に、蛇數多集まり、彼の泉水に臨んで毎日蛙を二つ三つ捕らぬ日もなく、見るに氣の毒なれども、何と制すべきやうなく、一切有情のそれ〴〵の業をはたす

ことを悲しみて暮しぬ。然るに何時その頃より、蛙多く死して池の邊に上り、數多斃れり、何に捕らるゝ體も見えねば、不思議の事に思ひしに、或夕暮いづくともなく、三足なる蛙一疋飛び來りし、水の汀なる薄の影に棲みて鳴き、其の聲を聞いて築山の岩の狹間より、大きなる蛇一疋這ひ出で、此の蛙を捕らんとするを、蛙は無心に鳴くに性根を入れて、後へ蛇の寄むことを知らず。上なる亭より是れを見て、氣の毒さに、蛇を追ひ退け蛙を助けんと下へおりけるが、其の間に、蛇は飛び掛つて蛙に喰ひつきぬ、然しも、いつ捕られぬと思ひ、其の盡にして上より詠め居ければ、小時ありて彼の蛇は死し、蛙は歸つて恙なく岸の處へ飛び行きて、また元の如くに鳴く。然るところに、此の聲を聞いて、いづくともなく、又小さき蛇這ひ出でて、そろ〳〵と狙ひ寄り、相近くなつて彼の蛙に飛び蒐り、既に喰ひ付く、ところを、蛙居直つて前足をあげ、蛇の顎を打ちけるが、此の蛇したゝか手負ひたる體に見えて、伸び痛み苦しげにのたれ廻つて終に死せり。蛙は別の仔細なく、又外へ退きて前の如くに鳴く。主何とも不審はれず、大きなる蛙の小さき蛇に捕らるゝは常の事なり。然るに此の蛙は小さくして、大きなる蛇を捕れり。但し三足の蛙は、足に仔細が有るかと、立ち寄り見れば、三足にはあらず、常の四足の蛙なれども、足は小さき前足を懐中にして、三足にて飛びあるき、蛇の飛びかゝつて喰ひ付かんとする時は、彼の懐中を開きたる手の事にて、蛇の顎へ突き込み、蛇は食ひの心深く、飛び付くやな

て、前後を顧みず、何處にもあれ纏ひ處へ、早速くらひ付き、此の毒にあたり死すると見えたり。窮鼠却つて猫を噛むと世話にいひつたへしが、されば今の蛙も、餘り蛇に捉られ詮方なさに、中間にて大勢評議し、一旦智恵備はりたる蛙、此の謀を用ゐ、數多の蛙の死を救ふと見えたり。國主國王のまゝ、天下は天子のまゝなれども、上道を失ひ餓ゑたる民を憐まで、強ひせたぐる事強ければ、肥馬驕奢を悔れずとて、瘦せたる馬に重荷をおほせて、遂にはともに行かぬごとく、民も國の仕置を用ゐず、却つて法度を背き、荷の馬の轡を恐れざるやうに、嚴しき成敗をも顧みず、不義を行ひ盗賊を爲して、國天下を亂せし事ども、和漢兩朝に其の例多し　斯樣の事を鑑み、一人の榮華の爲に衆を苦しめず、下を憐み仁政を施し給はば、國家は萬々世に至るまで、長久ならざらんものか。

伊吹山の水神

江州伊吹山には百草あつて、古より端午の朝皆人山に分け入り和藥を求む。守山の宿に玄仲とて醫者あり、ある時藥草を求むとて彼の山へ入りしに、何處ともなく猿一匹來り、裾をくはへて引きければ、玄仲心に念ひけるは、定めて世に傳はらざる名草有りて、是れを知らしめんため斯くはするならんと、猿の導く方に行けば、遙か奥山に至りて、一つの洞の前に數十匹の猿群り集まれり。見れば

其の中に一匹妻猿ありて、只今産に臨めり、然れども難産ゆゑ、是れを救へとて我を迎へしと見えたり。折節懷中に産の藥、殊に早めを所持しければ、是れを與へしに、事故なく早速平産したり。玄仲それより立ち歸らんとするに、來りし道を忘れしかば、彼の猿に向ひ「是れより里に出づる道を知らず、汝我を迎ふる智慧あり、我を導いて始めの如く里まで送り歸せ。」と云へば、始め迎へに來りし猿立ちて導かんとす。すでに別るゝに及んで、中にも古き猿、座を立ち難産を救ひし恩を謝すると見えて、一つの香箱の口を能く封じたるを取り出し、玄仲に與へて、必ず口を開き給ふなと云ふ樣子に見えければ、玄仲、此の蓋を開けまじきや、と問ふ。彼の猿うなづいて去りぬ。それより道をわけ麓に下り、最早是れより先は紛ひ道もなし。」とて、彼の送りの猿を戻しぬ。心はせく儘に道を求めて辿り出でしに、路に大きなる淵あり。其の前を通るときは、やう／＼暮におよびしが、彼の淵水俄に動搖して、水中より五十丈ばかりのごとくなるもの現はれしに、玄仲驚き魂も身に添はず、觀音普門品を唱へ、[illegible]を心に念じて、息もはかりに走り、やう／＼にして我が里に至り、或人家に入りて宿を求めければ、主不審を立て、其の故を問ふ。玄仲有りの儘を委しく語りければ、主聞いて大きに驚き、「さてもさても笑止なる事どもかな、其の池には主ありて、神靈甚だ猛し、若し人知らずして池の邊に往けば、必ず彼の大蛇に見ゆる、若し偶希有にして其の場をのがるゝと雖も、一度彼の形を見たる者

は終に捉られずと云ふことなし。御身も今宵中には捉られ給ふべし。痛はしながら右の仕方はせざれば、死人に宿を參らすること叶ひがたし。」と云ふ。玄仲爲方なく、「然れども最早夜陰に及び、宿を得ずば、愈其の害を免るゝことも能はじ。せめては家の内にて兎も角もなり候はば、後の世までの御芳志なるべし。爰を憐み思召せ。」と只管に歎けば、主も哀れの事に思ひ、「さほどに思召さば、呉々も家の者は他所へ移り、御身ばかり此の家に宿し參らせ候ふべし。隨分佛神へ祈誓をかけ、遁るゝやうに祈り給へ。」と、一家の男女鄰家へ行き、家ばかりを借し與へぬ。玄仲彼の家に心細く、只獨り燈を挑げ、先に山中にて猿の與へし香箱を取り出し、是れは必ず蓋を開くなと云ひしかど、たとひ如何なる寶にもせよ、今宵限りの命なれば、開けて中の容子を見ばやと思ひ、封を切り蓋をあけぬれば、中より小さき百足一疋這ひ出で、壁へ傳ひ窗へ登り、何處ともなく這ひ失せぬ。それより次第に夜更け、夜半の頃過ぐるまで、別の仔細もなかりしが、既に丑三つ過ぐる頃に至つて、彼の窗の外にて、夥しく物の響く音し、家も動くばかりなれば、はや變化に命を捕らるべき刻限になりぬと、性根も身に添はず、ひとへに普門品を讀誦し命の終るを待ち居けれども、別の仔細もなく、家鳴も鎭まり、東雲もたなびきければ、邊の民家より人數多集まり、「さるにても今宵の旅人は、水神の爲に命を捉られぬらん。」と、彼の家へ來り樣子を見れば、恙なく居睡り居たり。皆人不思議の事に思ひ、彼の窗の下を

見れば、背に箱より出でたる百足、一尺ばかりなる小蛇をくはへて、百足も蛇も倶に死せり。如何なる事とも其の故を知らず。それより彼の池に悪神絶えて、近郷の村里永く災を免れたり。

鼠の燐火の事

洛陽祇園の社僧に、天性鼠を愛せし法師あり。常に米をまき、食を與へて懐けしかば、人をも恐れず、晝も出でて多く集まる。然れども家内の下々までを制し、堅く是れを逐はしめず、不斷米をまきて餌に乏しからねば、鼠多しと雖も物を荒すことなし。元より猫は寺の近所へも寄せねば、寺中の鼠共、悉に逐はれて皆此の寺へ逃げ來れり。然るに如何したりけん、ある日住持の秘藏せられし紋白の袈裟一條鼠に喰はれて、以ての外に怒り、「憎き事かな、われ彼を愛し、餌を與ふること數年、終に今まで何を引かれし事もなかりしに、如何に畜類なればとて、随分不便を加へし其の恩を知らず、却つて斯く物に害をなす事のうたてさよ。こゝを以て思へば、皆世上猫を飼ひ、鼠をおとしなどして、人の嫌ふも理なり」とて、それより米をも撒かせず、鼠の引くべき物を用心して、ふつと鼠を愛する心止みしかば、寺内の鼠頃日にかつゑしと見えて、一日數千疋羣り出で、大きなる土器をくはへ、座敷の眞中へ直し置き、日々に水をふくみて來り、彼の土器へ吐き出だし、初めの程は燒土へ水うつやうに、

悉く浸み込みしが、後には次第に濕り合ひ、水八分程溜りし時、牀の上なる紙一束へ、數多集まり或は戯き或は捧げ、又は咥へ又は引きて、彼の土器の側まで終に引き著け、大小の鼠残らず皆北向に並び、一匹づゝ右の土器の中へ這入り、四足を水に浸して紙の上へ飛び上り、左の方へ降りて南向に並びぬ。都合八十一疋の鼠、八十疋まで此くの如くして、濡足にて右の紙を踏めども、曾て其の足跡つかず。終ひに當りたる一疋の大鼠、不承々々に立つて、己が番なれば是非なしと云ふ體にて、土器の水に足を浸し、彼の紙の上へ飛び上れば、夥しく足跡ついて、紙一二帖水に浸せり。是れを見て殘る鼠共寄り寄つて、終に彼の大鼠を食らひ殺しぬ。是れ俗に謂ふ鐵火の吟味なるべし。終に己が仲間にて、彼の袈裟を食ひ破りたる大鼠を詮議仕出し、住持の目のまへにて其の罪を糺し、仕置に行ひ、皆それ〴〵の住家々々へ歸りぬ。住持是れを感じ、「眞に畜生なりと雖も、物を識ること人間に劣らず、物を識るものは必ず恩を知れり。」とて、又元の如く米を撒き、餌を與へて愈是れを愛しぬ。誠に物の詮議は、人間に取つても古より難き事にして、奉行當人の智を竭せり。然るに今彼が、罪科ある者を選み出せし成敗の作法、却つて愚かなる人間には勝るべきものか。

金玉ねぢぶくさ卷之七　大尾

太平百物語

祐佐

太平百物語序

やつがり年頃西国に経歴して、貴賤僧俗都鄙遠境の分ちなく、打交はり語らひける中に、あやしの物語どものそれが中にも、出所の正しきをのみ集めて、反古の端に書き綴り置きしをみれば、其の数百に満てり。然るを笥中に籠めて蟲糞となさんも本意なければ、これを梓に[illegible]うして、吾に等しき輩に見せなば、永き夜の眠りを覚し、寂莫なぐさむ一助ともならんと、剞劂氏に命じぬ。實に怪力亂神を語るは、聖の文の誡めながら、かゝる拙き物語も、をかしと見る心より、自然と善悪の邪正を辨へ、賢愚得失の界に入らば、少しき補ひなきにしもあらずと、古の百物語に太平の御代を[illegible]しる[illegible]、[illegible]に浪花[illegible]館[illegible]堂の窗中に[illegible]つといふ事しかなり

時[illegible]の[illegible]の初[illegible]をふる頃なりし

市中散人祐佐書

目録

卷之四

五十　百物語をして立身せし事

以上前編終り、後編後より出し申し候。

太平百物語巻之一

一　松岡同雪狐に化されし事

津の国の片ほとりに、松岡同雪といふ野巫医師あり。心あくまで貪欲なる男なりしかば、人々うとみて療治を頼まざりけるに、明暮の徳さびしく暮しけるが、一年風邪疹はやりて、何方の浦も病者と名付くるに隠るゝはなかりき。此の同雪も今年は不思議に病家多くて、昼夜療治に隙なかりしが、ある夜表の戸をあらけなく叩きけるほどに、「誰なるや」と問ふに、「これは此のあたりの者にて候、一子息にて當年十歳になるが、只今俄に目を見つめたり。頃日頼み参らせし医師は、他の急病に行き給ひて間に合はず。夜分と申し近頃御苦労の御事ながら、只今御出で下さるべし」と、誠に余義なく申すにぞ、「此の辺とはいかなる人ぞ」と尋ねければ、「それも御出で候はゞ知れ申すなり。則ち御迎への籠も持たせたれば、はや／＼」と申すにぞ、「さらば行きて参らせん。我が療治にて今宵の難を救ひなば、薬料銀も大枚御越しあれ」といふに、「其の段は仰せにや及び候」とて、頓て駕籠に打乗り、飛ぶが如くに風を行きしが、「さて此所にて候」とて、駕籠の戸を開けば、大きなる屋敷なり。大欲心の

同雪、銀五枚と約せし事を悔み、かかる所ならば金十兩といふべき物をと、未だ病人をも見ずして、貪る事を先だて頭をかきて、奥に通れば、やがて病人の傍に伴ひ行きて、まづ容體を見せけるに、同雪病人をみて「扨々夥しき麻疹の出やうかな。」と脈をとり、身體より足をなでて大きに驚き、「これははや事切れたり、扨々殘念なり。」と云ふに、介抱の人々云ふ、「假令左樣に候とも、切角御出で下され候上は、是非に御藥を下し給はれ。」と、口々に云ふ程に、「然らば一貼調藥申して見ん。」と駕籠に入れ來りし藥箱を取りよせ、頭を傾け調合し、「はやはやこれを與へ給へ。」とさし出すに、其の邊には人一人もなし。こはいかにとあきれ果て、彼の臥したる病人をよくよく見れば、人にはあらで石佛なり。同雪大きに仰天し、あたりをとくと見廻せば、さしも結構なりし屋敷と見えしは墓原にて、卒塔婆木いくつも並べたり。「扨は狐の所爲ならん。」とやうやうに心付きける内に、夜はしらしらと明けわたれば、自身藥箱をひつかたげ、頭を抱へて這ふ這ふ我が家に逃げかへりしが、其の後はこれに懲りて、夜に入りてはいかなる急病にも、なかなか行かざりけるとなん。

二　馬士八九郎狐に威されし事

大坂久寶寺町に、八九郎といふ馬士あり。ある日枚方まで馬に荷付けて行きしが、歸るさ守口より

日暮れけり。時は霜月下旬の事なれば、寒風面を打つていと寒かりしかば、茶店に寄りて茶碗酒を傾け、酔ひ機嫌に寒気を忘れ、小唄唄ひて出ける所に、年頃六十許りの禪門八九郎を呼びかけ、「いかに馬士殿、我は今宵大坂へ行く者なり。老足甚だ道に倦みたり。其の馬貸して乘せ給へ。」といふ。八九郎聞きて、「價はいかほど出さるゝや、酒手あらば乘せ申さん。」といふ。禪門がいふ、「御望の通り價なり、心安くして乘せ給へ。」といへば、「さらば乘り給へ。」と彼の馬に打乘り、四五町許り行く所に、うしろの方より大勢の聲として、「其の馬待て。」とぞよばはりける。八九郎何事やらんと顧みれば、武具せし者四五人許り来り、此の馬に追ひ付くといふや、彼の禪門を馬より取つて引きおろし、二つ三つ擲き、「坊主めがな。」とて引き縛りければ、八九郎仰天し、馬を驅けて逃げけるに、「其の馬止れ。」と、口々にいふ聲頻りなれば、南無三寶と思ひ、やがて馬に飛び乘り、息をはかりに追ひたつれば、後より追ひ来る聲次第々々に遠ざかりしまゝ、やう／＼に心をやすんじ、片町まで来りて細道のかたに聞けば、大汗を流してこしかたの由を語れば、亭主も驚き訝りしが、後によく／＼聞けば、狐どもが八九郎を化しけるとぞ。

三　眞田山の狐伏見へ登りし事

伏見に徳地屋といふ穀物問屋あり。或日の事なりしが、五十計りの女一人、此の店の先に立ち休らひ居りたるが、風呂敷包より藁苞を取り出していふやう、「妾は大坂より京へ上る者なり。此の苞は大事の品に候ふ。只今へ参り申すうち、暫く此處に御預け置き給はれ」といふにぞ、「仔細候はじ」とて許容して預り置きしが、一時許りになりても此の女見えず。さては忘れて上京せしにや、大事の物と云ひしものを」など、寄り合ひ云ひあへりしが、主人聞き付け、奥より出で云ひけるは、「知らぬ人の物暫しも預る事、粗忽の至りなり」とて大きに叱り、其の邊なる所々に尋ね求むれども、敢て見えねば、「又々たづね來るまで大事にして置くべし。」とて、庭の片脇に持ち行き桶をかぶせ、犬猫の用心なして置きけるに、亥の刻ばかりと思ふ頃、此の桶そろ／＼と搖ぎ出しけるを、下女が見付けて打驚き、「あれ／＼桶の歩き侍る」といひければ、家内の男女恐れ合ひ、身を縮めて守りゐる内、此の桶次第に中に上るとぞ見えし、小坊主一人立ち出でしが、次第々々に大きになりて、七尺有餘の大入道となり、「あら窮屈や。」といひて、四方を見廻す其の眼のすさまじさ、偏に車輪の如くなりければ、女童は云ふに及ばず、さしもに若き男までも、一度にわつと叫びて逃げ惑ふ。されども亭主は心剛なる男にて、脇指おつ取り飛んで出で、彼の大入道をはつたと睨み、「おのれいかなる變化なれば、我が家に來りてかく人を惱ます、早くこゝを立ちさるべし。是非災をなさんとならば、いま目の前に



切つて捨てん。」と、勢ひかうで云ひければ、入道が曰く、「我は大坂眞田山に年を經る狐なり、此の家の者頃日わが住所に來りて、出入りする穴に小便をし穢したるが憎さに、跡を慕うて登り、此所の挑山に住む狐を頼みて、今朝たばかり入りたり、早々其の者を出すべし、さもなくば家内殘らず仇をなさん。」といふ。亭主この由を聞き、頃日大坂へ下せし者は太次兵衞なり。」とて、呼び出して事の樣子を尋ねければ、太次兵衞ふるひ〳〵這ひ出で、「誠に仰せの如く眞田山見物に罷りて、木陰なる所に何心なく小便いたし候ひき、知らぬ事にて候へば、御赦し下さるべし。」と色を變じて歎きければ、亭主入道に向ひ、「樣子は汝今聞く通りなり、知らざれば力なし、赦してはや〳〵歸るべし。」といふ。入道が曰く、「しからば命を助くべし、此の過代としてわが住む穴に、三日かうち赤飯と油物を備へ來るべし、此の事違ふに於ては、汝が皮肉に入りて命を取るべきぞ。」といふに、「其の儀ならばいと安き事なり、明日より三日の内、朝暮備へ申さん。」と請合ひしかば、忽ち形は消え失せたり。それよりして三日の内、朝暮彼所に備へければ、太次兵衞が身の上、無事に治まりけるとかや。

四　富次郎の娘蛇に苦しめられし事

越前國に富次郎とて代々分限にして、眷屬も數多持ちたる人あり。此の富次郎一人の娘を有てり。

今年十五歳なりけるが、夫婦の寵愛殊にすぐれ、生まれつきらいと尋常にして、甚だ人めやさしく、常に敷島の道に心をよせ、調絃琴を弾じて兩親の心を慰めける。あるとき座敷の緣に出て、庭の氣色を詠めけるに、折節初春のことなれば、梅に木づたふ鶯の、おのが時得し風情にて、飛びかふ樣のいとをかしければ、

　わがやどの梅が枝に啼く鶯は風のたよりに香をやとめまし

と口ずさみけるを、母親聞きて、「げにおもしろくつゞけ給ふものかな、御身の言の葉にて、妾も想ひより侍る。」とて、取りあへず、

　春風の誘ふ垣根の梅が枝に啼きてうつろふ鶯のこゑ

かく詠じられければ、此の娘聞きて、「實におもしろくいひ加へさせ給ひけるかな。」と、互に親子心を慰め業しつ居りける處に、向うの樹木の陰より、時ならぬ小蛇一疋する〳〵と出でて、此の娘のそばへ這ひよるほどに、「あな恐ろしや。」と内に驅け入れば、蛇も同じく付いて入る。人々あわてゝ立ち出で、杖をもつて追ひはらへども少しも去らず、此の娘の行方にしたがひ行く。母人大きにかなしみ、竊にかくと告げければ、富次郎大きに驚き、僕者を呼びて取り捨てさせけるに、何處よりか來るともなく、頓て立ち歸りて娘のそばにあり。幾度捨てゝも元の如く歸りしかば、是非なく打ち殺させ、遙かの谷に

きりけるに、又立ち歸りてもとの如く、こはいかにと切れども突けども生きかへり〳〵て、なか〳〵娘のそばを放れやらず。兩親を始め家内の人々、いかゞはせんと歎かれける。娘もいとあさましくおもひて、次第〳〵に弱りはて、朝夕の食事とてもすゝまねば、今は命も危く見えければ、諸寺諸社への祈禱、山伏ひじりの呪詛、殘る所なく心をつくせども、更に其の驗もあらざれば、唯徒らに娘の死するを守りて居ける。然るに當國永平寺の長老ひそかに此の事を聞きたまひ、不便の事に思召し、富次郎が宅に御入り有りて、娘の容體蛇がふるまひをつく〴〵と御覽あり、娘に仰せけるやうは「御身座を立ちて、向うの方に歩み行くべし。」と仰せに從ひ、やう〳〵人に扶けられ二十歩許り行くに、蛇も同じくしたがひ行く。娘止れば蛇も止る。時に長老又「此方へ。」と仰せけるに、娘歸れば蛇も同じくたち歸る所を、長老衣の袖に隱し持ちたまひし一尺餘りの木刀にて、此の蛇が敷居を越ゆるところを強くおさへ給へば、蛇行くこと能はずして、此の木刀を遁れんと身をもだえける程に、いよ〳〵強く押へたまへば、術なくやありけん、頓て振り歸り木刀に喰ひ付くところを、右に持ち給ひし小劍をもつて、頭を丁と打ち落し給ひ、「はや〳〵何方へも捨つべし。」と、仰せにまかせ、下人等急ぎ野邊に捨てける。其の時長老宣ひけるは、「最早此の後來ることゆめ〳〵あるべからず、此の幾月日の苦しみ兩親の歎き想ひやり侍るなり。今よりしては心やすかれ。」とて御歸寺ありければ、富次郎夫婦は

餘りの事の有り難さに、涙を流して御後影を伏し拜みけるが、其の後は此の蛇ふたゝび來らず、娘も日を經て本復し、もとの如くになりしかば、兩親はいふに及ばず、一門朋友の人々まで悅ぶこと限りなし。誠に有り難き御事なりとて、聞く人感涙をながしける。

評じて曰く、蛇木刀に喰ひ付きたる内、暫く娘の事を忘れたり、其の執心の去りし所を害し給ふ故に、ふたゝび娘に付くこと能はず。是れ併しながら知識の行ひにて、凡情の及ぶ所にあらず、誠に此の一箇に限らず、萬の事に及ぼして、益あること少なからず、諸人よく思ふべし。

五　春德坊狐に化されし事

下京に順光寺といへる寺あり。ある夜下男とおぼしき者一人、提灯をともし來り、「某は久野屋町より參りて候。主人召使ひの女相果て申したに付き、今夜の内野送り仕りたきまゝ、御弟子の内一人御越し下さるべし。則ち御迎ひのため私を指し越し候」と申しければ、住持此の由を聞き「心得候。」とて春德といへる弟子を遣はしけるが、其の夜も過ぎ翌日になりても春德歸らず。住持不思議に思ひ、彼の久野屋へ人を遣はし樣子を尋ねさせけるに、亭主此の由を聞き驚き申しけるは、「此方には死人なし、元來家來も遣はさず、若し狐の遣ひ侍るにや。」と云ひければ、こは不思議のこと

し急ぎ寺に立ちかへり、住持にかくと告げければ、「さればこそ」とて驚きたまひて、手分けをして方々と尋ね求めけるに、有明の頃漸く五條西洞院にて見付け出し、やがて連れ歸りけるが、住持あきれて「一體何國へ行きし。」と尋ねられしかば、「さん候。未だ町十郎宅に行きつかぬうちに、夜明け候ひける」と云ひければ、「扨は狐の所爲ならん」と、はては大笑ひになりてはたしぬ。

六　愚全坊化物の難を遁れし事

雜[?]中に愚全といへる沙門あり、年頃都の方に志ありて、此の春思ひ立ちけるが、播磨の書寫山へもついでながら參詣しけるに、下山の頃山中にて日暮れければ、其の邊なる辻堂に立ち寄り、一夜を明さばやと思ひ、通夜念佛して居られけるに、年のほど十八九ばかりなる女一人、何國ともなく來りて、愚全に向ひて云ふやう、「それに入らせ給ふは御僧と見參らせ候ふ。一夜のほど此方へ來り給へ、御宿を貸し參らせん」と云ふに、折しも餘寒身にしみ堪へ難かりければ、「誠に御志有り難く候ふ」とて、打連れて行きければ、一つの庵に入りぬ。愚全家内を見廻すに、此の若き女の外人一人も無し。愚全心に思ひけるは、かかる所に一宿せん事心よからぬ事かなと思ひながら、力なくしてゐられけるに、此の女愚全にいふやう、「御覽のごとく妾事獨住みの寡婦なれば、誰れを力にすべき便なし。御身夫

婦となりて我に力を添へたまへ。」と、傍近く寄りそへば、愚全興を覺し、「こは思ひよらぬ御詞なれ。我は元來出家の身なれば、假初の戯れだに佛の戒め給ふぞかし。あなかしこ筋なきことな宣ひそ。」と、にがにがしく云へば、此の女うち笑ひて、「さな云ひ給ひそ、出家も美童を愛し給ふうへは、女とても何か苦しう候べき。」と云ひければ、愚全答へて、「さればとよ、童子は成長にしたがひて、愛著の心薄るゝものにて、殊に子孫相續の因縁なく、女の道とは格別なり。其の上女は五障三從の苦しみありて、佛のいませ給ふぞ。」と、さもすげなくぞ申しける。此の女つくづく聞きて、「實にさる事も侍るやらん。」とて、其のまゝ十四五ばかりなる美童と變じ、愚全が傍へ進み寄り、「我こそ佛の作し給ふ童子なり、情をかけて給はれ。」といふ。愚全此の有樣を見て、これ察するところ化物なりと思ひながら、答へて曰く、「實にそれとても道徳めでたき知識の事なり、愚僧が如き蒙昧の者は、童子とても叶ひがたし。」といへば、其の時童子氣色變り、「扨々憎や、己が舌頭の利くまゝに、樣々に云ひ遁るゝ腹立さよ、いで其の儀ならば喰ひ殺さん。」とて、やがて大きなる坊主となりて、愚全を一口に呑まんとす。其の時愚全は眼を閉ぢ、一心に陀羅を修しければ、此の妙音に恐れをなし、消ゆるが如くに失せけるが、彼の庵と見えしもいつしか野原となりて、愚全茫然と四方を見やれば、ほのぼの東より白み渡りしほどに、それよりやうやう下山し、都の方に急がれけるとなり。

七　天狗相撲をとりし事

安藝國嚴島にて、一年相撲ありしが、諸國より名を得たる相撲とり多く集まりければ、見物群集おびたゞしけり。既に相撲も五日目になりて、大關をとらずと觸れければ、見物一入いや増し、鎗を立つべき地もなかりしが、其の日の相撲も段々濟みて、已に大關出でたりしに、寄りの形屋に誰有つて相手にならんといふ者なければ、暫く時をぞ移しける。然るに年の頃五十ばかりなる色黒きやせたる男出でて云ふやう「今日の相撲は大關殿の御相撲をこそ見まほしくて、たれ〳〵も參りたれ、これ程大勢集まり給ひて、進む人のなきこそ不興なれ。それがし年寄りて御相手にはならずとも、いで一番とり申さん」と云ひければ、大關を始め諸見物に至るまで「かかる男が何として、小相撲の一番もとるべき、あら傍痛き云ひ事や」と、座中一同にどよめきけるが、暫くありて行司立ち出で申すやう、「これは奇特の御事ながら、年來相撲に馴れたる者だに、御身の年頃となれば相撲はとられぬものなり。ことにこれは此の度の大關にて、日本に名を得し大兵なり。さればこそ御覽ぜよ、はやり男の衆中さへ、心臆して時移りぬ。必ず無用にし給へ」といふ。此の男大きに腹をたて「相撲は時の拍子なり、必ず弱きが負けるにあらず、強きが勝つにも定めがたし。我等も少しは覺えのあればこそ望みもしぬ。い

かに相手の組せにては、是非をとらんと仕叶ふまじきと、なか／＼引き入る気色ならず、大関是非
不興し、我多く相撲をとりしに、遂にかかる老耄の相手になりたる事なし、此の相撲はとるまじきに
と云ふに、其の時に、とらずんば此の座を去らじことと土俵に坐つて動かざれば、諸見物は同音に、いさ
や其の時に、意気凜々に、引据へて打投げんとぞひしめきける。大関今は是非なく立ち出で、おのれ
面に押へて打ちかゝれば、此の男も進みより、徐に腕を引くといふや、後りなが
ておのれと組む、諸見物は息をつめ、おのれ被打負、打倒されん、不便やことよとあやぶみけるに、案のごとく
大関両手をさしのべ、此の男を宙に提げ、自由自在にふりまはし、目より高くさゝげて、大地になげ
うと投げけるを、宙にてくるりと一つとんぼがへりして、大関の腕を頂き、投げんとせし両手を取わせ
胸をとり、なか／＼一寸と動かさず、大関少し漂ふところを、右へ廻ざまに左へふりはなし、褌をつかんで軽
大面にすえたれば、大関も膝をつき、いかにも好き、なか年頃つもりたる好きと称賛せられ、軽捷
に相撲の勝をとりしこと、また三国一連ふの誉れし、大地へどうと打ちすゑければ、遂に息も絶え入れ
たる、有る故に此の相撲取は諸見物に誉められて、終に相撲道と成る其の名、後に此の道にかかはる
奇異なること、いふ程こそあれ、東西の相撲とも四方より取りまはし、北陸の都と称へしことも、いつも
迯去りたる其の跡に消えず、其れは大きく喧嘩となり、南北に逢ひ走り、泣き叫ぶ事夥しかりしが、

後に聞けば大閤が餘り傍若無人なりしを、天狗の悪みてかくは計らひけるとかや。

八　調介姿繪の女と契りし事

出雲に調介といふ大百姓あり。ある日朋友の許に罷りて、世上の物語をし居りけるが、牀の掛物を見れば、いと美しき女の姿繪なり。調介傍近く寄りて視るに、その麗はしさ活けるが如くなりければ、やゝ恍れ居たり。亭主の云ふ、「いかに調介殿、世には名畫もあるものかな。われ近頃都に上りしに、ある人所持したりしを所望し求め來りし。」と語る。調介が云ふ、「誠にかかる美女若し人間にあらば、われ財寶を擲つとも惜しからじ。」と云ひければ、亭主此のよしを聞き、調介が傍近く寄りて云ふやう、「實に左樣に思召さば、我常に聞きおける秘術あり、試みになして見給ふべきや。」といふ。調介笑つて、「何なる事にや。」と問へば、「されば此の繪を人間になすの奇術なり。」といふを調介聞きて、「御身は我を欺き給ふや、これおそらくは戯言ならん。」と敢て信ぜず。亭主の曰く、「我も未だ其の眞僞を知らずと雖も、此の術傳へし事は眞實なり。然れども御身の如く疑ひの心強くしては、其の行ひ努々行はれず、貴殿ふかく此の繪に執着するゆゑ申したるなり、強ちに勸め申すにはあらず。」と云ふに、調介亭主を拜して、「これ我が過ちなり、願はくは其の術を授け給へ。」と、思ひ入つてこひければ、「然

ろ上に傳ふべし、わが云ふ所をよくつとめ給へ。まづ此の繪を佛寺に奉ふるなれど、私宅に掛けて密
室に閉籠り、此の繪に向つて眞々と呼び給ふ事、晝夜百日し給へ、此の事一日も怠り給ふべから
ず。さて百日滿ずる時に、此の繪必ず應ぜん、其の時八年の古酒をもつて其の顏に灌ぎ給へ、掛繪を
はなれて人間となるべし。あなかしこ、此の行ひ人に見せ給ふべからず。」と敎へければ、調介斜ならず
喜びて、「是れわが一生の本望、君が高恩何をもつて報ぜん」とて、頓て我が家に歸り、敎への如く、百日丁寧
に勤めしかば、不思議や此の繪調介に言葉を返す。時に八年の古酒をもつて面に灌ぎしかば、忽ち掛
繪を放れて眼前に出でたり。調介悦びに堪へず飮食をさせけるに、常の人に變ることなく、よくもの云ひ
うち笑ひければ、調介限りなく悦び、此の女と深く契り、年月を重ねければ、遂に一子を儲けたり。
調介いよ〳〵いとほしみ、彼の傳へし朋友のもとに、數の寶を贈りて恩を謝しけるが、其の後在所見よ
い調介が從弟進兵衛といふもの訪ひ來りて、山海隔てし遠路を過ぎ、互の無事を喜びけるが、調介が
妻子を見て、そのみめよく淸らかなるを驚きて、「何方より迎へ給ひし、今まで報らせ給はぬことこそ遺恨
なれ」と云ひければ、調介包まずに、しかじ〳〵の由を委しく語りければ、進兵衛始終を聽きて大きに驚
き、「世の中に左樣の事あらば、おそらくは妖怪ならん、我が在所に希有の名劍を帶せり、しばらく御身に貸し
與へん、必ず此の妖怪を退治し給へ、若し給はずば後の大きなる災あるべし」と、又ねんごろにすゝめて執着し給

ふな。」と、にが／＼しく云ひしに、調介も此の事如何とも未だ決せざりしが、まづ進兵衛が志背きがたくして、彼の名跡を預り置きぬ。其の後此の妻調介に向ひて申しけるは、「我はこの山に住める仙なり。たま／＼御身に招かれ、此の年月契りまゐらせしに、はからずも進兵衛の言葉によりて御身に疑はれ參らせぬ。然る上は我此所に留まること能はず。」とて、彼の一子を抱き、はじめ調介が與へたる古酒を悉く吐き出し、空中に去りければ、調介限りなく惜しみ悲しめども、甲斐なかりけり。餘りの戀しさに、彼の掛物の表に取り出し見けるに、不思議や此の女、彼の一子を抱きて歴然たり。調介驚きよく／＼見れば、母子ともに畫なり。餘り不思議の事に思ひて、ある博識の僧に懺悔して、事の樣を尋ねければ、此の僧の曰く、「かかる例唐土の書にも似たることあれば、我が朝にも有るまじき事にあらず。」と宣ひけるとかや、不思議なりし事にこそ。

九　經文の功力にて化物の難遁れし事

ある僧丹波國を修行せられける時、村雲の山といふ所にて日暮れければ、上の峠に家のありしを求めて宿を乞ひけるに、年の頃十二三許りなる童一人出でて宿を許しぬ。内に入りてみれば、主人は七十餘りの姥なりけらし、其の顔世に凄まじく、目のうちは水晶を磨きたる如くなりしが、此の僧を

見てにつこと笑ひて云ひけるは、「旅行は何なれば何國へゆき給ふ」と問ふ。僧答へて、「我等は何國をそれと定まることなし。出家の事に候へば、命の限りは國々を巡り行ふ」と申されければ、童聞きて、「扨はやさしき御志にてこそ候へ。今宵は我が家に明かさせ給へ。見苦しく候へども、あれに一間の候」とて、此の童子に案内させければ、此の僧も心安んじ一間へ入りしが、やがて軒の透間より、月の影幽にさし渡りければ、

旅の泊りここの宿はかはらでなほ村雲の山の端の月

と詠じ、昔の事まで思ひ出でても、いとゞ哀れに思ひいでられ、心靜かに御經を讀誦し居りけるに、夜も深みゆきて隣の内に物喰ふ音の聞こえしが、偏に魚などの骨を噛むやうに聞えし程に、此の僧怪しみ思ひて、杉の戸の間よりそと覗き見れば、死人の首を取りて喰ひたると[illegible]、[illegible]の有樣を見て大きに驚き、[illegible]

[illegible]、此の人の[illegible]、遂には我等をも取り喰はれんと思ふに、肝魂も身に添はず、[illegible]

[illegible]

[illegible]

め、明日は又逢くまでに喰はせかけ侍り候へ」と云ふ。童子答へて、「今宵宿参らせし客僧こそ肉あつく太くて味よからんに、與へ給へ」と云ふ。姥が曰く、「我もさは思へども、宵より少しもまどろまずて、偏に経文のみ読しめ侍る程に、其隙を得ず」と云ふ。此の僧始終を聞きて、いよいよ身心寒えず、偏に死出の山路に迷ひたる亡者の、獄卒に逢へる心地して、いと浅ましく思ひ、猶も高らかに經を読上げければ、童子重ねていふ、「いかに経文を読むとも我行きて喰ひ殺さん」と進み行くを、姥おさへて曰く、「汝が及ぶ所にあらず、さあらば我行きて、まづ試みん」とて、かの僧の傍近く向ひ寄りしが、此の僧知らぬ顔にて眼を閉ぢ、聊か御経怠る事なし。時に此の姥指を出して、頭をつつきて喰らひ付かんとせしが、此の僧の姿、偏に不動尊の形に見えて、いと恐ろしかりければ、中々寄りもつかれぬに、読み上ぐる経文の響、身節に徹りて、いよいよ苦しかりければ、力なく退きしが、兎角する内夜も白々と明くれば、此の僧は何となく、「縁あらば又参らん」など云ひて、此の宿を出でければ、姥も童子もなごり惜しげに見送りしが、辛き命助かりて、何事なくぞ出でられける。これ偏に経文の功徳とぞ、聞く人毎に感じける。今も此の国には、かかる恐ろしきもののある由聞え侍りぬ

太平百物語巻之一　終

太平百物語巻之二

十　千々古といふ化物の事

京城下の事なりし、大手御門の前に千々古と云ふ化物、毎夜々々出る由、いひ傳へて、日暮れし後は往來の人絶えて御門へ通はず。用の事は遠のけり。然るに其の家中に小河多助とて、不敵の若侍ありけるが、彼千々古を見とゞけんと思ひ、密かに夜に入りて大手の御門の前に行き、此處彼處窺ひあるに、或夜、人一人に逢はず、化物とて出でたり。其の形をよく／＼みれば、鞠の如くなる物にて、地より五尺ばかり又は四五尺程にあがり、西に行き東に走り、動くたびに何やらん物の音しければ、多助不思議に思ひ、心を靜かに其の樣子を見定め、さりながら一體にて其の邊を行き過ぐる時、彼の化物多助が前後を飛び上り飛び下りて、程なく多助が頭に落ちかゝりけるを、多助すかさず刀を拔き取り、手ばしこく切りつけければ、切られて地に落ちたりけるを、多助やがて飛びかゝり、ひつ捕へて膝に敷き、大音聲に罵りけるは、「音に聞えし千々古の化物こそ仕留めたれ。出で合へ／＼人々」と、聲をはかりに呼ばはりければ、其の邊の家々より、手に／＼松明をともし連れ、御門前に集りて、その正體

を見るに、化物にはあらで眞の鞠なり、引き裂きて内を見れば、小さき鈴を入れ置きたりければ、多助を始め人々呆れて、はては大きに笑ひ合ひけり。後に聞けば癖者共が工みて、兩方より繩を張り、此の鞠を中に結び付け、夜な〳〵人を威し戯れけるとぞ。

十一　緒方勝次郎獺を射留めし事

山城國に緒方勝次郎といふ侍あり。ある時近江國彦根に行くとて、野洲川を通りけるが、をりふしの秋の末つ方、冬の景色をあらはして、落葉散り敷く水の面、見るに心もすみわたりければ、旅の心を詠み侍りける。

やす川といかでか名には流しけむ苦しき瀬のみありと思ふに

かく口ずさみつゝ行く所に、向うの方に小船一艘漕ぎ來る者あり、見ればいと美しき童子なりしが、身には木の葉藻屑などをかづきてゐたり。勝次郎怪しく思ひて「いかなる人ぞ。」と尋ねければ、「これは此のあたりに住む者なり。御身も此の舟に乘り給へかし、共に逍遙して樂しまん。」といふ。勝次郎其の體をよく〳〵見るに、これ人間にあらずと思惟して、やがて携へたりし弓矢おつ取り、引きしぼりてぞひやうと放つ。過たず此の童子が胸にあたるに、忽ち獺となりて卽座に死にたりしが、舟と

おはしきと指示の[illegible]けるに、さればこそと思ふ所へ、又か大蛇の如くなる老女来て、勝次郎を[illegible]きて申さく、「[illegible]只今[illegible]に乗りたる[illegible]はすや」と、勝次郎答へて、「それは[illegible]とて行き違ひたれ。」[illegible]、又[illegible]引き[illegible]かたにたれば、前にあたるを見まし、[illegible]ていたる[illegible]となりて、一聲あつと叫びて死しけり。勝次郎[illegible]取りて、所の人に見せければ、皆[illegible]に[illegible]けるに、此の年頃[illegible]に化して、多く人をとりはかり喰[illegible]なしけるに、今[illegible]は此の哀れをみる事あるまじければ、有り難くこそ候へ、[illegible]うち[illegible]。

十二　小[illegible]天狗に捉へられし事

[illegible]寺といへる日蓮宗の寺あり。ある時うたづといふ所へ用のことありて、眞可といふ[illegible]るが、その歸る[illegible]所を通りしに、[illegible]同じくこれを唱へしまゝ、眞可[illegible]恐ろしく思ひて、[illegible]ことは[illegible]、思ふ[illegible]に引きしば

り、かの照本寺の縁に捨てて歸りしが、眞可は聲も高らかに普門品を唱へけるに、寺中これを聞きつけて、總て縁に驅け出でければ眞可なり。人々驚き、上人にかくと告げ知らせければ、上人やがて立ち出で、つくづくと見定め、靜かに眞可が聲に合はせて、同じく普門品を讀誦ありければ、不思議や此の無明忽ち晴れて、眞可別儀なく本心なりければ、上人その故を尋ね給ふに、眞可しかじかの由を語れば、上人も訝しくおぼして、かの縞巾を取り上げ見給ふに、さまざまに結ぼれて、紐の端いかに求むれども見えず。邊の人々これを見て、奇異の思ひをなしけるが、今に此の寺にありて、世の人これを天狗の標と稱して、もてはやしけるとぞ。

十三　或禪僧愛宕山にて天狗問答の事

ある禪僧の、故ありて其の名を言はず、道徳めでたかりしが、ある年愛宕山に詣で給ひて、參籠の頃下向したまひしに、歸りの半ばにて道に踏み迷ひたまひ、あらぬ方に深入し給ひけるが、其のあたり特に茅茂して、雜葉を敷き置きたり。此の僧おぼしけるは、げに此所は人跡たえて、住む人あるべくも見えざるに、かかる有様こそ不思議なれ、いかさま聞き及ぶ天狗の住所にやと、上の方を仰ぎ見給へば、其の丈、まさかに、横のわたり一丈許りもあるらんと思ふ大石の有りしが、偏に石工の刻みなしたるごとく、

いと苦しかりしかば、いざや寐りてゐんと筆を置き給へば、上の方に凄まじき声して、紙数の如くなり、「汝は、昔日の事かな、今宵は通夜此所に坐禅して、明けなば下山せんものを」と、石山に座具六敷き、行道まして居給ひけるが、しばしありて冷風さつと吹き来り、此の辺の頭上を大勢踊りあるき行かるゝ声、一時に聞ゆ。是ぞ我が住む所に来りて安坐すや、騒がしく[illegible]と、声々に嘲りけれど、此の声に恐れさせず、経文を誦して心静かに陀羅尼を唱へて坐しければ、又とかくと笑ひて云ふやう「此の坊主は何を吼くぞ、今少し声を上げて云へ」。我等が嫌ふ所の経文よく知れり、読んで聞かせん」とさゞめきけり。其の時此の僧眼を開き答へて申さく、「我慢増上の汝等が、何とて我が正法なる経文を誦せんや。[illegible]も望みたまへ。読み上げんなり。一句にても口真似をせば、我汝等が為に命を失ふべし」と仰せければ、頻りに「読め／＼」と云ふほどに、其の時声を揚げ総光明真言を十遍ばかり、高らかに読み上げ給ひしが、天狗共これを一句も読むこと能はずして、ぞつと[illegible]退散しけり。僧帰りて筆を取らせ給ひて、又黙然と坐禅し給ひけるが、夜も程なく明けぬれば、道を求めて下り来れるに出で給ひ、下山し給ひける。これ先の自在の魔性なれども、道徳強き名僧には敵対することは叶はずとかや。西國浅鞘の寺中にて、或る山臣の何某語りし侍、然に記し侍る

十四　十作幽靈に頼まれし事

大坂上本町に毎夜々々幽靈出づると沙汰して、夜更けぬれば人怖れて通らざりしが、或夜十作といふ者、幾兵衛といふ者を伴ひ此所を通りけるに、谷町といふ所にて、後の方より女の聲にて、二人の者を呼びかけければ、十作幾兵衛にいふやう「これは聞き及ぶ此所の幽靈ならん」とて、兩人振り返り見れども、目に遮る物なければ、又十間許りも行くに、以前の如くに呼びしかば、立ち留まりてよくよく見るに、年の頃二十許りなる女の色青ざめたるが、腰より下は無くして髮を亂し、さめざめと泣きゐたり。幾兵衛臆病者なれば、これを見るよりわつと叫びて倒れ伏す。されども十作強氣の者にて少しも恐れず、ふみ留まりて曰く「何者なれば我等を呼ぶぞ、近く寄らば切つて捨てん」と氣色ばうて身構へすれば、此の女答へて「さん候我は此の邊の者にて候ひしが、嫉妬の爲にそれの奥方に殺されたり。されば其の瞋恚晴れやらず、夜毎に此所に出でて人を待ちて呼べども、皆我が姿に恐れて答ふる人なし。御身幸ひに言葉を交し給ふ嬉しさよ、願はくは我が力となり給へ」といふ。十作曰く「我何として此の事をなさん」。「今は恨みを晴れ給へ、後を懇に問うてまゐらせん」といふ。幽靈喜びずしていふやう「頼み參らすること外ならず、我が腹に子を宿りしが、死せずして胎内甚だ苦

し、御身の刀を以て我が頭を斬りてたび候へ、必ず恐れたまふな。」と云ふに、流石の十作も氣味惡ければ頭を撥ねて、「左様の事は想ひもよらず、免し給へ。」と逃げごしらへすれば、幽靈いと恨めしげなる顏にて、「我若し此の事叶へ給はずば、永く御身に付き添ひて、恨みを云はん。」と云ふにぞ、十作も今は是非なく脇差引き拔き、かの幽靈の傍へ怖れながら近々と寄つて、胴腹をたち破れば、「嬉しや今は我が本望は達するものを。」と云ふかと思へば、姿は其の儘消えうせけり。十作急ぎ義兵衛を呼び起し、肩に引つかけて一散に逃げ歸りしが、其の後はいかゞなりけんも知らずかし。

十五　吉田吉郎化物に逢ひし事

中京に吉田吉郎といふ者あり。ある夜子の刻ばかりに、五條醒井を通りけるに、後より靜かに歩み来る者あり。ふと立ち返り見れば、年のほど七八歳ばかりなる童子なり。吉郎怪しく思ひ童子に向ひ、「いかに小童、此の暗き夜のしかも更け行きて、おのれ一人何國へか行く。」と云ひければ、童答へて、「我はいつも此所を通る者なり。我が形の小さく幼きを御覧じて侮らせ給ふにや、いで大きく成りて見せん。」とて、其の儘六尺餘りの大童となり、吉郎を睨みけるに、吉郎元來しれ者にて、さこそ想ひしとて、大脇差をすらりと引きぬき、横樣に切り付くれば、やがて形は消え失せたり。吉郎打笑ひて過ぎける所に。

又問ふまま、いと嶮しき女一人出で來り、吉郎が傍近く寄りそひ、「いかに其方樣、もの申さん、我は四條あたりの者なるが、只今其の樣すさまじき大坊主に行きあひ、餘りの怖ろしさに、これまでやうやう逃げ來りぬ。あはれお情に我を誘ひたまへ」と、誠しやかに云ふ。吉郎此の女の體をつくづく見て、これ實の女にてはあるまじ、今の化物が無念さに、又我をたばかるならんと思ひながら、さあらぬ體にて、いざ伴ひ申さんと、少しも油斷をせずして行きけるが、吉郎女に向ひ、「其の大坊主はいか樣なる者にて侍りしや」と問へば、此の女袖かき合はせて、「さん候、其の坊主が姿は、斯樣にこそ侍りし」と、これも美しかりし女、忽ち一丈許りの古入道となり、眼の眞中に車輪の如くなる眼一つ光らし、吉郎をはつたと睨めしを、すかさず脇差ぬき放し、柄も碎けと切り付くれば、切られて逃ぐるを追ひつめければ、門の際にてたゞよふ所を、拜打に切りこみしに、彼の化物は消え失せて、大石にぞ切り付けたり。吉郎前後をよくよく見定め、いまは恐るゝ事あらじと、氣色ばうて宿に歸りしが、夜明けて人々に語り、彼の脇差取り出し見てあれば、悉く刃こぼれてけり。されども不敵なりしゆゑに災はなかりしとぞ。

十六　玉木藤右衛門鎌倉にて難に遭ひし事

九州に玉木蔭右衛門といふ侍あり。一年主君の御供して上られけるが、年頃鎌倉の方に志ありて、暇を願はれければ、早速の御免有り難く、従者一人召し具し、日頃飼ひ馴れし栗毛の馬に打乗り、東路に趣かれしが、小夜の中山といふ所にて、日すでに暮れかゝりしが、折からの星月夜も、所からとて一入寂しさまさり、古の歌人の言の葉を思ひ出でて、いと面白く行きける所に、道のほとりの山陰より、異形異類の人来つて、蔭右衛門にむかひ申しけるは、「我等が主人、御身の日暮れて道を急ぎ給ふを御覧じて、御宿を参らせん為に、われらを迎ひに参らせぬ。いざさせ給へ」といふに、蔭右衛門いひけるは、「是は思ひ設けぬ御事かな。御身の主人は、此所の何長なるや」と尋ねければ、答へていふやう、「長にはあらず、され共家富み栄えて、多くの従者を持ちけるが、御身の如き旅人を労はり給ふ」といふ。「扨は御志の程浅からず」と、此の者と伴ひ行くに、山に入る事四五町計りにして、一つの大門あり。築地にして甚だ高し。人多く守り居て、偏に国君の如し。爰にて馬より下りて行く所を、此の馬蔭右衛門が袂を銜へて頻りに留む。蔭右衛門其の故を覚らずして、あざ笑ひ、従者と共に残し置きて、又一町計り過ぎて中門に至る。彼の者いふ、「暫く是れに待ち給へ」とて、一人内に入りしが、程なく衣冠せし人両人出向ひて、蔭右衛門を誘ひ入りぬ。内の体を見るに、主人と思しき人、身に褻衣を着し、面色すぐれ相好に至るまで、常の人には事変りぬ。それより有りあふ臣下次第に列なり坐

な、蔭右衛門此の有樣を見て思はず拜す。時に主人の曰く、「われし此所に住むこと久し、偶〻御身の通る事を知りて迎へ入れたり。これ饗應せんが爲なり」といふ。蔭右衛門拜謝すれば、やがて酒宴を設く、其の器物皆珍らしき物どもなり。主人輿に乘じ左右の臣下に云ふやう、「[illegible]かなる客人[illegible]な、など慰め參らせぬや」といへば、「畏まり奉る」とて、御前に集まる。其の人々を見れば、其の形黑き裝束あり、錦を着し白き冠、又は靑き衣、まだらなる衣裳ありて、何れも酒を酌み交し、音樂を奏す。蔭右衛門も輿に乘じける所に、錦を着たる者蔭右衛門にいふやう、「我は未だ夜食せず、客人我に與へよ」といふ。蔭右衛門が曰く、「君ののぞみ給はん食物、此所にして我いかでか求めん」といへば、「いや我が望む所は外になし、たゞ御身の肉を喰らはしめ給へ、別の味ひを求むることなし」といふ。蔭右衛門大きに驚き急に退かんとすれば、黑き衣着たる者笑つて曰く、「客人驚く事なかれ、我等は先に足下の下人と馬とを分けて喰らひし故に食に飽きたり」早く御身を與へたまへ」といふ。蔭右衛門愈〻色を變じ、こはそも變化の物に誑られけるごと想ひながら、すべき樣なく呆れたる所に、主人此の體を見て曰く、「汝等何とて客人の心に逆ふや。」と叱りければ、錦を著たる者笑つて、「これ戯れなり」とて退きしが、暫くありて外より入り來る者あり、其の形頭長く五體の丸き者なりしが、主人に向ひて云ふやう、「われし常に占卜を好む、主人の愁へ此の客人に在る事を知る、速く殺したまへ」と

と勸む。主人怒りて曰く、「此の悦びになんの災かあらん。」卜者嘆きていふ、「殺し給はずんば御身をはじめ、此所にありあふ者一人も生くること叶ふべからず、其の時思ひ知り給へ。」といふ。主人大きに怒つて、つひに卜者を殺す。夜更くるにしたがつて、皆々大きに醉うて倒れ臥せば、隣右衞門も心氣疲れて眠らんとする時、天まさに裂けんとして忽ち目覺め、あたりを見れば、大いなる巖の中に臥せり。其の中に種々の調度あり、一つの大猿貌人の如くなるが、醉ひて地に伏す、これ主人なり。其の次は毛經たる熊、白き毛の狼、毛の禿げたる狸、或は狐、貉、猪、何れも共に醉ひふして正體なし。其の傍にひとつの骸死しゐたり、是れ先の卜者なり。これを見れば家來と馬とを取り喰らひて、頭と手足ばかり殘れり。隣右衞門途方に暮れながら、すべき樣なく、密かに忍び遁れいで里に逃げ付け、所の長に告げて、地頭にかくと訴ふれば、頓て數百人の若者共をかり催し、武具を帶して驅け付け、彼の山中に分け入れば、大將の大猿此の音に驚き醒めて、大いに叫んで曰く、「卜者が諫めを用ゐずして、今かくの如し。」といふ内に、はや其の巖を打碎き、手に／＼弓鐵砲をもつて悉く平治しければ、隣右衞門は危急の難を遁れ、剰へ家來と馬との敵を眼前にとつて、人々に一禮し、辛うじて鶴が岡に至りしとかや。

十七　榮六娘を殺して出家せし事

讃岐國に榮六といふ心逞しき者あり。ある夜一里許りの堤を越えて、朋友の方に行きけるが、丑三つ過ぐる頃又此の堤傳ひに歸りけるに、少し酒機嫌にて心おもしろく、小唄など唄ひ何心なく通りけるが、道の眞中に大きなる古狸、前後も知らず臥し居たり。榮六此の體を見て、「扨々憎き振舞かな。我等が通る道筋に、かく狼藉なる風情こそ安からね」と傍近くさし寄り、持ちたる杖にてしたゝか打ちければ、狸目覺めて肝を潰し、一散に逃げ走りければ、「扨々よい氣味かな」とて、うち笑ひて通りけるが、程なく宿に着きて表を叩きければ、今年十二歳になりける一人娘、頓て起き出でて戸口を明けしかば、榮六悦びつゝ「家來はよく臥せりて起きも上らぬに、優しくも待ちうけたり」とて、手を取り臥處に入りけるに、此處にも我が娘快く臥し居たり。榮六不思議に思ひ振り返り見れば、唯今、戸口を明けたる娘後に在り。一人の娘俄に二人となりければ、榮六大きに驚き、こはいかにぞや。此のうち一人是非變化ならんと思ひながら、何れをそれと分ちがたく、暫く樣子を窺ひ案じ煩ひけるに、表を明けたる娘のいふやう、「われ父上の歸り給ふを迎へに出でし間に、何國の女やらん、我が臥したる跡に、臥しけることこそ安からね。はやく追ひ出したび給へ。」といふ聲に、臥したる娘目をさま

し、父上は唯今歸り給ひけるかや、さればなる女子は何方より伴ひ歸り給ふぞといふに、栗六、愈こゝろ迷ひ、二人の者が顏容を一々に守り窺ふに、何れ少しも違はねば、栗六今は詮方なく、呆れ果てて居たりしが、よくよく思ひ廻らす程に、戶を開けたることも化物ならめと覺悟し、其の儘引拔き放し、唯一太刀に切り付くれば、あつと叫んで斃れしが、殺したる妻女の顏を見て、忽ち凄まじき狐と變じ、きうきうと啼きて逃げ出づる所を、栗六南無三寶と思ひながら、すかさず追つ詰め、直ぐ樣に切りこみしが、此の亂逆や盡きたりけん、眞向を切られて聲をもたて得ず死しければ、栗六刀を其邊に捨て、妻が骸に走り寄り、さめざめと泣きていひけるは、我迷ひより汝を殺せし不便さよ、許してくれよと叫びしが、此の懷姙なれば、生らずして遂に空しくなりぬ。栗六妻が死骸に取り付きくどきけるは、我事が母先だちて、妻を頼むと云ひ置きたる言葉も無下になしけるよ、今は此の世に望みなければとて、己れも菩提の種として、其の儘髮おし切り桑門となりて、妻の亡き後をぞ弔ひけるとかや。げに狐狸の所爲なるに、欺し害しめまじき事にこそ。

十八　小栗栖の化物の事

山城國小栗栖といふ所に、化物栖むともつぱら沙汰しけるに、或夜の事なりし、醍醐の九郎次郎と

いふ者の宅へ、其の近邊の若者共集まりて夜話をしけるが、折柄秋の長き夜なれば、様々の話をしけるついで彼の小栗栖の化物話を仕出し、「怖ろしき事なり。」なんど、とりどり申し合ひければ、其の座に八郎といふ者ありて云ふ様、「何條化物といふ物あらんや。我小栗栖に行かんに、若し化物出でなば捕まへて連れ歸り、いづれもへ土産にせん。」と廣言すれば、人々いふ、「さあらば今宵彼所へ行くべきや。心得たり。」といふに、八郎聞きて、「安きことなり。我行きて參るべし。何にても印を出されよ。」といへば、「さあらば。」とて不敵の八郎と書き付けし札を渡し、「これを彼所に立てゝ置きて歸らるべし。然るに於ては今宵の夜食、御身の望みに任せん。」といふ程に、八郎笑壺に入り、様々料理好みして、彼の札をひつ携げ、小栗栖にぞ急ぎける。さて小栗栖にもなりければ、四方をきつと見廻すに、目に遮る物もなければ、さもこそと思ひて、彼の札を野中に立て置き歸らんとせし時、うしろの方より、「八郎待て。」とぞ聲かけたる。扨は聞ゆる化物ござんなれと、大膽者の鐔元くつろげ、大音聲に云ひけるは、「いかなる物なれば我が名を知りて呼ぶぞ。其の正體を顯はすべし。」と云ひければ、何處ともなく答へて曰く、「我は此の所に年久しく住む物なり。何故かかる怪しき札を立てたる。急ぎ持ちて歸るべし。御事無益のかけろくして此處に來る事、わが眷屬共先だつて知らせたり。由なき武邊を立てんとせば、目に物見せん。」と罵りける。八郎健強者なれば、うち笑つていひけるは、「あら事々しの化物殿

やゝ われ其の札を取るまじきか、いかなる物をか見てけるぞ、出せ／＼と責めければ、「やら／＼憎き妄言しや」といふまゝに、いと凄まじき毛の生えたる腕ばかりをさし出し、八郎が懐中に捉まるゝ所にて、心得たりとて刀をすらりと抜き放し、腕を丁と切りければ、あつと叫びて消え失せたりし。八郎は勢ひにころと落ちけるが、大聲上げて、いひけるは、「こていの卑怯なる化物かな、何とて速く消えたるぞ、影を見せずば唯今出せ、腕なりとも出すべし、取つて歸りて土産にせん」と、喚くまでに罵れども、八郎が勇氣にや恐れけん、何の返答もせざりければ、今は是非なしと、古の座に寄らぬ心地して、勇み進んで歸りたるが、向うの方より六十許りの老翁一人出で來り、八郎に向ひていひけるは、「いかに和殿は唯今小栗栖にて、隠れなき功をし給ひける事よ、今こそ九郎次郎殿が爲に、武具用意して御待ちあらんに、早々いそぎ参られん」とて、八郎が襟首掴んで虚空にあがるを、八郎すかさず太刀抜きさまに、彼の翼を切り拂へば、彼は八郎を攫みすて、何處ともなく失せけるか、八郎は五郎次郎が座敷の縁に落ちたりける。あれ／＼人々此の音に驚きたち出でければ、八郎絶入してころ居たりけるを、こはいかにと打驚き、頭に水灌ぎて呼び起しければ、漸う正氣に返りけるが、夢は化物にとられて、懐に藏す頭の毛なくなりしかば、皆々大きに呆れ、とかくする内夜はほの／＼と明けはなれて、夜食は徒となりにける。

十九　狐人たがへして憑きし事

京堀川に佛具屋宗兵衛といふ人あり。一日召使の小者を、用の事ありて使ひに遣られけるが、因幡薬師の門前を通りけるに、此の小者俄に肩の上に物ある様にて、殊なう重くなると覚えて宿に歸りけるが、其の儘裏の口に出でて大きに笑ふほどに、宗兵衛怪しく思ひ、其の故を問へば、小者がいふやう「我は因幡薬師の藪に年月住む者なりしが、昨年薬師の藪の内に、快く臥し居たるを驚かしたる者あり。其の者を恨めしく思ふ折節、此の小者門前を通りしを、昨日驚かせし小者と心得、其の儘とり付きたりしに、よく／＼見れば人違ひなり。それが可笑しさに笑ふぞ」というて、又大きに笑ひける程に、扨は狐の憑きたるなり」とて、宗兵衛を初め家内の人々、恐れながらも可笑しがりしが、請て有験の山伏を請じ、右の次第を語り「如何せん」と申しければ、法印聴いて水晶の珠数おつ取り、さら／＼とおし揉み、祈られければ、小者俄に苦しみて「やれ、免してたび候へ。もとより此の人に恨みなければ、明日ははや／＼歸るべし。今宵一夜を待ち給へ」と、さめ／＼とかきくどき詫びければ、法印大きに怒り「汝人をたがへて苦しむるのみならず、今宵の宿を彼が躰中に借らんとは、甚だ奇怪至極なり。唯今其の座を去らずんば、明王の功力にかけて斬り殺さん」とのゝしりければ、これに

愈恐れをなし、「然らば唯今迄き申すなり、赦し給へ。」といふと思へば、卽て表に走り出で、戸口をぐわらりと開くぞと見えし、其の儘小者は倒れしを、人々助けいざなひし人が、[illegible]ば、[illegible]けるか、[illegible]とふれて、其の後はなんの災もなかりしとぞ、まことに[illegible]怨の[illegible]。」と、聞く人笑ひ合ひけるとなん。

二十一　本行院の猫女に化けし事

洛中に本行院とて日蓮宗あり。ある日旦那川口甚平といふ者[illegible]しけるが、常々上人と親しかりければ、[illegible]に通りけるに、折節上人は他行に[illegible]、弟子も見えざれば、そこら見廻しけるに、[illegible]老女出でて、[illegible]「上人は[illegible]なん。」といふ程に、[illegible]に通りて、しばらく休息しゐけるに、[illegible]の一[illegible]、[illegible]く立ち彷ふ體の聞えしまゝ、[illegible]き[illegible]、[illegible]上人に[illegible]に沙汰[illegible]ら、[illegible]はかかる人に逢ひても詮なし。」と思ひ、立ち[illegible]らんと思ふ所に、上人[illegible]、[illegible]是れへ[illegible]り候へ。」と[illegible]

ら傍に付添ひ、僧の座に備て近く侍り居りしが、上人を見て常にもつれ戯れ遊び、上人可愛がりて、小猫を招きて物食はせらる。甚平此の體をつく〴〵視て、扨は此の猫どもが女に化けたるならんと、恐ろしく思ひければ、上人の耳に口を寄せ、有りし次第を語るに、上人も始めて驚き給ひ、やがて三疋の猫を傍近く呼び寄せ仰せけるは、「汝等今日姿を女人に化けし事を知る、此の故に唯今暇をとらするなり、はやく〳〵寺を立ち去るべし。」と、にがく〳〵しく宣へば、此の猫共甚平が告げし事を悟り、深く恨むる氣色にて、甚平を睨み付けて、いづちともなく失せにける。甚平はそれより彼の猫共が俤身に添ひ、何となくいと苦しかりけるが、それよりしてぶら〳〵と煩ひ出し、心力甚だ疲れて、遂に程なく死しけり。「これ偏に此の猫が執心なりける。」とて、皆人恐れ合ひけるとかや。

二十一　孫兵衛が蟒蛇になりし事

備前國金山のほとりに、孫兵衛といふ百姓あり、弟は播磨に住みて獵を業として居ける。彼の孫兵衛は家富み榮えて、常に樂しみ居りしが、後を嗣ぐべき子なければ、行末味氣なく思ひ暮しける。然るに孫兵衛假初に煩ひいだし、次第に重くなりて、心地死ぬべく覺えければ、急ぎ播磨の弟が許へかくと告げやりしかば、弟は取る物も取り敢へず、急ぎ備前に來り、孫兵衛が病牀に至れば、孫兵

衛いと懐しげに聞き、「よし、そや遠路の事、分りたれば、我等病あれば本復せんこと思ひよらず、命
終らば後の事、汝に頼み参らするなり。固より名跡なければ、家財田地等悉く御身に與ふるなれ
ば、今より二丁目茂吉の家を守りて、わが菩提に供へ給へ。又これなる女は、年頃我に仕へし馴染の
者なれば、行末見捨ず守り給へ」と遺言して、程なく果てければ、弟子なげきて、師を招き、泣く泣く死
骸を野邊に送りけるが、此の茂吉ぬかの女を妻として、共に野邊に送り行きけるが、此の孫兵衛が亡骸を土中
に埋め、三年あまりに轟かれて、皆々帰らんとせしに、此の妻孫兵衛の埋れし許につかつかと行きて、
塚の前をこぼつべくすると見て、其の侭倒れ伏しけるが、忽ち大きなる蛇となりて死したりける。人
人驚き、「こはいかに」と騒ぎけるが、此の者つくづくと見て、「かかる例なきにしもあらず、共に土中に
埋むべし」と、直に任せ、孫兵衛の塚の傍に埋めさせければ、此の時此の女が為に頓て茶毘の法を行
ひ、年頃に住けりしに、此の塚より忽ち木蓮寺出でたり。其は即座に佛果を得たることを證しなしこ
て、此の寺の方の衆、皆もて行く如く世に行はるるとぞ。不思議なりし事どもなり。

太平百物語巻之三

十一　狐仇を報いし事

江戸浅草の片ほとりに、常心といへる同心者住みけり、また品川に巨作といふ隠者ありしが、常々親しく交はりけり、一夜巨作常心が庵に訪らひ来り、四方山の物語して居けるが、夜も更くれば「今宵は泊り給へ」といふに、巨作も外ならねば「仰せに任すべし」とて、常心と通夜世上の物語して、他事なく楽しみゐたりけるに、夜半過ぐるころ、何処ともなく大石を礫打つほどに、こは何事やらんと両人共に驚く所に、愈厳しく打ちければ、常心今は堪りかね、表に出でんとするを巨作引きとめ「あの如く滋く石打つところへ御出であらば、怪我あるべし、無用。」といふに、常心気強き者なれば「何ほどのこと候はん。」と、戸口を開き跳び出づるに、目にさへぎる者一人もなし、石打つ音も止みければ「扨は我が出でしに、恐れて、逃げたるならん。」とて内に入りて、巨作にかくと告げて、不思議をなし居りけるに、またまた厳しく打つ音頻りなれば、常心大きに腹をたて、憎き奴原が振舞かな、一人なりとも捕まへんと思ひ、戸口に待ちうけ、少時打ちける所を逃さじと跳び出づるに、世上しづま

りし蟲の聲すらかなり。常心も心はたけしと雖も、相手なければ爲方なく、鏡臺の内に入りければ、巨作も果は果て、「御前様これは變化の術と覺えたり。今宵は兩人眠らずして守り居ん」と、互に心を配りけるが、しばらくありて其の中かに大勢の聲として、「いかに巨作よ、石打つ事の恐ろしきや、常心なくば打殺さんものを」と、一つと笑うて失せければ、常心巨作に向ひて、「御身こそ心に覺えありや」と問へば、巨作も曰く、「されば今日此の者の許へ參る折節、堤の上に狐の二疋晝寐をして居たりしを、折節石礫にて、小石を一つ二つ三つあてて威しけるが、其の仇にも侍るらん」といふ。常心聞きて「さればこそ其の源根なり、みだりに野干の類は、かりにも嬲り給ふべからず」と、いと嘗く誡めければ、巨作も殊の外後悔し、夜明けて常心に暇乞して、品川に歸りけるとかや。

十七　三條の社神往來の人を惱ませし事

中頃の事とかや、同國那須野の寺に近きとある所の東、前後左右にて大木數多あり、其の中に樫の木の太さ五人の抱手にして、高く聳ゆる事は幾何か、丈五六丈許りなる凄まじき大木あり。其の傍に社有りけるが、夜へ日暮れて此の前を通れば、誰かすさまじける故、おろかにて通りも叶はず、若し通らで叶はざる人は、結構なる品物其の祠に奉納し、又は太刀、刀の類、是も其の木の社へ納めて拜すれば、難なしといひ傳ふるほどに、人々恐れ

日暮れては人跡絶えたり。然るに茂次といふ百姓、用の事ありて他所に至りけるが、母親急病の由を告げこしけるに、茂次常々孝心なりければ、大きに驚き歎き、取る物も取り敢へず我が家に急ぎけるに、途中にてふと思ひ出しけるは、聞き及ぶ大森の社の前を通らでは歸ること叶はず、日ははや暮に向はんとす。然れども寶器か金銀を備へずしては、通ること思ひもよらず、此の道を除かんとすれば、既に三里の道を廻る、急病なれば廻り歸らんこともあさまし、いかゞせんと案じ煩ひけるが、所詮此の森の御社に御斷りを申さんに、仔細はあらじと覺悟して急ぎけるに、初夜の頃ほひ大森の社に至り、茂次かの社の木の本に跪り、地に平伏して斷りけるは、「我今日母親が急病によつて、心急ぎ御供物を失せり。重ねて寶器を捧げ奉らんに、此の所を御許しありて通さしめ給へ。」と、貧に餘儀なく斷り申して、それより一散に驅け行く所に、俄に旋風さつと一颯りして、後より甲冑を着たる者大勢追ひ來り、「茂次待て。」とぞのゝしりける。茂次南無三寶と身を縮めけるに、程なく追ひ付き云ふ樣、「汝は今我々が園の神に、供物を參らせずして過ぐる事、甚だ以て謂れなし、急いで寶器を渡すべし。若しさもなくんば命をとらん。」といふ。茂次色を正しくして、「されば候、我が母親既に死せんとす、此の故に心急ぎて供物を失せり。重ねて寶器を捧げんに、此の度は是非許したまへ。」と、さめ〴〵と歎きければ、其の中に年老いたる者の曰く、「誠に此の者助け難しと雖も、如何樣僞るまじ

き閻魂なれば、此の度は許すなり、必ず違ふまじきぞ」と、皆々つき具し歸りしかば、茂次は怪き命を助かり、漸うに宿に歸り、陸祖が末期に遭ひ、道苦事みて後、彼の地藏の尊御の事を話して、聞きければ、誰か合ふ人を西を便にし、急ぎおへかして、其の儘に捨て置きては後難も如何と思ひながら、漸々死骸を寶賣しければ、これに心を寄しけるが、兎角其の物も分限相當なれば上に、やうやうにて埋葬ありてこしより、彼の丈藏に持ちし、打寄せて申しけるには、「我が家業しければ、よく其の寶心に積みて、これとさだかならねばならねり、仰ぎ願はくは迷ひを再び結び許し給へ」と、檀の木の許に五百文を置きて歸らんとせしに、又谷風一しきり吹き來つて、以前の邪神顯はれ出で、大きに怒つて曰く、「汝なる輕くしき供物を參らせて、神を輕しけるぞ、いでよの見せんことて、大きなる土の鍋を取りいだし眞中に引きすゑ、茂次を取つて打ち込み、柴薪を積み薪ひ、既に煮殺さんとす。茂次はいと淺ましく苦しきことに思ひながら、今は覺悟を定めて、日頃念じ奉りし不動明王の眞言を唱へしに、それのみか、はや瀬に水泡出て、忽ち燃え盛りしが、俄に雨降り出り、此の火を打ち消し、忽然として赤き童子一人現はれ、此の者共を散々に打ち散らし、茂次を鍋より助け出し、彼の土鍋は遙かの谷に投げ捨て、「いまは故障なし、汝が備へし供物を持ち歸るしことて、一つの箱を取つて茂次に渡し、引き出し給ふと思へば、程なく我が家に歸り着きぬ。茂次

は夢の覺めたる心地して、かの箱を開け見れば金子千兩ありけり。こはいかにと思ひながら、返すべき方もなく、我が物ならねば使ふべきにもあらずと、深く隱し置きけるが、其の夜夢中に彼の童子現はれ出で、「それなる金子は汝が常に孝ありしを以て、天より與へたまふなり、必ず疑ふべからず」と、新たに示現を蒙りければ、それより心定まり有り難くおし戴き、我が物となしけるが、次第々々に富貴になりて、今に榮え侍るとぞ。

二十四　闇峠三つの火の魂の事

越中國富山に源八といふ者ありし。年ごろ諸國へ丸藥を賣りに廻りしが、一年大和路に行くとて、折しも五月中旬いと暑かりしが、闇峠にかゝりければ、日ははや暮れける。源八思ふやう、われ一人夜に入りて行かん事、用心もいかゞなれば、上なる驛舍に一宿せんとて、道を急ぎけるが、此の峠は日中にてもほの闇きに、まして黄昏に過ぎければ、物のあやめも定かならず、愈心細く辿り行く所に、向うの方より鞠の大きさなる火の玉一つ轉び來しほどに、源八はいと恐ろしく思ひ、いかゞせんと身をもだえけれども、すべき樣なく、傍に身を縮めて居けるが、間もなく源八がそば近くへ轉けきたり、忽ち二つに割れて消えしと思へば、俄に女の泣きさけぶ聲して、いづくともなく現はれ出

でたり。後より來たる二つの火の玉、同じく割れて消ゆると思へば、二人の男忽然として現はれたりしが、此の女を互に奪ひとらんと爭ひ、兩手を左右へ引き合ふほどに、此の女いと苦しく堪へがたき有樣にて、一聲叫びて息絶えたり。二人の男は互に刀拔きあはせ、しばらく戰ふとぞ見えし、遂に兩方刺し違へて、彼の女が死骸の上に倒れ臥す。運八始終を見るに、肝魂も身に添はず、足をはかりに一散に逃げ出だす、漸うとある家に走りつけ、其の戸を叩きければ、何事やらんと亭主驚き出でて見れば、運八は只口にもいはれず絶入りしたるを、やうやう呼び活し、其のゆゑを尋ぬれば、運八始終の首尾に語り、驚きおそろしさに語れば、亭主は手を打ち、さればこそ候へ、近き頃、何某が娘のありしを、二人の男懇望して、娘に二人ともに互の心を盡し戀ひけるが、此の女も二人の男の志、何れ劣らぬ事なれば、なびき給ふ事も叶はず、心亂れて爲方なく、ましてや今は是非なしと思ひはつめ、此の所へ來たりて、遂に淵に身を沈め果てたりしが、二人の男此の由を聞き、此の上は世にながらへて何かせんと、互に差し違へて失せにける。其の魂魄中有に迷ひ、此の峠の麓に毎夜々々出づると、頃日專ら沙汰しけるに、正しく今宵逢ひ給ひける不思議さよ。」と語れば、運八あまりの怖しさに、誠に哀れなる事かな、いざ此の人々の妄執を晴らさんため、弔ひをなさばや。」とて、亭主と共に運八佛前に向ひつゝ、南無幽靈成等正覺出離生死頓證菩提と廻向し、夜明けて古郷の方に過ぎ

けるとなり。

二十五　悪次郎天狗の栖に至る事

土佐国に悪次郎とて、家富みゆたかに心たけき者ありしが、常に朋友に語りけるは、「世に化物ありと聞き、われ此の年月に[illegible]をはじめ、あらゆる深山幽谷、入りて試しぬれども、いふ所は、何国とも、子丑寅の頃ほひまで、廃堂古堂の中へ入ると雖も、化物又は幽霊に逢ひたる事なし。是れ皆臆病者の恐れしとおもふ心より、おこる事なり」とあざ笑ひて云ひけるが、一日親友岩八といふ者、これも不敵の男なりけるが、悪次郎宅に来りていひけるは、「御身常に変化といふ物なしと云ふ、聞き給へ、此の国白峯の奥には、慥かに恐ろしき化物ありて、見たる者数多ありと沙汰す。さも有るべき所なり」と語りければ、悪次郎笑ひて「それも又臆病者のいふ事なり、必ず信じ給ふな」といへば、岩八重ねて「いや我もかやうの事信ずる者にはあらず。されども此の事に偽りならずと思へば、御身を伴ひ行きて、其の真偽を糺し申さんと思ふはいかに」と申しければ、悪次郎「いかにいふとも何国へ行きしとて、化物はなきにきまりぬれども、御身さほどに思ひ給はば、慰みながら参らん」とて、頓て岩八を誘ひ、[illegible]に旅立ちて道を急ぎけるが、其の日の暮方に彼の白峯の麓に着きぬ。まづ山の気色を見上ぐるに、

木々の梢も冬枯れて、木の葉ばかりに降る時雨、いとゞものわびしかりければ、悪次郎もそのかみといひ、山の姿奇しくして、いと清雅に化生すといふもむべなり、此の山にこそと思ひて、岩八諸共分け行ければ、山の峰に在りて怪しげなる女一人、杖に縋り出でゝいふやう「一郎様に御逢ひ申したく、此の山に詣まおそろしき変化出でゝ、日本無双の魔なり、其れに我に入りて是れより見へ行き給はゞ、必ず変化の通力に鼓る事なれば、御身共にはやとく帰り給へ」といふ。悪次郎答へて「一旦に斃さ物に働く事、我等は其の化物に逢はん爲、尚も奥の山に来りたれ、其の化物の住家は未だ一向に見えず、やる人、鬼は人を喰ひ」といふ。「仮の日を一日を経ずに命の限りなるべし、此の山に遊びたりし人、昔より一人も生きて帰りし例を見ず、われは其は人間にあらず、此の山に年久しく住む杉の精なるぞ、あなかしこ、我が言葉を信じて帰り給へ」と、云ふかと思へば消え失せぬ。岩八始終を聴き、悪次郎に押へて言ふやう「唯今、現にいふ所一理なきにしもあらず、由なき事にて大切なる命を捨てんこと更に益なし」といと諫めければ、悪次郎からからと笑ひて「臆したるか、岩八殿、汝はさ、敵を前に心の臆れたり、其の様よりは一念堅くして、鬼の形を変化すれ、我にはこゝに悪まありくとも、臆病者にては、この際まで卯年はこれより下山あるべし、我は誰に随ひても人を頼みては、我が為に何ともあるなれ」と、猛々しく言ひければ、岩八続いてこれ助言なれ、其の心に

あら〳〵、何を問ひ給ふ。さしも頼もしき御心かな。我甚だ満足せり。此の上は何國までも御供せん」といふにぞ、悪次郎も「さにこそ侍らん。」とて、なほ山ふかく入るに、向うの方より十四五なる童子一人來り、悪次郎を見て莞爾と笑ひ、「わが主人御身を今朝より待ち給ふ、いざさせ給へ。」と云ふ。悪次郎扨は是れ化物の眷屬ならんと思ひ、「こは過分に候、案内し給へ。」とて、岩八諸共打連れゆけば、向うに大きなる樓門あり。童子にいざなはれて内に入れば、化物の大將と覺えて座上に居たる。其の形頭に天冠のやうなる物を戴き、身には錦をまとひ、手に大きなる羽團を持ち、悠々としてまたすさまじ。それより數多の眷屬左右に列なる。いづれも異形の姿にて、次第々々に行儀をなす。悪次郎岩八に向ひ、「こは珍らしき見物かな。」とて、まづ座に著けば、彼の大將青眼を光らして曰く、「聞き及びし悪次郎とは和殿よな。今朝より汝を待つこと久しかりき。汝此の山の麓に來りし時は既に日暮れたり。それより此所まで、道の程凡そ六里に餘れり、これを越えて今此處に來る、其の刻限を思ふ時は、今汝が心に夜なるや晝なるや、又は何の刻にて侍るや、試みに是れを聞かん。」といふに、悪次郎始めて心付き、四方を見れば、日中なりし程に、呆れて返答もなく拜謝す。時にかたへの化物、頭に二つの角を生ひたるが云ふ、「いかに悪次郎が世に化物なしと嘲るに、麾下の者共變化して、悪次郎をもてなせ。」といへば、「承り候。」とて末座に控へし眷屬共、五人十人立ち出で、化けける事こそ目ざ

ましければ、或は其のまゝ一丈計の婆となれば、忽ち五六歳の童子となり、六尺有餘の大入道とこそ見えし、いとやさしき女となる、或は若衆と見れば大髭の奴となり、盲人かと思へば、衣冠正しき朝人となり、其の自由自在變々心言葉も及ばれず。惡次郎は是れを少しも恐れずして、いと面白き事に思ひ、彌〻なく覺えければ、大膽の者にて、いかに惡次郎、これにても化物にてさぞやといへば、惡次郎も今は降參して、いかさま御身は神通ある御人にて候はん、かく多くの眷屬を集め、自在の變化をなさしめ給ふ、願はくは其の方へ[illegible]といへば、[illegible]我此北嶺に久しく住みて、世の中に我慢放逸なる者を以て人を苦しめ、正しき人に惡事を勸め、非義惡行の類ひなき者を求め殺す天狗の首領なり、汝その惡心はなはだしく、雖も常に武邊を好み高慢甚しき故、我が眷屬となさんため汝が友の岩八と變化させて、此所に招き寄せたり、それなる岩八と思ふも我が眷屬なり、能く見よといふ聲に、ふり返り見てあれば、げにも岩八にはあらで、いと凄まじき天狗となりければ、さしも動ぜぬ惡次郎、少し恐れて恐れ入り、時に岩八が云ひけるは、今は天狗の弟子のことなれば、惡次郎は[illegible]命じてかくの如し、是れより[illegible]友が如くに目を開けば、其の數[illegible]愛宕[illegible]山の峰く[illegible]其の中に山僧、山伏あり、俗もあれば女もあり、[illegible]限りなく、終には[illegible]はうちやくしければ、惡次郎大きに驚き、今は我が身もかくやなら

れと陸地の岸の心地して、おそれける諸神に言葉をかけ、猶も不動の眞言を數十遍、肝膽をくだきし時に、けれは、さしも今まで恐れける天狗共、互に顔を縮め苦しみけるが、大路の天狗大音上げ、「暫く經文の讀誦をやめよ、汝唯今の有樣に恐れ、始めて佛心に志し、功德廣大なる不動尊の眞言を誦せるにより つて、不思議に危き命を免れたり。今よりして我慢の心を飜すべし」と、惡次郎が襟髮攫んで上ると見えしが、彼が居宅の廣縁にぞ落されたりける。家内の人々此の音に驚き出でて見れば、惡次郎なり。こはいかにと内に舁き入れ、さまざま勞り介抱しければ、程なく本心となりて、妻子を始め家内の者に、ありし次第を語り聽かせ、先非を悔いてこれより我慢の鼻も折れ、偏に佛神の冥慮をぞ恐れけるとなり。

二十六　高木齋相模にて難に逢ひし事

大坂に高木齋といふ陰陽師ありし。毎年春はこれ江戸に下り、諸高家の御屋敷に出入りして、卜筮の功甚だ驗ありければ、歴々も親しく仰せ下されける。一年例の如く吾妻に赴きける時、相模國を通りけるが、折ふし殘暑強かりし故、道はかゆかずして、驛舍ならぬ百姓の家に宿を乞ひ、從者と共に寢りけるが、夜も五更に近き頃ほひ、女の聲にてあつと一聲叫びしが、其の後は何の音沙汰も聞えず。齋

恐しく思ひ、いとゞ寒さにたへかねて、夜に出づる風情にて、寝所の外に出でて障子を開くに、家内よく寝入りて何の音もなければ心を安んじ、又もとの臥床に入らんとせしが、何やらん足にあたれば、手さし下して探りみるに、女の生首なり。大きに驚きて、四方をよくよく見廻しければ、昨夜の旅人の出入りし跡を見るに、これは唯事ならず、我立ち事を亭主に告げこぼへて、かへつて詮議にかゝらんと思ひ、かの首を臥床に入れおきしが、一つに我が身を見るに、着物の裾より手足に至るまで、血付きたり。驚きに堪へざりしに、何げなく此の事を亭主に告げなば、我が着物に血の付きたるを見とがめて、定めて我が仕業といはんこと必せり、所詮今宵の内、忍びて逃げ出でばやと思ひ定め、従者をも呼び起し、此の事を告げしかば、取るものも取りあへず、足にまかせて逃げいだし、其の夜の中に三里ばかりの所を過ぎて、漸くほつとしたりしに、あとより追ひ来る人も無かりしかば、それより程なくよそに、我が所にかへりしことなり。其の後は如何なりけんも知らず。」と、聞く人話せし由、一度二度を思ひ出づる。

二十七　[illegible]國某の事

泉州の堺の町に、[illegible]と云ふ商人ありき。昔年より[illegible]志やさしき男にて、諸國を經廻り、[illegible]

釈佛閣或は名勝古跡を尋ぬる事を樂しみけるが、一年熊野山の方に赴きける時、紀伊國日高の郡を通りしが、けに秋の日のならひにて、思ひのほかに暮れかゝり、殊更小雨さへ降り、何となくものあはれなりければ、

　こさめふる秋のゆふべのきりぎりすたえだえになる聲ぞかなしき

と口ずさみければ、一人心も細りゆく程に、今宵は此の邊に宿を乞ひ、一夜を明さばやと思ひしに、近き邊には家居も見えず、いかゞせんと辿り行くに、すこし道の傍なる小高き所に、家一軒見えければ、志賀右衛門よろこび、いそぎこれに行きて宿を借らんと、畦道を傳ひて、五六間許りも行くと覺えて彼所に至り、頓て案内を乞ひ、しかじかの由を云ひければ、内より三十許りの女立ちいで、志賀右衛門をつくづく視て、「旅人にて渡らせ給ふかや。一夜のほどは貸しまゐらせん、此方へ入らせ給へ」といと快く云ひければ、志賀右衛門よろこび内に入り、家内を見るに、此の女の外人一人もなし。志賀右衛門不思議をなし、あるじの女に向ひ「見申せば召使ひ給ふ人もなし、つれあひもおはしまさぬは、御他行にもや」と尋ぬれば、女うち笑み云ひけるは、「われ元より夫なし。たゞ子といふ者も候はず、一生寡婦にて侍る」といへば、志賀右衛門重ねていふ、「此所には絶えて家居も見えざるに、若き女性の獨り住み給ふことこそ不審しけれ。これ必ず僞りなるらん、眞を明かさせ給へ」といふ

し、女よく〳〵笑ひて、何しに僞りあらせん、我常は獨りすみと雖も、用ある時はこれなる箱の内より、男体出し使ひ侍るなれば、少しもくるしからず、更に不自由も候はず」といふにぞ、彼の箱をつく〳〵見るに、僅か四五寸四方の筥なれば、いと訝しく思ひたるが、志賀右衛門大きに驚き、こはたとへ我常音神明と思ひ、あまりの事の不思議さに猶もいかにも尋ね試みて、われ先程より御内を覗ひ見るに侍れ、何にても羹にして與へ給へ、ここにて御馳走なされたしといふ。女の曰く、いかにもやすき事に侍らん、一掛の鯛の膾一个酒の肴も随意の縁にて候へば、何をなりとも整へさせて候はんとて、はや物を出させ候。我常に童此箱の中より食物を出し侍る、これを與へ參らせんとて、この箱の上をとん〳〵と叩きければ、内より二人の童の形なる者出でて、此の中に入り候、わざと出だし侍る、いふ、今猶客人あり、汝は急ぎ酒肴を揃へて參らせよといへば、此の童子はい〳〵と、何度にても、又箱を叩けば、十四五歳の童子穴の中より出でたりしが、一は酒と肴をかへ數多持ち、いふに、これも應じて何度に付き、暫くして、彼の女は酒肴の童子を持ち出でて、志賀右衛門の前に並べ、扨もかの女の様子を見て、大きに驚き、これ人間にあらじ、此の餌を喰はん事いかゞならん、若しも喰はゞいかなる事やあらんと、心ならず喰はざれば、童子同じく案ず食を女を勧めけれども、なほ女の好みの者にいふやう「今は是非なし休むべし」といへば、二人共に懸けて彼の箱に入りぬ。志賀右衛門尋常の思ひをなし、亭女に向ひいふやう、「これ數

年來諸國を廻り侍ると雖も、遂にかかる奇術を見ず、御身はそもいかなる人にてましませば、かかる奇特をなし給ふ、願はくは御物語り候ひて、我が疑問をはらさせ給へ。」といへば、亭女の曰く、「是れ妖術なり、されども御身の爲に更に害なし、我此所に住むこと百餘年、御身の如く道に迷ひ來る人、これまで四人なり。此の術をあながちに問ふ人、其の内二人ありて、力なく命を取る、二人は問はずして命全く歸しぬ。」と語れば、志賀右衛門も其の言葉の恐ろしさに再び問はず。とかくして夜も明方近くなりければ、亭女しいふ、「最早夜も明けなんとす、これより往來の巷まで送り屆け參らせん、御身此所へ來しこと、假初に五六町と思へど、すべて人倫の道路、四方すでに五十里あり。夜前わが家の方を見上げ給ふゆゑに、通力を以て招きたり、されば今御身人力にて出で給はんこと、ゆめく思ひもよらず。」とて、志賀右衛門が腰に手をかくると見えし、やがて往來の道に出でたり。志賀右衛門は茫然として後を見かへれば、遙かの樹木生ひ茂りたる山の幾重も重なり、彼の家と見えし物は露ばかりも見えざれば、偏に夢の覺めたる心地して、それより熊野山に詣で侍りしとかや。不思議なりし事どもなり。

二十八　肥前國にて龜天上せし事

肥前の大村は[illegible]鯨の[illegible]所なるが、いつも十月の頃は鯨多く集まる故、漁夫共[illegible]出でてこれを捕る。一年例のごとく網を下し、小船数艘を漕ぎ列ねて、互に其の業を勵みけるが、一日向うの方に頻浪逆だ[illegible]、[illegible]は大鯨ならんとて、我劣らじと争ふ[illegible]東西[illegible]に走りて、一二の銛をぞ争ひけるに、[illegible]雷[illegible]乙天地[illegible]恐ろし。」といふ程[illegible]向うの山に駈け上ると見えた、[illegible]天[illegible]黒雲[illegible]、空に分け入りのぼりしが、雨の降ること車軸をなし、雷の音[illegible]ければ、皆々[illegible]空晴れ雲をさまれ[illegible]

[illegible]天に昇らんとする時、[illegible]蟄魚此の[illegible]

[illegible]

に是非の眞僞を知らず。

二十九　和田八熊を殺して發心せし事

伊勢國に和田八といふ狩人あり。鐵砲殊によく擊ちける故、外の狩人よりは多く獸を捕りける。或日いつもの如く、山に分け入りて狩りしけるが、大きなる巖のうちに熊の伏し居たるを見付け出し、よき仕合かなと思ひ、やがて鐵砲に火を移さんとせし時、かの熊和田八をきつと見て、其のまゝ兩手をあはせ、又わが腹を敎へ、身を悶え甚く苦しむ體なりしが、和田八元來無骨の者なれば、なじかは用捨すべき、難なく擊ち殺して肩に掛け歸りけるが、女房和田八を見るより、其の儘かき付きむしぶりつく程に、これは狂氣せしにやと思ふところに、女房俄に口走り、「扨々御事は情をしらぬ者かな、われ子を孕みて既に產み落さんとせし所を、御身見付けて擊ち殺さんとす。我是れを知ると雖も、臨產身重くして遁るゝ事叶はず、此の故に其のことを敎へて命を乞へども敢て免さず、是非なく殺されたり。われ此の恨み何ぞ盡きんや。」といひて、三返許りかけ廻り、其の儘彼處に倒れ伏す。和田八此の體を見て、扨は熊が執心女房に憑きて苦しめけるよと思ひ、まづ熊の腹を裂きてみるに、果して子熊一疋胎中にありしが、死せずして跳び出でたり。和田八流石に哀れを催し、此の子熊をさまざま勞りしが、

乳なければ是非なく、三日目に死したり。然れども和田八が少しの慈愛に感じけるにや、熊も執心晴れし、女房本心になりければ、和田八大きに喜び、ありし次第を云ひきかせ、始めて善心に基き、直夫婦共髪を剃り、熊親子をはじめ、是れまで撃ち殺せし獣の菩提のため、諸國行脚して道心堅固に終りけること、偏に此の熊こそ夫婦の者が善知識なりけると、有り難かりし因縁なり。

三十　小吉が亡妻毎夜來りし事

伊豆に小吉といふ者あり、年ごろ都に通ひて商ひをしけるが、上京の度毎に、或る宿の女房とよかりしが、いつの程よりか馴れ〔て〕契りけるに、後をば親々も知りて幸ひと許し與へければ、小吉は悦びて伴ひ、これより伊豆に連れ下り、夫婦の交はり睦まじく、偕老同穴の誓ひして暮さんとせしが、一家の人々も共に悦び、夫婦に家業精出しけるが、此の女房ふと病に患ひ出し、日頃に衰へゆきて、今はの頼み少なう見えければ、小吉いと悲しくて、醫藥を盡しけれども、生者必滅の理、遁るべきにあらずして、遂に空しくなりければ、小吉は人目も打忘れ、かき口説きけるは、「誠に夫婦に心を通はして、互に思はれ参らせ、顔に色を顯はさずとも、連理の契り枯らさで、かくあへなくなり給ふ上は、我存命へて何ならん、早追ひ付き参らせ、冥土にて逢ひ申さん」と、

既に自害と見えしを、人々驚きておしとゞめ、様々に慰めければ、小吉も今は術なく、それよりは一間に閉ぢ籠り、一向人にも出で合はず、明暮亡妻の事のみ思ひ歎きければ、一人の老母を初め一家の人々うち寄りて、かくては行末如何あらんと気を痛めけるが、ある夜小吉が臥床にて、物語する声の聞えし儘、老母怪しく思ひて、そと覗き見るに、小吉一人にて他人なし。其の仔細を聞けば、既に死にしたる女房と語らふ様なりしが、小吉が言葉のふしにて、亡妻が姿も見えたるなりしが、それよりして毎夜毎夜かくの如くにて、小吉は身體衰へ行き、次第々々に弱り果てければ、様々の霊験ある山伏な招き祈禱加持すと雖も、更に験しなければ、老母の歎きいはん方なく、一家の人々うち寄りて、如何何せんと煩ひける。しかるに其の頃北山に、道徳堅固の律僧、行ひすまし在しけるを聞きいだし、一門の人々急ぎ彼所に行きて、しかじかの次第を語り、御祈禱を願ひ申しければ、此の僧始終を聴き給ひ、真に痛はしき事なれば、祈禱をなして参らせん、先づ病人の様體を見るべしとて、此の人々とうち連れて伊賀に立ち越え給へば、老母を始め一家中、こは有り難しと喜び奉れば、頓て小吉が枕下に至り、其の有様をつくづく御覧じ、小吉に仰せ有りけるは、まことや御身近頃愛妻に後れ給ひしに、猶も亡魂御身につき添ひ給ふとやらん、いとしをらしき事にこそ侍れ。然れども未だ其の虚實分明ならず、是れを正しく知るに、我一つの霊符あり。今宵亡妻来り給はば、此の封じ物をなさりふく

開けて見せ給ひて「こはいかなる物や此の内にある、さして見給へ」と問ひ給へ、眞實御事の妻ならば、必ず知りて答へたまはん、若し又答ふること能はずんば、野干鬼魅の類御身を誑し申すなり、[illegible]とて、[illegible]内を見給ふこと努々あるべからず。」とて、よく〳〵封じて小吉に渡し給へば、小吉御符を押しいたゞき「誠に有り難く候なり、恥かしながら亡妻在世に申しかはせし事候へば、死して後も我に附まとひ候ふ事、更に疑ひなく候へども、御示しに任せ試み申すべし。」とて、其の夜を待ちけるに、案のごとく、妻の幽靈、亦もの刻限に來りてうち語らふ時に、小吉いひけるは「眞に御身死すと雖も、猶我に附纏ひ給ふ志の有り難さよ。其の心いよ〳〵實ならば、此の封ぜし内にいかなる物やある、教へ給へ。」と、かの幽靈が前にさしおけば、此の幽靈急に顏色變じ、身を震はし「あら忌はしの物や、はや〳〵取り捨てたまひ給へ。」と、いと苦しげに聲震はし、遂に更によりつかねば、次の間に[illegible]給ふ律僧、されげこそと水晶の珠數さらさらと押しもみ、惡魔降伏の法を修せられければ、忽ち白狐と化して、かき消すやうに失せにけり。小吉此の有様を見て、茫然と呆れたる所に、律僧たち出で諭して仰せけるは「[illegible]御身の[illegible]然るに御身を[illegible]心[illegible]、野干の見入る[illegible]一家の[illegible]相續[illegible]、[illegible]なる老母へ[illegible]心[illegible]給へば、小吉も心の[illegible]はれて、[illegible]

雲清朗として、秋の月の隈なきに逢へるが如くなりければ、日を經て回復し、家業をつとめ老母をいたはり、亡妻の後をも弔ひければ、次第々々に繁昌し、目出たく榮えけるとなり。「眞に有り難き御僧かな」とて、聞く人尊みけるとかや。

太平百物語巻之三　終

太平百物語巻之四

二十一　女の執心永く讐を報いし事

備後國尾道に、小左衛門といふ者あり、代々富貴の家にてありけるが、其の親を觀勇と申せしが、此の觀勇の父、故ありて竹といひし召使ひの女を、罪なきに罪におとし、剰へ食物を絶ちてなぶり殺しにせられけるが、此の竹死せんとせし時、苦しき眼を開きて云ひけるは、此の恨み必ず此の家のあらんかぎりは、思ひしらせんと叫びて果てしが、其の死霊觀勇が父に憑きて遂に殺しけるに、猶も末期の言葉の如く、又觀勇をも悩ましける。觀勇次第に弱り、いまはの限りとなりて、一子小左衛門を招きて申しけるは、我れ常に佛神に祈り、此の災を遁れんと思ひしかど、遂に又竹が爲に命を失ふなれば、汝此の家を相續し、ねんごろに佛神を信し、貧しき者に慈悲を與へ、此の災を遁るべしといひ終りて死しけり。小左衛門是非も泣く泣く父を野邊におくり、追善残る所なくして、一周忌をも懇に營み侍りしが、其の明の朝座敷に出で、前栽を詠め居りけるに、側なる帳柱等に至るまで、血多く流れかゝりてあり。小左衛門これはいかにと思ひながら、ひそかにこれを拭ひ取らせ、家來の者に

ともいへ續きて居りしが、次の日晴て、居間を見るに、此室にもて又是より夥敷こぼれて、夥しく血に染みて、小左衛門大きに驚き、いまは力なく家来を集めて、しかじかの由を語りて、家内の者皆其の奇を見れたに、血の付きたる所少しもなし。此の由をいふに、小左衛門大いに怒りて、是非無く祓はせに血の付きたるを、我が眼に見えて、家来が眼には見えぬ故にや、[illegible]、小左衛門が指図に任せて、此處彼處拭ければ、小左衛門見て、雑巾までも血に染りぬ、取りかへて拭ふべしといふ。家来拭ひけれど雑巾も見えず、されども仕合して拭ひ、取換へて拭へば、又其所にも血つきてあり。夫より前なる所にも血つき、それより日ごとに血のつきける。家来の者ども呆れ果て、二日三日と過ぎるうちに、窓の竹が節にも血つきたるを、終には家来の者も見えて、小左衛門一人ならず、家内の者も見えたり。日毎に血滴りて、小左衛門が坐する所も血に染みければ、衣類にもこぼれかゝりしを、ひたと引きすて、此の由一家の人を聞きて、淺ましく思ひ訪ひ来れど、小左衛門困り、ひたすら一頓となく、御祓は其の神へ家内に飾りて、大寺の僧も頼みて祈禱を修しけれど、是は運命なれば、御覧の如く、しかれども他の人は更に一滴の血を見ることなく、唯小左衛門が目にのみ、家内何方も血ならずといふ事なし。此由は遂に小左衛門が心に指かれも、[illegible]一二三皆を鎮めしが、[illegible]まし

として食物綺麗に拵へさせ、彼の者にくはせけるは、此の器物はよく／＼改めの清淨に候、聞召し候へと進めければ、小太郎是を見て、げに／＼綺麗なる食物かなとて、少々喰ひける中に、けて頭をかゝりければ、もはや喰ふことも叶はず、漸う逃げかへりしとも、此方にては思ひもよらず、とて、持ちて還しけるが、すぐ其の年に一年許りにして、遂に重く煩ひて身罷りぬ、其の家断絶しけり。聞く無罪の者を殺したる恨みによつて、親子三代とり殺しけることこそ恐ろしけれ。

或人の謂く、此は播磨の皿屋敷と云ひ傳へしは、實は此の事なりけるとぞ。

二十一　松浦庄太夫猫又と問答の事

松浦庄太夫といふ侍あり、常に武勇を専らとして殺生を好み、多く獣を殺しける事數年なりし、一夜の事なりき、いつもの如く夫婦の間に臥し居けるに、何ものか寝間に寄り來れることなれば、庄太夫枕を起こし其の顔を見るに、寝間を手燭にて近付きて、目覚ましければ、汝よ我が怨み報は情なき者かな、我がことの爲に仇となりし事もなきによくも殺せし、此の恨み晴さでおかれね、ほゝ、汝が其の皮肉にくひ入りて見よ／＼、十日の内には責め殺さんぞ、と二三度庄太夫を睨み付けければ、家内の者は此の體を見て、恐れおのゝきて居たる。されども庄太夫は心剛なる者なれば、打笑つて曰く

く上おしれ今我が妻にとり憑き、様々に口ばしれども、我今まで殺生したる悪業限りなければ、いかなる獣やらんも知らず。我常に殺生を好むと雖も、敢て咎なきを殺さず。去れば己は何といふ獣ぞ。名乗るべし」といひければ、伏したる女房すつくと立ち、「何の咎なきは殺さぬとや。我は生駒八十介殿に久しく育てられし猫なり。昨日の暮方何心なく縁先に伏しゐたるを、おこと後に来りて情なくも刺し殺しぬ。かく無罪の殺生をしながら、何とて偽るや」とはつたとねめ付くれば、正太夫これを聞き大きに怒つて云ふやう、「扨は己は八十介が家の古猫なるや。己ここ近き頃さまざまに変化して、人を悩ませしこと限りなし。我此の事を慥かに知る。此の故に昨暮折を得て害しぬ。然るに其の恨みをなさん為、妻を苦しめ殺さんこと、甚だ以て謂れなし。真に恨みをなさんとならば、など我に憑いて仇を報ぜぬや」と云へば、答へて云ふやう、「我もさは思へども、おことは心剛なるゆゑ、いかに窺へども其の間を得ず、此の故に妻に憑きしこと」といふ。正太夫笑つて曰く、「畜生なればとて卑怯至極の仕業かな。既に己が産みたる子猫、八十介方に数多あれども、咎なければ殺さず。然るに恨みなき我が妻を苦しめ殺さん事、人間の道にして殊に恥づるところなり。よし〳〵我が妻を殺すならば、我又汝が産みたる子猫ども、残り無く殺すべし。我是れを殺す心はなけれども、おのれ道に違ふ故に、我又止む事を得ざるなり」と、理を尽して云ひければ、俄に驚く風情にて、「あら悲しの仰せやな、然らば御身の妻

な役す末じ、任俠の銘を錆け給ひこと、身を絲の紋きしかば、正に其うちうなづき「さあらば正宗を得らしや、此事を述べ謝禮をなし、飛波が靈に成佛得脱の法事をなして得さすべし」然るに其れにて以前年の靈は甚しく、偏に家を潰さんとせしが、今は穩かに一族を祐る靈と仰せらる」と、其後は世と生きたりしが、人而に迫ても、其の家の祝言なし給も、更に霊驗と賴らず、一段へ年經るに從て變化自在をなす、音にに託言し人を惑すの術より、是れ則ち怨みの靈なれば因縁なれば、然ばとて事に立し、惣左衞門は妖たる靈は我に報むべからず。然るに今宵の靈を示してよりて、邪氣變化の術も折れぬ。迷へ給はず、無佛の道を避るべき法事をなして、古き塚へ、今は眼を中すべし。とも云ひも終らず、其宅へ向かひしと聞と思へば、其は夜陰に紛れしを、人を助け抱き入るれば、怪う只がの、妻に火の魂光みて、其の顔を見はし消えうせぬ。それより家は精霊の如く、後を平に墓所を供せしか、其の後は何の事もなかりし、其の非時も我等に祟る事なく、誠は此の靈が怨念を解たる節なるにか、戦し、此の家に祟りをなすなりと、古人言ひあへりけるとかや。

三十三　孫六女郎蜘にたぶらかされし事

當市南町に四十二代を家あり、田畑數多持ちたる郷士ありけるが、本宅より十五町許の隔れし

別墅を設ひ、をりふしは此所に行きて心を慰めけるが、折しも水無月なかばにて、ことなう夏日堪へがたかりければ、毎日此處に來りて納涼しけるが、竹縁に端居して、牀下を流るゝ水の清きにこゝろをすましつゝ、かくぞ詠じける、

せきいるゝ岩間の水のすゞしさをわがこゝろにもまかせつるかな

あまりに快く覺えて、そよ吹く風に睡眠の催しけるに、何國よりか來りけん、年の頃五十許りなる女、身には五色の衣裳を着し、孫六が前に來る。孫六怪しく思ひ、「いかなる人ぞ。」と尋ねければ、老女の曰く、「我は此の邊に住む者なり、御身常々此所に來りて、四季折々の詠めも無下ならず、殊更今の御口すさみを聞きまゐらせ、一人の我が娘御身をふかくおもひ焦れ侍るなり。子をおもふ親のならひ、あまり不便に候へば、情をかけてやり給へ。いざやわが住むかたに伴ひ參らせん、いざさせ給へ。」といふに、孫六も怪しみながら、心そゞろに伴ひ行けば、大きなる樓門に至りぬ。内に入れば所々に大小の門戸ありて、遙かに奥の方に至る。むかうを見れば其の結構言葉に述べがたし。老女孫六に向ひ、「暫く此處に御待ちあれ。」というて奥に入りぬ。孫六心に思ふやう、こはそもいかなる人の住家やらん、心得ぬ事かなと、且疑ひ且怪しみゐる所に、十六七許りなるさも美しき女の、身には錦の羅に五色に織りたる綾を纏ひ、髪は長くて膝に垂れ、いとたをやかに唯一人歩み來る。孫六此の體を見

るより、心も消え入り魂も氷に凍ぶ心地して守り居ければ、やがて孫六が傍に寄り、すこし前には
背に打ち交して云ひけるは、「真に御身を慕ひ參らせし事は、はや幾つの月日なるか、其の念力の通じける
らん、かく〳〵なしける間しきに、今よりして夫婦となり、何時までも契りなば嬉しからんと、あらゆる人
つゝ申すにぞ、孫六茲へ申しけるは、「真に御志有り難く候へども、我等如き賤しき者、たとへ御
姉とも申すべき、其の上我は定まる宿の妻あり、此の事ありとも寄り奉らず、いやとて見捨てまゐらせ
し折からさきに、内地なる嫁も志有りがたけれども、夫婦の縁こそ拙くとも、御志は忘れ奉らずとは
と、いと素直に断りければ、此の娘恨みたる顔にて、「聞く心いかで仰せかな、おれ御身に焦れしこ
と、殊に人なる御身に添ひ、御身の別れに來り給へば、いつも我のほとりにて行き給ふさへ、此の世の情を
知らずや、然るに、一期一世の落花、いかに何も御身様を用ひて打殺さんとして結びたへ、さよう人にも聞かせ
歸り給ふ」と、か程に心を盡し給ふも、子をおもふ心の闇ならずや、かゝるときは胸なる我が思ひを晴らさせ
給へ」と言ひけるを聞けば、何ぶんも出來ぬ返事なるや、元來は慕ひける事なれば一向命を一生涯び
はつる事もなからぬ身の、かくやんごとなき御息女に、一夜の枕をかはすべき本意なくて、とて、いみじ
おとなしく申せしに、「かく角御身に離れなば、とても生き永らへ居づらば、孫六否にも扱ひ、あなた此方と逃げ廻らんと思
へば、ありし家形は消えうせて、もとの竹林にてありければ、孫六茫然と呆れし、夢かと思ひしに覺れたた

る氣色もなく、正しき事かと思へば、つゐ形もなし。餘りの不思議さに從者を呼んで「われ此所に假寐せしや。」と問へば、「さん候、半時許りも御寐になり候。」といふ。孫六奇異の思ひをなし、邊をよくよく見廻せば、小さき女郎蜘そこらを靜かに歩み行きぬ。上の方を見やれば、軒には數多の蜘どもさまざまに巣をくみて歴然たり。孫六つくづく案じみるに、一昨日の暮方煙筒にて追ひたりしも、陰蜘なり、さては此の蜘我が假寐の夢中に女と化し、我をたぶらかしけるならん、恐ろしくも忌はしき物かなとて、從者にいひ付けて悉く巣を取らせ、遙かの野邊に捨てさせければ、其の後は何の事もなかりしとかや。

二十四　作十郎狼に逢ひし事

大坂北久寶寺町に、白粉屋作十郎といふ者あり　常に佛法を深く信じけるが、一子成人しければ、家の業を譲りて、日本廻國にぞ出でける。すでに西國の方は廻り仕舞ひ、關東の方に赴きけるが、上總國かぎりの山といふ所にて日暮れぬ。然れども此の麓には家居もはかぐしく見えず、いざや此の山を過ぎて、あなたに宿らんと思ひつゝ、たどり行きしが、昔重保とかや云ひし人の、

我が爲に憂きこと見えば世の中にいまはかぎりの山に入りなむ

と詠みける山をつらく思ひ出づるに付けて、いとゞ我が身の上も心細く覺えけるが、固より命の限りを修行する身なれば、足に任せて行く程に、知らぬ山路をなほ分入り、山懐に入りぬれば、既に身の毛もよだつ程物凄く、足の立ち所もしどろになりぬ。作十郎心に思ひけるは、我浮世の障りをあけ、佛法修行に身命を擲つと思ひしに、未だ煩惱のきづな切れざるにや、淺ましくて心中に慚愧し、日頃尊み奉りし千手千眼の陀羅尼を高らかに唱へて、猶山深く歩み行くに、道の眞中に大石の如くなる物ありて、動く樣に見えければ近く寄つて見るに、さも凄まじき狼にて、眼を怒らし大きなる口を開き控へゐたり。こはいかにと後を顧みれば、いつの間にか來りけん、同じく劣らぬ程の狼、金の如き眼を光らし、唯一口に喰らはん勢ひなり。作十郎前後に挾まれ、今は遁るべき道なければ、我が命すでに限りの山に究まれりと觀念し、肩に掛けたる笈を下し、心靜かに念佛四五遍唱へ終り、狼に向ひ云ふやう「汝畜生なりと雖も、我がいふ事をよく聞くべし。我此の度日本廻國に志し、大方に靈場をも巡り、今既に關東に赴く所に、圖らずも此の山にして汝等に出合ひたり。元來不惜身命の修行者なれば、命は塵よりもなほ輕し。されども今此所に臨み、不意にかくして、汝等が腹中に入らん事是れ一つの歎きなり、畜類ながら心あらば、此の理を聞き分けて、我が一命を助くべし。然るに於ては、汝等が來世畜生道を除かるべき經文を誦じて報謝とせん、心なくんば唯今餌食とせよ」と、眼

を塞ぎて観念しゐけるに、前後に二疋の狼きたりしも、悪性なれども、此の理にや感じけん、然れる気色も見えず、忽ち口をうちだれて、遙かあなたに退きしかば、伊十郎此の體を見て、やうやうと起き上りけるが、今は心安しとて又笈を肩にかけ、道を求めて過ぎ行けば、雷の如くなる聲して、二聲叫びけること凄まじければ、それより漸う山を越えて里に出で、とある家に宿を乞ひ、山中の有様を亭主に語れば、あるじを始め家内の人々横手を打ち、「抑此の夫婦の狼に逢ひたる者、一人も生きて帰りし例を聞かず。眞に御身は有り難き桑門かな」とて、いと懇に饗應し、夜明けて出立に志し、終に日本国中、思ふまゝに修行して、近き頃芽出たく往生を遂げられけるとかや。

三十五　三郎兵衛が先妻の幽霊となり来りし事

河内國に三郎兵衛とて、家富み栄えたる百姓あり。夫婦の中も睦まじく、心豊かに暮しけるに、此の女房風の心地と患ひ出し、次第々々に重くなり、既に危かりければ、三郎兵衛限りなく悲しみ、枕下に寄りて口説きけるは、「御身若し世を早うし給はば、一人の幼子誰ありて養育せん。然ればいかなる所へも遣はし、我は髻を切りて世を遁れん」とぞかこちける。女房苦しき息の上に目をほそぼそと開き、三郎兵衛が顔をつくづくうち守り、「げにや浮世の慣ひながら、假そめに病の床に臥し、御

身に覚だも参らずしここに趣をしさま、すのたりも武勇健者の者は、簡臨の際にも遁れ給はぬと聞くなれど、此年紀が心に疑はしさなれど、佐々木殿と傳聞きては、其の静心を亂り給ひ、後の妻を迎へ入れ給ひて、後に残りしうたゝる一子をば持て、此の家を繼がせ給ひしゆゑ、たゞ給一つあらざりしに、忘れさせ給ふなと、是れを此の世の限りにて、朝な夕なと歎き給ひけり。三郎兵衛は妻が遺言も不盡なりに、ことわりは一子とかくたゞ日を送りけるに、其の中らいつしか移り行く年にさへありければ、一家の人々打寄り、とかく後妻を勸めけるを、三郎兵衛も始めのほどは承引もせざりしが、一子の爲と思ひ定め、是非なく後妻を迎へけり。此の後妻は一家の人を打語らひ、種々に謀りけるが、三郎兵衛が一子をいたはりししと思ひ、庭に出で、后内にいらんとせし時、ふと軒の方を見やれば、死にたる先妻(女房の)隙間より座敷の體を窺ひ居けり。三郎兵衛は驚き思ふやう、扨は先妻未だ成佛をなさで、宙宥に迷ひけるかや。一朝に後妻を娶りしは、偏に心さしを残せし爲、鏡の一念は、今宵の亡魂もねたみ怒りし事もことわりなれば、如何に先妻の幽靈に見えけるにや、先妻の靈魂こそと思ひ、三郎兵衛は後妻を離別し、一子を養育しける。さて三郎兵衛も後妻の事を思ひ、終に出家しけるとかや。

語らひ給ふな申候、是實は亡妻様の思ふやらん、宵より外縁に佇みて、此の座敷を見入れしを我慥かに見屆けたり。然れば、御身の爲にもよからず、御いたはしく候へども、今宵すぐに御いとま參らするなり。此の事あなかしこ、人に語り給ふな」と、涙ながら申しければ、此の女も三郎兵衛が實儀なる物語に、いひ出すべき言葉なく、さしうつぶいてゐたりしが、俄に氣色かはりて「なういかに三郎兵衛殿。只今の御言葉こそ限りなく恨めしけれ。我等末期に申せし如く、後妻をはやく入れ給へかしと、思ふ日數も移り行く、御志は有り難きに似たれども、一子が母のなき事を思へば、悲しく候ひて浮びもやらず、夜毎には此の座敷の縁先まで、愛子が安否を窺ひ來る。然るに今宵後妻を迎へ入れ給ふ有樣見參らせ、心の内の嬉しさ中々言葉に盡されず。今はや此の世のおもひ晴れ、速かに成佛せんこと疑ひなし。何とぞ嫉妬の心を懷き申すべき。いかならずしも此の女性と夫婦になり、愛子を守り立て給ふべし。わが爲には月毎の忌日をとひてたび給へ。さらばさらば」と云ふかとおもへば、後妻は彼處に倒れ伏す。三郎兵衛は隨喜の涙に暮れけるが、臥したる女を呼びおこし、ありし次第を語り聞かせ、先妻が願ひに任せ、再び夫婦の契約を交しけるに、後妻の心貞節にて、繼子をよくよく勞り育てけるほどに、其の後は亡妻の幽靈も來らず、一子も年經て成長しければ、後式を讓り與へ、わが身は後妻諸共に隱居し、芽出たく世をぞ辭しけるとかや。

三十六　百々茂右衛門ろくろ首に逢ひし事

若狭國に百々茂右衛門といふ侍あり。ある時夜更けて室町を通られけるが、水谷作之丞といふ人の屋敷の高塀の上に、女の首ばかりありてこなたを見し處に、怪しく思ひ、月影によく透し見れば、即ち作之丞召使ひの腰元なりしが、茂右衛門を見て莞爾笑ひければ、茂右衛門いよ／＼不思議なりし、持ちたる杖にて頭をきと突きたりしに、是れに恐れて逃げ惑ふ風情にて、やがて高塀の内にて落ちたり。茂右衛門は夜更の事なれば、不審しながらも其の儘にして歸宅しけるに、此の腰元よく臥し居たるが、あつと叫び苦しみければ、傍に臥したる下女、此の音に驚き覺めて、「如何したまひける。」と問へば、此の腰元苦しき息の下より、「我も恐ろしき夢を見侍る。いつも心安く旦那殿と語り給ふ百々茂右衛門殿に、此の門前を通り給ふに行き逢ひしに、[illegible]を見て携へ給ふ杖を以て、我が頭を散々に打ち給ふ程に、あまりの苦しさに堪へかねて、逃げ走ると思ひしが、夢にてこそ侍りつれ。」と語りける。此の事作之丞耳にも入れしが、「夢は儚かなきものなれば、さる事もあるべし。」と云ひて止みけるに、其の翌日茂右衛門來り、世上の物語などして後、[illegible]に作之丞にそれとなく語り、腰元が事をしか／＼のよし語りければ、作之丞も[illegible]此の腰元が物語に少しも違はねば、扨は世に云ふろくろ首なりけりと、漸くに[illegible]



く不便の事に思ひて、僅かに若干の金を一圓に包み、此の由を書け知らせよとて遣しければ、此の女いと悦びし事におもひ、直に主人に暇を乞ひ、髻を切り尼となり、當生の菩提を弔ひし事の[illegible]幸ひ、一生涯に[illegible]ありけるとぞ。

二十七　亡者念佛に[illegible]なせし事

江戸牛込の片傍とかに、太郎市とて獨住の盲人ありけるが、淨土宗にて殊に信心なる男なれば、朝夕佛前に向ひ、念佛怠る事なし。或る夜いつもの如く念佛して居たりしか、後より誰ともなく念佛を唱ふる者あり。太郎市訝しく思ひ、後を見かへりしに人なし。又念佛すれば同じく申すほどに、扨は我が心の迷ひならんと、一心不亂に申しければ、彼の念佛次第に大音になりて、傍にて[illegible]と。太郎市不思議に思ひ、急に後をふりかへり見れば、何やらんばさりと物音して、目に遮る物なし。こはいかにと思ひ、心ならず夜を明かして、急ぎ檀那寺に行き、住持に此の由告げ[illegible]し、住持も[illegible]の所へ[illegible]今宵御身の許に[illegible]と[illegible]太郎市は[illegible]太郎市か[illegible]一圓に[illegible]太郎市

がいふに違はず、後より同音に唱ふ者あり。始めの程は一兩人の聲なりしが、後には數十人の聲となりて、責念佛頻りなりし所を、和尚よく／＼見すまし、此の者どもが後に廻り、「南無阿彌陀佛」と一聲、落ち懸るやうに、大音聲に申さるれば、此の一聲に肝を消し、俄に狐の化を顯はし、飛ぶが如くに逃げ失せたり。和尚さればこそと、太郎市に向ひ申されけるは、「此の後又も來るまじ、心安く念佛し給へ」とて歸寺せられしが、狐ども懲りけるにや、それよりして再び來らざりけるとぞ

二十八　藥種屋長兵衞金子を拾ひし事

泉州堺に藥種屋長兵衞といふ人あり。生得律儀なる人にて、常に此所の天神を崇敬し、毎朝怠る事なく社參しけるが、或日の事なりし、常の如く未明に起き出でて參詣し、神前にぬかづき歸らんとせしが、道の傍に淺葱縞の財布一つ落ちてあり、取り上げ見れば金子なり。こは誰人の落しつらんと思ひながら、まづ取り歸り改め見れば、五十兩包にして二つあり。長兵衞思ひけるは、我はからずも大分の小判を拾ひたり。これ我が幸ひに似たれども、落せし人の難儀を思へば、我が悦びの十倍ならん。所詮御奉行所へ訴へ、町中に御觸を願ひ、辻小路に札を出さば、金主出で來らぬことは有るまじとおもひ定め居る所に、常々こゝろやすく出入する五介といふもの來りければ、長兵衞此のことを

五介に語るに、五介もいふやう、「それは心得ぬ事なり、左程の金子を落すべき者ならず、其の金子を見せ給へ」といふに、頓て取り出し見せければ、五介よく〳〵見定め、大きに笑つて曰く、「これ眞の小判なるまじ、御身常々律儀なる人故、狐のたぶらかしける[illegible]なり。見給へ明日も又不思議あらん、若しさもなくば眞の金子ならめ。先づ一兩日御待ちあつて、奉行所へ訴へ給へ。」といふに、長兵衛もいか様とおもひて、其の日の訴へ延引せり。あくれば長兵衛例のごとく疾う起き出で、天満宮へ参らんと思ひ、表の戸口開けば、檜臺の上に何やら[illegible]に包みたる物あり。長兵衛怪しく思ひながら、取りこれ置きて、天神宮へ参詣し、急ぎ歸り五介を[illegible]寄せ、此の體を語りこさし出しみせければ、五介これを見て、さればこそとまづ杉原の包を明けて見るに、内には芥に馬の糞を包み、砂に混へて包み置きたり。五介長兵衛にいひけるは、「御覧候へ昨日わが云ひしに違はず、是れ狐の所為に極まりたり、昨日の金子もはやく出し給へ、久しく置かばいかなる災かあらん、[illegible]何方へも捨てまゐらせ申さん」といへば、長兵衛喜び、頓て財布を取り出し、五介に渡し、「よきに計らひたび給へ。」と頼めば、「御心安かれ」とて、金子百兩と檜臺とを受取りて出でける。長兵衛は心も安んじ、災あらじと悦びてゐたるが、後によく〳〵聴けば、[illegible]眞の金子に[illegible]檜臺と杉原包は、[illegible]金子を横取せし計略なりとぞ聞えける。しかれども道に背きたる事なれば、[illegible]

徒の弟子もいつしか療治の為に消えはてゝ、次第に形くづれ、剰へ狂氣となり、毎日町小路を裸になりて踊ひありきしが、遂に苦しみ死しける。これを聞く人、「眞に眼前の天罰なり」とて、皆々眉を顰めて恐れあへりけるとぞ。

太平百物語巻之四　終

三十九　中部隼太化物に宿借りし事

伊勢国に中部隼太といふ者あり。川の江といふ所より松山へ用ありて行くとて、東雲の頃宿を立ち出で、道を急ぎけるが、凡そ四五里も行くと思へば、俄に日暮れたり。隼太おもふやう、今は未だ午の刻には過ぐべからず、然るに斯く日の暮れけることの不思議さよと思ひ、向うの方を見れば農人の家と見えて、燈の光幽かに見えける故、便りて、表の戸を敲きければ、内よりあやしげなる老女立ちいで、たそやと答へしまゝ、「我は旅人にて候が、未だ日は高く侍ると思ひしに、俄に暮れたり、今宵一夜の宿を貸させ給へ」といふ。老女聞きて「安き御事なり、此方へ入らせ給へ」といふ。やがて内へ入りければ、隼太は納戸に入りて休らひけるが、何となくあやしく思ひて隼太は眠らで居たる夜の更、急に家鳴り出し、そこらの柱より臥し居たる床にいたるまで、残りなくゆるぎければ、扨は地震にやと暫くはこらへ居けれども、次第々々に強くなりて、はや臺所の方は柱倒れ屋根落ちければ、隼太いそぎ外に逃げ出でんとするに、納戸も崩れ隼太が傍の柱も倒れかゝりて、天井つぶれ隼太が上に落ちかゝりたり

けれど、今はなか〳〵動くべきやうもなくて、聲をはかりに泣きさけび、「われ人々よ助け給へ」と喚きければ、往來の人々これを聞き付け立ちより見るに、とある所に卒塔婆木多く引きかゝへ泣きゐたりしかば、ありあふ人々呆れ果て、やう〳〵に助け起せば、隼太茫然としてそこらを見るに、皆々墓所にて、柱と見しは卒塔婆木にて、夜とおぼえしも其の儘もとの日中となりければ、隼太は大きに打驚き、もと來し道に助け出され、それより松山へは行かずして引き返し、川の江に歸りしとなり。此の者、日頃多くの人をたぶらかしけるを狐の憎みて、かく惱ましけるとぞ申し合ひける。

四十　讃岐國騎馬の化物の事

或者讃岐國丸龜より、三井といふ所へ行くとて、千代池の堤といふを夜中に通りけるが、向うの方より騎馬の多く嘶きさうたる體の聞えければ、此の僥心に、あやしや夜いたく更けて、向う方へ行く人々にてありけるぞと思ひながら、しづかに靜み行きけるに、蹄の音次第々々に近くなりて、今は其の間十間許りにもなるらんと思ふ折節、向うの方をきつと見るに、音ばかり甚しくて其のあやめ少しも見えず、こは不思議と思ひながら、堤の上にかゝれば、かの騎馬行き過ぎて後に聞ゆ。此の者愈怪しく思ふ樣、此の堤より外に行くべき道なし、あら不審しさよと、立留まつてよく〳〵聞けば、堤の下

にありくと聞ゆ。さらば行きて見ざらめんと、堤を下りて見れども更に見えず。暫くしてまた上の堤に聞ゆ。[illegible]て上にのぼりて聞けば、[illegible]く堤下にあり、下へ行けば上に音す。此の僧ふかく怪しみながら、[illegible]、志すかたに行けば、また向うの方に聞ゆ。追ひ行きて聞けば後にあり。此の僧呆れて四方を見廻しければ、夜ははや東より白みてほのぼのと明け渡りぬ。此の僧大きに仰天し、それより三井にぞ急がれける。後よくよく聞けば、古狐が夜ごと[illegible]から往來の人をかく誑しけるにこそ有りける

四十一　力士の精盗人を追ひ退けし事

河州に作野[illegible]の何某とて富める人あり。或夜の事なりし、盗人五人押し入りて、家内の者を悉く引き縛り、亭主一人を扶け、藏の内を案内させける。亭主力なく土藏に伴ひければ、銀箱を五つ取り出し、五人の盗人、つづゝかたげ出さんとせし時、俄に藏の中鳴動し、一人の力士現はれ出で、盗人等が前に立ち塞がりければ、五人の者共これを見るに、面は赤く[illegible]眼は金の如く光りて、其の有様[illegible]しかりければ、盗人共は肝を消し、彼の銀箱を打ち捨て[illegible]、藏中も[illegible]鎮まり、彼の力士も見えざりければ、亭主此の體を見て限りなく喜び、[illegible]家内の者の戒め

尋ねきて、かやうの由を語りければ、亭主の老母聞きて、それこそ此の家に先祖より持ち傳へし力士の繪像なれ、されども年久しく藏の一隅に有るべし、其の儘に取り出し見給へといふ時、則ち取り出し見るに、此の木像汗を流して生けるが如く、兩足を見れば土の付きてありし程に、扨は此の奇瑞に疑ひなしとて、それより厨子に結構し、此の力士を納め、永く祝ひ祭りけるとかや。

或人の曰く、「此の力士は鳥佛師の作にて、其の後も奇瑞ありけることぞ。

四十、西京陰摩羅鬼の事

山城國西京に宅兵衛といふ人ありしが、或時しも夏日の暑へ難き頃、其の近邊なる寺に行きて、方丈の縁に出で暫く涼みしけるに、いと快くして暫時眠りを催しける時、俄に物の聲ありて、「宅兵衛、宅兵衛」と呼ぶ。宅兵衛驚き覺めて起き上り見れば、鷺に似て色黒く、目の光ること燈の燃えたるが如くにて、羽を振ひ鳴く聲人の如くなり。宅兵衛恐れて法縁を退き窺へば、翼を擴げて羽搏きすと見えし、頭より次第々々に消えて、遂に形は失せけり。宅兵衛奇異の思ひをなし、則ち此の寺の長老に語りて樣子を問ひけるに、長老答へて、「此所に今まで左樣の化物なし。此の頃死人を送り來る事ありしが、假に納めおきたり、おそらくはそれにてやあらん。」されば始めて新たなる屍の氣變じてか

くの如きものあり、これを名付けて陰魔羅鬼といふ由、僧坊の中に聞て侍る程にっ」と仰せければ、宍
兵衛此の由を聞き、「さら侍る事にやっ」とて、愈怪しみ思ひけるっ

四十三　能登國化物屋敷の事

能登國に化物屋敷ありて、多く人を取りける由、其の沙汰しけるほどに、後々は住む人もなかりしに、豊田八十八といふ侍、をこの者にて、此の屋敷を望み、好みて住みけり。然れども化物更に出でざれば、八十八云ふて「さこそあるべし、化物も人によりてこそ出づらめ」と、独り嘲り居たりしが、或夜深更におよび、厠に行きけるに、下より長き毛の手にて八十八が尻をなでける。さればこそとてよき程になでさせ、頓てひき捕へて力に任せ引きければ、次第々々に長く伸びけるが、密とさぐつと見上ぐれば、屋根板めくれて、さも凄まじき顔だましひの者、八十八をはつたと睨む。八十八も同じく睨み付け、先づ此の手を取つて外に出づるに、出でじと力むを八十八大力量の者なれば、苦もなく引き出しけるに、其の顔ある化物其の儘落ちたり。よく〳〵見れば此の化物が手なり。それより両方ひの組み、上になり下になり互に負けじと争ひしが、八十八が遂に勝ちければ、遂に化物を組み留め、漸うに剥し捕りけるが、我が身も暫々に疵を受けけり。夜明けて見れば、狸の如き獣の斃れたるにてぞありけ

る。其の屋敷の裏に、年古りたる槇の木の有りしを怪しく思ひ、悉く切り捨て見るに、果して樹上には、年頃取り喰ひし人の屍夥しく有りしとぞ。八十八此の化物を退治して後は、何の事も無かりければ、人皆八十八が勇力不敵の程を感じける。

四十四　或侍猫又を切りし事

或侍ゆゑありて其の朋友の方へ夜會に行かれけるに、様々武邊の話をして、後刻に歸られけるが。侍[illegible]出でんとするに四方皆壁となりて出口なし。こはいかにと思ひ空を見るに、眼の光水晶の如くなる物、此の侍の頭をしかと捕へて虚空に上りぬ。されども此の侍したゝか者にて、やがて刀を抜き放し、はたと切り付けたりければ、其の儘地にぞ落ちたり。あるじも始めあり合ふ人々、此の音に驚き出でて見れば、侍既に絶入しゐたりければ、急ぎ顔に水を灌ぎて呼び起しけるに、やうやう人心地つけば、「いかゞし給ひける。」と尋ぬるに、然々のよしを語り、うち洩らしける事を無念がれば、人々其の邊を窺ひみるに、多く血流れたり。さてはと是れを慕ひ求むれば、牀の下に血を引つぱり、頓て牀をこじ放し披き見るに、鄰屋敷に久しく飼ひ置きたる古猫なり。扨こそ此の猫又が所爲にとぞ人々申し合ひけるとぞ。

四十五　刑部屋敷の化物の事

但馬国に化物屋敷ありと専ら沙汰して、此の家に住む人なかりしが、木戸刑部と云ふ浪人此の由を聞き、我行きて住まんとて、主従二人住みけるが、如何様人の謂ふに違はず、毎夜々々一時許りづゝ、家内震動して、宛ら大地震の如し。刑部心はたけしと雖も、其の虚実を見届けざれば、力なく日を送りけるに、或る時刑部が常に懇なりける智仙といふ僧訪ひ来られける。此の僧は道徳学明たる人なりしかば、刑部斜ならず悦び、しか〴〵の由を語る。智仙聞き給ひて「如何様不審しき事にて侍る。我今宵此所に滞留して、様子を見るべし。」とて一宿し給ひけるが、常の刻限にもなりしかば、刑部が云ふに違はず、震動すること凄じかりし。智仙つく〴〵心を付けて見給ふに、[illegible]かば、其の高く疊の上る所をぢつと抑へ給ふに、さしもの今まで騒がしかりしも、忽ち治まりたり。時に智仙小刀をとりて疊を刺し、刑部に向ひ仰せけるは「今宵は早動くまじ、夜明けなば此の疊下を見給へ。」と宣ひ、其の夜の明くるを待ち、翌日刑部家来と共に疊を上げ、床下を見しかば、数年を経たる[illegible]、[illegible]所に流るゝ血零れ居たり。さては[illegible]の小刀に刺されけるにやと、刑部も奇異の思ひをなし、[illegible]

さて先の國を尋ぬるに、此の者の母、昔此所に外記といへる人住みて、人の爲に熊を生きながら皮を剥ぎて殺しけるが、後熊を恐れて、熊を土中に埋み、密かに祠を建てて常に祭りしに、然れども其の後を[illegible]おやらず、遂に外記を取り殺しぬ。されば其の魂も此の屋敷に留まりて、夜な／＼出づるといひ傳へしより、人恐れて住まざりしが、近頃御身住み給ひしに、はたして[illegible]に逢ひ給ふ[illegible]と委しく語れば、智仙坊終始を聞き給ひ、不便の事におぼして、明けの[illegible]日が間、外記と熊が追善を營み給ひければ、其の後は家鳴震動もやみて、何の事もなかりけり、此の屋敷永く何某が有となりにけり。

四十六　獺、人と相撲をとりし事

山城國に山城屋甚右衛門といふ者あり。一つ穴といふ所に田地を持ちける程に、常に下人を遣はして耕作をさせける。一日いつもの如く耕作に、孫八といふ下人を遣はしけるに、主人の子甚太郎とて今年十一歳なるが、此の一つ穴に遊びゐたり。孫八いふやう、「今日は高松の叔父君御出でありて、父上待ち給ふに、何とて内には居給はぬや、早々歸り給へかし」といへば、此の甚太郎返答もせず打笑ひ、「相撲をとらん」といふ。孫八も可笑しながら、「いでさらば取り申さん」と無手に組み合ひ、組みて孫八負けければ、甚太郎悦び、「今一番」といふに、又取つて負けたり。甚太郎限りなく悦びて歸りぬ。

孫八も黄昏にかへりて、甚太郎にいふやう、「扨々今日は一つ穴にて、二番まで相撲に負け申したり、無念にこそ侍るなり。」と戲れて申しければ、甚右衛門夫婦いひけるは、「今日は高松の叔父御出でなれば、甚太郎は終日他行せず、何をかいふぞ。」と申しければ、甚太郎も打笑ひ、孫八が晝寢の夢をや見つらんなど嘲れば、孫八不思議をなし、「正しく一つ穴にて相撲を取りしが、さて聞き及ぶあの淵の河童なるべし、憎き事かな、重ねて出でなば打ち殺さん。」といひて、明の日も耕作に行きけるが、案の如く又甚太郎に化して、相撲を取らんといふ。孫八扨は昨日の河童ならんと思ひ、「心得たり。」とてやがてひつ組みけるが、孫八力量の者なれば、其のまゝ宙に提げ、傍に有りし岩角を目當に投げつけければ、頭を巖に打ち碎かれ、水の流るゝこと一斗ばかりして、忽ち獺となりて死したり。孫八うち笑ひ、歸りて甚右衛門夫婦にかくと語りけるが、其の夜孫八に物のけ憑きて口ばしりけるは、「さて／＼憎きやつかな、わが妻をよくも殺したり、我子の敵を取らずんばいつまでも歸るまじ。」と叫びしかば、甚右衛門夫婦これに驚き、頓て[illegible]坊といふ修驗者を頼みて祈禱し、様々と詫ければ、やう／＼に物のけ落ちたり。然れども孫八心氣勞れて、其の後は力量も衰へ、病身者となりけるとかや。

四十七　松田五市狸を切りし事

ある國の事なりし、御城下を毎夜々々役人衆夜廻に通られけるに、丑三の頃ほひ町はづれにて、若き女の綿帽子をかづきて、只一人いと忍びやかに通りしかば、役人衆此の體を見て心得ぬ事に思ひ、後をつけて行かれけるに、此の女ふり返りみて莞爾と笑ひ、又靜かに歩み行きけるまゝ、いよ／＼怪しく思ひ、猶々慕うて行くに、此の女次第々々に丈高くなりて、大きなる松の木の本に行くぞと見えし、かの綿帽子を取りて、役人の衆中をはつたと睨めしを見れば、眼は日月の如く、口は耳の本まで裂けて、頭におどろの髪を亂し、眉間に一つの角を生じたりしかば、さしもにたけき面々も、身の毛ぞつと立ちければ、皆ひけ色に見えにける。其の中に松田五市といふ人心勝りの男にて、頓て刀を拔き放し、横樣に切り付けしかば、其のまゝ形は消え失せて、切りこみしは松の木なりしが、大勢の聲として、どつと笑ふ聲して、其の後は何事もなかりけり。よく／＼聞けば、「此所に數百年を經し古狸の所爲なり。」とぞいひあへりける。

四十八　紺屋の化物の事

阿波國に松田五郎八といふ剛の者あり、或夜子の刻ばかりに、家に何となく騒がしかりければ、五郎八目を覚して起き見たりけるに、色の黒き犬よりは大きなる者、障子をあけて、足一ツにて庭を歩きけるが、臺所に使ふ桶をころりと置きけるを、悉く喰ふて往ぬひて、それ〳〵と上にあがり、燈の油をねぶりける。五郎八此の體をよく見ると雖も、餘りの恐ろしさに、知らぬふりにて伺ひ居たり。

扨夜明くれば、其の邊の若者共に此の由を語り、如何せんと議しければ、何れも逸物の若者共なれば、皆々勇んで五郎八が宅に集まり、「今宵化物來らば打ち殺さん。」とて、太刀又は棒の様なんど、思ひ思ひに携はさへ、物陰に隠れ居て、今や來ると待ちけるに、案に違はず子の刻ばかりと覺しき折節、かの化物庭に現れ出で、臺をさへつと見廻し、また臺所にかゝる所を、待ちかけ居たる若者共、一度にさつと跳び出でて、逃さじと打ちければ、化物これに恐れをなし、逃ぐる所を、彼方此方と追ひ廻しけるに、押し戸の透間の有りし所より、つと抜けて逃げ出でければ、何國までもと追ひかけたりしに、峯山といふ所にて、大きなる樹の内に隠れけるが、皆も聞け寄る時ぞ、一ツの火の玉となりて飛去りしに、皆々興を醒まし逃げ歸りしが、其の後は五郎八が宅へも再び來らざりけるとぞ。いかなる化物にてや有りけん、知らずとし、おぼつかな。

四十九　天狗祟りをなせし事

或国の大守様、御領分の山々の樹木を多く切らせられければ、其の中に天狗の栖家多く有りて、此の天狗ども安からぬ事に思ひ、いづれ此の恨みに返報をなさばやとて、御別荘におかせ給ふ女房達の黒髪を、夜毎に一人宛元結より切りければ、ありあふ女中打集まり、皆々恐れ歎きつゝ、如何せんとぞ呆れ居たり。主君此の由を聞召し、大きに驚かせ給ひ、是れ天狗の所為ならめと思召して此の後は樹木を伐り採ること、堅く停止仕るべき由御触を出されければ、これにこゝろや足りけん、其の後は是の災もなかりしとぞ。

評して曰く、此の事何国の事といふ事を知らず、或人のいふ「是れは唐土の事をば、此の道のうとき人わが国に附会して、近頃のやうに謂ひなしけることも謂ひあへりぬ。何れか是なるや知る人は知るべし、われは知らざるを知らずとす。

五十　百物語をして立身せし事

或国主の若殿、御歳未だ十歳許りにならせ給ふが、ある日の事なりし、朝疾く起きさせ給ひて御書

院に出でさせ給ひけるに、手水鉢の際に燈の掛られて有けるを御覽ありて、近習の人を召し、「こ
れはいかにぞ。」と仰せ下されければ、「されば候、いかなる者か仕り候やらん。」とて、則ち御家中
へ觸れさせられしに、御次詰有けるは、御児小姓に森田又之進と申す者罷り出でて申しけるは、「其夜前
御寢殿の御縁側に、五更の頃に用事に罷り出で候ひしが、此の御手水鉢に[illegible]と見えし
女の髮を亂して立ちゐける儘、變化の物と存じ、追ひて御座の前に參り候へば、何國ともなく逃げ失せ候ゆ
ゑ、今日御沙汰にも及び候ふまじきに、其は此の事にて御座有けるにや。」と申し上げければ、若君
樣の御機嫌麗しく仰せけるは、「かかる事も世に有る事にや。」ここに[illegible]ければ、御近習相伴へ有る
門申し上げられけるは、「さん候、其の儀をば存じ候はず候へども、世に化物ありと申す事は、毎
度話に承り候。」と申し上げ奉れば、「さらば語り仕れ。」と仰せありしほどに、取りあへず恐ろしき昔
物語を申し上げければ、限りなく興じさせ給ひて、それより又た化物話を御催し有ければ、
御近習の人々、御前を[illegible]、御機嫌をとりけるに、樣々おもひ出づるまゝ御話まうし上げけるが、
ある時、[illegible]の事なれば、[illegible]の[illegible]つきて、[illegible]と興じ給ひけるが、御次詰の内に御前をつとめ居ける奥次といふ者あり。いろいろの物語をよく語り、よく覺えたる由沙汰しければ、若君此の
由聞召し、「[illegible]て御話申し上ぐべき。」由の御意、有る時御前に罷り出で、いろいろの化物話、

武士の幽霊ろくろ首、天狗のふるまひ狐狸のしわざ、猫又狼が悪行、おそろしき事、哀れなる事、悲しき類ひ、武道なる手柄ばなし、隠したる笑草など手をかへ品をわかち、御話を申し上げければ、若君限りなき御機嫌にて、それより毎日々々與次々々と召されけるが、此の若君御成長の後國主となり給ひければ、夜の與次を召し出され「汝我いはけなかりし頃にひ、さまざまの物語をなして心を慰めしが、稚心に陰陽の差別を知り、恥と誉の是非好悪を辨へし程に、今以て益ある事多し、然れば其のまゝ下輩にして遣ふべきにあらず」とて、忝くも新知三百石下され、大小姓格になされけるぞ有り難き。是れ偏に百物語の數々よく覺え居たりし奇特なりとぞ、羨まぬ人はなかりけり。芽出たかりけるためしなり。

太平百物語巻之五　大尾

昭和二年五月十五日印刷
昭和二年五月十八日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第十三卷

編輯兼發行者 東京市麴町區内幸町一丁目六番地 國民圖書株式會社
右代表者 東京市麴町區内幸町一丁目六番地 野中次郎
印刷者 東京市本所區番場町四番地 井上源之丞
印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社本所分工場
發行所 東京市麴町區内幸町一丁目六番地 國民圖書株式會社
電話銀座 七八三番
二一八八番
三六八六番
振替東京 五二二九八番

